連載専門誌

対人援助学マガジン



Vol. 9 No. 1

第33号

June 2018

対人援助学会

NO. ３３　M O K U J I

目次		002-003
ハチドリの器	見野　大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-017
知的障害者の労働現場	千葉　晃央	018-021
臨床社会学の方法（20）	中村　正	022-031
光と影　引き受けるひと	木村　晃子	032-034
街場の就活論（33）	団　遊	035-040
カウンセリングのお作法（15）	中島　弘美	041-046
映画の中の子どもたち（25）	川崎　二三彦	047-048
難病の訪問カウンセリング	藤　信子	049-051
蟷螂の斧　「続・家族理解入門」（3）	団　士郎	052-061
社会的養護の新展開　２	浦田　雅夫	062-064
不登校経験を持つ若者たちのもう一つのキャリアパス　３	北村　真也	065-095
福祉系対人援助職養成の現場から	西川　友理	096-100
境界あれこれ（8）	河岸　由里子	101-103
生殖医療と家族援助	荒木　晃子	104-107
対人援助学＆心理学の縦横無尽（24）	サトウタツヤ	108-117
高齢者とのドラマセラピー	尾上　明代	118-126
きもちは言葉をさがしている（32）	水野　スウ	127-134
ノーサイド（28）	中村　周平	135-136
盆踊り漫遊（2）	竹中　尚文	137-140
男は痛い！（27）	國友　万裕	141-147
ひとこまマンガ	三嶋　あゆみ	148
援助職のリカバリー（26）	袴田　洋子	149-151
役場の対人援助論（25）	岡崎　正明	152-156
復活　臨床のきれはし（1）	浅田　英輔	157-159
新版K式発達検査をめぐって	大谷　多加志	160-162
講演会＆ライブな日々	古川　秀明	163-171
養育里親～もうひとつの家族～（21）	坂口　伊都	172-177
周辺からの記憶　―東日本大震災家族応援プロジェクト―（19）	村本　邦子	178-197
病児保育奮闘記（18）	大石　仁美	198-200
対人支援　点描（14）	小林　茂	201-203
「あ！萌え」の構造（番外編　その4）	齋藤　清二	204-210
清武システムズ（Ⅱ―13）	しすてむ　きよたけ	211-218

精神科医の思うこと（9）	松村　奈奈子	219-221
おくのほそみち　（9）	奥野　景子	222-225
「ケアプラン」の価値	馬渡　徳子	226-227
東成区の昭和　思い出ほろほろメモ	柳　たかを	228-235
お坊さんとケアマネさん（書簡型連載）（8）	木村　vs　竹中	236-242
介護福祉を巡る断章（7）	臼井　正樹	243-246
町家合宿　in　京都　（7）	山下　桂永子	247-252
そうだ、猫に聞いてみよう（10）	小池　英梨子	253-262
先人の知恵から　（20）	河岸　由里子	263-267
私の出会った人々（5）	関谷　啓子	268-269
うたとかたりの対人援助学　（6）	鵜野　祐介	270-273
あぁ結婚　（6）	黒田　長宏	274-281
PBLの風と土	山口　洋典	282-287
接骨院に心理学を入れてみた（4）	寺田　弘志	288-292
現代社会を『関係性』という観点から考える（4）	三浦　恵子	293-301
学校における自殺予防（3）	川本　静香	302-305
対人援助通訳の実践から（4）	飯田　奈美子	306-311
マイクロアグレッションと私たち（3）	朴　希沙	312-315
第二回　保育と社会福祉を漫画で学ぶ	迫　共	316-318
第二回　「余地」―相談業務を楽しむ方法―	杉江　太朗	319-324
新連載　統合失調症を患う母とともに生きる子ども	松岡　園子	325-342
新連載　生体肝移植ドナーをめぐる物語	一宮　茂子	343-355
新連載　「盲ろう者」として自分らしく生きる	中條　與子	356-359
編集後記	編集長＆編集員	360-361



ハチドリの器 16

見野 大介

Mino Daisuke





上：翠釉茶盌
中：蒼穹釉各種
下：鳥ノ子釉波紋長皿

第33号 執筆者@短信

新連載　一宮　茂子

皆さま初めまして。2006 年に立命館大学院応用人間研究科を修了し、2014 年に先端総合学術研究科を修了しました一宮茂子（いちのみやしげこ）と申します。

現在は生存学研究センターの客員研究員です。私の研究テーマは、生体肝移植で臓器をもらった人（レシピエント）ではなくて、臓器をあげた人（ドナー）をめぐる問題です。このたび『生体肝移植ドナーをめぐる物語』として紹介させていただきたいと思います。どうかよろしくお願いいたします。

新連載　松岡　園子

今号から連載のお仲間に入れていただきました、松岡園子です。今年の 3 月に、立命館大学・応用人間科学研究科を修了いたしました。

私は当事者的視点から、自分が 10 代で体験してきたことを修士論文としてまとめました。これまで自分の体験を話すことで、「苦労したのね」と言われることも多かったのですが、私は自分の人生を、特別な苦労をしたと思って生きてきたわけではありませんでした。むしろ、「得をした」と思っていたほどです。

社会の中で当たり前だと思われている王道がありますが、違う道を選択した者が見てきた世界にそれまでとは違う気づきがあったのだとしたら、それを皆様と共有することには価値があると思います。社会的養護、精神保健、ひとり親家庭、介護、ヤングケアラー、不登校、定時制高校などのキーワードに関心をお持ちの方にお読みいただけますと、当事者的視点から何か伝わるものがあるかもしれません。また、伝えることができるように頑張って書いていきたいと思います。

私は文章、特にお話を書くことが好きです。4 月から小説教室に通い始めましたので、新しく自分の体験を小説としてまとめることに挑戦してみたいと思い、自伝的短編小説という形での連載を始めさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

新連載　中條　與子

4月から、いろいろな方のお蔭でご縁をいただき、新しい職場で働いている。職場の敷地内には、いろいろな花が、桜の頃からリレーのように咲いて、いまは紫陽花だ。日日、雨に打たれながら、風に吹かれながら、陽に照らされながら、花弁の色が少しずつ淡くいろどり、広がりながら変化する様子を楽しんでいる。

杉江　太朗　第二回

4 月に人事異動があり、いろいろな意味で変化があった数か月。職場のトイレの仕様が変わったり、出勤途中で寄るコンビニも変わったり、また職場の雰囲気もまったく変わりました。その変化を楽しみながら生活をしています。



もともと、職場にコーヒーをまとめ買いして、「カフェドゥスギエ」として置いていたのですが、当然オーナーの転勤により、店舗も移転となり再稼働することなりました。ここで問題が。売り上げが伸びないのです。在庫過多です。今までは、コーヒーが良く売れていましたが、今では、コーヒーよりもラテなどの甘い系が好調。仕入れ状況をさっそく変化させて、新しい環境に適応しつつ、皆の好みを調査しています。天気や、職場の空調の具合も影響しているようです。当然ですが、利益はありません。むしろ赤字（数十円～数百円）になることもあります。その分はたまにポイントで回収が出来ます。そんな風に、職場に「余地」を持ちながら今日も元気に活動しています。

迫　共　第二回

私の名前は「迫　共」と書いて「さこ　ともや」と読みます。

学生相手には、初回の授業で「さて、なんと読むでしょう？」というクイズにして、最初に正解をだした学生にジュースをおごっています。

シンプルで書きやすい名前のはずですが、なぜか画数の多い方に間違われます。大学の事務方からも「追先生」とか「泊先生」と書かれたりします。

記名を求められる場面では「フルネームで書いてください」と言われることが多い名前です。

電話口で「どんな漢字ですか？」と聞かれたときは「迫力の迫、共産党の共です。以上です！」と元気に答えるようにしています。

朴　希沙（Kisa Paku）

突然ですが、6 月より 3 ヶ月間フィンランドに行きます。フィンランドには去年から行ってみたいと強く思っていたものの、その機会もお金もなく行けずじまいでいましたが、今回ひょんなことから全く偶然に行けることになりました。

門はたたけば開かれるのか？と思ってしまいそうになるほど、幸運なことです。渡航にあたり、フィンランドに関する入門書的なものも読んでいます。

フィンランドと日本は歴史も人口も気候も国の制度も色々と違うようです。実際生活することでどんな新しい経験ができるのか、とても楽しみにしています。

復活1　浅田　英輔

ご無沙汰しておりました。現在、県庁の高齢福祉保険課に勤務しており、高齢者施策にかかわっております。高齢者部門にもさまざまな対人援助職の方がいらっしゃいますが、心理職がほとんどいない。都会にいけばいるんでしょうが。できることがたくさんありそうな感じがします。今の立場はただの行政職ですが、ワークショップなどに入ると「なんだこの県職員は」（ふつーに溶け込んでいる）という反応があって楽しいです。新連載では好きなこと書きます。がんばります。

三浦　恵子

平成30年度が始まり，新しい業務に従事することとなった。公僕として何年奉職しても，新たな異動先や新たな部署での勤務は気持が引き締まる。経験を積み重ねることはもちろん大切だが，経験値のみに依拠して業務を行ったり生活上の課題に対処することがないよう，常に自分を諫める毎日である。単身赴任生活も5年目に入り，業務と義父母の遠距離介護の両立ももはや日常となったが，思わぬ場面で思わぬ示唆を得て事態が進展することもある。今年度も多くの出会いと学びあいの機会があることを願っています。

寺田　弘志

最近、ホームページを作り直す作業をしている。
KDDI（au）さんが昨年10月にホームページ事業を廃止した。
当院のホームページも消滅してしまった。
タイミングよく、ホームページ製作のS社が営業に来た。
予約システムもつけてくれると言うので、頼むことにした。
まずは、コンテンツを無料のホームページJimdoにアップすることにした。
ところがその作業中にS社が予約システムを作れないといってきた。
しかたなく自分で予約システムを作ることにした。
といってもあくまでも無料のプログラムを使っての話だ。
はじめはリクルートの予約システムを使ったが、フリーズすることがわかった。
つぎにWordpressのプラグインで作ってみたが、使い勝手が悪かった。
いくつか作ってみて、最終的にはWixの予約システムを使うことにした。
動作が遅く、キャンセルや変更がお客様がわからできないという不便さはある。
しかし、Wixの予約システムが一番シンプルで使いやすかった。
試行錯誤の末、とりあえずWeb予約のできるホームページができた。
まだ、コンテンツが入っていないところも多いが、よろしければご笑覧ください。
https://teradasekkotuin.jimdo.com/
寺田接骨院

飯田奈美子

この 4 月から娘は認可保育園に入所しました。それまでは定員 5 名の託児所（のような保育室）に通っていたのですが、そこを卒業して定員 120 名の保育所に通うことになりました。明るく人見知りのしない性格の娘ですが、新しい保育園に慣れるか親としては、心配です。最初の 1 か月はお友達ができず、保育園に行きたくないと泣く日もありましたが、心を鬼にして保育園に預ける日が続きました。ある雨の日、大泣きをして保育園に行きたくないと叫んでいる娘を見て、親のほうが心が折れそうな気持になりました。しかし、その翌日になると「〇〇ちゃんと遊びたいから早く保育園に行く！」と乗り気な発言に変化。改めて子供の適応力にはびっくりしましたが、「待つ」ということも大切だなということも感じました。子どもの力を信じて待つことしか親はできないものですね。娘から多くのことを学んでいます。

川本　静香

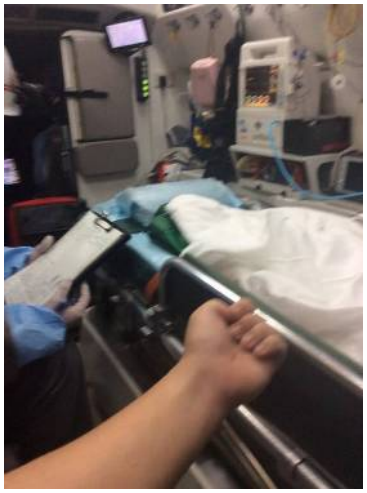
この4月に山梨県甲府市に引っ越しました。甲府は京都とおなじく盆地なので、気候は変わらないだろうと高をくくっていたのですが、湿度がなんだか違う気がします。

新しい環境になれるのは、本当に苦手なので、只今絶賛不適応中でして、先日ついに体にきたのか、ひどい喉風邪をひいてしまい、声が全く出ない状況になってしまいました。

あまり無理せず、ぼちぼち甲府に慣れたいと思っている、今日この頃です。

山口洋典

デンマークのオールボー大学を拠点とした一年間にわたる学外研究を終え、3月末に帰国いたしました。湿度の高さと押印と長時間の会議という、少し忘れかけていた組織文化に対して、最初はささやかな抵抗感を抱きつつも、程なく順応してしまっています。ところが、先日、仕事を終えて自転車にて大学を後にした際、横から走ってきた自転車との衝突を避けるべく急ブレーキを掛けたところ、前輪がロックしてしまい、慣性の法則によって道路に身体を打ち付けてしまいました。幸いにして骨折ではなく捻挫で収まったものの、救急車での搬送（外来の診察受付終了時間だったため）を経て、三角巾（皆がやさしくしてくださいます）とロキソニンテープのお世話になっており、怪我人としての生活体験もまた、対人援助の知恵を紐解く手がかりになるかもしれない、など転んでもただでは起きない大志を抱いております。
（写真、学生時代の「もらい事故」以来の救急車の車内にて、事故の高揚のためか自他ともに高い血圧に驚いていた際の風景。）



関谷　啓子

今年の GW は憧れの子鹿田焼きの窯元を訪ねる事ができた。大分県の日田市の近く皿山という山の中の小さな集落だ。

ー昨年の豪雨で壊滅的な被害を受けたと知り、居ても立っても居られなかったのだが集落に入る道は寸断され、暫くは近づけないと聞いていた。
ところが、この GW に西鉄バスが日帰りのツアーを組んだと聞き、矢も盾もたまらず出かけた。すぐ近くの小石原焼の窯元とセットでのバスツアーである。
抜けるような上天気の中、新緑の山々を超えてたどり着いた村は静かな落ち着いた小さな里だった。
集落に入ると、伸びやかな音がして、それが唐臼の音だと気づくのに二つも角を曲がらなければならなかった。何度も何度も写真で見ていた唐臼が、まるでカマキリが斧を振り下ろすようにうごいている。
裏山から掘り出された土が細かな粉状になるまでひき続けるという。清流にかかっていた水車は流されてしまったけれど
唐臼は復元されのんびりと動き続けていた。
一子相伝、蹴り轆轤、登り窯、10 軒の窯元を増やさない、焼き物に窯元の名を入れないなどなど。その昔、バーナード・リーチが村を訪れ、古老たちに託した約束を愚直に守って今日を迎えている。出来上がった焼き物はいささか無骨ではあるが、力強く溢れ出る力が漲り、一度見たら忘れられない陶器だ。
昔、友人宅で見た一枚の皿が忘れられず、いつかきっと・・・と思い続けて来た。一緒に行った従姉妹とお揃いの湯のみ、梅干しを入れる壺、小鉢、肩に食い込む程リュックに詰め込んで帰路に着いた。
皿山の里の畑に少し強い風が吹くと、横一列に吊された数十匹の鯉のぼりたちが一斉に水平に泳いでいた景色が忘れられない。
70歳にして忘れられない GW になった。
思い続ければ本当に叶うのだなあ・・・有難い！

黒田　長宏

3月11日記す。東日本大震災から7年経過するのか。私は当時43歳だった。今日も休みだが、当時も休みで、スポーツジムに出かけたのだろうが、外出していて、その頃温泉に通うこともあったが、その日はジムから温泉とは梯子せずに家へ帰ったのだった。当時65歳だった母親が裏の畑で作業中で、帰宅後に家に入らずそれを直に見にいった途端、母親と少し話した途端、眩暈を起こしたのかと思ったら、立っていられなくなったかは記憶にないが、地面にひびが入っていた。その後、家の前に母親と出た。すると一度地震が起きた後にまた大きなのが起きたと思う。物置の窓は割れてしまった。現在は老人ホームにいる、隣のおばあさんが家にやってきた。温泉に行く途中の橋が崩れて車から湖に落ちて死んだ人が出たと後で知った。私もその橋を渡っていた可能性もあったし、家の中はぐちゃぐちゃだったので家の中にいたら何か当たって怪我をした可能性もあったが、裏の畑仕事をしていた母親に直に会いにいったというのが地震の時だったと言うタイミングを今でも不思議な縁だと思う。今年の1月亡くなった祖母は当時83歳だっただろうか。デイホームサービスにいて、そこで地震に遭遇した。思えば、祖母とデイサービスセンターの関与も深かっただろう。祖母は大震災もデイサービスに居て、7年後に心肺停止をそこで起こすのだ。そこで一旦だが、奇跡的に蘇生した。当時、被災者は地震関連地域の高速道路が無料という特典が出て、それを機に、2011年は何度も福島県に行った。高速無料が無ければ行かなかっただろうが。義援金の入金は一度きりだったが、福島県に直接行くことで、ガソリンや食費で消費することで福島県にお金を落とせると思った。だが、いわき市などの被害の甚大だったところは回避してしまった。怖かった。この目で見た被害を見たほうが良かったのか、見なくて良かったのか。見る機会は逃してしまった。機会を損失したかも知れない。ただ、自分自身の周辺も前代未聞の被害ではあったが、福島県の海沿いとは、それでさえも比べ物にならないだろう。それに福島原発のそばには心理的に近づけなかった。その年は5回は超えたか、記憶が定かでないが複数回行ったし、原発反対デモにも参加したりと、当時の福島県訪問の放射能の被ばくの影響が私にもあったのかさえわからない。安易に書けないところだ。もっぱら、喜多方ラーメンを食べるのと、スパリゾートハワイアンズの踊りを見にいっていた。プールが使えず踊り場が隔離されていた。一度、昔の政治家の伊東正義さんの資料館に行った。原発関連の蔵書もあり、彼が生きていたら、脱原発に向けて政治をしていたのではないかと信じたかった。話が前後するが、反原発デモに出たりもしたが、福島県訪問もデモに出るのも、2011年に数度程集中したばかりで、翌年からは行動していない。朝の3時に車で出発して、夜の11時に帰宅した。翌日勤務が休みの時にしたのだが、今ではその勇気はない。往復400キロくらいにはなったのだろうか、もっとか往復600キロか。詳細に数値を覚えていない。次の日は昼近くまで寝ていたと思う。あまり深夜から早朝にラジオは聴かないからだろうか、ほんのたまに聴くと、とてもさみしいような不思議な感覚を受けるのだが、『走れ、歌謡曲』だったか、それもそうだし、番組はそれか確かではないが、吉田拓郎の『祭りのあと』が流れて、なぜか感情を刺激した。また、『ラジオ深夜便』だったか、暗い雰囲気も含めて、日中のラジオに比べて高級のような独特な感覚を受けた。詳細はまるで忘れていたが、これを機に思い出し、断片からネット検索すると、山内晴子氏が朝河寛一の研究所を出版して、その話だったらしい。朝河が、英単語を覚えると辞書を食べていった話や、戦争は日本は負けるだろうと早くから警告していたというような話をされていたと思う。

鵜野祐介



6 月 1 日から 4 日まで、韓国中西部の町・光州市で開かれるアジア民間説話学会に行ってきます。今回エッセイで取り上げた「浦島太郎」における「水界」イメージについて発表する予定です。

韓国や中国にも類似する話があるので、東アジアの人びとに共通する「水界」イメージとその背景にある精神世界について議論できるものと期待しています。

もちろん食事や遠足、そして 2 年ぶりに再会する外国の会員との交流もとても楽しみです。旅の無事を祈りつつ。

臼井　正樹

「介護福祉を巡る断章」と題してはじめた拙文も早いもので第 7 回目となる。

今回は、2017 年度に指導した大学院生の論文のエッセンスを紹介した。二人とも優秀な学生で、2 年間で修士論文を仕上げていった。楊夏麗は、中国での大学時代も日本語を勉強していたとはいえ、2 年程の間に日本語の能力は極めて向上した。2 年目の中ほどまでは、日本語の添削をしながらの研究計画や論文作成であったが、終盤ではそうした部分もほとんどなくなり、日本人の学生に負けないレベルであった。また松田愛美は、研究の方法や論文の書き方など、あまり指導することもなく、自ら大学の図書館で先輩たちの修士論文を読み込み、先行研究を調べていく過程で、研究に必要な知識、技術を身につけてくれた。私のように出来の悪い大学教員にとっては、とてもありがたい大学院生であった。

私自身の教員生活も残り 1 年足らずとなってきた。本年度の残り3回の連載で一区切りできればと考えているところである。

山下桂永子

書きたいことが固まってきたら書こう、と思ってるうちに書かないままに日が経って、とにかく書かなきゃと思って書き出すと、書いているうちに書きたいことが出てきます。書いているうちに書きたいことが変わっていって、書き終わるときには書きたいことが書けてはいない気がします。そんなリフレイン×7 回目。そんなものなのでしょうか。表現って難しい。表現するってこういうことか。こんな仕事をしているのに、いまさら思ってしまっています。

そんなこんなで町家合宿もリフレインしながら 12 年目になりました。今回のテーマは「食」です。前述の通り、書いているうちに書きたいことが出てきて、全然書ききれなかったので、二部構成でお届けします。今回最後の一文を書いてみて、思ったことは「おかあさん、いつもごはんを作ってくれてありがとう」です。読んでいただければ幸いです。

尾上明代

体を動かすことに関しては基本的に私はダンスが好きなのだが、気に入ったダンスができる場所と時間がスケジュール的に合わず、結局、春休みから太極拳を始めた。ゆっくり動きながら体中に気を巡らせるのも結構良い感じがする。ふりつけ（？）は難しくてなかなか覚えられないので自習はできず、またその時間もない。本当は毎日できたらどんなに健康に良いだろうと思うが、今は週一回行くのがやっとの状況。今の私の生活は、どこかに出かけるときは、いつも急いでいるし、やることリストも全くなくならないし・・・。

１０年かかるという人もいるし、一分の練習は一分の成果があるという人もいる。どちらも真実の一端だろう。たとえ週一回一時間でも、ゆっくり動く時間は貴重だ。もちろん、太極拳はもともと武道なので、単なるリラックスとは違うようだが、ゆったり流れる音楽に乗せた動きと、中国語の発音がすごく上手な先生の「イーアールサンスウ・・」の響きが気に入っている。

小池英梨子

飼い猫ノラ猫に戻る。

前回の連載まで、立命館大学応用人間科学研究科で飼い猫（常勤）として働いていました。今年の４月から、再びノラ猫生活をしている小池です。飼い猫時は有休が 10 日もあったのに 8 月で使い果たしました。猫の問題は休日限定で起きてはくれないし、行政の方と連携しようとするとどうしても平日に動く必要が出てきます。動物の活動はまだまだ考えたいこと、勉強したいこと取り組んでみたいことが沢山あります。自由時間がどーしても欲しいので、一般的な就活はしてません。沢山お金を稼ぐことはできなくても、生きていけるレベルで自分がやるべきだと思うこと、面白いと思えることに取り組んでいこうと思います。これからも関心をもって見守ってください(^^)

松村奈奈子

今年のGW.

ちょっくらドライブ旅行にでかけるかー、と旦那と渥美半島に。連休も終わり頃の高速は思ったより空いていて、いい感じでスタート。渥美半島の端っこの伊良湖岬、きれいでした。

岬から小さな島が見えます。小説「潮騒」の舞台「神島」。今は人口４００人にも満たない島です。むかしむかし、三島由紀夫が滞在して「潮騒」を書きあげたとか。これまでの映画化で、何度もロケ現場にもなってます。

私、思想うんぬんはさておいて三島由紀夫の文章が大好き。美しい文章だなぁと、ほぼ全作もってます。思わず船に乗って、三島の歩いた道を歩いて、なんだかよいGWでした。



そしてそして、実は私「島」が大好き。これまで瀬戸内の小島を中心に、十数個の島を訪ねています。

「神島」一周の遊歩道は4キロ程ですが、激しい高低差があり、まるで軽いトレッキングでした。へタって夫婦2人して港のベンチで寝転がってると、若いお母さんと子どもが島のヒジキを手にやってきました。カワイイ押し売りです。「大変だったでしょ」「わたしらでもあんまり山の高いとこは行かんしね」と雑談しながらねぎらってくれたので、思わずヒジキを大量買いしてしまいました。船の出港が近づくと、風呂敷代わりの大漁旗に売れ残ったヒジキを包んで背負い、仲良く話しながら帰る母子の姿。島に住む人の生きていく様に、私はいつも「じーん」ときてしまいます。

奥野景子

4 月からあんまマッサージ指圧師の専門学校に通っている。3 月末に仕事を辞め、久しぶりに『ザ・学生』をしている。

新天地での生活を通して‘色々な人がいるもんだな～’と新鮮さを感じる一方で、自分の頑なさや厄介な部分に触れることもあり、あり余る時間の中で色々な色が混じった時間が過ぎていることも少なくない。

また、4 月の上旬、姉から転送されてきた父からの LINE が*『旅行中に大腿骨を骨折した。今、診察中。入院、手術予定。市民病院』*だった。母が日帰りバスツアー参加中に転んだ人を支えようと一緒に転び、骨折したとのことだった。母は持病がある為、手術にたどり着くまでに少し時間がかかった。色々なリスクと過去の母の手術の記憶ばかりが頭を廻り、医療者としての思考によってどうにか自分をなだめていた。幸いにも手術は成功し、5 月中旬に退院できた。少し調子に乗りながらも家での生活を送られているようだ。

今になってやっと生活が落ち着きつつあるように思う。どんな日常が、どんな生活が、わからないなりに過ごせて行けそうな気がしている。

ただ、マガジン執筆者の一人でもある清武さんと一緒にいると今まで出会ったことのない、今までは気が付かなかった少し変わった人と遭遇することがあまりに多すぎる(笑)。私が出会う変わった人は、一方向性だが、彼が出会う変わった人は、巻き込み型のように感じる。ん？あら？お互いさま…か！？

柳　たかを

「素人工事」

本誌にマンガ「東成区の昭和・やぶにらみ日記」を寄稿させていただいています。

2015 年、66 歳で芸大教職退職後に DIY で庭に約 10 坪の小屋を建てる目標をあげ、今その建築木材の刻み作業場として 3m × 5m のコンクリート作業場兼駐車場を作ろうとやっています。

土木作業は全くの素人ですが、ネットで研究しつつ少しずつマイペースで準備を続けています。アナログの道具、例えば基礎工事で使う地盤を叩き締めるタンパーなど自分で作れそうな道具はなるべくお金を使わず自作がモットーなので、恥ずかしいですが全くノロノロとカタツムリかナメクジのような工事の進捗スピードです。

肝心の小屋の建築図面も手付かず、無料の CAD ソフト JWGAD を目下勉強中。イメージでは、トイレと流し以外、ガランとした間取りで床だけはしっかり作り、黒光りする板の間のある小さな道場のような小屋にしたいと思っています。

さてヤフオクでゲットしたミニミキサーの助けを借り、約 3 トンのコンクリートを練って型枠の中に打ち、とどこおりなく均(なら)す作業、プロにはなんでもないことでしょうが、未経験者の私には不安一杯の工事です。

これがうまくいけば、小屋基礎工事着工へ夢が膨らむと思うのでがんばってみたいと思っているところです。|

齋藤　清二

4 月から、総合心理学部（大阪いばらきキャンパス）と応用人間科学研究科（京都衣笠キャンパス）、さらに新設の人間科学研究科の講義や演習が始まり、目まぐるしい日々が続いている。授業の準備や学生からのリフレクションへの応答などに追われまくっている感じだが、生活そのものはとても楽しい。たまたま、以前から色々考えていた、「マイフェアレディとピグマリオン」というテーマに、共時的に色々と関連することが浮かび上がり、今回の連載はそれについて書かせてもらった（実は以前に書いたものの再録です。すみません）。人間にとって本質的なことがらは、時を巡りつつ循環を続けるのだなと実感している今日この頃である。

石田佳子

今回は事情があって休載しました。数ヶ月前から視力の低下に気づいていたものの、失明を伴う病の疑いを指摘されると『（精神的に）目の前が真っ暗』になり、ただただ途方に暮れてしまったからです。

長い間カウンセラーとして『共感』を大切にして来たつもりでしたが、自分が『当事者』になった場合は「世界が裏返ったような衝撃」に見舞われること、他人から安易に「わかる」と言って欲しくないことなどを痛感しました。

精査の結果火急の危機は免がれ、また元の日常（『傍観者』でも居られる世界）に戻ることが出来ましたが、今後は「いつでも世界が裏返る（否応無く『当事者』になる）可能性」を心に留めながら、人生の《残り》時間を大切に使いたいと思っています。

しすてむ♪きよたけ



最近、仕事を断り無職！色々と手放し、開業 3 年目。「清武システムズ（屋号）」の整理をしているところです。

何かをしたい、やれることとやりたいことは、手にしてきているので、具体的に動きたいと思っています。それらを手応えあるよう、自分の手元に引き寄せようと奮闘している段階なので、まだまだ、時間がかかることだと思っています。

たまに、HP を更新しているので、ご覧いただけると幸い。

大した更新はしていませんし、何屋か分かるものではありません。自分でもなに載せよう！？と思い中途半端な更新で終わっていることもあります。でも、やれることがあるって、結構立派だ！と思っています。

逆に、分かりやすい近況としては、5 年間くらい伸ばしてきた髪を切りました。ロン毛にこだわっているつもりだったけど、別にそうでもなかったみたい。

そうです、僕のこだわりは、ピンポイントではなく、どうやら広い範囲。それが社会のなかでどの範囲なのか、社会に表現するのに苦戦しているのです。

そんなサービス業を営んでいます。

小林茂

年度がわりに、これまで使用していた某携帯電話のキャリアから DOCOMO にキャリアをのりかえた。理由は、某携帯電話のキャリアの接客が悪かったという理由ではない。広い北海道にあって、私の生活圏で国道沿い（浦河～広尾町、えりも町～広尾町）だが電波の届かないところがあり、契約更新月に合わせてのりかえることにした。

ついで、ついにガラケーからスマホになった。スマホにしたとき、それは「私は堕落してしまった・・・。」と思った瞬間だった。文明に抵抗しきれない情けなさを感じた瞬間だった。

恒例の温泉紹介です。小樽駅、信号渡ってすぐにあるホテルです。温泉は、適度な薄明りのなかでゆっくり休めます。ロケーションの良さもあり、お勧めです。

＜温泉紹介＞

☆天然温泉 灯の湯（小樽 ドーミーインプレミアム）

場所：小樽市稲穂3―9－1

（0134）21－5489

営業時間：5:00～翌朝10:00

※サウナのみ01:00～5:00

利用休止

料金：日帰り温泉はしていない。

泉質：ナトリウム－塩化物・硫酸塩泉（低張性・アルカリ性・温泉）

湧き出し口温度：36．7℃

湧出量：加温、循環

その他：外気浴（岩風呂）、内湯、檜風呂、水風呂、サウナ。

水野スウ

「紅茶の時間」主宰

3 年前の猛暑の夏、安保法案の国会中継を横目で見ながら、汗をかきかき本を書いていました。憲法の専門家でもなんでもない私が、ふだん着の言葉で書いた「わたしとあなたの・けんぽう BOOK」。その続編「けんぽう BOOK ぷらす」（仮題）を、この春からずっと書いていて、いまだ書き終わりません。

3年前も今も、国会や社会の動きと同時進行で書いています。今ふりかえると、去年の5月3日の憲法記念日に安倍首相が、「2020 年を新しい憲法施行の年にする、憲法に自衛隊を明記する」と言い出したあの瞬間、ぞわっと感じた強烈な違和感が、「けんぽう BOOK」の続きを書かなくっちゃ、っていう必然のタネを私の中に植えつけたんだったのかもしれません。

とにもかくにも、国会があまりにも急スピードでめちゃめちゃになっていってるので、本の中味のどれほどかはすぐに賞味期限切れとなるでしょうが、その一方で、賞味期限とかそんなんに関係なく、そこにあり続けなきゃいけない普遍的な価値についても書いてるつもり。そのスタンスは前作と同じです。何よりも、本の中の文章が、今という時代を記録するメモであることだけは間違いありません、毎回のマガジン原稿のように。

今回のマガジン原稿は、「A Bold Peace」大胆な平和、という言葉が原題の映画、「コスタリカの奇跡」から書き始めています。今号の話ももちろん、「けんぽう BOOK ぷらす」に収めます。憲法のおはなし出前旅はあいかわらず続いているので、その合間をみつけては「 BOOK ぷらす」の原稿を書き進めています。次号の短信欄には、本が書けました！っていう報告ができるといいな。いやいや、必ずそうしなくっちゃね。

中島弘美

家族療法構造派のサルバドール・ミニューチン氏が亡くなられた。96 歳だった。私が勤務していた相談機関が、構造派に位置付けられていたこともあり、多くのことを学ばせていただいた。

以前、あるワークショップのなかで面接の記録ビデオをみる機会があった。それは、ミニューチン先生が 80 代の頃、10 代の子どもと両親が同席する家族面接の映像だった。

身動きすることなく家族の話にじっと耳を傾け、少し間があった後、ゆっくりと話し始める。すると、子どもや両親は、神妙な面持ちで、その言葉にきき入っていた。

出版されている本に書かれている面接の説明を読むことで、どんな流れなのか、雰囲気はこんな感じかなと何かと想像をめぐらしていた。ビデオのなかのミニューチン先生は、一つ一つの言動に迫力があった。私には、家族が、ありがたいお言葉をいただくような、特別な場、まるで儀式のような空間に感じられた。

当時その映像をみたときに、高齢になっても面接していること自体すごい！なんておもっていた。いやいや、誰にでもできることではないといま改めてその気迫を思い出している。ご冥福をお祈りします。

藤信子

4 月には私たちの京都集団療法研究会が実施している「月例グループ体験」の、新しいグループが始まる。週日の夜の 90 分のグループには、このグループを始めて 20 年以上たつが、長い間参加し続けるメンバーもいれば、今年も新しいメンバーが参加してきた。年をとってくると、仕事の量を減らしたいと思うが、グループを体験したいから、と新しいメンバーの参加があるので、なかなか止められない。週日の夜にわざわざ時間をかけて集まるメンバーのことを考えると、トレーニングの場を絶やしたくないという気持で続けているとずっと感じていた。しかしグループの中で話を続ける中で、新しい体験や感情を見つけることができるような気持を、私自身が覚えるからこそ、まだ続けているのだと今更ながら実感するこの頃である。

千葉晃央



関空発で仙台空港に、朝一便で出発して、最終便で帰ってくる旅程で、福島、宮城に足を運んだ。一人でレンタカーももっ

たいないのでマガジン執筆仲間の大谷さんを誘って同行。空港着後、レンタカーで一気に常磐道を南下して、浪江インターで高速を降りた。現地の道路事情については、以前沖縄の戦争遺構をめぐる平和研修で、ご一緒した福島の福祉事業所の方が教えてくださった。情報では帰還困難区域では、常磐道と国道 6 号に限っては通行証が不要とのこと。浪江インターを降りると時が止まってしまったような景色も多かった。荷物もそのまま、ガラスも割れたままの民家、鳥居も崩れた神社、商品も崩れたままのショッピングセンター、乗り捨てられた車、入り口も空いたままの無人のコンビニ…。行き交う車両は警察、消防、自治会のパトロール。そして、帰還困難区域のゲートに立つ警備員を運ぶワゴンのみ。車を降りると聴こえてくるのは鳥の声だけ。そして、福島第 1 原発を目指してできるだけいけるところまでと向かう。大きな送電線と作業をしているクレーンの先が見える原発入り口に着く。そこで線量の数値を見ると、小数点以下ではない数値に。そこを後にして、国道 6 号を北上。東日本大震災浸水区間ここから、ここまでの標識が繰り返す。除染土置き場も国道脇にあり。荒浜小学校に到着。震災遺構としての整備が進んでいる。訪れている人も多い。伝える施設としての役目を担っている。途中はかさ上げ工事、防潮堤工事…。その基礎に除染土の黒い袋が使われている様子も見られた。そこから南三陸まで移動。防災対策庁舎、南三陸さんさん商店街（復興商店街）へ。かさ上げの様子、高台にある豪華な民家、点在する仮設住宅が印象的。その後、大川小学校へ。



子ども達が授業で使っていた裏山、大川地区の成り立ち、海からの距離、海抜…。小学校の前には大川地区のことを伝えるところもあり、被災前の町の模型で地元の方が伝えてくださった。「都会でもこれからこういうことがあるかもしれないから、気を付けて」。この言葉の背景には私が想像もできないような悔しさも、悲しみもあるに違いなく、それを感じずにはいられなかった。忘れられない 1 日になった。

中村正

近況にかえて：団編集長への感謝の言葉

本来は前号がくぎりのよい時だったのでその際に記せばよかったのだが、年度末の諸事万端やネパールに出かける準備など慌ただしくしており、三月遅れの感謝の言葉になってしまった。ご存知のように2017年度をもって団編集長が立命館大学を退職となった。この3月には退職記念講演もあった。大学院は確かに職場ではあるがゆるい組織ということもあり、比較的独自な動き方が可能で、また「教授」としてというよりもひとりの「個人」として、生き方と働き方をうまく統合していて、ユニークな立ち位置から、実践の領域ではもちろんのことだけど、さらに家族に関わる諸学会においても力を発揮している姿に学ぶことは多かった。私からすると気持ちのよい同僚関係が築けたかと思っている。

これは大人になってからの人間関係である。たぶんいけるだろうという秘めた確信があったのだが、2001年に新しいタイプの大学院（応用人間科学研究科）を開設するので立命館大学にきてもらえないかと押しかけて直前の話しあいを始めたとき、私は41歳だった。団さんも20歳近く若いことになる。この18年の間、同僚とはいえ私にとっては10歳年上の人の歳の取り方を学ぶという面もあった。また、団さんは前職と大学という具合に二回の職場の移動を経験しているので、節々の変化をどうしてこられたのかについて改めて聞いてみたいと思うのは、私が今秋に60歳となるからかもしれない。別に10年単位で節目をつくって生きているわけではないのだし、私にとっては「青春・朱夏・白秋・玄冬」という人生のうつろいを示す言葉が自然な感じもするので、変化する人生の、いまはどこなのだろうかと、改めて団さんを鏡にして映しだしてみたいと思う自分の気持ちがあるのは、何かの変化の時の揺らぎなのだろうか。社会制度が定年を決めているからでもあるのだろう。

途中、関係者を中心にしてこの対人援助学会を発足させた。2009年のことである。なんといっても対人援助学会のこのマガジンは団さん考案によるものだ。さらに2011年には東日本大震災があり、村本邦子さんの発案で今も続くプロジェクトが始動した。この取り組みも家族漫画展を中心にして団さんは欠かせない人である。かわらぬものとかわるものの見極めというかバランスの取り方を、自身の動き方としてもそうだが、漫画や講演や論考で絶妙に表現している。その動き方に学ぶことは多い。

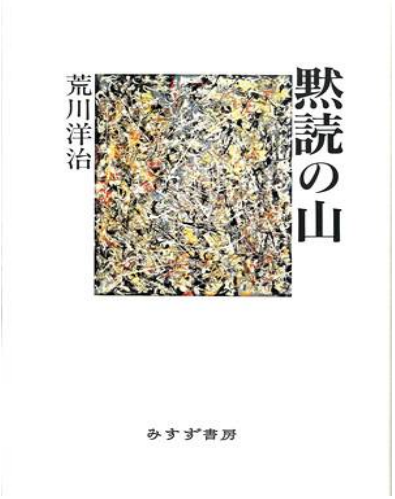
2018年度から、立命館大学の応用人間科学研究科は公認心理師対応のこともあり、人間科学研究科へと衣替えした。拠点を大阪茨木キャンパスに移しつつある。組織としては変化しているが、社会の中の人間科学を考え、心理臨床をはじめとした対人援助を広いスタンスで把握していく姿勢は大切にしていきたいと思っている。まあそれでもプロジェクトは続くし、お会いする機会も少なからずあるので、これからどのようにして生きていくのかさらに10年学ばせてもらえればと思っている。ひとたびの定年が立命館大学は65歳だが、向こう10年何をなすべきか団さんの姿をみなが

ら引き続き探ることとしたい。当然のことだけどいつまで経っても追い越せない10年先の団さんが私の歳の時には何をしていたのだろうかと現在の私に問いかけてくるように考えているので、年の差を感じさせることなく共存し、一緒にいまを生きていると感じることのできる良き先輩である。これからも変わらぬ団さんでいてくださいというお願いとともに、退職という区切りなのでいちおうの感謝の言葉を記しておく場として、団さん自身が考案したこのマガジンこそがもっとも相応しかろうと思った次第である。

袴田洋子

今、なぜこんなテーマの連載を書いているのか、自分でもよくわからないですが、でも多分、もしかしたら、けっこう大事なことなのではないかと思って、書いています。ちょっと前は、書くのに時間がかかりました。でも、締め切りを過ぎてしまい、すみません。

団遊



長男・小 5 の本をリビングに座って少し読んでいたら、隣にいた長女・5 歳が「心のなかで読まないで！」と怒った。どうやら一緒に読みたかったらしい。「心のなかで読まないで」か、と思った。子どもたちの言葉には、力がある。対極にあるのは、昨今の日大記者会見か国会答弁か。

うちの妻は長男が通っていた保育園の方針もあり、子どもの名言をノートに書き留めている。くすっと笑えたり、ドスンと本質的だったり、忖度のない言葉は、オリジナリティに溢れている。

この夏、長男・小 5 は友達 4 人と 1 泊 2 日の子ども旅に出る。その打ち合わせで出た「ぶどう狩りに行こう」という意見に一人の男児が「おれ、がり方がわかんないよ」と言った。行き先が山梨に決まり、河口湖方面か清里方面か、つまり水よりか山よりかで悶着しているときに、一人の男児が「山か海（正確には湖）か決めよう」と言うつもりで、「そろそろ山か梨か決めようぜ！」と叫んだ。

子どもたちがいつまでも飽きることなく話し続けられるのは、常に今思うことを忖度なく話し続けられるからかもしれない。

一方で多くの会社の会議はどうだろう。言うべきことと配慮すべき事項に注意しながら、予定時間ぴったりで結論が出るように話し合う。当然忖度にまみれることも多い。会議を無駄にしない秘訣は、参加者全員が子ども心を思い出すことかもしれない。

大石仁美

孫がひとり、小学生になった時、発達障害と診断されました。彼の頭の中の世界は、映像としてうごめいていて、急に突飛もないようなことをしゃべりだすので、すぐには他者には通じず、トラブって暴力に発展することも度々でした。

小学三年生の時、担任は、興奮する彼を後ろから抱きとめて、「おちつけ、おちつけ。深呼吸！」と、身体を張って対処の仕方をおしえ、良いとこさがしをしてはクラスのなかに返してくれ、いつの間にかクラスで一目置かれる人気者になりました。子どもたちは、彼の特徴を理解し、ありのまま受け入れてくれたのです。

彼は一つのことに興味を示すと、頭の中はそれ一色に染まるようで、オリンピックの卓球試合をテレビで見て以来、卓球に夢中になり、ついに小学生大会で優勝！

今度はピアノ。これは音感に敏感だからとママが習わせたのですが、クラシックは堅苦しくておもしろくないというので、五年生になってジヤズに転向。それが楽しいらしく、六年生になった今、「えっ！こんな難しいのを練習しているの？」と先生を唸らせるほどに。鍵盤の上を滑らかに走る彼のちいさな指を眺めながら、「発達障害とは、もしかして天才のことかも」と思ったりしているのです。

環境や周囲の人間関係に慣れるまで、すこし時間がかかるせいか、口数が少ないシャイな少年になりました。

「ぼくは発達障害や、生きていてもしょうがない。死んだ方がましや」と事あるごとに言っていた彼。

「人が出来ることが出来ない。でも人が出来ないことが出来る。それってすごいことだよ！」と何度言ってきかせたか知れません。その子が生き生きと自分らしく動き出したのを眩しく見ている私ですが、この**発達障害というネーミングの罪深さ**、なんとかならないの！！と専門家の先生方に言いたいです。

村本邦子

4 月から研究科が改組改編され、人間科学研究科となり、大阪茨木キャンパスに移転した。前の応用人間科学研究科の M2 院生はまだ衣笠キャンパスにいるため、朱雀キャンパスを含む各キャンパスを行き来しながら、毎日のように夜の授業があり、今年はかなり大変である。一瞬、暗い気持ちになったが、よく考えてみると、決して仕事が嫌なわけではない。毎晩、家でご飯を作って食べられないことが嫌なのだと気づいたので、昼夜 2 食分のお弁当を作ることにした。その日の動き方を考えつつ、明日は何にしようかなと考える楽しみができて、ルンルン気分の毎日である。私ってなんて単純で扱いが容易いんだろうとおかしくもある一方、何があっても不機嫌な人生を生きない努力を怠らない私って偉いよねと思った。それから、新しい研究科には博士課程後期ができ、自分の関心を共有できる研究仲間たちができた。今年はちょっと研究者としても頑張ろうと張り切ってもいる。

國友万裕

西城秀樹さんが亡くなりました。僕が 10

代の頃、西城さんは大変な人気で、アイドル雑誌の『明星』や『平凡』の表紙を飾っていました。そうそう、僕が初めて『明星』を買ったのは小学校の高学年の頃で、友達の影響で買い始めたのですが、母やおばさんたちから、「いまは男の子でもこんな雑誌買うのねー」と言われた記憶があります。ということは、僕の両親くらいの世代の男性たちはこんなものは買っていない。男が性的に見られる客体であることを知らずに大人になっているんですよね。



こういう雑誌では、男性アイドルの裸が満載でした。僕はこういう雑誌をめくりながら、なぜ、プールでもないのにこれだけ脱ぐのか？　不思議に思ったりもしました。また西城さんと言えば、郷ひろみと並んで、スター水泳大会の常連で、ビキニパンの水着姿もたっぷり披露していました。こういうのを見て、成長していった僕らの世代は、男の裸だって、性的なものとして見られているという意識は常に持っていたはずです。しかし、世間ではまだまだ一方的に女性が見られる客体であり、男性裸身は見られる客体でありえないんだというおかしな偏見がはびこっていました。

しかし、時代は変わりました。先日、ある男子学生に「この頃の子って、自撮りが上手いよねー」と言ったところ、「それは女の子でしょう。男は自撮りなんてしないですよ」と言われました。彼は、男が自撮りなんてするのはナルシストみたいで旗色が悪いと思っているみたいでした。「そんなことないよ。鏡の前で上半身裸になって自分のマッチョボディを自撮りしているやつはいるよ」と僕がいうと、「あー、カラダはありますけどね（笑）」と彼。顔をナルシスティックに自撮りするのはまだまだ女性だけれど、身体ナルシストの男子は結構いるということなのでしょう。いい時代になりましたよね。

そう言えば、僕も顔より身体の方が気になります。忙しい生活の合間を縫って、スポーツクラブでのトレーニングに通うのはしんどいのだけれど、頑張って、ラグビー体型のおじさんになりたいです。笑笑

北村真也

（京都府教育委員会認定フリースクール学びの森　http://manabinomori.co.jp　）

京都府亀岡市で、さまざまな学習者の変容をめざした能動的な学び場「学びの森」を運営しています。不登校の生徒たちが学ぶ「フリースクール」と「ハイスクール」、ひきこもり経験のある若者たちが学ぶ「ユーススクール」、発達障害を持つ生徒たちが学ぶ「放課後等デイサービス」、学校に通う生徒たちが学ぶ「探究スクール」の 5 つのスクールを展開中。今年度から京都府総合教育センターで、教職員研修を担当いたします。

古川秀明

去年の夏の思い出を振り返りながら楽しく書かせてもらいました。好きな講演をして、歌を歌って、旅まででき て、有難いなぁと思います。

シンガーソングカウンセラー

西川友理

短大で保育士養成をしたり、福祉系の研修で講師をしたりとあっちこっち落ち着いておりません。

このところ、コミュニケーションについて考える場に参加することが多くあります。

ワークショップなどで、対話が促進されると、ある瞬間に、自分が話しているのではなく、その場で感じたものが自分の意志から離れて、そのまま口をついて出て来るようなことがあります。私が話しているというより、おなかの中からその場に引き出されて着地点も見えないまま話し始めるような、それでいて言葉にし終わったとたんに腑に落ちるような、不思議な感覚。あれは、何なんでしょう。その場に居る人を全面的に信頼し、場に自らを委ねた時に時々起こる気がします。その場で自分の存在がよく見えない時に、周囲に手を伸ばすと、誰かや何かに触れ、触れた刺激によって自分の中から何かが生まれ、自分の在り方がさらに見えていく。そしてまた自分も（意図するか否かに関わらず）、だれかが自らを確認する手掛かりになる。

コミュニケーションの中に、私たちはいるのだなと思います。そういう場を、私も作りたいと思っています。

中村周平

昨年 2 月に無事修士論文を提出し、前期課程を終えることができました。担当教員や同じ研究科の後輩、情報提供やインタビューに協力してくださった多くの方に感謝申し上げます。4 月から、同研究科の後期課程に進学しました。これからも研究活動に励みたいと思います。

坂口伊都

我が家に来た猫の1匹が外に出てしまった事件が起きました。オスで名前は「サン」。網戸ストッパーが外れていて、隙間が出来ていたようです。外から鈴の音が聞こえ外にいるとわかり、捕まえようと猫を追い込んでも逃げ足が早くて手に負えません。玄関に隙間を開けて、餌と水を置いてみましたが帰って来ません。翌朝、小池さんに相談したら捕獲機を用意して、持ってきてくれました。ありがとう。玄関には



餌と水の他に段ボールも置きましたが、帰ってくる気配がありません。探してもみつからない。愛護センター、保健所、警察にも連絡しました。翌日の夜中、捕獲機から猫の声がして、行ってみると近所のノラ猫さんでした。もうこの辺りにはいないのか、ケガしていないか、食べているのかと心配していました。翌々日の朝、洗濯物を干していると「ニャァ」と声がします。下を覗くとサンちゃんでした。急いで娘にチュールを持たせて捕獲。猫が外に出てしま

う意味を痛感しました。帰ってきて良かった～（涙）帰ってから、やたら甘えたさんになっているサンちゃんでした。

河岸由里子（臨床心理士）

【謎の予約番号】

毎年二回、団先生に来ていただいて札幌で家族理解のワークショップを開催している。今年も5月と10月に行うが、5月の日程に合わせて、ホテルと航空券を予約する。早めにとった方が安くなるので、2月末か3月初め位に予約をとった記憶がある。そして、私の手帳の、5月のワークショップの日程の所に「予約〇〇〇〇〇〇」と番号が書いてある。航空会社によっては、予約は早く取れても発券が二週間前というところもある。そういう場合は二週間前に連絡が来る。きっとこの予約もそうだろうとのんびり構えていたら、連絡が来ない。え？あれ？なんで？　それから航空会社を調べるが、予約番号の形式がどの航空会社とも合わない。ジャルパックやANAパック、じゃらん、るるぶ、Yahooその他、私が予約を入れそうな、考えうるところのすべてを検索してもそのような予約をとった履歴がない。2月末か3月初めのメールのチェックもしたが、見当たらない。最後はホテルに電話をかけて、予約が入っていないかの確認もしたが、やはりない。ということは、予約を取っていなかったのか？いよいよボケか？夢か？「まあ、ダブルブッキングになるならなれ！とっていないよりは良いだろう」ということで、航空券とホテルの予約を取り直した。
それはそれでよいのだが、この予約番号は、いったい何なのか？未だに謎のままである。

岡崎正明

西城秀樹と衣笠祥雄。地元にゆかりのある人が相次いで亡くなった。

訃報が伝わるとマスコミは偉業を称え、関連の本や CD が売れたりする。故人になる前と後でその功績に差はないはずなのに、愚かで忘れっぽい私たちは毎回同じような反応を繰り返す。

私は衣笠祥雄の現役時代を知っている最終世代で、小学生の頃のカープは今と同じくらい成績上位が当たり前のチームだったが、テレビでの扱いは今とは比べ物にならないくらい小さかった。友人と衣笠のことを「サルガサ～」などとふざけて呼びながらも、世間から脚光を浴びなくても静かに実力を示すチームのかっこよさが自慢だった。市民球場は古くて汚くて、座ってるおっさんは酒臭く、少しいかがわしい雰囲気がしたけれど、それがなんだか大人の世界を覗くような気がしてちょっとした憧れだった。

今働いている職場は西城秀樹の実家の近くで、行きつけのお好み焼き屋もそばにあったりする。私の母は若い頃ヒデキの大ファンで、郷ひろみファンの妹と何度もモメたらしい。ヒデキが野口や郷よりいかに優れているかという解説を、何度も聞かされたような記憶がある。「ヒデキ、感激！」でバーモントカレーが有名だが、個人的にはジャワカレーの印象が強い。「西城秀樹みたいな大人の男が食べる辛いカレー」と、子ども心にいつかは食べてみたいものリストにインプットした記憶がある。

年を重ねると「全く知らないもの」に出会うトキメキは少なくなってくるが、「どこかでつながりのあるもの」に触れる場面は増えてくる。「おー、こんなところで」「お久しぶり」って感覚も、なかなか悪くないものだ。

多くの人の記憶に残る 2 人に、感謝と祈りを込めて。合掌。

見野 大介

九カ月になる息子が悪事を働く楽しさを覚えてしまいました。バリケードの増設をして対応しております。しかし、イタズラする時のニヤニヤ顔は可愛いもんです。

相変わらず休みなく制作しております。六月は東京吉祥寺にて2人展、七月は京都北大路にて2人展と控えておりますので、注文の器と並行して進めております。

そろそろ休みが欲しいと思う、今日この頃。

浦田雅夫

アフターケアの会メヌエットという団体で社会的養護を巣立った若者に関わっています。月に一度の食事会は和やかですよ。

詳しくは https://www.facebook.com/minuet.kyotoaftercare

団士郎



久しぶりに身分、立場の変更があった。大学院を定年退職した。50才の時、早期退職という定年退職で公務員を辞めて以来のリセットである。

あの時はまだまだ子ども達の進学や、日々の生活ノルマなどを考えると、とても悠々自適の定年退職などとは認識できない決断の離職だった。

今回は元々大学への出勤ノルマが限られた雇用契約だったので、激変というようなことはない。加えて、仕事場D･A･Nとして、細く長くと言い続けてきた取り組みは何一つ変わらないので、4月からの日常も、相変わらず日本各地をウロウロしている。ただ、気分的には今までとは違ったゆったり感が少しある。

そこで、退職のご褒美にして3月末から4月の初旬にかけて、これまでなかなか実現しにくかった「外国の町にチョイ住み」なんて企画を実行してみた。



パリ･モンマルトルの安ホテルに13泊14日という旅をした。この切り替えがとても良いスイッチになった。

これまで何度か想像したことはあっても、

なかなか具体化できなかった計画が実現できたことで、今更だが、新たなスタート気分になれた。71才になるというのに、まだ新しい仕事、役割、使命をプランニングしている。

そしてどこかで又、見知らぬ町のチョイ住み第二弾も想像している。

大谷多加志

2012年10月、福島県を訪れた。勤務先の事業である新版 K 式発達検査の講習会を福島市で開催するための訪問だった。2011年3月の東日本大震災の後、自分たちなりにできることを模索しての、講習会の開催だった。福島の駅前に降り、道端のモニタリングポストやコンビニのレジ横に置かれた簡易型のガイガーカウンターに、原発事故が現実のものとして感じられた。講習会には東北地方を中心に定員いっぱいの参加者があった。日程の関係もあり、沿岸部の方に足を運ぶことはかなわず、当日の SNS には『福島、また来ます！』と残していた。

それから、6 年。マガジン編集者の千葉さんの誘いに乗っかり、東北を訪れる機会を得た。思い立ちさえすれば、たった 1 日の時間があれば訪れることができた事実に、なぜこれまで足を運ばなかったのかという思いも頭をよぎった。6 年前に行けなかった沿岸部の道路をひたすら走り、福島第一原発に至る帰宅困難地域、南三陸の防災庁舎、津波被害のあった荒浜小学校、大川小学校を一日で巡った。三陸の入り組んだ海岸線はアップダウンも激しく、一本の道を辿る中で「津波到達地点」の標識が何度も繰り返し現れた。地形や海抜、原発や震源地との距離や方位によって、あまりに多様な震災被害のあり様をただただ目にし続けた。各地で、震災当時の様子や震災前の町並や暮らしを語り継ぐ方ともお会いした。津波が何もかも持ち去った地で、「ここには町があり、人の暮らしがあった」ことを証人として伝えていく、やり切れない決意を感じた。

「復興とは何か」という問いが、頭に浮かび続けている。壊れたものがもとに戻ればよいというものではなく、まして、もとには戻らないものばかりの被災地で、被害はもうなかったことにはならない。この震災があった事実を踏まえた上で、それでも次の営みを紡いでいくことが、いつか結果的に「復興」という言葉で表せる時につながるのかもしれない。対人援助学マガジン編集長の団士郎先生が以前、「3.11 以前ならしなかったであろうことを、世界に付け加えたい」と書いておられた意味が、ようやく自分なりにつかめた気がした。私たちは 3.11 の後の世界を生きている。そのことを自覚して、自分の持ち場で、自分の役割を果たしていきたい。

馬渡徳子



昨年度より、開始した「子ども食堂」。
今年度よりは、5 月より、毎週月曜日の夕方に拡大、無料の「学習支援」が追加された。昨年度よりの夏休み、冬休み、春休み子ども食堂は、日中に、一回ずつ私の担当する「認知症カフェとのコラボレーション」も予定している。

夕方開催と学習支援が追加となり、「応援団の拡大と食材カンパ支援の拡大」という課題が生じた。地域の元学習塾経営者や、退職教員、地元の大学生といった人的資源だけでなく、初めてフードバンクの活用も開始した。地域の方々への食材提供の働きかけは、継続しているが、今回の打ち合わせで、「飲むこと」が大好きな新メンバーから、「居酒屋さんに、子ども食堂応援・『乾杯貯金箱』の設置を依頼してはどうか」との提案があった。

お酒を飲めない私には、全くもって思いもつかない発想で、その手立てを見つけてこられた方は、SNS で、全国の子ども食堂の取り組みを検索され、会議で提案下さった。

そうか！　確かに、これならば、「地域のこれまでつながりのなかった方々に、活動を知っていただき、心ある方に、多彩な支援から選んでいただけるなあ」と、感心した。出所は、名古屋市のとある商店街の取り組みだそうだ。

改めて、子ども食堂を運営するメンバーが、「地域の様々な年代の様々な立場の方々であることによる価値と影響」を、これからも、面白く生かしたいよねと話している。

竹中尚文

これから夏だ。夏は鶏飯が美味い。“とりめし”ではなく“けいはん”という。私は奄美大島に行ったことがないが、奄美大島の郷土料理だそうだ。学生時代に、京都の白川通と北大路の T 字路の所に「カプリチョス」という店があって、そこでよく食べたモノだった。当時、カプリチョスは学生にとっては何とか手が届く贅沢だった。南欧風のインテリアで、世界の珍しい食べ物が出て、食事をしながら何時間でも居れる店だった。議論を交わす若者やここ一番と女性を口説く若者でいっぱいの店だった。

その店の定番メニューの一つに鶏飯があった。蒸し暑い季節になると食べたくなるので、自分なりに作ってみた。きっとカプリチョスで食べたモノとも、奄美大島のモノとも違うだろうけど、美味いよ。

【作り方】①干し椎茸を水で戻す。戻した椎茸を甘辛く煮る。巻き寿司の椎茸の味。②鶏肉（私は胸肉がいいと思う）をゆでる。鶏肉はグラグラ煮ないこと。スープが濁る。水に鶏肉を入れて、沸騰する前に火を止める。③しばらく置いてから鶏肉を取り出す。そのお湯に醤油と酒を入れて、グラグラ煮る。味付けは、ごくごく薄味に。干し椎茸の戻し汁を少し加えてもいい。
※ここまでの手抜き法。干し椎茸はまとめてたくさん調理しておいて、小分けして冷凍しておく。それを必要分だけ使用する。鶏肉は、ラップに包んで電子レンジ。スープは鶏ガラスープの素。薄味に。
④錦糸卵をつくる。少々厚みがあっても美味い気がする。⑤ワカメを準備する。乾燥なら、戻しておく。1～2 センチで切っておく。⑥漬け物(沢庵や柴漬)をみじん切りにする。⑦粗熱がとれた鶏肉を、手で細かく裂く。鶏肉の繊維に沿って。⑧ゆずの皮を細

切りにする。
⑨鶏肉、椎茸、錦糸卵、ワカメ(きざみのりでも可)、漬け物、ゆずを皿にのせる。⑩茶碗にご飯をよそって、好みの量の具をご飯にのせる。⑪その上から茶漬けのようにスープをかけて、食べる。
【音楽】調理場で流すのは、ノエル・ギャラガーのドリームオンがいい。リズミカルなロック。ノエル・ギャラガーは元オアシスの中心メンバーである。オアシスを知っている人なら、ああそんな音だと思うけれど、知らなければ、聞いてみるといい。クール！と言ってみたくなる音である。“dream on”は、アルバム Noel Gallagher's high flying birds に納められている。



【告知】
かつて、このマガジンに連載した「七日参り」が本になった。どうか買っていただきたい。
『七日参りのお話 —大切な人を送った人へ—』自照社出版 ¥1,000＋税

川﨑二三彦

LINE

電話にも出ず、留守電にも返事がない。どこで何しているのかさっぱりわからぬ息子だったが、連れ合いが始めた LINE からメッセージを送ると、すぐに反応してくることがわかった。孫の動画も LINE を通じて届けられる。これはなかなかなものだと思って、この正月、自分もトライしたのはよいとして、スマホにインストールした途端、ホント、つながって数十秒とか数分の間に、次々とメッセージが届く。確かな知り合いもいれば、こちらの記憶があいまいで、よく知らないような人からの連絡もあった。



あまりの早業に恐れをなして、以来、今に至るまでそのまま放置している。LINE は今や世界で2億人超、我が国だけでも7千万人を超える人が利用しているらしいから、社会の趨勢どころか、連れ合いからも遅れを取ってしまった。時代から取り残されないためにはどうすればいいのか。誰か助けて。（2018/06/01 記）

荒木晃子

我が家にイケメンがやってきた！
彼の名はジュニア。生後 5 か月を過ぎたちょっと訳ありの元気・陽気・能天気な男の子。父犬はミニチュア・シュナウザー、母犬はトイプードル。つまりミックス犬（要は雑種）。日本ではシュナプー、海外ではシュヌードルとも呼ばれ、後になって、最近人気の犬種だと知った。

血統書付きの犬と、同犬種との間で生まれた子犬はその血統を受け継ぐことができる。これまで（今おもえば 30 年以上に渡り！）3 匹のミニチュアシュナウザーを家族に迎え最期を看取ってきたが、みな血統書がついていて、何かと手続きが必要なことがあった。ジュニアの両親は血統書付きの純血種ではあるが、互いの犬種が違うため生まれた子に血統書は継承されることはない。登録は地方自治体の保健所のみだ。さらに、彼を産んだ母犬は、ミックス犬を産んだことが知れる（ばれる？）と、その（伝統ある？）血統書を剥奪されるというから驚きだ。そういう理由（訳）で、両親のいる犬舎から（締め？）出され、彼は保護犬として我が家にやってきた。

愛犬あんりを看取った後、しばらくの間彼女の面影が脳裏から消えない時期に見事なペット・ロスを経験した。一時は、もう二度とペットを迎えるのをやめようと決めた。こんな悲しい経験は二度としたくない、そう思ったからだ。最初からいなければ、失うこともない、そうすれば悲しむ必要もない。確かにそう思っていた。ときに、考えていた（予想した）結果と、実際に行動を起こして得た結果が異なることはよくある。ジュニアに出会い、悲しみを心の引き出しに収め再び笑顔を取り戻した。そう、我が家は、ぷらす・わん！で家族。ようこそ我が家へ！

木村晃子

働き方改革　2018春　～私の場合～

この 4 月から、私は、自分の人生においての働き方改革を実行した。
政府も、「働き方改革」などと謳っているが、そんなこととは全く関係ない。
世の中は、しばしば都合の良い人たちが、都合の良い理屈を取り付けて、庶民を思いやっているような言い回しをする。
そんな言葉に惑わされてはいけない。自分の生き方や、自分の働き方は、自分の決定権がある部分においては、できるだけ自分で決めていきたいものだ。
とは言っても、自分で決められる状況になるまでには、人によって年齢差はあるだろう。

私は、36歳の時にサラリーマンを辞めて起業した。44歳の時に、もう一度サラリーマンに戻った。何のことはない。起業家になりたかったわけではなかったから。
そして、49歳になる今年、「不本意なことはしない！」という決意のもと、サラリーマンを辞めて、フリーランスへ転身した。

末娘は、高校2年生。まだまだ、養っていかなくてはならない。家賃と、食費と、学費（通学費用を含む。田舎から通学するには、ずいぶんと交通費の割合が高い。）の確保は必須だ。
フリーランスとは言っても、いきなりこれらが賄えるほどの仕事がくるはずもない。しばらくは、オールフリー（ノンアルコールか？！）ではなく、ハーフフリー＆非常勤職員という身分を得た。非常勤だから、ボーナスはないし、時給である。けれども、保険がついているのはありがたい。これで病気になっても大丈夫だし、将来のための年金もなんとかなる。家賃と、食費と、

学費は確保した。

働き方改革の実行から、1か月が経過した。実にいい！

オールフリー、ハーフフリーではなく、ストレスフリー！なのだ。非常勤仕事は、所定の時間ぴったりに終了する。規則正しい日常を送ることができる。忙しく、疲れて、「ごはんを作るのは嫌だ」ということもなく、毎朝弁当を作り、晩御飯を作り、娘たちと過ごす時間を堪能している。体調もすこぶるいい。

稼ぎがこれまでの3分の1くらいになった事実は、節約生活を意識せざるを得ないが、それにも代えがたいものを手に入れている。これから、少しずつ、フリーランスの幅を広げていく準備をしている。与えられたことに丁寧に取り組んでいった先に、また新しい何かが広がっていくような気がしている。まずは、健康であること。

不本意なことをしないために、時には、本位ではないことも引き受けていこうと思っている。ただ、それは、誰かに強いられた不本意ではなく、自分で納得した上での、「本位ではないけれど、本位にたどり着くための手段。」ということとして・・・

北海道　フリーソーシャルワーカー

三嶋　あゆみ

ツッコミどころ満載の国会答弁。

こんな状態で法案通したり、外交したりして大丈夫なのか。



サトウタツヤ

1週間にわたって、Valsiner 先生の考えに基づく授業や講演を間近で経験することは非常に貴重な機会であり、アタマをフル回転させる1週間となった。おかげで、現在執筆中の原稿がかなり改変されることになったし、前期に開講中の文化心理学の内容もかなりブラッシュアップされることになった。

鶴谷　主一

今回は、残念ながら休載いたします。編集長のお計らいで短信のみ投稿させて頂きます。

子ども子育て新制度が始まって 3 年、「待機児童解消！」この掛け声によって、いまの乳幼児教育の世界は変化の波に飲み込まれています。

業界外の方には「幼稚園と保育園が一緒になってこども園になったんだって」「事業所内保育所が企業主導型っていう制度で補助金が出るようになったんだって」「来年の消費税 UP に伴ってぜーんぶ保育料は無料になるらしい」というようなニュースは届いているかと思います。

その裏でどこからお金をもってくるか政治的な綱引きを含めて、現在進行形で交渉されているのでしょう。間違っても「地方で頼む！」と丸投げされないことを願っています。投げられても受けられないよ！ということです。そして、無償化をきっかけに、子どもをどんどん預けちゃおう！という風潮ができてきたら・・・。現在でも保育士、教員不足で悲鳴を上げている現場は、どんなことになるか心配です。教職員の問題はダイレクトに子どもに影響します。

OECD加盟国の中で乳幼児にかける予算が最低ラインの日本が、その額を増額することは価値のあることだと考えますが、その使い道は子どもたちの成長発達にきちんと繋がるところにかけてほしいと願っています。

原町幼稚園
http://www.haramachi-ki.jp
メール　office@haramachi-ki.jp
ツイッター　haramachikinder

1 工程@1 円～知的障害者の労働現場

33：　業務の適正化はできるのか？

千葉　晃央

余裕をどうつくるか？

障害者の虐待防止が訴えられて久しい。その中で、虐待が起こらないようにするために必要なこととして「余裕」が必ずあげられてきた。

精神的余裕を持つことができるかは、業務が立て込みすぎていないか、ケース担当人数が多すぎないか、スタッフ間の人間関係は良好か？などにも左右される。

空間的余裕の有無も影響があるだろう。作業場と食堂は別であるか、作業場、廊下には十分な移動スペースがあるか、休み時間に「ほっ」とできるような個人的空間に近い場所はあるのか、建物の周りに緑があるのか…。

時間的余裕もあるだろう。作業ノルマと作業時間のバランス、ケース記録の記述時間の確保、書類作業ができる時間があるのか…。また、職員が利用者のいる場から離れる休憩時間の有無も、業界の課題として長年あるように思う。

余裕がないとストレス状況になったり、通常できている適正な判断ができなかったり、必要な作業をし忘れてしまったりする。そうした状況は職員を追い込み、余裕を簡単に蝕む。

視線を何に向けている？

余裕がない状況は、どのようにできてしまうのだろうか。本来中心となるべき業務があるが、それ以外のことに手を取られていたりもする。もしくは適正な業務量以上であるために時間がとられていることもある。

作業を行う場所では、職員は作業のマネジメントも、ケースへの対応も両方できなくてはならない。そのため支援員は利用者と作業と両方にかかわる時間が本来は多くなるはずである。しかし、現状ではパソコン画面をにらむ時間が長くなってきている。必要のない書類、キレイに作らなくてもいい書類まで、パソコンでつくる。これは本末転倒である。いくらきれいな、いくら見やすい書類を作ったところでその書類の寿命はせいぜい知れている。あとはファイルへ保管。そして、ほとんどの書類がもう 2 度とみられることなく、やがて処分となる。

完璧なプリントづくりは何を守るのかである。プリントづくりが守るのは利用者で

は施設ではないか。アリバイ的要素が強くないか。自分たちが何かを追及されないがために、部下に完璧な書類を求めてはいないか。誰を見ているのか？自分を見ているのではないか？そこに利用者不在ではないのか？と残念でならない。

とはいえ、このペーパー主義も行政レベルでは破綻しているのが国会を見ればわかる。エビデンス・ベースド・プラクティスもエビデンスをいじれば何でもありになる。原子力発電所の再稼働の時も同じ構図である。

紙の上の文章ではなく、現実のやり取りの中で、何が起こり、何を感じ、何に喜び、次は何を楽しみにしているのか。そんなリアリズムの物語の側面こそが最も重要である。そんな物語がないと、利用者も、働く職員も仕事が面白くない。それは少なくとも書類を完璧に仕上げることではないだろう。昨今の職場の疲弊もそのあたりに発端があるように思えてならない。

計画性が阻み、即応性は機能せず

さらに、ソーシャルワークの「即応性の原則」が語られなくなった。計画になかったことでも必要であるならば適宜実施することは当然現場では起こり得る。今困っている、だから、今こうしよう。それは現場が沸き、職員が「粋」に感じる、仕事冥利に尽きる瞬間の一つである。うまくいっている企業の例でも、結構な権限を現場におろすという話はよく聞こえてくる。

即応性で対応すると、今の福祉ではペーパーの仕事が増える。面談の仕事が発生する。つまり、計画に乗せろ、その計画の承諾をとれ、後追いでも、ということである。結果、熱心であれば余計に仕事が増える。それは次の新たな動きの重しになってはいないか。即応性は鈍くなりはしないか。

記録は書き換えできる時代

現場は誰の物語が展開すべきか？支援者側の物語になってはいないだろうか。利用者側の物語こそが大事ではないのか？支援者が、地域に出る、車に乗る、面談をするなど、通常業務以外のことをすればするほど、事務的な作業（記録書類の作成、合意面談設定ほか）が増える。これはジレンマである。



もし、頑張って、計画になくても必要な取組を行ったとする。それは計画にないから、計画を作りなおさなければならない。それは面倒くさいから、計画にない取り組

みはやめておこう。そうならないといえるのか。こうした支援の質の低下もＰＤＣＡサイクルでは長年懸念されている。情報の過剰、書類や事務作業の過剰は、このサイクルの弱点と言われていることは過去の連載でも取り上げた。

それらの弱点に現場として対処をしておきたい。職員の疲弊、職員の退職、職員の意欲の減退、あきらめムードなどが蔓延しているように思えてならない。

時代にあわせた業務の改善

これらは利用者への裏切りである。現在ある業務は、過去のある時代に必要な事として、当時の職員が考え、設定し、継続してきた。しかし、職員も制度も、利用者もかわっている。現状に合わせて再考すべきです。

また、長年いる職員からすると、現在の事務作業の多さには驚きを隠せない。利用者の人数も、作業内容も変わっていない。事務作業が増えても職員は増えていない。そんななかで、何がそうさせているのか？

はく奪された共有体験

事業所職員が実施する家庭訪問、通園途上の確認、一泊旅行など利用者との共有体験も減った。それらの共有や思い出もなしで、利用者への支援を行わなくてはならない。そこでの専門性はこれまでとは違ったものになるのではないか。でもそれは多くの職員ができることなのだろうか。

ソーシャルワークの源流は友愛訪問、スラム街に住み込むというところからである。ケースと援助者の共有体験を基礎に支援が行われてきた。「家庭訪問は計画相談に」「就労支援だけ現場職員に」というような業務細分化によって、共有体験を失っているのが現状である。いわば武器なく戦場に行くようなことをしいられているのである。

そんな専門性はない！

職員が新しい援助技術を身に着けたり、これまで以上の援助技術を身に着けたりするのは簡単なものではない。ソーシャルワークの草創期以来、対象者とラポールを築くうえで、共有体験は大変機能してきた。福祉実践に限らず、合宿、キャンプ、夜勤、バーベキューなど、食事や夜を共にすることで人間関係が深まるのは言うまでもない。果たして、その代替となるものはあるのだろうか。共有体験の代替えがないからこそ、「余裕」が職場に担保されていないのではないか。

大事なことは変わらない

各職員が感じている省力化できる事務作業、手順などを集め、発展的解消も含めながら、業務の合理化を進めていくことが必要ではないか。つまり業務の適正化である。

現在の制度への対応、請求、監査に耐えうるレベルは保ち、過剰なものは排除することが利用者が望む「サービス向上」につながる余裕を生む。

利用者がいる時間は、利用者との関わりに注力する。もちろん必要な事務作業は最優先する。その中で、民間である私たちが強みとしてきた業務上の工夫を明確にして業務を進めていきたい。大事な仕事かそうでないかのメリハリをはっきりとし、仕事に強弱をつける。惰性で、無自覚に決まっているからという理由で業務をそのままにしてはいけない。その一つ一つに立ち止り、この業務がなぜあるのか？それは本当に必要なのか？の判断がいる。

LCC を利用すると、何が必要なのか？というのを再考するいいきっかけになる。業務を適正化し、安全にお客様を運ぶ。そうした姿勢こそ今、知的障害者の労働現場に求められる。

ルールを減らすという目標

その一つの視点としてルールを減らすという目標があるだろう。ルールが多いと違反に対応しなくてはならない。違反している人への対応は非常に難しく時間がかかる。…結局仕事が増える。こうしたルールがもたらすあらたな影響も考えなくてはならない。

校則がたくさんの学校は居心地が悪い。尾崎豊である。何が必要かを自分たちで考える、みんなが状況を理解する時間の大切さを感じずにはいられない。

BACK ISSUES

安全衛生委員会 32　2018 年 3 月

施設というコミュニティ 31　2017 年 12 月

職場づくり 30　2017 年 9 月

健康管理 29　2017 年 6 月

音 28　2017 年 3 月

救世主になりたい援助職 27　2016 年 12 月

事件について 26　2016 年 9 月

クルマ社会と福祉政策 25　2016 年 6 月

施設が求める「障害者像」はあるのか？　24
2016 年 3 月

連絡帳 23　2015 年 12 月

におい 22　2015 年 9 月

作業着 21　2015 年 6 月

食べる 20　2015 年 3 月

通勤 19　2014 年 12 月

クスリの作用、人の作用 18　2014 年 9 月

倫理観でかたづけられる暴力 17　2014 年 6 月

触れる 16　2014 年 3 月

対談企画 「教育と福祉の連携を模索する」2014 年 3 月

情報の格差 15　2013 年 12 月

20 年前のノートから 14　2013 年 9 月

そうじのねらい 13　2013 年 6 月

個別化の暗部 12　2013 年 3 月

グループワークの視点 11　2012 年 12 月

実習生がやってきた！10　2012 年 9 月

月曜日のせいやな 9　2012 年 6 月

所得を決める福祉職？82012 年 3 月

世界とつながる社会福祉現場 7　2011 年 12 月

この現場へのたどり着き方 6　2011 年 9 月

障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会
2011 年 9 月

旅行がない！5　2011 年 6 月

職員の脳内回路 4　2011 年 3 月

たかがガムテープ、されどガムテープ 3
2010 年 12 月

利用者が仕事上の戦友 2　2010 年 9 月

障害者自立支援法で不景気に！？1　2010 年 6 月

臨床社会学の方法

(21) 生活世界

−街の人びとの生きられた世界−

中村 正

1．さらに「あさイチ」で DV 加害のこと−「私は DV 妻？」からみえる関係性

2018 年 5 月 21 日、NHK 総合「あさイチ」が「私は DV 妻？」という特集を組み、請われて三度目となる話をした。同番組が今年の 1 月と 3 月に「DV 加害者の声から考える対策」という特集を組んだ際に視聴者から「女性の加害についても扱うべきだ」という意見が多数あり、このテーマとなったらしい。もちろんそうした女性もいるがこの種の意見の扱いには注意がいる。女性も暴力を振るうことはあるがどういう文脈でそれを考えるのかが重要だ。DV 研究の争点にもなっている。私は男性の加害と同じようにはとらえられない面があると考える。たんなる裏返しではないという意味だ。なぜならジェンダー社会は男性と女性が「非対称な関係」につくられているので、当然、加害と被害も非対称な出来事となるからだ。

男性からの訴えによれば女性の加害はある（内閣府「男女間における暴力に関する調査報告書」平成 30 年 3 月。被害を受けた女性の約 6 割は相談しているが、男性の約 7 割はどこにも相談していない。女性の約 3 人に 1 人、男性の約 5 人に 1 人は、配偶者から被害を受けたことがあり、女性の約 7 人に 1 人は何度も受けているなど）。物を壊す・投げる、殴る、蹴る、脅すなどもある。究極的な形態は DV の被害にあってきた妻が「最終解決」のようにして用いる暴力としての夫殺害がある。過剰防衛でもあるが、追い詰められているケースであることも多い。

さらに家族システムの特性もある。婿養子などの家族制度や妻側の家族の束縛力が強く作用するケース、不妊治療で男性側に無精子症などの原因があることを責めるケース、男性にセックスを強いて、出来ない場合は無能呼ばわりするような酷な事例にも遭遇したことがある。

男性側に何らかの脆弱性がある時のパワーバランスが女性優位に存在していると加害に至る。女性の加害には、こうした事例から状況的な暴力としての夫婦喧嘩に至るまで一連の幅がある。さらに男性が関係の維持を望むことに乗じて妻がコントロールすることもある。

こうした女性の加害があるとしても、番組でも話をしたのだが、暴力に気づくという点では妻の感度は高い。同じような DV の報道をしても「俺は DV 夫？」と男性はあまり名乗り出ない。今回のテーマはこの違いの理解も大事だと考えて提案してきたつもりだ。

それと男性の被害について可視化することももうひとつのテーマだった。ジェンダーにかかわる対人暴力では男性被害者の存在はあまりみえてこ

Tadashi Nakamura
Ritsumeikan University

ない。とくにDV、性被害などがそうである。男らしさによるネグレクトともいえるし、一種のセルフネグレクトという面もある。男らしさへのとらわれがあるので、自らの被害について声をだせないのである。サイレンシング作用といえるだろう。寡黙さと親和性のある男性性を保持しているとなおさらそれが加速されていく。

前回の「あさイチ」で扱った DV 加害男性の語りの印象を本マガジン第32号で次のように書いた。「・・・『言い返せない、やり返せない関係のなかで固定的なロジックを埋め込むという暴力』になると言い換えていたので親密な関係性における暴力の理解がすすんだ。イノッチさんが『男らしさとは何かという具体的なことや具体的な姿を教えられないまま、男らしさを求められる』ということを指摘した。たとえば『暴力は人を鍛える』というような幻想が入り込む。もちろんまじめな番組であるのだが、TV トークで自然にこうした会話が出来るほどに家庭内暴力のことが話題になるのだと思った。」と。

この延長にある今回のテーマにつき「あさイチ」の担当ディレクターにアドバイスしてきたストーリー構成のひとつは「私は DV 妻？」と名乗りでて悩むこと自体は問題に気づこうとする積極性があること、つまり先に記したように男性は「俺はDV 夫？」とは悩まない状況との対比を念頭におくこと、ふたつは、男らしさの呪縛によってなかなか被害にあっていると名乗り出にくい男性がいるのでそこを可視化することだった。前 2 回と同様に TV トークでここまできたかという感じでみることはできるだろう。

2．リアルな暴力の相互作用−DV 妻かもと悩む女性と被害にあっている男性の語り

しかしこのテーマはトーク番組では掘り下げにくい複雑な構造をもっているので難儀した。その複雑さを端的にいえば、加害と被害が入り組んでいる点にある。実際に放映された妻の発言だけを切り取ってみる。

・・・・・・・・・・・・

妻：「悲しいと思っている事とか怒ったぞっていうことをわかって欲しい。私のことをわかって欲しいって感じですね。私はこんなに愛しているんだから私がこんだけ言ってもよいよねみたいな。罵倒したり、ガンガン言ってという怒り方しかわからないというか。人格否定じゃないけど言葉の強い口調とかで言っちゃったりしますね。」と言う。

またこんな会話があったという。

妻：「ねぇ、今週末休めるんだよね？どこ行く？子どもたちも楽しみにしてたよ。」

夫：「あー悪い。週末仕事調整できなくてさ。」

妻：「はぁ？また？この前もそうだったよね。」

夫：「今度は調整するからさ。」

妻：「なんなんだよ、その態度は！」といってリモコンでたたくという。

この場合、妻は、「行けなくなったという結果よりは、行けなくなったことに対する態度が違う方が頭にくる」と語る。「夫に怒りは何も生まないとか言われて。全部正論で返されるんでそれがさらにあたまにくる。気持ちを考えないでただ正論を言っていると思われるんですけど、考えた上で言っている」。夫にきつくあたることを止めたいと妻は話す。

また別の妻は、「私は暴力を振るうことで彼に対等になれていたような気がします。変な言い方をすると。そこでようやく私も力を得たというか。彼は理詰めで私のことを責めてくるんですけど。

私は言葉がうまくでてこないので、手がでてしまっているという感じですね。お互いが自分をわかってほしいと思って彼は私に強く当たるし、私もわかってほしいから手を出してしまっている」という。

続けて、「一番は主に言葉の暴力になるんですけれども例えば彼が次の日に仕事があるのにもかかわらず暴言を吐いて『何寝てんだよ』みたいな感じで。寝てんじゃねえよって感じで自分の感情が収まるまで寝させないんですよね。こんなに愛しているのに、こんなに一途なのにって思ってました。以前は、わたしはこんなに愛してるんだから、私がこんだけいっても良いよねみたいな、でもそれははき違えた、歪んだ愛情だったなっていうのが明確にわかりました。自分がなんでそうなるかというと寂しかったから。じゃあ寂しいってことを伝えようっていうそういう思考になります。」とも。

そうした妻の攻撃性のうらには夫のモラルハラスメント的な態度が透けてみえてくる。

夫「今日は魚が食べたいって言わなかったっけ？」
妻「今日はお肉が安かったのよ。」
夫「俺は魚が食べたいって言ったんだよ。まぁいけど。それとさ、ゴミ溜まってたけど今朝出してないの？あ、もちろんシャツにアイロンかけたよね。」
妻「いいや、まだだけど。」
夫「おれたち夫婦だろ？妻が夫のために家事するのって当たり前じゃない？変なこといってる？えっ？夕食にこれつくってほしいとか、ゴミだしておいてほしいとか、僕の妻なんだからこういう服を来て欲しいとか、こういう髪型をしてほしいとか何かおかしいかな。」という夫に暴力を振るうという。このケースの場合、妻の暴力行動の背景には夫のモラルハラスメントがみえてくる。

さらに20歳以上も年の離れた妻と暮らしている男性は、自らの婚約中の浮気がばれて最初から罪悪感とともに生活をしているという。その妻に常に責められながら心理的な言葉の暴力を受けている。

妻「私のことどう思っているの？」
夫「もちろん大事な人だよ。」
妻「じゃなんでもっと優しくしてくれないの。」
夫「なんでって・・。」
妻「いつも黙る。そういう態度がいらいらするのよ！ねぇ、なんか言ってみなさいよ！ねえ！」

と言う妻にいつも耐えている。脅えているともいう。妻に内緒でインタビューに応じて告白している。

彼は「どこに地雷があるのかわからないというのが一番ぴったりした感じ。刃物を持ち出されるというのはものすごく怖くって。感情的になったり衝動的になったりすると何をするかわからないというのが一番の大きな恐怖心でした。ホントにコロッと変わるんですよ。怒りだしたかと思うといつの間にか怒るのをやめて急にべたべた甘えてきたりとか。わかんないですよ。何が本音で本音でないのか。」という。

そして離婚も考えている。「自分自身がいまこういう状況にあることに対してこんな年なのにあるいは男なのにだらしないとか情けないとか恥ずかしいという気持ちがあると思います。男のくせにとか、言われたら言い返せばいいのにとか。相談してもわかってもらえないんじゃないかと彼は言う。妻に対して自分はすごく萎縮してしまっていて。何も言いたいことが言えない状態なので今のところ一歩踏み出せない状態にはあります。」とその心情を語る。

親密な関係性には一緒に暮らしている生活の現実から生じる些細な葛藤やズレがある。子育てや介護も加わり、たえず状況や相互作用にあわせた

柔軟な動きをしなければならない。相手は思うように動かないことはいつもある。その些細なズレはコントロールできないことへの苛立ちとなることも多い。特に親密な関係性では感情的な相互作用が重視されることもあり、その葛藤は相互コントロールの応酬となりやすい。こうしてズレは緊張をはらんでいく。

昂じていけば、妻による最終解決としての夫殺害となり、時には夫のモラルハラスメントへの対抗としての怒りの表出となる。男性のもつ脆弱性への言葉による攻撃、物にあたる・物を投げるなどの間接的な暴力の多様な表情がみえてくる。家族という親密な関係性は理性を軸に動いていないので、感情のズレの振幅は大きく、高葛藤が暴力を生み出していく。特に妻からの暴力は、関係性を求めることに力点があり、その意味での非対称性がズレとなる様子がよくわかる語りである。

3．男らしさが言語化の邪魔をする

親密な関係性における暴力の研究では暴力の類型を考える。単一の暴力加害者像は想定しない。なかでも妻からの暴力は相互作用の状況に由来し、身体的暴力ではない夫のモラルハラスメントのある、感情表出が苦手な男性性をもつ夫との高葛藤として扱いうるものが多い。

さらに加えて、男性による被害である。その語りは独特である。ジェンダー社会では男性の被害は相談しにくいからだ。そのように男性性は作用する。

この番組での男性たちの語りにもその様子が伺え、ようやく語りはじめた。この男性の語りにくさ、相談しにくさには、加害であれ被害であれ男らしさ意識が関係している。私が出会う加害男性たちのほとんどはパワーを保持しており、加害行為をしたので、いろいろ指摘されるし、保護命令や虐待による親子分離がされているので、しぶしぶだけど脱暴力にむけて参加してくる。

集団としての男性はジェンダー社会のなかで傾斜配分された過剰な力の恩恵を受ける。しかし地位、役割、権限、資源、容姿などの諸点にそくして集団としての男性と個人としての男性には当然のことながらズレがあり、その差異をめぐって男性個人の葛藤や逸脱がおこる。さらに個人差があるので、名誉や面子、優劣の意識、嫉妬や怨嗟などの心理的反応が同性同士にある。集団としては優位性を配分される内部の個々人の序列をも含んだ差異、そこから派生する多様な自己肯定や自己否定に至る内的作業がある。たとえば不安的な男性性、曖昧な男性性、虚勢を張る男性性、劣位にある男性性、周辺化される男性、抵抗する男性性などの類型がつくられる。このズレのなかを生きることを「男らしさのジレンマ」という。

被害の相談や語りもこのジレンマのなかにある。加害の語りで思い出すのは、加害のなかの被害への沈黙である。そのことを意識してストーリーを聞く。暴力・虐待の当事者と暴力を振るう自己の理解を促し、脱暴力への歩み出しのために対話する。そのなかでは加害者の被暴力体験や何らかの困難に遭遇していた経験がでてくる。それは情状として理解できる面もあるのでストーリー化作業を共に行う。

しかし、その斟酌すべき情状について当人の認知は必ずしも被害から加害へと連鎖する因果の様子を説明しない。通例の情状の証明とは異なる点があり、困惑することしばしばである。被暴力体験を被害体験としてではなく、自らの生きるエネルギーとし、その体験を肯定的なものへと意味変換し、結果として暴力を発現、増幅させている男性が多いからだ。

また、被暴力体験を否認する、つまりセルフネグレクトさせるのが男性性ジェンダー作用である

と考えられる。それは被害や屈辱の経験としてだけ認識させるのではない。被暴力体験を別のものへと変形し、自らの暴力行動化の源泉とし、それを肯定する動機の語彙がつくられ、克己をとおして男らしく生きるという流儀をつくりだす。それでもその複雑な情状について記すのはその後の更生の内容に男性性ジェンダーの視点を組み込みたいからである。

この被暴力体験の意味変換が作用しているので、加害であれ、被害であれ、暴力への男性たちの感度は悪い。暴力を再生産するのではない人生があり得たことへ歩み出す機会、関係、資源に恵まれなかったともいえる。また、男性性は感情を言語化できないマイルドな失感情症と相関があると指摘する研究（林真一郎『男性役割と感情制御』風間書房、2005）を踏まえると、自己ならびに他者の痛みに対しては鈍感となる。

さらに、もう一つのカテゴリーがある。暴力性をもつことは同じだが、もっと狡猾なセクシャルハラスメントやパワーハラスメントのケースである。彼らは競争的で排他的な育ちの環境にあり、他者への配慮（ケア）に疎い体験や傍若無人な振る舞いを許されてきた男性である。セクシャルであることやパワフルであることの意味の履き違えが生じやすい。非対称な関係、二者関係、親密な関係性、相手から訴求されることのある関係性にあって、この一群には、地位ある男性が示すべき他者への配慮（ケア）が欠落している。生育過程における被暴力体験や競争に曝された苦難の体験をとおして男性性ジェンダーが再生産されており、そうした男性は何らかの非対称な関係にある他者への配慮について、非認知的な感性や知性を作用させるという点での脆弱さがある。他者への視点を欠落させた鈍感で無知なパワーの行使、それが現実の地位と重なるにせよそうでないにせよ、男性であるということを根拠に適切でないパワーが行使されていく。

別の言い方をすればこうなる。自らの被暴力経験について、たんに暴力を受けていただけではないという意識へと変換していくことが男性性の誇示をとおして構築されていく。受傷的なままだと男らしくないからである。ならばそれを無視するか隠蔽するか、あるいは克己したことを誇示するか、いずれにしてもそのまま認めるわけにはいかない。

さらに男性性は競争心や排除とも関係し、能動的な意味を創り出す。優越感、力の感覚、排除の意識、競争心などが男性的な自己を構成する。被暴力体験を被害であると認知させない図式は男性当事者が主体的でありたいという願望のあらわれであり、弱さを表現し、他者に相談することを困難にしている男性性ジェンダー役割に拘束されていることの証左でもある。競争や排他性を意識させる体験や他者への配慮を後景においやる経験も男性性ジェンダーに随伴する。

くわえて被害の意識にあわせて男性の加害の意識も変化する。告発があると、自分こそが被害者であるという言い訳がされる。セクシャルハラスメントや性犯罪、体罰や虐待などをとおして、それは自由恋愛だった、酒の席についてきたので合意があった、相手にも非があり、被害者にも落ち度がある、それは躾や指導であり、いわば愛の鞭だったなどと弁解がなされる。もっと巧みな言い方もある。パターナリズム（相手もそれを望んでいて有益だったという）、モビング（弱者たちの共謀によるいじめであり、被害者の主観性に依拠する弱者の権力であるという）、迎合する面もある自発的な同意だった（加害者との同一化をせざるを得ないことの逆利用）というなどである。男性性ジェンダーの日常意識や関係性につきものの、加

害の正当化・中和化のバリエーションはたくさんある。

4．感情の公共性––パトスの世界からみる—

本マガジン第 31 号に「臨床社会学の方法（19）社会病理学のゆくえ–苦悩（パトス）が社会的であることを意味づける学知のために」として次のようなことを書いた。「苦しみ・病気などをも意味する接頭辞パトス pathos は、人間精神の能動性や理性を意味するエートス ethos と対比した､受動的、感情的、情動的、身体的な側面を捕捉する。ギリシャ語でパトス pathos は『欲情・怒り・恐怖・喜び・憎しみ・哀しみなどの快楽や苦痛を伴う一時的な感情』を意味し、何らかの苦難に伴う感情の総称とされる。自らに降りかかる、ままならない、コントロールしにくい事態を表現するためにパトスがある。そこからの解放や治癒のために、情念による力、芸術やスポーツへの力、他者のケアの要請の源ともなるが、他方では、問題行動や逸脱行動を駆動する。それらの苦難、苦悩、逸脱が社会性をもち、対人関係という相互作用において行動が表現される。逸脱行動を通して社会的な苦悩と苦難の機微（ミクロ）と機制（マクロ）を考える」と。

そのパトスは、破壊力をもつ。それは自己や他者にむかう。あるいは他者もまた同じように苦悩するパトスをもつという理解が成り立つと共感が成立する。いずれにしても感情を介して人間関係ができていく。その感情は親密な関係性においてこそ育まれていく。感情についても倫理や規範がある。私的で親密な関係性にあっても暴力や虐待による感情が向けられていいわけではない。そこには感情の公共性があるはずだ。エモーショナル・リテラシーという言葉もあるくらいだ。育ちの経過にこの感情の育みがみえてくる。

親密な関係性における暴力にかかわる感情の公共性という議論が成り立つとすると、親密な関係性における脱暴力を根拠づけていく対話を試みていくひとつの視点となり得ると想定している。感情に責任をもつこと、感情についても倫理が介在すること、対人関係への配慮と重なること、ケアする行為に随伴する知性ともいえること、ジェンダー作用が反映されることなどからなる論点を含んでいる。関係性を生きる人間が個人としての権利と倫理を構成していく場としての親密な関係性においてこそ感情の公共性は育まれる。そして対人関係をとおして学習される。何らかの葛藤や紛争を経験してこそ身についていく。知識だけでは身につかない。育ちの過程のもめ事は適切に体験した方がいいだろうし、脱暴力への根拠付けは幼児段階からも可能だろう。

しかし残念ながら現実は逆である。親密な関係性は暴力や虐待を含むものとして長く放置されてきた。法は家族を避けていた。民主主義と人権は家の玄関で止まっていた。家族の内部では、高葛藤の、その人たちなりの自己流の解決に問題行動や逸脱行動が選択されていた。場合によっては触法行為があっても公的な介入はなかった。性虐待もそうだ。DV を振るい、虐待を加える人たちもそうだ。対人暴力は家族や友人、恋人、子どもなどの身近な人や弱者に向かうことが多い。

これらの行動は、繰り返し、長期にわたり、特別なもの、特定の行為、特定の関係性に依存する。だから問題解決には力とエネルギーを要する。問題解決のレパートリーが少ないというもその人たちの脆弱性や貧困のあらわれだが、その方々が直面している人生上の課題や状況の困難への「自分なりの問題解決」として選択された行動だと考えていく。いつの間にかそうした行動に囚われていくようになる。「それ」が当人をコントロールし、いつの間にか主客逆転する。なんらかの被害が生

じ、人間関係にひびが入り、生活の困難が生じるとコントロールできない状態に陥り、支援が必要となる。そこまで深みにはまる背景には、社会的な孤立があり、感情的な寂しさがあるとされる。これを「関係性の病理」という。

習慣化した自己流の問題解決行動は、その選択肢にその人なりの合理性があるとみることができる。それを支えているのはその人の生き方の流儀 a way of life である。自己治癒行動でもあり、承認欲求充足でもあり、自己肥大化作用でもある。そこに耽溺する行動ともいえる。その問題解決行動に依存している。言語化できない事態からの脱出とみると逃走のようでもある。反復して長期化しているという意味では、心理的生理的には快楽を感じる報酬系が反応している。苦痛を除去することで行動が強化されていく。逸脱行動、違法行為、問題行動のこのメカニズムに対して広い意味での心理的行動的な「治療」が必要な事態であるともいえる。

5．相互作用がつくる関係性−人びとのやり方

夫婦、親子、男女などの親密な関係性は、感情共同体としての絆をつくる。そこでは互いの境界域が錯綜する。他人であれば守られるべき境界線が踏み越えられる。相互に訴求しあう。しかしその関係は非対称的なので対の関係としては相補的な関係性である。そもそも対等な関係ではないので、その相補性にはいろんな要素が入り込む。時には奇妙なねじれをつくりだすことがある。

そのねじれた関係性にはすでに逸脱行動のラベルが用意されている。たとえば代理によるミュンヒハウゼン症候群、ストックホルムシンドローム、殴られている女性や子どもの症候群（バタードウーマンシンドローム、バタードチャイルドシンドローム）、片親疎外症候群（離婚後の親子関係のあり方が子どもの発達に悪影響を与える）、シェイクンベイビーシンドローム（乳児揺さぶり症候群）などである。ガスライティングという把握もある（本マガジン第 14 号、2013 年で紹介した）。サイレンシング（自己沈黙化、本マガジン第 22 号、2015 年で紹介）、加害者との同一化現象も同じような名前である。またカサンドラシンドローム（アスペルガー症候群の夫または妻あるいはパートナーと情緒的な相互関係が築けないために配偶者やパートナーに生じる、身体的・精神的症状を表す）もあり、枚挙にいとまがない。こうした名付けは医療、福祉、司法の社会制度で用いられると一人歩きをし、当事者の現実からずれていくことが多いし、あまり適切だとも思わないものも含まれている。

こうした名前をつけられた当事者と面談をすることがあるが、確かに現実を聞いていくと、そのラベルには収まらないリアリティがあり、そうした名付けとは別の関係性がみえてくることしばしばである（これらは別途紹介していきたい）。関係性をとおして自己をつくり、その役割のなかで意味を見いだし、なんらかの感情を満たすための自己流儀の問題解決行動をしている点は確かなことなのだが、しかしそのラベルだけで現実は語れない。

もちろん時には、こうした関係性は社会のもつ規範や倫理に背反することもある。虐待は躾に、DV は夫婦喧嘩に、体罰は指導に、いじめは遊びに、ストーキングは熱烈で一方的な恋愛に、性犯罪は被害者の落ち度になどとしてずらされてきたので、何らかのラベルをもとに介入の根拠をつくることも必要である。従来どおりのやり方では通用しなくなり、親密な関係性や私的な領域における非人権的状況と暴力に公共的な関心が高まり、介入がおこなわれるようになっている。家庭内暴力とは異なるが、最近の事例でいえば日大のアメフト部

学生と監督の関係は類似の関係性として横に広がる共通性をもつ暴力だ。アメリカンフットボールの関西学院大と日本大の定期戦(2018 年 5 月 6 日、東京）で日大の守備選手が関学大の選手に悪質なタックルをして負傷させた事案である。日大の内田監督が試合後に一部報道陣に対し、「その選手はよくやった」と語り、一連の反則行為を容認したともとれる発言をしていた。日大は「１プレー目で（相手の）クオーターバック（QB）を潰せ」と指示する言葉があったことを認めながら「『最初のプレーから思い切って当たれ』という意味で、誤解を招いたとすれば、言葉足らずであった」「学生と理解の齟齬があった」とも語り、組織的な反則を否定した。反則行為に至った経緯、試合前日の練習後、コーチから「関学の QB を１プレー目でつぶせば試合に出してやると監督が話していた。『QB をつぶすので僕を使ってください』と監督に言いにいけ」という指示を受けたと学生は話した。

試合にでたいという当然の欲求、逃れにくい関係、カリスマ的な指導者とその弟子たち、意思疎通のズレを学生に帰責させたこと、教育機関にいるという監督の無配慮、弱い立場の選手が自ら監督の意志を読みながら自己コントロールし、コントロールされている様子がよくみえる。事件の全容は今後の検証になるが、いずれにしても関係性の歪みやねじれは指導者との強い絆をもとに生成した。

6. 街の人びとの生きる生活世界に根ざすこと−主観的な意味づけを重視する

臨床社会学は、関係性を対象にしてその成り立ち具合とそこでの歪みや問題行動を扱う。関係性が構成されていく機制（マクロ）を考察し、その機微（ミクロ）として事例をみる。機制と機微とを把握するためにはいくつか手続きと言葉がいる。関係性の歪みを表現する先の言葉群はあくまでも表面的なラベルでしかない。その人たちの生きている現実をできれば丸ごと把握する言葉がいる。

私にとってそれは現象学的社会学者のアルフレッド・シュッツの生活世界を把握する構成的な現象学的社会学だった。現象学的社会学の父ともいわれている彼の知的自伝を翻訳して出版することができた（2018 年 3 月に明石書店から刊行)。シュッツ研究の第一人者であり院生時代からずいぶんとお世話になった佐藤嘉一先生による監訳である。アルフレッド・シュッツはウィーン生まれでナチスにおわれパリを経由してアメリカに亡命した哲学者・社会学者である。激動の欧州を生きた。第一次世界大戦下の学徒出陣。砲丸の飛交うイタリア山地での戦争体験がそれである。主著は『社会的世界の意味構成―理解社会学入門―』(1932）である。

シュッツの現象学的社会学は社会構築主義の源流でもある。逸脱行動や問題行動とその人たちの意味づけの世界をそのままに記述することでみえてくる人びとの様態、それをささえている認知や思考、それを導く暗黙の理論、情動的な言語化以前のアクトアウト（行動化)、他者たちの反応それ自体の理解をめざすためにこの方法は有意義であると長年考えてきた。そして機制と機微の双方を扱うことができるのが生活世界論である。社会的行為としての逸脱、当事者の人生の意味構成、常識人とはことなる「レリバンス（世界への関連づけや枠)」、苦悩からの自己離脱や自己治癒としての問題行動、逸脱行動へと追いやる社会の趨勢などを背景にして「街の人びと（シュッツ)」の生の様態を把握することができ、社会病理とされる現実を生きる人びととその体験を知ることができる枠組になると考えてきた。

また、現象学の流れをくむので、真実の社会があり、それを把握するために科学的な手続きに基

づき、エビデンスとして整理をして客観的に提示できるとする実証主義が支配するアカデミーやそれをもとに社会制度が構築されることに異論を唱えていく。彼の概念を紹介する余裕はないが、ここで述べてきた相互作用や関係性の社会、そして個人の主観的意味や人々が共同している意識（間主観性）を理解するための方法が豊かである。

その全貌を描いたこの書物の著者はヘルムート・ワーグナー(Helmut R,Wagner1904～1989)といい、すでに亡くなっている。モーリス・ナタンソン、ペーター・L.バーガー，トーマス・ルックマン等ともにシュッツの教え子の一人である。バーガーとルックマンは『現実の社会的構成–知識社会学論考』（新曜社、2003 年）という書物で知られている社会学者である。「現代の街の人びとの生活世界」に見え隠れする心の習慣の変様を視野にいれている。社会的現実とかかわりながら構成されていくシュッツ理論の背景が描かれている。

同じような論理で、社会病理の現実が私に迫ってくる。関連性の自己吟味は身体的なるものへの注意（心身相関)、性と食に関わる問題行動としての主題、情動と傷（トラウマ)、関係性の病理、親密さの暴力があり、たんに逸脱行動として構成されているのではないといえる事態、つまり間主観性の軋み、関連性体系のねじれ、生の様式の困難、関係性の病理、相互作用に内在する境界侵犯等がみえてくる。

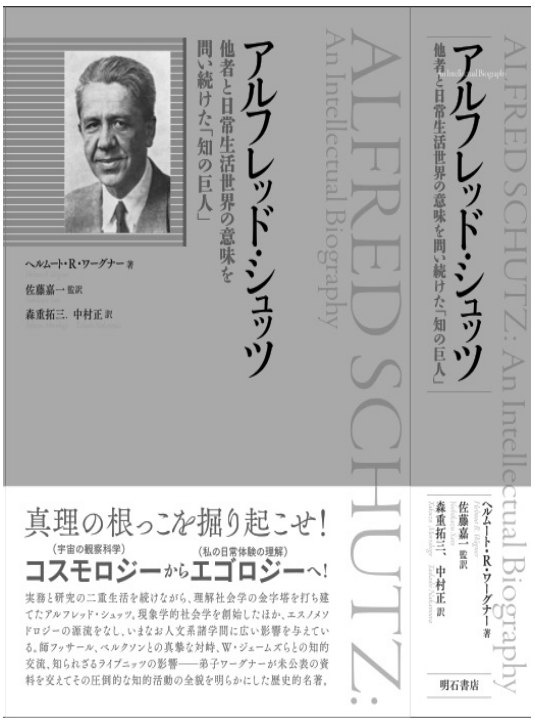
本書ではフロイト批判がされている。こうした問題行動を精神分析の内奥へと遡及させていくのでもなく、孤独な個人の人格性や責任に帰属させる法的、心理的、医学的な解釈と図式でもなく、さらに社会構造にだけに問題を還元する実証的な社会科学的な把握でもない、多様な「あいだ」を見定め、その基盤となる生活世界への理解が大切となることをシュッツは主張する。

シュッツの生活世界の概念は、ナラティブ、意味構成、共同主観、理解と動機、いま・ここの世界、科学主義や実証主義批判などを中核にしている。相互作用や関係性という状況を生きる人びとの自伝的内部的体験の意味世界に迫る。生活者の物語の機制と機微の理解をめざす。「わたしとあなた」の「社交性 Sociability」の現実，コミュニケーションの「間主観性」ともいう。これまで問われることのない、当たり前の日常生活や生活世界はシュッツによれば諸々の行為者の間主観的理解による「意味的構成組織」もしくは「生活世界の構造連鎖―時空間的・社会的・間主観的（言語等の知識在庫）構造－」と位置づけられる。

私の体験の主観的な意味の世界とあなたの客観的な意味の世界とが相互補完的に「交じわる」ところにある間主観的世界をみつめるのが生活世界論である。常識の知識・象徴・記号などからなる主観的な物語の世界を把握する。それこそが科学を根拠づける世界なのだという。誰もがいつもの暮らしのなかで当たり前だと考えて生きて実践している事項をこそ可視化させる。これを「社会的行為」の有意味組織の世界とみる。誰もが身をもって実際に「体験」し「経験」している多元的意味世界の解明ともいう。ワーグナーはシュッツの体系を「生活世界の社会学」と位置づけている。

ワーグナーはシュッツの生活世界論を、挨拶の仕方から言葉づかいまでに関心を向けることだという。生活世界は社会的場面における行為者たちの一連の行為（作業）の網の目の世界である。監訳者の佐藤先生は、Ego-logie「エゴ-ロゴス」（私の–ことば）と特徴づけている（翻訳書あとがき)。パトスも含めてそこにはロジック（感情の公共性や犯罪の暗黙理論のようなもの）があり、それらを機制と機微としてみることができると考えていることに重なる。

ワーグナーは「現代の街のひとは彼の自然的態度によって思考することの必要、熟慮することの必要、また従って、取捨選択することの必要から守られていない」という。これらについて詳しく論じている余裕はなく別の機会としたいが、なんらかの関係性のねじれや歪みのなかを生きている「街の人びとの生きられた世界」は、既製品となって手垢のついたわかりやすいラベルではみえてこない。暴力を振るう人、逸脱行動にはしる人びとの「エゴ–ロゴス」もまだみえてこない。苦難と苦労を生きる多元的な現実である生活世界はまだまだ表現されていない。暴力を振るう人の自然的態度はどんなものなのか、その言葉は貧しく、その人びとの現実を理解するためのナラティブは、単にナラティブセラピーという以上のものとして理解すべきだろう。少しばかりの整序とともに、少なくともそれがそうなっていく機制と、その人だからこそそう生きた機微について記述するための根拠づけとしてこれらの概念は私にとっては必要なのである。



佐藤嘉一監訳・森重拓三/中村正訳/明石書店、2018 年

なかむらただし/社会病理学・臨床社会学

（2018 年 5 月 30 日受理）

光と影　引き受けるひと

北海道　木村　晃子

フリーソーシャルワーカー



この世の中には、楽しいことばかりではなく、苦しいことも切ないこともたくさんある。自業自得なことも、理不尽なことも当然ある。

様々なことに出会いながら私たち人間は生きているのだ。自分が幸せな時には、もしかすると、誰かが不幸せを引き受けてくれているのかもしれない。自分が悲しみに暮れている時には、もしかすると、誰かの分の悲しみを引き受けているのかもしれない。

～突然の離婚～

それは、春の終わりだった。リョウタは、もうすぐ小学校３年生になろうとしていた。春休み前の日曜日には、両親と妹と遊園地に行き、楽しい時間を過ごしていた。

ところが、春休み一日目。突然、母から驚きの告知を受けた。「お母さんと、お父さんは離婚をすることになったからね。あなた達は、しばらくの間、おじいちゃんのところに行ってね。」

リョウタには、意味がわからなかった。つい先日の、あの遊園地はなんだったのだろう。あれが家族一緒の最後の思い出になるとは想像もしていなかった。確かに、あの遊園地の後、父と母が夜に喧嘩をしているのを聞いたことはあった。ただ、それは、リョウタの家ではよくあることだった。

「何故、離婚するの？」リョウタは母に尋ねた。すると、母は言った。「もう、嫌なのよ。」それだけだった。「何故、おじいちゃんたちのところに行くの？お母さんも一緒に行くよね。」リョウタは次の質問に移った。「お母さんは、新しくアパートを借りて、新しい仕事を探すことになるの。少し、落ち着いてから、リョウタとゆうを迎えに行くから。」と言った。ゆう、というのは、妹のことだ。「落ち着いたらってどの位？」リョウタには気になることがたくさんある。「まだ、わからない。とにかく、春休みの間に、荷物をまとめて、ここから出ていくことにしてあるから。」と母は言って、すぐに、部屋の

中の片づけを始めた。

リョウタの母は、いつもそうだった。リョウタの家で決まることは、大抵、母が決めていた。母の決定が告知され、家族は動いた。今回のことも、リョウタにはさっぱり事の運びがわからなかった。小学校に上がる前の妹のゆうは、もっとわからないはずだ。

その後、リョウタとゆうは、少し離れた祖父母のところに預けられた。当然ながら、リョウタは祖父母の暮らす地域の学校へと転校することになった。

新しい学校生活は、窮屈だった。祖父母の家から通学するリョウタを友達は不思議に思った。学校生活にはなかなかなじめず、途中まで通学しては、家に戻ったこともあった。祖父母は、リョウタをなだめながら、何とか学校に通わせたものの、母を恋しく感じていることが、ありありとわかると、リョウタを見ているのはつらかった。

夏休みが終わるころ、リョウタと、ゆうは母に引き取られた。元の学校に戻ったリョウタは、再び友達との学校生活を楽しむことができていた。ところが、母の仕事の帰りが遅くなることも多く、就学前のゆうの世話が十分にできないことから、ゆうだけは祖父母の元へ戻ることになった。リョウタは、夕方まで友達と遊んでいた。夕飯は、ほとんどが、コンビニのお弁当だった。帰宅した母は、いつも疲れていた。リョウタの話に耳を傾ける余裕もないようだった。そして、時折、夜遅くに出掛けていく。

そんな毎日の中で、ある日、母親が見知らぬ男の人を連れてきた。「お母さんの大事な人だから。おじさんに挨拶して。」と言う。その時から、リョウタの家には、母の大事なおじさんが一緒に暮らすことになった。

母は、リョウタには、お弁当代を持たせるが、おじさんには、手料理を作っていた。母は、リョウタの学校の話は聞かないが、おじさんとは何かを楽しそうに話していた。いつしか、リョウタは、母とおじさんが帰宅すると、自分の部屋にこもるようになった。

ゆうが、リョウタたちのところに戻ることはなかった。祖父母が育てていた。リョウタは、次第に自分の居場所がなくなっていくような気持になっていた。

夕方まで、友達と遊び、友達が家に帰りだすと、一人で繁華街を歩いた。ふらっと入ったゲームセンターは賑やかだった。リョウタよりも大きな、中学生や高校生らしき集団が遊んでいた。お金を持たずにゲームを眺めていたリョウタに声をかけてくる中学生がいた。リョウタは嬉しかった。そして、自分よりも年上の少年たちの姿が格好良くも見えた。

少し遅くに家に帰った。母とおじさんは、居間にはいなかった。そして、テーブルには、母の財布があった。ふと、リョウタは財布を手に取り、千円札を抜き取った。そんなことをしたのは初めてだった。

翌日の夕方、リョウタは千円を持ち、ゲームセンターへ行った。いつもの少年たちに近づいて、リョウタもゲームをした。「お前、下手くそだな。」と少年たちはリョウタをからかった。それでも、リョウタは楽しかった。

家に帰ると、居間には、母とおじさんがいた。リョウタは少しがっかりした。お金がない。明日は、ゲームセンターに行ってもゲームができない。あの少年たちに話かけてもらえないだろう、と思った。

翌朝、リョウタは仮病を使った。学校を休

むと言うと、母は、何か買って食べるように、テーブルの上にお金を置いて、仕事に出た。リョウタは、母が出かけたのを確認した。そして、昼間からゲームセンターへ向かった。昼間のゲームセンターには、いつもの少年らはいない。リョウタは一人でゲームをした。手元のお金はすぐに無くなってしまった。リョウタはゲームセンターを出て、繁華街をうろうろと歩いた。やがて、夕方になってくると、少しずつ人の通りが増えてきた。その日は、金曜日の夜とあって、他の曜日より、人の出が多いようだった。

夜が更けてきたゲームセンターの中で、リョウタは、うろうろと人ごみの中を歩きまわった。ふと見ると、ゲームに夢中になっている男性のズボンのポケットから、財布が出ていた。リョウタの視線は、その財布の方に向けられた。すぅっと伸びたリョウタの手・・・

～それからのこと～

あの日から数年が経った。リョウタの行方は母親にもわからない。妹のゆうは、祖父母に育てられ、高校を卒業して就職したものの、年老いた祖父母の元を離れるのが忍びなく、祖父母との暮らしは続いている。

母親は、あの当時家に連れてきたおじさんとは、別のおじさんと一緒に暮らしている。リョウタと同様に、ゆうも母の元へは寄り付かなくなっている。それでも、母は元気そうに幸せそうに暮らしている。

子どもにとって、親は大切な存在だ。どんな親でも大好きだ。リョウタもゆうも、大好きな母親の幸せのために、自分たちの欲しいものをあきらめていたのかもしれない。どこかで、元気にいてほしいと、老いた祖父母もまた、胸を痛めている。
光と影。リョウタの母は、何を引き受けていたのだろう。

＊事実に着色したフィクションです。

街場の就活論 vol.33

～新卒採用とキャリアに関するハナシ～

団 遊（だん あそぶ）

【2019 年 4 月入社の就活生と話してみた】

いまどき就活事情

これを書いているのは 2018 年 5 月末。就職活動も終盤戦に入り、内定を獲得する学生も増えてきた。私が代表をつとめるアソブロック株式会社には十数名の学生スタッフが出入りしている。そんな彼らとの就活話を通じて、今どきの就活事情を少しご紹介したいと思う。

☆☆☆

「団さん内定が出ました。志望業界の会社なので良かったです！」
「おめでとう。いつ内定出たの？」
「3 月 29 日です。内定先は、エージェント（＝新卒紹介）から紹介してもらった会社です」
「エージェント使ったんだ。いつ登録したの？」
「3 年生の 12 月末頃です。秋頃から就活準備を始めて、エージェントの紹介で 1 月、2 月は結構説明会に行きました」

☆☆☆

エージェントとは新卒紹介の別称で、最近プレイヤーが増えているサービスモデルだ。登録した大学生と面談し、志向性にあった会社を推薦してくれる。中途・転職市場ではもはや当たり前のサービスモデルだが、新卒市場へもすそ野が広がりだした。

中途採用の場合はスキルのマッチングの色合いが強いことから、もともと仲介業が成り

立ちやすい土壌があったが、新卒採用の場合は、卒業時にはまだできることが少なく、採用を考える企業側も仲介手数料を払う意思がなく、サービスとして成立しにくかった。

事情が変わったのは、ここ数年の売り手市場の影響。説明会や選考会を開いても誰も参加してくれないという中小・ベンチャー企業が増え、説明会への動員支援的な位置づけから、徐々に新卒紹介のサービスが一般化していった。

新卒紹介は中途採用と同様に完全成功報酬型が一般的で、紹介した大学生が就職してはじめて請求書をたてることができる。最近プレイヤーが増えているのは、この成功報酬額が値上がり傾向にあるのも一因だと思う。

サービスが出始めたころは、私の記憶する限り、20～30 万円のところが多かった。それが 70～80 万円くらいの相場に上がり、今では 150～200 万円という強気の料金設定にしているところも見聞きする。



画像出所：HR NOTE（https://hcm-jinjer.com/media/contents/contents-8598/）

☆☆☆

「リクナビやマイナビといったナビサイトは使っていないの？」

「ナビサイトが情報解禁になる 3 月 1 日時点では、すでに選考が進んでいるところも多かったので、必要がなくて登録すらしませんでした」

「でも、エージェントから紹介されない志望企業もあるでしょう？」

「そこはカンパニーページから直接エントリーすればいいだけの話なので、ナビサイトを使う意味がないんです」

「志望業界や志望企業がある程度固まっているなら、確かにそうかもね」

☆☆☆

ナビサイトとは「リクナビ」「マイナビ」といった、大学生が一般的に就職活動で利用する企業探しのためのサイトだ。今年は 3 月 1 日に OPEN した。ナビサイトの OPEN 日については、大学側、企業側、サービス提供側のそれぞれに思惑があり、毎年のように協議されている。

最終的には色々な思惑を勘案し経団連が「いつからにしてほしい」という形で要望をあげ、それをナビサイト側がくみ取って OPEN 日が決まる流れになっている。ちなみに今年で言えば、情報解禁が 3 月 1 日、選考開始は 6 月 1 日から。つまり内定の解禁日も同じ 6 月 1 日からとなっている。

しかし、実際はこの日を待たずして内定を受け取っている学生がごまんと存在する。取り決め自体に拘束力があるものではなく、経団連参加企業同士の申し合わせ事項であるからだ。そのため「ナビサイトの終焉」「もはや金の無駄だ」と言う人事界隈の人が多いが、代わりになる採用手法がなかなか確立されないため、なんだかんだ言いながらも多くの会社が現在も利用している。

このいびつな構造が、就活勝ち組と負け組の格差を助長している側面もある。自分で情報を集めて就職活動ができるタイプと、ナビサイトの解禁に合わせて就職活動を行うタイプで、接触できる情報や企業の数に大きな差ができてしまうからだ。まだまだ後者の「受け身型学生」が圧倒的に多いが、一方で優秀層とされるのは前者のタイプ。そのため、経団連に加盟する大企業の人事部は、「上」が合意した建前を守りつつ、いかにして優秀層にリーチするかを課題とするところが多い。

☆☆☆

「ところでインターンシップはいくつくらいしたの？」
「5〜6 社ですかね。選考で落ちたインターンシップも、もちろんありますよ」
「インターンシップ中に内定を出してきた企業はなかった？」
「私に関してはなかったです。でも友だちはもらっていました。私の場合でそれに近いのは、早期選考＆説明会に誘われたことがありました。行きませんでしたけど」
「インターンシップの選考で落ちるって、いったい何を見られるの？」
「ペーパーテストも SPI 試験も当たり前のようにありました」
「それは普通、就職試験でやることじゃないの」
「要するにインターンシップのエントリーが就職試験なんです。そこで足切りをされて、実際のインターンシップ中に本選考をして、インターンシップ終了時に内定が出ます」

「それはいつ頃の話」
「3 年の夏休みからですかね。もちろん業界にもよります」

☆☆☆

日本のインターンシップは、始まった当初の教育的意義は薄れ、ほぼ採用選考のひとつの手段になった。先に述べた、就職協定を守らなければならない「経団連に加盟する大企業」も、この制度を上手く利用して、優秀層の囲い込みをはかっている。そのため、より多くの学生に効率的に会うために、1DAY 型と呼ばれる、1 日行くだけのインターンシップが多い。実質は企業説明会と考えて差し障りないものだ。

インターンシップへの参加選考については二方向あり、1DAY 型に代表されるような短期型のインターンシップは「より多くの学生に会い名簿を集める」ことが大きな目的なので、エントリーすればほぼ行くことができる。

一方で、1 週間以上拘束する中・長期型のそれは、実質選考にあたるので、インターンシップへの参加選考でかなりの学生が落ちることになる。

「インターンシップに落ちた」

「エントリーしたところすべてダメでインターンシップに行けなくなった」

こんな会話が大学内でされるようになったのは、ここ数年のことだと思う。

☆☆☆

「ちなみに、後輩に聞かれたら、新卒紹介の利用をすすめる？」
「絶対すすめます」
「それはどうして？」
「エージェントを利用すると、選考の合否報告もエージェントから来ることが多いのですが、あわせてフィードバックがもらえるんです。それが自己分析において有益なことが多いからです」
「確かにそれはありがたいね。担当者が代わって企業にヒアリングしてくれるわけだ」
「そうです。あと、自分からは就活に積極的に動けない人が周りに結構いるので、そういう人にもおすすめです」
「どうして？」
「説明会や選考に行かないと『エージェントの方に悪いな』という気持ちになるから、結果的に就活の動きが加速するんです。バイトのシフトに穴はあけられないから、多少風邪でも行かなきゃ的な気持ちです。行って学ぶこともやっぱり多いのですが、自分のことになるとどうしても後手になってしまう子が多いので」

☆☆☆

色々思うことはあるけれど、今どきの学生の意見だと思うしかない。

☆☆☆

「結局ナビサイトには登録しなかったって言っていたけど、新卒紹介以外に使ったサービスはないの？」
「Wantedly は見ました。意外とみんな見ている印象でした」
「LinkedIn は見ないよね？」
「見ていません。ほかに OB 訪問は力を入れていました」
「どうやって OB や OG にアクセスするの？」
「アプリに登録しておけば、先輩社員に打診ができたり、逆に打診もたくさん来るんです」
「例えばどんなアプリ？」
「＜肉リーチ＞とか＜Visit OB＞とか＜Matcher＞とか」
「母校の先輩以外からも打診があるの？」
「アプリによりますが、だいたいそうですね。私も 4 人くらい会いました。それぞれカフェで 1 時間くらいです。私は母校の先輩に会いたいのではなく、興味のわいた会社の先輩に会いたいので、相手の出身校がどこかは気にしていません。エントリーシートの添削もしてくれて、とても有意義でした」

☆☆☆

リファーラル採用という言葉を聞かれたことがある人も多いと思う。最近の採用市場でのキーワードで、つまりは友人紹介による採用ということだ。これまで採用は「人事部」が行うのが一般的だったが、社員全員を「リクルーター」だと捉え全社一丸で自社に有益な人材を採用しにいく動きが加速している。

その理由は、そもそも中途採用が難しくなっていることもあるが、これからの会社に必要な人材を人事部で把握するのが難しくなってきている面もある。ビジネスの動きが早く、また、これまでの延長線上にこの先のビジネスはない、と言われる中で、採るべき人材をもはや人事部がよく分からないケースが増えている。そのため、人事部は経営層と中長期計画を共有し、リクルーターとして動く社員全員を支援する立場に回ることが多くなってきたのだ。

その流れが新卒に来ているのが、OB や OG が自社への入社を口説くというパターン。もちろん学生の就活支援の意味合いもあるが、一方で、全社一丸で優秀な学生を囲い込みに行こう、という意味合いもある。

「ひとり最低何人に会うこと」とノルマ化している会社もあり、学生との飲食代は私の知る限り、その多くが会社経費として処理されている。実際に会った学生が仮に自社へのエントリーをしていなければ、話を始める前にエントリーだけはしてもらう。その面談をきっかけに入社に至った場合は、特別手当が支給されることもある。これは中途採用の場合も同様の手当を設けているケースはあるので、特別なことではない。

ちなみに「肉リーチ」は「一緒にお肉を食べながら先輩の話が聞ける」のが特徴のサービスなのだが、学生からは「肉ではなくピザで済まされた」や「一切食事を与えられなかった」といった不満の声も上がっている。

文／だん・あそぶ

「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、業態様々な9つの会社の経営に携わる一方で、「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。立命館アジア太平洋大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開している。

団遊の組織論；https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/

団遊の採用論；https://job.cinra.net/special/asoblock/

仕事を辞めたくなったときに；https://goo.gl/bFQdpC

カウンセリングのお作法　第十五回

CON(こん)カウンセリンオフィス中島　中島(みずとり)弘美



『問題を解決する力』

解決策を示してくれる人？

子どもを持つ母親が困っています。

「うちの子、全然、やる気がなくて、勉強しないのだけれど、どうしたら自分からすすんで、勉強をするようになるのか、その方法を教えてほしい」

カウンセラーに何か質問をすれば、こうしたらいいよ!と、その解決策について答えてくれると思っている人がいます。

それは、きっと、医師のイメージに近いものがあるのかもしれません。

咳が出て発熱があって、とてもつらいと、診察を受けに行きます。すると、それは風邪の症状です。お薬を出しておきます。これを一日三回飲んでくださいなどと、指示をされる。

医師と同じように、カウンセラーも改善のための解決策を示してくれる、との期待から、こんな問いかけになるようです。

では、実際のカウンセリングはどのように考えるのでしょうか？

解決の形は人それぞれ

やる気のない子への解決策として、たとえ、効果的な方法があるとしても、それは、一般的な傾向であって、何かの課題を抱えている場合、その解決の形は、人それぞれで、クライエントさんによって異なります。カウンセリングは、極めてオーダーメードです。（★個別化）

しかしながら、行き詰まっているときは、少しでもヒントがほしいと願います。困っているときは何かに頼りたくなります。

問題を解決する力

カウンセリングなど、対人支援においては、このようなときこそ、個人や家族の問題を解決する力を引き出すことが面接の意義であると考えます。

引き出すという、言葉がすこし、おこがましい気がしますが、自ら、気がついたり、発見したりすることから、新しい変化を引き起こし、解決に至ることができると考え、その力を発揮できるようにサポートします。

うちの子、どうしたら、すすんで勉強するようになるのかしら

やる気になる方法を教えてほしい



↓

解決のスタイルは人それぞれです

こうすれば、解決するというすべての人に効果があるという方法があるわけではありません

これまで、子どもさんが自ら何かをしたことがあるとしたらそれはどんなときでしたか？





心理カウンセラーCON 子さん

『問題を解決する力』

みずから気がつくようにサポート

ここで、ちょっと異なる視点から話をします。次の質問内容に注目してください。

質問

「これまでの人生の中で、誰かから頼まれたり、命令されたりしたのではなくて、自分が自ら進んでやったことには、どんなことがありますか？」

「それはどんな時でしたか？」

「一つでもいいし、いくつか思い出すようなら三つくらいまで思い出してみてください」

「どうしてその時、自分から進んでやれたのでしょうか？どんな条件が周りにそろっていたのか、ちょっと思い出してみてください」

中野民夫著（２００３）『ファシリテーション革命』岩波アクティブ新書より

いかがでしょうか、みなさんの中に、何か浮かんでくることがありますか？

あっそういえば

やる気がない、できていないという視点から考えると、なかなか解決の糸口は見えにくいです。

一方、これまでのことを思い出してみると、どのようなときに主体的に動くことができるのか、みずから答えを探すことで、その人なりのうまくいった点を再確認し、何を伸ばせばよいのか、解決のヒントとなります。

あっそういえば、とか、そういうことだったんだと、はたとひらめくことが何より大切です。

そのことをきっかけに行動に変化が生じるということがあります。

リソース（資源）

誘導しているのですかと、疑問を持たれる方があるかもしれませんが、何かの意図をもって引っ張るというはありません。

カウンセラー自身が方向性を決めるのではなく、どうなりたいのか、何を希望するのかは、本人や家族が主体で、気づきを促進することに重点を置きます。

それぞれに、解決につながるリソース（資源）が、備わっていると考えます。

次の質問内容に注目してください



「これまでの人生の中で、

誰かから頼まれたり、命令されたりしたのではなくて、

自分が自ら進んでやったことには、どんなことがありますか？」

「それはどんな時でしたか？」

「一つでもいいし、いくつか思い出すようなら三つくらいまで

思い出してみてください」

「どうしてその時、自分から進んでやれたのでしょうか？

どんな条件が周りにそろっていたのか、

ちょっと思い出してみてください」

中野民夫著（2003）ファシリテーション革命　岩波アクティブ新書より

『問題を解決する力』

本人や家族が主役になって解決へ

これまで、問題解決は、専門家が行うと考えられて、まるでディレクターのように指示をすることが援助であると考えられていた時代もありました。

いまでは、それぞれの気付きを促進するファシリテーターの役割が求められています。能動的、積極的、自律的に取り組むことができるようにすることです。

教える　→　主体的に

最近、学校教育においても、同じような変化が起こっています。

これまでは、学校の先生が生徒たちに新しい知識などを教え、育てるということを中心とした考えでした。これからは、学ぶ人がみずからすすんで学び、育っていくという考え方に移ってきています。アクティブラーニングです。

生徒からすすんで課題を見つけ、その課題を解決する、経験から学び、成長するということができるようにということです。

それでは、ここで、これまでのことをまとめます。

対人支援において大切なことは「主体的に」

バイスティックの原則においても、解決支援のスタイルは、人それぞれであること、そして、自己決定を促して尊重するという点は、クライエントが主役であることを示しています。

依存的な関係を作らないように

支援のプロセスにおいて、みずからの発見や気付きが、大切な理由は、ほかにもあります。

何か困ったことがあれば、いつも答えを他者に求めていると、何も行動できないというパターンをつくりだしてしまいます。

このような形が顕著になると、カウンセラーに対し依存的な態度がふえ、課題に対してみずから取り組むという、姿勢から程遠くなります。

あくまでも問題解決する力をつけること、より自立的になることが重要であると考えます。

自分自身や家族それぞれで、協力して、生活のなかの困りごとに対処できる、その解決の主役はご本人や家族そのものです。



CON 子さん　心理カウンセラー

対人支援において大切にすること

教える　→　主体的に

1．クライエントを個人として捉える（個別化）★人それぞれ

2．クライエントの感情表現を大切にする（意図的な感情の表出）

3．援助者は自分の感情を自覚して吟味する（統制された情緒的関与）

4．受けとめる（受容）

5．クライエントを一方的に非難しない（非審判的態度）

6．クライエントの自己決定を促して尊重する（クライエントの自己決定）

7．秘密を保持して信頼感を醸成する（秘密保持)

参考文献　　バイステック著 1957 年

『ケースワークの原則〈新訳版〉援助関係を形成する技法』誠信書房



映画の中の子どもたち

第25回 泳ぎすぎた夜

－虚実を超えて－

川﨑　二三彦

出町座

この数年、もの凄く多忙というわけではないが、エンドレスに続く研修会の準備や原稿の〆切に追われ、慢性的に「時間がない」という強迫観念に捕らわれている。そのため、あらかじめチケットを購入した芝居やオペラには出かけても、空いた時間を見つけてふらっと立ち寄るような映画鑑賞はご無沙汰続きだった。

そんな空白期間があったからか、京都に新しく映画館ができていたのも知らなかった。昨年末に開館したという「出町座」である。

その名のとおり、出町商店街の一角にできた映画館。地下と 2 階、いずれも 50 席に満たない小ルームだが、中に入るとまずはカフェの顔が現れる。そしてよく見ると、スタッフが働くカウンターの背後が細い通路になっていて、後ろの壁は天井まで書棚。実はここ、書店も兼ねていて、他ではなかなかお目にかかれないような代物が並んでいる。不思議な空間だ。僅かな時間、カフェで一息入れ、劇場に足を運ぶ。

谷内六郎画集

さて、本作を見終わって腑に落ちないことがあった。「泳ぎすぎた夜」というタイトルである。とある雪の日、小学 1 年生と覚しき男の子が、日常とは少し違った 1 日を過ごし、夜には自宅に戻って眠るという映画。タイトルはそんな内容を比喩したものかなとは思ってみたものの、だからといって「泳ぎすぎた」という表現とは結びつきにくい。あとでパンフレットを見てわかったのは、これ、週刊新潮の表紙を飾った谷内六郎画集の中の同名の絵から取ったものだという。もとの絵は、少女が眠るベッドが宙に浮き、そこへ波が押し寄せる構図となっていて、昼間



泳ぎすぎた少女が、夜、ベッドにもぐりこんで夢の中でもまだ泳いでいる心象風景となっている。だから、タイトルの由来を知らない限りその意味を理解することは難しく、逆に、由来を知ると、本作品に対する理解は多少とも深まる。

つまり映画は、たった 1 日の中に、日頃とは少し違う目新しい体験をたっぷりとした子どもの姿を、そして満足してぐっすり眠る姿を、私たちに見せようとしたものであろう。

台詞を排した映画

この映画は、フランスと日本の 2 人の新鋭監督が共同して作り上げた作品だという。それが関係しているわけではないだろうが、全編を通して登場人物の誰一人として台詞がない。

では、どうして台詞を排したのか。最近読んだ本の中に、次のような一節があった。

「演劇で、これは悪だというわかりやすいメッセージがあると、観客はそこで安心して考えることをやめてしまいます。

となると、作者としてはどのくらいでメッセージを止めるかということが非常に大事な問題ですね。短歌でもそうですが、表現者としては何かメッセージを送りたいけれど、送りすぎても

いけない」

これは、劇作家の平田オリザと対談した京都産業大学教授で歌人の永田和宏が語ったものだが（「続・僕たちが何者でもなかった頃の話をしよう」）おそらくこの映画でも、台詞はメッセージを固定化してしまう邪魔なものと考えられたのではないだろうか。ただし、観客である私からすると、「もうちょっとわかりやすくしてもらってよかったのじゃないの」という気がしないでもない。なぜと言って、タイトルの意味もつかめなかった上に、ストーリーもあるようなないようなところがあって、途中見逃したからといって、その後、再び映画世界に入るにも特段の支障はないようにも感じられたから。

「ホント、ぐっすり眠れたわ」

終映後、隣席の女性が、まるで満足したかのように一緒に来た知人に話しかけていたけれど、ストーリー性の曖昧さがなせるわざではなかっただろうか。

子どもの成長

さて、舞台は冬の青森県弘前市。ある日の未明、魚河岸に働きに出る父の物音に気づいたのか息子が目を覚まし、布団の中でしきりに魚の絵を描いている。そんなシーンが物語の始まり



だった。そして、登校したはずの彼は、校舎にくるりと背を向け、雪の中を別の方向に向けて歩き出す。まだ誰も足を踏み入れてない場所で新雪と戯れ、ランリュックを背負ったまま、後ろにパタンと倒れる。身体半分ほども雪に埋もれてしまったその姿に、子どもの遊び心がすごくよく出ており、観ていた私は、思わず「フフ」と小さく笑う。

「これ、演技だったの？」

そんな疑問が湧いた。そうじゃなくて、子どもの自然な様子をそのままカメラに収めただけじゃないか、というのが私の素直な感想だ。

これもパンフでわかったことだけれど、他の登場人物も、彼の実際の家族が演じていた。つまり父は父役で、母は母役で、姉も姉役で出演していたのである。だとしたらこの映画、もはやフィクションなのかノンフィクションなのかがわからなくなってしまう。

そうしてふと考える。だからこそストーリーはいささかあやふやになり、それゆえに彼の自然な姿が捉えられたのではないのかと。

要するにこうした手法が、演技か否かにかかわらず、つまりは虚実を超えて、子どもの本来の姿をきれいに映し出すのを成功させたのかも知れない。

豊かな 1 日。子どもはこんな日々を過ごすことを通じて、少しずつ成長するのだと実感させられた映画だった。

＊ 2017/フランス・日本
＊鑑賞データ　2018/05/19 出町座
＊公式 HP http://oyogisugitayoru.com/
＊ Twitter への投稿　http://coco.to/movie/85027

＊題名を　click すると本文へジャンプします。

＜これまでの連載＞
第 1 回 プレシャス
第 2 回 クロッシング
第 3 回 冬の小鳥
第 4 回 その街のこども
第 5 回 八日目の蝉
第 6 回 いのちの子ども
第 7 回 ラビット・ホール
第 8 回 サラの鍵
第 9 回 少年と自転車
第 10 回 オレンジと太陽
第 11 回 孤独なツバメたち
第 12 回 明日の空の向こうに
第 13 回 旅立ちの島唄
第 14 回 くちづけ
第 15 回 もうひとりの息子
第 16 回 メイジーの瞳
第 17 回 ファイ
第 18 回 思い出のマーニー
第 19 回 ショートターム
第 20 回 真夜中のゆりかご
第 21 回 きみはいい子
第 22 回 エール！
第 23 回 サウルの息子
第 24 回 スポットライト
今　回 泳ぎすぎた夜

難病の
訪問カウンセリング（３）

藤　信子

難病の訪問カウンセリングは、どのような特徴を持っているのかということについて、少し考えてみたい。

まず第一に､難病の訪問カウンセリングの場合、診療所などの医療機関や心理教育相談センターなどのカウンセリングとの大きな違いは、患者さんの自宅を訪問するという点で、クライエント（あるいは患者）が相談に来る訳ではないところにある。このことは、来るのを待つのではなく必要としている人のところへ出かけるという、病気のために自宅療養をしている人のところへ行くことが、コミュニティ心理学の考え方の実践であると言える。この場合、クライエントが相談機関に行くと

いう場合とは、違いが生じてくる。ずっと前に「心理療法がはじまるまで」の１回目にスクールカウンセラーの体験のところで、困っていることを相談しようというモチベーションの問題を取り上げたが、そのことも少しだけは念頭に置く必要があるだろう。確かに保健師から、「ハートの訪問」（私の従事する難病の訪問カウンセリングをこう呼んでいる）をしてくれる臨床心理士がいると聞き、話を聞いて欲しいという人もいる。そういうケースは、家族が診断を受けた後、患者本人が落ち込んでいるとか、どのように考えればよいかという相談があり、本人もカウンセラーを待つというモチベーションがある場合も多い。ただ、私が今受ける相談の多くは難病の診断後まもなく、気持ちの整理がついていない段階で、これからの療養に関して、意思決定が必要な事も多くなるということがあり、病気について、本人・家族に理解してもらいたいという保健･医療側の要請であることは多い。そのため、前にも書いたことがあるが、本人は「私は精神的な病気じゃない」ということで、相談にあまり乗り気ではないことが生じることもある。そこで病名を告知されたこと、病気を知ったことに伴う、不安や心配などについて、話をすることで今後の療養生活について考えることを提案していくことで、カウンセリングについての偏見を減らすということが始まりになることもある。

自宅を訪問する（保健師と一緒に）ことは、患者と家族の関係が見えたり、患者の療養環境を知ることが出来る半面、生活に密着した場面は意外に家族関係等については聞きにくい面もある。生活の中に入り、そこで起きる話を生々しいと感じてしまうのは、私の感じだけだろうか。「ハートの訪問」が、非常勤で年数回と言う限られた時間の企画であるため、一人のところに継続して行くことが出来ないという事情があることも関係して、捉えきれないことも多いということはある。しかし夫婦関係等は面接室という区切られた人工的な空間の方が、話すことへの抵抗は少ないのかもしれないとは訪問をしながら感じることである。発病したために失われた関係、そしてそこから夫婦の関係に変化が生じていることなど、推測の中でしか、不安を感じ取るしかないことはある。

二番目に難病の特徴は、難病情報センターの HP によると、①発病の機構が明らかでなく、②治療方法が確立していない，③希少な疾患であって、④長期の療養を必要とするものであり、その中で医療費助成の対象となる指定難病は、⑤患者数が本邦において一定の人数（人口の約 0.1%程度）に達しないもの、⑥客観的な診断基準（またはそれに準ずるもの）が成立しているものとされている。2017 年 4 月現在 330 疾病がその対象となっている。身体の病気であるために、医療による身体機能の維持、管理が進歩する一方病気の進行に従い、患者の行動が制限されることが生じて

くることもある。疾患の管理とケアは目に見えやすく、ケアする側も達成感を持ちやすいが、患者はケアされる人という立場に役割を固定されがちになるが、そこでことばに表現されにくい不安や不満を聞くことが必要になってくる。20 年間難病の訪問カウンセリングに従事してくる中で、指定難病の数の増加に驚いている。全く専門外の私の感想で言えば神経難病の場合、診断が細分化されてきている印象で、前は同じ病気だったのが、違う診断名になったりすることもあり、それで何が違うのかよくわからないこともある。病気の当事者にとっても、告げられた病名が良く分からないこともあることは考えられる。「今まで聞いたことも無かった病気」、「周りの誰もこの病気になった人はいない」と言われることはよくある。自分の病気について、どのように捉えればよいのかもわかりにくい状態かもしれないことが予想しておく必要があるだろう。病気になることは、不自由になったり、痛みや辛さのため、孤独を感じるが、難病は特に人口の 0.1%程度にも達しないような希少な疾患であるため、人と辛さを共有できる機会が少なくなっていることは、この病気の辛さを増していると感じる。

訪問の前に、その人の病気についての概要と、初発、診断からの経過を見ておくようにしている。これからの病気を抱えた生活について考える場合、未だ治療法の見つからない病気とどのくらい長く付き合わなければならないかを考えることも必要になってくる。たとえば難病中の難病と言われる ALS(筋委縮性側索硬化症)は進行が早く、半数の人は発症から 5 年くらいで呼吸麻痺が生じるとされるので、その場合呼吸器を着けるかに関しては、本人・家族の意思の確認が必要になってくる。しかし病気を告知されて、本人・家族とも気持が混乱して、今後の経過も十分に呑み込めないということは、よくある当たり前のことである。医療の側は、本人の意思決定を望んでいるが、前に触れたように、意思決定は 1 度で済むものではない。呼吸器を着けることに関して、本人とそして家族全員が話しをして理解しておくことが望ましいが、必ずしも家族と本人の気持が一致しない場合があり、また家族の中でも、一致しないことは稀ではない。どのような場合も、病気を抱えながら何をしたいか、何ができるかを一緒に考えるのが、難病のカウンセリングの一つの特徴ではないかと考えている。

続・家族理解入門

家族の構造理解・応用編

第三回

団　士郎



専門家、資格が少々うるさいぐらい口にされる時代。一方、世の中は上手くいかないことで溢れている。そんな今をどのような時代だと言えるかを私的に考えてみると、この両者が手を携えて維持している世界ということになるだろう。上手くいかないことが多いから、より多くの専門家の輩出をと叫ぶ。これが今日的社会システムだと先ず認識する。

業界を限ろう。正確な実数は知らないが、ひきこもりがため息が出るほど多い。少子化だと騒ぐ一方、不登校はちっとも減らない。保育所の待機児童問題も長らく騒いできたが、今や保育士の方が足りない状況だ。児童虐待騒ぎも治まる気配はない。

これらに向けて制度見直しや、さらなる専門家の養成、配置話も尽きない。システム論的に考えれば、このすべてが現行の児童福祉業界を形成、維持している。

システム論的問題解決のヒントはどこにあるか。不登校も引きこもりも、児童虐待通報も既存の方針、政策では減らせなかった。この延長線上の議論では、今後もそう大きな変化は望めないと予測するのは、そう的外れではないだろう。だからポイントはそこだ。

制度や専門家の養成、配置の計画は変更可能だ。効果の見られない方針は変える。そして他の道を探る。上手くいかなかったことは止めるという変化は出来ないことではない。

しかし、こういうことを言うと必ず、「そんなことをして上手くいくのか！余計酷くなったら、責任は取れるのか！」と脅かす人がいる。だから誰も何も言わなくなるし、出来なくなる。

その結果、「たとえ一人でも、児童虐待などあってはならない！少数は仕方ないなんて考え方こそ人権侵害だ！」などと叫ぶ原理主義者と、出ない結果に口をつぐむ経験不足の実務担当者の談合が巷に溢れることになる。

そんな繰り返しはもう止めようと長らく私は言ってきた。変化へのチャレンジは無責任でかまわない。現実は誰も責任をとっていないのに、誰かの新しい提案を無責任だと批判する理由が分からない。まるで、「理はあるけれど役に立たないことが、アカデミシャンの飯の種」であるかのような現実世界に、私達は安住したがっているみたいだ。

その結果、被害者は社会階層的にも偏ることになる。これでは弱者を食い物にしている貧困ビジネスと変わらないではないか。こころの専門家だって、困難な事態に工夫を重ねて、一歩前進の結果にたどり着く責任を負っているぞ！といつも思う。

三　曖昧化する境界

自立＆独立

十数年も前の日本家族心理学会におけるシンポジウム『高齢化・日本における家族システムへの影響』を聞きながら、高齢者の自立に関する彼我の差をあらためて感じていた。

アメリカ人の基本単位はカップルの暮らしだ。高齢になっても多くの人達はカップルで暮らし、配偶者亡き後は一人暮らしになる。無論、そうなった時、様々な形で援助しようとする子ども世代も少なくはない。

しかし高齢になった親の信念は一貫して、できることは自分でして、少しでも社会貢献して生きてゆきたいというところらしい。これには宗教観も大いに作用している

のだろうし、多様なアメリカを代表したモノなどではないのも承知だ。

この前提の中で抱えた利点と弱点をベースに今日のアメリカ社会全体は構築されてきたのだろう。

我が国では、戦後民主主義の申し子達である団塊世代の多くが、信仰を持たない個人主義者になった。その辻褄からいうと、老後の暮らしに経済格差が被ってくるのも必然で、世論が自己責任を連呼するのも仕方ないことになる。日本人はそのあたりイージーだから、そうは言いながらも最後は子どもの世話になってとか、せいぜい老後のための貯蓄をという分かりやすい結論に向かって今に至る。

だから並の日本人の私は、アメリカで歳を重ねることは寂しくないのだろうかと、依存しない頑なな自立信念の事を思った。

他人に頼れない人の問題は、職場論等にもよく登場する。何でも自分でやって、結果は自己責任を全うする。力はあるのだが要するにお互い様の呼吸が作れない。状況そのものは他者と共有せざるを得ないのに「私は私！」という人である。

こんな発想にしかならないのは、勝ち抜き戦の受験教育のなれの果てだからだと思う。自分の才能を、自身の栄達のためだけにしか使わない人に育ててしまった信仰なき個人主義は、愚かしい利己的老人群を形成し、次世代をそれを食い物にする「振り込め詐欺師」に作り上げた。

とはいえ子ども達の世話にはならないで、一人で立派にやっていくことを価値とするアメリカ人高齢者達の志の話には、なんだか悲壮感が漂うように思えて仕方がない。個とはそんなにもかたくなな形でしか確保できないものだろうか。

＊

子どもから大人への段階の自立にはいろいろな形がありえる。

日常生活にかなり援助が必要な重度障害者が、それでも一人暮らしを始めたいと、多くの人々の支援を得ながら出発するのを見ると、改めてこれは原則を踏まえた志の問題なのだなと思う。

当面の利便性や合理性を考え、様々な意見を集約すれば、他の結果に至るのは明らかだ。しかし時間軸を考慮すれば、親がいつまでも抱える事ができないのは自明だ。ここに切り込んでおかないと、いつか、子供よりも一日だけ長く生きていてやりたいという言い草で起きる子殺しに共感してしまうのだ。そんなことは堪らないと叫ぶ当事者を想像できなければ、児童虐待の子殺しだけに目を向けたがる児童福祉が見えてくる。

総合的な判断の結果などではなく、主体性を保障された個人の意思（自立）の実行。志が諸条件を押しのけて主題として現れてくるには、そこそこ厳しい現実との格闘があってのことだ。断片的なプラス要素を貼り合わせたら出現するというものではない。

だから実際に動きだしてみると、その連鎖の中で、援助に関わった者にも思いがけないほどのフィードバックがあったりする。こんな体験談を聞かされると、世界や人間が予測可能な実利だけで構成されているわけではないことをあらためて思い知らされる。

そして人間の自立、独立はこのように極めて具体的でありながら、同時に特別に精神的な課題でもあるからこそ、さまざまなバリエーションが生じてしまうのだろう。

境界の外へ

「親からの独立」と「社会の中の支え合い資源」の確保は、共に自立の大きなファクターだ。社会生活の中で相互的に世話になったり世話したりしながら、家庭内の子どもポジションでの依存から脱却する。

相談では、保護が得られなかったことがシコリになって、ずっと親子関係の泥沼の中にいる人と出会う。どこかで吹っ切れたら自由になれるのにと思うが、当人はま

すます執着する。与えられなかった事によって、自立への道も与えられないという理不尽な呪縛は本当に不本意で苦しいだろう。

でもそこで、「要らない！」と飛び出せたらその後の人生が変わるのは間違いない。もらえるはずのものを、もらっていないなんて依存を続けていないで！といつも思う。

その上で、それでも身内への依存もまた有り難いかなぁと歳を重ねてからは、意地を張らずに思えるのがいい。それが独立・自立と依存の落ち着きどころではないかと思う。

反発する人もあるかと思いつつ書くのだが、病者も障害者も様々な問題や事情を抱えた人も、みなこの世界で生きている。これは権利とかどうとかいう問題ではなく、ただの事実だ。そしてそれが確保されているのは、それだけで自由だ。

だから、”問題が解消したら私だって・・・”という発想は、その通りのようで何か違っている。それは「準備が万全に整ったら打って出る」と言っているのに似ている。まともに考えたら判ることだが、人が万全に準備を整えて、事に当たれることなど希だ。

だからたとえ不登校であっても運動はした方が良い。身体の健康は大事だ。「健全な身体に健全な精神宿る」などと言う気はサラサラないが、不健康化する身体で精神の健全化を図るのは苦労が多い。

ひきこもっていても、成人しているならできる軽作業は具体化したらいい。パート、バイト、家業手伝いなど、何でもかまわない。食い扶持を稼ぐ手だては、問答無用に今持てる個人資源の中で考えた方がいい。

未だかつて社会は、健康な人だけで構成されたことはないし、逆に要援助者、弱者と称する人々に、無限に親切だったり優しかったこともない。人はいかなる状況にあろうと、それぞれの持たされた条件下での生き残り戦略が必要だ。これはそうすべきだという話ではない。そこにしか継続可能なリアリティは確保されないと言っている。

うかうかと流行の疾病分類や流行の症状を抱え込むなど愚かしいことだ。そんな風に自分を、社会の説明言語に依存的に形成しすぎると、本当に主体のない時代の泡にされてしまう。流行語に彩られた人生は、いずれ時代から見捨てられることを予感させる。

サバイバル戦略

私が相談室で会う人々への基本的援助スタンスは生き残り戦略である。だから私の家族カウンセリングも、そういう作戦会議だと思ってもらうといい。

当然だが、この考え方ですべての人や問題が包括できると思っているわけではない。それでは包み込めない人の存在をどう考えるのか、という問いかけはあるだろう。

しかし私たちはいつも、すべてを網羅できる理屈や方略を考えようとしすぎて失敗してきたのではなかっただろうか？

一番大変な事態を想定して対応を考え、そこまで厳しくはない問題をもっと多様に解決する方法を見過ごしてきたのではなかったか。

例えば児童虐待問題を表題に、今日の親子関係や子育て全般を語るのは、どう考えても行き過ぎだ。そうではない人々の子育てに、何の課題もないなんて考えるのは無理がある。

現実の事態は当然のように限りなく各論化している。森羅万象を包み込むような公理を探したいのが学者だとしたら、臨床に携わるのは、各論の作り出す結果の精度を求める者でなければならないだろう。

多くの人々が同じ唄を歌う時代はどこかおかしい。それが使い古しのモノでも、新曲でも同じだ。誰も彼もが同じ事を言い始めたら、意図的であろうとなかろうと、社会に洗脳作用が働いていると見るべきだ。そしてその歌が五年も持たずに消え去ってゆくようなら、それだ

けでもう信ずるに値しない。

間違う参謀

参謀などとカウンセリング世界らしからぬ言葉を使うが、実際のところ、具体的なケースの中にいくつも、もう少し賢いリアリズムの参謀（援助者も含めて）がいたらと思うことは少なくない。

子ども世代の独立が、先ず生まれ育った場からの物理的離別であることに異論はないだろう。多くの「親離れ～子離れ」は、このプロセスで行われる。

就職、進学などによる遠隔地への移動は、親子それぞれの気持ちとは関係なく、状況が後押ししてくれる。この場合、それ程の知恵も決断も求められない。外圧に親子が気持ちを吹っ切るだけのことである。

＊

こんな家族に会ったことがある。最初に聞いたのは、夫が抑鬱状態で病休が二年以上も続いているとのことだった。一人では面談に来られないとのことで、妻が付き添ってきて待合室にいた。

思ったよりもいろいろ話せたので、家族のことを聞いてみると息子がひとりいるという。三十才近いらしいので仕事や現在の状況を聞いた。すると、家のすぐ近所にアパートを借りて、高校卒業直後から一人暮らしをしているという。

「どんなお仕事をしているのですか？」

「フリーターというか、ニートですね」

「それでよく家賃を払って暮らしていけますね」

「高校卒業以来、家賃はずっと妻が払っています。それに夕飯は毎日、食べに帰ってきますし・・・」

この生活が十年以上になろうとしているらしい。これを心の問題だと話されても、私は首をかしげるしかない。これは明らかに、継続してきた事態の誤りであって、息子がどんな人物かによる状況ではない。

この家族に起きていることを、時間の流れで振り返ってみると、こんな事になる。

まず高校を卒業した息子が家を出て、近所のアパートで一人暮らしを始めた。両親はいつまでも自宅にいるより、独立した方が良いだろうと考えたという。だが実態は、食事は全て親元で、洗濯物もまとめて持ち帰ったのを母親がしてやる。加えて家賃は全額親負担。

最初の仕事は早々に辞めてしまい、後は定職には就かず、アルバイトつなぎの暮らしが始まった。そしてそのうちアルバイトにもあまり行かなくなって現在に至る。

一方、美術系大学の講師をしていた父親が抑鬱状態から長期の病欠になった。たくさんの作品や、製作中の作品のために借りている近所のアトリエで日中は過ごすようになった。

思いがけず長引いた病気のため、常勤講師の身分継続が叶わず、失職することになった。再起の期待も込めて、アトリエは借りたままで、回復を待って三年以上過ぎた。この段階で相談に現れたのだ。

付き添いで来たと話す妻に途中から入ってもらって話を聞いた。そこで明らかになったのは、彼女自身も現在休職中であることだった。教員間の人間関係に疲れ切って仕事上のミスが続き、上司からも勧められて休職に至ったという。

三人の家族が皆、就業できていない。そして三カ所に家賃を払っている。支払いはすべて妻の休職中の賃金からである。こんなおかしな事がなぜ起きてしまうのだろう。

私はここに、曖昧な境界がもたらす大きな問題を感じる。そしてそういう事態を招いてしまう誘因として、間違う参謀の存在を思う。

なにごとによらず物事は結果が出てしまう。出た結果からのフィードバックは、意地を張らないで真摯に受けとめなければならない。意見ではなく、事実が眼前にあるのだから、そこから学ぶのが人生である。賢い参謀ならここで考えるのは、次の一手である。それをひねり出すために、経過の分析も行う。

ところが間違う参謀は、「なぜこんな事になったのだ！」と憤慨して見せたりする。そして誰の責任でこうなったのかを詮議しようとする。

ここでは他罰的だろうと自罰的だろうと大した違いはない。見つけた大した根拠もない原因を除去しようと新たな努力をしたり、そのための理屈を展開したりする。客観的に見れば、これは混乱の事態を更に混迷化するだけである。

家から離れれば即、独立などということにはならない。むしろ家さえ出せば自立すると考えることが楽観的すぎる。しかし家に居たまま、丸ごと親がかりで仕事もせずに自立が図れるとは誰も思わない。

こういう状況にリアリズムを持ち込んでくれるのが「お金」である。人の金の使い道はそれぞれが考えて実行するのが普通で、金額の多寡によって決めているだけではない。

しかし一方、金がないという状況は、諦める事を難しくても選択させる強制力を持っている。

この家族の場合、三軒の賃貸契約の継続は明らかにおかしい。正常化を計るなら、みんなそれぞれ自分の甲斐性で現状を維持するか、もしくは現実を引き受けて、撤収して元の一軒家で生活をリスタートするか、どちらかだろう。そうなったらきっと、息苦しくて誰かが動き始めるのだ。

誰かの世話になるのは悪いことではない。やむなくそういう事態に陥ることもあるだろう。しかしそれが長期化してしまうと、急速に意味は減じて、害が蔓延する。

何が起きようともなかなか変わらない全体の中で、都合の良い部分だけが変化してくれることはない。

曖昧な境界へ

東西ベルリンの壁は目に見えていた。その上に様々な課題が載っていて、それも多くの人々には認識できていた。堅牢な境界はそれ故に固定的な対策も形成させ、チャレンジを繰り返させてきた。それは良いか悪いかではなくパターン化されていた。

東西冷戦構造が崩壊して 20 年、社会は曖昧化する境界に苦しんでいる。国境が即境界にはならず、民族的連帯が新たな境界として人々を民族自決に掻き立てる。宗教的カテゴリーによる新たな境界設定を求める声も高い。

難民問題に直面し続けるヨーロッパ諸国内部で、新たなリアクションが起きてしまうのも仕方がない。根っこにあるのは、アメリカでトランプが強く打ち出したアメリカ　ファーストだ。人はなかなか人格者として協働ができない。

ミャンマーの民主化実現の結果としてロヒンギャ問題が登場したことを、アウンサンスーチーはどのように苦悩しているだろう。彼岸から見ていて、その根底までは見えてこない。

人が、どうにもならない状況の中で、言っても仕方のない正しいことを口走って諦めているのが、楽なのだという事実は隠してはならない。

だから私は、心の問題などを扱うという我が業界こそ、甘ったるい嘘を繰り返していてはいけないと思う。課題は急務なのだ。インテリのサロン話でケース検討をされても、状況は何も変わらない。

曖昧化された境界の問題は、家族だけではなく、地球上の多くの場所で、多くの人々にとって差し迫った焦点になった。

巣立ち

in the shade of family tree

木陰の物語

団　士郎

友人の身内のことで相談をうけた



二十六才になる甥っ子が、家でブラブラしているという

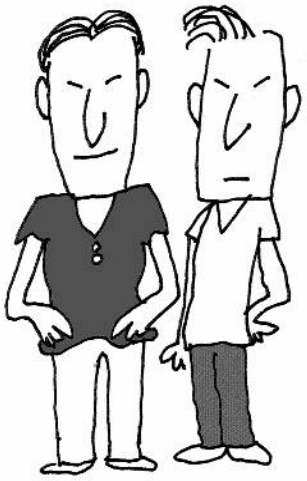


「どういうこと?」

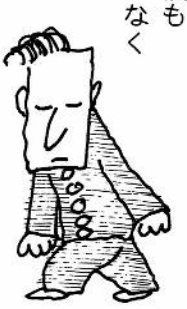
兄の息子なんだけど・・・



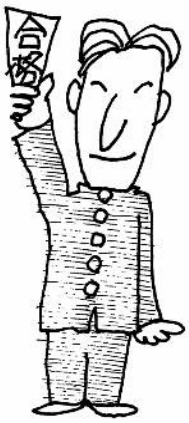
二人兄弟の弟



兄とは対称的に
小さいころから
内気で成績も
かんばしくなく

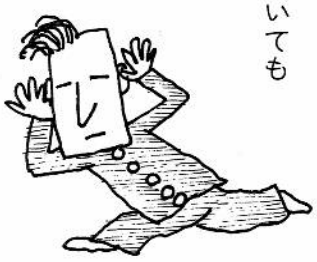


兄は地元の国立大学に進学



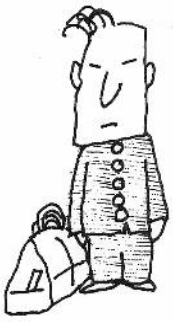


二年後、弟は不登校気味ながらも
高校を卒業・しかし、
学力を考えても、
本人の希望を聞いても
大学進学の
選択肢は
なかった



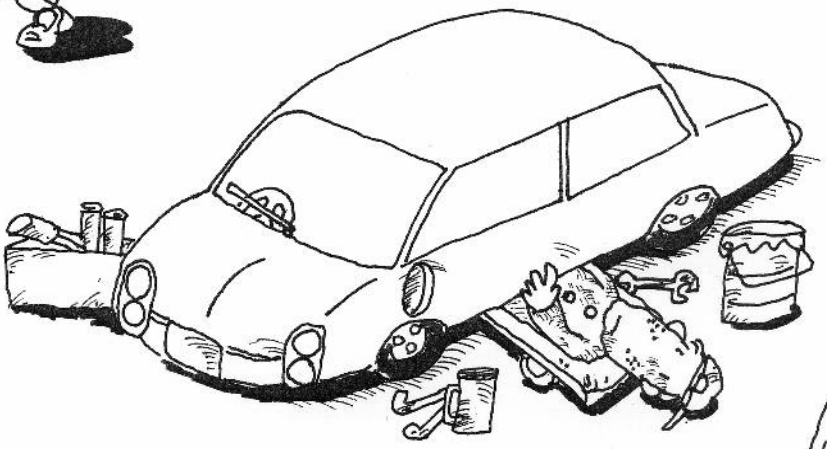


このままでは・・と心配した親は、知人の自動車整備工場経営者に相談して、家から離れた土地で就職して、寮生活させることを決めた



学生生活を謳歌する兄の傍で、毎日仕事に出かけるのも可哀相だと思ったのだ



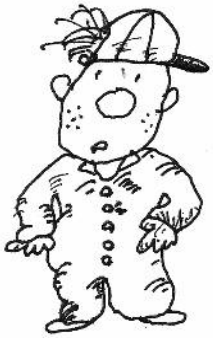


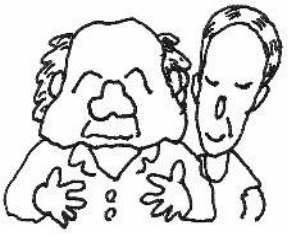
受け入れた側も、なかなか大変だった

内気で不登校気味だった弟が、家を離れることになった



引き受けたかぎり責任持ってと思う経営者と、やさしい先輩たちに恵まれて、イロイロあったが、なんとか逃げ帰らずに過ごしていた





一方長男は、学生生活を十分堪能した後、地方公務員になった



思いがけない変化は、兄の結婚話だった



学生時代から付き合っていた女性と、就職一年ほどで結婚したいと言い出した

とくに反対もなく、結婚式になった



兄の結婚式で、久しぶりに戻ってきた弟を見て、母は可哀相な気がしたという





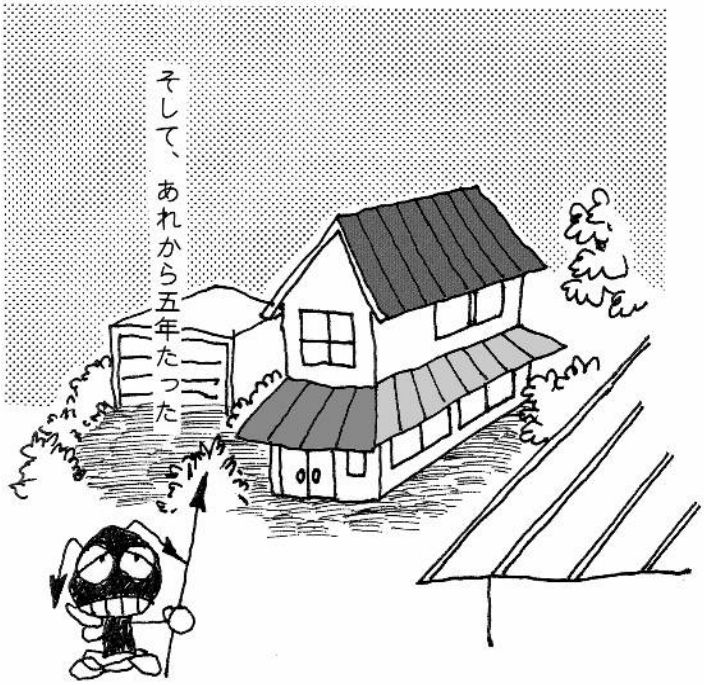
高校卒業すぐから家を出て、工場と寮の往復の一人暮し



この一声で、弟は三年近く世話になった工場をやめて、戻ってきた



そして、あれから五年たった



戻ってきた弟は、自分の部屋にこもったまま、動きだそうとはしなかった



求職活動もせず、一日、自室でゲームをしていた



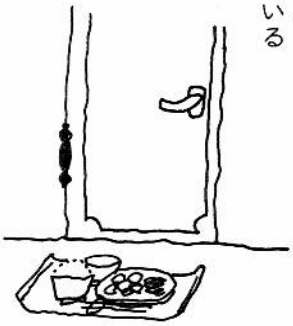
二十六才になっていた



顔を
合わせるのも
気まずく、
食事にも
下りて
こなくなった



仕方なく母親が部屋の前まで運んでいる



親はだんだん歳をとる



ときどき父親はどうにもならない気持ちを、夜中、息子の部屋にぶつけるように叫ぶ



事件が起きているわけではない。誰にも知られることのない家庭の中で、こんなまま時が過ぎてゆく。



両親は口にはしないが、どこで間違ったのだろう…という思いがある



私はこれは今の親たちが共通に抱える課題だと思っている。少子化の時代、巣立ち、自立援助はなかなか難しい問題だ。

してやれる
ことでも
しない。
与えたさを
我慢する。
この大切さに
気づかないと、
子どもの自立を
妨げる親に
なってしまう。



社会的養護の新展開２

― 養護問題 ―

浦田　雅夫

京都造形芸術大学

現実と理想ともうひとつの側面

第 71 回カンヌ国際映画祭で是枝裕和監督『万引き家族』がパルムドール賞に輝いた。ぜひ見たい。そして、同監督の『誰も知らない』（2004 年公開）をあらためて見た。この作品は、1988 年に起きたネグレクト事件をモチーフにしている。是枝監督の作品は犯罪や虐待、ネグレクト問題などを扱いつつ、家族の絆のようなものを感じる場面がみられる。

『誰も知らない』の演出ノート（「誰も知らない」製作委員会、2005）にはこう記されている。

「（1988 年のネグレクト事件について）彼ら母子の間には少なくとも報道からはうかがい知ることのできないある豊かな関係が築かれていた時期もあったのではないだろうか…。（略）　彼らが見ていた風景は灰色の『地獄』だけではなかったはずだ。彼らの暮らしには物質的な豊かさとは異質の、ある『豊かさ』が存在していたはずだし、兄妹たちの間での感情の共有が、喜びと哀しみ、そして彼らなりの成長と希望があったはずだ。」

社会的養護を受ける子どもたちは、ひどい虐待を受けてきた子どもでさえ、職員や大人に対して、家族に関する肯定的なエピソード（旅行に行ったことなど）をことさらに語ることがある。その語りには、空想や本人の願望が強くあらわれている場面もあり、現実の親を「理想化」しているのではないかと思うこともしばしばである。彼らは、被虐待児でありながら、なおも虐待親を肯定する。こんな場面をみると子どもの健気さ、親を愛し、愛されたい彼らの思いを痛感し、子どもを受け容れなかった親へ嫌悪もする。しかし、現に、「ひどい親」という側面だけではないということもまた、事実である。そのことを子どもは、職員や大人に気付いてほしいのかもしれない。

「ぼくだけほっとかれたんや」再考

保育士養成課程「社会的養護」の授業で私は必ず「ぼくだけほっとかれたんや」を取りあげることにしている。これは鹿島和夫氏が 1983 年に出版した『小学生ドキュメンタリーシリーズ　いま、子どもたちは３　ぼくだけほっとかれたんや』に書かれている小学１年生　あおやま　たかしくんの作文である。

ぼくだけほっとかれたんや

あおやま　たかし

がっこうからうちへかえったら
だれもおれへんねん
あたらしいおとうちゃんも
ぼくのおかあちゃんもにいちゃんも
それにあかちゃんも
みんなでていってしもうたんや
あかちゃんのおしめやら
おかあちゃんのふくやら
うちのにもつがなんにもあれへん
ぼくだけほってひっこししてしもうたんや
ぼくだけほっとかれたんや

ばんにおばあちゃんがかえってきた
おじいちゃんもかえってきた
おかあちゃんが「たかしだけおいとく」
とおばあちゃんにいうてでていったんやって
おかあちゃんがふくしからでたおかね
みんなもっていってしもうた
そやからぼくのきゅうしょくのおかね
はらわれんいうて
おばあちゃんないとった
おじいちゃんもおこっとった

あたらしいおとうちゃん
ぼくきらいやねん
いっこもかわいがってくれへん
おにいちゃんだけケンタッキーへ
つれていってフライドチキンたべさせるねん
ぼく　つれていってくれへん
ぼく　あかちゃんようあそんだったんやで
だっこもした
おんぶもしたったんや　ぼくのかおみたら
じっきにわらうねんで
よみせでこうたカウンタックのおもちゃ
みせたらくれいうねん
てにもたしたらくちにいれるねん
あかんいうてとりあげたら
わあーんいうてなくねんで

きのうな
ひるごはんのひゃくえんもうたやつもって
こうべデパートへあるいていったんや
パンかわんと
こうてつジーグのもけいこうてん
おなかすいたけどな
こんどあかちゃんかえってきたら
おもちゃもたしたんねん
てにもってあるかしたろかとおもとんねん
はよかえってけえへんかな
かえってきたらええのにな

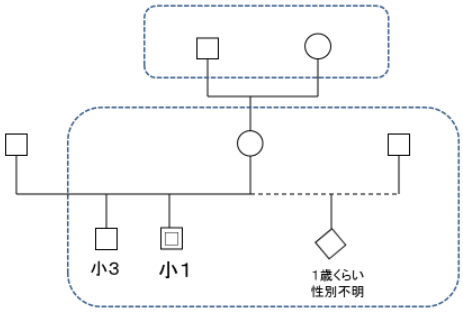
「せんせい、あのね」が流行したころ、小学生だった私も同じように作文を書かされた経験があるが、大人になって、この　あおやま　たかし君の文章を見て驚かされた。小学１年生の感性、ここまで書くかと。そして、もう、何十回、いや百回以上かもしれないが、この作文を読み、その都度、あらたな気づきが生まれている。

たかしくんの家庭は実父が服役中に、実母に交際相手ができ、同居。その交際相手をたかしくんは、文中で「あたらしいおとうちゃん」と呼んでいる。そして、実母と「あたらしいおとうちゃん」の間に「あかちゃん」がいる。たかしくんは、この「あたらしいおとうちゃん」とうまくいかない様子が本文からも見て取れる。この作文を書いたのは、１年

の２学期半ば。

実は、たかしくんが小学校へ入学する直前の３月、実母と「あたらしいおとうちゃん」は小学校へ赴き、たかしくんの養育が困難であり、施設へ預けたいという話をしている。

この作文が書かれたのは、おそらく今から40年くらい前の話であると思われる。



たかしくんは、この作文を書いた後、しばらく祖父母に養育されるが、夜間に外出したり、祖父母のいうことを聞かないため家庭での養育が困難となり、最終的に児童養護施設への入所に至っている。その後、母と再会できたのか、家庭引取りがあったかどうか不明である。

文中、母からケアを受けるべき、たかしくんが、母の帰りではなく自らケアをする「あかちゃん」の帰りを待っていることが印象的である。

映画『誰も知らない』のモチーフとなった1988年のネグレクト事件でも、児童相談所による保護の後、兄は妹たちを心配していたようだ。

このような子どもの「養護問題」は、なくなってほしいが、実際にはいつの時代にも生じている。日本の場合それを担ってきた中核は児童養護施設だ。

2016 年に改正された児童福祉法では、国、地方公共団体は、家庭における養育が適当でない場合、児童が「家庭における養育環境と同様の養育環境」において継続的に養育されるよう、必要な措置をとること。この措置が適当でない場合には、児童が「できる限り良好な家庭的環境」で養育されるよう必要な措置を講じなければならないとされた。

たかしくんは、家庭から離れた後、安心して暮らすことが出来たであろうか。親との関係は、いまはどうなっているのだろうか。

児童福祉法の改正や「新しい養育ビジョン」は、これまで、社会的養護の約９割が施設養護に集中していたものを、里親やファミリーホームでの養育にシフトしていこうというものだ。従来の施設も分散化し家庭に近い環境がいっそう求められる。しかし、そのことは生活単位のことだけでよいのか。あるいは、これまで施設だから出来た支援をどう考えていくか。そして、そもそも「家庭」とは何か。「養護」、「養育」とは何か。何が、彼らにとって、こころ安らぎ、心身を回復し、将来の希望を語れる場なのか、考えていかなければならない。このあたりのことについても、社会的養護を受けた当事者と話してみたい。

（つづく）

第 3 章　キャリアの接合点

―南丹ラウンドテーブル―

北村　真也



「南丹ラウンドテーブル」の「南丹」というのは、この知誠館のある亀岡市を含む地域の呼称です。そして「ラウンドテーブル」というのは、この地域で青少年の支援に携わっている教育、福祉、心理等の援助者のための学びの機会として 2011 年に自主的に立ち上げられた学びの場です。それが 2012 年からは、京都府の地域力再生プラットフォームとしての位置づけを得て、今日に至っています。

南丹ラウンドテーブル自体は、年 4 回実施され、毎回 3 時間を通したディスカッションをおこないます。その実施においては 2 つの約束が決められており、毎回冒頭でそのことが繰り返し確認されています。一つは、参加者はその所属の一員としてではなく、個人として参加してもらうこと。そしてもう一つは、それぞれが当たり前に考えていることに対してあえて問い直しをおこなうというものです。例えば、日々若者の就労支援にあたっている人があえて「支援とは何か？」ということを考え直してみる、といったことです。この省察的な思考が、支援という大きな概念を揺さぶり、概念そのものを更新させていくきっかけとなっていくことを期待しているのです。現場に働く人間は、私も含めて現実的な対応に追われ、俯瞰的な視点や大きな概念を更新させることに対しての意識が薄くなりがちです。そこにあえて楔を打ち、さらに自分たちとは違った領域の人たちから、違った角度の意見を求めることを通して、簡単には答えの出せない問いに考えをめぐらせてほしいと思ったのです。具体的な参加者としては、学校の管理職、教員、京都府（青少年、福祉、心理）の職員、児童相談所、保健所、NPO 職員、マスコミ、大学院生、大学生、知誠館の生徒や卒業生、その保護者等が挙げられます。

南丹ラウンドテーブルでは、知誠館代表でもある私が、ここで日々繰り広げられる若者たちのエピソードと、それを捉える私たちの社会臨床学的な視点を伝え、それをきっかけとして、参加者によるディスカッションがおこなわれます。そして、その進行は、京都学園大学人間文化学部教授の川畑隆先生にお願いしています。今年度のラウンドテーブルは、それまでとは少し趣向

を変えて「若者のキャリア」ということに焦点化して考えてきました。だから、本稿においてみなさんにご紹介するのは、若者のキャリアというテーマに沿ったラウンドテーブルの記録です。キャリア形成という課題を抱える若者たち、あるいはその渦中を生きている若者たち、そしてそのキャリア形成を支援する、あるいはその決定に関わる大人たち。そのようなさまざまな視点が交差する学びの場の可能性を考えてみたいと思っています。

なお、以下のエピソードに登場する南丹ラウンドテーブルの参加者のうち、塾長は私、北村真也、川畑は進行役の京都学園大学人間文化学部教授の川畑隆先生を指し、他の実名表記は知誠館のスタッフたちです。それ以外の参加者は、個人が特定されないようにすべてアルファベット表記とさせていただきました。また、発言の内容で個人が特定される可能性があるものにつきましては、具体名を省略しています。

1. 就活って何？

私たちが、「就活」ということを考えてみたいと思うようになったきっかけは、不登校やひきこもり経験を持った若者たちの就労支援のあり方を見て、疑問に感じる点があったからです。履歴書の書き方や面接の仕方、さらには挨拶の仕方まで、この就労支援プログラムでは、手取り足取りと言っていいほど親切な支援活動がおこなわれているようでした。しかしその支援では、彼らがごく普通の大学生のように就活を経て就労できるようになること、あるいはその状態に少しでも近づくことが目標とされているように思えました。つまりそれは、一般的な大学生の就活を目標においた援助モデルであるように感じられたのです。もちろん援助対象となる若者たちには、個々の状況があるため、それを考慮しながらではありますが、少しでも普通の大学生に近づけるように援助が行われているようでした。

しかし、私たちがふと疑問に思ったのは、「普通の大学生の就活は、果たして彼らのモデルとなり得るようなものなのだろうか？」ということでした。というのも、知誠館には、常に大学生たちがボランティアや教務補助という形で関わっているのですが、彼らの口から聞く昨今の就活事情に、少なからず違和感を覚えていたからです。そこで今回のラウンドテーブルでは、今就活の渦中にいる 3 人の大学生をゲストに迎え、「就活」が実際どんな風に行われているのか、あるいはその渦中にあって学生たちが何を感じ、何を考えているのか、といった話をもとにセッションを始めようと考えたのです。

まず最初は、私から参加者全員に向けて簡単な問題提起が投げかけられます。

塾長「就活って何だろう？っていうのが今回のテーマです。就活という一つの社会の現象。多くの学生たちは、いわゆる就活を通る…これ漢字で書いたらいいのか…今、片仮名で書いたりもするんですよ。私は、大学が 1980 年度生なんです。就活っていうのは、もちろん私たちの時もありました。ここに来られてる

皆さんのときもあったやろうと。でも、その時とは随分違う気がしています。それを通して、キャリアを考えたらどういうことになるんやろうか、っていうのがやりたいなと思って今回は企画をしてみました。それで…Bさんが、うちのスタッフとしてここで働いてくれてるので。今就、活真っ只中の学生がうちには3人くらいいるのでね、どんな様子やとか話を聞いたりするんですけど。まあ非常に複雑な思いが正直あります。例えば、聞いたこともないコトバがあって、まず「ブラック」、私たちの頃、ありました？あるいは「圧迫面接」とかね。何がどういう風に行なわれてるのか？それから大学院の先生とかに話を聞くと、結構、就活で折れる学生が多いと。「大学出てこないんや」という話をよく聞くんです。だから、その就活でいったい何が行われてるのかなと大いに興味を持ったのです。私たちはたまたま、不登校とかひきこもりっていう子のキャリアを実際どうサポートしていこうか、いろいろ議論したりする機会はあるんですけど、不登校でもひきこもりでもない、ごく普通にそれなりの大学に行ってそれなりに社会に行こうとしている学生たちの流れの中に「就活」というものがあって。そこで行われてることとか、広げられてる世界っていうのが、あんまり健康なイメージがなくて。片一方で、いろいろ社会的にしんどい人たちのサポートを考えた時に、そうじゃない人たちのキャリアの形成っていうのを一つモデルにして、そこに少しでも近づくように何か手を打とう、っていう考え方もあるような気がするんですね。でも多くの人たちがたどる、キャリアへの入り口にあたる「就活」というものが、果たしてこれがモデルなんだろうか？というところもものすごく疑問として思うんです。それは私がどうのこうの語るより、その渦中にいる人たちにまず一度来てもらって、一体そこで見てきたものって何なんやろう？っていう風なことで、今日は3人、お招きをしたんです。私たちは教育というフィールドにいるので、中学やったら高校に送ったらあとはもうわからないこといっぱいあるんやけど、その小学校、中学校、高校、大学、と行って、ちょうど社会との汽水領域に在るのがこの「就活」なんですよね。ここら辺のリアリティっていうものを、いろいろ生の声を聞くということがすごく大事かな、ということで今回3人をお招きしました。A君とC君は今日僕初めて会ったんです。Bさんが連れてきた友達ということで今日私は初めて会いました。それで3人とも優秀な大学に行かれて。いろいろ戸惑いがあったり、こんなことになってるんや、っていう風に思う事が多分あると思うので、そこら辺のお話をぜひ聞かせてもらえたらなと思います。で、一人5分くらいお話をしてもらって、その後、ぜひこういう機会ですから、皆さんご質問いただきながら前半の場を動かしていきたいなと思います。じゃあ、早速ですけど…A君から、お話を」

キャリア教育の実践の場である学校、キャリア支援の実践の場である NPO や行政関連機関。その現場で働いている援助者たちは、果たしてこの就活の現状をどこまで正確に知っているのだろうか、彼らの目指す支援の方向性が、普通の大学生のキャリア形成へと向かっているのであれば、その実態をしっかりと直視するべきではないか、というのが私の考えでした。すべてはそこからしか始まりません。そこを知った上で、

その方向を貫くのか、あるいは方向修正していくのかが問われるからです。

Aさん「はい。改めまして、Aと申します。私、今○○大学に通ってまして、未だ就活を続けています。内定を未だもらっていないということなんですけども。私自身「就職活動」っていうのが、大学1回生、2回生、3回生の時に、全然実感がわかなかったというか。社会人として生きていくということに対して全然実感がなかったというのもありまして、最初何から始めたらいいのかっていうのが全然わからなかったんですよ。で、その中で周りが就活を始めて…就活って自分のタイミングやと思うんです。だけど、そのタイミングっていうのが、周りに流されて始めてしまうっていう子が多分多いと思うんですよ。で、その中で周りはしっかり自分の意思を持って決めて、就活をやって。で、自分のタイミングで受かる、っていう人が多いと思うんです。最初に大学1回生、2回生、3回生で何をやってきたかって聞かれても、答えられない学生がすごく多くて。僕自身も何をやってきたかっていうのがつかめないまま就活を始めたので、あまり就職活動で自分をアピールすることができない、っていうことが出てきまして。皆が受けるから選考に受けてみよう、っていう形で受けてみたり。でも、とりあえずっていう形で選考を受けることは就職氷河期である今、受かる理由にはならないので落ちてしまうことが多いんですよ。落ちてしまうことで、自分が否定されたような気持ちになってくるっていうのが素直に思った気持ちで。自分のやってきたことっていうのが…ビジネス・アイディア・コンテストだとか、ボランティアだとか、自分の中で行動はしてきたつもりなのでそのことをアピールしたりするんですけど、それを受け入れてもらえないっていうのは、企業にとって不必要な存在であると言われてるように感じてしまって。その中で自分自身、やってきたことに意味があったのか…意味があるに決まってるのに、意味があったんやろうかって、当たり前のことを疑問に思ってしまうっていうことがすごく多かったです。で、仲間が内定をもらったりすることで焦りを感じたり、プレッシャーになってストレスを感じたり。そこで心が折れてゆく学生っていうのはすごく多いんじゃないかなと思います。僕自身、今心折れてしまってるんですよ。内定も決まってないんですけど、説明会行った後に友達とカラオケに行ったり遊びに行ったりすることでストレスを発散する、っていうことがあってしまって、なかなか就職活動に対して向き合えない日が今続いています。そんな僕なんですけども、一応内定間近に行ったところもありました。不動産会社の最終まで行ったり、出版会社にも内定もらえますよ、っていうところまで行ったりしたんですけど…。その、内定をもらえますよっていうところまで行くとして、自分がここでやりたいのかなっていうのを初めてここで問うんですよ。今までは業種に限らず受けてきたんですけども、そこで本当に自分が就職したいのか、自分がこれから 40 年間仕事をやっていけるのかっていうところにすごく疑問を感じました。その中で、やっぱりこの会社じゃないっていう風に判断してしまって…この判断がアホやと言う仲間もいるんですけど、それで辞退してしまいました。で、私自身が素直に思うのが、40 年間働いていく会社っていうのを、就職活動を真面目にやってるのが

今6ヶ月くらいなんですけど、その6ヶ月間で自分が 40 年間働く会社を決めるっていうこと自体に無理があるのと違うかなって思うんです。転職っていう方法は、今考えると厳しそうですし、早く決まる遅く決まるじゃなくて、本当に自分がやりたい、自分に合った企業を探していくことが大事なん違うかな、っていう風に思いました。で、これから夏にかけてまた就職活動始まっていくわけなんですけども、自分がやりたいと思った仕事に的を、職種とかも絞ってやっていこうかと、今考えています」

A君は現在就活に苦労している様子でした。3 回生までただ何となく大学生活を過ごしてきて、就活が始まるや否や急に焦り始めるという話は、わかりやすいものでした。A君は、3 回生になるまでにも、ビジネス・アイデア・コンテストやボランティアなど、就活にプラスになるとされることをしていたようです。しかしその動機も、周りがやっていたので…といったように、あまり明確な意味づけがあったわけではなさそうです。

就活が始まってエントリーシートを大量に書き、また大量に落とされてしまうといった挫折経験の中で、今まで大学でやってきたことに果たして意味があったのかという振り返りが起こってきます。また仲間たちが内定を取り始めると、焦りと不安が押し寄せて心が折れそうになっていたと言います。そんな中、手あたり次第に受け続けるとどこかから内定は出るものの、今度は「本当にこの会社でよかったのか？」「この業種に興味があるのか？」「定年まで 40 年も勤められるのか？」という不安が生じて、結局内定を辞退してしまったというのです。

塾長「どうですか、皆さん。何か思うところがあれば」

Fさん「僕らの時代とね、ものすごく違いますね。僕らの時は4回生の夏から全員がスタートやった。信じられへんかもしれないけどね。だから3回までは、勉強とか大学生活一色でしたよ。そんなことが許された時代だったんですね。で、おっしゃった中でね、「自分が社会人になる姿」っていう。僕、あの頃も全然想像つかなかったですよ。今でも覚えてますけども、教員に採用されて、辞令もらって、帰りのバスの中でじーっと外の景色眺めながら、俺これから教師やるんや、不思議やなーって思ってました。教師にはなりたかったんですよ、でもね、社会人という実感はね…。結婚もそうでしたよ。自分が親になるっていう実感も。ただね、自分にも子供がいて、子供がやっぱり3回生くらいから就活しました。大学の勉強何もできてない、って言ってました。何も楽しくなかったと。僕は大学めちゃくちゃ楽しかったですわ。今でも戻れるんやったらあそこや思います。ただ、40年間っていう風に覚悟決めてたかっていうと、そこまで見通してたのかな、って。見通してなかったんじゃないかなって。今から思ったら青臭い感じやったかもしれませんけど、頑張ろうと」

塾長「どうですか、聞いてて」

川畑「あの…辞退をしたっていう話ね。「お前何でやねん」って言う友達もいたって言ってたけど、けっこうたくさんの人に言った？周りはたくさんの人が知ってる？」

Aさん「はい」

川畑「どんな声があった？」

Aさん「辞退をする時？」

川畑「する時かした時か、わからんけど…」

Aさん「その辞退するって言った時に、自分の事をあまりよくないと言った仲間たちですか？」

川畑「じゃなくて、「お前の言う事わかるで」って言った人もいただろうし、他にどんな意見が？」

Aさん「そうですね、大学では僕と同じような学生が多くて、内定が決まったんですけど辞退してしまうっていう学生が多かったです。例えば、地元の、C君と仲いいんですけど。C君とかだと、仕事っていうのはある程度、文系とか自分のやりたいことが限られてくる。その中でどこに入っても最初は積み上げていくキャリアは同じようになっていくものなんで、どこに入っても一緒だからとりあえず内定持ってて、まだ就職活動続けるのもありやし、そこで就職活動がだめやってもその会社には入れるように…っていうようにやったらいいのと違うか、っていう風に言ってくれたんですけど。そういうことを言ってくれる仲間の方が多かったですね」

川畑「ちなみにそのことは、親御さんはご存じ？」

Aさん「そうですね、親とはあんまり相談しないんですよ」

川畑「そう。いや、親御さんご存じやったらどう言わはったかな、って」

Aさん「そうですね…多分好きにしたらいいん違うかって」

塾長「私ちょっと聞いててね。その…6ヶ月間で自分の将来の 40 年間を決められるかと。そりゃ決められないとやっぱり思うよね。ビジネスの世界でもそうやけど…昔、例えば 80 年代とかは、10年先ってある程度見えてたかもしれないけど、今10年先だって…いや、1年くらいは何とか見えるかもしれないけど、3年って言うと、何がどうなっていくのかわからない。そんなの、君じゃなくてもわからへんような気がする。そこまでを全部ある程度見通して何かを判断するということは、あんまり意味を持たない可能性もある。結婚もそう。結婚生活は、普通もっと長い。会社は定年までっていう終点があるけど、結婚はもっと長い。そうすると、それを決断する、もうちょっと違う要素がひょっとしたらあるのかなと。「ここや！」とか、「この人についていきたい！」とか。そういうものがものすごく大事な気もするんやけど。さっきも話を聞く中で前提としてあったのが、「結構周りに流されて」とか。「とりあえずやっておかないと」とか、そういうモードの中でっていう話もあったけど、何かこう…そういう感覚が、頭で考えて何か決めるという以外にあるのかな、っていう気がしたりするんやけどな」

Fさん「いいですか？何かこういう人生を歩きたいとかありますか？」

Aさん「はい、あの…不動産会社に就職しようと最初は思ってたんです。その不動産関係の仕事をやって、その中で資格とか専門性を身につけたうえで次に自分で起業しようと考えてたんですけど。就職活動で迷っていく中で、そこさえも自分の中でぶれてきてしまって。本当に起業したいのかとか、そういうことを迷ってきてしまいまして。今となってはふわふわしてきて、わからなくなってます」

Fさん「いいですか？僕ら、職場体験っていうのをやるんやけどね。皆さんもやってこられたと思うんやけど。職場体験で本当にあの子らに見てほしいのは何かって言ったらね、職業じゃないんですよ。職業を通して、人を見て

もらいたいなと最近思うんです。職業の先には必ずお客さんがいたり、人がいるんですよね。だから僕、職業っていうと、その先にある人とかね、それを考えてみろっていうのを、アドバイスとして伝えてるんです」

参加者からの様々な質問の後、今度は有名な某国立大学に通っているＣ君の話になります。Ｃ君は、おそらく就活においては勝ち組ということになるのでしょう。比較的早期に、一流とされる会社の内定を手に入れていました。

Ｃさん「はい。僕は質問の方が時間取りそうなんで、軽くいきます。僕の就活のイメージは、初めは氷河期がどうとか言ってたんで、ものすごく大変なつらいことなんだっていうのは聞いてましたんで、ちょっと怖かったんです。でも自分の中に自信はあって。というのも、高校3年間、全部勉強に費やしたような環境でやってきたんで、大学は多分それなりに学歴で見たら評価されるようなところに行けたと自分では思ってるんですけど、まあ行けるんじゃないかなと。厳しい、辛いとは言ってても、僕なら行けるんじゃないかな、そういう自信は持ってて。まあ実際、4 月 1 日くらいから本格的に面接が始まるんですけど、4 月 3 日に決まりましたんで、上手くいった方だとは思うんですけど。それでもやっぱりストレスは感じてたみたいで、しばらくご飯食べられなかった時とかもありましたし。それで決まって終わった時に、ものすごくいっぱい食べられたんですね。自信もあったけど、気づかないうちにストレスを感じてたんやって思って。でも決まってしまえば就活自体は僕すごく楽しかったと思ってまして。それで就活のメリットみたいなのを今から話そうと思うんですけど。そのメリットを過去の部分、今の部分、未来の部分っていう風に分けさせてもらったんですけど。過去の部分に目を向けると、人生で今まで自分が何をしてきたか、どんなことを大事にしてきたか、何ができてできなくて、何が好きで嫌いで、っていうのを見つめ直せるんじゃないかな、っていうのが一つ、就職活動のメリット。今という面に関しても、就活自体がすごく勉強になることだと思っていて。会社もいろんなとこ調べますし、社会の事も勉強できて。まあ自分がどんな人なのかっていうのも自分で考えられますし、その過程で友人と語り合うことが多かったんで、僕の場合。友人の事ももっと知れるし、僕のことも知ってもらえて。自分でも自分の事を知れて、っていう。そういうことが現在のメリット。未来に向けては、これから何がしたいのかっていう人生の設計図みたいなものを描けたんじゃないかなっていうのが。それで僕は自分がこんなことやりたいって見つけられた気がしますし、今まで漠然としてたものを、面接で相手に伝えるために、凝縮してエッセンスをビシッと詰め込んだ文章で表せたり。そういうことが就活をして楽しかったな、メリットだなと思ったことで。で、その中でもやっぱり今の就活に問題があるなって感じてる部分があって。それはまず3つ言わせてもらうと、まずいっぱい受けなければいけないことかなと。ゼミの先輩とかの話を聞いてても、「俺 50 個受けたよ、とか。100 個出したよ、とか。そういう人がいる中で、さすがに僕はどんなに自信があるって言っても、3 つ受けたいところがあるから 3 つ出して 3 つ受かる」とかは思ってなくて。まあ 30 個は出す

かって決めて。まあ決まったんですけど、30個も出すと、本当に行きたいと思ってる会社じゃないところに行かないといけないわけじゃないですか。行きたくもないところにエントリーシート書いて、筆記試験受けて、面接も行って。すごい時間も取られますし、本当に行きたい会社に全部の意識を割けない。いっぱい受けて、その中から少ししか決まらないっていう今の制度はちょっと違うのかなって思うのと。まあ会社の名前を見て行ってる人が多いっていうのは、思う事があって。周りの人でもそうなんですけど、「何々っていう会社受ける」って言ったら、「その会社知ってる、すごいやん」とか。「何々受けてきて受かったよ」「それどこ、すごいんかわからへん」とか、僕もそうなんですけど、大きい会社であったり有名な会社であったり、会社の中身をあまり見てない人が多いんじゃないかなっていうのが今問題かなと思うし。もう一つ、会社側に問題があると思うのが、学生に対する扱いっていうのがすごい雑かなと思ってて。そりゃいっぱい受けてくれますし、その中から選んで取れるわけじゃないですか。まあ落とす人はどうでもいい、みたいな、そんな印象があるのかもしれないですけど。多いところは5次面接とか。知ってるだけで、13次面接まであったよっていうところもあって。13回面接を受けるわけじゃないですか。そのためにいろんな準備をしていく。だいたい今、4月1日から面接していいことになってると思うんですけど、4月1日に受けた面接は、4月1日の夜に電話がかかってきて、次来てねって言われて2日か3日に行く。それで例えば2日に行った時に、夜にまた電話がかかってきて、っていう。そうやって毎日毎日行くんですよ。で、受かったらいいですけど、落ちた時に、受かったら1週間以内に連絡するよって言われてるんで、その日電話がかかってこなかったら落ちたことになるんですよ。で、1週間後くらいに残念でしたみたいなメールが来るんですよ。何のフィードバックもなくて。何もわからへんし、全部が否定されたような。そういう雑な扱いっていうのはあんまりよくないんじゃないかなって思いました。で、最後に気持ちの面で悩みというか。僕、○○証券に行くことになってるんですけど、証券会社ってすごくしんどいイメージが僕の周りの人にはあって。人気がないんですね、証券会社って。わりと受けたら行けるような。まあそんなことはないですけど、受かりやすいような会社なんですね。で、周りではすごい採用枠が小さい会社とか、給料がいい会社とか受かってる人がちやほやされてる中で、僕の会社そんなたいしてすごくもないよな、って。自分がやりたいことがあっていきたい会社であっても、周りから見たらあんまりちやほやされないような会社で、ほんとにいいんだろうかって。周りの人がいいって言ってくれるようなところに行けたんじゃないかとか、思ったりしちゃうのが今の悩みやったりしますね。といったところです」

4月1日に就活を始めて3日には内定をもらったというC君。彼は自分の就活については最初から自信を持っているようでした。そしてその自信は、彼の学校の社会的な評価、その学歴、そしてもちろん、彼自身の今まで積み上げてきた経験から来るもののように感じられました。

C君は、就活のメリットを過去、現在、

そして未来という 3 つのフェーズに分けて考えていました。まず過去については、自分のこれまでの経験を整理できたことを挙げています。そして現在、就活によって社会のことをいろいろと調べる機会を手に入れ、知ることができたということ。そして未来については、自分のライフプランを立てることができたということを挙げていました。

そして最後に、就活の問題点を語ってくれました。一つ目は、エントリーする企業の数が多すぎるということ。そのため情報過多になる、あるいは時間に追われてしまう、ということでした。そして二つ目が、企業の学生に対する扱いについて。これはかなりの数のエントリーがあることによって、一人一人の学生が尊重されない可能性が出てくるということでした。そして最後は、周りからの情報によって自分の気持ちが揺らいでいくということ。この 3 点を挙げていました。

塾長「どうでしょう、いろいろ。聞いてみたいことがあれば」

Dさん「会社の名前だけ、っていうのはね。中身を見てないっていうところは、どうなんかなーって。自分自身も、何をやりたい、こんな風な達成感を味わいたい、っていうことがないのかな、って一瞬考えちゃいましたね。私は公務員志向だったので、民間には行ってません。公務員試験しか受けてない。その中で何をしたいかって言ったら、私生まれが〇〇で。その頃から何がしたいって言ったら、この地域どうなるんやろうっていうことを思ってたので、地域社会に何らかの形で役に立ちたいなと。民間企業で役に立つっていう形もある。企業の中で社会的な責任を果たしたりする中で、社会が発展していくっていうこともあると思う。でも私は直接行政の中に入って、行政の中で地域おこしとかいろんなことをやりたいと思った。だからそこしか受けなかった。大学入った時からそう思ってたので、逆にそれしかやらなかった。皆さんが民間で苦労されてるところっていうのは初めて聞かせてもらって、そうなんやって思ってるのが実態です。会社の名前だけ見て中身を見てないっていうのはよく分からないし、あまり理解できないなと思って聞いてました。正直なところ」

塾長「あの私、今の話聞いててちょっとだけ思うのは、50 社とか 100 社とかエントリーシートを出して、要するに数をとりあえずある程度やらないといけない。自分もまあ 30 くらいはやらないとあかんなとか。それで一つの会社についてどれくらいコミットできるかっていうのは、分母が多くなればなるほど、よくわからない世界になっていくんやろうなあと。そうやっていろんな形で面接が動いたりすると、けっこう情報がごっちゃになってくるし。さっきも言ったように、とにかくわけのわからない状態でとりあえず動いておかないと、っていう。そんな状況が多分リアルに存在するんやろうな」

Cさん「あるんでしょうね。ただ、行きたいからといって、絶対決まるかというとそうじゃない。お見合いみたいな。そういうイメージがあるんで」

塾長「私たちの同期とか、だいたい管理職の歳になってるんで、まあ人事担当とか。だいたい 5 分ほどしゃべったら、この人いけるかどうかわかるって言うね。企業からしたら、やっ

ぱり途中で辞めてしまう学生たちばかり採ったら会社つぶれてしまうからね。一人を一人前にするのに3年､だいたい研修代と給与､福利厚生にだいたい年に400万かかる。それで3年間に1000万払ってみんな辞めていったら、要するに会社の損失はめちゃくちゃ大きいので。だからある程度選ばないといけない…とした時の選ぶ目と、学生たちが「こうやったら就活がうまくいくのと違うか」っていうところに、ひょっとしたらずれが生じるのかもしれないですね。でも片一方で、大量の情報が舞い込んでくる状況にならざるを得ない。そこら辺の葛藤とか、そんなのがあるような気はするけど。そのあたりはどう思う？」

Cさん「うーん、採用の方法とかでも、今だいたい3年生の夏にインターンに行って、インターンで1週間なり一緒に仕事をした中で「こいついいな」って思った人を採る、インターン採用みたいなんがあるんですけど。そういうのすごくいいなと思って。それだったら働きたい人も1週間アピールする時間があるわけじゃないですか。その間に仕事とかを見て、一緒に時間を過ごす中で採用が来る。まあ時間はかかるだろうし、手間もかかると思うんですけど、まあ、今の採用よりもそういう採用ができればいいのかな、というのがありますね。でも一つも決まらないのは、不安なんですよ。だから僕が証券会社行こうと思ってるとしたら、主だった証券会社が5個あるんですけど、5個全部受けたら1個受かるんだろうか、とか。じゃあ受からなかったらどうしようっていう時、それで募集終わってる時あるんですね。もう募集終わりました、って言う会社がけっこう多いんですよ。で、僕も初めはけっこう行きたいところだけに絞ってたんですけど、途中で怖くて30に増やす時に、だいたいもう2次募集で出してくださいっていうような不利な状況でエントリーを出さされるんですよ。だからやっぱり、早い段階でたくさん出す、受けられる可能性のある母数を大きくしておくっていうのは、どうしてもしたくなってしまいますね。あまりいいことじゃなくても」

Fさん「ちょっと聞いていいですか？大学生活楽しかったですか？」

Cさん「大学生活はね、学校自体はあんまり楽しくなかったんですよね。僕高校もあんまり楽しくなくて。高校も本当に大学に行くための3年間。高校で遊んだというよりは、塾に行くことの方が多かったですし。塾の方針で部活もやめましたし。それでもまあ、受かってみれば、受かってよかったなと思いますけど､ほかのこと…部活頑張ってたり、自分の好きなことやってたりしてた人には、憧れというか、うらやましいなっていうのは思いますね。大学にしてもそうなんですけど。もっといろいろ楽しいことやってたらよかったなと」

Fさん「本当に大変やなと思うけど、僕が大学生だったら、僕は一体何のために大学行ってたんやろうって思ってしまう。僕、楽しかったんですよ。あそこでね、大学の仲間や先輩とガヤガヤした中でね、僕ちょっと変わったなって思うんですよ。研究したことも今でもよい思い出として残ってますし。今就活の話聞いてると、大学って何のためにあるんやろうって思ってしまうんですよね。だから、それだけ勉強頑張って、大学行かはったのに。僕は本当に行ってよかった。でも…僕がこれから送り出す子がそういう形で進んでいくんかって、話を聞いてました」

Cさん「多分勉強とかは楽しかったっていうのも

あると思うんですけど。でも僕の周りでは、何で○○大学行くのかっていうと、多分就職が楽だから。で、○○大学でどんな風に勉強したかっていうと、いかに楽に単位を取るか。いかに楽に卒業するか…に注力して、あまり勉強したいっていう意識が高い子はいないように思いますね。実際僕も、国際貿易を勉強してるって言いましたけど、ゼミが国際貿易っていう名前がついてるだけで、国際貿易の事全然知らないんですよ。そういう現状もあるのかな、と。やっぱり勉強して、大学楽しかったっていうのがいいな、うらやましいなと思いますね」

塾長「だからやっぱり、就活というものを通していろんなことが見えてくる、そういう気もするんですよね。そこに表現されているもの…それは例えば学校の課題もあるのかもわからへんし。いろんなことが…」

就活というものを通して、いろいろなことが見えてくる。それは確かにそうでしょう。若者たちにとってそれは試練であり、壁なのですから。当然、今までを振り返って考えないと前に進めなくなるはずです。Ｃ君に感心させられた点は、そんな試練を機会として捉えなおす視点をちゃんと持っていたことです。私なら、彼のそういった側面を高く評価するかもしれません。

そして最後に、Ｂさんに話してもらいます。彼女の就活は、他の二人とは少し違っているように見受けられます。彼女は、自分のやりたいことにこだわって就活に挑んだのです。

Ｂさん「えっと…私の就職活動は、他者との比較との戦いでした。まず2回生の後期くらいから、皆資格を取ろうということで、学校で行なわれてる資格講座みたいなものに行き始めたり。3 回生の始めからはみんな就活モードになっていろんなこと考え始めたり。皆ボランティアしたり、就活のための行動っていうものを取り始めていたなって、私は思うんですけども。私は3回生の時に入った、法社会学の医療過誤生命倫理を扱うゼミでの学習っていうものがすごく気に入って、大学に入って初めて勉強したいっていう風に思えたのが、3 回生だったんです。で、真面目にそのゼミにも取り組みましたし、その研究自体がすごく面白くって、レポートなども深く研究して書かせていただいて…っていうことをしてる間に、夏になったら皆もうインターンに行って、冬になったら自己分析だの他己分析だの、就活の軸を決めるだの。就活本みたいな見本があって、皆そういったものに沿って、就活っていうひかれたレールに乗っていく中で、私自身勉強したいっていう思いがすごくその時はありまして。将来のことを考えていなかったわけではなくって、夢はあったんですけど。それについてやるよりも今は学業が面白くてそこに集中してしまっている自分がいて。12月、就活がヨーイドンって始まる時に考え始めたくらいのかなり乗り遅れた状況やったので、周りの人から大丈夫なん？って言われたり。そういう風に焦るようなコトバをかけられたりとかありまして。そろそろ考え始めないとな、っていう風に、周りの勢いに押されて始まった就職活動でした。それこそ、50社とか100社とかエントリーするっていうのは、もうボタン一つでエントリーできてしまうっていう所があって。そういうものを押すだけで、そこからの

説明会とかの情報が自分のもとに送られてきて、という状況があって。とりあえず興味があれば押していこう、みたいな。普通にみんな100社エントリーしたよ、とか言ってる人もいたし、ボタン一つ押すだけでできることなんです。私は夢がありまして、普通の会社で働くっていうよりかは、私は夢を追いかけたい、っていう思いがあって。最初はテレビ局を受けさせていただいてました。制作がしたいっていう思いがありまして。テレビ局って、他の方と業界が全然違うので就職活動のやり方も全然違って。まずエントリーシートっていうのがちょっと特殊で、作文があったり、ややこしい問題が3枚とか4枚あったり、っていうので。出すのが大変っていうのがあったものの3月くらいにそれを頑張って出したんですけど、ほとんど「お祈りメール」って言うんですけど、先ほど言わはった「健闘をお祈りいたします」っていうようなメールがどんどん来まして。そこで一度挫折を味わいました。紙一枚で何がわかるねんって思いながらも、そういう風に省かれていくことへの疎外感。社会から疎外されてるような気分だったり。自分を見てももらってないのに、そこにも到達できないつらさっていうのを味わいまして。そこから少し視野を広げて…でも私も結構な数、50社くらいはエントリーシートを出したと思います。で、決まったのは先週だったんですけど、3次選考4次選考に行っても落とされる、っていうことがずーっと続いて、一旦エントリー企業がゼロになったのが5月の中旬、なんです。そこでゼロになった時に、私はここまで視野を広げてここまで業界を絞ってここまでこの仕事にこだわってやってきたことが、だめなことだったのかなってすごく思ったんです。で、あきらめた方がいいのかな、向いてないのかな、ってすごく考えることがありまして。そこで諦められなかったんですね。諦められない気持ちが強かったので、ここまで来たら就職浪人を考えよう、と思いまして。単位を削って、来年もう1年、新卒で扱ってもらえるように5回生で学業を続けようかな、っていう気持ちを持って就活をやり直しました。それで、その5月に10社ほどエントリーシートを出させていただいて、先週面接に行かせていただいた企業に内定をいただいたんですけど。全く、周りの就職活動…、順番に面接を重ねて決まるっていうスタイルではなくって、たった一回の面接で、初対面の方に内定をいただきました。で、そういった企業に出会えたことっていうのは私にとってすごくありがたかったんですけど、まあ、今まで就職活動やってきたことも無意味だったとは思わないんですけど、そのシステム自体にやっぱり疑問を持つところは今でもあります。今は落ち着いているのでそんなになんですけど…、さっきC君が言った様に、皆に知られてる企業でもなければ、お給料は東京で生活していけるギリギリのラインっていうことで。私は夢を追いかけてたっていうことがあるので、それでも全然大丈夫なんですけど、やっぱり親だったり周りの方がそれって大丈夫なの、って心配される方が多いんですけど、私の中ではすごく納得できる就職だと思っています。以上です」

Bさんの就活は「他者との比較との戦い」だったと言います。これは、他者との比較で翻弄されそうになっていく自分との戦いと言い換えてもいいかもしれません。Bさんによれば、2回生の後期頃から、大学で

資格講座が始まったり、みんなが就活における自己アピールの材料としてボランティア活動に参加したりと、就活モードがスタートすると言います。そして 3 回生の夏にはインターンシップが始まり、後期からは自己分析やキャリアプランなどのセミナーに参加し、やがて就活が始まっていくそうです。

しかし、B さんはそんな流れに逆らうかのような学生生活を過ごします。3 回生の時に所属したゼミでの学習がおもしろく、そこに没頭していくのです。すると他のみんなの就職モードからは取り残されることになり、まさに葛藤を抱えていきます。それを彼女は「戦い」と呼んだのでしょう。

3 回生の冬から就活が始まり、50 社から 100 社にボタン 1 つでエントリーし、エントリーシートを提出。そしてそこからの面接の嵐と、次々にやって来る不採用の「お祈りメール」。彼女はそんな渦のような就活のモードに片足をつけながら、その一方で、テレビの制作がしたいという夢を追い求めていくのです。しかしそれは決してたやすい道ではなかったようです。

塾長「どうですか？」

M さん「渦中にいらっしゃる方の話なんでね、大変。大変なんだけど、C さんがおっしゃったようにね、よかった点っていうのを認めていらっしゃるのですごいいいなと思いました。システムにはものすごい不備があるんですよね。で、エントリーができないようにする…あんまりたくさんすると、会社にとっても大変なので、っていう動きがあるんでしょう、少しずつ修正をしていくでしょうし。で、いくらか大学生にとっても求人倍率とかはよくなってはいるんでしょうけど。問題は残された人、みたいな。やっぱり、さっきおっしゃったように 40 年後を見通すっていうのは無理やっていうことに尽きるかな、と。あんまり自分に向いてる職種とかが、40 年間絶対ブレないっていうことはあまりないと思うから…、もうちょっと柔軟に対応できるように。変化する必要性がありますよね」

塾長「私たちは 84 年に卒業して、それこそ証券ブームやった。〇〇証券とか言ったらもうものすごかった。びっくりするくらい給料もらってた。だからもう 30 歳くらいで年収 1000 万とか普通やった。でもすぐつぶれて、その後、金融関係では銀行も統合やら何とかで…、もう悲惨な結末でした。だからそれこそね、40 年先なんか見えないんです」

M さん「私ちょうど海外に行った時に、周りで証券会社の人とか銀行の人とか、月 40 万の社宅に住むとか。でもつぶれたら帰るところがないみたいな。本当に知ってる人がそういう状況だったんで。でも皆、やりたいことが…職種とかに関係なく、ああいう働き方をしたいとか。そういうのがはっきりしてる人は、それも得難い経験だ、みたいな感じで帰っていく人もいるんです」

F さん「40 年先なんか見えないですよ。僕が教師になった時に、〇〇（大手ＩＴ関連企業名）なんて大した会社と違いましたよ。そんな時代です。ゲーム会社なんて、ほんまに不安定な仕事やって言われた。どうなるかわからへん。でも今はもう IT を抜きに動かないでしょ。90 年代くらいからじゃないですか。インターネット絡みの。僕が採用された時華やかやった企業が、どれだけが残ってるかという

ことですよね。あのままの輝きを持ってどれだけが残ってるか。あの時に何も考えてなかった企業が、姿すらなかった企業がどれほど出てきているか。そういうところは、40 年先じゃなくても、そう思いますわ。で、後は入ってからどうキャリアアップしていくか。こないだのキャリアの話聞いてると難しいんやけど、やっぱりスタートなんですよね、まだまだね。それから人は変わるし。目指すものもあるやろうし。その中で作り上げるものやと思いますわ」

川畑「一つ思うのは、40 年も見通せないということを、歳を取った者はわかってたり、あるいは感触的にそう思ってるから。逆に、ちゃんと安定したところへ入れとかね。逆にそういうことを歳のいった者が求めるというかプレッシャーを与えるというかね。親もそうやし、いわゆる大学側もそうやし。みたいなところがあるのかな、と」

C さん「そうですね。親にもやっぱり、「大丈夫なん、証券会社。あんた続けられるの」とかすごい言われて。あんまり賛成してる感じじゃなかったですね。もっとほかのところを受けてる時に「そこいいやん、頑張れ」って言ってもらったのに、実際証券会社に決まった時に「次どこ受けるの？」みたいな。友達もそうなんですけど、「何々受かったで」「そうなん、それどこなん？」って聞かれるような。僕は行きたい会社に受かってよかったのに、その人の正直からしたらそれは第一志望になり得ないような会社だっていうこともあると思うんですね。そういうこともあって、周りの人がすごいって言うような会社に行ったらもっと気が楽やったのかなって思う要因にもなってます」

40 年先が見渡せた時代と、来年のことさえよくわからない時代。その違いはとても大きいように思います。会社が自分自身の 40 年を保証してくれる根拠が崩れつつあるのです。今の大学生たちは、そんな不透明な未来に対して何かを決定していかなければならいのです。

川畑「社会福祉施設で働きたいと思う学生がいて、雇ってもらえるように、頑張るんですよ。ところが、親御さんから、あんたそれで一生いけると思ってるの、って言われて。あの、親から言われたっていうのを書く人がいるんですね。僕はそのつもりだったけど親がだめと言うのでやめますと。というのは一人じゃなくてやっぱりあるんですね」

塾長「そうですよね」

川畑「僕は、就職させたいんやけどね」

塾長「親がやめておけと」

N さん「保護者の方は社会福祉施設に人材を、全然送ってきてくれはりません」

川畑「きつい、汚い、給料が安いということでね。全部そうだと世間は思ってるところがあるから。そう言われたら、「それでも僕は行くんだ」と思うまでのいろんなものを持ってなかったり、知識もないからね。そう言われたら「そうかもしれへんし困るな」っていうことで、違うところを選ぶという」

D さん「福祉業界のところはね、やっぱり親や周りの影響もあって、福祉系の学生が志望しない。そこに志向が向いてないんですよね。〇〇大学の先生なんかと話をしてると、〇〇に入りたい、っていうところが出発点で、学部はどこでもいい、みたいな話まで出てくるから。で、じゃあやりたいもの、目指すものって何なんだろうな、って思ってました。ただ、

福祉ってやりがいあるよというところをどう見てもらえるか、わかってもらえるか。福祉の分野のやりがいってどんなもんなのかって、こういうとこなのか、って知ってもらうためにいろんなことをやりましたけど、なかなか上手くいかない。それと、福祉の中だったら、キャリアアップとか、そういうところが難しいんじゃないかっていうような。人を育てなくって、離職率が高いっていうところがあったので、じゃあまあ皆で、業界全体で育てるっていうことをやっていけないかなあ、って。そんなことをどうやってやっていくか考えながらやってたっていうのが現実ですよね」

Ｂさん「大学でも、キャリアオフィスっていうところからずっと電話がかかってきて。進路はどうなっていますかと。内定は出ていますか、っていう電話が毎月毎月かかってくるんですね。で、こういう説明会が大学でありますよ、こういう講座が大学であります、○○大学の子が入れる特殊な面接があります、だったりっていう、そういう情報を大学が言ってきたりとか。なんか就職活動っていうものが、その大学のシステムの中に含まれているっていう。先ほどの教員の、受かりやすい、っていうものも、大学もその結果が全てで、それが次の入学者につながるっていう。教育っていうものじゃなく…そういう社会になってるのかなって」

Ｏさん「○○大学だったら、卒業してから一年間も連絡がすごかったんですよ」

Ｂさん「あ、そうなんですか？」

Ｏさん「僕とか、内定もらってたところがあったのにフリーターをしたんですけど。言うのも面倒くさいし、何で言わないといけないんだろうと思って黙ってたんですけど、ずーっと電話がかかってきてて。で、実家にも電話がかかってきてるよ、っていう話になって。大学に、それこそ何か、すごく変な営業会社みたいなところがあって。学校の売り方っていうのもやっぱり、就職率がいいですよっていう言い方は説明会でもしてる。この前、大学院の説明会でしゃべるように言われて行った時も、どういう就職を考えてるかとか、研究科で何ができそうかっていうのも言ってほしいって言われて。でもそもそも大学院の説明会は、大学院の事を知りたいと思って来てる子たちよりも、就職で迷ってる子、ダメだった子も来るから、そういう子も大丈夫っていう感じで言って、って言われて。いや、フリーターでしたって言いますけどいいですか、って。で、言ったんですね。その辺がちょっと迷わせてるところが実際あるなっていうのはすごくあります」

川畑「うちの大学なんか、とにかく満足度100％の大学です、っていうのをね、新聞に大広告出してね」

塾長「見た見た」

川畑「ああいうところでイコール就職率100％みたいな。上がバーッと号令かけて。それでもうカリキュラムも含めてトップダウンです。学部には、いろんな学生がいるから、それはおかしいって言うんだけど、そんなの全然相手にしてもらえませんね。それはどこをとってもそうやと思いますよ。特に私立大学では」

Ｄさん「でも先生。その仕事をやってる時に、大学の事務の方々ともお話をしたんですけども。やっぱり、大学の方に定員ありますよね。定員割れを起こさないようにしようって思ったら、最後のところはやっぱり就職率を言われるって」

川畑「親御さんも、やっぱり就職率のいい大学に

息子、娘を入れようっていうのはかなりあるから」

Dさん「それはものすごく言ってます。だから就職してるかどうかの確認メールとか、そんなのが入るっていうのは、そういうことなのかなと」

ここでは、学生たちの親、そして学校側の視点が議論に上がってきます。親はやはり 40 年先を見ていろいろと言ってくるようです。しかし、親が想定している 40 年後は、ほとんど幻想に過ぎなくなっているのかもしれません。それでも親はその幻想を信じ、子どもにいろいろと口を出すのです。

それに対して学校も、学生たちの就労について口出しをしてきます。その理由は、就労実績が学校の人気に直結するからです。従ってBさんの話にあったように、学生たちの就労を支援するようなプログラムが次から次へと用意されていくのです。

Fさん「最後に一つだけ。40 年っていう話で。ある民間の人と飲んだ時にね、今のような話が出たんですよ。40 年後この会社どうなってるやろう、とか。その時に飲んでた人が、「こいつら、40 年後でもこの会社をわしが背負ってるっていう気概がない」っていうのは常に言ってましたね。「他から 40 年間続けてもらって、私は乗っかってる。それはあかんやろう」と。そういうことをずいぶん言ってましたね。要するに、例え他がだめになっても、自分が背負ってるんやと。40 年経っても、俺がこの企業を背負ってると。それくらいの気概が、実はわしは欲しいんや、と。皆大丈夫ですかね？って言うんじゃなくて、お前この会社の社員と違うんか。お前誰なんや、というような。そんな感じ。誰かがまとめてくれてて、それに乗ってるだけ。それではうちの会社はだめやって言って。その頃にはわしはいないけどな、って言ってが一っと飲んでましたけどね。40 年を見る時には、ほんまに自分がその時に背負って、絶対大丈夫やって言えるくらいの気概が欲しい、っていうことは言ってましたね。少なくとも、わしはそのつもりで今までやってきた、って言ってました。人が守ってくれるのと違う。俺が守るんやと」

川畑「そういう意味で言えばほら、誰もが知ってる会社じゃなくて…って言ってたけど。でも誰もが知ってる有名どころに入る気分と、知らんところに入る気分とは当然違うわけやん。で、違う中にもね、今おっしゃったような…僕が誰でも知ってる会社にするんだ、みたいなところが刺激されることはあるわね」

Cさん「そうですね。今聞いてて頑張りたいなって思いましたね。ただ、僕の会社はわりと誰でも知ってます。でも、自分はそこから抜け出せなかったです。やりたいことできる会社って思ってても、やりたいことができる誰でも知ってる会社…からは抜けきれなかったです」

川畑「うん、そういう意味では、誰にも知られてない会社って言うのは神様からのプレゼントかもしれない」

Bさん「面接で社長に、あなたが歯車になってください、って言われたんです。うちの会社の歯車になってくださいと。それ言われた時に、ああ頑張ろうってすごい思えたので、そういうことなのかな、と少し思います」

塾長「…3 人の方、ありがとうございました。F先生の最後のお話の中から…主体の喪失って、

けっこうキーワードになってる気もするんで。自分自身がだんだんわからなくなっていったりとか。ただ3人の話を聞いてると、この就活っていうのは、自分を見つめる機会に結構なってることは間違いないような気がする。こんなのでもなかったら、大学時代はあっという間に終わってしまうような。だからそういう意味合いっていうのはすごくあるのかなと。ただ、いろいろお話を聞いてて、大学も含めてやっぱり商業モードで動いてるので。ここにちょっと持ってきたのは、『僕は君たちに武器を配りたい』っていう、要するに、学生があまりにも丸腰になってしまっていて、就活を応援するようなビジネスって今いっぱいある。もうその餌食になってる。また、大学の餌食にもなってると。企業も、言ったら、もう辞める人間は想定して採る。こういう仕事はそいつらに任したらいいと。その餌食になってると。今の学生があまりに丸腰なんで、それで武器を配りたいっていう過激なタイトルなんやけど、結構面白いなっていう風に思ったり。だから、何か今の社会の渦の中で、学生たちもあっぷあっぷしながら。でも片一方で、その中で自分とは何だとか、友達同士でいろんな議論が実は就活を巡って行われてたりとか。私たちの時は怪しい喫茶店とか結構あって。夜な夜なそんなところでいろいろ哲学を語ったり、そういう文化があった。それが就活になってるのかな、とか。まあそんなことをまた材料にしながら後半お話をしたいと思います」

前半のセッションを私は、「主体」の問題で締めくくろうとしていました。ジャン・ボードリアールは消費社会における主体喪失の問題を訴えました。消費化が進んだ社会では、消費者は自分の意志で商品を買っているように見えて、実は買わされてしまっている。そこでは消費者の主体があいまいになっていく、といった様をボードリヤールは指摘するのです。これを就活という場面で考えてみると、大量の情報の渦の中で、企業の意図、大学の意図、あるいは親の意図の狭間で揺れながら、学生たちの主体が次第にそぎ落とされていくように感じるのです。5年先が見えない時代において、主体が喪失されていくという状況が果たして何をもたらすのか？そこには社会そのものの脆弱化が見えてくるような気がするのです。

川畑「では、後半に入りたいと思います。Pさん、どうでしたか、お話を聞いて。年齢の近いこともあるし、触発されて何か言いたいこともあるでしょうし」

Pさん「僕、今は○○大学に行ってるんですけど、前は○○大学で…まあ就職率で言えばあんまりよろしくないところに行ってたんですけど。言われたことは、今から半年あるんだから、ボランティアに行ってネタを作れと。そういうのでボランティアに行った人が僕の周りでもすごいいたんですね」

川畑「ボランティアと違うやん、それね」

Pさん「ネタ作りのために。それがだんだん下の回生にも波及していって。1回生のうちからネタを念頭に置いたうえで活動するっていうのも今あるみたいです」

Oさん「そうですね。学生の3人の話を聞いて、皆さん共通してたのは「他者」っていうコトバが出てくる。周りの人たちっていうのが出てきたり、ほかの人っていう目が出てくる。その他者っていうのが何を思って言ってる

んだろうな。家族も、先が心配っていう思いはわかるけれども、やっぱり最後には社会的な背景とかもあるのかなっていう。3 人ともみんな違う話ではあったけれども、構造的に見るんじゃなくて、個人として見たら、悩んでるっていいなって僕は思ったんですよ。決まらない決まらないっていうのがある中で、決まることがゴールじゃないと思うんですよ。決まらない、とか内定を蹴ったっていう決断自体もすごく大きな決断だと思うし。先の心配をする必要はないんだぞっていう声もあるかもしれないけど、やっぱり内定を蹴ったっていう思いもすごく大事な一つの決断なのかな、ってすごく思いました。その中で、やりたいっていう思いがあって、周りとはちょっと違っても決めたっていう話においては、入った後、やりたいって思ってたこととちょっと違うなっていうことがあっても何とかやっていって、何とかやってる自分を認めてもらえるような社会があったらいいなって思うし。若い世代も、それを意識して皆で何とかしていくっていうのを…すごくその機能が落ちてきてると思うんで、そこが強く作っていけたらいいのかなっていうのは思いました。で、一番違うパターンで決まってるっていう話では、そうやって別枠で動いてる社会もあるんだなと思うし、やっぱりそういった会社がどうやって残っていくのか。何を大事にしてそういう就職活動の仕方を残していってるのかっていうのは、僕の中ではすごく関心がありました。もう一つは、エントリーシートをボタン一つで押したら何とかなるっていう話においては、ボタン一つでダメだ、僕っていう人間がわかるのか、っていうことは、案外僕らは受験でも経験してるはずなんですよ。顔を知らないで、紙切れ一枚で落ちる、受かる、っていう経験は就職で始まった事じゃなくって、実際学生のうちに、多い人だと 3 回くらいは経験してるんですよ。でも実際大人になってくると、なぜか就職っていうのがゴールになってしまう。で、僕はフリーターっていう選択を採ったからこそ見えるのが、何とか食っていこうっていう方法はいくらでもあるし、一回就職しようって思ったら、その切り口は昔よりすごく便利なんですよ。インターネットで調べればどれだけでも出てくるし、募集してますよっていう会社もすごくたくさんあって。なんならハローワークに行けば山ほど仕事があったりとか。その辺を考えると、本当に大学生がなんでこんなに焦らされたりとか、勉強したいって思って入ってないにしても、きっかけはたくさんあるのに勉強しなくて済む環境があったりとか。やっぱり大学っていう所に入ってしまうと、今しなきゃいけないことがすごくぼんやりしていて、しなきゃいけないこととしたいことっていうのが混在している中で、期限が来たらやらなきゃ焦ってしまう。となると、本来の 2〜3 年間の大学生活の意味って何だったんだろう、って思うと、気持ちの中で空中分解しやすくなるのかな、って感じさせられました。僕も M2 なので、博士課程まで行くのか就職するのか、どうするんだ、っていう問いは自分の中にもあるんです。なんだかんだ言っても年齢が年齢まで来てますから、幅も狭まってる歳だと思うんですよ。大学生活すると。そうすると、今やらなきゃいけないことが選べなくなるんですよね。だからある意味ラッキーで、その中から迷わなくても、今自分にできることをコツコツやっていって、それが何か自分のやりたい、やれる、っていうこととやりたいって

いうことが自分の中で分かっていく過程が、今一つ一つ積み重ねていく中で見えてくるのかな、と思って模索はしてるんですけど。すごくいい話を聞かせていただいたな、と思いました。長々と失礼しました。以上です」

塾長「私、今の話を聞いてて非常になるほどな、と思いました。3 人の話の中で、結構不安に支配されてる、っていう側面がある。私たちよく言うんやけど、不安で子育てすると厄介なことになったりする。不安の対極にあるのは希望かもしれないし、夢かもしれない。さっき夢って出てきたけど。だからそれが葛藤状態にあって。でもその不安って結構得体がしれないから、それに支配され、苛まれていく。だから一旦そういうものを吹っ切ったら、実は全然違う世界が見えてくるのかなって思ったりする。その不安を作り出してるのは例えば今の社会なのかもしれないし、学校なのかもしれないし、皆の動き方なのかもしれない。そういうものを通過してみると何か見えてくるのかもしれないなと。それともう一つ、わりとつい最近まで私自身が大学院に行ってまして、学部の時もそうでしたけど大学院に行った時にも先生との出会いって大きかったように思います。大学ってやっぱり出会いやなと。この人やと思える人に出会えるかどうか。だから就活っていうのも、出会えるかどうかみたいな。そういう出会いっていうものがすごく大事な気がしてて。でも出会うためには、結構自分自身のことについてもいろんなことを考えてないと、出会えない。なんかすれ違ってるだけとかになってしまう。だから出会いなんやろなと思う。結婚とかも出会いなんやろうなと思ったりするんやけど。いろんなことが出会い。ビジネスでも、この人と何か一緒にやれる、とか。それもひょっとしたら出会いかもわからへんし。子どもの支援とかでも、この時にこういう人がまさにいてくれることで何らかのケースが大きく動く事っていっぱいありますよね。出会うことになってるんだ、とか、後になってなるほどなって気付く事とかって結構あるような気がしてて。何かそういうファクターが、今の就活っていうものからなくなっているように…」

川畑「余裕がなくなってる、みたいなね」

塾長「そうそう。何そんなこと言ってるの、みたいな話になるのかもわからんけど。そんな気もするんですよね、今の話を聞いてると。だからいろいろ不安に苛まれてる状況も、そういうものが取り除かれると案外ふっと見えてくる。でもそれに支配されてるとそれが全然見えない。あともう一つ思ったのが、自分の子どもが予備校に行ってた。予備校も独特の文化の中で。予備校の〇〇大クラスとかに入ってる人間って、だいたい有名私大とかを蹴って入ってる人間やから、こんなところ、どうしようもない大学や、みたいな。ものすごく歪な形の視野っていうのが確実にあるなって。その、受験生から見えてる大学の世界と、大学に入った人間から見えてる大学の世界っていうのは随分違う気がしてて。それは企業も同じで。就活の渦中にいる人が見るのと…会社の管理職だったら、新入社員どうするんやと。この人はいけるな、どうかな、っていう視点は随分違うなと。そこら辺のズレみたいなのも、ものすごくあるような気がする。そんなことをどんどん思いましたね」

Dさん「あの…今の人事担当者とかね。違うなっていうのはその通りやと思うんですよ。だって人材っていうのは、企業にとって会社動かしていくために重要なファクターですね。シ

ステムがあっても人がいないと動かないので。人を育てるっていう…さっき 400 万っていうお話も出てましたけど、企業にとって人に投資するっていうのは非常に大きな買い物です。それと、一生懸命企業が採用活動するっていうのは、企業が何とか永続的にやっていくために人を採用してるわけなので。そこの部分、採用する側の視点と受ける側の視点っていうのは、やっぱりズレがある。どうしてもそれはズレざるを得ないと思う。必然だと思います。だからミスマッチも起こるし。で、違うって言って辞めていく人たちも出るし。私のやりたいことはこれじゃないって辞めていく人たちもいるし。っていう風に、私は思ってます」

Mさん「大企業の方が離職は多いんですよね？」

Dさん「多いです」

Mさん「やはり、自分がこれやりたいと思ってもいろんな仕事があるからどこに回されるか分からないし、たまたまいい上司と巡り合ってもたくさんの人の人事異動は仕様がないですから」

Dさん「おっしゃる通りですよね。人事異動があったら転職してるような世界です。今までの仕事と全然違うことを次の年はやったりとか。でもそれを経験することによって自分自身が成長できるっていう風に感じられたら、自分自身の達成感もあるし。育てられてるっていう意識を持つとそこのところは全然違うので。そういう感覚が持てるかどうかっていうのが、入ってからの世界では大きいかなと。さっきおっしゃってたように、正社員の世界。だから私が今の立場になって考えてるのは、やらされてる感じで仕事をしてほしくないなと。自ら前向きにやりがいを感じてもらうにはどうしたらいいのかな、っていうことを今の立場になって考えてる。そういう立場なので、今就活の中でいろいろと自分自身を振り返った事の中から何を見つけていくか、っていうのが一方であるんじゃないかなあと。自分自身やりたいものだとか目的意識だとか、自分がこうありたいという将来像とか。そういうのをその中で見つけていくのかなという気がする」

「不安に支配された就活」、「出会い」、そして「エントリーする側と雇用する側との視点の違い」。これらのコトバが、ここでのキーワードなのかもしれません。

人間は不安に支配されてしまうと、自己保身が機能しはじめ、何事も既存のフレームの中でしか考えなくなってしまいます。そうなると新しい出会いが生まれなくなり、新しい可能性を手に入れにくくなります。すると再び不安が高くなり、自己保身に回る、というループに陥っていくように思うのです。そして結果的にこのことが、エントリーする側である学生たちと、雇用する側である企業側との視点の違いを生じさせ、新たな就活の困難を生んでしまうように思うのです。多くの大学生たちが、不安に支配される形で就活を行うことのリスクはこんなところにあるのではないでしょうか。

川畑「就活、キャリアについてっていうこともあるし。その事を通して何かを見つけ出すっていうこともあるわけですけど。後の方いかがですか」

Aさん「そうですね、Oさんの 5 年間についてもっと詳しく聞きたいですね。僕にはその選択肢はなかったんで」

Oさん「どこから話したらいい…」

Aさん「僕は、Oさんが、5年間フリーターやったという経緯…というか、なぜ…」

Bさん「スタートのところ、その中でどういう経験をしてどういうことを考えて…みたいな」

Oさん「元々は、皆と同じようにこうしたいなって思う事があって。でも就活する時期が来たな、皆も動き始めたな、説明会が始まったな、と。で、何をしたかったかっていうと、今大学院に行ってるように、研究がしたいってすごく思ってて。でも実際大学がすごい楽しかったかって言われると、大学での勉強が楽しかったとは言い切れない。授業も行ってない、授業の履修は同じ専攻の人のを真似して書けば、福祉専攻だったから、全部それで単位が埋まってしまうようにセットされてる。一般教養もそんな感じ。AO入試で入ってるから、元々そこの、産業社会学部の人間福祉学科に関心があって入ってるけれども、中を見ると、資格を取るための授業しかない。それで全部が埋まってしまう。で、あんまり面白いと自分で思ってないし、元々学校の教室に入るっていうのが全然好きなタイプじゃなかったから、大教室になればなるほど、ここで何を聞いて、それを感じたものをどう出したらいいんだろうっていうのを思いながら、授業もあんまり行かなくてもよさそうやし、まあいいかって思って。まあまあ皆に授業の事を教えてもらって。学校の外で皆を待つっていうことを繰り返してました。で、意外と、もしかしたら大学にこだわってるから面白くないのかもしれないぞ、と思い始めて、大学の時からバイトばっかりし始めて。その時に訪問販売の営業のバイトをしてて。もう8時間ガッツリ入る。それでだんだん認めてもらえるようになってきて。それで出張があるから行くかって言われてついていって。やっていったら楽しいし、座学だけの学びじゃないところがたくさんあるんじゃないのかな。大学で知ってることだけじゃ、社会で上手くいくわけじゃないかもしれないし。で、就職も決まったけれども、じゃあ研究したいっていう所もあるのに、お金貯まったら辞めますけどお願いします、って言って入るのも何かおかしいな、っていう自分の中の葛藤があって。そしたらお金を稼ぐっていうのと働くっていうのは一緒のようで違うかもしれないなと。正社員で働くのとアルバイトとどう違うんだろうと。辞めるって決まってるんだったら、じゃあフリーターしてみようかな、ということで内定を断って、フリーターを選択する。ちょうどその時に知ってる人が東京にいて、せっかく「フリー」って付いてる「フリーター」っていうんだったら、京都にいなくてもいい。じゃあ地元は福岡だけれども、敢えて東京に、っていうので。求人誌がインターネットで見られるから、時給がいいじゃないかっていうので東京に行って。友達の家で一緒に住みながら生活していくので、まずラーメン屋のバイトを始めて。それが2年間ちょっとかな。ラーメン屋をしていく中でも皆で一緒に何かをやり遂げていく。チームプレーがすごい大事な…忙しい時間になると、誰かが欠けたら絶対に誰かが補わなきゃいけないし、効率化も目指さなきゃいけないけど効率化を目指したらお客さんの満足度が下がって、お客さん減ったりした時期があって。じゃあそれどうするってなった時に、後輩が入ってきたら新人研修からバイトで考えなきゃいけないよね、社員は何もしないから。ってすると、じゃあ本当に就職した時に、社員ってボーナスもらってるのに働かない、何

だこれ、みたいな。飲食店とか明確に出やすくて。経理をしなきゃいけないとかなんだとなると、絶対現場を見るのはバイトだったりする。そういう声を上げてみたりしながら、働く面白さっていうのは正社員じゃなくても味わえるのは、地道に今一つ一つ起こったことに対して何とかしていったりとか、自分のできることを身につけていくことが大事なのかなって思い始め。でもそれから、手首を怪我したっていうのがあって、ラーメン屋を辞めて、今度はテレアポの仕事を始めて。インターネットの光回線の電話、よく来ませんか？鬱陶しいやつですよ。僕嫌いなんですけど、敢て嫌いなところに行ったんです。そしたら意外とそこでは社員研修と一緒で、本当に会社の概要から商材の説明まできっちり一週間まずやって、次の１ヶ月間で研修をやって、ずっとバイトだけど社員と同じように研修がある。いざ電話をします。どんどん切られてダメージ来て、自分って何でこんな仕事してるんだろうって思うけど、そこで辞めたら自分の選択を諦めたっていう風になるのは悔しいから、まずは自分で一件受注しようと思って。取り始めたらそれがコンスタントにいってしまって。それが皆がまたいろいろアドバイスしてくれたり、そんなに頑張るんだったらトップアポインターを横に置くからその人から盗んで覚えていけ、っていう風に環境が整い始めて、結局取れるようになったんですよね。そうすると、バイトじゃもったいないなって思うけど、そこの業界はバイトも社員も給料のボーナスの設定が違って、バイトでもトップアポインターとかになると 50 万くらいもらえたりする。社員ってじゃあ、お金とか給料の設定でもないんだったら何なんやろうって思いながら。まあお金も貯まったし大学院の受験でもしよう、っていう所まで来てたところで、今度大学の時のゼミの先生との再会があって。NPO の契約社員が滋賀であるから来ないかって言ってもらって、NPO に入って。それが子どもの虐待防止の教材、学習資材の作成を小学校の低学年生用と中学生用を作るっていうのがあって。9 ヶ月で。それ滋賀県からの委託事業だったんですけど。その中でそれを作り上げてちょうど大学院も受かったんで契約も終わって、っていうような流れです。だいぶ長いんですけど」

Ｑさん「ちょっといいですか？それにすごく共感してしまうんやけど。僕最近仕事してて ね、すごくひっかかってるのが規範っていうコトバなんですね。ルールっていう意味ですけどね。それに僕ら縛られるし、翻弄される。っていうことかなと。今で言うと規範への挑戦なのかなっていう感じなんやけど。僕もフリーターやったんですよ。大学卒業したら 2 年フリーターをして。Ｄさんと違って、僕の場合は、最初から公務員目指したわけじゃなくて。皆から総スカンを食らわせられそうやけど、たまたま公務員になったんですね。ここまでよくやってきたなと思いますけれど、たまたまいるだけで。ひょっとしたらまたここから抜ける可能性もある。だから 40 年どころか来年、再来年の事も考えちゃいない、っていう感じなんやけども…。もっとほかにバイトしてるでしょ？してないですか」

Ｏさん「ラーメン屋は 2 回、テレアポの場所が 2 回変わってます。あと大学の時のバイトは居酒屋とかはあります」

Ｑさん「僕は着ぐるみかぶったりとか」

Ｏさん「それ NPO でしました、僕」

Ｑさん「そうそう。着ぐるみの場合は、15 分やっ

て15分休憩しなさいと言われるんだけども、あえてどこまで挑戦できるかやってみたりとか。いろんなことをするわけですよ。派遣とかでもいろんなことやってて。○○の社員に成りすましてくださいとか言われるんですよ。成りすまして、お中元の見本を並べる仕事、5分で終わるんだけど、それで8千円とか。ただしそれには条件があって、社員に見えないといけないという妙な条件があって。何でかわからないけど、「これはQ君にしかできない」って言われるわけですよ。とりあえず行って3件こなしたら一日で2万4千円。とか、いろいろやってる中で、自分でもよく分からないようになってきてますね。大学の時に就活を皆がやってる中で、自分が一般で働いてる姿がどうしてもイメージできなくて。今から考えると営業とか向いてるかもしれないとか思うんやけど、それは今だから思うことであって。昔はそう思えなかったんですね。だから皆が就活してる時に、就職説明会に一日だけ行ったんですよ。就職活動はこうするんですよ、って。もうそこで僕外れちゃって。完全にやる気なくしちゃって。で、フリーターやろうと。フリーターのフリーはっていう話出たじゃないですか。僕の場合はフリーターって自由に働くものやと思ってたから、休みなしでがっちり働いてやろうと思って、週一回も休みなしでバイト3つ4つかけもちして。そしたら手取りの給料今より良かったりして。でもそのうち何か気づき始めて。このまま続くはずがないと思い始めて。で、元々自分が臨床心理士目指してたな、っていう事を思い出して。ちょっとでも臨床心理士ではないな、と思いだして、精神保健福祉士っていうことで専門学校に入って資格取って「たまたま」京都府に入ったんです。だって、京都府の応募を2週間前に知ったんですね。募集締め切りの前日に先生に教えてもらった。「Q君、京都府募集してるで」と。いつまでですかって言ったら、明日締切って言われて。明日締切って、今から間に合うの、みたいな感じで。とりあえず卒業証明書も手元にあるはずもないし、明日取りに行ってその足で行こうか、みたいな。そこから皆が専門学校とかで公務員試験の勉強とかしてきてるわけじゃないですか。僕公務員試験の勉強って何、とか思ってたから、とりあえず本屋さんに行って過去問やってみようと思ったら、めっちゃ並んでることにその時初めて気が付いて。これは買う意味もないと思って、買わなかった。もういいや、試験まで2週間遊び倒してやれ、と思って。そこで当日全然分からない中で、とりあえず選択式だったから、真ん中に丸付けとけばいいや、みたいな流れでまかり通った、というところが。まあこんな裏話ですけど。そんな自分の短い人生ですけど、思い返してみるとそんなことがあったなと。さっきの塾長先生の話であったように、人との出会いって大事っていうのはすごく思うんですね。大学の頃に、僕塾を始めて。大学生で塾の経営者っていうのをやってたんですけど、その当時理解ある塾長がいて、まず僕が塾講師として入って。で、Q君に任すわ、といってその人は違う事をするからって言って去っていって。何をされるのかな、と思ってたらヨット販売とか始めはって。何やこの人、とか思いながら。それももう10年以上経って久々に再開して飲んだりとか。そういうこともあったり。だから、僕は昔思ってたんです。自分が目指してた人って、自分が話してて面白い人になりたいと。だから学校の先生とかでも、しゃべっ

てて面白い先生と面白くない先生がいる。僕がもしなるなら、面白い先生になろうと。だから今も、相談していて面白いと思われる相談員になろうと。で、さっきのAさんの話かな。で、大多数の人がAさんみたいな感じなんかな、と。僕の今の相談も聞きながらね。普段ひきこもりの相談を受けてるんですけど。何て言うかな、漠然と、したい事とか将来の事っていうのは何となくあるんだけれど、さっきの、規範に翻弄されて、みたいな。社会のレールっていうのが何となく敷かれてる。みたいなところで、皆や家族からも、それで大丈夫なのとか、それっていけるのか、って言われるのが見えてるから相談しないでしょ。大多数がここでどういう風にやっていくのかっていうのが、すごく自分の中でも引っかかってて。どう言ってあげればいいんだろうと。Aさんにではなくて。今相談を受けてる人たちの顔を思い浮かべながら考えてるんだけども。そこの壁ってすごい厚い気がするんですね。だから僕は、ラウンドテーブルが高校生くらいの頃にあれば来てますね。だって、さっきの二人がすごくよかったのは、あの5年間はどうだったんですかってパッと聞いた時ね。あの姿勢が一番大事やと思う。そしてこの後飲みに行ったりでもすりゃいいんじゃないでしょうかっていう風に、僕は生きてきました」

現在大学院に所属しているOさん。そして府の職員として仕事をしているQさん。彼らは、予定調和の中でキャリアを構築してきたわけではないようです。たまたま通りすがったような出会いの中で、新たな道がつながり自分たちの未来を拓いていく。そういったキャリア形成のあり方でした。

そのため、まだ内定が確定していなかったA君にとっては、それはとても新鮮な生き方として映ったのでしょう。

川畑「いや、OさんもQさんもね、そういう考えでその時期を過ごしてきたわけやけど。それを支える、ある意味での楽観主義みたいなね。今のうちに 40 年間埋めておかないと不安であるとか、将来どうなるか分からんみたいなね。そういう不安が一般的にはあるにもかかわらず、そういうある意味での楽観主義を支えてるものって何ですか？」

Nさん「Oさんっておいくつなんですか？」

Oさん「30 です」

Nさん「30 歳…、AさんやBさんは…21 歳。この5、6 年の差って大きいんですかね？社会が変わってるのかな、経済の状態とか。かな」

川畑「社会の状況も変わるし、社会の言ってることもだいぶ変わってきてるから」

Nさん「急激に変わったっていうのは、あるんですかね？」

Oさん「リーマンショックがある手前と、もろに後っていう感じですかね」

Mさん「失われた 20 年の間にも、一時ミニバブルがあって、リーマンがあって。リーマンで内定取り消しとか年越し派遣村とか…」

塾長「そうそう」

Mさん「その後の学生さんってものすごく保守的…、不安感から。親御さんも。今まで皆が否定してた考え方、終身雇用とか、会社の家族主義みたいな。社内旅行とか運動会とか、またすごく評価されてますよね。だからすごい不安感が、あれから後は強くなってる」

Dさん「学生さんが海外に行かなくなって内向きになったって言われるのと、軌を一にしてませんか。留学とかあんまりしなくなったって

いう」

Mさん「あれは就活とも関係がありますよね。もう2年から就活始まってたから留学して…」

Dさん「してる間がないんですかね」

Mさん「だから、1回生の時に2回生の分の単位取っちゃって、2回生の前期に行くとかそういう態勢で行かなきゃいけない」

川畑「何かちょっとこじんまりして、一つ一つ固めていかないといけないと思わされるような状況なんですかね」

Oさん「どっかの大学で、キャリアの授業があって。学部とかもできてないですか？」

川畑「ありますよ。それも業者入れて」

Mさん「私もキャリアコンサルタントにいろんな大学から来ませんかみたいな。心理学の大学のキャリアの方から。でも本当に意味でのキャリアは、もっと子どもの時からしっかり考える…、就職だけじゃなくって。自分の家族とか地域とか、いろんなものをまとめてキャリアって考える。キャリアが悪いわけじゃないかなって」

Qさん「さっきの…楽観的な根拠。僕今年35なんですけど、僕らくらいの頃から、もう終身雇用とか言われなくなってました。もうそんな風潮じゃないって言われてたんで、じゃあどうなるかわからないやっていうのが結構あったような気がしますね、一部で。まあ大多数ではやっぱり社会のレールがっていう風にあったんですけど。でも僕の友達とかは変わった人が多かったんですね。大学の時も。一番仲の良かったやつは、俺は劇団をやるんだと。二人で、「そうか、お互いに一般じゃないなって」言い合ったり、卒論も一週間前から書き始めたり。そういうことをよくやってましたし。その彼は結局ずっと、未だに劇団の座長として…食えてないですけど、バイトしながらだけれど、その道を追い続けてたりはしますけども。まあそのあたりの時代的な背景もあったんですかね」

Oさん「僕は多分逆ですね。わりと周りがレールにしっかり乗ってる人たちと仲いいんですよ。その人達から見て、僕が就職とか向いてないんじゃない、会社でやれそうなタイプじゃないよね、っていう話になって。そうだそうだ、みたな。だから困ってるけど決まってない、みたいな。で、無理しなくてもいいのか、って周りを逆に見て、こっちにやっぱりできそうにないな。っていうのがあったんで、未だにフリーターとか学生続けてると、その子たちが心配するっていう」

Aさん「ご両親とは、話されたりしたんですか？」

Oさん「まあ、言ってるかな。親は「そんなにもう焦らなくても別にいいんじゃないって。まあそんなに適当に今までやってきたわけじゃないから、崩れることはないよね」っていうような感じですかね。その支えは大きいですね」

Aさん「なんかすごく魅力的やと思うんですよ。僕なんか、フリーターっていう選択肢、普通の大学生からしたら見えない選択肢やったんで。その道を自分で選んで行ったっていうのが魅力的に感じて。今の経験とかすごい聞いてたんですけど、そこに対するストッパーってやっぱりあるんですよ。ストップをかけるものが。世間体とかもあるし。今まで自分が仲良くしてきた友達とかも、相手が思ってなくても、自分が見下されてるような気分になっていくんじゃないかな、って。そんな感じもあって。そういうところって、どうなのかなと思って」

Oさん「それは、大学の時はそこまで感じなかったっていうのが一つ。ただ感じ始めたのが、

25～26だったかな。ちょうど皆が仕事をし始めて出世をしていく時期に差し掛かる時。周りはそうやってそこの職場で自分のポジションが上がるっていうのに、自分にはないっていうのを、仕事の話とかを聞いてて思ってるけれども、逆にその大学の時の友達が、Oさんは別枠の人って見てくれてた分、その別枠の意見を求めてくれたっていうのは、すごい大きくて。あんまり聞くと、自分の中で自分に持ってないものを言われてるし、それを持ってないと、この社会で生きていくの大変だろうなって思いつつ、悩み相談を聞いたりしてると、どうにもやりきれない思いっていうのは確かに。でもこうなった以上、もうやっていくしかない。今すぐ就職活動って言っても、また同じになるし。今じゃあ自分ができることを考えてやっていくしかないのかなって、一人の時は思ってた」

Qさん「ちょっと話が一瞬だけ大きくなりますけど、幸せってなんだろう？っていうことなのかなって思うんです。終身雇用でいい会社に入れて、どんどんキャリア積んでいけて、いい家庭築けてっていうのが果たして本人にとって幸せなのかなっていう、そこなのかなと。だから多分、Oさんは迷いながらも、今面白いんと違う？」

Oさん「うん」

Qさん「ということが、言えるのかどうかかなと。僕も今はそういう状況。今やってることに興味あるし、楽しいなと思えてるから。だから今ここにいるんやけれど。それが外れたらどうなるかわからないよっていう。ただ多分、どうにでもして食っていけるみたいな、根拠のない自信がある」

Oさん「そうですね、あります」

Qさん「そこはなんか、共通する部分がある。何をやってでも。だから仕事はある、一応ある。あふれてるはず。選ばなければ…」

ポストモダンと呼ばれる先が読めない時代。今まで正解と呼ばれていたものが、正解であるとは言い切れなくなっていく時代。これまで機能していた社会的なシステム（例えば終身雇用制）が機能しなくなる可能性を引き受けなければならない時代。そんな時代の中を若者たちはどう生きていくのでしょう。それでもまだマジョリティたちは、「これが正解だろう」とされている風潮や、標準化されつつある行動様式の中に巻き込まれていくのです。そこには疑問も存在するのかもしれませんが、それ以上に不安が大きく、そうせざるを得ない状況へと追い込まれていきます。

しかしその一方で、そんなマジョリティの風潮に流されない人たちがいるのです。それがOさんやQさんであったのかもしれません。学生たちの就活を横目で見ながら、彼らは彼らなりの道をたどって、それぞれのキャリアを形成していこうとするのです。

Cさん「なんか、塾長の小さな幸せの話…どうですか？　私、今すごく思ったんですけど」

塾長「ああ、たまたまさっきの証券会社で、僕はある人に会った。この人は〇〇証券なんやけど、リーマンショックのあたりで転職をしていく。その人は、結構いい大学を出ていて、それで社会経済学っていう領域を学んでいたこともあっててがあって、〇〇証券に入ったわけです。当時の証券会社ってかなり給料も良いって言ってました。それで、彼の最初に赴任地は松江だったんですね。当時、証券

会社って投資信託の新しい商品をどんどん量産していたんです。そしてそれを売って、って大きな利益を上げていた。でもやっぱり結構厳しいノルマがあったわけです。その中にはお客にとってメリットのない商品もいっぱいあって。それも売らないといけない。松江は若い人いない、年寄りが多く住んでいた地域なので、証券会社はその資産を管理しているわけ。でもその資産が、だんだん目減りしていくことになっていく。証券マンならそれも想定内の範囲なんだけど、ノルマのために黙認されていくそうなんです。そのうちだんだん社内のいい人たちが辞めていって、ということもあって。それでその後、彼自身もその狭間で葛藤を繰り返しながら、最終的にどこかで彼も辞めるっていう選択をするわけ。もうこれ以上いると、自分の人格が壊れるかもわからんって言ってました。それで、多分リーマンショック以降、証券会社も銀行もいろんなことを反省していくことになったそうですね。彼はその後、職をいろいろしながら、今は保険の営業の仕事をしている。給料も歩合給じゃないのであまりよくないそうですが今は、それなりの満足があると言います。彼には娘さん一人と奥さんがいてて、彼が何を言うのかというと、「僕は小さい幸せがあればいい」と。「今の仕事はお客さんにありがとうって言ってもらえる。それが幸せの実感なんだと」と。私たちの時代は、社会の大きい物語の上に乗っかれば、個人の小さな物語もある程度満たされた。充足できてた可能性もある。だけど今は、そうとも限らない。大きい物語の上に乗っかれば、小さい物語が例えば壊れてしまったりとか。でもそれも、そこの仕事をしたら皆壊れるのかといえば、そうじゃないかもしれない。そこでやっぱり小さい物語っていうのを作る力がいるのかもしれない。フリーターの話を聞いてたら、面白い。そこには、目に浮かぶような光景があるので、面白いわけですよ。それを面白いと思いながら多分彼は生きてると思う。でも皆が皆、そういうわけでもないような気もする。そうすると、個人の中にちゃんと個人の物語を築ける力っていうのがいるような気がしてて。さっき言ったように、大きな組織の中で、自分はこうやりたいんやけどそれをするな、これやれみたいなことが、どんな業種でも多かれ少なかれ当然ある。でもそういう中でも、何か物語を描ける人もいてて。全く物語を描けず苦しみ続ける人もいてて。あるいは、物語を作るなんていうことはどうでもいい、適当にやっておけって思う人もいるかもしれへんし。そういうところの話やね？」

Cさん「はい。なんか思い出しました」

川畑「それが小さな幸せ、イコール小さな物語？」

塾長「そうそう」

Dさん「その小さな幸せっていうわけじゃないけど、金を稼がないと生活やっていけへんから働いていくわけですけど。働く事って、結構私の今までの社会人人生の中でも、辛い事が半分くらいあるんですよね。ひどい話やけど、私の入った頃はコンピュータなかったから、膨大な資料を電卓叩きながら、徹夜しながら一枚のシートにまとめないといけなかった時代もあった。その時に、こんなつらいのやりたくないな、と。投げ出したいなと思う事もあるんやけど、そこはやっぱり使命感ですよね。これをやり切らないと動いていかへんっていう事と、その中でそれをやり切ったっていう達成感。これをやり切ったって思ってたら次また山のように仕事が来るんやけど、

今の仕事はね、いろいろと言われますけど、中身が面白いので。面白いっていう言い方は語弊があるかもしれんけど、やってやりがいがあるので。やってて非常に自分で満足できる部分が大きくあるっていうのがあって。そういう自分なりの楽しみをどうやって見つけるかみたいな。小さいところからでも。だからここまで続けてこられたっていうのが逆にあるんですよね。もう毎日毎日 2 時、3 時くらいまで仕事する時代もあったので、そんな中で帰ってお風呂入って寝る。朝は遅刻しないように行く、その繰り返しが１ヶ月とか２ヶ月とか続くし。一番ひどかったのは、徹夜が３日。５時くらいにタクシーで家帰って、シャワー浴びて着替えて出てくるっていうのが３日あったりとか。そんなこともあるんだけど、その中で自分なりにこれやり切ったら出来上がるんや、みたいな気持ちがあって。まあ頑張ってこられたかな、みたいなところがものすごくある」

Mさん「この間、産業カウンセラーの研修会で、新型鬱って今すごく若い人に多いっていう。新型鬱って、使命感とか、自分の仕事に使命感を持てる人ってすごくストレスに強いから、やっていけるんじゃないかなと。やらないと困るってわかるからやらなきゃいけない。何のためにやるかわかってないとそれに耐えられない。それが今の会社の中では、この仕事が何のためにやってるかがわからなかったり、やっぱり最初にものすごく自己理解とかをやりすぎて会社に入ると…、私はこれとこれとこれに絶対向いてて、一つの仕事に「これだ！」って思ってしまうと、それ以外の事をやらされると耐えられなくて…」

川畑「だって、それ以外は向いてないって出てるんやもんね」

塾長「そうかそうか」

Mさん「自己理解に縛られない方がいいよっていうことがあるんです。柔軟性も持たないと青い鳥症候群みたいになっちゃうんで、これしかないというのは…。仕事の種類とかじゃなくって、「こういう生き方がしたい」っていうのしかないと思うんですよね」

塾長「だからね、今の話で言ったら、「自己理解が必要なんや」って皆が言い始めると、皆どっと自己理解系に行って、「自己理解なんて必要ないんや」って言われると今度は皆が反対する。そういう人たちが、自分の物語をどうやって築けるんだろうっていう思いが私の中にすごくあって、そうやって翻弄される若者たちが大量に作られているような気がするんです」

川畑「さっきもね、就活で、自分のアピールしないとダメでしょ。私は大学時代にこういう辛い事があって、それをこうやって乗り越えてきましたって。確かにそれは事実に基づいてるんやけど、どっか自分って言う商品のコピーを言ってる感じやな。それは表やけど、裏には隠してるドロドロしたことがある。この自分がアピールしたことを全部信じてるわけじゃないやん。信じてない部分っていうのかな。それを絶対化しないで、自分なりに整理するものっていうのかな。あるいは、心が折れるっていうコトバがあったけど、ここで心が折れるか折れないかの二極じゃなくて、自分の実際を自分のコトバで語っていくみたいなね。そこら辺の、自分のコトバで自分の状態にぴたっと合ったようなことを探していくことが、どこかで小さな幸せとか物語を作っていくっていうことにつながるんじゃないかなという感じが、ちょっとしたんですけどね」

「個人の小さな物語」の話は、セカンドキャリア論と関係があります。個人のファーストキャリアが何らかの事情で行き詰まった時、次のキャリアを模索します。この時、模索されるセカンドキャリアは、ファーストキャリアの反省に立ちます。自分自身が何を求めていたのか、自分のキャリアを通して何を描こうとしてきたのか。そんな物語性が表に出てくるように思うのです。

川畑「はい、そしたらね、最後に一言ずつ。今日の３時間で、何かあれば」

Ｂさん「はい、普段は出会わないような方々と貴重なお話しをさせていただいて…。私も何か、人生とかキャリアとかについて、まあ就職は決まったんですけど、もう一回考えてみたいなって。振り返ったり、問い直したり、もう少し自分の中でしてみたいなって思いました。ありがとうございました」

Ｑさん「はい、今年はまた来れることを望んでおりますけれども。久しぶりに同じ空気が吸える人を見つけたなと。面白かったです。ありがとうございました」

Ｄさん「はい、就活って考える時に、いろいろと苦労されてるし、昔と全然違うよなって思って聞いてました。まあでも私は私なりの生き方しかできないし、最終的には他に能力がないからここにしがみついてるっていうのもあるんですけど。まあそんな事を考えながら聞いてました。ありがとうございました」

Ｎさん「今ね、Ｂさんが普段会えない方に会えて、っておっしゃってましたけど、普段会えない健康な学生たちに会えて私も面白かったです。純粋にそれだけで。いろんなメディア通して就活とか…、それから、さっきもちょっと振っていただいたけど、私どももなかなか、施設で障害の重い人への支援のところへは本当に人材確保が難しく…、ただ人が来てくれたらいいだけじゃなくって、いい支援をしていただきたいけど、なかなか本当に、障害のある人が十分豊かに暮らしていただけるだけの支援のスタッフが揃わないというところで、非常に関心もありますし、絶えず職場フェアにね、そういうのも活用させていただいたり、いろんなことしましたけれども、やっぱり今でも本当に人が薄いなというところなんですよね。それでもとにかく、今どんな人たちがどんな風に活動してるのかな、っていうのはとても関心があったので、さっき言ったように、興味深いお話が聞けました。ありがとうございます」

Ｍさん「今までの僕の、先入観を持って決して選ばなかったであろう人生の人達の話がいろいろ聞けて、考え方に幅がいるんじゃないかなと思って、面白かったです。ありがとうございました」

Ａさん「ＱさんとＯさんの話がすごいよかったと思うんですけど、やっぱり就職活動で内定もらえないっていうプレッシャーの中で、その一点しか見えてなかったっていうところで、もっと視野が広がったような気がします。何かストレスとかが、ちょっと解消できたような気がしました。できれば、そうですね。ＱさんやＯさんのように、面白い話ができるような人になりたいなと思います」

Ｍさん「去年からずっとラウンドテーブルには来たかったので、やっと今日来れたので、よかったと思います。面白い話ができるっていうのはすごい力のある方やと思うんで、私もそれを目指したいなと思いました」

Ｒさん「私のところの子どもも今高校生なんです

けども、実際にいろんな話を聞かせていただいて。うちの子も数年後に同じような思いをするのかなと思って聞いてて、すごく参考になりました。ありがとうございました」

Ｐさん「そうですね、話を聞きながら自分のいきさつを振り返ってみて、違う見方もあったんだなっていう反省も踏まえて聞いてました。また今後の自分の動き方にも活かしていきたいなと思います。ありがとうございました」

Ｏさん「ありがとうございました。僕ちなみに大学院では、出会いの研究をしているんですね。「偶然」っていうキーワードで研究を進めてるんですが、こうした偶然の出会いではないけど、こうやってみなさんが集まったっていうことがすごく縁のあることだなと思ったんです。だからこれからも、皆さんと一緒に楽しさをバージョンアップさせていける会になったらいいかなと思いました。ありがとうございました」

塾長「川畑先生、どうもありがとうございました。いい進行で、感動的でした。それから、ゲストの３人のみなさん、ありがとうございました。何か、議論の種っていうのか、またこういう事をもとに我々もまた何か考えたいなと。今日話していただいた方も、何かつかんでもらえたかなと思います。ラウンドテーブルって、結論を出さないっていう事が前提になってるので。要するにここで何か、楔みたいなものかも分からないけど、またそれぞれのフィールドに戻って、ああやこうやって考えるきっかけができたらなという思いでスタートしました。そのためには、一人ではやっぱり無理なので、できるだけ多様な人に来ていただいて…そこら辺の多様性っていうのは重要で、やっぱり視点が違うので。そういう視点をずらす中で見えてくる世界があるのかなと。それから、私はキャリアっていう事を今年はどうしてもやりたいなと思ったんです。というのは、キャリアっていうコトバをいろんなところで使われすぎてる気もするんですよね。例えば、何かの助成をとるのにも、「キャリアって付けとけばいいわ」みたいな風潮もあって。それくらいなんか…、キャリアブームっていうのか。何なんやろうなって思ったりもするんですよね。だからあえてそれを、いろんなところからあぶり出すようなことができればいいのかなっていう風に思ったりもしてるんです。だから「就活」って、わりとポピュラーなキーワードで。やっぱりそこを介していろいろ見えてくる世界っていうのがあるような気がするので、今回はこういう事をやりました。ありがとうございました」

「就活」そこには、実に生々しい学生たちの葛藤が見え隠れしていました。若者の支援にあたる者たちは、その生々しい現状をどこまで知っているのだろうか。あるいはたとえ知っていたとしても、その現状をどこまで実感としてつかんでいるのだろう。そういった思いがありました。もし、その感覚を持たないまま実際の支援活動にあたっていたとしたなら、そこで展開するものは彼らの支援となり得るのだろうかという疑問があったのです。

学生たちの話から、彼らが就活を通して突き付けられていく現実も見えてきたように思います。学校という、ある意味で外の世界から隔離された社会の中で生きてきた彼らにとっては、この就活という機会が、

初めて防波堤の外へと出ていくような経験だったのかもしれません。



2 回生の後期からスタートする就活モード。就活準備としてボランティアやいろいろな講座に参加し、やがて 3 回生になれば、ボタン一つで完了する 50～100 社へのエントリーと、そこから怒涛のように押し寄せる大量の情報と次々と突き付けられる数々の課題。そんな混沌とした状況と不安、そして焦りの中で、彼らが自分の主体を見失っていくような現実がありました。そして、それが現実の厳しさであり、その中で個人の強さが試されます。要するに厳しい現実は、その厳しさを課題として捉えられる学生と、その厳しさの中自分を見失っていく学生とを区別するのです。

しかし一方で、その大きな渦の外側には、彼らとは違ったキャリア形成の過程がありました。楽観的な人生がそこにあり、出会いの中で紡がれていく人生がありました。また、それぞれの人生の物語が描かれる世界があったのです。そのどちらがいいのか、どちらが正解なのか。そんなことはわかりません。正解など、どこにも存在しないのでしょう。ただ今の大学生たちの就活が、絵にかいたような理想的なキャリア形成過程を表現していないことは確かです。そこから考えると、不登校やひきこもりの経験を持った若者たちのキャリア支援やキャリア教育の目指す方向性も、あらためて問い直さなければいけないように思うのです。

福祉系対人援助職養成の現場から㉝

西川　友理

ちゃんとしなさい！

「ちゃんとしなさい」や「きちんとしなさい」という言葉は、子どもに伝わらない言葉だとよく言われます。

「ちゃんと」や「きちんと」は何をどうすることなのか、具体的にどうすればいいのか、子どもにとってみればよくわからないからです。

「机の上をふきんでふいておいてね。」

「ハンカチを全部たたんで、引出しの中に入れておいてちょうだい。」

「お客様がいらっしゃったら、こんにちはと挨拶をして、静かにブロックで遊んでいてね。」

このように伝えれば、何をどのようにしてほしい、と言われているのか、小さな子どもにもよくわかります。

そんなことはわかっていたはずなのに、施設職員であった頃の私は、一時期、こう思っていました。

「私、もっとちゃんとしなきゃ。子どもに関わる専門職なんだから！」

ちゃんとした大人

子どもに関わる専門職は、ちゃんとしていないといけない、だから私自身が、そうあらねばならぬ、と思っていたのでした。だから、そうではない自分を責めていました。

一方で、「ではどうすれば“ちゃんと”していることになるのか」は、はっきり解っていなかったのでした。きちんとしたマナーをわきまえていて、世間的なルールや常識があって、精神的に強く、理性的で博学で、正しいことをして…そんな人だろうか。果たしてそれで「ちゃんと」しているのだろうか。どれも満たせそうにない、そしてどれも正解ではなさそうで…。

それにもかかわらず、なんとか「ちゃんとする」ことを目指して、手探りで日々の自分の在り方を探していました。

しかし、ある時ふと気づきました。

「ちゃんとしなければならない、理由は何だ？」と。

子どもの見本や手本にならないといけないからだと思いました。しかし、どんな姿が見本や手本になるのか、わかっていないではないか、と自らに問いかけました。

それはつまり、「こうありたい」の明確な姿がなく、「見本でありたい」と思っているだけではないか。「ちゃんと」という言葉は、「こうありたい、こうあらねばならない」と自らが作り出した虚像に過ぎないのではないか。目の前の子どもを勘定に入れずに、「まず自分がこの環境で、どういう自分でいたいか」→「子どもの見本でいたい」という自己満足を目指しているだけなのではないか。

今考えると、そんなにちゃんとした大人でないといけないと思ったのは、自分の子どもとのかかわり方に、自信がなかったためであろうと思います。経験も浅く、運動神経も悪く、知識もなく、取り立てて特別な才能も持っていない自分が、相手との関係の中でどうすれば不安を感じずにいられるだろうか…そのような感情があったためではないかと思うのです。

それに気付いた時、「ちゃんと」あろうとする無意味さ、空しさを感じ「ちゃんとしたい」私を手放しました。

今、保育士という子どもに関わる専門職を養成する立場になり、改めて、子どもに関わる大人は、どんな人であるべきなのか、と、考えることが増えました。

私が子どもの頃、身の回りに居た大人

私が子どもだった頃を思い返してみると、それはもう様々な大人が身の回りにいました。

家族や親戚をはじめ、同じ町内のおじさんやおばさん、友達の家族、図書館の司書さん、児童館や子どもの遊び場のお姉さんとお兄さん、習い事先の先生、お店の店員さん…。

基本的に、皆優しく、元気でした。

でも、時々、ヘンな人もいました。

小学校の時に、1年間担任を持っていただいたA先生。理科の時間に、

「月の高さが日々移り変わることを調べる方法を考えてきなさい、ただし教科

書や参考書などで測り方を調べずに、自分の頭で考える事」という宿題を出されました。問題はそれだけ、ノーヒントです。
「そんなん、わかるわけないやん！」
「しかも調べたら駄目、って、どうせえっちゅうねん…」
クラス中で、ぶうぶう文句を言いました。
「今までの先生みたいに、ちゃんと教えてよ、先生！」
　でも、先生は教えてくれません。
　皆の考えてきたトンチンカンな答えを聞いて、楽しそうに笑っています。
　そのように、時々ヘンな課題を出して、私たちが困っているのを見るのが好きな先生。どちらかというと、“ヘンな人”だと思っていました。
　もう 30 年位前の話ですが、今思い返せばわかります、あの先生は昨今流行りの「アクティブラーニング」をしようとしていたのです。そして、それについて行けていない私達だったのです。
　習熟度という点では十分マッチングしていたとは言い切れない点はあったものの、いい授業をしようとしてくださっていたのだなぁ、と思います。

　これも同じく小学校の頃、町中をふらふらしているおっちゃんがいました。
　どんな子どもにも人懐こく話しかけていくおっちゃんで、平日の昼間からふらふらしていて、何の仕事をしているかわからない人でした。何となく皆が読んでいる名前がありましたが、それも本名かどうかもわかりません。どこに住んでいる人なのかもわかりません。
　男子は時々このおっちゃんをからかっていたようで、ある時、
「あのおっちゃん、ちょっとからかったら、本気で追いかけて来よったけれど、逃げ切ったった！」と、やんちゃ系の男子が自慢げに話しているのを聞いたことがあります。
　女子はなんとなくこの人を避けていたのですが、それは得体が知れない人であったからであって、嫌いな人というわけではありませんでした。大人はなんとなくその人の話をすることを避けているように感じていました。
　「なんか変な人」「何の仕事をしているかわからない人」「〇〇町の方に住んでいる？らしい」「子どもは好きなようだ」ということで、なんとなく私の通っていた小学校区の有名人でした。
　私が中学２～3 年生の時にいなくなりました。あの人はいったい何だったのか、今でもよくわかりません。

　でも「何かよくわからない大人」がいて、その人がその町の中になんとなく存在することを大人たちが許しているという環境を維持できている、というのは、なかなかに包容力がある地域だったのではないかと思います。
　今の時代では、不審者扱いされ、PTA 専用の一斉メールで、通報されていたに違いないおっちゃんでした。

　私の近所にはいわゆる「部落差別」が残っていました。祖父は、私がその地域に住む友人宅に遊びに行くと聞くと、大変強い調子で叱りました。学校の道徳で同和教育を受けていた 10 歳にもならない私には、祖父の生きてきた歴史に思い

をはせ、うまく立ち回ったり嘘をついたりということは出来ず、ただもう真正面から怒鳴りかえしていました。

今思えば、あれは祖父とケンカをしたというよりは、祖父の生きてきた歴史とケンカをしていたようなものだとわかります。祖父は私の事を心配してくれていただけなのだという事も分かります。

子どもに関わる大人

こうして振り返ってみると、意図的に傷つけようとする人や、犯罪に巻き込もうという人でなければ、子どもの生活に関わる大人はどんな人がいてもいい、むしろ多様な大人がいる社会の方が、健全だと感じます。そこから何を感じ取り、何を考えるのかは、それこそ子どもによって多種多様です。

さらには冷静に考えてみると、これは何も子どもだけに限った話ではなく、大人にもあてはまる事だなと改めて気が付きました。意図的に攻撃してくる人や、犯罪に巻き込もうとする人でなければ、どんな人がいる社会でもいい。

子どもに関わる福祉系専門職

では子どもに関わる大人の中でも、特に“福祉系専門職”の場合は、どうでしょうか。

昔の私が思い込んでいたように「ちゃんと」しないといけないのでしょうか。

ミラーソンは 1964 年に、専門職の条件として①公共の福祉という目的②理論と技術③教育と訓練④テストによる能力証明⑤専門職団体の組織化⑥倫理綱領、を挙げています。これらの条件は、わが国の福祉系専門職のシステムを作る時に、大きく影響したとされています。

わが国の福祉系専門職は、①公共の福祉を目的とした職業でありますし、②理論や技術を③教育、訓練され、また資格取得後も引き続き自己研鑽を重ねることが求められています。また、⑤専門職団体は組織化され、その専門職を名乗るためには④国家試験をクリアすることで、その名称を名乗ることが出来ます。そして専門職ごとに⑥倫理綱領が示され、専門職として大切にするべき価値観が提示されています。

これらを踏まえると、保育士や社会福祉士などの“専門職である”ということであれば、意図的に子どもを傷つけようとする人や、犯罪に巻き込もうという人でなければ、もう充分「専門職として子どもと共にいる人」という条件を満たしていると言えるのではないか、と思い至りました。

“専門職としてのあるべき像”の条件に、たとえば「優しい人」「強い人」「思いやりのある人」などの人格や性格を入れると、それはその人の、人としてのあり方を規制するようなものであり、果たしてそこまで言及してよいのかと疑問を感じます。あまつさえ「ちゃんとしている人」なんて、誰がどう判断するのか、と考えると…。それぞれの資格の倫理綱領には価値観が規定されています。これで充分ではないでしょうか。

それでも、
子どもに関わる福祉系専門職に
必要だと思う条件

ただし色々考えていくと、一つだけ、子どもに関わる福祉系専門職に必要ではないかと思う条件を思いつきました。

それは「自分が常に正しいと思わない」という姿です。

なぜなら、世の中は移り変わるものであり、現実は多様であるためです。

世の中には様々な考えを持った人や、思いもつかない生活をしている人、自分と全く違う文化で育った人がいます。ですから、自分が考えている事、想像している事は、常に正しいとは言えません。

また、支援する相手が子どもという社会的に弱く小さいとされている立場の人間ならば、つい無自覚にこちらの正しさに相手を合わせようとしがちだからです。

専門職倫理という所から軸足を離さずにいるならば「子どもにはこう接するべき」や「子どもと接する時にはこれが大切」という個々人の信念や方針はどんなものであってもいいと思うのですが、「それは本当にそうだろうか」と常に自らに問いかける姿勢と、時には自らの信念や方針を変える勇気や柔軟性を持っている事が必要だと思うのです。

それは、自らが守るべきとされている倫理綱領に対してすら「本当にそうだろうか」と問い直す姿勢でもあり、そうすることで、その専門職の倫理的な自浄が図られるのではないでしょうか。

そして私の信念・方針

私が今、自分なりに考えている「子どもにかかわる専門職が大切にすべきもの」は「自ら機嫌よくいること」です。

今私が住んでいるこの社会は「大人はしんどい」「大人はズルい」「大人はうそつきだ、汚い」と、大人になる事に対してネガティブメッセージにあふれているように感じます。

ところが子どもはいずれ何をどうしても、事故や病気で若くして亡くならない限り、大人になります。これから行く先は「つらく、しんどく、汚い世界である」ということを彼らに伝えることに、いったい何の意味があるのか、と思うのです。

それよりも、「この社会は生きるに足る、信じるに足る社会である」「基本的に楽しく、元気で生きていきやすい場所である」「大人になるということは、こんな素敵な社会の、サービスを受けるほうではなく、サービスを作るほうの側に立つ人になれる」と伝え、そして子ども達がそれを実感として感じられる環境であるようにすることのほうが、よほど前向きに、生きていけるのではないでしょうか。そのためには、まずは大人として、機嫌がよい私でいようと思うのです。

その上で、

「でも、本当にそれだけでいいのかな、と、疑ってかかってる気持ちもあるんだよ。絶対に私が正しいってわけでもないし。ところで、あなたはどう思う？」

と、子どもに、そして自分自身にも、問いかける姿でありたいと思うのです。

境界あれこれ

8

～　「友達」と「しんゆう」　～

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸 由 里 子

はじめに

子どもも大人も、友達作りや「しんゆう」作りには誰もみな悩んだり苦しんだりしている。辛い思いをした挙句に、引きこもって人との関係を断つ人が数十万人もいる時代である。

小中学生のスクールカウンセリングをしていると、子どもたちが、時々「私たちって『しんゆう』だよねえ」と言っているのを聞く。一方で、「『しんゆう』って何？友達と同じ？」と聞いてくる子がいる。そんなことから、今回は『友達』と『しんゆう』について考えてみようと思う。

「しんゆう」って？

「しんゆう」を大辞泉で引いてみたところ、次のようなことが載っていた。

「心友」・・心から通じ合っている友達

「真友」・・本当の友人。真の友。

「親友」・・互いに信頼し合っている友達。極めて仲の良い友達。

一方「ともだち」を引いてみると・・・。

「友達」・・一緒に勉強したり仕事をしたり遊んだりして、親しく交わる人。友人。友。朋友。

そして「とも」は・・

「友・朋」・・①親しく交わる人。ともだち。友人。朋友。②志を同じくする人。同志。③常に好んで親しんでいるもの。④道づれ。なかま。

調べてみると、このように同じ「しんゆう」でも漢字が異なるものがあることがわかる。一般には「しんゆう」というと「親友」と書くことが多い。

この「親」は①したしいこと。したしみ。よしみ。疎の対語。②親・兄弟などの近親者。親族。みうち。とある。

「心」は①こころ。精神。②こころのそこ。本心。③物の中央。④仏教では、対象を捉え、思　する働きを持つもの。主観。精神。「心王」に同じ。⑤心の臓。心臓。など色々な意味があるが、「心友」の「心」は①のこころであろう。

そして「真」は①まこと。本当。ほんもの。真実。真正。②真理。③まじめなこと。真剣なこと。また、そのまま。などがある。「真友」の「真」は、やはり①のまこと、本当、ほんものであろう。

前述のように、「しんゆう」と言うと「親友」と書くが、「真友」や「心友」の方が「親友」より特別な感じがするのは、その漢字のもつイメージや意味にもよるだろう。「親」の漢字だと、「親しい」という意味合いが強く、一般的な「友達」より少し仲が良いという程度でも「しんゆう」となってしまいそうな感じで、「しんゆう」のイメージとしては「親」よりも「心」や「真」の字を当てた方が良いようにも感じる。

友達って？

そもそも「友達」と「単なる同級生」や「仲間」という言葉の違いはどうか？

同級生は友達なのか？同級生と言えども、仲の良し悪しはある。一緒に遊んでいる子も、その日によって異なることもある。どこまでを友達と呼ぶのか？クラス仲間という言葉もある。同じ学級の子は、クラス仲間ということにはなるが、子どもによっては「仲間」とは思っていないこともあるだろう。

人が持つ人との距離感は様々である。単なる同級生を仲間と感じるかどうかは人によるので、必ずしも同級生は仲間とは言えないかもしれない。

先生方はたびたび「お友達とは仲良くしましょう」とおっしゃるが、この「お友達」の意味するところはクラス仲間であろう。しかし、子どもたちにはその感覚はある程度仲の良い子となるのではないか？

「友達百人できるかな？」という歌があるが、百人も友達を作るということは、その友達の意味によっては不可能である。同じクラスの子を全員友達と呼ぶとしても、学校の規模がよほど大きくないと百人は作れない。「百人できないとだめなんだ。」と悩んでしまう子もいる中、「友達」と言える関係性とは一体何だろう？

単なる顔見知りや、名前は知っているけどという関係性は友達とは言わないだろう。少なくとも、一緒に遊んだり、学んだり、言葉でのやり取りもちょくちょくある関係と思われる。自閉性の障害を持った子どもでは、クラスの子全員の名前と顔を覚えるのは至難の業で、一年たっても殆ど覚えていない。従って「友達はいるの？」と聞けば、一人か二人いれば十分となる。この時の「友達」は日々やり取りできている友達である。

親友？心友？真友？

では「友達」が「しんゆう」になる境界はどうなるか？

日々やり取りをしたり、遊んだりする仲

間であり友達である人たちの中でも、お互いに信じあえる関係であり、頼ったり頼られたり、意見の食い違いがあって言い合いをしても関係性を保てる人間関係ができたときに「友達」が「しんゆう」になるのではないか？

いつもベッタリー緒にいても、どちらか一方が他方に気を使っていて、強いほうの言いなりになったり、機嫌取りをしている関係性は「しんゆう」ではない。お互いに対等で、言いたいことがあれば言える関係性でありながらも、言って良い事と悪い事を互いに理解でき、相手の気持ちや立場を互いに理解しあい、共感でき、共にいて苦しかったり辛かったりするということがない、いわゆる自然体でいられる関係性が「しんゆう」であろう。

こうして考えてみると、「しんゆう」と「友達」の間には、大きな隔たりがあると思われる。単なる「友達」を作るのは、それほど難しくはないのだが、「しんゆう」となるとそれは一気にハードルが高くなる。

「私たちって親友よね～」などと一々言う必要もないし、常にベッタリいる必要もない。互いに互いを尊重でき、別々の場所にいても、一緒にいても、心の距離感は変わらない。従って、離れていても、裏切られたり、傷つけられたりする不安を感じない、そんな関係性である。

血の繋がった兄弟間でも、仲の良い兄弟と悪い兄弟がいて、長年一緒に暮らしてきたのに、信じ合えないこともある中で、生まれも育ちも違う者同士が、信頼できる関係性を築くのはとても難しい。そんな関係性を築ける相手を見つけられるとしたら、それはとても幸運で、互いの努力のたまものと言えるのではないか。そう考えれば、「しんゆう」はそう簡単にできないし、一生に一人できれば良い方となるだろう。

我が身を振り返ってみても、友達は沢山いるが「しんゆう」と呼べる友達は恐らく数人である。

こうして考えてみると「しんゆう」は「親友」と書くより「心友」または「真友」の方が適切ではないかと思う。そして「親友」と書く方は、もう少しハードルを低くして、「友達」よりは距離が近く、「心友」や「真友」よりは距離が遠い、そんな関係性ではないだろうか？

子どもたちにとって「しんゆう」が出来るかどうかは大問題で、「しんゆう」を作ろうと躍起になっている。特に最近の子はそういう傾向が強く、１人でいられないこともあって、ずっとベッタリー緒に居られる子を求めている。一緒に居てくれて、自分を気遣ってくれる人が「しんゆう」なのだろう。

しかし、一緒にベッタリいようとすれば、そこには結局「我慢」が必要となり、どちらか一方がずっと我慢する形で安定を保つことになる。

子どもたちには一人でいられる強さも持って欲しいし、離れていても信じられる関係性を「友達」の中でも「仲の良い友達」から作り上げて行ってほしいと思う。それには自分自身を余り隠さずに出せる勇気も必要であるし、傷つくことを怖がらない強さも必要となる。

満たされ、大事にされて育ってきた子どもたちにとっては、とても難しいことだろうが、本当に「心友」や「真友」を作りたいのであれば、どうしても乗り越えなければならない壁であろう。

子どもたちと関わる中で、「しんゆう」作りに悩んでいる子どもたちに、「親友」と「心友」または「真友」を分けて伝えることが必要だと改めて思う。

対人援助学マガジン第 33 号

生殖医療と家族援助

家族形成のための支援カウンセリング

～卵子ドナーが託した“おもい”～

荒木晃子

せめて・・

・「このまま自然に子どもが授からないのなら、**せめて**、ふたりで子どもを**育てたい**」

・「精子がないため子どもをつくることはできないけれど、**せめて**、**パートナーが産んだ子どもを育てたい**」

・「私に卵子はないけれど、**せめて**、パートナーの子どもを**産みたい**」

・「子宮がないので自分で生むことはできないけれど、**せめて**、**かわりに私たちの子どもを産んでほしい**」

うえは、子どもが生まれるために必要な生殖の機能に何らかの問題があり、二者関係では自然に妊娠/出産に至らないカップルの語りである。その要因は、男性、女性、不明、卵子の欠損、精子の欠損、子宮の欠損など実に多様だが、一様に、子どもとの家族形成をのぞむカップルの**せめてもの願い**でもある。

かれらの家族問題の解決には、いくつかの解法が社会に用意されている。なかでも、「育てたい意思」への対応として、里親、養親となり社会的養護下にある子どもを養育する、特別養子縁組で子どもを迎え実子と同様の親子関係を結ぶなど、子どもの福祉に重きを置いた家族形成が広く周知され、推進されつつある。目覚ましい進化を遂げる生殖医療分野では、凍結技術の向上により、以前から実施されていた精子凍結に加え、卵子の凍結が容易となった。体外受精（ART）毎に必要だった採卵の回数が減ることは、女性の身体への治療負荷が減少することにつながる。また、卵巣がん、子宮がん等に対する抗がん剤治療の前に、採卵後に卵子凍結することで、病が快復した後に妊娠することも可能となる。このように、卵子凍結技術の向上は、様々な疾患を持ちつつ妊娠を望む患者にとっての利益をもたらした。

保存した凍結精子と凍結卵子は、その在庫がある限り、必要な時に受精卵を作製することを可能にした。さらには、作成した受精卵を凍結することで、患者が希望する時期に妊娠のタイミングを計ることさえ可能となる。このように、凍結技術が向上することにより、生殖医療の治療プログラム内では、患者が望む“より複雑な調整”が可能となった。反面、精子/卵子/受精卵の長期凍結保存の結果、ほぼ時間の制限なく長期に渡り、患者や医師が、容易に体外受精（ART）を繰り返すことにつながる可能性も否定できない。加えて、卵子の凍結技術は、独身女性が子どもを産む可能性を残すため、卵子の老化以前（若年の内）に採卵/凍結し、将来の妊娠に備えるため自己卵子の保存を可能にした。独身女性の卵子凍結を実施している施設の報告によると、実際には、そ

の後凍結した自己卵子で妊娠を目指す女性はごく僅かだという。

盲点

科学・医療技術は、患者のニーズにこたえる形で進化を遂げてきたといっても過言ではない。その成果の一つとして、科学研究のために提供されたヒトの受精卵からＥＳ細胞が作成され、これまで治療が困難だった様々な難病治療のための臨床応用も始まっている。もちろん、生殖医療も例外ではない。不妊に悩む患者の「せめて・・」という願いにこたえるべく、国内外の科学研究を臨床現場に応用し、結果を患者へ還元するための取り組みは、今に始まったことではない。第二次世界大戦終結の数年後から始まり現在も続く精子提供は、精子が必要な患者カップルへ、第三者の精子を用いることで妊娠を目指す生殖医療を実現した。かつて不可能といわれた卵子凍結が可能となり、その結果、卵子が必要な複数の患者カップルが、第三者から提供された卵子で妊娠、2017 年には実際に子どもが生まれた国内事例も認められる。一方、新たないのちの誕生を無条件に喜ぶ一握りの人たちが暮らす社会では、卵子提供の是非の議論が現在も停滞した状態にあることを筆者は残念に思う。

卵子提供で子どもが生まれるまでの一連のプロセスには、卵子を提供するドナーの存在がある。そのプロセスの中でドナーは、“人”として存在するのではなく、“卵子を提供する第三者”としての存在でしかない。卵子提供にかかる医学的手続きは全て、医療現場に始まり、医療現場で完結する。そこに必要なのは、“ドナーになる人”ではなく、“ドナーの卵子”である。言い換えれば、ひとりのドナーとして、人権が守られる環境にはないといえるのかもしれない。

生殖を補助する医療の陰に隠れた第三者の存在は、そこに誕生した子どもにとって、“なくてはならない大切なひと”である。医療技術では補えない、子どものルーツでもある“卵子”はドナー女性から提供される。確かに、提供卵子による妊娠を目指す生殖医療に必要なのは、卵子を提供する女性ではない。その女性が提供する“卵子”のみである。卵子があれば、妊娠を目指す＝患者カップルの願いをかなえる医療技術を提供することが可能となる。つまり、卵子ドナーは本来、生殖医療の治療対象となる患者でもなく、子どもを産む女性でも、また、子どもを育てる親でもない。医療サイドにとっては、提供卵子の“元の持ち主”でしかない。しかし、ドナーは、まぎれもなく、卵子を必要とするカップルと、その結果誕生した子どもにとって、重要な存在である。そのことを、私たちは決して見落としてはならない。卵子を必要とする当事者カップルの語りは、卵子を提供するドナーの声と共に、誕生する子どもに伝えることが必要だと筆者は考える。

以下は、卵子を提供するドナーから筆者が預かったメッセージである。卵子を提供するに至ったドナーのおもい、結果、生まれる子どもへのメッセージを、ドナーの了解を得たうえで個人と家族のプライバシーを守りつつ、まとめた概要を紹介する。

届かなかったメッセージ

以下は、卵子ドナーT さん（30 歳代前半）との面接概要。T さんは、自己卵子の提供を希望するボランティア・ドナー。生殖医療専門医による夫婦面談の際、医師の説明に疑問・不安を覚え、筆者のカウンセリングを希望した。

・(前略)一番の不安は「出自を知る権利」。Dr.は、「生まれた子どもには出自を知る権利がある。なので、その子が望めばドナーも、ご主人も、(ドナーの)子どもさんたちも、皆会わなければならない。断ることができない。ドナーは遺伝上の母親、子どもたち(ドナーの実子)はきょうだいだから」という説明が納得できない。もっと、ドナーになる人のために、そのリスクや説明などを教えてほしい。主人に説明し、同意をもらうことが大変。そんなとき、説明書があれば話しやすいし、主人も理解しやすい。そのための説明書が欲しい。医師や病院でのカウンセリングは必要ない。事前にちゃんと説明してもらえばいいし、質問があれば、その都度相談できればいい。夫の同意があれば、夫婦で相談しながら進めることができる。

・私が困ったのは、同意書に主人の署名をもらうとき。それと、卵子提供とはどういうことをするのか病院や団体のホームページではよくわからなかったこと。ドナー向けの説明書と、家族向けの説明書や説明会があればよい。卵子提供のことを皆が知るのはとても大切。説明会が無理ならば、実際に会って、初めに詳しい説明が聴けると安心。担当者とのメールや電話のやり取りだけでは、どこかに壁があった。直接会って壁がなくなった。壁ができない仕組みをつくれば、食い違いが防げる。

・治療に関する不安は全くない。採卵、ホルモン剤、そのリスクも承知している。主人と 3 人目の子どもが欲しいと話した際、上の子が「もう赤ちゃんはいらない」と言い、3 人目はあきらめた。でも、子どもを産みたくても卵子がなくて産めない人がいることを知り、「私はもう産まないけれど、産みたい人に役立つなら卵子を提供しよう」と思った。これまで、実際に子どもを育ててみて、親子は血縁ではないと思っている。情報はンターネットで入手した。私は、卵子があっても産むことができないけれど、「子どもを産みたいのに、卵子がなくて産めない女性」に卵子を提供することで(その女性が)産めるのならば、自分の卵子が役立つのであれば、提供したいと思った。私にあるものが、誰かに役立つのであれば、使って欲しい。レシピエントにも、私のおもいを伝えて欲しい希望がある。レシピエントにあるように、ドナーにもおもいがある。それを、せめて手紙でもいいので伝えたい。レシピエントのおもいも知りたいし、ドナーのおもいも知って欲しい。本当は、レシピエントにも、生まれた子どもにも会いたい。私には自分で産んだ子どもがいる。だから、卵子提供で生まれた子はレシピエントのお子さん。自分の子どもだとは思えない。また、私の子どもたちのきょうだいでもない。遺伝的にはそうであっても、私が産んだ子は私の子どもたち。レシピエントが産んだ子はレシピエントの子。そう理解している。

(ＣＯから、卵子提供で生まれた子に、その真実を告知する際に使用する目的で作成された冊子を提示した)

・絵本には、ドナーのことが書かれていない。「ある親切な人」に卵子を分けてもらえませんかと尋ねたら、「いいですよ」と言って病院へ行き医者が卵子を集めた、とある。私の場合は、「いいですよ」と提

供する訳ではない。「私の卵子を役立ててほしい」と思っている。ドナーにもおもいがあることが、ここには入っていない。出自の告知をする時、「パパとママはドナーを知らない」ではなく、「ドナーはこんなおもいで提供してくれたんだよ」と伝えてほしい。それは、子どもにとっても、大切。レシピエントにあるように、ドナーにも深いおもいがある。その“おもい”と“おもい”がひとつになり、子ども（あなた）が産まれた、そう、両親の口から伝えてほしい。子どもに事実を伝えるための本ならば、レシピエントだけでなく、ドナーにも興味を与えるものであってほしい。子どもには知る権利がある。その時、誰か知らないけど、ただ「いいですよ」と言ってくれた人ではなく、こんなおもいをもって提供した人であることを知ってほしい。そうすれば、その子が会いに来た時も、私のことを「ただ、卵子を提供した人」ではなく、「おもいがあって卵子を提供した人」と思えるのではないか。子どもには、そういう“おもい”で会いに来てほしい。そして、子どもの知る権利をレシピエントが行使する際の支援があればいい。子どもへ本当のことを伝える際、誰かの支援があればお母さんは救われることがある。（後略）

以上、筆者に託された卵子ドナーからのメッセージには、自らもふたりの子どもの母親であり、パートナーには努力して、ドナーになる事への同意を得た“ひとりの女性のおもい”が綴られている。自らが提供した卵子で生まれた子どもにはその事実と“ドナーのおもい”も伝えてほしい。更に、ドナーは、子どもへの出自の告知の際には、（母）親であるレシピエントを支援してほしいとまで望んでいた。母になれない女性のために、身を挺して自分の卵子を提供する利他的精神のドナー女性のこのメッセージに、皆さんは何をおもうだろう。

2018 年現在、国内には、第三者のかかわる生殖医療に関する法律はない。したがって、提供卵子で生まれた子ども、及び、卵子ドナーに対する人権の保障、身分の担保など未だ課題は山済みである。このメッセージを託したドナーの“おもい”に、筆者はいま、改めて思いを馳せている

対人援助学＆心理学の縦横無尽（24）

文化と記号と心理学

Jaan Valsiner 先生、2018 年 5 月の滞在記

サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

この「対人援助学＆心理学の縦横無尽」はイロイロなことを書き散らしているが、今回は、2018 年度立命館大学客員教授として来日した Jaan Valsiner（ヤーン・ヴァルシナー；デンマーク・オールボー大学教授）先生の訪日・滞在記を簡単に書いてみたい。「対人援助学＆心理学の縦横無尽」における拙論をひもといてみると、「対人援助学＆心理学の縦横無尽（３）」において「アーサー・フランク先生、 三度目の来日（滞在記）」という回があり、今読んでみるとそれなりに懐かしい。今回もそれにならって滞在記を記してみたい。

２０１８年5月6日

ヴァルシナー先生（以下では、主としてファーストネームのヤーンと記述）関西空港に到着。大学院生つっちーと総合心理学部サトゼミ３回生のり君がお出迎えに行ってくれたのでこちらとしては安心であった。



ヤーンからは「THANK YOU for the warm welcome! I always return to Japan as to home..」というメッセージが寄せられた。以下では、５月７日から 13 日まで毎日行われたヤーンの講義や講演について、そのスライドを何枚か抜粋しながら振り返っていく。

５月７日（月）

３限の文化心理学にて特別スピーチ。タイトルは「**INVITATION TO INNOVATION　イノベーションへの招待**」。講義は多岐にわたったが、ヴァルシナー流の文化心理学のエッセンスを語ってくれた。たとえば、以下の左側のスライドを見せたのちに、右側の写真が提示された。

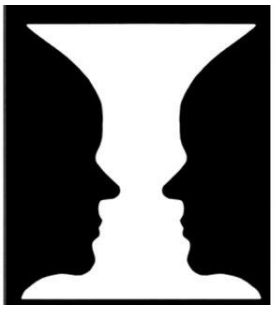




この写真を見て、皆さんは何を読み取るだろうか？

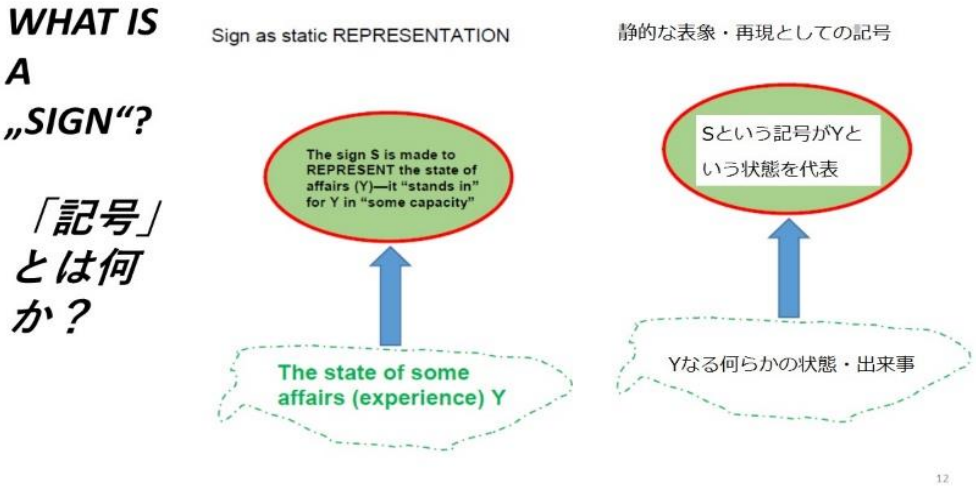
水田だ！　ということで一件落着であろう。

実は、この写真は昨年秋、ヤーンが立命館大学に来た時に茨木で撮影したものであり、私たちにとっては水田（の写真）に他ならない。しかし、ヤーンは、この写真には、Cultivated な（＝耕作された）草とそうでない草があることに注意を促した。稲はもちろん Cultivated な草である。そして、私たちはそこだけを見て、水田だ！と言っていることになる。だが、それと同時に、右下の方に草が見える。ヤーンはそれも草であること、あるいは「Cultivated されていない草」であることに注意を促した。そして、両者の草の間には、Boundary（境界域）としての畝が存在している。



私たちが水田の写真を見ると、「文化」化された領域＝稲がある領域にしか目が行かないが、この領域を図として成り立たせているのは、後景としての「自然」な領域（人によって植えられたわけではない草）があるからだということに気づかされる。この写真から自然を見いだすこともできるのである（そのとき、稲の領域は後景になる）。このダイナミックな入れ替わりはまさにデンマークの心理学者・ルビンが提唱した図地反転図形（右図）さながらである。

なお、ヴィゴーツキー流の文化心理学にとって文化の対義語は自然である。そしてこの流れをくむヴァルシナーの文化心理学にとって記号という概念が最も重要な概念である。その記号について彼は以下のスライドで説明した。

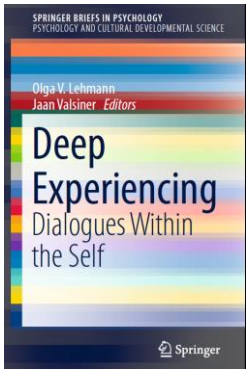


そして、学生達に、自分のスマホを机の上に置くように指示し、置きっ放しにしてどれだけ遠くへ行けるか、を想像してみるように指示した。ちなみに、学生の中には、「*私は絶対 1 ミリも動くことができないだろうなと思いました*」という感想を書いた学生もいた。このことをヤーンは、スマホが各人の記号になっているからだ、という説明を行った。

つまり、生徒各人のスマホは彼／女らを represent する一種の記号だと指摘したのである。この説明は多くの学生の理解を促した。感想の中には、「*それほどスマホは私の中で大きな記号になっていたのですね*」「*cellphone の問題はわかりやすかった。cellphone だけでなく、自分の一部のような財布、カバン、子供なども記号であり、今まで不明瞭だった記号という概念が、自分の中で少しすっきりした*」などと感想で書いていた学生がいた。

他にもいろいろあったが、講義の最後にヴァルシナーは、『Deep Experiencing(深い経験づけ)』という本（次ページ）を紹介した後で、学生達を鼓舞して以下のように述べた。

私は、皆さんが、数年後に、最初の研究プロジェクトにおいてこの本の著者と同じようにイノベーティブな仕事を成し遂げ、あなた方のプロジェクトが２０２２年に「立命館ブック」として出版されることを期待している。こうした仕事は、新しい人間心理学の建設に対する日本の若い研究者からの貢献ということになるのである！



こんなことが可能なのか？と筆者は驚いたが、学生達は、「*Valsiner 先生が立命館の学生が研究するのを応援していると言ってくださって、嬉しくなりました*」「*今まで誰も言語化できなかった deep な部分を研究してみたい*」という感想を書いていたから、おそらく数年後には立命館大学の学生達による文化心理学の本が出版されていることだろう！

最後に、この日の講義を受けた学生達のコメントをいくつか紹介しておこう。

英語で講義を聞く、という機会はめったにない機会だったのですごく楽しみにしていました。Valsiner 先生はすごく文化心理学の考え方や概念をすごく私たちにもわかりやすいようにフランクに話してくださって、いつの間にか 1 時間たっていてすごく驚きました。また Valsiner 先生が「あなたがたが立命館の本を出版するのを楽しみにしている」というのを聞いて、私たちは基本的には座学で先人たちが研究してきた事実や心理学研究を学んできましたが、これからは座学ではなく、自分たちが進んで新しい研究を行い新たな発見をする番なのだなと漠然と思いました。

英語で話すからなのか先生が偉大なのかわからないが、とても内容に引き込まれた。所々皮肉の効いた表現があってとても面白かった。

水田の写真の例が面白かったです。私たちは当たり前のように、地面に勝手に生えてる草と田んぼの稲(草)を別のものだと認識していますが、それはナチュラルなものと文化化されたものです。当たり前すぎて気にも留めないけど、自分たちが生きている世界にはナチュラルなものと文化化されたものの cultivation boarder がたくさん存在しているのかなと感じました。Valsiner 先生の授業を聞いて、普段歩いてる何気ない瞬間も、cultivation boarder を探してみたいと思えました。

以下は当日の様子である。





文化心理学の講義では感想に加え、川柳を書いてもらっている。以下のようなものが集まった。

☆長文で 英語を聴きたい 話したい　☆普段より 頭を使うよ 英会話　☆英語力もっと欲しいぞがんばるぞ
☆Jaan さん deep な話題を thank U　☆大きいな 先生座ると 前見えず　☆温厚な おじさん登場 みな和む
☆え、まって　みんなそんなに　聞き取れる？　☆Valsiner 文化と自然で 分けられる

5月8日（火）

この日は、新設の人間科学研究科の大学院生を対象に講義が行われた。今回の来日においてヤーンは人間科学研究科の客員教授として招かれているのだから、いわば本業の講義である。この日の講義は「**考えることへの招待：社会と共にある human beings**」というタイトルで行われた。

この日は、散髪を例に文化的な行為について考えていった。散髪はまさに文化的な営みであるとヤーンは言う。髪が伸びてそのままにしておくのであれば、それは自然に任せるということになる。そこで、伸びっぱなしだと不便だし不潔なのでとりあえず切ろう、ということがおきる。このように髪の毛を切ることは自然状態に対する妨害ではあるが、文化とは呼びにくい。そうではなく、伸びてきたから今度は、ショートカットにしようかな、とか、前髪パッツンにしようかな、というような選択肢が現れるということが文化なのだという。

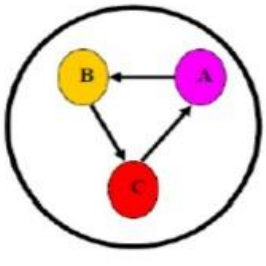
THE TOP END OF HUMAN BODY– THE HEAD COVERED BY HAIR– IS THE CONSTANT ARENA FOR CULTURE FIGHTING THE NATURE– with the help of the hairderesser

**身体のてっぺんー髪で覆われた頭ーは文化が身体と闘うアリーナになっている。
床屋さんの助けを借りて**

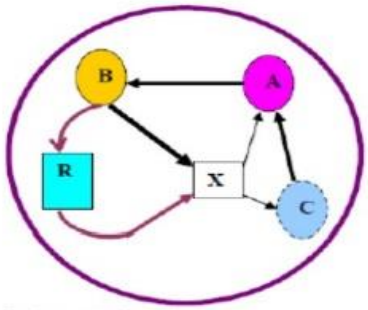


このことを、選択肢が現れる時には文化的調整子が機能しているとヤーンは表現する。

THE HISTORY OF THIS FIGURE GOES BACT T0 2004 AND MY FIRST Ritsumeikan visit!
この右の図（分岐点Xの文化的調整子Rが描かれているシステム）は、2004年の立命館大学のシンポジウムで初めて登場したモノで、歴史的意義がある。



A. System without a cultural Regulator (Dewey's "reflex circle")



B. System with a cultural Regulator (R) of bifurcation X



文化的調整子Rが無いシステム
（デューイの言う反射弧）

分岐点Xの文化的調整子Rがあるシステム

10

前ページの図の左側は文化的調整子が無いシステムの状態を表したものである。髪の毛があるさまで伸びた（A）という状態になったら、切る（B）、そして伸びる（C）、そして髪の毛が切る長さまで伸びる（A）というループである。それに対し、右側には、文化的調整子「R」が出現している。ここでは X という状態が新たに生まれ、切るとしたらどのように切ろうか、そのままにしておこうか、などの選択肢が生まれていることがわかる。ヤーンによれば、この文化的調整子という概念は、彼が最初に日本に来た時のシンポジウムで初登場したものであり、立命館大学と文化心理学の関係を考える意味でも意義あることだと強調していた。

文化的調整子という考え方は、（筆者からすれば）院生・学生に伝わるのか危惧されたのだが、それは杞憂であった。いくつか感想を紹介しておきたい。

人々は文化的調整子を導入することで、自分の外の対象と自身の心も文化化しているという考えはすごく納得できて面白いと思いました。初めて知る考えばかりで新たな知見をたくさん得ることができたので、本当に楽しかったです。

文化的調整子 R が描かれているシステムは、聴くだけなら、「ほう、そうか」という内容に思えたが、このように自らが考え実証し図で表すというすごい仕事を成し遂げたのだなと思った。

簡単なことを研究してるように思うけど、とても高次な概念などを使って研究しているのだなと感じた。分岐点 x の文化的調整子 R が書かれているシステムというのが印象に残った。文化的調整子が入ることによって選択肢が増えて人間はより文化的に生活している所以なのかなとおもった。

自分の外の対象を文化化するときに、文化的調整子を導入することで人々の自身の心も文化化しているという、システムの話が面白かったです。言われてみれば、あ、本当だと理解できますが、このシステムを最初に発見することは難しいことなのだろうなと思い、すごいなと感じました。

ちなみにこの講義には、メインの受講生である修士課程の大学院生に加え、博士課程の大学院生、総合心理学部の学部生も参加して、講義＋討論という形で行われた。最後に記念撮影！



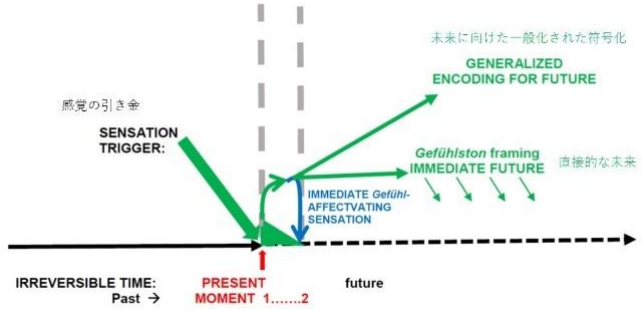
5月9日（水）

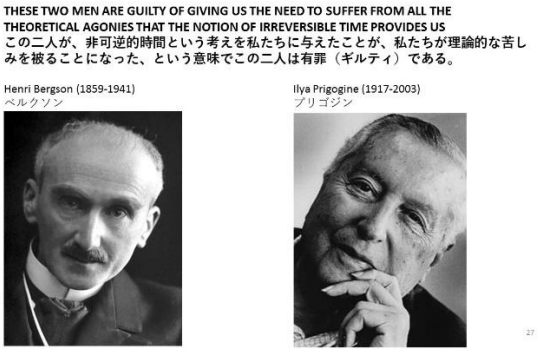
この日、ヤーンは、人間科学研究科の修士課程1回生科目「社会の中の人間科学」のゲストスピーカーとして講義を行い、その後、議論を行った。タイトルは「**Human Science in Societies　社会（複数形）の中の人間科学**」

であった。この授業は森岡正芳教授と村本邦子教授が担当しているものである。ヤーンからは「Yesterday went well (all English, Morioka led discussion). We cntinued in small gropu after, good points by students」というメールが来た。タイポ（誤字）もヤーンらしさを表しているので、そのままにしてある。

5月10日（木）

大学院修士課程1回生科目の講義（博士課程院生や学部生も参加）。また、オールボー大学に何度も行ったことがある神崎真実博士（RGIRO 専門研究員）も参加して旧交を温めた。「FEELING INTO (*Einfühlung*) YOUR PHENOMENA OF INTEREST: where research begins　興味のある現象へ感じ込んでいく：研究が始まるところ」というタイトルで行われた。





記号が感覚を通して私たちの中に入ってきたあと、非可逆的時間の中でどのような機能を果たしていくのか、ということが議論となった。

5月11日（金）

人間科学研究科（修士課程）の講義は最終日。OIC のライオンにて打ち上げ！



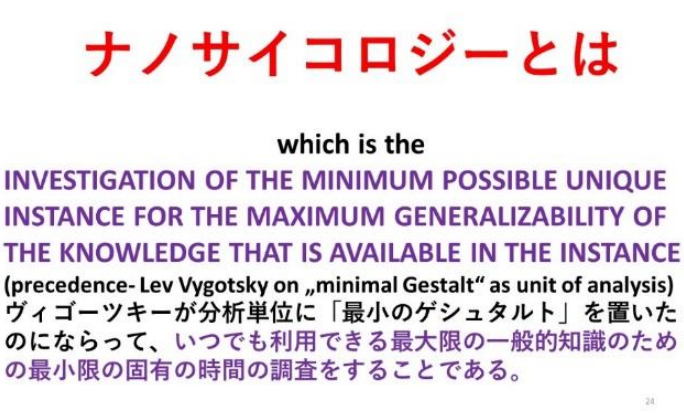
5月12日（土）

応用人間科学研究科開設記念イベント第1弾となる公開シンポジウムを開催した。このイベントのポスターは縦型で載せにくいので文末に付録として掲載する。

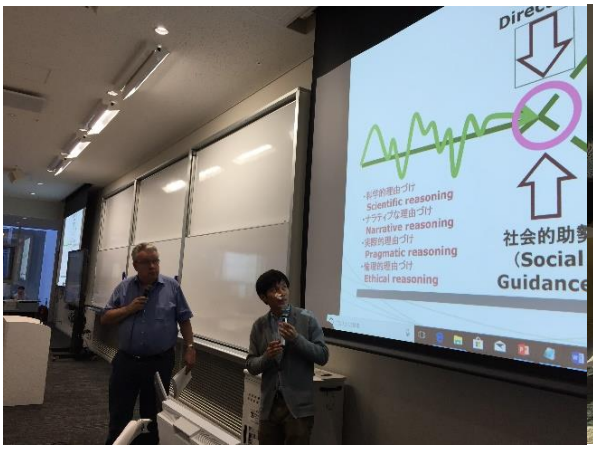
イベントの開催にあたって、佐藤隆夫人間科学研究科長が歓迎の挨拶を行った。

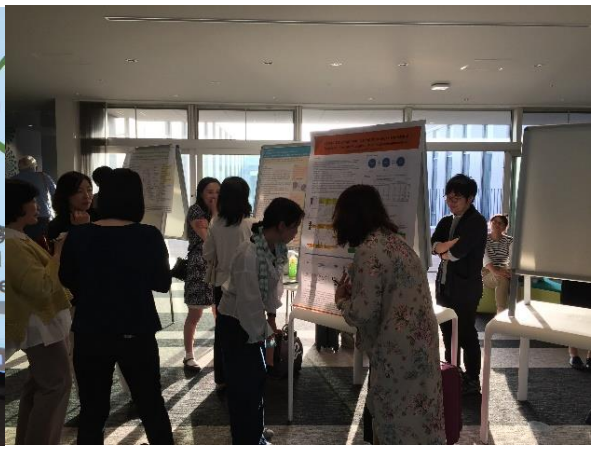
ヤーンは「TOWARDS NANOPSYCHOLOGY:ナノ心理学にむけて：Why Small Data are better than Big Data? なぜ小さいデータがビッグデータより良いのか？」というタイトルで講演した。

講演のあと、TEA（複線径路等至性アプローチ）に関するシンポジウムが行われ、有志によるポスター発表会（英語）も行われた。討論の通訳は滑田明暢・静岡大学講師（博士（文学　立命館大学））が行ってくれた。









5 月 13 日（日）

1 週間におよぶ講義の最終日。人間科学研究科博士課程サトゼミの院生を中心に、安田裕子総合心理学部准教授も参加してのセミナー。この 1 週間を振り返りながら文化心理学の理論について議論した。

この日の議論もまた多岐に及んだが、最終的に、更一般化（さら・いっぱんか：Hyper-generalization）についての考察が最も印象的なものとなった。

まず、前提として、記号が表象する内容には 2 つの形式があるという。1 つは点的(point-like)記号で、もう 1 つが域的（field-like）記号である。前者は枠組的記号であり、記号が表す内容の質的均質化を図るための記号である。後者は豊穣的記号であり、記号が表す内容の質的多様化を許容する記号である。

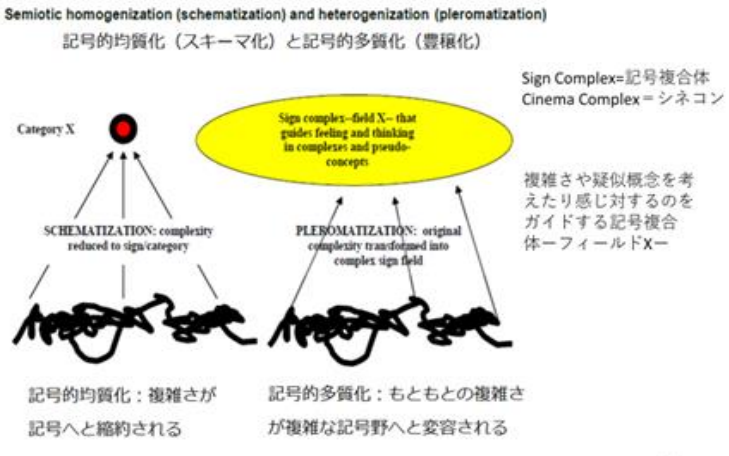
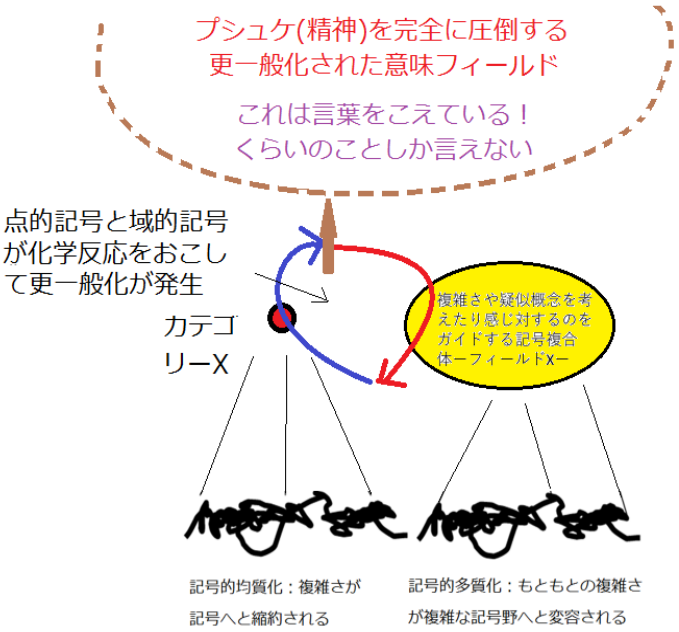


表　ヴァルシナーによる記号の 2 種類

名称	別名	機能
点的(point-like)記号	枠組的(schematized)記号	(質的均質化を図る)
域的(field-like)記号	豊穣的(pleromatic)記号	(質的多様化を許す)

一般に記号と言うと、私たちは点的記号のことを想像するだろう。記号が何かを表す (re-present) するものであるなら、表すものと表されるものの関係は明確になっていると考えるからである。ところが、実際には、記号には点的記号だけではなく域的記号があり、後者は意味を限定せず曖昧ではあるが豊穣さを伝える記号だというのである。

さらに考えて見れば、私たちの生活経験は、記号で表すことができることだけで成り立っているわけではない。言葉（言葉も記号である）で表せないことも多いはずだ。こうした状況をヤーンは、点的記号と域的記号のぶつかり合いとして描くべきだとする。そしてこの両者の緊張状態（TENSION）によって引き起こされる意味のフィールドを「更一般化（さら・いっぱんか：Hyper-generalized）された意味フィールド」と呼ぶことにしたのである。この更一般化された意味フィールドこそが、これまでの経験をこえた経験であり、これまでの記号体系では表すことのできない経験だということになる。こうした経験を Deep Experiencing（深い経験づけ）と呼ぶ（Lehman and Valsiner, 2017）。



点的記号と域的記号について、ある言語（たとえばラテン語）にように厳密な言語は他の言語に比べて点的記号的様相が強い、という言い方が可能になるかもしれない。また、1 つの言語においても点的記号的な単語と域的記号的な単語があることは想像に難くない。よく知られていることだが、英語では Rice という一語で表すものを日本語では、稲、米、ごはん、と使い分ける。それぞれの言語において、細かい識別が必要となることについては、点的記号的な単語が増えていくのであろう。『ガーディアン』紙が報じたグラスゴー大学のプロジェクト "Historical Thesaurus of Scots"によれば、スコットランド語には 421 もの雪に関する単語があるという。

snaw: 雪

sneesl: 雪が降り始める

skelf: 大きな雪片

"Whiteout: new Scottish thesaurus has 421 words for snow" (by Alison Flood, the guardian, Sep. 23)

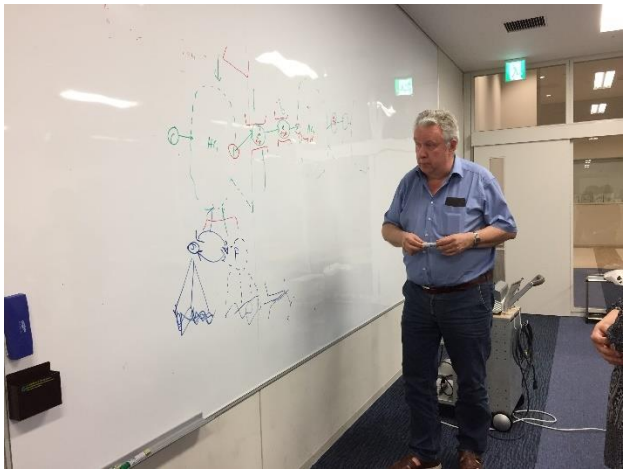
こういう例に接すると、日本語の雨の表現もたくさんあるということに思い当たる（ただし、日本語の雨に関する語は、雷雨、時雨など、複合語として成り立っているので、スコットランド語の単語の成り立ちとは少し異なる)。つまり、言葉というのはそれぞれの生活状況において必要な単語が作られるということなのであろう。そして作られた単語が使用され続けるのであれば、それはその単語が意味することが生活で重要だということになるのであろうから、言語はまさに文化そのものであるということになるかもしれない。

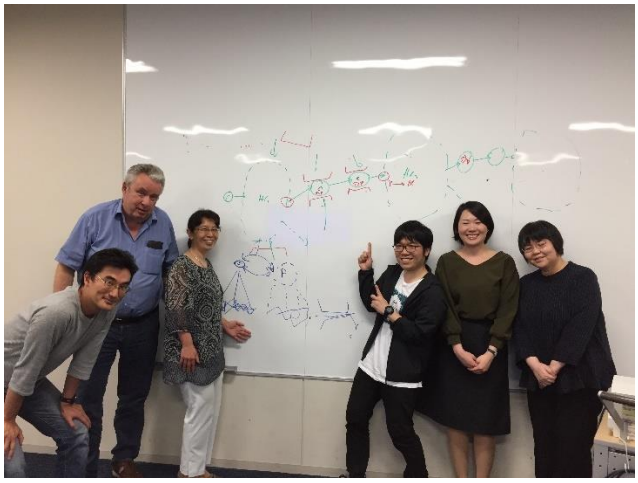
点的記号（的な単語）と域的記号（的な単語）によって表すことのできない経験があるとするなら、これら 2 つの記号に緊張が生じ、更一般化した意味フィールドが生じることになる。

言葉に表せない経験、で思い出すのは競泳・北島康介選手の言葉である。アテネ五輪(2004)の金メダル獲得において彼は「超気持ちいい！」という語を発した。これは点的記号であろう。その 4 年後、北京五輪(2008)で金メダルを獲得した後の彼は「何も言えない・・」という語を発した。この発言は、肉体的にピークを越えたあとに、たゆまぬ努力で金メダルを獲得するにいたった彼の 4 年間の経験が一言で表せるものではない、ということを雄弁に物語っているであろう。既存の単語では表現することのできない深い経験（Deep Experience）がそこにあったと推察できるのである。

言語という記号で表現することができない経験こそが「深い経験（Deep Experience)」であり、それは点的記号と域的記号の緊張状態において創り出される「更一般化された意味フィールド（Hyper-generalized meaning field」である。

以下の写真は、点的記号と域的記号の緊張状態と TEA（複線径路等至性アプローチ）を架橋する議論を行っている時の様子である。知識生産の現場を捉えた貴重なショット、かもしれない（笑)。





そして、討論修了後、最後の最後に、JR 茨木駅周辺でフェアウェルパーティー。人間科学研究科博士課程院生と文学研究科博士課程院生がヤーンの帰国の名残を惜しんだ。



まとめ

思い起こせば、ヤーンが初来日したのは 2004 年である。その時にもヤーンの授業を行い、そこでも私が通訳を務めたのだが、そのときの理解度とは、当然ながら雲泥の差があったと感じられた（自己満足？）。

実際、ヤーンは初来日後、多くの日本人心理学者に、英語で論文や本を書くことを薦め、この１５年間における日本の文化心理学や質的研究における英語による情報発信力は飛躍的に向上した。また、多くの日本人研究者（特に若手）がクラーク大学（アメリカ）やオールボー大学（デンマーク）で学ぶ機会も格段に増えた。

また、海外研究者と日本の研究者のネットワーク作りにも尽力してもらった。サトゼミ背番号隊（大学院生）の多くがその恩恵を受けているし、筆者自身も例外ではない。筆者が英語の編著、単著、それぞれ１冊を刊行できたのは、まさにヤーンとの縁があったからに他ならない。

日本ならびに立命館大学の研究者の力量を向上させてくれたのみならず、それを「正しく」理解してもらう機会は、まさにヤーンによって与えられたと言えるであろう。この１５年間に感謝すると共に次の１５年間を構想していきたい。

文献

Lehmann, Olga V.and Valsiner, Jaan (Eds.) 2017　Deep Experiencing：Dialogues Within the Self. Springer.

付録：　人間科学研究科開設記念イベント第１弾　ポスター



高齢者とのドラマセラピー

尾上 明代

５．架空を楽しむ力－Ｙ男さん

トレーニーたちと私が訪問している高齢者施設のデイサービスでは、大広間で食事やプログラム活動などを、利用者全員が一緒にすることが多い。近くの人と自発的におしゃべりをしている人もいるが、話しかけられなければ、ずっと黙って座っていたり、居眠りをしている人も少なくない。ドラマセラピーの本セッション（大広間で全員向けのドラマ的なゲーム等をする短いセッションの後に、小部屋に移動して１０人程度の希望者と実施する本格的なセッション）では、大広間で黙って座っているときには決してわからなかった参加者の思いや感情、情報（好みや希望など）、想像力、創造力、表現力などを知ることができる。前号では、初回の本セッションの内容を詳説したが、今号では、約３年連続して参加したＹ男さんに焦点を当てて記述する。

秘められた能力

Ｙ男さんに関する情報としては、進んだ認知症であること、視野狭窄でものが見えにくいこと、独居で毎日のように晩酌をしており、飲酒の問題があることを聞いていた。

彼は、大広間での日常ではほとんど話をせず、ただ座っているだけという様子だった。まったくの無表情で、顔の筋肉もピクリとも動かない感じで、もちろん笑顔は見た覚えがない。ところが、後半の本セッションでは、毎回、文字通り別人のようなＹ男さんに会えるのだ。大広間での印象との違いが絶大で、私たちはもちろんのこと、毎回交代で参加する施設の職員たちは、彼の創造的で生き生きした演技や多くの笑顔にとても驚いていた。

初期のころ行ったワークで、ペアになり、相手に後ろを向いてもらっている間に、自分の服装や身につけているものを変化させて、どこを変えたか相手に当ててもらうというゲームがあるのだが、彼はいろいろ考えてとっさに眼鏡を逆さまにかけた。相手は笑って、当然すぐに当てたが、皆もそれに気づき、大笑いと拍手が起こった。簡単に当てられてしまうのをわかっていて、明らかに「ウケ」を狙ったようだ。広間で無表情のあのＹ男さんに、このような遊び心があることは意外性が高く、想像できないことだった。

また、毎回セッションの初めに、架空のものが目の前にあると想定して、パントマイムでそれを手にとり、隣の人に渡していくゲームをしている。初回で私が「１０００万円の指輪」を取り出すと、皆は「わーきれい！」「なくさないように気を付けて」などと言いながら隣の人に渡していった。最後の番だったＹ男さんは、「こりゃガラス玉だよ！」と言い、皆をわかせた。実は安いガラス玉だったというアイディアだけでなく、その言い方と表情が茶目っ気たっぷりで、このときも明らかに、人を笑わせようとしていたことが伝わった。その後もこのゲームでは、さまざまな架空のものを手渡していったが、手鏡のときは、「こんないい男とは思わなかった！」とユーモラスに発言し、楽しそうだった。

生きた鮭などが回って来るとさばいたり、お刺身などにして全員に食べさせてくれるのは決まってＹ男さんで、ウナギのときは、さばいたあと上手に串にさして焼いてくれたり、カニを茹でてくれたり、また川魚を天ぷらにあげてくれて、皆で熱々のところをハフハフ言いながら食べたこともあった。宅配便で送られてきた重い箱から筍が出てきたときは、Ｙ男さんが「やっぱり筍ご飯だね」と率先して切る係になり、他の女性たちはご飯を炊いて一緒に作った。Ｙ男さんは「何年振りだろう。一人だと筍ごはん作らないから」と言っていた。このゲームでは、空想上の食べ物であっても、皆で本当に会食をしたような満足感を全員が感じているのが手に取るように伝わってくる。私自身ももちろんそう感じる。Ｙ男さんの表現は特にリアルで、演技力だけでなく、本当にあたかもそこにそれがあるかのように感じる感覚や想像力が高いように思う。「コーヒー、ああ良い香り～。コーヒー好きなんですよ！」とおいしそうにカップからコーヒーをすすったり、大好きなお酒を「あ

ー、しみるね～」と飲むしぐさは、彼の手の中にあるおちょこが見える気がするほどのレベルだ。苦手な甘いお菓子が来ると、「僕は香りだけで遠慮します・・」と手を付けずに隣の人に渡したこともあるので、ご本人が、架空のものをリアルに感じているのは間違いない。

また、彼の暖かい人柄がよくわかるのが、動物を扱うときだ。子犬や子猫を彼に手渡すと、本当にそこにいるかのように見てほほえみかけ、抱っこをして、「可愛いね～名前は何て言うの？」などいろいろ話しかける。私がカエルを渡して、女性たちがキャー怖い、と言ったときも「可愛いよ」と撫でていた。話し方も、実に情感がこもっている。パントマイムの当てっこゲームでも、例えば、お雑煮を食べるときの良く伸びるお餅の感じや、ミカンを食べるとき、袋の白い筋を丁寧にとっている様子など、秀逸であった。また強い風で、おちょこになった傘を渡していったときは、女性陣の皆が吹き飛ばされないようにしながら、隣の人に傘を回していき、最後にＹ男さんが凛とした風情とユーモアの雰囲気を漂わせながら「たためばいいんですよ。」と言い放ってさっとたたみ、パッパッと傘の水を切ってセラピストに返した。女性たちが「キャー風が！」などと言っていた混乱を冷静にさっと鎮めた雰囲気と、「事件」のクリエイティブな収束方法がとても良かった。

一人ぼっち

この施設でドラマセラピーを始めた当初に、いろいろな動物のパペットを２回連続して使用したことがある。多くの種類の動物から、Ｙ男さんは魚を選んだ。

一回目のとき、魚は「広い海に一人ぼっちで住んでます。みんな仲良くしてください」と自己紹介した。その後、ペアを作るとき、私（ライオン）と組むことになった。ライオンは「僕も一人ぼっち。お互い仲良くしよう～。」と言い、それぞれ食べものを取ってきて分け合って食べるお話になった。

その次のセッションでも、彼は前回と同じ魚を選び、「せまいガラスの器に入って嫌でしかたないです」と自己紹介。ペアになった犬（女性の参加者）が「いつか外に出してあげるね」と言ったのだが、二人の中ではストーリーがそこまでしかできてなかったので、私がすかさず「はい、ではその『いつか』になりました」と言うと、犬は魚を外の世界（広い池）に出してあげて、魚の想いが叶う場面ができ、「わ～！気もちいい！」「よかったね～！」というハッピーエンドになった。彼が、若いとき釣りが好きだったということは、ずいぶんあとに知ったのだが、それで魚を選んだのかも知れない。

セッションの最後に一人ずつ感想を言うとき、Ｙ男さんは「自分は一人暮らしだから、こうして皆さんと一緒に話ができるのが何より楽しい。次回を楽しみにしています。」と、ほぼ毎回、同じ発言を繰り返していた。Ｙ男さんが「一人」は嫌だという思いは、全セッ

ションを通して何度伝えられたことだろう！

連続セッション初期のころ、会いたい人に会うドラマを作ったことがあった。彼は、ペアを組んだ相手（セラピスト）に母親になってもらうよう頼み「お母さん。６０年ぶり！」と再会を果たした。その後、「怒られてばかりだった。思い出して涙が出てくる」と目頭を押さえていた。Ｙ男さんはご高齢だが、それにしても「６０年ぶり」とは、かなりお若いときに母親との別れがあったのだろうか。今、私には多くの場面で見たＹ男さんの嬉しそうな顔が思い浮かぶが、ときにはこのように悲しみも表現されたことを思い出す。また、約１年半たったお正月のセッションでトレーニーの金光真理さんが、おせち料理が好きか聞くと、Ｙ男さんは「お袋の作ったおせち料理が食べたい。特に煮物が上手だった」としみじみと語った。

また、セッション中期（始まってから１年３か月のころ)、参加者一人一人の夢を叶えるドラマを創ったことがあった。Ｙ男さんは、「家族団らん」をしたいという希望だったので、日常のたわいない家族の食事場面を作った。（Ｙ男さんと奥さん、子供たちで、奥さんが作ったものを「おいしい！」と食べる。）ドラマ後「僕は、今日のドラマが今までで一番嬉しかった！」と述べたが、実際、それまでで一番幸せそうな表情で、見ているこちらも非常に嬉しくなった。彼が元々もっている架空を楽しむ力が最大限に発揮され、身体と心全部で団らんを感じとっているように見えた。

架空で飲むお酒

Ｙ男さんは、主に「架空のものを手渡すゲーム」で、お刺身や豚汁が出るときは大抵「美味しいなあ、一杯ほしいね」という発言をしており、私はその希望に応えてお酒を出し、希望者たちで飲む場面を作っていた。「飲酒の問題」があると施設から聞いてはいたが、「架空であっても飲酒の場面を作らない」という選択はしなかった。その理由はいくつかある。

まず、このグループでは心の交流ができていて、グループが安心できる表現の場になっていたこと。Ｙ男さんに遊び心があり、自分のユーモアの力を使って、人を笑わせようとするなど、セッション内で、ある意味余裕が見られていたこと。何より、ドラマの架空性を楽しむ力があり、なおかつ現実と架空の二重意識（あたかも現実のように演じることができる一方で、架空であることが認識できている状態）がしっかりあったので、「飲酒」を架空内で楽しみ納めることができると感じたことである。このようなことが見られる場合、私は、良くないと思われる行動（彼の場合は飲酒）を、セッションの中で禁止しない。むしろ、それを否定せず受け入れ、さらには皆で楽しんでできる場を作ると、受け入れられた満足感で、現実に戻ったとき、その行動が減るか、あるいは少なくともその行動が増すということはない、と考える。アダム・ブラトナー（ドラマを治療に使っているアメリカ

の精神科医）の「(患者に）架空のドラマで表現させると現実での行動化が減る」という主張（１９８８）とも合致する。

上記とは反対に、遊び心や創造性が見られず、余裕のなさを感じる人や、特にセッション初期のころに、架空を楽しむことがまだできていない状態にあると思われる人には、その人が現実でやってはいけないと思われる行動を、セッションの中でさせることはない。

私は、依存症の中間施設で回復を目指す方々（２０代～６０代）に１０年近くドラマセラピーを実践しているが、そこでは、ゲームやドラマで、飲酒行為（または、他のアディクション行為）をさせることはしない。むしろ、たとえば次のようなワークをする。飲酒欲求がどのようなメカニズムで起きるのかを皆で話し合いながら、そのプロセスをドラマ化し、まさに飲んでしまいそうな手前でストップし、そこからそのドラマを巻き戻して、飲まない方向に行くためには、どこでどんなことをすれば（あるいはしなかったら）良かったか、さまざまな選択肢のアイディアを出し合って演じ合うという方法である。中間施設では、断酒をしてソーバー（素面）の状態が少なくとも数か月間、継続してしている人たちを対象に、徹底的に残りの人生で二度と一滴も口にしないことが実現できるよう、最大限の努力をするという合意があるからだ。これから先、就職や家庭を築くこと、よりよい社会関係を創ることなど、人生をやり直せる可能性が十分あり、そのためには、今の断酒の苦しさは将来報われるという基本的なコンセンサスのもとに援助をしているのである。もしも飲みたい気持ちが正直に語られた場合は、もちろん理解を示した上で、飲みたい感情を表現してもらい、かつ、それ以外の感情（「飲んだらダメだ」「回復したい」「どうにでもなれ」など）を皆で出し合い、十分に声と体で表現してもらうワーク等を実施するだろう。

しかし、Ｙ男さんの場合は、高齢で、今も今後も独居、身体的に自由に動けない中、唯一と言ってもよい楽しみが夕食時の晩酌ということであれば、それを問題と見なして禁止することが、彼の残りの人生の QOL を上げるのかどうか考えてみれば答えは出ているだろう。もちろん、身体のために量を控えることは良いことであるが、断酒を勧めることは、ここでのセッションの目的ではない。繰り返しになるが、彼がセッションの中で「一杯やりたい」と言うときに、受け入れて一緒に楽しむという選択は、彼の場合は精神的満足につながり、現実の晩酌の量を増やす可能性は低いと考えた。規則的な生活（毎朝、ここのデイサービスに着て一日を過ごし、夕方帰宅。近くのスーパーでお弁当などを買い、家で食べ眠り、翌朝またデイサービスに来る。）をしていることも考え併せ、「飲酒シーン」を特に禁止しないという判断をして、トレーニーにも伝えた。

変化

一般的に、セッション内で変化した人は、それと並行して現実生活でも変化が始まることが多い。しかし、Y男さんの場合は、大広間での無口な様子と少人数セッションでの表現力あふれる様子の乖離は、なかなか埋まらなかった。認知症では、他者からのアプローチがなければ、自分から能動的に他者に働きかけることが少なくなる場合がよくある。内面的に変化があったとしても、表面に出なかったという可能性もある。また、大きな理由としては、視野狭窄による目の不自由さと歩行の困難などで、大広間では（物理的に多人数とともにいても）積極的に交流できなかったことが考えられる。

しかし、記録を読み返してみると、変化は少しずつ起きていた。私たちセラピストが大広間のY男さんの目の前まで行って挨拶をし、誰だかわかるとニコッとしてくれたり、全体セッションで、よく見える真ん中あたりに座っていたときは、ことわざゲーム（セラピストたちが、あることわざを表すミニドラマを演じ、何のことわざか観客が当てるゲームを後年行っている）で正解を言い当ててくれたこともあった。

あるお正月のセッションでは、「今年、私は年男だから、いろいろやってみたいです。」と前向きな発言をし、金光さんが「何か一つ教えてください」と聞くと「それは秘密」と茶目っ気を出して笑っていたそうだ。その日の金光さんのジャーナルには、以下のような記述がある。

> *今年は年男ということで、希望を持っている様子が見えた。空海の役も最初は遠慮したものの、演じる時には積極的だった。最後の感想で「いい夢を見てみたいです」と話していたことにも希望を感じた。*
>
> *また、お正月は一人で過ごしたとのことだが、「お正月は面白いテレビが沢山あるから」と余裕が感じられた。デイサービスに来ることやドラマセラピーを通してご自身の環境を受け入れて、独居だったとしても楽しみがある、と考えられるようになったのかもしれない。*

何より特筆すべきは、実は、職員のY男さんに関する認識の変化だった。ドラマを始める３年半前までは、Y男さんの隠された表現力やユーモアは、まったく知られておらず、「黙って無表情に座っている人」という印象が強かったと推測される。独居で認知症、飲酒の問題がある、ということを複数のスタッフから聞いたが、それらが、職員の彼に関するコメントのほとんどすべてだった。ところがドラマセッションを重ねるにつれ、参加した職員たちの「うわさ」で彼の「評判」が少しずつ塗り替えられていったと思われ、ドラマに参加したことのない職員たちもが、「Y男さんは面白い人」という共通認識をもつようになったのだ。特に、この施設に来たばかりの若い新人スタッフが、「Y男さんは面白いから、私は彼と話すのが好き」と言ったのを聞き、Y男さんが初めから職員に好印象を与えたという変化に、目を見張った。

「暖かい（温かい）もの」

約２年半が過ぎたあるセッションで、「３匹の子豚」をやったとき、Ｙ男さんと金光さんは二人でオオカミを演じた。そのとき寒い季節だったこともあり、物語の最後に、レンガの家の暖炉で子豚たち（女性の参加者）が何か温かいものをと、お芋を煮て、うっかりオオカミにも配ってくれた。そのおかげで、皆で「美味しいね」「温かいね」と仲良く食べるシーンになり、Ｙ男オオカミは、「もう意地悪するのはやめようね」と仲間のオオカミに自発的なセリフを語りかけた。

その後、サンタクロースからのプレゼントのワークをした。トナカイが一人ずつに段ボール箱を渡し、それぞれが「欲しかったもの」をもらう。Ｙ男さんは「何がいいかな。暖かいものかな」と段ボールを開ける。サンタ（施設の職員）とトナカイ（金光さん）が待ち構えていると、Ｙ男さんは「こたつだ！」と叫んだ。トナカイがこたつを組み立ててＹ男さんが足を入れる。「暖かい！」そこでトナカイもサンタも足を入れて３人が温まるシーンができた。職員サンタが、「こたつと言えばみかんですかね」と言うとＹ男さんは「私はこっちかな。」と、おちょこを持つ仕草をした。すると、職員サンタは「また、それですかぁ」とちょっと不満そうな顔をしたのだが、金光さんは「じゃあちょっとだけ。」とお銚子を傾けるアクションをした。Ｙ男さんは「おいしいー！体にしみるねぇ！」と味わっていた。

年末だったので、１年間を振り返っての感想を聞くと「僕は家に一人で居るのは寂しい。だからここでにぎやかにできるのが嬉しい。今年はここにいられてよかったです。」と話してくれた。

「暖かいもの」は、彼のキーワードの一つである。金光さんは、Ｙ男さんが暖かいものと言ったのは、人のぬくもりだと感じたという。職員は、お酒にあまり良い反応をしなかったが、実際、彼の身体に良くないものなので、現実的でもっともな反応と言える。しかし、金光さんは「暖かいこたつで他の人からお酒を注いでもらって飲むという交流を大事にしたかった」と振り返りで述べている。

その翌月のお正月には、神様からお年玉をもらうワークを行った。Ｙ男さんは、「やっぱりこれですよね。」とおちょこを持つ仕草した。お正月なので樽酒にしようと金光さんが提案し、Ｙ男さんに樽酒を木づちで割っていただいた。それを枡に注いで、Ｙ男さんが皆の健康を祝う挨拶をして全員で飲んだ。

最後のセッション

結果的にＹ男さんにとって最後のセッションになったのは、参加開始から約３年ほど経った冬のことだった。

Ｙ男さんは、自分の家は寒いのだとよく話していたので、この日、私は架空のホカロンを手渡した。彼はいつも通りリアル感たっぷりに「あったか〜い」と腰に当てる。その後、彼が好きな豚汁を出すと、やはりいつも通り「これを食べると、一杯ほしいね」と言う。豚汁が全員に配られたタイミングで、私がお酒を飲む場面をしようとすると、Ｙ男さんはいらないと言い、「さっき、豚汁を食べているときに飲んじゃったから」と発言した。実際には、彼は豚汁を食べるアクションをしただけで、お酒を飲むアクションはしていない。「飲酒」を自ら断ったのは初めてのことで驚いた。金光さんは、次のようなジャーナルを記述している。

これは、Y男さんは豚汁の時に、一杯飲みながら食べるイメージを持っていてそれで満足したということだろう。おそらくドラマセラピーの間、何度も「一杯飲みたいね」と言った時にそれを受け入れられている体験からくるものではないかと考えられる。Y男さんにとって、受け入れられ、共感されることが大きな意味を持つのである。

このセッションの後、急な事情が発生して他施設に入所され、もうこのデイサービスに戻って来ることはないと聞いた。挨拶ができずにお別れになってしまったことをとても残念に思う。最後に「架空の飲酒」を断って、去って行ったことが興味深い。

参加後半は、独居の生活が困難になってきたため、頻繁にショートステイのサービスを利用するようになって欠席が増えていったが、デイサービスに参加しているときは必ず出席し、約３年で５０回ほど参加した。男性では唯一の皆勤賞である。

温かい料理、暖かい家、家族とともに過ごす心温まる時間が、彼の夢であった。母親をはじめ、家族との団らん、一緒に食事をする時間を、このドラマグループでの疑似家族とたくさん過ごしてきた。毎回、暖かさをもって帰っていただけたとしたら嬉しく思う。

クリエイティブ・アーツ・セラピーの機能

アメリカのドラマセラピスト、デイビッド・Ｒ・ジョンソン（２００９）は、クリエイティブ・アーツ・セラピー、特にムーブメントセラピーやドラマセラピーが高齢者の健康に強い影響を与えることを主張し、その活動は、以下の５点での貢献が大きいという。

１．自己存在の位置認識、そして自己の活動を増加させる

構造化された人的関係を創って、そこで感情、感覚が活性化する。

２．想起を促す

想像力に富む、はっきりとした指示や遊び、視覚の刺激などにより、深い記憶を想起し、またグループ内で想起したことを共有化できる。

３．自己理解と受容を促す

即興的な表現を促すことで、内部に沈潜していたことが表出する。そのようにして自己が表現したことを、今、新たに理解することで、自己の限界や強さを理解できるようになる。

４．意味、意義のある人的な相互関係を発展させる

構造化されたコミュニケーションを作り上げるので、そこで、親密度が増す。芸術表現の力で、普段は参加できない人も平等に参加できるような工夫ができる。遊びと笑いの要素で仲間意識を高める。

５．共同体、コミュニティの気分、精神を作り上げる

共同的な催しをすることで、所属意識を強化する。施設への所属や、そのグループへの所属や、一緒に行う芸術表現の活動への所属。これが、共同体的な意識を作り上げる。

この施設での実践と照らし合わせて読むと、まさに上記のすべてのことができていると思え、Ｙ男さんにも当てはまる。そして３年の間、セッションの中では、彼の表現力や認知力はまったく衰えを見せなかった。彼が毎回参加したドラマの共同体は、彼と職員との関係を少し変容させ、彼には一定の存在意義そして所属意識を提供することができたのではないだろうか。

今、彼がいないことを寂しく思う。

＊　セッション内容の記述は、主にトレーニーの記録とジャーナルを元にしている。

文献

Blatner, A.(1988) Acting in: Practical Applications of Psychodramatic Methods (2nd ed.). New York: Springer Publishing.

Johnson, D.R. and Sandal, S.L. (2009) *Waiting at the Gate: Creativity and Hope in the Nursing Home.* New York: Routledge.

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第32話

水野　ス ウ

大胆な平和

A Bold Peace——そのまま訳すと、大胆な平和、勇気ある平和。この言葉は、アメリカでつくられたドキュメンタリー映画の原題で、日本語のタイトルは「コスタリカの奇跡」。それに「積極的平和国家のつくり方」という副題がついています。

友人がひらいているフェアトレードショップでこの映画を上映すると聞いて、2002年に見た「軍隊を捨てた国」という名前の映画のことを思い出しました。そこで描かれていたのも、確かコスタリカだったな、と。

中米のニカラグアとパナマにはさまれた小さな国、コスタリカ。自然の生態系がとても豊かで、エコツーリズムの先進国として知られるこの国には、軍隊がありません。

美しい自然と一緒に暮らしながら、子どもの権利はなあに？と聞かれて即、「遊ぶこと、愛されること！」と答える子どもたちがとてもまぶしい。まるで夢物語のように美しい国。

でも、軍隊を持たない、というならばもしも敵が攻めてきたらどうするんだろう。人びとは不安じゃないのかな。まわりの国も平和だから戦争なんかにならないのかな。今回、「A Bold Peace」を見て、あの時感じた素朴な疑問に16年越しで一つの答えをもらったような気がしました。

軍隊を捨てた国

1949年につくられたコスタリカ憲法は、その12条で「常備軍の廃止」を謳っています。必要な時には軍隊を持つこともできるけど、いつも、じゃない。軍にかわる仕事は警察がにないます。そうやって今日まで70年間、コスタリカという国は軍隊を持たずにやってきました。

軍隊をなくしたおかげで、コスタリカではその分のお金を人びとの暮らしのために、教育や医療

や福祉、そして生物多様性世界一といわれる自然環境を守ることに、まわすことができるようになりました。当たり前のことだけど、国のお財布は一つですもんね。

2002年の映画の中では、小中学校まで学費が無料と描かれていたけれど、今回の映画で、今は大学まで無料が実現していると知りました。国民皆保険制度もあります。お金持ちは高い保険料を、そうでない人は安い保険料を払います。医療費は無料です。

この映画の中で、乳母車に子どもを乗せたお母さんが言っていました。「母親としてありがたいのはこの国の子どもたちが戦争しなくていいこと。軍隊にはいらなくていいことよ」。首都にある国連平和大学内の碑文には、「コスタリカ人の母は幸福にも子の誕生から兵士の道なしを知る」と刻まれています。

この大胆な平和は、いつ、誰が、どうやってはじめたのだろう。世界中の人がガンジーの名前を知っているのと同じように、コスタリカでは誰もがホセ・フィゲーレス・フェレールの名前を知っています。

国民から親しみをこめてドン・ペペと愛称でよばれている、フィゲーレス。彼は1948年、国内の混乱に黙っていられず、武装蜂起して時の政府と闘いました。革命に勝利したフィゲーレスはその年の12月の式典で、国軍の要塞の壁に勢いよくハンマーを振り下ろし、「この要塞の鍵を学校に手渡す、今日からここは文化の中心だ」と演説して軍隊を解散させ、その翌年、常備軍を放棄する憲法を制定したのです。

一年あまり政権を率いたフィゲーレスは、その短い期間に強い信念でもって、前の政権がまだ道半ばだった社会保障をさらに充実させていきました。銀行や電力を国有化して使いやすいものにし、そして平和を保つためには民主的な選挙のおこなわれることが何より大事、と選挙最高裁判所も設けました。

晩年になってからのインタビューで、彼はこう答えています。「軍隊は過去のもの。戦争は正常な状態ではありません。人にとっても、地球にとっても。戦争は病気で、平和が普通なのです」

非武装だからできること

コスタリカが軍隊を廃止できたのは、まわりが平和な国ばかりだから？　いえいえ、コスタリカのある中米って実は世界でも指折りの危険な地域の一つで、コスタリカのまわりには独裁政権や内戦状態の国が多数あります。

コスタリカに対してアメリカはこれまで何度も、自分たちのいいなりになる政権をつくろうと圧力をかけたり、武器を買わせようとしたり、米軍基地をつくらせようとしてきました。

東西冷戦の真っ只中には、レーガン政権から、コスタリカも戦争に参加するよう迫られます。隣国のニカラグアでアメリカ寄りの独裁政権が革命勢力によって倒されたことで、その勢力がもっと力をつけて共産主義が中米の国々にひろがってしまうのではないか、そのことをアメリカはものすごく怖れたのです。

革命勢力を攻撃しやすいよう、コスタリカに米軍基地をつくれ、と圧力をかけるレーガン。1983年、時のモンヘ大統領は、どちらの側につくということではなく、中立の立場で紛争解決に尽力するという態度で、ヨーロッパ各国の首脳を訪ね、コスタリカを支援してください、と訴えて回りました。そして帰国後、正式なコスタリカの永世中立を宣言し、カトリック教会と世界各国がこの宣言を歓迎しました。

親米と反米にわかれて争いが続く状況の中、アメリカとほどよい距離を保ちながらも、まるごといいなりにはならない姿勢を貫けたのは、コスタリカが非武装であることを強みにして信頼してもらい、世界を味方につけることに成功したからなのでした。

平和の輸出

モンヘ大統領が退陣した後、ニカラグアでは内戦が激化。1986年の大統領選で再びコスタリカは、非武装を貫くかどうかの選択を迫られます。アメリカが「このまま中立を続けると資金援助を打ち切るぞ」と圧力をかける中、アメリカ寄りの候補と、軍事路線に真っ向から反対するアリアス候補が争いました。その結果、コスタリカの人々は「援助を失おうとも未来を見据えよう、この道が国益だ」と訴えるアリアスを大統領に選んだのです。

アリアスは、先のモンヘ大統領がしたように、ローマ法王からイギリスのサッチャー首相まで、ヨーロッパの国々のほぼ全首脳を訪ねて歩き、中米和平計画を支援してもらう約束を取り付けました。それだけでも、世界にとって予想外な出来事でしたが、驚くのはこれだけではありません。アリアスは、ニカラグア、グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラスの大統領たちをホテルの一室に集めてとことん話し合い、ついに和平の合意に至らせたのです。

自国だけでなくまわりの国へも平和の文化を輸出したアリアス大統領は、この功績でノーベル平和賞を受賞します。受賞したのはアリアスでしたが、紛争国に囲まれる中、非武装を主張した彼を大統領に選んだのはコスタリカの人々です。その時の彼のスピーチにこんな言葉がありました。「平和とは終わることのない過程であり、生き方であり、紛争を解決する一つの方法だ、その努力に終わりはない」と。

大統領を訴えた大学生

「少なくとも私にとって国の安全保障は、まったく複雑ではありません」映画の中に登場する、憲法弁護士のサモラさん、彼の言葉は実に明快で合理的です。

「アメリカが攻め入ってきたとする。アメリカを阻止できますか？　相手のロケット一基が、我々の年間警備予算を超えるんですよ、それでも自衛軍を持ちます？　ちっとも自衛できないのに？　単純に無意味なんですよ、It doesn't make sense!」

「正義は武器より強いと信じます。そして法的手段は武器よりも強いのです。国際法を信じることは、他国の敬意を信じることです」

小さな国が軍隊を持ったとしても大国には太刀打ちできない。だからフィゲーレスは軍を撤廃した。軍事費は無駄だから、教育や医療にまわそう、発展の機会をつくろう、と言った。その結果、国が安定して、教育水準が上がり、民主主義が根づいた。若いサモラ弁護士が目ぢからこめてインタビューに応える表情は確信に満ちていました。

実はこのサモラさん、ロースクールの学生時代、時の大統領を憲法違反で訴えたというのですから、びっくりです。

2003年、アメリカのブッシュ政権はイラクへの攻撃をはじめました。他の国々も参戦するよう働きかけるアメリカ。あの時、日本の小泉首相（当時）はすぐにイラク戦争への支持を表明しました。そして、わざわざ新しい法律を作り（イラク特別措置法）、「非戦闘地域」にかぎるとして自衛隊が派遣されたことを、今もはっきりと覚えています（15年後の今年、イラクでの自衛隊の活動記録の日報が公開されて、派遣先はかならずしも非戦闘地域とはいえなかったことが明らかになりました）。

当時のコスタリカ大統領もその時、アメリカとともに戦う有志連合への参加を決めました。すると、中立国のコスタリカがイラク攻撃に賛同したことに、国民の99%が反対。法学部の学生として自分も何かすべきだ、と考えたサモラさんはたった一人で大統領を訴える訴状を書き、裁判所に提出したのです。結果は、サモラさんの勝訴。最高裁は、イラクへの侵略支援がコスタリカ憲法と平和的伝統に反するとの判決を下し、国は有志連合からの離脱を命じられました。

教育と子ども選挙

一学生であったサモラさんが、時の大統領を憲法違反で訴えることができたのは、もちろん彼の人間性もあるでしょう。でも私には、それだけでなく、この国の教育の目指すものがそこに反映されているように感じました。

軍事予算をゼロにすることで国家予算の3割を教育にあてることができたコスタリカ。その芯となっているのが「平和教育」です。

日本で「平和教育」というと戦争の悲惨や広島、長崎を学ぶことをイメージしがちだけど、コスタリカのそれは、もっともっと幅広い。自分たちの権利や責任、民主主義、自然と共に生きること、自分を表現すること、そして何より、自分の存在が大切だと思うきもち。相手も同じように大切と認めるきもち。この国の子どもたちはごくごく小さい頃から、学校でも家庭でも、それを学びます。

「軍隊を捨てた国」の映画の中で印象的だったシーン、子どもの権利はなあに？と聞かれて即、「遊ぶこと、愛されること！」と答える子どもたちの姿も、実は授業での一コマなのでした。

自分たちのいのちを生かしてくれている、豊かなコスタリカの自然環境を基本の教材にしながら、想像力をひろげて、平和を、幅広くとらえること。同時にもっと小さな単位、個々の家庭の中で、生活の中で、どれだけ互いを尊重しあって民主主義を実践できるか、ということを考えさせられました。

この国では、小さい頃から自分の意見を持つことがとても大切にされています。それが、民主主義の根幹だからです。選挙最高裁判所は、子どもや若者たちに、有権者になる前から練習の機会を積極的につくっています。

4年に一度の、大統領と国会議員を選ぶ選挙は、国をあげての楽しいお祭りのよう。親と一緒に投票所にやってきた子どもたちは、親とは別の部屋で、本物の候補者に投票する模擬選挙をします。9歳も7歳も4歳の子どもも！　家族や友達と投票先が違うのも、この国では当たり前のこと。子ども選挙ともよばれるこの模擬投票の結果は、大人たちの本当の選挙にも大きな影響を与えるそうです。小・中学生の中には、ボランティアとして投票所内の案内役をする子たちもいます。

幼い頃から何度も、選挙に参加することや民主主義のウォーミングアップをして大人になるからなのでしょう、コスタリカの投票率は毎回ほぼ8割をくだりません。ある若者は、18歳になったので選挙権を得る登録ができて、これでやっと本物の投票ができる、とうれしそうに話していました。

コスタリカの今とこれから

もちろん、現在のコスタリカに何の問題もないわけではありません。フィゲーレスの時代には、富がきちんと分配されたことで、ラテンアメリカでもっとも中産階級の多い国となったけれど、グローバリゼーションの影響で、近年は富める人とそうでない人との格差がすさまじいといいます。大資本のスーパーや多国籍企業の経営するホテルが次々に建って、限られた一部の人に富が集中し、彼らが政治を仕切ろうとします。そんな政治に不満を持つ人も多いし、麻薬問題もいっそう深刻です。ラテンアメリカには麻薬の生産地が多い上に、何といってもアメリカは世界最大の麻薬市場。コスタリカには麻薬とともにミサイルの弾頭まで密輸入されたりするそうです。

映画のラストは、2014年に行われた大統領選挙で、市民派のソリス候補が当選する場面で締めくくられています。新自由主義経済による格差をなくすこと、人々の間に薄らいできた環境保護意識にもっと力を注ぐこと、政治の腐敗を正すこと、性的マイノリティーの人たちの権利向上を政策にかかげたソリス。無名同然で、数ヶ月前まではほんの数パーセントの支持率しかなかった彼を、市

民たちがどんどん後押しし、フィゲーレスの息子の支持も得た結果でした。

そして2018年の今年、連続しての大統領再選が許されないコスタリカで、次の大統領を決める選挙がありました。決選投票を経て、ソリスと同じ党の候補が当選。この選挙では、同性婚を認めるかどうかが大きな争点の一つでした。大統領に選ばれた彼は同性婚を認めることに寛容なのに対し、相手は伝統的な家族のかたちを重んじる、同性婚には反対の候補者だったそうです。

弱いことが強いこと

過去幾たびも大国から揺さぶられてきたコスタリカ。そのつど、外交努力を惜しまず、世界との対話を重ね、国際法に訴え、交渉しつづけてきたコスタリカ。

「軍を持たないことで、弱くではなく、強くなったのです」「若い人々に、諦めないことの大切さを教えるのです」ブッシュ政権時の、アリアス大統領のこの言葉は、シンプルだけどもとっても深い。

コスタリカは現在、いくつもの国際条約に加盟しています。生物兵器禁止条約、ウラン兵器の禁止、独裁政権や軍事国家に武器販売の禁止を目指す武器貿易条約、対人地雷禁止条約、クラスター弾に関する条約、地球温暖化に関する京都議定書、女子に対するあらゆる差別撤廃に関する条約、子どもの権利に関する条約、この他にももっと。

2017年7月、核兵器禁止条約に122の国々が署名して、国連ではじめて採択されました。条約の賛同を求めて各国政府に働きかけた国際的NGO、核兵器廃絶国際キャンペーンICANが、この年のノーベル平和賞を受賞したのはまだ記憶に新しいでしょう。日本人ヒバクシャたちが長年、核兵器の非人道性を世界に訴え続けてきた努力の証しでもあります。

実はこの条約の原案ともいえる文書を20年も前に国連に提出し、その後も他の国々に呼びかけ続けた国は、ほかならぬコスタリカだったのです。条約交渉会議の議長を勤めたのも、コスタリカ大使でした。

アメリカなど核を持つ大国と、そのアメリカの核の傘の下にいる日本はこの条約には署名せず、国連での会議にも欠席。この時、日本の委員の座る席には折り鶴が一羽置かれていました。それは、日本のあなたにここにいてほしい、というメッセージだったでしょうか。

軍を持たないことが強いこと。敵のいないことが強いこと。それを長年、体現してきたことで、コスタリカの人たちの中に、紛争があれば武力に頼らず、万策を尽くしてとことん話しあいを続ける、平和は自分たちの文化なのだという精神が、おそらく何層にも積み重ねられ、育まれてきたのでしょう。

コスタリカはあたらしい安全保障の選択肢を示してくれています。でもそれに完成形などありません。国民一人ひとりに、この社会を支えているという自覚があり、議員まかせじゃない民主主義を、ふだんの努力で実践してきたからこそ、それを次の世代にも伝えようとしてきたからこそ、持続可能な今のコスタリカがあるのだと思います。

私の背骨

「コスタリカの奇跡」の映画をつくったのは、エディさん、ドレリングさんという二人のアメリカの社会学者さんです。東京の上映会では、来日された監督たちお二人のお話を聞くことができました。

彼らはアメリカの人たちに、コスタリカの人たちの生き方や価値観を通して、軍事主義とは別の方法があることを知ってほしくて、この映画をつくったそうです。

エディ監督は言います。「コスタリカのケースはほとんど知られていないストーリーですが、私たちに新しい国家安全保障のモデルを見せてくれ

ています。コスタリカは外交を中心に他国との信頼関係を築くことで、軍に頼ることなく国家の安全を保障することに成功しました。」

「安全保障」って、なんだか難しい言葉に聞こえるけれど、英語では"security"。コスタリカは他の国に信頼されるような国をつくること、攻撃したら世界が黙っていないと思われるような国をつくることで、自分たちの国を守ってきた、ということなのですね。

「アメリカでの上映会では、涙を浮かべてお礼を言ってくれる人、関心を持ってくれる人もいました。だけど、残念なことに、そういう人たちですら、ほとんどが最終的には『コスタリカから学べることは何もない』という感想で終わってしまいます」。

え！　この映画を見て学ぶことは山ほどある、と感じていた私とは、まるで真逆の感想です。

「アメリカ人はずっと長い間、自分たちは常に敵に狙われている、という被害妄想を植えつけられてしまっているので、軍隊に頼らない国づくりというものが、自分の想像をはるかに超えすぎてしまって、もっと知ろう、というきもちになる前に、そんなの無理に決まっている、と思考がシャットダウンしてしまうのです。軍を持つべきか持たないべきか、議論する余裕すらありません」

自分の国が他国からの脅威にさらされているという恐怖を煽られ、国家予算の約半分が軍事費につぎこまれているアメリカでは、平和が、時には戦争と同義語です。正義＝戦争、だったりもするのです。平和のために戦争する、とアメリカのリーダーたちはこれまで何度も言ってきました。2001年の9.11のテロのあと、たった数日でアメリカ中が愛国心で団結し、平和のための“正義”の戦争へと一気になだれこんでいった、あの時に感じた恐怖を私はまだ忘れていません。

ドレリング監督は言います。「アメリカはいつでも戦争ができるんだぞ、という心理になっている。これって、人間にとって決して健康なことではありません」

憲法で、自分の身を守るために銃を持つことが認められているアメリカと、武器を持たないと決めた憲法を持つ日本。出発点からして大きく違っているのでした。

何としても戦争はいやです、と私が言い切れるのは、実は1947年にできた憲法第9条があることによって培われてきた、戦争をしないことが当たり前の国で生まれ育った私の、メンタリティーの背骨ではなかったのだろうか。軍隊持つべきか持たざるべきか、そういう議論の余地がまだ、かろうじて残っている国に、私たちは生きているのです。

これほどたくさんの人が集まってくれた上映会は初めてだ、と驚くエディ監督。「今回日本の皆さんがコスタリカにこんなにも興味を持ってくれることが心強い。それはきっと、平和憲法を持っているという共通点からでしょう。

日本のArticle 9はコスタリカの憲法よりずっと有名で、世界中に知られていて尊敬されているのですよ。どうかその平和をこれからも守ってほしい」

積極的平和、って

平和＝戦争、とはならないはずの日本だけれど、安倍政権は2015年の安保法制のことを「“平和安全”保障関連法」と名付けたので、ほおっておくと日本もそちらの方向に近づいてしまうかもしれません。

安倍さんは、安保法制をつくることを「積極的平和主義」だと言いました。英語にすると“proactive contribution to peace”。プロアクティブとは、戦略用語で、先制攻撃、という意味だそうです。先制攻撃的な平和貢献、つまり、戦争と一体になった平和。

あれ？　この映画の副題にも「積極的平和」って出てくるけど……？　実は元々の「積極的平和」

という言葉の生みの親は、ノルウエーの平和学の父とよばれるヨハン・ガルトゥング博士。博士は、単に戦争がないだけの状態は消極的平和でしかなく、貧困や差別や格差、といった構造的な暴力のない状態を積極的平和“positive peace”、とよび、そのような社会こそめざすべきだと提唱しています。

安倍さんの「積極的平和主義」は、ガルトゥング博士の「積極的平和」と響きは似ているけど、意味がまったく正反対。誰かと平和について語りあう時、あなたのイメージする平和はどういう平和なの？と確認しあうことがとても大事、と私が思う所以です。

ドレリング監督は言います。

「国と国とが協力しあって積極的平和をつくっていくために何より欠かせないのは、それぞれの国の市民が、自分たちの国のリーダーに、暴力を使わないで世界の問題や紛争を解決していくことにもっと貢献して、と強く訴えかけることです」

「私たちに本当に必要なのは、お互いが安全に平和に暮らせること、その暮らしを分かち合えること、清潔な環境、安全で美味しい食事、そして、仲間たちと分かち合える時間。それこそが私たちに必要なものなのだ、という信念を持って生きていく。まさにコスタリカの人は、そのようによりシンプルで人間らしい生き方を実現しているのだと思います。

人間としての本質的な兄弟姉妹と呼び合えるような関係、そうやってお互い助け合えるような社会を国際的に広めていくには、私たちは人として国民として、どう世界に平和を訴えかけていくべきなのか、そしてどうすれば私たちの未来の子どもがちゃんと平和を持てるのか、そういう質問を投げかけていきたいと思います」

思えばいいだけ

上映会では、コスタリカ研究家の足立力也さんのお話もありました。『丸腰国家』という本の著者でもある彼のもとには、軍隊を持たないという、コスタリカの国の制度のことを知りたがるそうです。国の制度が違うから、そういうことができるのだろうか、と。

足立さんは、違いは制度じゃないんです、解釈が違う、人の考え方が違うんだよ、と言います。制度という意味では、日本の方がずっと厳格です。戦争をしない、武力は持たない、という日本の９条。文字通り読めば、日本は世界で一番の非武装国のはずです。それにくらべて、コスタリカはゆるゆる。いつもは持たないけど、必要な時は軍隊を持ってもいい、と書いてあるのがコスタリカの12条。

だけど、大統領でも、警察のトップでも、法学者でも、そこらへんを歩いているおじちゃん、おばちゃんでも、非武装についてどう思うかをたずねると、コスタリカは軍隊を持てないし持っちゃいけない、と答える。憲法では「持てる」と書いてあるものを、「持たない」と解釈している。その考え方の違いが、面白いところ。考えることなら、僕らがそう思えばいいだけじゃないですか、と足立さん。「思えばいいだけ」。この言葉に、はっとしました。

足立さんは最後に、フィゲーレスのお連れ合いカレンさんから日本の皆さんに預かってきた、というメッセージを紹介してくれました。

「毎晩お布団に入ったら、ぜひ二つのことを言ってください。自分にとっていい人間はどんな人間？自分にとっていい社会はどんな社会？　これだけをちょこっと考えてください。すべては自分の中から始まっていくっていうこと」これがコスタリカから伝わってきた、平和のメッセージです、と。

握手する12条

この章の最初にもどって、映画のタイトル「コスタリカの奇跡」と、その原題である「大胆な平和」という言葉についてもう一度考えてみたいと思います。

70年前にフィゲーレスが打ち出した、軍隊を持たないという政策は確かに大胆な決断でした。その政策が70年間守られ続け、今もなおコスタリカが、軍隊を持たない国であるということ。これは奇跡でしょうか？

奇跡、という言葉は、ありえないことの代名詞のようにも聞こえるけれど、私は、コスタリカの平和を単純にその一言に閉じこめてしまいたくありません。大胆な決断であるコスタリカ憲法12条を、コスタリカの人々は教育でもって、強い精神でもって、ずっと支えてきたのです。それは、コスタリカの人々の70年にわたる普段の暮らしの中の、不断の努力。

はからずも、これは日本の憲法12条に書いてあること、「この憲法が国民に保障する自由や権利は、国民の不断の努力によってこれを保持しなければならない」ということの実践です。これってまるで、日本の12条と、遠く離れた中南米の国、コスタリカの12条とが、海を越えて握手しているみたいではありません？

私はふだんから「12条する」という言葉を意識して使っています。私たちの自由や権利は、他から奪われたりおかされたりしないもの。憲法にそう書いてあるからといって、憲法にまかせっきり、というわけには実はいかないんだ。力をもったものが、私たちの権利をないがしろにしようとする時、はっきり声に出して、それはおかしい！って意思表示しなきゃいけない。そういう努力を休まず続けることで、私たちの自由や権利は、やっとこ保たれる。不断の努力を、日々普段から。それが私にとっての「12条する」こと。

コスタリカの人たちこそ、軍隊を持たない国であるために、自分たちがどう考え、どう動くべきか、という12条を70年間もずっとし続け、今のコスタリカをつくってきた。「大胆な平和」という映画と出逢ったことで、そのことをしっかり気づかせてもらいました。

なのでこれからは、「12条する」という時、そこにコスタリカの人たちの強い意思——自分たちは武力に頼らない、この国の未来をひと任せにしない、この国のことは自分たちが選んで決める、という勇気も重ねて、この言葉の中に込めることにしよう、とひそかに思っている私です。

マシュー・エディ、マイケル・ドレリング「コスタリカの奇跡〜積極的平和国家のつくり方」、2016年、アメリカ・コスタリカ
配給：ユナイテッドピープル（DVDも販売しています）https://www.cinemo.info/movie
『シネ・フロント399号（2017年10月）』。（「コスタリカの奇跡〜積極的平和国家のつくり方」のシナリオが再録されています）
山本洋子「軍隊を捨てた国」2002年、日本



ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

（２８）

中村周平

前回に引き続き、今回も車いすアメフトに関わるエピソードを書かせていただきます。

私とAlexとの共通点、それはお互いがマイノリティな存在であるということでした。「マイノリティ」とは、社会における少数派を指す言葉として使われています。

つまり、私は障害者、Alexは外国人という社会的少数派ということになります。そして、前回の号で書かせていただいた、街中で凝視されることや、街頭での配布物をもらえないことなどは、このマイノリティであるがために、しばしば生じることだと考えます。

ここからは、私やAlexの私見ですが、このようなことが生じる背景には、マイノリティの対義語であるマジョリティな存在、つまり、社会における多数派である方々と、少数派である障害者や外国人との接点の少なさが理由としてあると思っています。多数派の方々が育っていく環境や教育、労働の場において、少数派の方々と出会う機会が決して多くはない（少なくとも自分たちの周りにおける）現状では、相手が物珍しく見えたり、相手に対して間違った理解をしてしまうことは、可能性として十分に考えられることです。「障害者あるある」と、「外国人あるある」に似たものを感じたのも、お互いがマイノリティな存在であったからこそだと思います。

ただ、私がAlexと出会って気付かされたことは、私もまた人を見た目で判断してしまう、多数派の価値観を持つ一人であるということでした。

少し話はずれるかもしれませんが、私自身、この障害を負ったことで起きた自分への一番の変化は、自分とは違う人の目線で物事を捉えることの重要性を見い出せたことでした。障害を負ってからの経験や気づきは、障害を負う前の自分には絶対に理解できないことでした。何か問題が生じた時、今の自分の立場からだけではなく、違う立場の目線でも物事を把握し、複数の解決策を考えることを大切にしてきましたし、それが自分にとっての強みだと感じていました。しかし、Alexと出会ってから、同じ時間を共有する中で気付かされたことは、私も外国人に対してステレオタイプな価値観を持っており、知ら

ず知らずのうちに違う立場の方々を傷つけてきたという事実でした。

そのことに気付いたとき、自分がいかに頭でっかちな思考になっていたかということに恥ずかしさを覚えました。ただ、その反面、Alex といることで自身の知識の幅や、視野の大きさが広がることに、嬉しさを感じていました。

「自分の身近に、こんなにも知らないことがたくさんあり、それを日々体感することができる。」

一緒にいるだけで、日常の生活にはない刺激に、語弊があるかもしれませんが、心地よいものを感じていたのかもしれません。

かなりまわりくどい説明になってしまいましたが、車いすアメフトに度々参加してくださるリピーターの方の中には、この日常生活にはない刺激に感化された方も少なくないと感じています。車いすアメフトには、Alex の友人や、彼が所属するコミュニティから、毎回多国籍なメンバーが参加してくれています。また、障害のある方も、現役車いすバスケット選手から、自分だけでは移動困難な重度な方まで、様々な障害を持つ方が顔を揃えます。そこでは、これまで自分が遭った（？）ことのない「未知との遭遇」が生まれており、お互いに様々な刺激を受けながら、同じ時間を共有することができているように思えます。

この「日常生活にはない刺激」こそ、マイナースポーツにも関わらず、一定の参加者を期待できる一つの要因であると思います。

盆踊り漫遊

竹中尚文

第２回

1．お寺で盆踊り

前回、アメリカのお寺での盆踊りの話をしました。盆踊りに対する熱の入れようは、私からは想像を超えるものでした。クリスマスより盆踊りの方が重要なの？ と驚きました。アメリカで暮らす人なのだから、盆踊りよりクリスマスの方が圧倒的に大切な年中行事だと思っていました。ところが、アメリカのお寺に通う人たちに限っていえば、盆踊りの方が大切なのです。

そこで、私はこれらの人々がいつ頃からどのようにして盆踊りを踊るようになったのか疑問に思いました。アメリカでの盆踊りについて記述をさがしました。そうしたものはなかなか見つかりませんでした。そんな時、友人が大学院の修士論文だけれど、アメリカでの盆踊りの始まりについて書いたものがあると教えてくれました。

それはリンダ・アキヤマ氏が UCLA の修士論文で書いたものでした。（Linda Cummings Akiyama：Reverend Yoshio Iwanaga and the Early History of Doyo Buyo and Bon Odori in California； the degree master of arts in dance, UCLA 1989）

アキヤマ氏によれば、1931 年サンフランシスコでお盆行事が行われて、そこで初めてアメリカの盆踊りが踊られました。それ以前から各地で単発的に盆踊りを踊ったかも知れませんが、明確な記録はありません。この時の盆踊りはヨシオ･イワナガ師の力によるものでした。それは規模も大きく、写真も残っているそうです。1930 年代はイワナガ師によってアメリカ西海岸で盆踊りが急速に広がりました。しかし、それはあくまで日系人社会においての話です。他の記述では、シアトルで初めての盆踊りが、1932 年であるそうです。（「シアトルのボンオドリ」本多彩『アジア遊学』39 号）

2. 盆踊りの始まりの背景

岩永義雄師は 1900 年に熊本県で生まれています。アメリカに渡ったのは 1930 年８月です。最初に身を寄せたのは、サンフランシスコの東 100 キロ程のところにあるストックトンのテラカワ師の所でした。浄土真宗北米開教区の記録では、イワナガ師は 1927 年に得度式を受けて僧侶になっています。正式に開教使になるのは 1935 年ですから、一僧侶として渡米したのでしょう。

テラカワ師の所に身を寄せたイワナガ師は浄土真宗の寺院の日曜学校や日本語学校で子供たちに、童謡を教え始めます。

この背景をアキヤマ氏は明解に説明をしています。当時、浄土真宗のお寺はキリスト教の教会に信者を奪われていきます。この信者というのは、ほぼすべてが日本からの移民です。キリスト教会はアメリカ社会と密接に繋がっています。その繋がりを使って日系信者の就職を手助けしたようでした。1929 年には世界恐慌が始まりました。この頃は景気後退の時代でしたから、就職は難しいものとなっていました。だから、就職の仲介をしてくれる教会はありがたいものでした。この状況の中で、多くの信者がキリスト教会に移っていったのもうなずけます。

お寺は信者をつなぎ止めるために、子供たちに日本語を教えたようです。子供たち対象に、日本語教室や日曜学校の活動に力を注いだようです。アキヤマ氏は、ストックトンでイワナガ師とテラカワ師が日系の子供たちに日本語を教える必要性を語り合ったと指摘しています。また、子供たちをお寺の日本語教室であずかることも大切でした。当時は、父親だけが働きに出て母親は育児という家庭が多い時代に、日本からの移民は夫婦で働きました。だから、学校が終わった後で子供をあずかってくれるお寺の存在はありがたいものでした。

子供たちというのは、日系二世です。この日系アメリカ人二世について、少し説明をしたいと思います。日本から海外に移住した人々が渡航先で最も多いのがアメリカ合衆国です。多くの日本人はブラジルじゃないかと思われるかも知れません。1993 年の資料ですが、海外の日系人口について、ブラジルが約 62 万人、アメリカ合衆国が 76 万人です。多くの方がブラジルの日系人が最も多いと思われるには理由があります。戦前にブラジルに渡った人は約 19 万人に対してアメリカ合衆国へは約 34 万人です。戦前は圧倒的にアメリカ

に移民した人が多かったのです。1924 年がそのターニングポイントです。この年に、アメリカ合衆国は日本からの移民を全面的に禁じました。この理由や背景については、改めて申し上げたいと思っています。

1924 年は大正 13 年です。日本からの移民は、明治·大正期にはアメリカ合衆国に渡り、昭和になるとブラジルを中心とした南米に向かったのです。我々にとって明治·大正より身近に感じられる昭和の時代にブラジルに移住をした人が多かったので、日本からの海外移民というとブラジルをイメージするようになったのでしょう。

アメリカ合衆国に渡った日本人は、1924 年以前になります。アメリカ合衆国において日系人は、明治大正期に移り住んだ人たちが一世で、その人たちの子供が二世になります。そうすると、日系米人の二世とは、大正期から昭和の初めに生まれた世代です。そしてその子供たちが三世です。三世のほとんどが、戦後に生まれています。アメリカの日系社会は、一世と二世と三世がその年齢で区別できてしまう社会でした。

話を元に戻したいと思います。信者をつなぎ止めるために日本語を教えるとは、どういうことか。一世の人たちは、渡米に際して十分な英会話力を身につけて渡ったのではありません。そんな余裕もなく、片言の英語も話せたかどうか分かりません。彼らは想像に余りある状況の中で働き始めたのだと思います。膨大な努力の結果としてほんの少しの経済的余裕が彼らに家庭を持つことを可能にしました。子供が生まれて、二世の誕生です。アメリカ合衆国では、アメリカ合衆国の国土で生まれた二世はアメリカ人です。一世は日本人です。二世はアメリカで学校に通いますから、彼らは英語で生活をするようになります。一世は日本語を話し、二世は英語を話すのです。一世は、自分の子供たちに家庭の中では日本語で話すことを強く求めたとよく聞きました。かつて、二世の人たちは「子どもの頃、家に帰って英語を話したらダメ」と親からいわれたそうです。

アキヤマ氏の論文によれば、イワナガ師は日本語教室や、日曜学校で子供たちに童謡を教えたそうです。そして、童謡の発表会をしました。発表会では、振り付けをして童謡を歌うようになりました。それは盆踊りに近いものになったようです。イワナガ師は 1933 年に日本に一時帰国をします。その目的は本願寺派教師資格(住職としての資格をこのようにいいます)を取得す

るためです。この時、彼は日本で花柳流の踊りを習っています。再渡米した彼は、西海岸のお寺に盆踊りを教えて巡回をしました。1935 年に開教使の資格を取得し、ストックトンのお寺のピアノオルガン奏者であったヘレン·オカモトという日系二世の女性と結婚をします。翌年、彼はストックトンのお寺の住職になりました。その後も彼は夫人をともなって、西海岸のお寺を回って盆踊りを広めています。この頃に、現在のアメリカで寺院の盆踊りのスタイルができました。それは、盆踊りの始まりにそのお寺の僧侶が合掌して念仏を言ってから、盆踊りが始まります。1940 年にサンフランシスコの南にあるモントレー湾に面したワォソンビルのお寺に移ってからも熱心に盆踊りの普及活動をします。この頃になると全米の浄土真宗のお寺で盆踊りを踊るようになりました。それは、１９４２年の日本人及び日系人の強制収容の時まで続きます。イワナガ師とその家族はアリゾナ州ポストンの収容所に送られました。そこでは盆踊りを踊ることもなく、イワナガ師の活動に関する記録もほとんどありません。全米各地の収容所においても盆踊りを踊った記録はありません。しかし、ごく少数の方ですが、私は盆踊りを収容所で踊ったという人に会ったことがあります。

　そんな時代を経て、日系人たちは収容所から出ると直ぐにまた盆踊りを始めました。それから益々盛んになって今日につながっています。

　今回は、アメリカにおける盆踊りの始まりについてお話をしましたが、次回は、激動のこの時代についてもう少し語りたいと思います

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第27回

『ニッポン国　VS　泉南石綿村』

１．優しい母

今年の３月、母が元気に80歳を迎えることができたことは嬉しいことだった。たくさん苦労をかけているので、これから親孝行もしなくてはならないと思っていた。ところが、その後寝耳に水のように母が入院することを知らされた。「普通の80歳に比べればずっと元気だから」と言っていた矢先だったのに、入院は半年だという。と言っても、内臓系の病気ではないので、命に関わるようなものではない。母は年のせいで脚が悪くなって来ていて、今のうちに手術して膝を直しておかないと先々車椅子の生活になる可能性があるため、病院の先生から勧められたらしい。半年も入院しなくてはならないのは、その後のリハビリに時間がかかるからである。

母は元気でいまだに車にも乗っている。90くらいまでは大丈夫だろうから、いま手術しておけば、これから先10年くらい不自由なく余生を送ることができる。医者が勧めたのは母が元気な人だからで、もしヨボヨボで死にそうな老人だったら、手術するよりも車椅子の生活の方を勧めていたのかもしれない。だから心配することはないのだが、心配性の俺は、あれこれ最悪の事態を想像してしまう。

もうすぐいま住んでいるマンションの更新である。更新の時は保証人のハンコがいる。これまで母に保証人になってもらっていたのだが、入院中の母に頼めないから、弟にやってもらうしかない。弟は真面目ないい子なのだが、やってくれるだろうか。これもジェンダーなのだろうが、男は女性に比べると人の世話をするのは苦手である。弟に書類を送って、それが返信されて来ない場合は、母の妹

にあたるおばさんに頼もうか。でも、あのおばさんも大雑把だし、大幅に遅れて送ってきそうな気もするなあー。書き間違えるかもしれない。

俺の家は、母に頼って、どうにか家族が成り立ってきたので、母がいなくなるとどうなるのだろうか。母も自分が死んだ後のことを考えていて、「お願いだから、兄弟で争ったりはしないでね」と常に言っている。母は、俺よりも弟の方が心配みたいだ。俺はずっと一人で暮らしてきたから、女性がいなくても大丈夫だ。しかし、弟は母に身の回りの世話を頼ってきているので、一人になった後、やっていけるのかと思っているらしい。俺だって、精神的には母に頼ってきているので、母がいなくなるのは心配だ。ここ数年、親孝行はたくさんしているけれど、まだ生きていてほしい。

優しい母だった。殴られたりした記憶はない。俺が不登校になったときは、本当に辛かったとは漏らしていた。商家に嫁に来て、他にも苦労はたくさんあったけど、自分の子供がそういう状態になるっていうのは、こんな辛いものなのかと思ったのだそうだ。まして、俺は不登校の走りの走りだ。今のようなサポート体制はできていない。世間の風当たりもきつかった。母は当時、近所の惣菜屋さんではなく、スーパーで買い物をしていた。顔見知りの人のお店だと何か言われるのが怖かったのだそうだ。しかし、母はそのこともその時には漏らさなかった。それを言うと、俺がつらいだろうと配慮してのことだった。

スポーツクラブのトレーニングを終えて帰る時、スマホを見たら、母から着信である。かけてみると、「今病院からだけど心配はいらないから。」という母の声。母はいまでも、自分より俺のことを心配してくれているのだ。

こんな母に育てられた俺は、他の人に対する思いやりは人一倍深い人間だという自負心は持っている。どんなひどいことをする人にもそれなりの事情があるのだということ、自分には理解不可能な悩みでも、当人にとっては大問題であるから軽視してはならないことは常に頭の片隅に置いている。しかし、怒りを感じずにはいられない、愚かしい人間が世の中にはなんと多いことか。悩みを受け止めるのが商売でありながら、「あなたの悩みはわからない、わからない」と言い続けたあの女性カウンセラー。今頃何をしているのだろうか？　俺に共著の原稿を頼んでおきながら、原稿を出した半年後に、手前勝手な理由で辞退してくれて構わないと言ってきた俺様男。何の恨みがあって俺にあんな暴言を？？　不登校で、学校に行くに行かれなかった俺を白眼視し、さらに追い詰めようとした郷里の浅はかな人々の群。彼らは、少しでも良心の痛みを感じてくれているのだろうか？？？　あなたたちから心を壊された俺は、いまでもその PTSD と戦っている、そのことの責任を社会に問うことはできないのだろうか？？？？

２.カロリー計算の日々

５月１日（火曜日）。朝起きて、素っ裸になってヘルスメーターに乗った。７９.９キロ。０．１キロだけだけど、ついに８０キロの大台を切った。あー、長かった。

火曜日はダブルヘッダーの日だ。午前中と午後、別の大学で教える日である。朝の授業を終えたあと、電車で次の大学へと移動し、

移動先の大学の近所のカフェでランチを食べるのが毎週の日課になっている。ところがこの日は店の女性からラインが来た。「今日は急に休むことになってしまいました。すいません」。このお店、個人営業のカフェで、以前はお母さんも手伝っていたのだが、脚が悪くて店に出てこられなくなって、以来、娘さんが一人でやっているので、何か用事ができると店をしめるしかない。

娘さんはおそらく 50 歳くらいだろうか。俺のおばさんとちょっと似ている。大柄で、おおらかで、大雑把。彼女の料理も、多少、雑なところに味わいがある。この店のランチは普通の家庭料理で、美味しいのだけど、この娘さんらしく、ややカロリー高めという感である。まあ、ちょうどよかったのかもしれない。せっかく７０キロ台になったのに、ここのランチを食べてしまうとたちまち元に戻ることにもなるだろう。今日、1 日くらいは７０キロ台でいたい。

この日はたまたま午前の授業が GW の休暇のため休みで、心療内科の予約を入れていた。この心療内科の後、近くの行きつけのカフェに行こう。ここのマダムは楚々とした細身の人である。烏丸のビジネス街なので、来るお客さんはほとんどサラリーマン。ここは軽食しかないので、この日はタラスパを頼んだ。これだったら 700 キロカロリーくらいだろうか。

この頃の俺は常にカロリー計算をしている。これには理由があって、行きつけのスポーツクラブで、個人トレーニングを始めることになったからだった。俺はこのスポーツクラブができた頃から会員で、もうかれこれ１２年通っている。と言っても、大して真面目にトレーニングはしてこなかった。ここは、お客さんの層は高年齢で、仕事もしていないし、どこにも行くところはないような人が大勢である。開いている時間だったら何度でも出入りできるし、毎日、朝から晩まで入り浸っている人もいる。でも、俺は忙しい。月から金までぎっしり働いているし、夜に行くのは億劫だ。土曜日と日曜日はゆっくり体を休めたい。月に１回しか行かない時すらあった。これではもったいないのだが、全然行かなくなると何か大事なものを無くしてしまうような気がして、やめることはなかったのだ。

俺は寂しい、初老のおじさんなので、スポーツクラブで若いインストラクターの先生と話すのが楽しみである。今、一番よく話をするのは大学生のバイトの男の子で、かつてはアメフトもやっていた筋肉マン。クラブに彼の上裸の写真が貼られたりもしていた。見事なシックスパックである。俺は基本的に体育系の男の子が好きだ。俺自身が体育会や運動部とは無縁の人間であり、入りたくても、それだけの運動神経がなかったため、彼らをみるとどうしようもなく羨ましい。

この気持ちは女性にはわからない。先日も、ある勉強のできる男の学生から、「僕は、勉強はできたけど、スポーツができないんです。小学校まではスポーツが全てじゃないですか」と言われた。確かにその通りだ。スポーツができず、内省的な子だった俺は、男の子の仲間に入れず、子供の頃「女の腐ったようなやつ」と言われ続けた。エドウィン・アドナーの『男が文化で、女は自然か？』という有名な本があるが、文化を作り出したのも男のはずなのに、文化系の男は男らしくない、女の腐ったようなと言われるようになったの

はいつからなのだろうか。偉大な画家や音楽家も男が圧倒的に多いというのに、なぜ、文化を好む男は女性的となり、スポーツを好む男の方が好ましく映るのか。

一度でいいから男たちの仲間に入って、ラグビーやアメフトをやってみたかった。それができなかった俺は人生の大きなものを失くしてしまったのである。イギリス映画の『リトルダンサー』は、男性ジェンダーの問題を描いたものとして有名だが、この映画では、息子がバレリーナになりたいと言い出したため、お父さんが男のくせにフットボールをしろと怒り出す。ただ、この男の子の場合は運動神経がないからバレエに関心を持ったわけではない。男っぽいスポーツもできるけど、バレエを選択したのである。俺の場合は、運動神経がないため、男性的なものに参加しようにもできなかった。結果的に自分とウマの合う男の仲間もできず、初老になってしまった。若い頃の満たされなかった欲求のせいで、今頃になって、体育系の男の子と話すのが楽しい。

このスポーツクラブの男の子とは去年ぐらいから時々話を始めて、彼のもう一つのバイト先である居酒屋にも２度ほど行った。だいぶ友達になって来た。彼が研修にパスして、個人レッスンができるようになったら、俺も個人レッスンを受けるとご愛嬌で言っていたら、すぐに研修にパスしてしまい、引っ込みがつかなくなって、申し込むことになった。

とはいうものの、一番忙しい時期である。個人レッスンとなればちゃんと通わなきゃいけないし、大変なことになるなあ。まあ、強迫症を治すにはいいかもしれない。忙し過ぎるくらいに身体を動かして入れば心配している暇もなくなるだろう。彼が最初に組んでくれたプログラムは、チェストプレス、レッグプレス、レッグエクステンション、レッグカールだった。トレーニングをしているとあれこれ辛かった日のことが思い出されてくる。思えば、俺は小学校の頃からスクールカーストの底辺だった。スポーツのできない男子は、いくら勉強ができたところでカーストは下になる。しかも、発達障害的で、普通の子が難なくできることができない子だった俺は、何かにつけてバカにされ、嘲笑される毎日だった。そして、中学の時の悪夢のようなジェンダー教育で、俺の心は 15 歳で壊れたのだった。

「壊れる」のと「傷つく」のでは大きく違っている。傷ついても心は動き続けるが、壊れた心は動くのをやめてしまうのだ。多少はジェンダーに傷ついても、どうにかやり過ごせた人たちは、ジェンダーの問題を軽視してしまう。「人間なんて誰だって悩みはある、誰だって恵まれない部分はある、それくらいのことを」と一蹴してしまう。人間には運と不運があって、同じ資質であっても、運よくやり過ごせる人と、巡り合わせが悪くて不運が重なり、結果的に心を壊してしまう人間と両方いるのだ。人間なんて、全く同じ人生を歩む人なんて１人もいないはずじゃないか。しかし、多くの人はそのことに気づいていない。むしろ、不運な人間を見下して、優越感に浸る。人間なんてひどいものなのだ、そう割り切る以外ないのだろうか？

３．男になった６年間

この連載を始めて早いものでもう6年である。毎回同じことばかりを書き綴っているように

も思えるのだが、今振り返るとそういうわけでもない。この６年間相当良い方向に変化した面はあった。

思えばこの 6 年の間に画期的な出来事はいくつも起きた。俺を男にしてくれる出来事だった。俺は体育系の雰囲気に憧れていたので、男同士の裸の付き合いをするのが好きだ。風呂とかプールとか海とかお互い裸になれるところだったらどこでもいい。この連載にも書いてきたが、俺が他の男性たちと裸の付き合いができるようになったのは、この 6 年くらいなのである。それまでは裸の付き合いをした人といえば、20 年近い付き合いのベストフレンドくらいだった。

ところがこの６年間は、マッサージの友人を皮切りに、カフェのバリスタのお兄さん、元教え子のマッチョな学生たち、N 先生など、錚々たる男性たちと裸の付き合いをしている。俺もだいぶマッチョになって来たから、そういうことをすることに違和感がなくなって来たのかもしれないと思う。若い頃の俺からすれば考えられないことだ。

掃除もちゃんとするようになった。体育系のやつは意外に綺麗好きな奴が多い。体が動くのでさっさと手際よく片付けて、掃除機をかけてしまう。むさい部屋に汚くうずくまったりはしない。そう思うようになってから、体育系になりたい俺は掃除もするようになった。知り合いの男性と偶然あったときは固い握手を交わす。写真を撮るときにはマッチョポーズをとる。そういうさりげない男っぽいことが、何気なくできるようになってきた。

今回、身体もマッチョに鍛え上げられればと思う。スポーツマン系のおしゃれをして、爽やかな自分を演出しようかと思っている。あわよくば、おじいさんラグビーに挑戦しようかとも思う。俺は毛深いのが悩みだったが、幸い今は男性のための脱毛用品も出揃って、胸毛やすね毛も綺麗に脱毛できる。マッチョな友人と海に行って、写真を撮ろう。笑笑

思えば、脱毛も俺たちが若い頃は男がするものじゃないと言われていた。しかし、時が流れ、男のエステも生まれた今、脱毛する男の人がいてもそれを誰も奇異な目では見ない。時代は着々と変わってはいるのだった。俺が 30 年遅く生まれていたら、理不尽な思いはしなくてすんだのかもしれないのだ。なぜ、俺は遅れて生を受けなかったのか？？？

４.『ニッポン国 VS 泉南石綿村』
（原一男監督・2018）

３時間半くらいの長いドキュメンタリーである。しかし、流石に『全身小説家』の原一男監督だけあって、飽きさせることはない。アスベストで体を病んだ石綿村の人々が、国の責任を追求して行く様子を８年間に渡って撮り続けたものである。

アスベストの訴訟のことは聞いたことはあったが、自分とは関係のない話なので関心を持ったことはなかった。なんかかんかいいながらも、俺も自己中なのだ。映画が終わった後の舞台挨拶で、「この問題は原発の問題にもつながるのだ」とおっしゃっていたが、原発に関してもそれほど俺には直接的な実感がない。福島の震災は関西大震災よりもはるかに被害は深刻だったはずだが、関西からは距離が遠いため、直接的な実感がわかない。俺は他人の不幸を喜ぶような人間ではないが、自分のことで精一杯で自分と親しい関係でもな

いような人のことを憂慮するほど社会的使命感の強い人間でもないのである。

それと同じで、ジェンダーに囚われていない人たちにとっては、ジェンダーなんて下らないこと。原発よりも、アスベストよりもはるかに害のないものという思いしかないだろう。俺は子供の頃からジェンダーに囚われて来たので、それでは困ると言いたくなる。俺はジェンダーを強要されたことで、心が壊れ、その後遺症で今も苦しんでいるのだから。この映画に登場する人たちも、世の中がアスベストに無関心なままでは困るという一心で、裁判を起こし、この映画にも協力したのだろう。裁判に勝ったからといって、もらえる賠償金は知れていて、そんなことにエネルギーを費やすよりも他の楽しいことをして、人生を謳歌したほうがいいと思う人もいるだろう。しかし、自分たちの死ぬほどの苦しみを認知してもらえないということ。そのことに泉南村の人たちは怒るのである。

ジェンダーの場合も、社会に訴えるのは並大抵の苦労ではない。男性問題自体がまだマイナーだし、男性問題に関心があっても、人によって考えは様々であり、だからグループのメンバーと分裂や対立が起きて、結局運動は広がらなくなる。これまで俺は大阪の天満の男性グループと山科の男性グループ、二つのグループの中心の人と決裂している。その人たちとはもうほとんど会っていないが、サイトなどで見る限りでは相変わらずで、考え方は１センチも変わっていないようである。

男性グループに関わっていた頃、グループの人たちは、「男に囚われている」という言い方をよくなさっていたものだった。男は男性ジェンダーに囚われているから、虚勢を張ってしまう、カッコをつけてしまう、女性や自分よりも下のものに対して抑圧的な態度をとってしまう。そういう伝統的な「男」からは抜け出そう！というのが、男性グループの人たちの主張であった。

そういう運動もあっていいと思うが、俺は逆なんだよ！！！　小学校の時も中学校の時もカーストの最下位にいて、女子からもバカにされ、男性的なことをしようにもできず、男っぽいことをしたいという欲求を抑えに抑えて生きてきたのだ。俺は、男は騙されていると思って来た。男の方がマラソンで走らされる距離も長い、とばされるハードルも高い、着替えの時も女子には更衣室が用意されているのに、男はどこででも着替えろと言わんばかり。勉強もスポーツも男の方が上位であることが期待される。常に「頑張れ、頑張れ、男の子なんだから」というメッセージを送ってこられる。男だったら 10 ぐらい怒られるところを女だったら３ぐらいしか怒られない。「男の方が女よりも上位なのだと信じている」（＝「男に囚われている」）男でなかったら、こんな理不尽は受け入れられないだろう。俺は小学校の頃から「男の方が女よりも上位である」とは信じていない。だからジェンダーの理不尽を受け入れられなかった、だから、心が壊れたのだ。そして、心が壊れてからは、長い孤独で、過酷な旅。そんな俺に「男に囚われている」理論を適用されたのでは、二次被害を生んでしまう。ただでさえ、俺みたいな男は理解してもらえないのに、余計に誤解されてしまうのである。

対人援助学会では、毎年全国大会でポスターセッションや発表をやらせてもらっているが、去年のセッションは話を聞きに来る人は

少なかったしなあーいつまで続けていけるものやら。参加者の人たちと話していて感じることは、やはり大概の人はこういう問題には関心がない、義理で聞きに来てくれる人もいるが、関心がないからその後すぐ忘れてしまう。

また訴え方にも問題があるみたいで、ある援助学会の先生からは「國友さんの発表は怒りが発言ににじむから、もう少しロジカルに」と言われた。また女性の先生は、「女性嫌いの部分がどっと出るから。もう少し、それを和らげないと」とおっしゃっていたのだそうだ。とはいうものの、怒りをぶつけなかったら、何も伝わっていかないことも事実なのである。それはこの映画を見ればよくわかる。石綿村の人たちの発言や表情は怒りにみなぎっている。だからこそ、最高裁で勝訴したのではないか。

裁判は長丁場で、当初は裁判のために頑張っていた人たちの中には、映画の撮影の途中でなくなっている人もたくさんいる。生きて判決を聞くことのできた人たちも、完全に自分たちの思いが伝わった、鬱憤が晴れたとは思っていない。ただ少しだけ前進したことをよしと思わなくてはならないのである。

俺も 54 歳だから、この後２、30 年しか余生がないのに、その間に社会が俺の傷を認知してくれるとは思えない。おそらく死んだ後で、だれか俺の意思を引き継いでくれるのを願うしかない。あわよくば、まだ健在の泉南の人たちのようにまだまだ不満はたくさんあるけれど、多少でも認知されて良かったと思える日が、生きている間に来ればなあーと思う。この『男は痛い！』は意外なところで読んでいる人がいるので、いつかブレイクして、男性被害の本を出したいなあー。でも、それは夢のまた夢である。

映画の最後にこの映画に関わりながら、完成を待たずになくなった人たちの写真と名前と享年が流される。それを見ていると意外に大半の人が長生きで、早死にというわけではないのだが、上映後の舞台挨拶で、「みんな長生きしているじゃないのと思われるのは困るんです。10 年、20 年、ずっと苦しんで寝たきりだった人もいるのだから」という話があった。そうなのだ。今の俺はそれなりに幸せに生きている。しかし、ここにたどり着くまでにはトラウマとの長い、長い、格闘があったのだ。そのことを世間の人は少しでもわかってくれるだろうか？？？？？　俺の切ない旅はまだまだ続いて行くのだろう。石綿村の人にとって、アスベスト問題が人生の宿題であったように、俺の人生にとってはジェンダーが宿題なのである。さあ、これからどうやって、この宿題と付き合っていこうか。

5 月 12 日（土曜日）。母の手術が無事終わったというメールが来た。奇しくも、翌日は母の日である。ローソンで母の日用のカーネーションを買った。とりあえず、母に親孝行しよう。俺の痛い人生にずっと付き合ってくれた唯一の人である。余生を母が幸せに生きて行くことを祈るのみだ。



あまりのウソに言葉を失う

ウソが見え見え国会答弁の破壊力を、目の当たりにするの図

三嶋あゆみ

援助職のリカバリー

《26》

∽「セックスレス」に立ち向かう(7)∽

袴田　洋子

先輩薬剤師の香と飲みに行ったあと、京子は、日本の女性のセックスライフについて、あれこれ考えていた。日本人女性は、やはり自分のからだについて、知らなさすぎる。「セックスなんて、考えたこともありません」「性欲？そんな恥ずかしいこと…」などと言ってしまう。一体、なぜ、こんな事になっているのだろう？　なぜ、下ネタ的な扱いにされてしまうのだろう？　なぜ、自分のからだのこととして、正面から向き合わないのだろう？考えれば考えるほど、不思議な思いになり、同時に小さな怒りも感じた。

香は、現代のセックスレスの問題や、女性のセックスライフについての意識の低さは、「原因なんかいろいろある。長時間労働、家の狭さ、ストレス、疲労、などなど。共働き世帯が増えたが、妻が担う家事負担は、それほど変わりない。家事、育児、仕事に追われて、寝る時間を確保するのもままならない。そんな中で、夫は射精することで得られる快感があるが、妻は、オーガズムを得られず義務で相手をするなんて、とても不公平に思うだろう」と言っていた。また、「ある種の同調圧力もあるかもしれない。こんなことを話したら、おかしな人間として見られてしまうのではないかという恐怖のために、女性たちが、自分たちのセックスライフについて語れないのではないか」とも言っていた。確かに、ネットなどでは、ずいぶん女性のセックスライフについてのまじめな情報は目にするようになったが、ネットはあくまでも仮想世界。本当に誰かが言っているのかどうかは、わからない。女性の性に関する知識や情報は、もっと正しくまじめに世の中に普及されるべきである、と京子は真剣に考えた。

そんな京子の思いを香は感じ取っ

たのか、ある本を紹介してくれた。「ちつのトリセツ　劣化はとまる」という助産師が指導・監修した、女性のからだのケアに関する大変にまじめな本で、京子はさっそくアマゾンで購入し、読んでみた。内容は、本当にまじめな、女性のための女性の膣のケアに関するもので、膣のケアをしないと膣内はどんどん干からびていき、尿もれや便秘など、老化に伴う残念な症状がじわじわと出てくる、というものだった。そして、女性にとって、セックスやマスターベーションが大切な理由も書かれていた。

京子は、今まで考えないようにしていた、夫・弘明とのセックスレスについて、真剣に向き合おうと決意した。

金曜の夜、ベッドに入った京子は、弘明に「ねぇ、エッチしたい」と素直に言った。弘明は、一瞬、驚いたような雰囲気だったが、暗がりで表情は見えない。が、すぐに何も言わずに、隣のベッドで寝ている京子の掛け布団をめくり上げて、京子に抱きついてきた。胸やクリトリスに触れられ、とても感じることができた。指の力が強く入り、やや痛みを感じた時は、率直に「ちょっと痛い」と言った。だいぶ、体が火照ってきた頃、京子は「これ、使って」とベッドの下から、ネットで購入したバイブレーターを弘明に渡した。弘明は、「へー、こんなの買ったの」と言いながら、スイッチを入れて、京子のからだに当てた。痺れるような快感を得て、しばらくして、京子はオーガズムを感じた。それでも、きっと膣の中は、挿入で痛みを感じないほどには十分に潤っていないだろう。京子は、「これ、塗ってみて」とグッズと一緒に購入した潤滑ゼリーを弘明に渡した。ネットではたくさんの種類が出ていたが、口コミ評価が高かったアストログライドという商品を選んだ。塗ったあと、すぐに乾かず、潤いが長時間続くという高評価だったからだ。「たっぷり塗って」と弘明に言って、塗ってもらったのはいいものの、やや冷んやりとした感じだった。アストログライドの他のゼリーには、塗った時に温感がある商品も確かあった。今度はそれを買ってみよう。弘明が挿入しても、痛みは全く感じなかった。1分ほどの挿入を経て、弘明は射精した。

ささやかな妊活をした10年前。10年ぶりのセックス。清水の舞台から飛び降りる…くらいの気持ちだったか、それほどではなかったか、終わってみれば、なんということはない、夫婦の営み。気持ちよかった。いい運動にもなった。10年ぶりだから、セックスって、どうやるんだっけ？というよう

な感じもあった。ぎこちない感は否めない。でも、間違いなく言えるのは、ちゃんとセックスして、よかったということだ。夫は、「京子さんは、セックスするのが、嫌なのかと思っていた」と言った。ささやかな妊活の時期を除けば、おおよそ 20 年間のあいだ、夫は一人でマスターベーションしていたと言っていた。よく離婚にならなかったものだと、京子は、夫に気の毒なことをしたと思った。

気持ちのいいセックスができる幸せ。何歳までできるだろう。お互いの体力に負担をかけずに行う夫婦の営み。次は、いつできるのかな。週に一回、できるかな。二回くらいできるかな。疲れちゃうかな。寝不足になっちゃうかな。夫は嫌がらないかな。本当は面倒臭いのかな。いろいろなことを心配しだすと、きりがない。素直に、気持ちを伝えて、お互い気持ちよくやっていこう。

週明け、京子の熱心な研究報告を聞いたあと、香は、自分の経験が少しは役に立ったのだろうかと、ぼんやり思った。こんな自分の経験。男と女にまつわる、ずっと昔から語られる話。日曜の昼過ぎ。高校一年の娘は、友達と映画を見に出かけた。家業を継いだ夫は、今日も仕事で店を営業している。携帯電話の通知音が鳴り、画面を見る。達夫からのメール。「今度、いつ会えるかな？」

役場の対人援助論

（２５）

岡崎　正明

語りの効用

ねほり、はほり

「ねほりんぱほりん」というテレビ番組をご存じだろうか。

今は放送が終了しているが、これまで 2 シーズン放送されている。なかなか評判が良いようで、おそらくシーズン３も近いうちにあるようだ。

この番組、ひと昔前ならだれも注目しなかった深夜の NHK 教育という枠の放送で、司会は南海キャンディーズの山里亮太と、タレントの YOU。毎回「元薬物中毒患者」や「宝くじ高額当選者」など、顔出し NG のゲストを呼び、一般には知られていないディープな世界の実情を語ってもらう。いわゆるシロウトさん相手のトーク番組である。

そこまで聞いて「ふーん」という感想しか抱かない人も多いだろう。ありそうな番組だと思われるかもしれない。

しかしこの番組の斬新さはここからだ。通常顔出しできない人をテレビで扱う場合、顔にモザイクを入れたり、機械処理で音声を変え、暗い部屋で足元だけしか撮らなかったり…という手法が使われる。しかしそれでは登場人物の個性が出ない。画面も味気なく、陰気な感じやシリアスな雰囲気になってしまう。

そこで活かされたのが、NHK が「ひょっこりひょうたん島」以来伝統的に得意とする“人形劇”というコンテンツ。ゲストにモザイクをかける代わりに、ブタの人形に身代わりになってもらい、司会の 2 人はモグラの人形に。人形の衣装も、本人の様子を反映させて個性の演出に成功。人形同士がトークをする、一見すると子どもが喜びそうなやさしくほんわかした絵面で、話の中身は超刺激的という、これまで見たことないトークバラエティとなった。

このギャップにハマった私は、毎回楽しみに観ていたのだが、その中でちょっと面白いことに気がついた。実は番組に出演した人で、その後の人生が大きく変化している例が結構見られるのだ。

例えば「偽装キラキラ女子」という回に出演した女性。それまで架空のアカウントで、都心で働く美人 OL という設定の人物を演じ（本当は関西在住）、嘘のリア充ツイートを繰り返しては「いいね！」やフォロワーが増えることで承認欲求を満たしていた。ところが出演後に番組がその後の様子を聞くと、いつの間にかツイッターを見る回数が減っていき、気がつくと「他人の評価軸で生きること自体がめんどくさいな」と思うようになり、現実世界の人生に向き合うようになったという。

また「ナンパ教室に通う男」という回に出たアラフィフの男性は、それまで 3 万人以上の女性に声をかけたという強者だったが、亡くなった両親に親孝行したいとの思いもあって番組出演後に結婚を真剣に考えるように。その後知人の紹介で知り合った女性と結ばれ（ナンパじゃないんかい！）、仏壇に 2 人で結婚を報告したとのことだった。

その他にも、整形にハマる女性が顔への執着が薄くなり、「中身のいい人がかわいく見えるということが理解できるようになった」という話もあった。

これらは何を意味するのか。

出演者はそれぞれその世界にどっぷりハマっていた猛者たちである。芸能人からインタビューを受けたくらいで、その生活を変える必然性はどこにもない。別に非難されたり、反省を促されたわけでもない。なのになぜ、こんな変化が起こるのだろう。

私はこれこそ「語り」の持つ効用だと確信している。もちろん全国放送のテレビに出演したという、ドラマティックな体験が影響を与えている点もあるだろうが、それでも本質的にはあの 2 人の聴き手を相手に、自らのことを「語った」そのこと自体が、変化への大きなエネルギーになったのだと思わずにはいられない。



価値観の逆転

エッセイストの末井昭は著書「自殺」（朝日出版社）でも有名な伝説的編集者である。彼は幼少期に、自分の母親がダイナマイトで不倫相手と心中したという経験を持つ。そのことがコンプレックスで、長年誰にも打ち明けられなかったという。

ところがある時、芸術家の篠原勝之（愛称クマさんで有名）と飲んでいて、「実は母親がダイナマイトで心中しまして･･･」と何気なく語ったところ、「すごいね、それは！」と驚くけれど素直に面白がるような感じで受け止めてもらえ、とても救われたという。それ以来、彼はその話を抵抗なくできるようになり、母親のことも許せるような気持ちになっていったとのことだった。

「語り」とは、基本的に２人以上の人間を必要とする共同作業である。
「語り手」の準備性はもちろん、「聴き手」の受け止め方や姿勢も重要な要素となる。どちらが欠けても、その「語り」に大きな効果を生み出すことはできない。いやむしろ「語り」という名前だが、聴き手のあり方のほうが問われるものではないかとさえ思う。
山里と YOU にせよ、前出の篠原氏にせよ、共通するのは聴き手が語り手の話に純粋に興味を持っている点である。そこには「何か売りつけよう」とか「相手をどうにかしてやろう」といった変な下心も裏側もない。ただただ単純に相手の話に関心を示し、面白がって話を聴いているのである。

「ねほりんぱほりん」では司会の２人が「少年院経験者」や「元サークルクラッシャー（グループ内で複数の恋愛関係を持ち、内部の人間関係を崩壊させる人）」など、一般的にはあまり賞賛されない行為をした人々のインタビューをすることもある。
しかしそんなときも基本的に２人は、語られる内容を批判したり否定したりしないし、適当に慰めたり受け流したりもしない。もちろんテレビ的な意図もあるためだが、ただひたすらドンドンと、話を興味のある方に掘り下げるだけである。
特に進行を“ねほりん”こと山里に任せた、“ぱほりん”こと YOU は、「スゲエ」「それ分かる～」などと、ひたすら感心・驚嘆し、ゲストの語りに耳を傾けている。ときには「マジ説教な」などと突っ込むこともあるが、語尾には基本的な相手への肯定がにじんでいるのが分かる。

番組に出演した人たちにとって、こうした態度の聴き手に出会うことはなかなかの衝撃だと思う。
なぜなら今までの人生において、語り手自身が「ろくでもない失敗」「他人に聞かせられないコンプレックス」と、散々な評価を下していた話が、相手から突如「貴重な体験」「ネタ＝面白い話」として、価値があるものだと評価されるのだ。この価値観の逆転は、語り手の中でその意味づけが変化するきっかけに十分なる。

べてるの家の実践で有名なソーシャルワーカーの向谷地生良氏が、「統合失調症を持つ人への援助論　人とのつながりを取り戻すために」（金剛出版）でこんな話を書いていた。
統合失調症による幻聴や妄想のため、自宅に閉じこもり、親に腹を立てては大声を出したり、物に当たったりを繰り返す 20 代男性がいた。両親から依頼を受けた向谷地氏が、自宅を訪問することにしたが、両親は向谷地氏が訪問することの了解を、息子からとる自信が無いという。そこで氏は「向谷地さんという人があなたに相談したいことがあるらしいよ」とだけ伝えてもらうことにした。
訪問当日、向谷地氏は玄関先で男性に「突然お邪魔してすみません。近くに来る機会があったら是非、寄ってお会いしたいと思っていました。私は今、〇君と同様の苦労をしながら在宅でがんばっている人たちを紹介いただいて、経験を聞かせてもらいながら、その人たちの応援の仕方を学んでいます。〇君も苦労を重ねながら、がんばっていらっしゃるということ伺って、相談したいこともあったので…」と語りかけた。すると長年

人と会いたがらなかった男性が「僕に相談ですか？」と戸惑いながらも中に入れてくれ、話ができたという。

これまで男性にとって、自らの語りは「問題」や「症状」であり、それは「支援する立場の人」が聞く「治療」「矯正」されるべきものだった。そんな固定概念は、彼自身にも家族にも、そして私たち社会にもある。向谷地氏の「相談したい」という姿勢は、その価値観を揺さぶるものであり、おそらくねほりんたちの聴き手としての態度も、同じような効果を発揮しているのだと思われる。

蛇足だが、番組の後半にぱほりんがするコメントも秀逸なことが多い。例えば「里子」の回では、出演した里子の高校生男子が「里親には感謝することばかり」とまっすぐな発言を続けた。里親からの手紙を涙ながらに読み、終始感心していた彼女だが、最後に「私が心配なのはあなたが正しすぎるってこと」「エロいこととか考えてる？」と問いかけた(笑)

率直だが愛のあふれる言葉がけ。私は彼女の聴き手としての天性のセンスと優しさを感じずにはいられなかった。

今いる場所で

私たちは人生の中で幾度となく語り手・聴き手を経験する。

家族・友人・同僚・ご近所さん・先生・恋人・お客さん。様々な人と、様々な語りをする。自分の人生にとって大事な人も、1 度きりのささやかなご縁の人もいる。

話の中身もいろいろで、しょーもないことやどうでもいいことから、高尚なことまである。気持ちの上がる話もあれば、ときには気の進まないものもあるだろう。そしてごく稀にだが、人生を動かすような語りに出くわすこともある。また、そこまで劇的なことでなくとも、話しているうちに考えがまとまったり、逆に考え方が変わったり…。そんな経験した人は多いはずである。

思わぬ気づきを得る語り。新たな世界のドアを開くような語り。そういうのって実は、普段思ってもみないような意外な人とのささやかな会話だったりすることが、案外あったりするんじゃないだろうか。

役所生活も 15 年を超え、おかげさまでいろいろな仕事をさせてもらった。様々な分野に触れる中で、特に最近はこれまであまり話をすることが無かった組織や地域団体の方と話をする機会が増えた。

直接今の業務とは関係ないこと。これまで知らなかった地域のこと。そんな話を聞くとき、以前の私ならテキトーに受け流すことが多かったように思う。しかし今では積極的に、「興味が持てる要素はないか？」「今の自分との接点はないか？」と、前のめりな姿勢を心がけるようにしている。

なぜならそのほうが面白い話が聴けることが増え、信頼関係が築ける確率が上がり、仕事が効果的に進むということが経験的に分かったからである。

昨今の若者の興味の幅が狭まっているとか、すぐに似た者同士だけで結びついて広がらないなどという話を聞くと、つくづくもったいないなあと思う。リアルの世界はインターネットよりも変化に富んでいる。YouTube より近所のおっちゃんとの世間話が、人生のターニングポイントになったりするかもしれないよと、ちょっと本気で思ったりしている。

児相（ジソウ）さんのささやかな願い

私には　殺人事件の　予知も予見も　できません。
親を罰することも　私の仕事では　ありません。
貧困にあえぐ子どもに
お金をあげることすら　できません。
残念ながら　私一人では
すべての子どもの　命を守ることなど　到底できません。

でも私には　できることがあります。
最悪の結果に　至るきっかけになり得る
さまざまな家族の課題の　解決を支援すること。
親・子・家族を　応援し
寄り添うこと。
そして　どうしても必要な時に
こどもを　安全な場所に　避難させること。

ただ　その程度。

リクツ抜きで
愛おしみ
生活を支え
成長を促し
不条理を引き受け
損得を無視して付き合う。
そんな　「家族」の力に　かなうはずなど　ありません。

でも　それでいいのです。
私はあくまで脇役。　主役は家族です。
主役を盛り立てるのが　私の役目。
私が大活躍する　世の中なんて　なんだか気味が悪いでしょう？

だから私の夢は
「子どもの死亡事件ゼロ」　なんかではありません。

私の夢は　すべての　子どもと　家族が　大切にされ
私が　必要とされなくなる。

そんな日が　くることです。

臨床のきれはし　浅田 英輔

「書くこと」とは

「電脳援助」を書いていた浅田です。
電脳の援助について書くことが難しくなったので、休憩しておりました。

心機一転、電脳にかかわらず、好きなことを書いていこうと思います。

最近では特に、臨床場面でもエビデンス（その治療法は科学的な根拠が示されているかどうか）を求められます。「効果がある治療をしてほしい」と思うのは当然といえば当然です。我々対人援助職は、クライエントにとって効果のあることをしなければなりません。でも、効果ってなんだろう。治療ってなんだろう。とも思うわけです。エビデンスの示された治療法はありますが、その治療法の周辺には、効果が明らかにされていない様々な技法や考え方、振る舞いが含まれています。「認知行動療法が効かない」なんて言ってしまう人は、形だけなぞっているだけなのだろうと思います。いわゆるエビデンスが明確になっていない他の治療法も同じです。一つの治療法のやり方だけ学んでも、その治療ができるようにはならないのです。いろいろな細かな技法、手法（と呼ばれるほどのものではない作法、考え方）が組み合わされて、「治療」となっているのだと思います。
そういう、明確にされていない「きれはし」を考えていこうと思います。

今回は、「書くこと」について。

書くことは、簡単である。筆記用具と紙があれば、誰でも文章を書くことができる。パソコンがあれば、ほぼ無限に書き続けることができる。なのに、身近に「文章を書いている人」は多くないように思う。書いてみたらいいのにとよく思う。という自分も、かけずにいたのだが。

対人援助をしていると、「自分を表現すること」がとても大事であることが実感される。みんな、健康な人も、そうでない人も、どうやって自分を表現するかどうかに悩んでいるように思う。

よく「自己表現」といった言い方がされることがあるが、自分を表現するということがどんなものなのかイマイチ実態が掴めない。絵を書いたらそれが「自分自身を表したもの」なのだろうか。私がこうやって文章を書いたものを示して「それがあなた自身です」と言われても、ピンとこない。
では、自己表現とは何を指すのだろうか。
文章なり絵画なり、自己表現の手段とされることに取り組んでいると、「これはなんか違う」という感覚に襲われる。うまくできたときでも、これは自分の作り出したかったことじゃないという感覚になったりする。自分が表現したかったことはこれとはちょっと違う、みたいなことだ。

直していくと、しっくりくるポイントが出てくることもある。そういう一進一退を繰り返して、自分にとって「いい感じ」を見つけることになるだろう。

自分にとってのいい感じをみつけることはとても大事だ。そうなるためには、少しだけ「自分がどうしたいか」に向き合う必要が出て来る。「どうでもいい、とりあえずでかしておけばいい」という対応をとることもできる。でもそれは、人から課題などを与えられた場合であり、純粋に自分のためにやりたいことをいい加減にやると、「本当はこうしたいんじゃない」という感覚が頭のスミのほうをうろうろすることになる。

ある程度、満足する形になったのなら、それが多分「自己表現したもの」になるのだ。とすると、自己表現とは、他者が「あなたらしい」とか評価するものではなく、自分が「しっくりくるものが表現できた」とするものなのであろう。他者に評価されてどうこういうものではなく、自分が納得できるものが「自己表現」といえるのではないだろうか。

自分を表現するということは、思い通りに、好きなようにやった結果がそこにある、という意味なのではないだろうか。そこに自己像が現れていようがいまいが関係ない。自分がアウトプットした結果を、自分がOKだと思えればいい。

今の世の中、自分の思う通りにできる場面というのはあまり多くない。思ったとおりに攻撃性を発露するといった暴力的なことはもちろん思う通りにできない（したらまずい）のだが、反社会的なものでなくとも、自分が思っていることをまっすぐ表現する場というものはあまりない。思っていることをそのまま言う人は、あまり社会的でないことが多い。

その点、真っ白な紙というのは自由だ。自分がしたいこと、書きたいこと、言いたいことを紙面（Word上）に書き出すことは、なんの罪もないし、それでいて自由だ。お金もほぼかからないし。人に見せるときには表現に注意が必要だが、誰にも見せない分には、非常に、自由だ。文章を書いていくことについて、誰からも何者からも咎められることはない。ただし、誰にも見られないかわりに、よくもわるくも、「これでOK」とジャッジするのは自分だけになる。「ちょっと違うな」とか「これはいいぞ」とかは、自分が判断する。当然だ。

「どうすればもっと自分にとってOKなのか考えること」も大事だし、ある程度語彙がなければ思い通りにならず、満足しないかもしれない。でも、自分が「これでいい」というものが完成したなら、大変な満足が得られるのではないだろうか。でも、もしかしたら、できたときは満足でも、あとから見ると、ここをこうすればよかった、こっちはいらなかった、など改善したいところがでてくるかもしれない。次はもっと満足するようにしよう、と思う。そこに没頭できるのであれば、それはとても幸せなことなのかもしれない。

最初から自分がOKなものはできないと思う。でも、第一歩として、「こうしたいこと」を自分の外に出すことが重要である。自分が普段考えていることでもいいし、今日あったことでもいいし、文字にしてみるとよい。できれば、事実の羅列ではなくて、感情や考えを入れたほうがよい。書いたものを読み返すと、ちょっと違うなとか、もうちょっと書かないとなとか、自分にとってOKかどうかが気になるようになる。「こうじゃないんだけど、別の表現がおもいつかない」とかもあるだろう。どうするのも自由であるはずなのに。自由の中で、思ったとおりにできないことにやきもきする。やっぱりやーめたとしたくなる。人に見せるつもりがなくとも、なんか恥ずかしくなる人もいるかもしれない。

これが「自他の境界」のひとつなのだと思う。自分とそれ以外を分ける境目なのだろうと思う。あるところで客観性が出てくると、「こんなことしても無駄だ」とか「なんの役にも立たない」とかになるのかもしれない。でも、いいのだ。自分が決めればよい。自分が気持ちいいことを探してみよう。

セラピーの中で、この「真っ白な紙」をクライエントに提示する方法はいろいろとある。でも、クライエントは、そういう場面をあまり経験していない。好きなようにしていいなんて言われても困ってしまうのだ。それは困りごとがあるクライエントに限らないだろう。

では、セラピストはどうだろう。私的なところで、「自己表現」しているだろうか。「自分がしたかったことはこれじゃない、思ったのと違う」という体験をしているだろうか。「思ったとおりできて楽しい！」という体験が必要に思う。毎日の生活が「クッソつまらん」と思っているセラピストは、やはりよい援助はできないのだと、私は信じている。毎日をおもしろおかしく過ごさなくてもいいが、楽しいこと、自分を適度に表現することをしていると、表現の必要性を実感を持って伝えることができ、クライエントが表現するのをうまく待つことができるのではないかとと思う。

むしろ、セラピー自体、「書いてあるとおりにやる」とか「普通はこうするだろう」としてやってもうまくいかない。「こうしてみたら、クライエントにとって面白いことが起きるのではないか」とか「こうしたほうがいいと自分は思う」ということをやったほうがうまくいく。もちろんそれが独りよがりとなることと紙一重ではあるので、注意が必要である。そこで自分を少し掘り下げて、「こうすることがクライエントにとっていいことだろうか」とか「自分が人に認められたいとか、自分の問題を解消したいとか、そういうことを目的にしていないだろうか」とか自分に問うてみる必要が出てくるのだ。

そう考えると、「自己表現」とはなんと大変な作業であるのだろうか。対人援助職である我々も、もう少しだけ、真っ白な紙に自分の考えを書いてみる体験をする必要がある。バウムテストの最低限の教示も、箱庭もコラージュも、最低限の枠を決めて「自由にする」ということがとても大事なことのように思える。自由に振る舞うということは、枠が弱まっている人には危険なことでもあるので、うまくセラピストが枠組みを設定して、「完全に自由ではないけれど、安全な場で自由に振る舞う保証をする」ということがとても考えられた形であると思えてくる。

我々はもっと自由でいいのではないだろうか。
まずは、紙に好きなことを書いてみよう。

一昔前（もっと前？）のネットの世界で、「テキストプレイ」というものがあった。怪しいものではない。ルールは「キーボードから指を２秒以上離してはいけない」だけで、思い浮かぶことをひたすらにテキストを打ち続けるという遊びだ。BS（バックスペース）は使っていい。やってみるとわかるが、遊びにしては過酷だ。事前に、トイレにいって、邪魔する可能性のあるものを排除しておく必要がある。とりあえず、３０分を目標としてみよう。

結構きつい。書くこと自体もきついが、どんどん自分の中になかに入っていく感覚がある。最初は、人に見せるかもしれないという思いがあるが、続けていくとそれもどうでもよくなってくる。まさに、自己表現の世界に入っていけるのだ。ぜひ試してみてほしい。ただし、私は責任を持ちません。

検査者という要因
新版Ｋ式発達検査をめぐって　その㉓

大谷　多加志

これまでにも何度か取り上げてきたことですが、検査には測定誤差というものがあります。つまり、ただ一つの「真の値」を測定できているわけではなく、「多少前後があるかもしれませんが、およそこれくらいでしょう」という、誤差を含んだ測定であるということです。このことが通常あまり問題とされないのは、これは測定誤差をそのデータを使用する上で支障がない程度にできるほど、精度が高いからであると言えるでしょう。近年では、機械やコンピュータを用いることで、およそ物理的な測定に関しては誤差を意識することはなくなってきたと思われます。

一方で心理的な測定ではどうでしょうか。測定する対象が「心理的」な要素になりますので、直接的に目で見たり、触れたりすることができない分、やはり誤差は大きくなるのではないかと思われます。また、検査者がどのように課題を呈示したり、説明したりするかによっても、条件が異なってしまいますので、検査の手続き（どのようなものを、どのように呈示するか。どのように指示や説明をするか）はこと細かく決められています。どの子どもに対しても、なるべく同じ検査状況を呈示しようと、努力しているということです（ちなみに、新版 K 式発達検査では、発達指数にどのくらいの測定誤差が生じうるかを示した「信頼区間」が明示されていません。これは次の改訂において検討される予定です）。そのため、検査はどこで、誰がとっても同じ結果が出るということが、一応の原則というか、前提となっています。

しかしながら、実際には必ずしも「誰がとっても同じ」とは言えないかもしれません。結果に影響を与えるかもしれない要因のひとつが、他ならぬ「検査者」自身であるからです。検査者の現職での経験年数や検査経験、子どもと接する経験の程度など、熟練度が影響するように感じるのはもちろんですが、ここで考えたいのは、もっと根本的に「検査者」という存在自体の影響です。

「この子、男の人だめなんです」

0-1 歳の乳児さんの検査を行おうとして、目が合った瞬間に、子どもに顔をしかめられてしまうことがあります。

そんな時、お母さんからズバッと「男の人はだめなんで…」と言われる場合もあります。「（男の人は）お父さん（さえ）もだめなんで」と言われると、もう検査実施をあきらめたい気持ちにもなります。それでも対人援助学マガジン 14 号の「導入」で書いたように、検査実施のか細い可能性をたぐりながら、試行錯誤をしていくことになります。

無事、子どもの緊張が解けて、検査者との間にラポール（信頼関係）が築けた場合には、もちろん、検査結果は信頼に足るものと判断されることになりますが、一方で、最初から女性の検査者だったらどうだったのだろう？自分ではない検査者だったらどうだったのだろう？という疑問は浮かびます。

このような事態に出会うと、やはり振る舞いとか経験とかという次元ではなく、「検査者」という存在自体が、検査にそれなりの影響を与えているのでは、と思えてしまいます。

余談ですが、全く逆の事態として無事に検査を実施し終えてから、「この子、男の人はだめなんですけど…？」とお母さんが首をかしげることもあります。筆者はわかりやすく男性的なキャラではないので、そのためかもしれませんが、無事に検査が実施できて嬉しいような、なんだか悲しいような、少々複雑な気持ちになることもあります。

「実はラットでも…」

先日、同志社大学で「赤ちゃん学概論」という授業のゲストスピーカーを務めさせて頂きました。同志社大学は「赤ちゃん学研究センター」という、国内でも他に類を見ないような赤ちゃん研究の拠点を備えているのですが、その赤ちゃん学研究センターの先生方が中心になって「赤ちゃん学」についてさまざまな視点から迫っていくのが、この「赤ちゃん学概論」です。講師も学生さんも多様な学域から集まっておられました。理工学部でロボットの研究をしている方から心理職を志す方まで、さまざまな観点から「赤ちゃん」に関心を寄せる人たちの中で過ごす時間は、とても刺激的でした。

その中で、私の持ち時間は、実際に赤ちゃんに教室に来てもらい、検査の一部も用いながら赤ちゃんの発達をみる視点について、実演を交えて説明する、という内容でした。慣れない環境下で赤ちゃんと関わることに言い知れぬ緊張感があり、授業が終わった頃にはぐったりと疲れていました。

そんな私にある先生が質問をされました。実際の検査では、検査者の性別によって結果が変わったりするのかどうか？という質問でした。私は先ほど述べたように、全く影響がないとは言えないかもしれないが、一般論としてある程度慣れて検査が実施できれば、数値的な結果を左右するほどの影響はないと考えられている、と回答しました。

「実はラットでも、違うっていうんですよね」。

聞くと、ラットの実験をする際でも、女性の研究者が実験を行う場合と男性の研究者が実験を行う場合とで、ラットのリラックスの程度が明らかに異なるということでした。「だから、気をつけて実験しないと、と思うんですよね」と、つぶやいておられたのが、とても印象的でした。

一般論と一事例

それでも、基本的には子どもがある程度検査場面に適応することができれば、検査者によって、少なくとも数値的な検査結果には大きな差は生じないのであろうと考えています。ただ、それはあくまでも一般論としてです。ひょっとすると、あるタイプの子どもに対して、あるタイプの検査者が、思いがけず強い影響を与えてしまうケースもあるかもしれません。少なくとも、「検査者」

の影響があるかもしれない、という可能性については、心の片隅ででも気に留めておく必要があるのではないでしょうか。

検査間隔と練習効果

この「検査者」をめぐる問題と、ちょっと似ているかなと思うのが、「検査の間隔」に関することです。講習会などで時折頂く質問に、「K 式はどれくらい間を空けて実施しないといけないのか？」というものがあります。この「検査の間隔」については、2 つ考えるべきポイントがあると思います。

1 つ目が、短期間での再検査が本当に必要なのかどうか、という点です。検査を面白そうに受けてくれる子どもも確かにいますが、やはり検査が子どもに負担をかけているという意識は必要です。本当に、今その子どもの発達を評価するのに検査が必要なのか、代替の手段はないのか、子どもの利益に叶うのかを、まず考える必要があるでしょう。子どもの年齢（月齢）にもよりますが、発達状態が変化するには相応の時間を要しますし、そのペースは子どもによりまちまちです。さまざまな手続き上、「検査をとる必要があって…」という事情があるのは理解できますが、大人側の事情で子どもに負荷をかけているという側面は否定できないように思います。

そしてもう 1 つが、「練習効果」の問題です。昨日検査をした子どもに、もし今日も検査をしたとすれば、当然昨日した検査の内容を覚えているので、「練習」を積んだ状態になり、課題をうまく解くことができるかもしれません。これが「練習効果」です（実際翌日に実施したりしたら、げんなりしてむしろパフォーマンスは低下するかもしれませんが）。他の検査では、この「練習効果」の影響をあらかじめ調べてあって、「○年以上期間を空ければ、練習効果は確認されない」と明示してあるものもあります。

ここで思うのが、先ほどの一般論の話です。一定期間を空ければ、練習効果が認められないというのは、明確な根拠があることです。つまり、一般的な傾向として、○年以上間を空けた場合は検査結果に（統計的に有意なレベルの）練習効果はみられない、ということです。

一方で、相当の年月が経っていても、過去の検査のことを覚えている子どももいます。積木を提示しただけでまだ何も指示していないのに、「これって、こうするやつやろ？」と子どもが作ってしまった、という経験をしたことのある検査者も少なくないのではないかと思います。このような記憶が、数値的な結果にどの程度影響しているのかは、正直なところよくわかりません。余裕があることがプラスに働く場合もありそうですが、その分指示に意識が向きにくくなり、求められていることとずれてしまう場合もありそうです。

ただ、数値的な結果はどうあれ、過去の検査経験が、次の検査に何らかの影響を与える場合があることは、間違いないでしょう。「検査者」の影響を心に留めておくのと同じように、以前に実施した検査の影響についても、「○年空けているから、影響は考えなくてよい」とは、安易に考えない方がよいのではないかと思います。

講演会＆ライブな日々⑮

古川　秀明

「和歌山　串本　台風旅　最終回」

＜トルコアイス＞
灯台からの帰り道、こんな看板を見つけた。



のび～るアイスクリーム。
トルコではアイスクリームやシャーベットなどの氷菓子全体を「ドンドゥルマ」という。

トルコは気温が高いのでドンドゥルマが溶けて垂れるのを防ぐために粘度を上げる必要があり、増粘剤としてサーレップ（トルコの山岳部に自生する植物）の根を使う。
このサーレップがのび〜るアイスクリームの秘密なのだ。
トルコアイスは露店で売られることが多い。
その売り方がおもしろいのなんのって。
日本のバナナのたたき売りとよく似ているのがまたおもしろい。

＜講演会場＞
和歌山に来た目的は観光ではない。
講演会＆ライブのために来たのだ。
お仕事お仕事。
今日の会場はここ。



那智勝浦町体育文化会館
海辺にある立派な会館。
会場周辺の景色が美しい。



なんと目の前に海が広がっている。



これは講演会場からの景色。
まるでハワイのビーチみたいな砂浜が続いていた。



昨日の台風の記事が新聞に大きく取り上げられていた。
しかし！



見て下さいこの抜けるような青空を！
台風一過とはまさにこのこと。
晴れ男の面目躍如。
さて、申し分ない会場に気合いは十分！
しっかりしゃべりまっせ！歌いまっせ！
まずは腹ごしらえ

講演会を始める前にお昼ご飯を頂く。
ほとんどがお弁当だ。
別名ロケ弁と称して売られている
いろんな講演会で出して頂くこのロケ弁が結構気に入っている。
ご飯は冷たいし、揚げものはべちゃべちゃしているし、漬けものは塩分がきつ過ぎたりと、どなた様にもあまり評判のよくないロケ弁。
だけど地方により微妙にご当地の食材が入っていたりして楽しいこともある。
さてさて、和歌山ではどんなお弁当が出るだろう・・・。



おぉ、なんだか仕出し屋さんから注文した感じがするなぁ。
中身はどんなかな・・・。



うわぁ〜、これは豪華！
もはやロケ弁ではない。
揚げものもカラッと揚げてあるし、おまけにまだ温かいぞ。
煮物も酢の物も一流料亭のお味。
出汁巻きは出汁がよく利いて卵も濃厚だ。
おまけにでっかいエビまで入っている。

これはまるで何かのお祝い膳だ。
きっと高価だろうなぁ。
厳しい財政の中でがんばってくれはったんやろなぁ。
あるいは和歌山ではこれくらいが当たり前なのかもしれないなぁ。
腹ごしらえもできたし、さて本番だ。

＜本番・舌好調＞
絶好調ならぬ舌好調。
昼食を食べながら主催者の方と会話がはずむ。
本番前にあまりしゃべりすぎると喉が持たないから控えた方が良いのはわかっているが、楽しいのだから仕方ない。



セッティング前の会場。
まるで体育館みたいな広さの会場に１００以上の椅子とテーブルを並べるのだが、みなさんの手際が良いので１０分もかからなかった。



だんだんと人が集まってこられる。
今日のお話はオープンダイアローグ「対話の力」。
最新の情報と知識を提供する。



今回和歌山までお供してくれてギター。
台風の中あなたもよくがんばったね。
このギターとふたりで日本中旅している。
さて、次はどこに旅しようか・・・。

＜おまけ＞
橋杭岩（はしぐいいわ）
せっかく串本まで来たのだから、まっすぐ帰るのはおもしろくない。



串本にある奇岩群。
向こうに見えるのは大島。
海岸から大島に向けて大小約４０の岩が南西一列のおよそ８５０メートルも続く。
直線状に岩が立ち並ぶ姿が橋の杭のように見えることから橋杭岩と呼ばれている。



朝日がとても美しく、日本の朝日百選の認定も受けている。



和歌山、串本は観るところがいっぱいあったなぁ。
う〜ん、また来よう。
次はゆっくり温泉にでもつかりたいな。
海の見える露天風呂がたくさんあるらしい。
しかし問題はいつものことながら休みが取れないこと。
いやいや、必ずチャンスは訪れる。
最初は台風のスリル満点でその後は素晴らしい景色と観光に恵まれ、仕事も順調にこなせた幸せな和歌山。
そろそろさよならだ。
また来るからね〜！

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

養育里親

～もうひとつの家族～

21

坂口　伊都

はじめに

里子の生活も小学校卒業という一つの節目にきました。進学は、特別支援学校中等部です。在籍の小学校からの進学は 1 人なので、不安や寂しさを感じることもあるでしょうが、小学校時代の先輩や放課後等デイサービスの仲間もいる場所なので、嬉しさも入り混じっている様子です。

小学校とは、丁寧に連絡を取り合いながらやってきました。学校側も「里子」の受け入れに戸惑ったことだと思います。先生方が皆、この子のいいところはどこかを探してくれたり、なだめたり、おだてたりしながら可愛がってくれたと感じています。児童相談所のワーカーも放課後等デイサービス事業者の方もこの子を真ん中に据えていろいろな話し合いを重ねてくれました。

もちろん、学校でも落ち着かない時期もありました。支援学級在籍ですが、さらに引き抜きをして落ち着ける場所に移動することも考えてもらったこともありましたが、実施には至らなかったようです。

この子は、4 年生の 2 学期から児童養護施設から里親家庭、特別支援学校から小学校の特別支援教室に身を置き、今まで学んできたやり方では上手くいかないことが続いたのだと思います。家庭では大人数から 5 人へ、学校ではクラスの中で過ごす体験をして、少人数から大人数へと物理的な変化を経験しています。このような経験を多くの人が体験するわけではありません。療育手帳を所持しているので、この経験のわかりにくさがあったでしょうし、それを誰かに訴

える手段を持ち合わせていない不利益さもあったでしょう。この子自身が、変化に対応していく大変さは、私が想像する以上なのだろうと思います。そして、家庭も学校も同様にわからなさ、あるいはわかってあげられなさを抱きながら葛藤する日々でした。

今回は、里子の新たな門出とその周辺について書いていきたいと思います。どうぞ、最後までおつきあい下さい。

卒業式まであと少し

里子は､卒業式前の 2 月末にインフルエンザ B 型に罹りました。学校では、インフルエンザで休む友達を見て､「俺もインフルエンザに罹りたいわ」と言っていたそうです。いざ罹ると「車酔いや、これは車酔いや」と吐き気を訴えていました。学校を早引きをして、夕刻に高熱になって内科に行き、タミフルを服薬してもその日の夜は「頭が痛い、どうしたらいい？」と唸っていました。その日の晩御飯から自室で取るようにして、初日は父が予防接種を受けていたので二人で食べてもらいました。

翌日には、熱も下がり、もう熱を測らなくても大丈夫と言い張りますが､「測らないと学校に行けないよ、いいの？」と言いながら、何とか測っていました。自室で一日を過ごすのは退屈だろうと、三食には毎食フルーツをつけたり、おやつにもプリンやいつもはあまり買わない苺を出して、やたら豪勢にしていました。マスクをすれば、リビングにいてもいいよと伝えたのですが、マスクはどうしても嫌なようで 3 日間は部屋生活でした。その間ガンダムのプラモデルをひたすら作っていたので、数カ月かけて作る予定でしたが、インフルエンザで休んでいる間で完成させてしまいました。

憧れのインフルエンザが、かなり退屈だと学びながら、いつになったら学校に行けるのか指折り数えていました。待ちにまった学校ですが、初日は体力が落ちていたようで、思ったよりテンションも上がらずに過ごしていたようです。担任の先生は、インフルエンザで休んでいる間、この子にいろいろと手伝ってもらったり、頼っていたのだなぁと感じたそうです。学校でも悪態になってしまう息子ですが、役に立っていたのですね。

卒業式の 1 週間前ぐらいから、担任の先生の後追いが始まり、教員の皆さんが微笑ましく見守ってくれていたそうです。担任の先生は、トイレに行くにでも事前に伝えなければならず、ちょっと先生の姿が見えないと「どこ行った？」と聞きまくり、職員室に「おばさんいるか〜」と言いながら訪問するので、また来たなと噂になっていたそうです。

担任の先生は、受け持ってくれていた間、何度も何度もこの子の担任が私で良かったのかと自問していたそうです。それが、この後追いで、良かったのだと答えが持てたと教えてくれました。私も繰り返し、この子は我が家に来て本当に良かったのか、私が里母で良かったのかと考え込んでいるので、同じように悩んでくれていたのだと知りました。先生と私は、この子を育てていく同志でした。同じ女性という立場で、この子に向き合い、反発され苦しみながら支え合っていたのです。

ある時、里子に「お母ちゃんのこと、どう思っているの？」と尋ねると「何とも思っていない」と言われました。何かショックでした。次に「じゃぁ、父ちゃんのことはどう思っているの？」と聞くと「何とも思っていない」「好きじゃないの？」「今は、何とも思っていない」と言います。じっくりと聞き込んでいくと、この子にとって「何とも思っていない」は、OK だという意味なのかなと伝わってきました。特別や大事という意味合いになるのかなと。本当にこの

子の言葉の翻訳はやっかいです。傷つける言葉を使いながら真逆の意味だったりします。

その担任の先生の卒業文集を紹介します。ここの支援学級は、6年生が1人だったので里子宛てになっていて驚きました。



〇〇へ

ご卒業おめでとうございます。

本当は優しい〇〇くん。人のために何かをしてあげることが大好きなのに、自分の気持ちを上手に相手に伝えることができず、たくさん葛藤していましたね。

「もういい。」と言わず、「一人でいいんだ。」と強がらなくても、あなたの優しさに気付いてくれる人は必ずいます。

そして、その言葉遣いの奥に隠れた優しさに気付いて、あなたの言葉や行動を叱ってくれる先生や友達こそが、あなたの本当の味方です。

笑いあり、涙あり、怒りもあり、あなたと過ごした毎日を、わたしはずっと忘れません。

あなたが、自分を思ってくれる人の言葉にきちんと耳を傾け、心も体も健やかに成長できるよう、心から祈っています。

卒業式では、息子を見るよりも担任の先生の泣き顔を見て、こちらもグッとこみあげてくるという変わった体験をしました。終わることがわかっているけど、終わることが不思議でなりません。里子も先生方に声をかけられ、何でもないよという態度をとりながら、明後日の方向を向いて嬉しそうにニコッと笑っている顔を母はバッチリ目撃していたのでした。

素敵な出会いがあったのだと教えてもらいました。少しずつ、大人を信じたり、頼ったりしてもいいと知り始めているのでしょう。卒業してからもせっせと小学校に通い、先生に会いに行っています。いないとしょぼくれているのですが、それを見せないようにしている様子も学びなのだろうなぁと感じます。「寂しいって何？」と言っていた子でしたから、恋しくて会いに行き、会えなくてがっかりするなんて、素敵な経験ですよね。

新生活

この 4 月からは特別支援学校中学部に進学しました。同じ小学校から進学する子はいなかったのですが、小学校時代の先輩や放課後等デイサービス事業で知っている人がいて、本人は楽しみにしていたようです。

入学式は、小中高の合同で、新入生一人ひとり名前を呼ばれ、元気に「はい」と返事をしていました。かわいい小学1年生から大きい高校1年生までバラエティー豊かな入学式でした。

クラスは、中学部全体で組まれており、1年生から3年生までの混合で、うちの子のクラスは、生徒が 6 名で担任が男性と女性の先生2名が担任でした。入学式後、クラスに行くのですが、広過ぎて場所がわかりません。何回行っても迷子になるだろうなぁという気がします。やっとの思いでクラスに着くと、自己紹介タイムでした。「好きな食べ物は？」と聞かれ「肉」と答えていました。前はそこにラーメンがついていたのですが、もしかしたら食べ飽きたのかもしれません。少しずつ、食べ物の好みや行動が変わ

っていくものだなぁと思います。

特別支援学校に進みましたが、メリハリがある学校生活をしているようです。自分でできることは自分でやりきれるように、自分の気持ちや思いを言葉で相手に伝え、相手の気持ちを受け入れて折り合いをつけながら生活する力をつける等、この子の苦手なことにもペースを合わせながら培ってもらえるのだと思うと心強いです。

何が関係しているのかわかりませんが、この子は年下の位置にいると落ち着いているのですが、最上級生になると偉そうに振舞わなくてはと思うようで、乱暴な言動になってしまうようです。偉そうにしなくても大丈夫だという学習をするためには、何を意識したらいいのかなぁと考えています。人を気遣ったり、やさしくもできるのですが、悪くしておかなければならない感じも抜けません。いい子でいると落ち着かないのでしょうね。やれやれ。

家庭訪問で、担任の先生が 2 人共来てくれました。個別計画書を製作して持ってこられたのですが、この短時間で情報を集めて、よく観察してこの子の事をよく理解してくれているなぁと感じました。いいところも悪いところも、その通りですと大きく頷く内容でした。この 1 年も先生と協調してこの子を育てていけそうかなと期待しています。

新生活になれてきたゴールデンウィーク明け頃から、小学校時代にしていたことが復活してきました。学校から渡される封筒類やお便りを隠します。封筒は、集金袋で中身は入っていません。お便りは、児童相談所に提出を求められている在学証明書の手続き書類等で、この子が叱られたりするモノではないのですが、これ何だろうと思うのか、無意識なのかわかりませんが、後ろめたい何かがあるのか隠そうとする時期があるように感じています。

何か変だなと感じていたら、やはりトラブル発生でした。どうしてもモノやお金に関わる部分で上手く回らないことが起こります。人を信用しようとし始めていたり、アタッチメントの部分では、この家に来て良かったのだろうと思うのですが、モノやお金に関わる部分では、この家にいることがこの子にとってどうなのだろうと考え込んでしまいます。家族の中だけで考えてもよく見えないので、児童相談所の担当ワーカーや周りの人に意見を聞いてみようと思っています。

この子にとってモノは、刺激物として作用しているようなので、できるだけシンプルにしていこうと思っても、家は施設に比べ「モノ」や「お金」が身近にあります。できるだけ刺激物を減らす努力をしても限界があり、そこにトラブルが起きると信頼関係が揺らぎます。どう整理をし、何を大事にしながら過ごしていけばいいのかをみつけていかないといけない時期なのでしょう。頑張っているねと喜んでいる矢先に肩を落とすようなトラブルに出会うパターンは継続中です。そんなことが続いていくと疑心暗鬼になるし、何かしでかしていないか常に疑っているようで、これでいいのだろうかと落ち込んでいきます。

この子を守っていくために何かした時は、早めに気付くようにし、間違った行動をした時は、その行為を責めるよりもその行為の意味を伝えるようにしています。自分が何をしたのかを知ることがいるのだろうなとこの子と過ごしながら感じたからです。その意味をこの子が納得すると、自分の中の言葉が出てくるような気がします。なかなか説明が苦手だったこの子も、「でもな」「なぁ、俺の考えも聞いて」等言いながら、「母ちゃんは、俺といたくないんやろ。どうやったらいたくなる？」なんてことを言うようになりました。「そんなことは思っていません。ずっと一緒にいたいと思っているよ。でも、この行動はダメだね」「じゃぁ、これからどうしたら

いいの」「ふいっと皆のモノを持っていたり隠したりしないで、いつも通り過ごせばいいよ」「それじゃ、いつもと同じやん。何かしないと・・・」「いつも通りが大事。そのいつもを続けるようにしていくことが、これからしていくことだと思う」「それでいいの？」「それが大事なの」。こんな会話をしながら、「あなたの頑張っているところも知っている。母ちゃんは、あなたの事をいつも見ているから、いいところも悪いところも知っているよ。大丈夫、誰も追い出したいなんて思っていないよ。」と話すと、納得したようで、「いつも通りにする」と言っていました。

自分の行動の意味を考えようとして、どんなに稚拙な言い方でも、誰かに説明しようとすることを支えることが、家庭で育てる強みになるのかなと感じています。

終わりに

春は別れと出会いの季節です。今年は息子が二人卒業と入学でした。18 歳の息子も受験で苦しみました。親も辛かったです。親が頑張って何とかなるものでもなく、人生の中で初めて落ちるという経験をし、傷つきも大きかったようです。何とか居場所を確保して、釣りのサークルに入ったと聞くとホッとします。

人との繋がりが、春を運んでくるのですね。小学校の担任の先生と愚痴を言いながら励まし合いました。「私は、学校の中だけですけどお母さんはずっとですよね。」と声をかけてもらいました。何で、そこまで女性に反発しないといけないのかなぁという理不尽さを感じながら、一方で私だから駄目なのか、私でない方が良かったのではないかと自身を責めてしまう。そんな想いを共有できたことに意味は大きかったです。また、担任の先生もこの子と出会ったことで、特別支援教育に関心を持ってくれ、特別支援学校への勤務も選択肢の一つに入れているそうです。

人の出会いは不思議なもので、それぞれ影響し合いながら関係を築いていくものなのですね。この小学校の卒業を機に女性に対する心象が、この子の中で変わってきたように感じます。女性を受け入れたり、認めたりできたのかなと思います。この前も、どこで聞いてきたのか「母ちゃんに俺、苦労かけているから」何て言うのです。苦労の意味わかって言っているのかなぁと思いますが、そんなことを口にするようになったのかとくすぐったい気持ちになりました。

ここの家に来てからの積み上げは確かにあるのだと感じています。その一方で、ここの環境がこの子にとってマイナスに働いている面もあるということが現実なのだと思います。その両方を天秤にかけながら、それが迷いにもなっています。本当に、このまま一緒に暮らしていけるのかなぁ、もう駄目なのかなぁと何回思ったかわかりません。その度に、この子の言動に救われてきました。心理検査では、反省をすることは難しいと言われましたが、この子なりに内省をしているのかなと感じる場面も増えてきました。

後何回、もう駄目なのかなと思うのでしょうか。そう思う時の心的疲労は莫大なので、そう思うスパンが伸びてくれることを切に祈ります。私にとってこの子は、どんな存在なのかなと考えています。里子に限らず、実子に対しても複雑な感情を抱くので、我が子としての感覚に近づいたのかも知れません。自分自身の中の変化を自分で気づくことは難しいことなのですね。



周辺からの記憶 19

2015 年夏の福島

村本邦子（立命館大学）

2018 年 3 月 5〜9 日、ハルビンに行った。731 部隊の博物館の展示を見ながら、部隊の成り立ちそのものがまったく現代日本社会そのものを表していることを痛感した。悪の全体像は徹底的なビューロクラシーによって分割されているため、個々のユニットで行われている課題に専念している限り、自分は科学を通じて人類の未来に貢献しているのだという幻想を持つことが可能になる。本当にそうなのか疑問は残るが、与えられたものをそのまま受け入れ、真面目に努力する優等生が一番そこにはまるのだと思った。1990 年代、薬害エイズのルーツが 731 部隊にあることが明らかになった時の衝撃は、今も忘れられない。人命より経済を優先する価値観は改められることなく、そのまま原発政策にもつながり、今回の事故（事件？）に結びついたものだ。

3 月 8 日、日帰りだったが、満州（中国ではこれを「欺満国」と呼ぶ。まったくだ）の首都新京（現在の長春）にも行った。4 月には満蒙開拓青少年義勇団として 14 歳で満州に行った藤後博巳さんの話をお聞きしたり、舞鶴にリニューアルオープンした引揚げ記念館にも行ったりした。今や満州は、私にとって、遠い過去の幻などではなく、実体ある現実として存在する。

今回の記録は、2015 年夏の福島フィールドワークのものである。私の中では、すべてが不気味に固く結びついている。



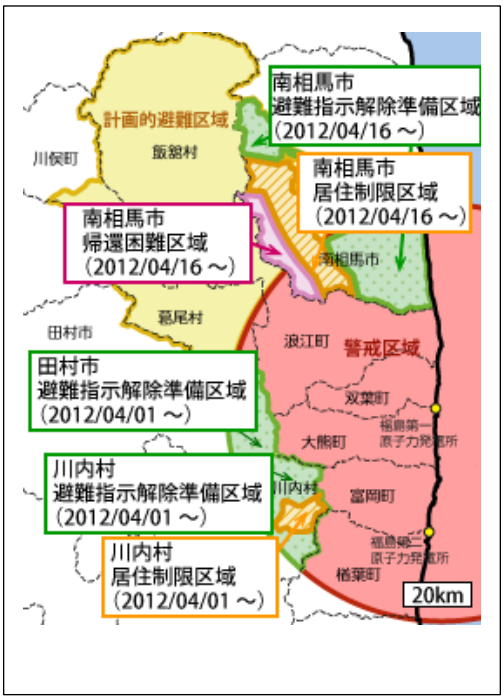


2015 年 8 月 24 日

＜福島から飯館村へ＞

毎年、むつでのプロジェクトの前、夏休みを利用して、フィールドワークを行っている。今年は、フリージャーナリスト藍原寛子さんに福島を案内してもらうことになった。福島駅で落ち合い、藍原さんの車で国道 114 号線を走り、飯館村に向かう。

国は、ちょうど、2015 年 6 月に、「帰還困難区域を除いた」区域の避難指示を 2017 年 3 月までに解除するという方針を出したところだ。



避難区域の状況（2012 年 4 月 1 日）出典：経済産業

○:立ち入り等可　△: 条件付き （注 参照）　X:不可

放射線量から見た各区域の考え方	物理的な防護措置による立入制限の有無	立入り等				
		主要道路における通過交通	住民の方の一時的な帰宅	公益を目的とした立入り	区域内で認められる立入り等に付随する又は準じる作業の実施のための立入り	区域内での宿泊
帰還困難区域 事故後6年間を経過してもなお、空間線量率から推定された年間積算線量が20ミリシーベルトを下回らないおそれのある地域（2012年3月時点での推定年間積算線量が50ミリシーベルト超の地域）	有	△ (注１，注２)	△ (注１)	△ (注１)	△ (注１)	×
居住制限区域 空間線量率から推定された年間積算線量（2012年3月時点）が20ミリシーベルトを超えるおそれがあると確認された地域	無	○	○	○	○	△ (注３)
避難指示解除準備区域 空間線量率から推定された年間積算線量（2012年3月時点）が20ミリシーベルト以下となることが確実であることが確認された地域	無	○	○	○	○	△ (注３)

三区域すべてにおいて引き続き避難指示が出されており、**帰還困難区域**においては、物理的な防護措置（バリケード）により立入りを制限しています。
居住制限区域、避難指示解除準備区域については、日中の立入りに制限はありませんが、**関係者以外の立入り**は控えてもらうようお願いしています。

(注１) 市町村長が通行証を発行した場合等に、実施可能です。
(注２) 一部の主要幹線道路については、通行証の確認が不要で通行可能です。
(注３) **特例宿泊**や**準備宿泊**等、例外的に宿泊を可能とする制度があります。

避難指示区域内における主な活動について　（2015 年 6 月 19 日時点）

出典：福島復興ステーション HP

福島市から少し走ると、渡利地区（福島市）に入る。福島第一原発からおよそ60km。北西に流れた放射線が山を伝って流れ込み、窪地になった道路沿いに放射線の雲ができてホットスポットとなった。事故から3ヶ月後、政府の原子力災害対策本部は、20km圏外で年間積算線量が20mSvを超えると推定される地点を「特定避難勧奨地点」に指定する方針を出し、南相馬市、伊達市、川内村の約260地点が設定されたが、同じように線量が高かった渡利地区は見送られた。

明確な理由は示されず、住民たちは、「渡利地区は人口約28万人の福島市のほぼ中心部にある。渡利小から県庁は阿武隈川の対岸にあり、約1キロしか離れていない。JR福島駅へも2キロほど。花の名所の花見山、弁天山などもあり、季節には県外からの観光客でにぎわう。そんな地区が汚染状態にあることは、国や県にとって、できれば伏せておきたい不都合な真実だったのではないか」という疑念を抱いているとのこと（東京新聞TOKYO Web, 2015年7月28日；www.tokyo-np.co.jp/article/feature/tohokujisin/fukushima_report/list/CK2015072802000164.html）。

県や市の除染作業は進まず、住民たち自身が自宅周囲の表土を削ったそうだ。上から下りてきた指示は「汚染土は各家で保管せよ」で、事故から4年経た今も、除染土は庭にある。7月には、除染モデル地区として、自治会総動員で除染を行ったものの、雨が降ると、再び線量があがる状況が続いている。事故前は約17,000人だった地区人口は、1,260人ほど減った。母子で避難するケースが多いそうだ。

車の中ではあるが、線量計で測定してみると、この時は0.14μSv/hだった。あちこち除染中である。













福島市飯野町（いいのまち）地区を通ると「UFO の里」の看板がある。昔から UFO が出ると言われ、UFO で町興しをしているそうだ。

それから川俣へと入っていく。ここには「コスキンの町」の看板がかかっている。コスキンとはアルゼンチンにある町の名前で、毎年、中南米の音楽祭が開かれており、1975 年から川俣町でもアンデス山脈に住む先住民のフォルクローレの全日本フェスティバルが開かれているという。

川俣町は、大阪府寝屋川市で中学一年生男女の遺体が見つかり、逮捕された容疑者が除染作業員として働いていたということで、今まさにマスコミをにぎわしているところだ。今回のフィールドワークでは、地元の方からたびたびこの話題が出た。実は、この日、川俣町議会は、住民に大きな不安と恐怖を与えたとして、除染作業を中止する要望書を国に提出している。複合的な問題が入り組んで含まれている微妙な問題だ。







川俣町には「きつつきの会」というのがあって、飯館村のサロンになっている。飯館村の小学校は現在３校あるが、この地域に避難していて校舎がある。福島市から通っている子どもたちも結構いる。みんなバラバラに避難していて、朝夕、あちこちから車が来るし、スクールバスも３つか４つのルートあるそうだ。

飯館村は川俣町と隣接しており、東の端は南相馬に隣接している。藍原さんによれば、山が多く、もともと田畑はなく、昭和の初め、開墾者が入植して、畑地が広がったところだそうだ。元は南相馬と同じ相馬中村藩で、藩主は賢者と言われ、このあたりはやませで作物も育たないので、馬を育てよと言って牧場ができた。馬は移動の手段にもなるし、食べられる。皮も使えるし、季節に関係なく売れる。馬や牛、畜産酪農をせよということで、牧場がたくさんあった。

そうこうするうちに飯館村に入る。誰も住んでいないが、原発地区との通行路になっているので、関連の車や人も多い。

ずっと田畑だったところに、今は、除染土の入った黒い袋を２段３段重ねて上に緑のカバーをかぶせてある。以前は黒だけで圧迫感あったが、緑のカバーがあると少しまし。村の中のものだけをここで処理することになっている。線量の低いものを外側に。煙突のように見えるのが、放射線の熱を逃がすもの。筒から間違いなく放射線が出ている。

チェルノブイリの時、植物、菜の花か何かが放射線を吸い込むというので、ひまわりでやってみたそうだが、効果なしの結論になって採用されなかったとのこと。日中は帰ってくる人もいるし、お盆には許可がでるが、夜はパトロール地域となるということ。

















＜細川牧場を訪ねて＞

細川牧場の大きな看板には「花塚ボランティア」の文字、標識には「若者には夢と希望を　老人には愛の手を」と書かれている。細川さん宅は新しく見えるきれいなグリーンのペンキで塗られている。トラックの文字もグリーンだ。庭にはかわいいポニーがつながれている。





細川牧場の主、細川徳栄さんは畜産農家の三代目。競馬の馬の生産者で、中央競馬の馬主の検索をすると、細川さんの名前が出てくる。暴れん坊将軍の白い馬も細川さんのところで生まれた馬だそうだ。相馬野馬追など祭りや時代劇などに貸し出すために、馬を育て、調教してきた。小学校、養護学校、盲学校などに馬を貸し出すボランティアもしてきたという。家族のような馬や牛を見捨てることはできないと、全村避難を求められるなか、避難区域に残され

た牛や馬 470 頭を助け出し、世話をしてきた。

細川さんは、一見飄々と、眼をキョロキョロさせながら、細川牧場を撮った写真集やビデオを見せてくれた。時々、「可哀そう」「これ涙流れるやつだ」「放射能ですべてが狂った」「悲しい本だ」などという言葉がボソボソッと口から洩れ出る。

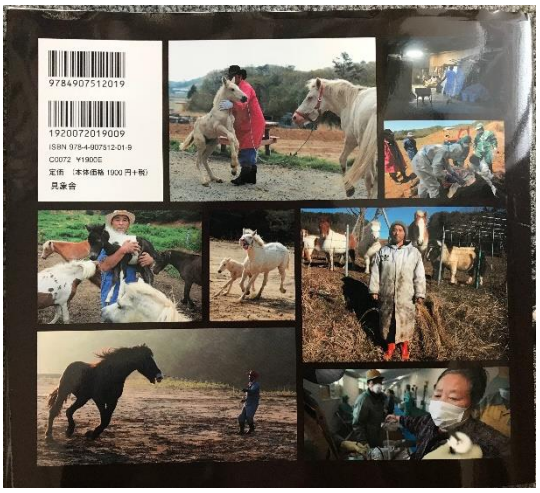




DVD「細川牧場さゆり」は、香取直孝さんが 2013 年に作ったもの。馬が突然倒れ、痙攣を起こして、なす術もなく 1 週間ほど苦しんで死んでいくという映像は、あまりにショッキングだ。ましてや手塩にかけて育てた馬であれば、胸もはりさけんばかりだろう。3.11 以来、すでに 26 頭も亡くなった。東北大の先生が解剖したが、原因はわからないと言われたそうだ。

「全部放射能のせい。ここが一番高いの、村で。木枯れてるでしょ。おかしいでしょ。調べたら、山際の方が高いんだわ。だんだん目に見えてきたっていうのか。風が少ないから集まる。そして、馬に直接あたる。放射線量 4.25。まず、渡り鳥が来なくなった。あとね、蝶々やいなごも奇形が生まれた。燕も来なくなった。何か異変が起きてるね」と細川さん。





細川さんは、震災の後、二人の人間を助けたそうだ。原発が爆発した後の 3 月 26 日は雪が降ったが、一人の妊婦が氷ですべって転び、気を失った。予定日を 1 週間後に控え、避難先から家族の着替えを取りに

戻ってきていた。胎盤が切れたのか、ブツッと音がして、気を失ったそうだ。そこら中真っ赤になって、犬が吠えていた。

細川さんが通りかかったときには、時間も経って冷たくなっていた。誰もいない、救急車もないなか、自分の車に乗せて、病院へ向かったが、車の中で赤ちゃんが生まれてしまった。牛馬の出産には慣れていたが、人間は初めてで、臍の緒を切った時には震えたという。

病院へ急いでいると、スピード違反でパトカーに止められ、事情を話してパトカーに乗せてもらった。雪山の遭難と同じで、眠るとだめだと言うので、お母さんを温め、叩いて起こすと、ちょっと眼が開いて、「この子だけは助けて」とつぶやいて、また眠ってしまう。「いったいこの子を誰が育てるんだ」と必死に呼びかけた。

結果、母子ともに助かり、今は子どもも大きくなって、そこら中跳ね回って人一倍元気なのだそうだ。細川さんがいてくれて、本当に良かったと胸をなでおろした。

「多いときは年間 60 頭もお産をしてきた。農家の貧乏育ちだけれども、馬を育て、教育して生きてきた。それを原発爆発したからって、家族のような馬を捨てて、自分だけ逃げるなんてできなかった。原発事故の恐ろしさは誰もわかんねえ。でも、馬をこうやってね、こういう馬を捨てていくってことはできないよな」

「国や県は、そんなに困ってるんなら、注射 1 本で簡単にできるからって言ってきた。家族同様の馬にそんなことできっか。この国も狂ってるけど、お前たちも狂ってるぞ。あんたらは犯罪人だって言ってやった。そしたら誰も来ないよ。ここに住んでても」

「原発前は 6 千人の人口だけど、広々とした自然の中でやっていた。そういう和やかな村で馬を育ててきて、捨てていくなんてことできない。注射一本で殺したでしょ。馬鹿げたこと。死んだら命は戻ってこない。お金は働けば戻ってくる。お金より命だ」

「死んだ馬は帰ってこない。せめて保証して欲しい。このままでは馬にも申し訳ないよ」。

子牛は 70 万円程度で、馬は牛の 3 倍するが、馬 1 頭 20 万と言ってきたそうだ。20 万円というのは豚の値段。現在、裁判で闘争中。東電に雇われている弁護士に、「真面目にやれよ。弁護士なんだから、間違ってること正しいって言う弁護士いるかと厳しく言った。あくまでも我々は被害者なんだから。すべてが狂っちゃったよ。」





牧場の方も見せてもらった。細川さんが近づいて声をかけると、馬たちがあちこちから集まってくる。原発事故前からずっと、こうやって細川さんは馬たちにえさをやり続けてきたのだ。馬たちはそれをちゃんと知っていて、細川さんを信頼し、慕っている。美しい馬たちだ。馬を「教育」してきたという細川さんの言葉に、ひとりひとり名前と人格を持つ馬との関係が感じられる。それはもうどんなにか愛おしいことだろう。「すべてが狂っちゃったよ」という言葉が頭の中で鳴り響く。むごい。







この日の夜は、福島市の南西部、JR 福島駅から車で 40 分ほどのところにある土湯温泉に泊まった。

2015 年 8 月 25 日

＜(株)元気アップつちゆ＞

翌朝、また藍原さんと落ち合い、「(株)元気アップつちゆ」を訪ね、代表取締役の加藤勝一さんにお話を伺った。

東日本大震災で土湯も大きな被害を受け、震災前に 16 軒あった旅館のうち 7 軒が休廃業し、残ったのは 9 軒。「このままいったら土湯はどうなるんだろう」と惨憺たる思いだったそうである。

線量が低かったため、体育館に千人ぐらいが避難してきて、1 ヶ月半すると二次避難ということで、残った 9 軒の旅館が避難者を受け入れた。飯館や浪江などから来ていて、多いときは 800 人くらい。

土湯の小学校には子どもが 12 人しかおらず、長らく子どもの声を聞かなかったが、避難者は家族連れなので、子どもたちの声が温泉街に響き渡った。小中学校はバスで福島市内に行っていたが、それだけでも気持ちが安らいだ。

8 月になると借り上げ、仮設住宅に三次避難、8 月末をもってみんな温泉街から移っていき、土湯は、また、もぬけの殻になった。何とも言えない状態になって、一段と危機感が募り、何とか土湯を再生させなければと、2012 年 10 月に 29 名の有志で組織を作った。

新たな街づくりを進めていくには核と

なるものがいるから、温泉、河川、砂防、地域の資源に着目して、再生可能エネルギーの街づくりを目指すことにした。国土交通省の街づくり計画で、2015 年から 2019 年の 5 年で 21 億 5 千万、駐車場の整備、水力発電、バイナリー発電に取り組んだ。

今や全国から再生可能エネルギーの視察研修が増え、こけしブームでもある。春にこけし祭りがあって、今年は例年になく人出が多く、16%の伸び。震災前は泊り客だけで 23 万人くらいだったが､震災の年、7 万人に減り、昨年は 18 万人。最終的に 5 軒が廃業し、16 軒の 23 万人と 11 軒の 18 万なので、震災前の状況に戻っている。









加藤さんは、1948 年生まれ、もともと土湯の出身で、旅館をしていたこともあり、社会福祉法人を作って福祉にも携わってきた。温泉街に地域密着型のケアハウスを作り、それを生業にしていた。

20 代の頃、「あらふどの会」という青年団を結成していた。このあたりでは、雪が降ると、雪をかき分けたり踏み固めたりして道をつけなければならないが、それを「あらふどこぐ」と言う。1971 年オイルショックの時代、あの時もダメージが大きく、それまでは黙っていても観光が成り立ち、どこも潤っていたが、これからの観光は左うちわではいかないと考え、24 歳の時に、「あらふどこぐぞ。みんなついてこい」と、十年会長を務めた。

3.11 を受けて、地域を何とかしなければ

と、当時のメンバーに声をかけて、今回の協議会結成となった。「もう一回出番かな」とそんな思いで5年になる。そういう動きが功を奏して、行政も動いてくれた。こちらがある程度方向づけして行政を動かすことが重要だという。

エネルギー源については十分に理解できていないが、現物を見せてもらった。説明資料には英語も入っていて、世界各地からお客が来るという。地熱の力をそのまま使うのがフラッシュ式。高温の九州に多く、別府杉乃井や霧島ホテルなどはフラッシュ式で完全地熱をやっている。バイナリーは低沸点媒体を利用して低温の蒸気・熱水を利用する方式。

土湯は日本初の水冷式バイナリーで、最高400kWを出力する。計画では350kW、月22万kWで、一般家庭の500世帯くらいを賄える。水力発電の方は一般家庭の160世帯、併せて700世帯弱。土湯は250世帯で、旅館を70世帯で計算すると770世帯分になるから、併せて千世帯、3分の2くらい賄うことができる。

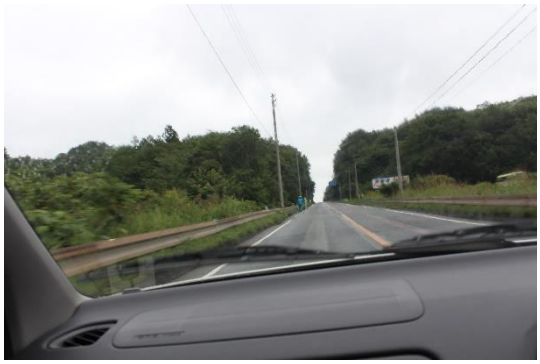


将来的には水力を2つくらい作り、バイナリー、地熱、風力、太陽光、バイオマスの五大再生エネルギーを使って、エネルギーミュージアムを整備したい。廃業した旅館を利用し、ここに来たら再生可能エネルギーのこと全部学べるというようにして、大学との連携、国際交流、全国の学校、行政、企業、各界各層から人を迎え、土湯に泊まってもらえるようにしたい。バイナリー発電後の温泉水と冷却水を使ったエビなどの養殖も考えているとのこと。

次々と飛び出す加藤さんのアイディアに感嘆させられるが、実際たくさんの有名企業から資金のオファーがあったそうだ。ありがたい話ではあるが、自分達の温泉組合から90%、NPO10%が出資して自分たちでやった。新たな事業体が必要だろうということで、株式会社元気アップ土湯、地域の街づくり組織を作ったということだった。

こんな人たちもいるという事実に大いに励まされる。大きなものに頼るのでなく、自分たちの街を大切に思う人たちが、自分たちの持つ知恵や資源を活かし、自分たちの手でできることを積み重ねていく。見習いたいものだ。

その後、また114号線を戻り、34号線に入って、南相馬を通り、「希望の牧場」を訪ねた。







＜希望の牧場＞

希望の牧場は福島第一原発から北西へ14km、双葉郡浪江町立野にある。「決死救命、団結！」とスプレーで書かれた文字や看板はかつての大学キャンパスを思い出させる。全共闘世代の文字だ。









牧場主である吉沢正巳さんは 61 歳だそうで、たくさんの写真や資料を示しながらここまでの状況について語り、牧場の牛たちを見せてくれた。

2011 年 3 月 11 日、大地震、大津波、爆発が起こったが、浪江町にはどこからも一切連絡がなかった。請戸という漁港はレスキューを断念、200 人が津波で亡くなり、600 軒の家が壊れた。海岸から 2 km くらいあった町は壊滅した。

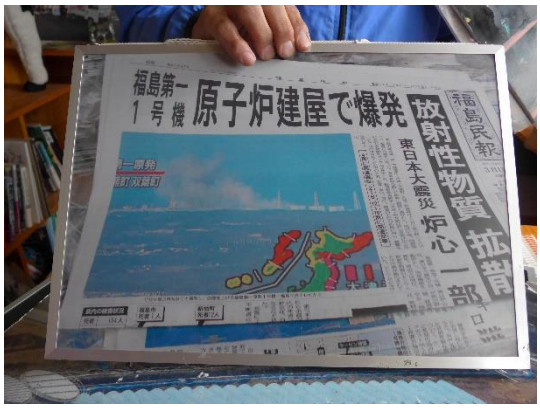
カーナビの TV を見て（この時、福島第一原発の緊急事態宣言、半径 3 キロ圏内に避難指示、半径 3〜10 キロ圏内に屋内退避指示が報じられていた）、近所の人たちと声をかけあい、原発の反対方向、浪江町の津島地区に逃げた。寒かったので、焚火を焚いて肩を寄せ合った。3 月 14 日に 3 号機が爆発し、吉沢さんはその爆発音を聞いたという。



「これは森住さんという写真家がヘリを飛ばしてとった写真。こちらは 15 日に吹飛んだ 4 号機の写真で、海側から撮った貴重な写真もの。ひどい状態の建屋の姿ですね」

15 日、2 号機が大量の放射能を放出し、4 号機が爆発、1 号機 2 号機の放射能も合わさって、逆にそちらの方にひどいのがきていると、15 日になって初めて連絡がきた。みんな大慌てで逃げた。山を越え、二本松の東和に逃げたが、道路はそこら中壊れ、ガソリンスタンドから一斉にガソリンがなくなった。自衛隊の装甲車もきていたし、放射能化学兵器に対応する部隊も道路沿いにテントを張り野営していたが、15 日にはみんないなくなった。

これは、とうとう配ることのできなかった 13 日の新聞。みんな避難して配れなかったものが山のように残った。



会社から預かった 330 頭の牛をどうしたらいいのか、二本松のエム牧場にいる社長と相談しながら、ちょうど避難路となった 114 号線を行ったり来たりして、発電機で水をまわし、牛に水やえさをやり続けた。

3 月 17 日、一人牧場にいると、自衛隊の放水作業の噴煙が見えた。ちょうど自宅から原発が丸見えで、その噴煙を見ながら、「自衛隊のほとんどは死ぬのだろうな」と思った。ちょうどその頃、東電の社員は撤退ということで、第一原発から第二原発の方に逃げたと知って、「ふざけんな。自分たちが作ったものを制御できずに逃げ出し

て、自衛隊にやらせるなんて、ふざけんじゃねえ」と激しい怒りが沸いてきた。

その日のうちに、東電の新橋本店に乗り込んで抗議することを決め、翌 18 日に乗り込んだ。言いたかったのは二つのこと。「牛は全滅するだろう、損害賠償の裁判を必ずするから保証しろ。もうひとつは逃げんなよ。自衛隊が命を懸けて頑張っているのに、自分たちが作ったものを制御できないと逃げんなよ」。最後に対応した東電総務は泣いていた。

それから、経済産業省内の原子力安全保安院へ行った。「安全と言っていたのに、とうとう爆発したぞ。官房長官に会わせろ」。官房長官が原発爆発事象という言い方をしていて、それがどうも評論家的で責任のない言葉に聞こえた。取り次いでくれたが、「アポなしに突然というわけにいかない、出直して来い」と追われ、都合 1 週間ほど東京にいた。

エム牧場の社長は、東電に乗り込んだ 18 日に、牛舎においておけば全滅するからと、牛を全部放してしまっていた。社長のところに行き、「見捨てられないんだ。えさ運ぼう」と、3 月 23 日から、社長と一緒に、3 日に 1 回、フレコンバックに入った豆の搾りかすなどを運び込み、さっと帰るということをしていた。

そうこうしながらも、よその牛舎が気になった。どんどん牛が死んで、全滅していった。牛の死骸がそこら中にあった。「これは牛たちがえさを待っている写真。これは殺した牛を埋めた穴。茶色のは全部蛆。隣はこういう状態でした。すべて原発の爆発ということですけど」。

それを見て、「牛飼いとしてこういうことはしないでおこう。自分たちで飼ってきた牛を牛舎の中でこんなふうにするなんて」と考えた。それで、みんなとは逆の判断、逆の行動をとった。生かそう、見捨てられない。

5 月 12 日、国は、警戒区域に生き残った家畜を全部殺処分すると決め、殺処分が始まった。片端から豚を捕まえては虐殺していた。犬猫ペットについてはレスキューを認め、支援団体がえさを運んだりしていたが、家畜はだめだということに納得がいかなかった。







4 月 22 日、原発半径 20 キロ圏内が警戒区域に指定されてから、全部封鎖されたが、バリケードを乗り越えてえさを運んでいた。警察に捕まって始末書を書かされたことも度々あった。

浪江町の仲間の牛たちの写真が、フライデーに載った。やむを得なかったと思う。津波の現場にも助けに行くことができなかった。原発が爆発したからどうしようもなかったと思う。ほとんどの業者は殺処分に同意するしかなかった。

ただ、自分たちは逆の方向に行こうと思った。

吉沢さんたちは、「希望の牧場ふくしま」というプロジェクトを作って、被曝を調べようとしてきた。今、20 頭ほどにカネボウ化粧品のような白斑現象が出ている。専門家に来てもらったが、「病気ではないようだが、色素が変わっている。わからない」と言われた。農林水産省の大臣に調べて欲しいと申し入れし、血液中の微量成分、銅が極端に不足していることはわかったが、模様については結局わかりませんということで終わった。

子どもたちの甲状腺についても国は因果関係わからないと言っている。研究者が毎月のように来るが、被曝の影響だと論じることには勇気がいる。福島の復興を妨害する風評を立てるなと統制抑圧がかかる。5 年かけて牛を生かしてきたが、10 年かけて徹底的に因果関係を問い続けていきたいと思っている。













去年の 6 月 20 日、農水省の玄関口に白斑模様の牛を連れて行った。日比谷図書館で警官ともみあいになったが、本気になって迫っていきたい。国は今、再稼働に向けてまっしぐら。川内原発も再稼働でトラブル、桜島も怒り狂っている。

渋谷で 120 回にわたる街頭演説を続けているが、あたりは福島の電気で非常に明るい。新宿、渋谷を 24 時間眠らない都市にするために、今、山手線の工事している。東京首都圏 3 分の 1 は福島の電気。そして自分たちには帰る場所がない。



放射線で真赤な地区は山間部。機械も人も入れないから、除染できない。そこに水源があって使えない。請戸の漁港ももう二度と漁はできない。幼稚園、小中高、みんな廃校になり、浪江町小学校は全国 50 ヶ所に散らばった。



双葉町、大熊町に中間貯蔵地はできない。土地を売った人は 2300 人中まだ 5 人で、半分は行方知れず、用地交渉もできない。土地の値段も事故によって評価が低くなっているから売らない。処分所などできず、あちこちに仮置されているフレコンバックがそのまま残る。10 年、20 年とそっくりそこに残ると思う。あちこちで膨大な予算をかけてかき集め、袋詰めして積み上げ、

そんな状態で避難指示を解除しようとしている。

楢葉町は 9 月 10 日。来年の 4 月 1 日は尾高区解除で、小中学校は授業を再開と言っている。賠償の打ち切り、6 年、7 年経って、国ももうおしまいにしようとしている。そして、この地域は放射能と妥協しながらあきらめようとしている。

馬場町長は浪江を「流浪の街」と表現した。根なし草のジプシー。浪江町の人たちは、たいがい 7 回も 8 回もあちこち行っている。浪江町役場も 4 回移転している。みんな帰らないだろう。子育て世代は帰らない。帰るのは 2 万人の 1 割、高齢者だけ。仮設暮らしで疲れた人が放射能と妥協する。「2 マイクロシーベルトあるけど、そのくらいいいだろう」と妥協する。そして、いずれお迎えがくる。浪江町はチェルノブイリのようになる。

浪江町の震災関連死はもう 400 人近くなっている。津波で 200 人死んで、そのうえに 400 人。避難民がアンケートに「生きていたくない」と書く。自殺者が何人も続き、浪江の津島では、刺身包丁で腹を切った人がいる。どんな気持ちだったか。これはまさに棄民だ。

浜通りの電気によって関東が成り立っている。栃木県、埼玉県、東京の電気を新潟、福島、青森の電気が支える。大間原発も建設中。危険なものが貧しい地方に集中的に作られ、事故が起きればこんなことになる。

東京電力は、第一原発を作る時、もう 10m高くする予定だったが、原子炉を冷却する海水をくみ上げる電気代がかかりすぎるからと落差を下げた。当初から経済コストを最優先する発電するシステムだった。想定外という話を事故当時は信じていたが、予定より 10m下げたと知って、「俺たちは何だよ」と憤りを感じた。これは人災。人間の判断によってこの事故が起きた。絶対安全という国や電力会社の話はもともと信用していなかったが、よりいっそう深く疑うようになった。

吉沢さんは、渋谷で言うそうだ。3.11 は終わっていない。また近いうちに地震とか津波がある。あちこちで地震が起こっている。ついこの前も、小笠原で海底深い地震があった。浅いところだったら同程度の津波だった。人は、自分には起こらないだろうという願望のもとで生きているが、2020 年にオリンピックをやろうとしたら、実は東京直下の大地震だったなんてことがあるかもしれない。火山の噴火、予兆がそこら中にある。そういうなかで原発が安全なんてはずがない。

ドイツ、イタリア、スイスもやめようとしている。ドイツの TV 局が何度も来て、「日本はどうして大人しく何も言わないのか」と聞いてくる。いろいろ考えてみたが、究極はドイツ国民と日本国民の実力の違い。日本は熱しやすくさめやすい、忘れやすく騙されやすく、最後には「まっいいか」みたいな、あきらめる性分の国民だとつくづく思う。

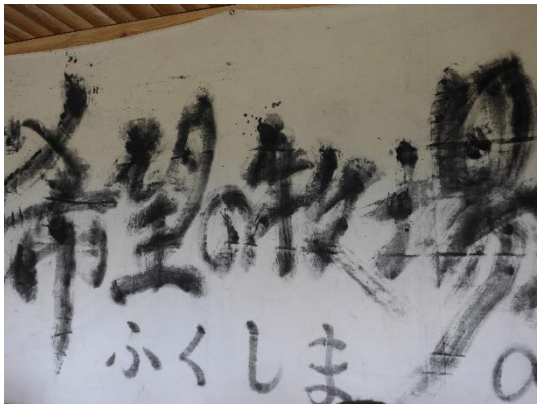
でもドイツでできることが日本でなぜできないのか、やる気の問題は大きい。ソーラーシステムは全国あちこちでやられている。自分たち避難民こそ声をあげていかなければいけない。原発の時代を終わらせなければいけない。渋谷の雑踏で、スクランブル交差点 30 万の人が通る。右翼団

体の街宣よりも大きな声で語る。今も１万円札を募金箱入れてくれる人がいる。眼が合うと、こちらの言っていることが入っているのがわかる。明日は我が身かもしれない。

浪江町には発電所がない。浜通りは関東の電気供給基地で、原発を引っ張ってきて仕事ができ、そこに夢をもった時代もあった。でも、こういう事故があって、ぜんぶパーになった。そして未来がない。避難しながら、かつての絆を断ち切られ、散り散りになっている。2 万人の 3 分の 1、約 7 千人は他県に避難している。県内もあちこち。福島、いわき、南相馬、復興住宅が間に合っていない。おそらくオリンピック準備のためにお金も人も東京に行く。

実は、浪江には発電所がない。吉沢さんたちが、ずっと尾高・浪江の原発反対をやって作らせなかった。

「たった 2 人が反対して白紙になった。ところが隣の原発が浪江をぶったぎっている。僕らの場所は絶望的な場所。何の希望もない。ここに『希望の牧場』と書いてくれた人があった。悔しくないか。希望は自らが行動してつくらなければならない。絶望状態では心が折れてしまう。どんなにひどい場所でも、330 頭の命がある。人間はどんなふうに命を扱ってきたのか。売れない牛を飼うこと自体悩むが、でも、行動あるところに道は作られるだろう。事故にあったけれど、ひとつのチャンスが来ているともいえる。今 61 歳、人生残り 20 年かけて原発を終わりにする。叶わなくても、語り部とかアジテーターをやっていきたい」。吉沢さんは時にユーモアを交えながら熱く語る。





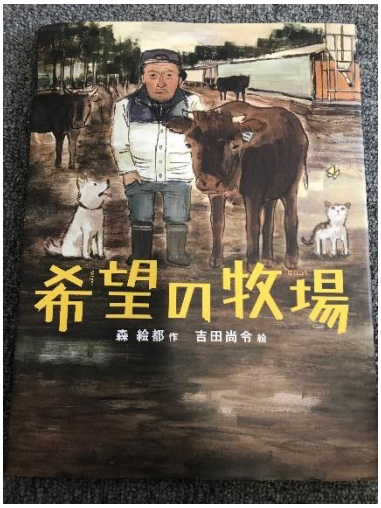


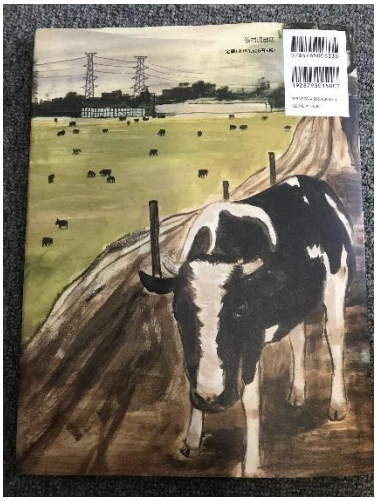
「原発一揆」だと言って、警戒地区に留まり 330 頭の牛の世話をし続けているという吉沢正巳さんのことを、私は、2012 年に出版された『原発一揆』（針谷勉著、サイゾー）で知り、2014 年に発行された絵本『希望の牧場』（森絵宮古作、吉田尚令絵、岩崎書店）、2015 年 3 月に出版された『牛と土～福島、3.11 その後』（眞並恭介著、集英社）など追っていた。



吉沢さんの父親は、満蒙開拓団として中国東北部に入植したが、関東軍に捨て置かれ、シベリアに抑留された。3 年後、父親は戻ってきたが、国は何もしてくれなかった。これは、棄民である、これは今回の原発事故と同じだと思った。すべてを失って戻ってきた父親は、千葉で開墾を始め、その土地を売って手に入れた山林の一部が希望の牧場だという。そして、吉沢さんは、実は、関東軍が逃げ出した後、父親が自分の母と子どもたちを自分の手で殺めたという衝撃的な事実をずいぶん後になって母親から聞かされる。

敗戦後の混乱のなか、自分の手で家族を殺めたという話は私も複数聞いている。そして、そんな地獄のような苦しみの中から何が生まれてきたのかについて、虐待やDV、性暴力に関わる臨床心理士として関心を持ってきたのだ。それは、ここでは、こんな形で希望の灯を燃やし続けるエネルギーとなっている。





希望の牧場は、浪江町と南相馬の境界線上にある。2012 年の警戒区域の再編成で南相馬側が解除になり、牧場入り口がたまたま南相馬側にあったため、出入り可能となった。牧場の大半が浪江にあるため、行政は入り口にバリケードを置こうとしたが、激しく抗議して撤回させたそうである。南相馬にかかっていたからこそ、早い段階で、電気を引き、電気牧柵で牛たちを囲い込むこともできた。これが、「命の境界線」の意味である。20 キロ圏内で引いた「命の境界線」は、希望の牧場の牛たちだけでなく、人の命にも他の動物の命にも致命的な影響を及ぼしたはずだ。













希望の牧場入り口近くには、浪江町の境界上にバリケードがあった。バリケード前で試しに線量を測ってみると、0.53μSv/h。

「除染作業中」の文字がなんだか滑稽に見えてくる。「みんなと真逆の道を行く」と決めた人たちの存在は、たしかに希望である。同じ所で同じことはできないとしても、自分のいる場所で、命の抵抗にささやかに連なりたいと思う。

つづく

病児保育奮闘記

(18)

子どもサポート H&K
大石　仁美

若葉の輝き

子どもの成長に接する幸せ❤

わたしたちの施設での利用者第一号さんは、いまや大学生。この 15 年間でおよそ 800 人が登録し、利用してくれました。ひとりひとりの顔を覚えているわけではありませんが、それでも利用回数が多く、手を掛けた子どもの顔は忘れることはありません。

一人の子どもにたっぷりと手を掛け、見守れるのは、会員制にしたおかげだと思います。

本当に子どもの個性は千差万別。親も生まれも育ちも違うわけですから、当たり前なのですが、ひとりひとりの子どもが見せる表情やしぐさ、日々の成長具合や遊びの多様性、食べ物の好みや食べ方のくせ、自己主張の仕方、泣く、怒るだけでなく、すねる、無視する、隠れる、寝て過ごす等、可愛くない表現も含めて、なんとも面白いというか興味深いのです。

どんなに似ていても、同じ人は自然界には一人もいません。

この当たり前のことは誰もが分かっているはずなのに、専門家といわれる大人たちは、ひとくくりにまとめようとし、さらに細かく分類しょうとする。それは専門分野の中だけにしておいて欲しいものです。

際立って特徴のある子どもへの対応の仕方などのアドバイスは、とてもありがたいけれど、それ以上はな環境の中で、愛情たっぷりに育てられた子は、豊かな個性を自ら育み、育っていくことを実感するからです。

おおらかに子育てが出来るよう、親を支える仕組みこそ欲しい。

さて、家ではわがままを言って親を手こずらせたり、わざと親がイヤがることばかりしている子もいるようですが、どんなことをしても、最終的には親は自分を許し受け入れてくれることを知っているからで、また、そのことを確認する作業なのでしょうけれど、自由奔放に自分を出せるというのは家ならでのことです。

そんな子も一歩外に出ると、お友達や親以外の大人の目を意識してか、緊張しつつ自分の力を発揮し行動していることが多いです。うまくバランスをとっているのですね。

病児保育室「子どもサポート H&K」は、家庭と外とのちょうど中間にあるようです。

甘えてみるけれど、さほどわがままは言わない。

たとえば、おひるねを嫌がり、もっと遊びたいという子には「いいよ。でも、時計の長い針が一番上にくるまでだよ」というと、納得してすんなり午睡に入ってくれます。あるいは、「布団に横になってご本読んであげようね」というと、素直に布団へ。またある時

は、「寝なくていいよ。ウソ寝してね。そうすると、小さい子はお兄ちゃんの真似をして、すぐ眠ってくれるの。助かるわ」

そのうち、ウソ寝のお兄ちゃんのほうが先にスースー寝息をたてていたりして。

また競争心を刺激して、「さて、誰がいちばん先に眠るかな」と声掛けすると、すぐに目をつむりウソ寝態勢に。不思議なことに人って、目を閉じると自然と眠たくなるんですね。いつの間にか、スースーと寝息が聞こえてきます。

こんな可愛い子たちに囲まれて、これを仕事としている私にストレスなどたまるはずがありません。

部屋いっぱいに散らかしたおもちゃも、「さあ、ご飯の前に片づけようね。」と声掛けしたり、「もうすぐお迎えの時間だから一緒にお片付けてつだってくれる？」と声掛けすると喜んで手伝ってくれる子どもたち。もちろん「うわっ～はやい！」「きれいになったね！」「ありがとう。助かるわ！」などの言葉かけは忘れません。

中にはおどろくほど丁寧にする子や、お家でのしつけが行き届いているのでしょうが、言われなくても遊び終わったら、すぐにお片付けする子もいて、意外にも「家ではいくら言っても動いてくれません」などという言葉を聞くと、へぇ、そうなのか。なるほど、そんなふうにしてうまくバランスとっているんだなぁ。でも、教えられたことは外ではちゃんと出来るんだ、と笑えてしまいます。

年長さんになると、子どものリクエストで、トランプやカルタなどのゲームをすることもあります。小さい子は大人が膝に抱いて、わたしもぼくも一緒に参加したよと、楽しい雰囲気を味わえるように、花を持たせたりしますが、大きい子とは真剣勝負。手加減はしません。何度しても負けると泣きだす子もありますが、手加減して勝たせても、本当の喜びはないと思うのです。たまに大人の目を盗んで、自分に有利なようにズルする子もありますが、これは見逃すことにしています。それとなく、知ってるよと伝えるようにしていますが、突き詰めたりはしない。ズルして勝ったとしても本当の喜びでないことを本人が一番知っているからです。

安心して甘えられる、たまに厳しい時もあるけど、大人が一緒に遊んでくれる家庭的な少人数の保育所。そんな場所は、家と外との中間でしょう。

だからこそ見える子どもの素敵な素顔がある！

これが醍醐味です。

ここで最近来室した子どもを二人紹介しましょう。一人目は5歳の女の子です。

彼女は赤ちゃんの時から、愛らしい癒し系の女の子でした。抱っこすると、なんとも幸せな気持ちに満たされる、誰もがそう思う不思議な雰囲気を持った子でした。じっと眺めていたい。

5歳になってもその雰囲気は変わりません。ますます磨きがかかって、その日、折り紙で作った蝶（たぶん蝶）を髪に飾って現れました。自分で作ったそうで、とてもキュート。カラフルな色合いがおしゃれで、よく似合い、まるで絵本から抜け出してきた、というよりメルヘンの世界を自由に出入りしている女の子と言った方がぴったり。

「あら、すてきね。」

「ありがとう。」

既成のものではなく、紙で作ったところがまたいい！今日は彼女はどんな遊びをしてくれるのかな。それを眺めるのがまた楽しい。だれもがきっとこの子に会ってみたくなるでしょう。どんな子かな、想像はどんどん膨らむはずです。

同じく5歳の男の子。小さいときから体格が良い子で、豪快な食べっぷり。見ていて気持ちがいいほど。自立心も旺盛で、意思が明確な分、かなり頑固。それがまた頼もしさを感じさせる子で、私的にはぞっこんほれぼれ。5歳になった今、身体はラグビー選手体型。筋肉質で、スナップを効かせた投球に「おっと危ない！」と、思わず、身構えてしまうほど。

病気で来ても熱がなければ、いえいえ少々熱があってもエネルギーに満ちているときは、狭い室内でボール投げもありなのです。

本当にしんどいときは「寝たい！」と自分から布団

でコロン。そのまま数時間眠り続けます。眠ることで自然回復をはかる術を本能的に心得ているようです。逞しい子！　将来、困難に立ち向かっていく時のエネルギーたるや、すごいものを秘めている気がする。
さらに、お友達におもちゃを譲ったり、自分より小さい子を気遣ったり、優しさも際立っていて、心の成長にも目を見張るものがあり、この先どんな少年に成長するのか、どんな大人になっていくのか、想像するだけでわくわくするのです。

自身の子育てでは見えなかったこと、解らなかったことが、他人の子育てを手伝う中で見えてくる。私自身そういう年齢になったのだなあとしみじみ思います。

若葉の輝き、それは命の輝き。年寄を夢見心地にしてくれる、命たちに感謝です。

対人支援点描（14）

「当事者という存在」

小林　茂（臨床心理士/牧師）

はじめに

短信にも記したことだが、使用する携帯電話がガラケーからスマートフォンに変わって、生活のなかで変化したことが SNS をするようになったことがある。等の昔に SNS を始めた人には、今更その話と思うかもしれないが、使い始めると、遠方のために疎遠になっていた友人、知人との交流が再開されたり、投稿するため日常生活のささやかな感動に意識するようになった。

その最中で、以前勤めていた福祉事業所に通所していた青年の投稿に心動かされた。本人にシュアしても良いという承諾をいただいたので引用したい。

1. ある青年の福祉に対する怒りの思い

「否定するつもりはない
非難するつもりもない
色んな人がいて
色んな背景があって
色んな野望があって
色んな生き様があって
そうやってこの世界は成り立っているけどよ、
福祉、福祉ってあちこちで蔓延ってて
うるせーよって話
ビジネスとしての福祉があるのもよく知ってるし
それによって生きていける人たちがいるのもよく知ってる
人を応援したり
助けたり
自分にしかない能力や才能をもって
人に寄り添う事に対して
対価を支払ってもらうのは
いいと思うし
俺もそれに似た感じで飯を食らってる
だからそれはそれでいいんだけどよ、
最終的に自分自身の足で立って
テメェの人生をテメェで決めるってのがテメェの命に対しての
最高の感謝と
生きるって事なんじゃねぇかなって思って生きてると
疑問を感じるんだよ
この日本で謳われてる福祉ってのに
〇〇してあげる
っていう言い方が
どうも気に食わねぇ
生きる上で支え合うことは必要不可欠だ

けど
ある日突然
お前は障害者(児)だからまともに生きられるようにしてやるよ
なんて事を
なんの躊躇いもなく言われたらどうだ？
そんなのが福祉とか応援って言えんのか？？
俺は到底思えねぇし
こういう事に対しては殊更腹が立つ
そろそろ
増えすぎた福祉を
ふるいにかける必要があるんじゃねぇのって思ってるわ」

2. 障害者の置かれた立場と自意識

この投稿に対しての返事は、彼を知る仲間たちから「いいね」「超いいね」という支持を集めた。もちろん、もともとフォロワーと呼ばれる仲間たちという彼を知る特定の人たちの間でのことだから、正面切って反論や、異論を展開しないのかもしれない。しかし、私の前職場で最初に福祉の現場との出会いから現在まで、彼は一貫して自分が支援者と被支援者という関係に上下関係や、自分が利用されるという違和感に正直に拒絶反応していた。衝動のコントロールがうまくいかないのに無理して自制するあまり、解離を起こしたり、気の許せる人を意識して自分を偽って「枠」に収まろうと努力したりしていたことを思う。結局、私の前職場のある地域から飛び出し、これもまた不思議な結びつきで私の郷里の県に住むことになり、今に至っている。

その青年が結びついた福祉関係の支援者が、彼の信頼できる人となって、その地域を盛り立てている。

私の前職場のある地域には、全国から、そこに住みたいと言ってやってくる人は多いが、現実を知って離れたくても離れる力がない人も多い。その中で、その青年には力とうか、エネルギーがあった。昔の社会や人間のあり方を音楽にぶつけたロッカーのような根性があったと感じている。

そのような青年の訴えが、先に紹介させていただいた投稿の文章である。

この思いと似た訴えが、本人が人を選別するのに、「あなたは当事者の方ですか？」という問いかけと自意識である。自分と相手をどう位置づけるか、この問いかけには、どこかその人のなかにある相手が支援者か、支援業界の人か、そういった警戒感にも似た慎重さが含まれている感じがする。もう少し言い換えれば、自分の仲間か、そうでないか。もしくは、気の許してよい人か、許してはいけないか、という判別するリトマス試験紙のような言葉である。

いつのころからか、いつの間にやら、福祉業界を始めとする支援者が障害者や当事者から警戒され、「してあげる」「される」という違和感に陰性感情が持たれるようになっているのではないか。

3. 当事者という存在

本来、「当事者」とは、何かしらの問題に巻き込まれた当人を示す意味であるが、福祉業界に至っては「当事者」とは障害を抱えた本人であったり、その家族を示す記号となっている。さらに、当事者主権という権利擁護の立場から、当事者とは自らの主体性を含めた概念であるはずである。このことは、単に障害や病があるから、誰でも当事者であるとは言

えないということを示す。本来は、そういうことなのだと思う。

けれども、これが「障害者」＝「当事者」というなかで、これが上下関係であったり、「してあげる・してもらう」といった一方通行の関係を示すようなものならば、これは見直さなければならない問題であるといえる。

障害者や当事者の痛みとして、ふつうに自身の尊厳を訴えているのである。時として障害者や当事者が「してもらって当然」という逆の上下関係を持っていたとしても、そのようにしてしまったのも、やはり同じ根がある。古い表現であるが、ネガポジとして対象となったに過ぎない。

この課題への挑戦が問えないならば、投稿の引用を許してくれた青年が訴えるように、「そろそろ増えすぎた福祉をふるいにかける必要があるんじゃねぇの」という言葉は、確かな現実のものとしてあるのだと思う。

「あ！萌え」の構造

（番外編　その４）

- マイフェアレディとピグマリオン－

総合心理学部　齋藤清二

ミュージカルとして有名な『マイフェアレディ』は、オードリー・ヘプバーンの主演で 1960 年代に映画化され、最近は DVD で手軽に観賞することもできる。この作品のあらすじは、20 世紀初頭のロンドンを舞台に、貧しい花売り娘として育ったイライザという女性が、ヘンリー・ヒギンズ教授という言語学者のもとで、上流社会に通用することばや礼儀作法を身につけ、本物の淑女として成長していくというストーリーである。一般には一種のシンデレラ・ストーリー、あるいは女性のサクセス・ストーリーとして理解されている。しかし、この作品は色々な観点から、とても奥の深い側面を持っている。ここでは幾つかの観点から、この作品について論じてみたい。

『マイフェアレディ』の原作となった小説は、有名なバーナード・ショーによって書かれた『ピグマリオン』である。もともとはギリシア神話に題材が求められている。ピグマリオン自身は彫刻家で、自分の作った女性の彫像にガラテアという名前を付け

て、その彫像に恋してしまい・・というストーリーである。その神話を現代（といってもずいぶん前のイギリス）に舞台を移して翻案したのが、ショーの『ピグマリオン』で、さらにそれをミュージカル化したのが『マイフェアレディ』ということになる。このミュージカルがブロードウェイで大ヒットした時の主演はジュリー・アンドリュースだった。さらにそれを映画化したのが、今私達が見ているヘプバーン主演の映画『マイフェアレディ』というわけだ。

この作品の主題は、理想の女性を自分自身の手によって創造していこうとする男性の物語であると言える。しかし物語というものは、必ずしも主人公（あるいは作者）の思い通りになるというものではない。なぜならば主要な登場人物は、それぞれ自分自身の主体性を持っているからである。実際、ギリシア神話の『ピグマリオン』の最後は悲劇（単純には言えないが）であるし、ショーの原作でも、主人公のイライザは最後にヒギンズ教授のもとを去ってしまう。しかし、『マイフェアレディ』のストーリーは紆余曲折を経て、最後はハッピーエンドとなる。

居場所があるって素敵じゃない？

『マイフェアレディ』はミュージカルなので、ストーリーはその中で歌われる有名な曲とともに進行していく。そのほとんどが素晴らしいものだが、そのうちでも、私が最も好きな曲の一つが、ドラマの冒頭に近い場面、コベントガーデンの広場でイライザが歌う「Wouldn't it be lovely！」だ。曲の美しさ、歌っているオードリー（残念ながら歌声は吹き替えだが）の表情と演技、どれをとっても胸を熱くさせる。

歌詞の内容は、一見単純に見える。「私が望むものは、どこかにある一軒の家。そこには、大きな椅子と、薪をいっぱいくべた暖かい暖炉と、チョコレート。そして私を守ってくれる大きな人がいる。それだけで、私は幸せ」（訳はテキトーです）。

貧しい環境で育ったイライザのささやかな夢を表現しているのだ、とも理解できる。その後のドラマの展開への伏線とも読める（チョコレートや暖炉を与えてくれる保護者としてのヒギンズ教授）。しかし、これは、誰にとっても普遍的な、こころのふるさととでもいうべき情景ではないだろうか。

そう。「居場所」なのである。「安心してそこにいることができる居場所」こそが、全ての人間が求めて止まない、基本的な信頼感をはぐくむところ、なのである。それはあまりにも当たり前のものなので、それが満たされている時には、私たちは何も感じない。しかしひとたびそれが失われたとき、それがどんなに私たちを強い希求に駆り立て、そのためにどれほどさまざまなことが人生に生じてくるか。それは夢であったり、努力であったり、恋であったり、病いであったり、犯罪であったり、生きる意味であったりするだろう。

ドラマの最後に、イライザはもう一度、コベントガーデンの広場へと戻り、自分の「居場所」を再体験し、それに自らわかれを告げる。そして、ヒギンズ教授との最後の対決（と和解）の場へと臨むのである。

「ことば」こそが橋を架ける

映画『マイフェアレディ』の主役はイライザ（オードリー・ヘプバーン）であることはもちろんだが、この作品でアカデミー賞の主演男優賞を獲得した、ヘンリー・ヒギンズ教授を演ずるレックス・ハリスンという男優は、オードリーに負けない、いやそれ以上の名優だと思う。

このヒギンズ教授の役所というのは、とてもおもしろい設定だ。彼は、言語学者（音声学者）で、独身主義者で、（おそらく）マザコンで、永遠の少年タイプの中年（なんのこっちゃ！）だ。頭も良いし、口もたつ。それでいて、自分で自分のことを、紳士で、穏やかな男だと言ってはばからない、嫌みでキザな男でもある。

彼は、言語（ことば）の違いこそが、人間の階級を作り出し、階級間に溝を作り、人間同士の相互交流を不可能にしていると考えている。だから、正しいことばを教育すれば、階級をぶちこわし、人間同士の溝に橋をかけることができると信じている。そして、彼の信念を実践するために、イライザをその相手役（協働者）に選ぶのである。

イライザは貧しい下層階級で生活しているが、その生き方は決して悲惨でもなければ不幸でもない。彼女の父親は、全く働かずに娘に酒代をたかる、どうしようもないなまけもののようにみえるが、彼の生き方はある意味で哲学的である。イライザは決して、惨めな生活から脱出しようとしてヒギンズ教授に接近したわけではない。その証拠に彼女は、ヒギンズ教授に授業料を払う、と申し出る。

「ことば」は人間と人間をつなぐものであると同時に、その人間がどういう人間として自らを構成するかを内側から支えるものである。しかしことばは、時に空虚なものであり、ことばと、行為（愛）との統合が成就しない限り、人間は十全に生きるということはできないのだろう。ヒギンズとイライザとは、時には支配－服従関係に甘んじ、時に対立しあいながら、ことばと行為を結合させるべく、共に変容するものとしてのパートナーとなり、男性と女性、階級と階級、知と愛の間に橋を架けていく。

「わたし」は世界に開かれている

イライザと、ヒギンズ教授が、ヒギンズの母親の家で激しい議論を戦わせる場面がある。そこで、イライザがこう言う。

淑女（レディ）かどうかは、どうふるまうかによって決まるのではなく、どう扱われるかによって決まるのです。大佐は私を淑女として扱ってくれるので、大佐の前では私は淑女でいられます。しかし、教授は私をいつも花売り娘としてしか扱いません。ですから、私はいつまでも花売り娘のままなのです。

これは、かなりすごい主張だ。しかしある意味、日本人にはこれは分かりやすい。なにしろ日本では、世間が自分をどう見るかによって自分が決定されてしまう。つまり、自己（自分）は、閉じた独立した存在ではなく、世界に対して開かれており、世界との関係性が自己を形成する。これは、

あまり良くない意味で、日本人には常識なのだ。言葉を換えると、これは、自己（個人）が確立されていないという意味にも理解される。

しかし、西欧では違う。西欧（特に男性）の個人主義では、自己は、周囲から独立した、自立した存在として理解されるし、それこそが、成熟した自己のありかただとされてきた。それはヒギンズ教授の独身主義に象徴されている。しかし、イライザはそれに対して、「自己とは、世界との関係によっていかようにも変容する」と主張しているわけだ。これは、このミュージカルが大ヒットした時代から約５０年後の、現代においても色あせていないホットな主張だといえる。 結局ヒギンズの独身主義は、イライザとの関係に対して開かれることによって、もろくも崩れ去ることになる。やっぱりそうでなくっちゃね。

「あなた」と「わたし」の関係

ヒギンズ教授の特訓に耐えて、宮殿デビューを大成功裏に終えた直後からの、イライザとヒギンズのやりとりはものすごくおもしろい。舞踏会での大成功を得意げに披露し、盛り上がるヒギンズとそれに喝采を送る大佐、召使い達。部屋の隅にたたずみながら、一人憂鬱な表情のイライザ。

バカ騒ぎが終わり、「さあー。寝るぞ！」と去っていくヒギンズ。一人泣き崩れるイライザ。そこへ、脳天気にヒギンズが戻ってくる。「おかしいなあ、スリッパは何処へ行った？」 。キッ！と顔を上げて、スリッパを投げつけるイライザ。「いったい、どうしたんだ。何を興奮している？」と、びっくりはするが、事態が全く飲み込めていないヒギンズ。

その後のやりとりを全部描写すると、ネタバレになるし、長くなるので、省略するが、ここからラストシーンまで、イライザとヒギンズの長く激しい対決、葛藤、対話が延々と続く。ありふれた男女の痴話ゲンカにも見えるし、非常に良くできたシナリオだとも思える。現実にも良くあるコミュニケーションだな、とも思える。しかしなんと言っても、男と女（一般化するのは危険だが）が、お互いに惹かれあっているのに、なぜか修羅場化してしまうコミュニケーションの見事な範例がここに描き出されているように思えるのだ。一言で言うと、「関係性を巡る修羅場的コミュニケーション」の極めて良質な実例だと、私には思われる。

イライザの関心は「私（イライザ）とあなた（ヒギンズ）との関係」にある。すなわち、「あなたが私をどう思っているのか」「私があなたをどう思っているのか」ということである。しかし、ヒギンズにはそれが分からない。だから、イライザが、「私はこれからどうしたら良いの？」と嘆くのに対して、「そんなことを心配していたのか。色々な方法がある。花屋を開いても良いし、僕の母親に頼めば、誰か結婚相手を探してくれる」などと平然と応じてしまう。ヒギンズに悪意はないが、問題はイライザのこれからの人生であるとしても、その中に「自分（ヒギンズ）との関係」が入っているということに全く気づいていない。

そこでイライザが、「問題は私達の関係よ。人間的な関係がほしいの」と直面化しても、

「もちろん同じ考えだ。これまでもそうしてきたじゃないか。大佐だって同じさ」などと返してしまい、コミュニケーションはさらにこじれていく（といっても、最後は大団円になるのであるが）。

「あなたと私の関係」を直接対話の話題にとりあげても、「関係性に関する問題」は解決されるというわけではない。しかしその直面化は、少なくとも「関係性の変容」のきっかけにはなるだろう。色々なことを考えさせられるのだが、映画の最後のシーンのヒギンズのセリフが再び「スリッパはどこへ行った？」だったのが、妙に印象に残っている。

全ては主観的なもの？

イライザの突然の予想外の行動（要するにキレたのであるが）に、最初はどぎまぎしていたヒギンズであるが、途中からどうやら状況が理解できてきて、落ち着きを取り戻す。そして、こうイライザに告げる。

「心配することはない。イライラというのは、全て主観的なものだ。ちょっと泣いて、お祈りをして、一晩寝て起きれば治る」

この「全て主観的なものだ」という言い方は、現代の医療現場でもよく使われる表現だ。一般には「それは単なる気のせいだ」というような意味で用いられる表現だ。もちろん、こんな言われ方をした病院の患者さんやイライザが、それで納得するわけはない。それどころか、このような言い方は、イライラをさらに際限なく悪化させる。実際、イライザはそうなった（それがストーリーを先に進める働きをするのであるが）。しかし、なぜそうなるのだろうか？

「イライラ」とは「主観的な感情である」ということは、間違いではない。それどころか、この上もなく正しい言説であるとも言える。むしろ「イライラとは、現実に存在する『モノ』だ。だから測定もできるし、取り除くこともできる」という言説の方がおかしいとも言える。最近の医療現場では、『落ち込み』や『イライラ』は、『脳内のセロトニンの異常』だと説明され、薬や電気ショック（オイオイ！）で取り除かれるべきものだ、というような極端な説明へシフトする傾向さえある。しかもそのような説明の方が、より「科学的」であり、より「正しい」と信じられてもいる。

しかし、もう少し考えてみたい。「私が感じているイライラ」と「私」は別のものだろうか？　「私のイライラ」を取り除くということは、「私」を取り除くということになってしまうのではないだろうか？ イライザの「イライラ」は、ヒギンズへの愛そのものであり、イライザの人格そのもの顕れである。これを「一晩寝て起きれば治る」と言われてしまっては、自分自身を否定されているのと同じことではないのか？

ここがとても難しいところだ。イライザの感情は、脳内のセロトニンに還元されることで解消するようなものではないことはもちろんだが、「それは、あなたの主観である」という、究極的に正しい言説によっても癒されるものではない。人間それ自体がまるごと尊重され、癒されるかどうかは、用いられることば、言説が「正しいかどうか？」で決まるものではないということなのだろう。しかし我々は、「正しい」ことを語ろうとする。それが、事態を更に悪化さ

せることが例え明白であっても、どうも私たちというのは、そういう風にできているようだ。

人生はマルチエンディング

どんな映画でも小説でもそうだと思うが、物語のクライマックスからエンディングにどうつながるか、というところが、その作品を失敗作にも成功作にもする。マイフェアレディのこの部分は、一見常識的なハッピーエンドのように見えるのだが、よーく見てみると、けっこう複雑で、理解しにくい部分もあり、色々考えさせられる。ここは詳しく見ていく必要がある。

場面はなぜか、ヒギンズ教授の実母の家。そこに現れたイライザは、ヒギンズの母親に女性同士としての共感をもって迎えられる。実はこの設定もなかなか興味深い。日本だと、嫁姑関係に象徴されるように、息子の恋人と母親の関係というのは、一種の緊張関係になりやすいと思うのだが・・しかし、ユーミンの「ルージュの伝言」の例もあるし・・うーん、良く分からないが、ここは本筋には関係ないからとばして先へ行こう。

そこへ、まさかイライザが来ているとは知らずに現れるヘンリー・ヒギンズ教授。超然と独立した人生を歩んでいるように見えて、困ったことがあるとすぐに母親に泣きついてくるところは彼らしい。しかし、母親は徹底してイライザの理解者である。

母親が席を外し、再び気まずい雰囲気で相対するヘンリーとイライザ。しばらくテンポの良いやりとりのあとで、イライザは名曲「without you!」を歌い出す。

私はなんて馬鹿だったのかしら？ あなたが世界の全てだと思っていた。でも今はそうじゃないということが分かる。あなたなしでも春は巡ってくる。あなたなしでも、午後のお茶はおいしい。あなたなしでも、ウインザー城は倒れない！ あなたなしでも私は生きていける！

高らかに歌うイライザを、最初苦々しげに見つめていたヘンリーの表情が変わり、彼は突然椅子から立ち上がり、叫ぶ。

ハッハッハー！ やったぞ！ とうとうやった！ 思いどおりの女性ができた。自立した女性だ！ ５分前まで、君は僕にとってのお荷物でしかなかった。しかし、今はどうだ。君は立派な僕の同僚だ！

この場面は、とても複雑だ。ヘンリーとイライザの関係は、二転三転している。確かにここでの二人の関係はすでに以前の関係ではない。しかし、その関係をまるごと、ヘンリーはもう一度自分の手の内に取り戻そうとしているように見える。もしも、イライザが自立した女性として変容したのだとしても、そのプロセスがヘンリーによって計画され、教育された産物に過ぎないのだとしたら、自立した女性としてのイライザは本当に自立していると言えるのだろうか？ これはパラドックスだ。

しかし、イライザはその手には乗らない。彼女は、きりりとした表情でヘンリーを見据え、きっぱりとこう告げる。

さようなら、先生、もうお目にかかりません。

そしてふりかえることなく去っていくイライザの、この上もない誇り高さは、オードリーの名作「ローマの休日」の一場面を思い起こさせる。たった２４時間のローマでの何ものにも代え難い体験を胸に秘めて宮殿へ戻ったアン王女（オードリー）が、大使や将軍に向かって、こう告げるシーンである。

何が王女の義務であるか、私はよく承知しています。もしそうでなかったら、私は今ここに戻ってはいなかったでしょう。

もちろんこの言葉の背後には、恋人であるジェフとの永遠の別れを決断したこの上もない辛さが横たわっている。このような崇高な凛々しさは、オードリーの天性のものであると思う。

・・というわけで、結局、色々あったが、自立した女性としてのイライザは、自分を育てた教師であり、恋人でもあったヘンリー・ヒギンズ教授と訣別し、巣立ち、自立した人生を送る・・かと思いきや・・まだまだ、この先に展開があるのだ。

うーん。やっぱり、人生というものは、単純なストーリーじゃあないね。人生は、マルチエンディングのロールプレイングゲームのようなものだね。ラスボス一人倒せば、それで終わりじゃあない。ハーゴンの後にはシドーが、バラモスのあとにはゾーマが控えているのだよ。

清武システムズ

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

〜シーズン２「清シス・アピール」

エピソード１３ ： 間にいる時期

しすてむ❤きよたけ

ごあいさつ

開いてくださった方、ありがとうございます。

何！？と思い開いた方が多いのでは？と思っています。何を書いているのか不明としか言いようがないタイトル。このタイトル、僕の看板名です。

と言いつつ、何屋と決めていないと言いますか、「清武という存在がシステムを扱う」、いや、「扱おう」と試みている最中の仕事をしています。相手側と自分の間で起こることに焦点をあて、システムを扱うこと。そして、それらにより、現場の「促進剤」になれるといいな〜と思っています。結局、「促進剤」なんです。

とはいえ、まだまだ何者でもございませんので、仕事のことを綴ってみたり、僕は、基本的に日常生活で起きていることが好きなので、それと僕の現状を合わせ綴ったりしています。

よくわからないけど、覗き見のような気持ちで読んでいただけると、いいかもしれません！

僕、結構役に立つんですけど、わかりにくいし、どうやら、自分が思っている自分と他者から思われる自分に乖離がありそうなんです。言い換えれば、まだ、役に立っているポジションには、いてません！

それでは、引き続き、読んでいただけると幸い。これまでお目を通しいただいている方も、改めてよろしくお願いいたします。

★☆今回のお品書き☆★

おつきだし Part1.貧乏フリーランス
1.-1 二拠点貧乏撤退！
1-2 拠点が契約困難事件
1-3 顔見知り
1-4 騙される暇はあっても金はナイ！

おつきだし Part2. ハラハラ

2-1 男子学生とおじさん
2-2 無理だけどヤレとかクソ喰らえ
2-3 ひやっとする空間
3-3 生産性以外が生むこと

おつききだしPart1.貧乏フリーランス

商店街から抜け、電車で綴ってます。前回の続きは、後半に。

只今～奮闘駅。気をつけてお降りください～。降りた矢先から事件です。

1.-1 二拠点貧乏撤退！

僕は、2015 年？～金沢と東京に拠点を置いていたが、最近、東京一本にした。

東京では共同生活。いわゆる「シェア」だ。しかし、何をシェアしているのか分からない状況だった。もちろん、家をシェアしているのだが、それだけではない。暮らしを共有してるから、様々なことを「シェア」するのは想定内のことだ。だから、一定の基盤、システムがなければ、暮らしの中に困難は起きるものだろう。

例えば、入居後に他の住人が出て行く時に知ったこと…。人数が減ると賃料が上がること。また、自分が退去する時には、他の人が見つかるまで、賃料を支払い続けなければならないこと。

住んでいた期間、出たいタイミングはそれなりにあったものの、上記システムに知人を入居させ、自分が出て行くことはできない…と思い、1 年半ほど、そこを拠点にしながら、金沢にも…という生活をしていた。どちらでも、行った先できることをして行こう、そう思ったので、住み続けたのだった。

しかし、システムやそれについての話し合いの無さ、揉め事の根本がシステムにあることを思い、退去をすることにした。この議題や暮らし続けるには困難であること自体を「シェア」することができなかったのだと思う。あえて、記載したいのは、住人個々人の課題だとは思っていない。枠組がないからこそ、個々人に矢が向きやすいことだってあるから、矛先を個人にあてる気はさらさらないのだ。

重ねていう話しになるが、「シェア」をするにもシステム（仕組みや基盤）がなければ、もしくは、創って行こうとする状況は大事なのだろう。たとえ、僕が、そうした方がいいと思ったとしても、その理由が「シェア」されていなければ、具体的にはならない。無論、「シェア」はされなかった結果だったのだとも思うので、僕の失敗例としても提示できるのかもしれない。もしかすると、ここで僕が言っている「シェア」とは、「交歓」であり、前述に「創って行こうとする状況」と言っているくらいだから、「シェア」には「創造」が含まれているのかもしれない。

東京に拠点を絞ったので、さて、金沢の家は？と思うだろう。一度、これまでの動き方、いや、働き方の整理をしたく、金沢の家も引き払うことに。そうして、いまでは、拠点は東京のみになったのだ。

シンプルにした方が、自分にとっていい。

自由であれる気がしたのだと思う。自分で決め、できることをする。この数年、そうしたかったのだと思う。二拠点あると、動く制限があり、仕事が舞い込んでも自分の思うように動けない。自分に基準がないがゆえに、相手の状況に引き寄せられることが多くなっていた。

結果的に僕の存在はたまに来るイベントのような出来事に見えてしまう。それは、僕も相手側も望んでいないのだと思う。毎回、お祭りがあっては、その都度その都度準備が大変だ。それを思うと想像しやすいかもしれない。

多くの仕事事情は、時間や役職など決まりがあるので、それに当てはまらない場合、お金を稼ぐことに辿り着きにくい経験をしてきたのだと思う。次のステップ、僕の意図も伝わりにくくなることも含めて。

正直、フリーランスを辞めると言うことも一つの手だと思った。だが、これまで、何か一つだけの仕事に特化した経験はない。なんなら、就職とアルバイトの違いすら分からないから、就職しないだなんて決めて進んだ過去があるくらいだ。だから、今更、就職を…と考えもせず…フリーランスになって３年目で気づいたことを活かす３年目にしよう。続行することにした。

1-2 拠点が契約困難事件

さて、拠点を一つにするにも困難があった。「事件です！」と言いたくなるほど、なかなか新居を借りれない状況に直面した。

そもそも、1 週間もしない間に引っ越しを考えていた…という短期間だったことがネックだったと思う（これには、様々な限界を迎えていた…詳細はカット！）。かつ、僕は、個人事業主であり、書類を揃える必要がある。所得が分かる物の提示だ。書類は、もう一つ置いていた家（この時期、金沢拠点を引き払う前）は、金沢市内。希望時期に書類を間に合わせられるわけ無し。

これらは、二拠点フリーランスをしている中で、起きた体験だった。加えて、何のフリーランスなのか、分からないことが引っかかっていたのもあった。対照的な例を出すならば、国家資格の持ち主。話が早いこともある。「支払い＝職」の有無に通じるので、「家賃の支払い可能」と見なされ、物件を押さえやすい場合もあるのだ（不動産やオーナーによりけりだが）。

上記体験は、個人的に面白かった。しかし、そうとも言えない。社会的に属していることは理解されても、曖昧であるがゆえに相手側も曖昧な約束しかできない事実を目の当たりにした、ちょっと大変やーんという体験でもあった。

フリーランスとか所属など関係なく、他にも、連帯保証人でなく、保証会社と契約が必要だったり、不動産が直接オーナーとやり取りを交わしておらず、間に管理会社が入っている、など、そんな体験もあった。結局管理者の顔は見えなければ、同じ物件を扱っている不動産が何件もあるなんてザラ。決まるまでに時間がかかる、かかる。

誰と繋がっているのかわかんねーって思

うことも最近では多い（昔からそうで、僕の年齢や社会的役割、所属が変わったからかもしれないが）。例えば、連帯保証人が、遠方だと、連帯保証人になってはもらえず、保証会社を通すことや、連帯保証人の年齢が 65 歳以上であれば、やはり、保証会社を通し、審査が行われるので誰と繋がっているかなんて、もはや会社という箱物と繋がってます、と言いたくなる。

でも、全て、家族が担っていくものだ！と言う訳でもないとも言える時代になっているように思う。

試行錯誤動いていると、ま～最近の不動産事情がわかるわ～。一刻も早く、脱出したいと思っていたものの、社会事情を知れ、システムに働きかけられるような存在になろうと思っている僕いとっては、ちょっと楽しかった。

1-3 顔見知り

「楽しかった」と言えるのも、もしかすると、別の動きをしている不動産を知っているからかもしれない。

福岡市内で不動産経営をしている親戚がいる。僕とは違って、バリバリのやり手。大きい会社ではないと思うのだが、よく考えているんじゃないのかな？と思う人たちだ。

昔からある地元密着で、オーナーと賃借者の顔を知り、賃借者の経済状況も踏まえ、物件を提案していたりしているようだ。また、相続なんちゃらとか、それらに関わるコンサルタントをしていたりだとかしているようだ。

僕は、家を継承していく人たちがいなくなることとが増えていると感じているので、これを通し、彼らの仕事は、老化に伴う暮らしの移行を会社を続けていくうちに扱っていくようになった人たちだと思っている。

フリーランスをしていると何をしている人が、家族にいるのかも知って行くものですね…というか、自分が何かわからずとも動いているから、ひとまず、ぶつかる事も一般的ではない可能性もあり、だからこそ、知り得る他者の仕事、ひいては、一般的な仕事を知ることもあるのだな～と思ったのだった。

1-4 騙される暇はあっても金はナイ！

さてさて、不動産事情をいろいろと聞いてみると…僕があちこち振り回されたり、決定までに時間を要したのには事情があった。その理由は、間口を広げている業界が、増えていることが見えてくる。だが、これぱっかりは、素人の賃借者には、分かりにく～い！！！でも、僕が、こんな体験をしたのは…今に始まったことではないので、苦笑だった。

数年前、オトリブッケン的に出されている不動産にもあたったことがあった。一旦、物件を押さえさせるためにお金を支払わせる。でも、実は、その物件は、他の物件を紹介するためにおいている物件。他の（少々値段があがる）賃貸を案内されます。ウケる。

この時も不動産会社を経営している親戚に「なんか変じゃない！？腑に落ちない。」と話した。すると、「オトリ」と言うのもあると教えてもらった。

お金！！もちろん、「オトリ」にはなんの契約も交わしていないので、返金してもらった。「おかしくないです？返せないんですか？契約してないですよね？」といった具合に。こっちは、騙されている暇はあっても、金はナイんじゃ！なのだ。

ここまでの体験は、場、人、サービス、そこにまつわるお金の話し。僕は、何屋さんか決めていない。清武システムズ…。仕事の状況により、仕事以外でも非巻き込まれるように体験している。僕から、お金を取らないでください！無いから！と言う宣伝もしてみておこう。

だからといって防衛体制にはいろうとも思わない。何か決めて動くと通常のシステムと同じになる。通常のシステムに働きかけようと思うと異質さを残しておきたい。それが、清武システムズの意図に繋がると思っている。現場のカを、そこにいる人たちと共に発揮できるのではないか？と。

なかなか、分かりにくいと思う。因果関係のようにＡに僕を入れると完全に理想どおりに解決します！なんて示している訳でもないのだから。

でも、僕を使ってください。新しい部品を置いてみたら、現場の循環が、変わるから！というのも、僕が遭遇していることは、通常システムではなかなか動かず、なにかと工夫を凝らした中で起きていること。その出来事とは違う出会いの提供を現場のヒトたちと創っていきたいと思っているからです。

おつきだしPart2. ハラハラ

舞台は前回書いた、喫茶店。なんも懐かしさを感じた場所。机がゲーム機…ゲーム機が付いているテーブルがあった。そんなとこでのワンシーンをお届けしたいと思います。

前半は、学生とおじさん駅～。後半は、女子高生とおじさん駅～。パワハラ・セクハラに通じなくはない話しかもしれない。●●ハラはアカ～ン。でも、加害者にも理由があるし、社会が生み出すことだとも思う。加害は、決していけないこと。だけど、個人だけで生まれることではない。だから、事件はなくならない。社会のあり方を考えささられるし、できるだけ、できる形で共存できたらとも思う。

さて、こちらの駅では～、加害者にならない場合もございま～す、というやり取り。和やかにリズミカルに進む、女子高生とおじさんのキャッチボール、そして、いつ●●ハラになるのか…言葉のキャッチボールに参加しないない人がハラハラ…そんなことが行われる駅でございます。

そうではないことも、書いております。そして、１とは違う書きっぷりをしています。

2-1 男子学生とおじさん

そういえば、昼間のおじさんたちは、週刊誌や新聞を店の本棚からとっていたなー。週刊誌の表紙には『SEX』『熟女』と赤字で書かれている。他にも記事はあるが、目立つのだ。また、週刊誌が店に置いてあり、それを読む行為。僕は、世代の違いを感じたのだった。

最近、週刊誌や新聞を読んで過ごしている人はなかなか見なくなった。喫茶店でなく、café に居ると。世代を感じるって、人がどこに集まって居るか。そこでの過ごし方の暗黙の了解があるってことだろう。

ただ、この時、僕が居た喫茶店の世代はバラバラ。僕は、iPad やスマホを使い、時には本を広げている。34 歳。ちょうど間世代？

もうすこし若い世代。店員に学生がいた。大学生だろう。20 代男だった。黙々とまかないを食らっていた。

「うまいだろ！」とマスターであろうおじさんが、積極的に話しかけていた。学生店員は「はい！とても美味しいです！」…って言うしかない感じ。でも、僕は、きっと美味しいだろうと思った。だって、僕が食したオムライス美味しく、腹一杯になっていたのだ。

マスターが、しきりに学生店員に話しかけていた。「皮が少しかたいか？」「身はうまいだろ？」。学生は、もぐもぐしながら、「マグロうまいです！」と。

「へ～賄いは、マグロか～。」とぼんやり思っていた。店の雰囲気からは、時給は低そうだ。しかし、飯が出る場所は、ありがたい。

知っている人は多いだろうが、アルバイトを探すとき、希望条件を絞り込め、『賄いあり』とあるほど、飯が出る働き口にニーズはあるのだ。学生、良かったな！と思った。

もし、僕が不味い店だと思って聞いていたら…学生…マジでおじさんに無理に会わせなくて良いって…おじさん…自分が納得するように言いなさんな！と思っただろう…。

2-2 無理だけどヤレとかクソ喰らえ

僕は学生時代失敗体験があったからかもしれない。賄いはあったが、上手くもない。しかも、50 人の団体を一人で切り盛りしないといけない飲食店で働いたことがある。

おじさん店主　「一人でやれるやろ？」「仕方ないしやって。」

僕　「無理です…」

おじさん店主　「いや、できるからやって。」

やったものの、客から何を頼まれたかも分からないから、適当に酒を運んだった！！クレームになんかならないと思っていた。【飲み放題のコース】【大人数】【呑んだくれている】この三つが見極めになっていた。甘いかもしれないが。

だが、あながち間違ってないかもしれない。頼むほうも、無理な仕事の任せ方をされる店員も適当なもんだった。『勘定が合うか否か』だけになってしまっていた。分かった僕は、幹事に全部任せた。そして、オ

ーダーを通して運ぶ係に回ったのだった。もしかすると、僕は、適当な中でも、どこかで、この流れを変えたくなったのだろう。

しかも、僕は、お酒は飲まないから、呑んだくれについては、さっぱり。分かる人に任せて、絶対にやらなきゃいけないこと、やれることを探したほうが、店が提供したい商品や品質は届けられると思った。

クソ店だと思ったけど、一人で変化の装置と売り始めた今、学生の時のバイトの経験は、良き経験だったのではないか？そもそも、置かれた場所でできることを探し、そこには、人に任せることも含めていることに気づかされる。

何かに躓くことがあっても、きっとどこかで、自分の糧になることもあるのだと思う。とはいえ、悪かったと思うこと、良かったと思うことを素直に言えないおじさんにも会う。そうならぬ様に…と意識している。意識できるだけの経験をするのも、そう悪くはないのだろう。でも、良くないことは、良くない。やっぱり癒えない思いは、残るものだ。

2-3 ひやっとする空間

席をストーブの近くに移動した。喫茶店に 17 時くらい？に入ってきた女子高生も 19 時半ころにストーブ前に。

ストーブを見た女子高生二人は、「お餅焼けるんじゃない？」と。「中学のとき、ストーブにやかんを置き、加湿のようにしていた」、と。もう 1 人は「無かったよ。ストーブ」。「ストーブじゃなかったら、何があんの？」、「え？エアコン。」と。

その直後、店主のおじさんが、「こっちに座ったら？あったかいよ？」と自分の席の横を勧めていた。「えへへ」と女子高生。また、マスターは、「JK か？」女子高生は「一応」と。

1990 年代に出てきたと思われる JK。ルーズソックス、ミニスカート、ガングロギャル…最近、自分の誕生日に引退を決意した安室奈美恵さん、小室哲哉さんがブームになった時代だ。

この時代に流行したものは、多かった。ポケベル、ダイアル Q2 がで…テレクラ、援助交際（援交）と市場は広がった。また、今となっては、無いブルセラショップも（個人売買はある。また、性風俗店のオプションにも。性から離れている様だけど、コスプレ。これも使用済みの売買が行われているので、切り離せないとも思う）。おじさんによって、女子高生、いや JK がブランドになり、市場に回った時代が再発生した。そうしたのとも内包している JK ということば。今の女子高生は、あまり知らないのかもしれない。

店主は、「やっぱり初々しいなぁ～」と。

セクハラになりそうだけど、ここではならなかった。女子高が「〇〇見えますか？」とマスターの家の近隣のことをきき、会話を継続させていたのだ。細かいことはそっちのけ。敢えて、そうしているとは思えなかったが、流し切ってしまうところが、な

んとも面白かった。しかも、マスターの兄弟話にまで発展。マスターの話をさせていっていたのだった。

もし、セクハラのようになりそうだと思ったら、僕はもう少し過ごし、その会話に入り、別の話題にすり替えていたかもしれない（意識していないけど、そう言うことがあるらしい）。だが、そんなことは起こりそうにないと思い、席を立った。

3-3 生産性以外が生むこと

女子高生との会話に夢中の店主は、僕が「ごちそうさま」と言ったのだが、反応なし。本業を忘れているようだったが、客と会話をするのも本業に含まれているとも僕は思う。

最近、そんなこともなく、作業的な接客は多い。その方が、効率いいし、生産性があがるしね…と思うが僕はどうも苦手だ。

会計を済ませ、外を歩くと奥におじさん２人が合席。２人とも新聞を読んでいた。もう１人、一人で食事するおじさんもいた。

いろいろな過ごし方ができる空間探し、つくろうとしている時代だと思うが、実は、昔はあったし、今もそういう場所は残っている。僕が知る限りだからわずかな話しだが、だいたい、店主にクセがある。いい意味で、だ。自論があり、自分が決めてやれる範囲でやる。

どうも、これは一致しているのだ。それができないところが、一定の現場で増えているのかもしれない。僕が、これまで携わった仕事の中にはそういう現場もあった。できれば、関わりたくないと思うのだが、そうではなく、僕の工夫として、僕が入ることで、何か決断が見つかり、個々人の力が促進されるといいな、とも思っている。これからの僕の課題だ。

綴り人/しすてむ・きよたけ

通りすがりの旅人です。　清武システムズという看板を引っさげ、お仕事中。めんどくさいことも起きるけど、そっから面白く展開していこうじゃないか！「何か変化を求めているが、手立てがわからない。」そんな時に部品の１部だと思って、ぜひ導入を！お願いします。

精神科医の思うこと⑨

大阪出身なんです

松村　奈奈子

私、関東の大学に入るまでは大阪で育ちました。大学卒業後、京都で就職して２０数年。もう人生の１番の長い時間を過ごした街は、京都になりました。しかし、どこかで「大阪人な私」がずっと存在しています。早口だし、ボケたり、つっこんだり、笑かしたりするのは好きです。
診察でもそんな感じなので、時に患者さんが少々びっくりしている表情になるんですが「ごめんなさい、大阪出身なんです」というと、たいがい「やっぱりー」「なるほどー」「しかたないなー」と京都の患者さんには笑って許してもらえます。
「大阪人」を意識して診察することも多いので、今回のテーマは「大阪出身なんです」

実は私「大阪出身」といっても、ニュータウン育ちで、母親も兵庫県出身なのでコテコテの「大阪人」ってわけではありません。もちろんお笑いは好きですし、吉本新喜劇を見て育ちました。でも「つっこんだり」「笑かしたり」は、仕事を始めてから鍛えられた気がします。そう、精神科医になってから「大阪人」がより強化されたんじゃないかなって思っています。

研修医の頃は予診といって、初めての患者さんの経過を上司の診察前に聞く仕事がありました。精神科のカルテには、必ず家族系図、成育歴、就労歴、既往歴などが並びます。その後、上司の診察に付いて新米は診察の進め方や診断を学ぶのです。
特に入院している思春期の患者さんには、家庭環境を細かに聞いていくように指導を受けました。家族の仕事やその内容、兄弟や姉妹との関係、家族内の力関係などなどキリがありません。
聞き取りが甘いと「なんで聞いてないねん」と上司からよく怒られました。
こんな訓練があって、独りでの外来診療を始めるようになると、この「聞き取り」の大切さがじわじわとわかってきました。とことん聞いて、患者さんの生活をイメージするのは大切

です。

本人や家族から淡々と語られる内容は、それはそれで大切な情報です。しかし、こちらからちょっとつっこんでみないと、見えないことがあります。
家族に問題が起こるのは当たり前。でも、問題が起こったことを家族が恥ずかしいと隠してしまうと、それが積み重なってより難しい状況になってしまいます。それは、ちょっと我慢の多い人生を歩んだ両親によくみられる特徴のような気がします。
そして、隠された家族の秘密が、子ども達やみんなを息詰まらせている事はよくあります。息を詰まらせた時、何らかのサインを出して精神科を訪れます。

逆に言うと、この秘密のしこりのようなものを診察で患者さんと共有できた後、患者さんがみるみる良くなっていく事をしばしば体験します。もちろん、それは単にぐいぐい「つっこん」で聞き取りに行ったからではなく、患者さんとの信頼関係に基づくものではあります。しかし、家族の困った点に気づくには、家族を少し追い込んでしまうかもしれませんが、簡単には出てこない家族の秘密に手を差し伸べて触れてみるのも大切だと私は思います。秘密に触れるまでの時間を少し短縮するのが「つっこみ」なんじゃないかなって思っています。

人生、そんなの試行錯誤なんで失敗は当たり前。「元旦那はダメダメでしてー」とか「今度の彼氏も困った人でー」とか「姑がちょっとムカつくんでママ友に聞いてもらっています」なんて上手に話せる家族の子どもはたいがい笑顔です。
でも、秘密の多い家族は、家族の事を話せません。そこで「つっこみ」しながら、聞いちゃいます。
離婚の場合は「若い時は男を見間違えちゃうことあるよねー」と前置きして離婚経過を聞きます。時々「私も若い時は変な男を好きなりましたー」なんてボケをかましたりします。母子家庭がきたら、「ママに彼氏はいるのかな？」「どんな彼氏？」とつっこみます。祖父母と一緒に生活しているケースは、「嫁姑は仲の悪いのがフツーですが」と前置きして嫁姑の関係をきいてみます。「つっこみ」で見えてくる生活は大切で、はやく気づければ、より早く対応できます。
家族が弱音を語れる状況にもっていきたいといつも思っています。

離婚や嫁姑のトラブルに子どもが巻き込まれていたり、母親にちょっと怖い彼氏ができてから子どもがサインを出したケースなどよくある話です。
「聞いたら誰かを傷つけてしまうかも」って聞かないよりは、子どもや患者さんのために知っておくべきことは「聞いてもいいですか？」と始めて聞いてみるべきだなぁって思います。もちろん「今は言いたくない」っていう選択肢もあるので「待ちます」と返す事もあります。
ただ、人は否定したり責めたりされないとわかると、ちゃんと話せるなって思います。

ついでに「笑い」に関して
大阪といったらそれは「笑い」。私も「笑い」は大好き。友達と話していても、できるだけ話にはオチつけたいし、しばしば話を盛って大きくして「笑い」を取る事もします。
研修医の頃、家族療法を勉強していた大阪出身の先輩が「家族療法は日本の西の方でさかんなんや、なんでかわかるか？」と聞かれ私は「？？」先輩が笑いながら「ジョイニング（患者さんへの溶け込み）は関西人の得意とするところやからな」という答えに納得したことがあります。

嫌いな人を笑わそうとは思わないので、「笑い」は仲良くなりたいっていう、こちらのメッセージのひとつだと思います。なんで、できるだけ「笑い」のある診察を心がけています。
ただ、ほんとに凝り固まった家族は、なかなか「笑顔」がでません。気をつかって「愛想笑い」をできる家族は、まだ余力のある健康さを残した家族です。
ずっと摂食障害の治療をしてきたのですが、鬼気迫る拒食症の初診の患者さんには、こんな私でも「笑い」を持ち出すのもできない事もあります。「笑い」って、心に余裕がないとでてこないもんですよね。だからこそ、笑顔がでると治療が終わりに近づきます。
「笑い」はよくなっていく過程のバロメーターでもあるとも思います。

そんなこんなで、たまたま大阪生まれだけど、気になる事はつっこんで、患者さんと一緒に笑ったりするスタイル、精神科の治療としてはいいんじゃないかって思っています。
「大阪のおばちゃんが嫌いやー」という人もいるでしょうが、でも、これは大阪人のいわゆる困った「ズケズケ」とはちょっと違うと思っています。
思った事を言葉にして伝える力、これが言語化能力。なんでも言っていいというわけではなく、できるだけ相手を傷つけずに自分の思った事を伝える力です。
その力は対人コミュニケーションでとっても大切で、それは「つっこみ」や「笑い」が後押ししてくれている気がします。

おくのほそみち

～　理学療法士が指圧を学ぶ　～

9

理学療法士
奥野　景子

久々の学生になって早二か月、少しずつ学生生活にも慣れてきた。初めは恥ずかしさから億劫だった実技の授業で行なわれる心得の輪唱も噛まずに言えるようになってきた。でも、それと同時に立ち止まる機会も少なくなった気がしている。

『一、診断即治療の真髄を会得する事』

毎回、この心得の部分で頭の中にポカンとした空間ができる。「ここで言う‘診断’、‘治療’ってなんなんやろ……」おそらく、理学療法で言うそれとは少し違う、ように思っている。もしかしたら、同じなのかもしれない。でも、たぶん、少し違う。

短信にも書いたが、4 月からあんまマッサージ指圧師の専門学校に通っている。久々の学生生活や新天地での生活になれない部分もあるが、学校で学ぶ内容、視点に慣れず、戸惑う部分もある。

まだまだ、始まったばかりの学生生活。ほぼ初めて学ぶ東洋医学。そりゃ慣れないし、戸惑うこともあるだろう。ただ、それに慣れることや迷わずに進むことを目的にはしたくない。立ち止まり、咀嚼し、混じらせながら交わらない部分を見つけ、自分なりに深めていきたいと思っている。

今回のマガジンでは【なぜ今になってあんまマッサージ指圧師なのか？】ということについて書きたいと思う。

【　なぜ今になって
あんまマッサージ指圧師なのか？　】

今年 4 月、理学療法士になって 10 年目の春を迎えた。そして、一旦理学療法士として働くことを辞め、あんまマッサージ指圧師の専門学校の学生になった。*「理学療法士なのになんであんまマッサージ指圧師なん？」*、*「理学療法士じゃあかんの？」*、*「これからどうするん？」*あんまマッサージ指圧師の専門学校に行くと決めてから、幾度となく問われ、自分自身に問うたことでもある。正直、今でも上手く答えることは出来ない。ただ、自分なりに考え、不明確でも進んでみようと思っての決断だった。

「これからどうするん？」

理学療法士として働く中で様々なヒトやモノ、コトに出会った。それらの多くは、理学療法士一年目の私には想像できないものばかりだった。そのおかげで様々な学び

を得ることができ、様々な問いを抱えることになった。楽しいことばかりではないが、面白味を感じながら過ごすことができているように思う。

理学療法士として働いてきた 9 年間では、回復期リハビリテーション病院（俗に言う、リハビリ専門病院）と訪問看護ステーションに勤務し、入院している方へのリハビリと通院でのリハビリ、在宅でのリハビリに従事した。私が担当した多くの方は、高齢者と言われる方ばかりだった。中には、自分より若い方や手を伸ばせば届くくらいの年齢の方もいた。疾患も様々で、退院や状態安定、違うサービスを使うからとリハビリが終了になった方もいれば、お亡くなりになられた方もいる。どの方に対しても「これで良かった！！」と自信を持てたことはない。「もっと出来たことがあるんじゃないか？もっと、もっともっと……」と。比較的、ネガティブな思考をしているため、どんどん内側にベクトルが向かってしまうこともあった。ただ、今は少し違う。もちろんネガティブな思考も内側に向きやすいベクトルも変わらない。相変わらず、自分が行なったことに対して自信を持てることはないが、目の前にいた人に対して「私は、この人に会えて良かった」と思えることが増えたように思う。つまり、技術、臨床思考に関しては終わりのない追及が不可欠と思う一方で、そうではない部分に面白さを見つけることができたのだ。

さて、改めて
「これからどうするん？」である。

まだ、具体的な何かをイメージできている訳ではないが『目の前にいる人の‘生活’、‘日常’を大切にしながら、‘これまで’と‘これから’を意識した‘今’を過ごせるようになりたい』と思っている。これは、今まで理学療法士として働いてきた中でも考えていたことだと思う。ただ、理学療法士として働いてきた中では、より‘今’に対する意識が強かったように思う。これからは、もっと‘これから’に意識を向けてみたいという思いがある。もちろん‘今’をないがしろにはしない。‘今’と‘これから’につながる‘これまで’に関しても同じだ。『向かって行きたい‘これから’に対して何が必要なのか？』それを共に考えられるセラピストでありたいと思っている。

「理学療法士じゃあかんの？」

これ、私もめっちゃ思います！！！でも、おそらく『理学療法士がダメではなく、理学療法士じゃなくても良いんじゃないか？』という発想の方が強いのだと思います。

理学療法は、理学療法士及び作業療法士法の第 2 条で「身体に障害のある者に対し、主としてその基本的動作能力の回復を図るため、治療体操その他の運動を行なわせ、及び電気刺激、マッサージ、温熱その他の物理的手段を加えること」と定義されている。また、同じく理学療法士及び作業療法士法の第 2 条において理学療法士は「厚生労働大臣の免許を受けて、理学療法士の名称を用いて、医師の指示の下に、理学療法を行なうことを業とする者」とされている。このことから、理学療法の対象は、身体に何かしら問題を抱える人であり、その実施に関しては、医師の指示が必要と言える。

単純に、理学療法士であることで、その対象範囲がある程度定まり、その枠の外に

ある人には、出会うことが難しいのではないかと考えた。また、医師の指示の下でしか実施できないとなると、それもまた対象範囲がある程度定まるようにも考えられた。

近年、一部の理学療法士の中に整体師、〇〇セラピストと名乗り、整体院などでの自費診療を行なう人が出てきた。捉え方にもよるが（一部、否定的な指摘もある）、これは合法であると私自身は認識している。「じゃあ、それで良いやん」となりそうだが、私の中ではそういう訳にもいかない部分がある。

と言うのも、始めに書いたように基本的に私は、自分の技術や臨床思考に自信がない。整体師として、目の前の人と何かしら行なうにしても、私個人にできることは限られている。もしかしたら、外科的治療が必要な人もいるかもしれないし、レントゲンやCT、血液検査などが必要な人もいるかもしれないし、他職種の意見や技術の方がより必要なこともあるように思う。また、必要に応じて、適切な、必要な医療や福祉などへのアクセスを促すことが求められる場合も出てくることが予想される。その場合、やはり何かしら「医療従事者」としての名札があった方が都合が良いのではないか、と。

でも、「じゃあ、やっぱり理学療法士で良いやん！！」とはならない。理学療法士には、開業権がないからだ。そして、理学療法士に辿り着く人の多くは、すでに医療の門をくぐった人でもある。どこにアクセスすれば良いのかわからない人、医療の対象にはならない程度の問題を抱えた人は、どうすれば良いのか。何気なく過ごした時間が、どうにかやり過ごしてきた時間が取り返しのつかないものになることもあるのではないか、と。

あと、整体院での自費での診療費は、比較的高いところが多いように感じている。費用が高いということでアクセスのしにくさを感じる人もいる。その一方で、高い費用でもやりたいんだと思う人が来るのであれば、より充実したやり取りを互いにできる可能性もある。「じゃあ、保険も使えて自費でも出来る方が良いんじゃない？」となって辿り着いたのが、あんまマッサージ指圧師だった。医療保険の適応になる場合は、一定の条件があると同時に、やはり医師の指示が必要ではある。ただ、あんまマッサージ指圧師には開業権があり、自由診療ができるのだ。

どのような看板を掲げるのか、自分の職種としての名札は何が良いのか、どんなサービスを想定するのか、医療保険と自由診療のどちらを優先するのか、自分には何ができるのか、何をしたいのか、どんな職種や地域を巻き込めるのか、など考えないといけないことも膨大だ。ただ、その反面、可能性も拡がるのではないかと思っている。

「理学療法士なのになんであんまマッサージ指圧師なん？」

ほぼ、上の段で書いたように思うが、まとめると「あんまマッサージ指圧師は、開業権があって、医療保険での保険診療も自由診療もできるし、なんだか出来ることの範囲が拡がるような気がして、面白くなっていくんじゃないかと思うから」と言ったところだろうか。

あと、あんまマッサージ指圧師は、理学療法とは違い、東洋医学が基本となってい

る。今まで、ほぼ東洋医学について学んだことがない一方で、東洋医学に対する興味、関心は頭のどこかで抱いていた。以前担当していた末期がんの方が、代替医療としての東洋医学の大切さをわかって欲しいと訴えていた経験があるからかもしれない。東洋医学を学ぶことで、今までとは異なる視点からヒト、モノ、コトを捉えることが出来るようになるのではないかという考えもある。

また、私の中でヒトの身体に触れることを大切にしたいという思いもある。触れることでわかることがあり、触れることで伝わることがあると感じているからだ。その点で言えば、あんまマッサージ指圧では、ヒトの身体に触れることが必要不可欠である。その技術、手技を学ぶことで、より触れるということに関しても深めることが出来るのではないかという考えもあり、あんまマッサージ指圧師を志すことにした。

正直、本当にこれからどうなるのかわからない。むしろ、本当はわからないことだらけなのに、今まではわかる範囲で都合の良い解釈をして、理由付けをしてきただけなのかもしれない。それでも、今まであまり経験したこと、意識したことのなかったどうなるかわからない感は、不安であり、楽しみであったりもしている。

～　終わりに　～

今回のマガジンでは、新しい決断、選択を行なった自分自身の振り返りとして書いたように思う。まだ、書ききれていないこともあるし、書き忘れていることもあると思う。まだ、見えていないことも気が付いていないこともたくさんあるのだと思う。少しずつでも良いから、私なりに進んでいけたらなと思っている。

👣 おくのほそみちのこれまで 👣

第 24 号　新連載決意表明
（「執筆者@短信」にて）

第 25 号
リハビリテーションのこと

第 26 号
‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に

第 27 号
‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に
二歩目；〇〇〇と私

第 28 号
‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に
三歩目；‘あなたー私’という関係 によって変わる‘場’

第 29 号
選ぶということ
一歩目；私の内にある‘絶対’

第 30 号
選ぶということ
二歩目；理学療法士として①

第 31 号
在宅医療について

第 32 号
選ぶということ
三歩目；生き場

「ケアプラン」の価値

馬渡　徳子

前々号の「年金記録は人の生きてきた証最終回」に登場した同居の義母が、今年 1 月中旬の経年にない豪雪時に脳出血で倒れた。

「どんなことがあっても、他法との年金調整が終了し、遺族年金が全額支給開始となる 2018 年 12 月に、元気でお祝いしよう!」と皆で約束していたのに、と家族待機室で、ソーシャルワーカーでもある自分を責めた。

しかしながら、手術終了後、執刀医の病状説明時の言葉に、前を向くことができた。「凡そ、重篤な障がいが残ります。しかしながら、幸運でもありました。わずか週一回利用のデイサービスの最中に、職員の目の前で倒れるなんて。もしも、前日や翌日であれば、夕方仕事を終えて帰宅した方が、お母様のご遺体の発見者となったであろう程の出血量でした。また、『デイサービス先に救急時の搬送先を事前に指定』しておいたこと、有事の救急搬送に備えて、『かかりつけ医による診療情報提供書と医療保険証の複写を更新し、デイサービスに預けていた』ことも奏功しました。このような手配をしておいたケアマネジャーさん、デイサービスの職員、ご家族のお手柄ですね。」

確かに、そうだった。当時の生活道路・幹線道路は、どこも、まるでモーグル競技のような状態で、救急車搬入・搬送が、非常に困難な状況が常態化していた。多くのデイサービス・デイケアは、どうしても必要という方だけの利用に限定している事業所が多かった。

駆け付けた義弟が、次のような言葉をかけてくれた。「義姉さん、本当にありがとう。百年分の親孝行をしてもらいました。義姉さんの勧めで、デイサービスに通わせてくれていたからこそ、助かりました。先生によると、かなり重度の機能障害が残る見込

みにて、どうか自己犠牲的に在宅で介護しなくてはならないと思い込まないで欲しい。生きていてくれただけで、もう充分です。」

私の連れ合いを始め、駆け付けた家族が皆、泣きながら頷いていた。

救われた。家族待機室で、初めて、おいおいと子どものように涙が出た。

義母のケアマネジャーさんは、若い保健師さんだった。ケアプラン作成にあたり、一つだけお願いをしていた。

私たち夫婦には遠慮して決して言わないと思うので、ケアマネジャーとして、本人に敢えて訊いて、ケアプランに書き加えて欲しいことがある。

それは、この二つ。

①行ってみたいところ

②会っておきたい人

すると、

①外孫である次男の娘の福井国体の応援。

②50 年以上会えていない出身地にいる妹。

と応えた。

私たち夫婦は、がぜんやる気が出た。

「お母さん、ちょっと費用は嵩むけど、この願い、叶えてみせようじゃん!!　ケアプランの目標を達成してみせようじゃん!!　」

私たち夫婦は、父を交通事故で亡くし、人生には突然の別れがあることを、身をもって知っている。

義母は、長男である私の連れ合いと供にこの目標を見事に達成した。そして、そのわずか二か月後に倒れたのである。

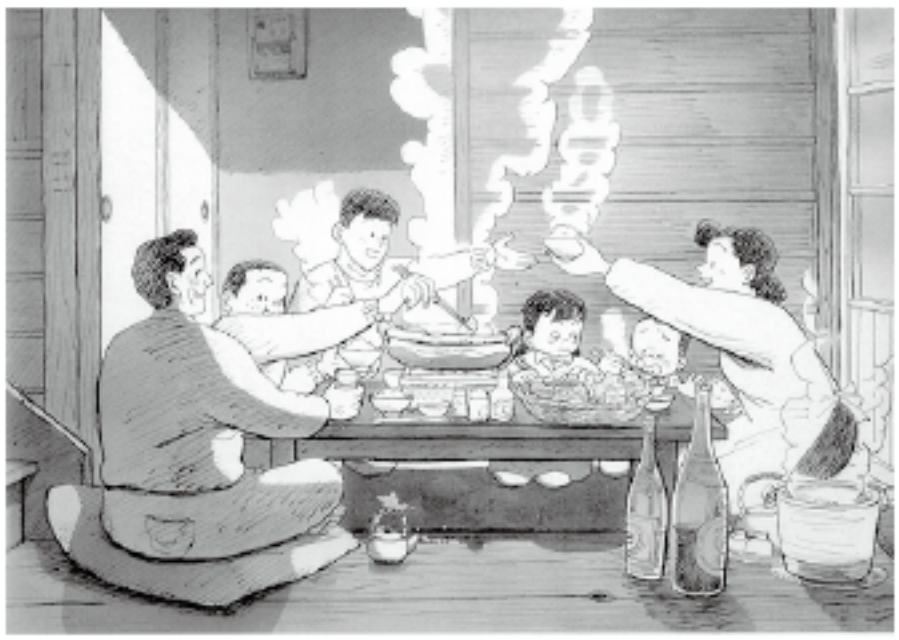
義母に、この質問をして下さり、ケアプランに載せて下さった保健師さんに、心より感謝申し上げるとともに、「ケアプランの価値を当事者主観で実感する」ことができた。

東成区の昭和 やぶにらみ日記

絵＆文　柳 たかを

本作「やぶにらみ日記」を制作したのは、インターネット接続が WIFI ではなくモデム回線の時代。その頃の私は「昭和」をテーマにした某企業広告イラストを 10 年間続け、日本家屋・家族・路地・つどい等のシーンをモノトーンのマンガ風イラストに描きつづった経験をどうやって次の作品にバトンタッチさせるか思案していました。

ハウスメーカーの企業広告イラストとして最初に採用された作品、50 代だった父親が自嘲するように自分自身をそう呼んでいた「貧乏絵描き」の言葉を、何かでイライラした 9 歳の僕が父に向かって「お父ちゃんのビンボウ絵描き」と言ったら、いきなり頬っぺたをぶたれ、ビックリしたのと後悔の気持ちで階段の隅でワンワン泣きをした記憶をもとにしたものでした。



「なべ料理」

最初にハウスメーカー側から提示された広告コピーは「思いやりの伝わる家」、しかしコピーの狙いをソツなく説明しようとしたサンプル作品は、「何か物足りない」と描き直しを求められ返却されることの繰り返し、ついに行き詰まって追い詰められた気持ちでいた時、ふと空想シーンを描くのをやめ、自分の体験した忘れられないシーンを、それが多少陰気であってもごまかさず描けば見る人に届くのではと思った。

それでボツになったら力不足、縁がなかったと諦めがつくと開き直り取り組んだのです。
描き上げた作品の提出後まもなく、全国紙新聞の 15 段全面広告として私の描いた暗い物置でベソをかいて座り込む男の子のイラストを見たのでした。

やがて家族の後ろ姿・お正月・帰省シーンなど、トーンのそろった作品が増えて行き、「家族の懐かしいシーン」を描く世界こそ自分が繰り返し見たいイメージだと創作の芯をつかんだように思いました。
この「やぶにらみ日記」は、私が自分の記憶を思い出したくて私的に始めた Web 連載です。とちゅう 6 回集中連載させて頂きました昭和の子供遊び「ホイラン」（本誌 26 号～ 31 号）も同じ時期に描いたものです。
本誌には懐かしい自作を振り返る機会をいただき有難い思いでいます。



「昼寝」

やぶにらみ日記

東成区の昭和(46)

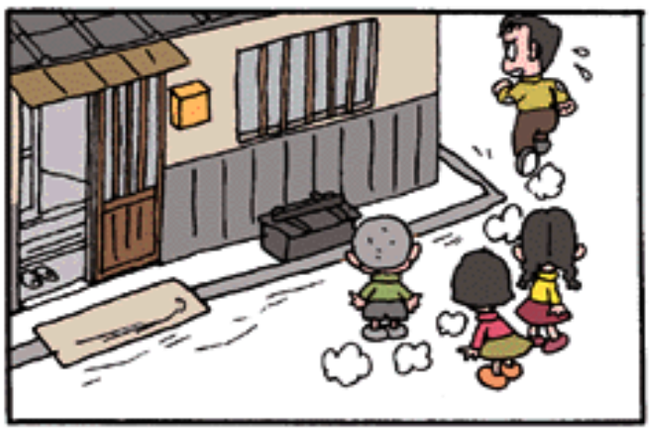


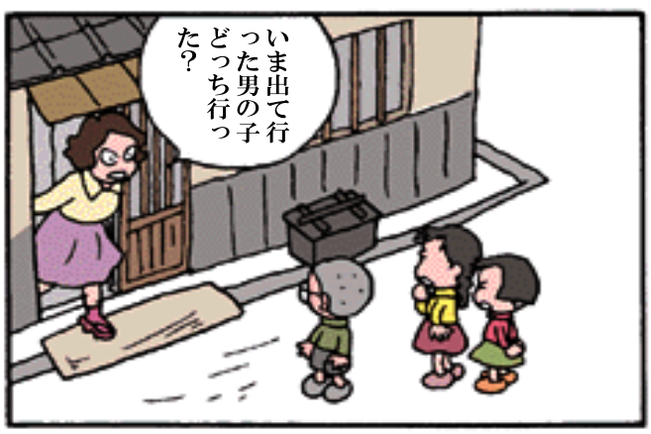
東成区の昭和(45)

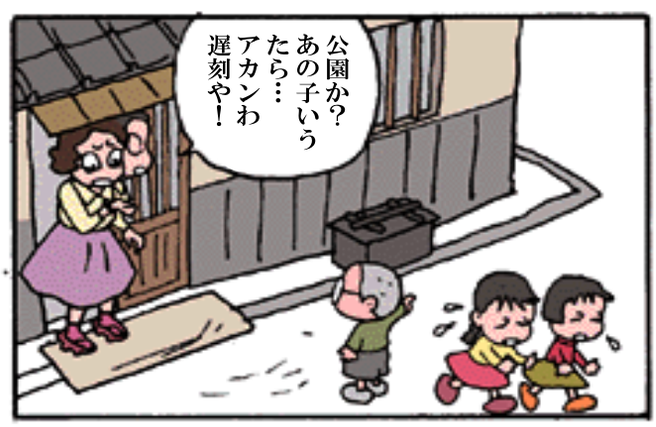


やぶにらみ日記

東成区の昭和(47)









東成区の昭和(48)









やぶにらみ日記

東成区の昭和(49)



やぶにらみ日記

東成区の昭和(50)



やぶにらみ日記

東成区の昭和(51)



東成区の昭和(52)



やぶにらみ日記

東成区の昭和(53)





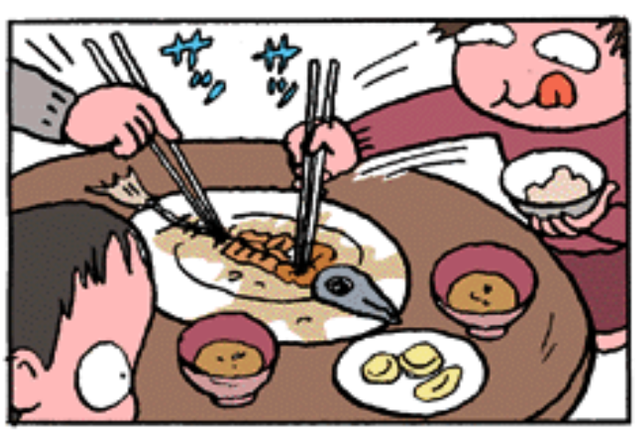




やぶにらみ日記

東成区の昭和(54)









やぶにらみ日記

東成区の昭和(55)



やぶにらみ日記

東成区の昭和(56)



やぶにらみ日記

東成区の昭和(57)







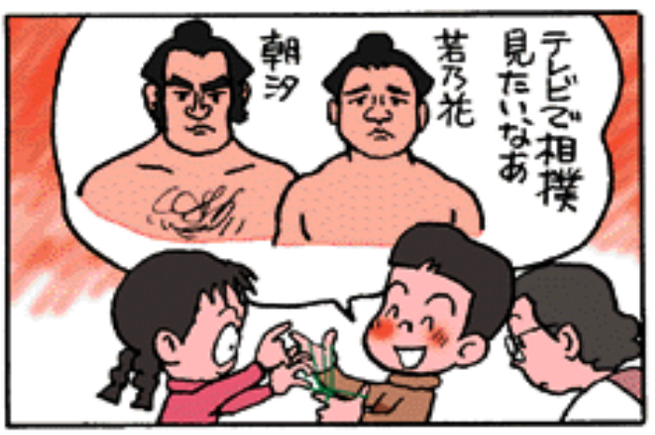


東成区の昭和(58)











書簡型連載　8

ケアマネさんとお坊さん



木村　晃子　様

差出人　竹中　尚文

2018 年 5 月 17 日

大学の一般教養の授業だったと思います。講義の科目名もその先生の名前も顔も忘れてしまいましたが、中国の歴史について話されていました。中国では王朝が終わって、次の時代になると前の時代の「正史」を編纂するそうです。その前の時代のいろんな記録を集めて「正史」を編纂すると、その資料をすべて廃棄処分するそうです。絶対的な記録を後世に残すのです。それも客観的に正確に残すために、自らの王朝史を残すことをしなかったそうです。客観的といっても、記録をしようとしている前王朝を倒して、自らの王朝を立てたのですから、その客観性は疑問です。とはいえ、記録の正確さやそれなりの客観性を大切にしたのでしょう。

中国の王朝のような中央集権的な国家建設を目指した明治政府は、そうした決定版の記録を残すことにしたようです。最近の日本では政府の中枢で記録の廃棄や改ざんを行うようになってきました。「正史」を作らなかった日本の本来の性格かもしれません。正史を作らないというのは、メモ書きや伝聞などいろんな形での歴史伝承があっていいのです。政府の記録廃棄や改ざんのニュースに触れて、私たちは語り継ぎの歴史を忘れかけていたように思います。メモ書きや伝聞もいいのですが、何より前の世代の語りを聞くことが減りました。お年寄り

の話を聞くことが減りました。個人情報の保護ということもあってか、誰からか聞いた体験を別の人に語り継ぐことが難しくなっています。

私はお参り先でお年寄りの話を聞くことが多いです。たぶん木村さんもそうでしょう。6歳の時に広島で原爆に遭って、周囲の人がみんな死んでしまって、自分の被爆の証明が出来ないお婆さんに話を聞いたことがあります。また、第2次大戦の時、上海の日本軍の食糧倉庫の番をしていたお爺さんは、一度も戦闘に遭わず肥って帰ってきたそうです。また、前線で壮絶な銃撃戦の中を無事に帰還したお爺さんの話も聞いたことがあります。あるお婆さんは、空襲の中を母と弟の3人で逃げ惑い、自分は誰かに押されるか投げ込まれるように小さな水路に転がり込んだそうです。爆撃が過ぎて、水路から這い出してみると母親の姿はなく、弟は立木の枝に突き刺さっていたそうです。

私の父親は、第2次世界大戦で16歳の時に志願兵として海軍航空隊に入隊したそうです。もちろん、私の祖父母は反対したそうですが、自分が日本を守るのだという決心で入隊したそうです。後悔をしたのかという私の質問に、「もちろん後悔をした。入隊して直ぐに後悔をした」と答えました。16歳で入隊し、18歳で終戦を迎えました。特攻隊は、避けて通れない話です。

友人の出撃は、ずっと無線のマイクを握りしめたそうです。ふたりでとりとめない話をしながら、「いよいよ到着。これから突撃する」といって、スピーカーからは「ツー」という音だけが続いたそうです。それは、かなりの時間であったようですが、無線のスイッチを切ることが出来なかったそうです。それから、しばらくして基地の食堂に張り出された中に自分の名前があったそうです。深夜に飛行機に搭乗して、夜明け前にエンジンをかけたそうです。夜が明けても出撃命令は出なかったので、父は生き残ったのです。

この話を一気にしたのではなく、父は何回かに分けて話しました。普段はよどみなく話をする父親が、断片的にポツリポツリと話しました。出撃することになっていた夜、父は何を考えたのだろうと尋ねました。父はそれには答えませんで

した。今思うと、答えられなかったのかも知れません。友人の死についても語る言葉を持てなかったような気がします。父はひとつのエピソードを話しました。特攻機が離陸を始めると、基地の上官たちは一目散に建物に逃げ込むのだそうです。離陸を終えた特攻機は基地に戻って上官を狙って機銃掃射をしたそうです。機銃掃射の対象は決して出撃をすることのない人であり、自分を特攻の出撃に選んだ人です。映画などで見る特攻隊の映像にはない話です。

父の人生の時間について終戦を境にすれば、戦前で人生の四分の一、戦後で四分の三の時間を過ごしたことになります。私にこの話をしたのは一度きりでした。三倍の時間をつかっても、父の中では決着のつかないことであったと思います。父は保守的な価値観で人生を過ごしたと思いますが、「天皇陛下」という言葉を使うことは一度もありませんでした。

すべてのことに、見る方向性によって見方は異なります。立場によって、見解は異なります。戦争の体験談もそれぞれの人によって話は異なります。一つの見方に絞り込まない伝承の歴史があります。そしてこの『対人援助学マガジン』もそうです。いろんな人が執筆しています。その方向性はバラバラですが、全員が今の時代を語っています。私の若い頃、あるお寺の前に「バラバラでいっしょ」という言葉が貼ってありました。その言葉にとても勇気づけられたように思います。

竹中　尚文　様

北海道も、ようやく春を過ぎ、初夏の雰囲気がやってきました。外では、カッコウのなき声がします。カッコウが鳴く頃に田植えをする、と教えられたように、田植えの終盤に差し掛かっている当地です。

前回は、仕事を辞めることになり、先行きが見えない中での近況報告でした。４月以降は、穏やかな毎日を送っております。朝、新聞を読む時間もあり、世の中の出来事を眺めながら自分の生活に向き合うことができています。そんな日々の中で、記憶や記録があいまいに、自分の都合の良いように扱われている各種報道を目にします。「そんなバカな。」「そんなの絶対嘘だろう。」と思ってしまうことを見聞きした時に、批判するのは簡単ですが、自分は、それにどのように対応しているのか、と内省してみます。世の中の出来事が、自分には関係ないなどと思うことが一番の無責任なのだと思うようになりました。

竹中さんからのお便りから、幾つか考えてみました。「語り継ぎ」が今回のテーマのような気がしたので、そのことについてまとめてみようと思います。

この３月の終わりまで、ケアマネジャーをしていましたので、当然ながら、たくさんの高齢者に出会いました。この仕事を始めた１３年前には、明治生まれの人もいましたし、戦争を体験した女性・男性にも出会いました。その当時のお話を聞く機会がありました。けれども、最近は、戦争体験者も徐々にお亡くなりになり、戦争について実体験を聞く機会が年々減ってきたことを感じます。そのような中、私の担当した利用者さんの中でとても心に残る出会いがありました。

Ｓさんというその方は、特攻兵として戦い、終戦を迎え、帰還した方でした。私が出会ったのは、その方の人生の最後１０年でした。お会いした時には、病気もあって、一人暮らしの生活もままならない状態でした。それでも、出会いから９年は自宅での一人暮らしを続けることができたのです。その暮らしを支えたのは、離れて暮らすお子さん達や、地域の人たち、介護保険サービススタッフな

どたくさんの人たちだったことは言うまでもありません。けれども、私は、Ｓさんの生活を傍らで拝見していた時に、やはりご自身の強い気持ちがその方を支えていたのだと感じます。

私が訪問すると、「いつも同じ話で悪いね。」と言いながら、出撃した時の話や、目の前で戦友が亡くなった話、特攻兵として出兵したものの、戦後に自宅に戻った時の周辺の様子。ただ一人泣いて帰還を喜んでくれた母親の姿、などなど、ゆっくりと聞かせてくれました。Ｓさんは、すさまじい体験をされていました。私は、Ｓさんに「死ぬのは怖くなかったのですか。」と尋ねたことがありました。今考えると、浅はかな愚問だったと思います。Ｓさんは、「怖いとか、怖くないとかじゃないんだよ。」と言っていました。それ以上のことは言葉を発しませんでした。そして、「戦争の時代というのは、人の考え方を洗脳する。みんなおかしくなるんだよ。」と言っていたこともあります。時折、私が今の時代を嘆くような話題を向けると、「なんだかんだと言っても、戦争がない時代こそ、平和というものだよ。」と教えてくれました。

Ｓさんの特攻兵としての話を聞きたいという人は幾人かいました。当時、Ｓさんを担当していた私のところに、その依頼が来たこともありました。Ｓさんに伝えると、「もうそっとしておいて欲しいから、そういうのは断っておいて。」と言いました。そういうものなのかな、と思っていました。それでも、私が訪問する度に、Ｓさんの戦争体験は繰り返し語られました。時には、「ちょっと来てくれるかい。」と、予定の訪問日とは違う時に電話が来て、訪問すると、その話が始まることもありました。今思うと、Ｓさんが戦争体験を話す時、目の前で命を落としていった戦友たちの無念の死を思いながら、生きて帰ってきた自分に命ある限り、生ききることを使命として再確認していたのではないかと思います。年と共に不自由になるその身で、生活を続けることの大変さを背負いつつ、自分を奮い立たせるのが、当時の体験だったのではないかと・・・。

Ｓさんは、２０１６年の２月にお亡くなりになりました。Ｓさんの体験は静か

に消えて行ってしまうのかと思いました。ところが、驚きの展開がありました。この３月、書店の前を通りいかかった時に、平積みされた本の表紙に目が留まりました。「不死身の特攻兵」という題名でした。私は、すぐにＳさんのことだと確信しました。手に取って、本を開くと、やはりＳさんのお名前がありました。すぐに購入して読みました。そこには、私が何度も聞いた話と、聞いたことのない深い心の動きまでも記されていました。９回出撃し、上官に背き、そして終戦を迎え帰還するまでの詳細がありました。私は、この本を一気に読み、読みながら涙がこみ上げました。そして、こうして、Ｓさんの体験が世の中に残ったことに安堵しました。

私たちは、生きている限り、歴史に学んでいかなくてはなりません。時代の中に生まれる価値観は、必ずしも、正しい価値観とは言えません。人間が故の愚かさがあります。その時に、犠牲となってしまう人たちがいます。理不尽なことを引き受けなければならない人がいます。今を生きる私たちは、過去の過ちを繰り返さないように、歴史から学ぶ必要があります。戦争を二度と繰り返してはいけない、というのは当然のことです。と、同時に、戦争という愚かな事件から学ぶべきその他の事項もあると感じます。権力に支配されないように、一人ひとりの発言、行動が求められている時代だと思います。「私はここ（今の時代）にいますよ。」という主張は必要です。その意味では、数か月前に退職を決意して、今を作り出した私の小さな人生も、誰かの役に立つこと、過ちを繰り返さない世の中にしていくために、考える材料の一つにはなるような気がします。

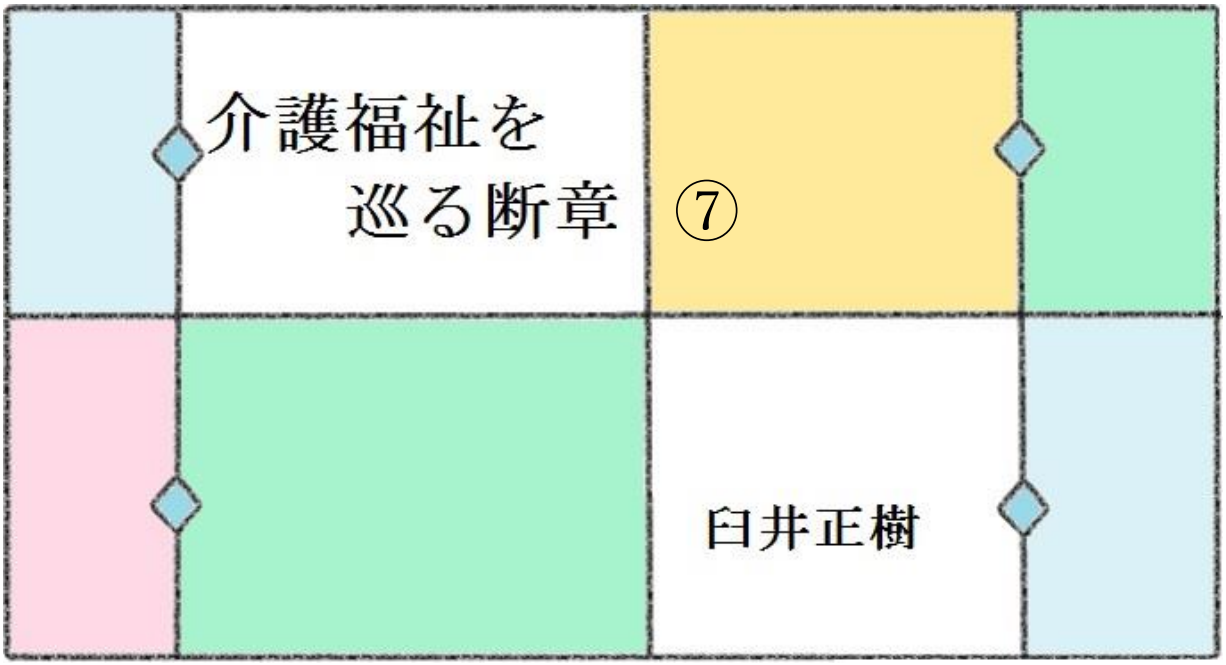
時代をしっかりと語り継いでいくこと、その記録は、今を生きるものの使命だと思います。どのような経験も、そこには仕組みがあり、仕組みを維持している要素がある。私たち一人一人が時代を担っている責任ある立場であることを自覚したいと思います。

一青窈の曲で「ハナミズキ」という歌があります。歌詞の一節に、「君と好きな人が百年つづきますように」という部分があります。時代のバトンを渡してい

く、若い人たちの人生が続いていくように、時代の証人として、「時を語り継ぐこと」に憶病にならずに、行動していきたいと思います。そのように、思えるようになった今の自分も、ここに記録しておきます。

木村　晃子

＊参考：不死身の特攻兵　鴻上尚史　講談社現代新書



1　二人の大学院生・楊夏麗

2017 年度は、大学院博士前期課程において介護福祉をテーマにした二人の大学院生を指導した。一人はすでに第一回目に紹介した中国山西省からの留学生、楊夏麗であり、もう一人は学部の卒業生である松田愛美である。今回は、二人との関わり、二人の研究内容の紹介をさせていただくことにする。

楊夏麗は、中国山西省の出身で遼寧省大連に所在する大連交通大学で学んだ。大連交通大学は、中国では珍しく社会福祉を学ぶことができる大学であり、楊夏麗はそこで社会福祉を学ぶとともに日本語を学習し、日系企業に努めた後、留学ビザで日本に来た。当初は、日本語学校で学び、私が勤務する大学の大学院への入学を希望した。最初に会ったのは、2015 年の夏だった。それまでに何人もの中国、韓国からの留学生を見てきたが、彼女ほど明るく熱心な学生はもう一人しか知らない。大学が夏休みの時期に来てもらって事前の面接を行った。

まだ日本語の習熟が N２レベルではないかと思われる面接でのやり取りであったが、彼女の表情は明るく、着ていた緑のノースリーブのワンピースと少し茶に染めたショートヘアーから受ける印象は、向日葵のようで眩しかったのを記憶している。実際に小論文等の大学院入学試験を受けた結果は決して悪いものではなかった。

入学前の時点で楊夏麗は、日本語学校に在籍し在留資格「留学」のビザを得て、週 28 時間の範囲内で横浜市内の特別養護老人ホームでアルバイトをしていた。当時は日本の介護福祉の現場に身を置いて、そこで行われている様々なことに一つひとつ疑問を感じていたのではないだろうか。入学試験の際に提出された研究計画では、リサーチクエスチョンとして特別養護老人ホームにおける認知症高齢者のケアや、終末期ケアのあり方などが述べられていた。

大学院に入学した後、4 月から毎月一回、大学院ゼミと称して私が指導を担当する学

生に集まってもらい、それぞれの研究計画について意見交換を行った。まだ焦点化されていない状態で 2 回ほど認知症高齢者のケアについての研究を模索した後、もう一人の同期の大学院生である松田のアドバイスもあって研究テーマを変更することになった。6 月の大学院ゼミだったと覚えているが、「介護福祉分野における外国人労働者の就労環境について」というテーマで課題意識をまとめ直した。その後、検討を進める中で「多文化共生」の視点を盛り込んで外国人労働者の就労環境について考えたいということも楊夏麗は述べていたように思う。

「介護福祉分野における外国人労働者」に関して論点を整理していくうちに次のようなことが分かってきた。第一として、EPA（経済連携協定）のもとで日本に来て、介護現場で実践をしながら勉強を重ね、3 年経過した時点で介護福祉士国家試験を受験し、合格すると介護福祉士としての在留資格を得て働く続けることができるルートがある。EPA による介護人材は、平成 21 年度以降インドネシア、フィリピンの二か国から、平成 26 年度からはベトナムから来日するようになっており、平成 29 年度時点で累計 5 千人近くの方がこの制度に基づき日本に来ている。介護福祉士国家試験に合格すると日本で働き続けることができるのだが、国家試験は日本語で受験する必要があり、母国で看護や介護の学習をしてきた方であっても日本語と日本の文化になれることが求められ、来日した方々はベトナムを除き苦戦している状況にある。

第二のルートは、平成 29 年 11 月から技能実習生の制度が改正され、介護職種が追加になったことで生まれた。現時点（平成 30 年 5 月）では、技能実習生を受け入れる関係の機関の準備が必ずしも十分ではなく、技能実習生の本格的な受け入れはこれからということになる。ちなみに、技能実習生の枠組みでの日本での活動期間は、最大で 5 年間（条件によって異なる）となっており、中期的な対応としての来日である。この第一、第二の外国人介護労働者のルートは、あくまでも一時的に日本で介護福祉の業務に従事し、日本の介護福祉の知識・技術を修得したうえで母国に役立てていただくことを目的とした制度である。実態として、日本における介護人材不足を補うための外国人介護労働者の受け入れの方策として捉えられているが、決してそうではない。こうした部分も含め外国人介護労働者が日本の介護人材として参入するのには、高いハードルが残っている。

第三は、楊夏麗のように「留学」ビザで来日し、日本で日本語の勉強や専門学校・大学等で勉強したうえで介護福祉士国家試験を受験するルートである。在留資格としての「介護」が 2017 年 9 月から本格的運用が始まっており、現時点では「介護福祉士」の国家資格を得て介護福祉士として働く場合にはビザが下りることになっている。このように、第三のルートは「留学」ビザで来日し「介護」ビザを獲得して日本で働くケースである。このルートが開かれたことで、日本の介護系専門学校は学生が集まらずこれまで定員割れが続いていたのだが、少しだけ息をつける状態になったといわれており、今後、在留資格「介護」で働く外国人介護労働者は飛躍的に多くなっていくものと予想されている。

三つのルートとも、最終的には介護福祉

士国家試験に合格することが求められる点は共通しており、少なくとも国家試験が一つの大きなハードルであるがこれに合格すれば、日本の介護福祉の業界で働き続ける道が開け得ることになる。

楊夏麗は、自らの周りにいる中国人留学生を対象として、介護現場での就労意向や就労上の課題についてインタビュー調査し、その結果をまとめる形で修士論文としたのだが、そこで幾つかのことが明らかになった。インタビュー対象が中国からの留学生であることを前提とするが、多くの留学生は、在留資格「介護」が得られても、長期にわたって日本で介護労働に従事する計画をもってはいない。30 歳になるまでの数年間、国家資格を取得した後も日本で介護福祉の実践をとおして勉強し専門性を高めたいと考えているが、遠くない時期に中国に帰り、両親の面倒を見る、すなわち両親の介護を担うつもりであることがわかった。

つまり、中国の一人っ子政策はこうしたところにも影響しており、中国の多くの若者は、いずれは自分が親の世話（ケア）をしなければならないと考え、さらに中国人女性の多くは、30 歳前には結婚しなければというもう一つのジェンダーハードルが待っている。

他のルートで日本の介護福祉現場に入る方々に関しても詳しく調査していく必要があるが、技能実習生に関しては来日当初の段階から年数に縛りがあり、EPA を経由したルートについても、いずれかは母国に戻ることを想定している中で、日本の介護労働力不足の解消にどこまで貢献できるのかは極めて不透明である。またそもそもの EPA や技能実習生の制度が人材不足対策となっていない点に留意する必要があり、第三のルートでの介護人材の確保においても、長期にわたっての就労は難しいのではないかと思われる。

楊夏麗の修士論文は、私たちがきちんと気付いていなかった部分を明らかにするとともに、そうした外国人のうち中国からの留学生に限定したものではあるが、インタビュー調査で当事者の実態を明らかにしており、その意義は高いと考える。

2　二人の大学院生・松田愛美

二人目は松田愛美である。彼女は、私の所属する大学の 3 期生であり、大学卒業と同時に社会福祉士と介護福祉士の資格を取得し、横浜市内の社会福祉法人で介護福祉の仕事に従事した。その後、大学の附置機関である実践教育センターで介護教員の資格を取ってから、大学院に進学してきた。介護における尊厳について、現場の介護福祉士はどのように感じ考えているのかを明らかにしたいというリサーチクエスチョンをもっていた。調べていくうちに、介護福祉の分野で尊厳の議論が始まったのは比較的最近であることが分かった。

介護保険が始まったのが西暦 2000 年、平成 12 年の 4 月である。介護保険とほぼ同時期に議論されたのが社会福祉基礎構造改革であるが、その基本的な考え方は、行政責任による措置の考え方から、自立した人を対象にした自己決定支援としての福祉であった。しかし自己決定という言葉が理解しづらいことから、しばらくすると自立支援という言葉に置き換わる。この自立支援ということに違和感を覚えたのが、当時「さわや

か福祉財団」の理事長であった堀田力である。堀田は、厚生労働省の「2015 年の介護～高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて～」の検討会で座長を務め、この報告書の中で「尊厳を支えるケアの確立」を掲げる。「人生の最期まで、個人として尊重され、その人らしく暮らしていくことは誰もが望むことである。このことは、介護が必要になった場合も同じであり、また仮に、痴呆の状態になったとしても、個人として尊重されたい、理解されたいという思いは同じである」として、尊厳を支えるための介護を提唱した。このとき、堀田の中では、介護が必要な人の自立支援ということがうまく落ちていなかったのだと考えられる。（この部分を厳密に議論していけば、障害のある人にとっての自立支援を認めるならば、認知症の方を含め、要介護の人にとっての自立支援も十分成立すると考える方が自然である。しかしその議論は堀田にはなじみのあるものではなかったのだろう。）

松田は、私が所属する大学の社会福祉学科卒業生の中から介護福祉に携わってきた者を対象としてインタビュー調査を実施した。インタビュー調査の結果を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M—GTA）の手法を参考に分析し、「尊厳を支える介護の形成プロセス」としてのストーリーラインを得る。

このストーリーラインからは、大きく二つのことが明らかになった。一つは、介護福祉の利用者のその人らしさに触れること、立場の違いによる気づきなどを経て、命を守る大切さや、丁寧なケアの必要性などの実勢するうえで必要となる視点や力に気付き、それを身につけていく中で本人の思い・生活歴・大切なものなど＜その人らしさ＞を守ることを大切にするようになることである。

もう一つは、尊厳を支える介護に至る過程において、マイナスとなる因子が数多く存在することである。介護現場に就職後、多くの者が自分に余裕がなければ利用者の思いをくみ取れないと考えていることや、仕事の上で自分自身（介護者自身）を守る必要性を感じている。また、介護福祉の業務では、一人で支え切ることは難しいこと、多くの職員が目の前の仕事にかかり切っていること、介護の尊厳を守るといいうことが現場ではかならずしも当たり前のことではなく、職員が不足していてしたくてもできない現状にあることなどがインタビューにおいて明らかになった。

松田愛美の研究からわかることは、尊厳を支える介護に至る過程におけるマイナス因子を一つひとつ丁寧に取り除くこと等をとおして、介護福祉の実践者が利用者のその人らしさに触れ、その人らしさを守ることの大切さを理解することが求められているということである。

今回は、二人の大学院生の研究を紹介した。二人の研究は介護福祉に関するものではあるが、介護の技術を論じるものではない。介護福祉を取り巻く現状の分析であり、介護福祉の根源を問うものである。介護福祉の技術的知見をエビデンスとして積み上げることと併せて、二人の大学院生が行ったこのような研究が厚みをもっていくことが、これからの介護福祉の発展のために強く求められている。

町家合宿 in 京都 vol.7
～食事についてその①～

山下桂永子

町家合宿の始まり。駅の改札口に集合し、挨拶と自己紹介を一通りすませ、まず決めなければならないことがある。「今晩なに食べたい？ただし食費は１人１回 500 円ね」である。初めての参加者はたいてい少しポカンとする。昼の 3 時ごろに夕飯のことについて聞かれ、1 食 500 円と言われても、慣れない場所にやってきて、普段金額を強く意識して食事をすることはあまりないであろう中高生にとっては、イメージが全く沸かないのかもしれない。

スタッフが緊張をほぐすように、「昨年や一昨年は、ああだったこうだった」などと話しながら、駅前のスーパーマーケットに向かい、町家に向かう前に、その日の夕飯の買出しをしている。

☆1 回の食費は１人 500 円

町家合宿には 11 年間変わらぬ「1 回の食費は 500 円」というルールがある。朝食だろうと昼食だろうと夕食だろうと 500 円である。そして、何を食べるのかは参加者それぞれの希望をその場で聞いて、可能な限り希望に沿うものを買ったり作ったりするというスタイルである。

毎年食事の希望を聞くが、メニューがすぐに決まることは少ない。これといった希望は出ないものの、食べ物の好き嫌いを聞けば、それはたくさん言えることが多いので、食に興味やこだわりがないわけではないのだろう。しかし、「これが食べたい」というものが出ない。

当初はそれでかなり苦労をした。古着交換とは違って、他人のものを選ぶわけではない。自分が食べたいものならば、もうちょっとあれ食べたいこれ食べたいと、むしろこちらが困るぐらい希望が出たらどうしようなんてことも想定していたわけである。しかし、今自分が食べたいというものがこんなに思いつかないものか、あるいは表現できないものかと戸惑った。それでも全ての行動において、参加者が「選ぶ」「決める」という自己決定を重視する町家合宿で、参加者から希望が出ないからと言って、スタッフが食べたいものを言うわけにもいかないし、それでも誰かが決めないとごはんが食べられない。とても困った。そこで事前に希望を言わなくても、自分で食べたいものを「選ぶ」「決める」ということを多少なりとも促すために、工夫することにした。

☆朝食について～残り物や朝マッ〇～

町家合宿では、朝食には、前日の夕食の残りや、おにぎりと味噌汁を準備して、食べたいだけ食べるというパターンと、ファーストフードやレストランのモーニングサービス（バイキングで 500 円という破格のところがある）に行って、それぞれ 500 円以内で買ってみんなで食べるパターンが多い。

朝食は、特に参加者の希望が出ない。考えてみれば、朝食に何を食べたいのか毎日しっかり考えている人がどれほどいるだろう。食事の中でも一番ルーティンになりやすいのが朝食であると思う。家庭によって、1 人で食べているのか、家族と食べているのか、パン派、ごはん派も様々で、朝食を食べない人だっているだろう。その中で、自分は普段これを食べているということは言えても、自分は明日の朝食にこれを食べたいとイメージし、それを言えるのは、なかなかに難しいことなのかもしれない。



朝食バイキング。朝から欲張って和洋関わらずたくさん取ってしまう。

☆昼食について～学食での大学生体験～

大学見学を観光に入れるので、昼食は大学の学食で食べることにしている。学食では、500 円あれば好きなメニューをお腹いっぱい食べることができる。安いし美味いし量も多い。お茶やお水もセルフで温冷揃って無料である。定食から丼もの、麺類、デザートまでたくさんのメニューが揃っていて、実際のものがイメージしやすいせいか、参加者が楽しんで選ぶことができる。子どもが大学に行きたいと言わなくても、希望した観光地の近くにある、（学食のある）大学をチェックして、昼食はそこで取るようにしている。

学食に入り、席を決めたら 500 円玉を一人ずつに手渡して解散する。大学生に混じりながら好きなメニューを選んでお盆にのせてお金を払い、みんなでわいわい食べる。おつりとレシートは回収するのだが、たいてい初参加の子は結構おつりを残してくれる。初めてのときは、メニューに値段は書かれているものの、何をどう頼めば 500 円以内におさまるのか想像がつかず、不安なので、少なめに頼んでしまうようである。一方、慣れている子はおつりが数円というのも珍しくない。498 円や 499 円でおさめてくるつわものには、拍手喝采が送られている。

午前の疲れなのか、大学見学という慣れない場所や人の多さでの緊張なのか、何も食べないという子もいる。教室や施設を見学するだけでなく、実際に大学生になりきって学食で食べることは参加者にとって、負荷がかかることであるのかもしれない。

「学食がうまかった。からあげらーめんとんこつのもやしがやばいぐらいうまかった。」と感想文で書いていた A さんは、それまでもやしが大嫌いで、家では全く食べていなかったらしいが、この学食でもやしを食べてからというもの、その後の町家合宿の夕食で出たもやしもたくさん食べていたし、家に帰ってからも自分でラーメンには必ずもやしを入れて食べるようになったと保護者から聞いた。感受性が強くてこだわりや好き嫌いが結構激しい A さんが、苦手なものを、学食でたくさんの人の中で、おしゃべりしながら食べることによって克服どころか、好みが 180 度変わってしまうということにとても驚いた。



最近の学食は建物もきれいでおしゃれカフェの雰囲気。

☆夕食について～何かしらバイキング～

夕食は、手巻き寿司にして、ネタをバイキング形式にしたり、パスタやそうめん、そばなどの麺類をいろいろ茹でて、味付けをレトルトでかけるだけのものや、めんつゆにしてバイキング形式にしたりなどである。家庭で言うところの大皿形式というべきか。

また、2 日目の夕食は、カレーであることが多いが、買い物の時に入れて欲しい（または入れて欲しくない）具の希望を聞いて、辛さやトッピング、付け合せのサラダを選べるようにしている。

1 人 1 食分の食費は 500 円で､夕食であれこれ食べようと思えば少ないように感じるが、参加者やスタッフが合わせて 10 人いれば 1 回の食費に 5000 円使える。そうすると、たとえトロやウニは無理であっても、ツナ缶にマヨネーズを混ぜ、マグロの柵を 1 パック買って来て細く切ったり、刻んでネギトロにしたり、アジを 1 匹、イカを 1 杯、叩いてさばいてとしてみれば、工夫次第でそれなりに 10 人が食べられる、何がしかのすしネタになる。あとは白米をたくさん炊いて、すしの素（粉状）を振りかけてまぜ、シャリとネタを巻くのり（これが一番お金がかかる）を用意すれば、お腹いっぱい寿司が食べられるのである。




みんなでイカをさばいた時。スタッフがヌルヌルした感触に「ギャー！」と叫びながら皮をむく一方、普段はおとなしい参加者が意外に平然と皮をむいていたり。寿司ネタだけでなく、ゲソや耳は炒めておかずにすると美味。




手巻き寿司にサラダと味噌汁。海苔が一番先になくなってしまう。

☆間食について①～ランキングという抜け道～

「何食べたい？」と聞いたら何も希望がでないのに、毎年参加者に記入してもらう「いってみたい　やってみたいランキング in 京都」では、「抹茶スイーツ」や「かき氷」「和スイーツ」などは高確率で入っている。




やってみたいランキングへの希望については、観光の一環であるので、特に 500 円と定めてはおらず、結果、朝昼晩の食事よりも高額な間食をいただくことになる。

☆間食について②～町家合宿の食を支えてくれているサポーターたち～

そして町家合宿には、1 食 500 円以外にも食事を豊かにしてくれる方々がいる。毎年、晩に手作りのクッキーやケーキを持って来てくれる、それだけのために町家に来てくださる臨床心理士の方や、とびきり美味しいおにぎりを握ってくれる、それだけのために町家に夜の数時間来てくれる保育士の方。そしてカレーを作るのに、たまねぎをあめ色になるまで炒めてくれたり、手作りのフナ寿司を持参する発達臨床心理士の方。いずれも対人援助職でありながら、その仕事の忙しさを縫って報酬や見返りなどは関係なく、ただただ美味しい物を町家合宿の参加者のために届けてくれている。



あめ色たまねぎの入ったカレーは絶品で揚げ野菜のトッピングも美味。あるスタッフが持ってきたジョロキア（世界一辛い唐辛子ソース）に何人か挑戦して大盛り上がり。



スイーツとおにぎりは夜の楽しみ。毎年心理士仲間の I さんが美味しい手作りのスイーツを仕事帰りに持ってきてくださる。

☆食べることは選ぶこと

古着交換（vol.4～vol.5 参照）では、自分以外の誰かの服を選ぶので、その誰かや一緒に選ぶ人たちの間で価値観の交換が行われる。一方、食事の場合は、選ぶのも食べるのも自分である。ということはただただ自分の欲求に従えばいいわけであるので、選ぶのに困ることはそれほどないだろうし、他者の価値観を取り入れることはあまりないだろう。とこれまで私は思っていたのだ。しかしそれはどうも違うらしい。

町家合宿を始めたころは、家にひきこもりがちだったり、インドア中心の生活を送る参加者に、好きなものを好きなだけ食べる喜びを経験してもらえたらいいな、学食とか行けば工夫次第で安くていっぱい食べれるということを知って欲しいな、というぐらいの気持ちだった。自己決定が大事だと言いながら、選ぶということが、どれだけ大変なことで、どれだけの負荷を参加者に課しているのかということはあまりわかっていなかったと反省している。

自分で食べたいものを選ぶと言っても、町家合宿においては食べるのは集団の中においてであり、そこには様々なこころの動きや価値観の交換がある。

ある年の町家合宿で、その日がたまたま参加者 B さんの誕生日だった。「手作りでごちそうになったケーキが嬉しくて、こんな風に大勢の中で 20 歳になったのだとお祝いしてもらえて不思議に思いながら感謝です」という B さんの感想にもあるように、食を通した他者との関わりの中で、気持ちが動いたりすることは多いのである。

現に私自身も町家合宿で初めて食べて、それ以降食べられるようになったり、好きになったものがいくつかある（カレーの中辛とフナ寿司）。自分のこれまでの食事レパートリーにはなかったものが、すすめられてとか、誰かが美味しそうに食べているところをみて、一口食べてみたら意外と美味しかったなんてことは、日常でも確かにある。やはりそこには他者の価値観の受け入れというものがあるのだと思うし、自分ひとりでは起きることのない変化なのだと思う。

普段からよく言ったり聞いたりする「何食べたい？」という質問が、いかに抽象的で、人を不安にさせるものであるのかということを、それでもその「何食べたい？」は切実な質問であることを、今回町家合宿の食について振り返り、思い知った次第である。



今回の内容

●子猫遺棄事件ルポ

今回は、私が実際に遭遇した子猫遺棄事件について書かせていただきたいと思います。

子猫遺棄（捨て猫）に遭遇

4月の終わりごろ、友人と家から駅に向かって歩いている道中、草が生い茂る空き地から「ミーミー」と生後間もない子猫の元気な鳴き声が聞こえた。暗くてどこにいるのか見えなかったが、ノラ猫の多い地域だったので「ノラ猫が茂みで出産したんだろう」と思った。母猫がついているなら今手出しすることは無いなと思いながらも、母猫さんに差し入れでもしようと思い、翌日の夕方もう一度友人と空き地を見に行ってみた。

空き地につくともう子猫の鳴き声はしなかった。「母猫が移動したのかな」と思いつつも、「ミーミー」と子猫の鳴き声を真似てみた。すると茂みから「ミーミーミー」と昨夜より弱々しい鳴き声が返ってきた。まだ、同じ場所にいるのだろうか？とのぞき込んだ時、茶色い紙袋に気が付いた。嫌な予感がして、空き地の扉をあけた。「念のため紙袋の中にいないことだけ確認しよう」そう言って紙袋を持ち上げた友人が「うわっ」と声をあげた。

子猫の遺棄事件だった。慌てて写真を撮った。遺棄事件なら現場の証拠写真が必要だ。



茶色い米袋には、ダンゴムシやアリが大量についていた。中を覗くと、生後２～３日の子猫が３匹入っていた。１匹はすでに冷たくなっていた。袋の奥に、弱々しくも鳴き声をあげている子猫が２匹。

「間に合ってくれ…」急いでもよりの動物病院を調べるとあと５分で閉まる病院が徒歩３分程度の所にあった。電話を入れ診察のお願いをした。一人は動物病院へ行き、一人は交番に行った。



生きている２匹も体は濡れ、体温が低く、沢山のウジが体を這っていた。腹部には丸く穴が開き、ウジがおなかを食い破って体の中に侵入していた。亡くなっている子のおなかの穴からは数え切れないほどのウジが出てきていた。生きている２匹は緊急入院させてもらった。獣医さんからは「あなたがお金を払えるのか、もし子猫が元気になった場合飼えるのか」と聞かれた。もちろん、子猫の治療費は警察からも行政からも出ない。治療費は私が負担するし、元気になったら里親を探しますと伝え、入院の前金１万円を支払った。

交番での長期戦

子猫を入院させ、交番へ向かった。中ではお巡りさんがあれこれ電話をしている。どうやら「捨て猫があったという人が来ているがどう対応すればいいのか」といった内容をどこかに確認しているようだった。「動物の愛護及び管理に関する法律」は残念ながらまだ認知度の高い法律とは言い難い。警察官や弁護士さんが知らないということはよくあることである。さほど驚きはしない。ここからが大事だ。

●拾得物届けではなく、遺棄事件として届けます。

警察「基本警察では動物も物として扱うので、拾得物の届けを出しますか？」

おそらく、2018 年現在では交番に「捨て猫がありました」と言った場合に返ってくる可能性が最も多い回答だろう。飼い主がいて、迷子になってしまった動物かもしれないので、拾得物の届けを出して飼い主見つかるのを待ちましょう。ということだ。だが考えてみて

ほしい。首輪をつけた犬や猫がウロウロしていたのを保護したならまだしも、目も開いていない子猫が米袋や段ボールに自ら入り、人気のない場所や公共の場所に移動することがあり得るだろうか？

私「自分で歩くこともできない子猫が米袋に入れられて空き地に投げ捨てられているという状況から人為的で悪意があることは明らかだと思います。今は、動物愛護法とう法律があり、遺棄虐待は犯罪とされています。なので、今回は、拾得物ではなく、遺棄事件として届けたいです。遺棄事件として届けた上で、子猫が窃盗にあっている可能性があるというなら、子猫に関して拾得物届けも併せて必要な場合は手続きします。」

警察「ちょっとお待ちください。」

一つ意見を言うごとにかなり長い待ち時間が発生する。交番のお巡りさんから、市の警察署へ電話をし、市の警察署から県警に電話をし、対応について確認を取っていたそうだ。待ち時間の間に、スマホで「動物の愛護及び管理に関する法律」の中で、環境省が出している「遺棄」の解釈文を見てもらったり、遺棄に使用されていた段ボールから犯人が特定できた大阪のケースなどを紹介したりした。幸いこの日は交番が平和だった。他に交番を訪れてくる人や交通事故などがあれば、対応はもっと雑だったかもしれない。待ち時間に２名のお巡りさんとあれこれ話すことができた。

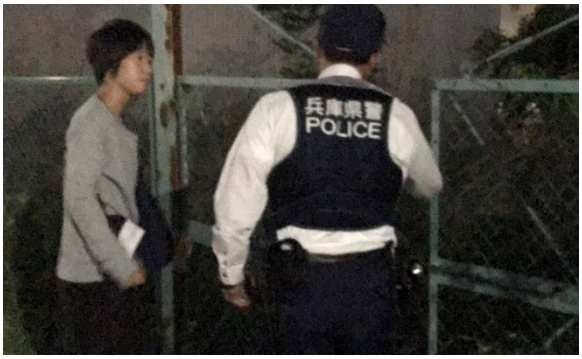


●実況見分・調書作成

「子猫の遺棄事件を事件化していいものか」という交番からの質問が、市警に行き、市警から県警に行き、また市警を通って交番に返ってくるという長旅に出ている待ち時間に、友人は一旦帰宅し、猫の世話をして私の PC を持って交番に戻ってきてくれた。今回の件で最も役にたったのが PC に保存していた右の資料だ。みやざき市民オンブズマンが情報開示請求をし、一般公開された、警察庁が全国の警察本部宛に出した、動物虐待事犯対応の指導要領等の資料だ。その中でも右の資料は特に分かりやすく書かれているフローだ。この資料は、現場の警察

官だけでなく、一般市民にとっても分かりやすい資料だなぁと思っていたので個別に保存していた。平成２８年５月に警察庁から各警察へ送られているが、保存期間が１年未満となっているため、すでに破棄されている警察署がほとんどなようだ。なんともったいない（交番のお巡りさんも２人とも見たことが無いと言っていた）。

その他、生経通報の全文（一部黒塗りあり）やその他の文書は、みやざき市民オンブズマンの HP にて閲覧可能である。　http://www.miyazaki-ombuds2.org/police.php



私の長い話の成果か、この資料を取ってきてくれた友人のおかげか、市警から折り返しの電話があったのか、ちょっと記憶があいまいだが、現場や証拠品の写真をお巡りさんが撮影することになった。交番から徒歩２分程度の場所に案内し詳細を説明した。
時刻は 19 時 20 分。交番に行ってから約１時間 20 分が経過していた。

そして、調書というものを取ってもらった。簡単に言うと「私は誰で、いつ、どこで、どういうことに遭遇して、こういう風に思っています。」という内容を細かく、具体的に聞き取って記録してもらう感じだった。所要時間は １ 時間弱だったと思う。やっと調書が完成し、この日は解放された。米袋は証拠品として警察が預かり、もう１つの証拠品である子猫たちは翌日入院先の動物病院にお巡りさんと行くことに。時刻は交番に行ってから約４時間が経過し、22 時になろうとしていた。

●子猫たち

翌日の朝 7 時前、動物病院から電話があった。昨日入院した子猫は 2 匹とも息を引き取ったそうだ。悔しくて、悲しくて、涙がでた。なぜ、鳴き声に初めて気づいた夜に遺棄の可能性を疑わなかったのか。間に合ったかもしれなかったのに。母猫から引き離される前に、ひとくちでも母乳を飲むことができていたのだろうか。母猫のもとから引き離され、暗い袋の中で、何十時間も力の限り母猫を呼び続けるのはどんな気持ちだったんだろうか。呼んでも呼んでも応えてもらえない絶望や恐怖感はどれほどのものか。この子達の一生はなんだったのだろうか。

人間は、他者の気持ちを想像したり、共感したりすることができる生き物だと思う。でも、時に想像力や共感感覚のスイッチを切ってしまうことがある。それは、ごく一部の凶悪な人間に限ったことではないと思う。想像力のスイッチを無意識に切ってしまえるから、肉や魚を食べれるし、食べ物を捨てることもできる。動物園で小さい檻の中で途方に暮れている動物を指さして可愛いと笑うこともできるし、釣りだって楽しめる。だからこういった悲惨な

事件は、理解できない非常な人が起こすわけじゃないんだと思う。「動物を遺棄するなんて理解できない！」と想像力のスイッチを切りたくなる。でも、それじゃダメだ。悲しみや後悔を紛らわすための怒りに支配されないように、考えなくちゃいけない。自分に今何ができるのか。落ち着け、落ち着け、と頭で繰り返す。

朝８時、動物病院へ。昨日調書を取ってくれたお巡りさんと合流。警察カメラでの子猫の写真撮影をし、死因について獣医師の見解を聞き取る。今回でいえば、「世話を受けることができなかったことによる衰弱死」。生きていた２匹は初めはミルクを飲んだが体の中に大量の蛆が侵入しており、手の施しようがなく、明け方に息を引き取ったということだった。今回の医療費は約１万５千円だった。追加で５千円を支払う。

●事件化へ

今回の子猫遺棄は警察が事件として受理し、捜査を進めてくれることになった。これだけ、人為的であることが明らかでも、犯人が見つかる可能性が低い事件は、事件として取り扱ってくれないことも多い。初日に４時間もかかったが、それでも告発状の作成もせずに、翌日には事件として捜査してくれることになったのは幸いだ。証拠品の米袋は鑑識に回され、警察が付近の聞き込み調査をしてくれた。

予防的取り組み

初日から警察には現場に「目撃情報求む」看板を設置してほしいと頼んでいた。その看板で、犯人の手がかりが見つかる可能性は低いかもしれない。でも、ここで遺棄事件があったということ、それを警察が事件として捜査しているという事実が掲示されることには、「予防」と「啓発」の効果があると考える。だが、これがとても骨の折れる戦いとなった。

警察「予算もかかることなので、警察でこれを作成するのはかなり難しいと思う。」
私「立て看板じゃなくても、A4 程度の紙に印刷したものでもいい。それでも難しいでしょうか」。
警察「土地の持ち主の希望があって、土地の管理者が作成したものに警察が連名する形なら可能性はあるかもしれない。」
私「土地の管理者に、事件があった旨と情報提供を呼びかける掲示をしないか警察から言ってもらえないでしょうか。」
警察「そこまでは捜査の範囲ではしない。」

こういうわけで、初日の交番では断られた。
①土地の所有者を見つける
②目撃情報求む看板を作成する主体を見つける

この２点が課題となった。
そこで、市の動物愛護担当部署に下記２点の相談をすることにした。
①目撃情報求む看板を市の名前を入れて作成したいということ。
②再発防止策として、遺棄事件があった旨と一緒に、ノラ猫の出産で困っている人はここに電話してくださいという内容を入れれば、「身近なところで事件が起きた。遺棄は犯罪です。」というインパクトのある事実と「でも困っている人はここに相談して」という解決的提案の２つが盛り込まれた内容の A4 チラシを作成し、回覧版で回すことによって、悲しい事件をきっかけとして予防的支援の足掛かりにすればいいのではないかと考えた。
　この市には、行政と連携してノラ猫 TNR を進めている団体さんがあるので、まずは団体さんに相談することにした。団体さんは協力を快諾し、必要であれば自分たちの団体名も入れていいと言ってくれた。そして団体さんから市役所の担当者へ聞いてもらった。
　結果、「遺棄事件は警察の管轄だから、市は関係ない。役所の名前は載せたくない。県の愛護センターに聞いてみたらどうか」
という残念な回答が返ってきた。
県愛護センターに言っても、同じような回答が返ってくる予感しかしない。

遺棄事件の「捜査」は警察が担当、ノラ猫問題の相談は市が担当、
動物保護は県愛護センターが担当、では「予防」はいったいどこが担うのか。

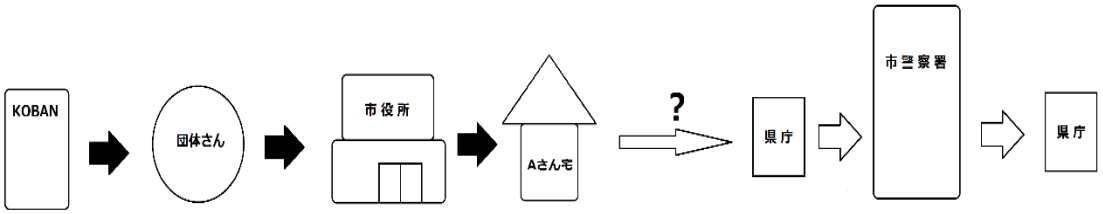
●土地の所有者探し
　警察がダメ、市もダメ、そしたら土地の所有者に働きかけるしかない。警察の地図によると管理者らしき会社名が書いてあったが、ネットで調べてもそんな会社は見当たらない。荒れ放題の空き地化しているので、平日に行ったところで誰かいる訳もない。
　手詰まり感の中で、借りている駐車場の大家さんから電話があった。「５月の駐車場代まだですよ。」すっかり忘れていた。すみませんと謝りながらも、チャンスかもしれないと思った。駐車場代を払いに行くついでに、大家さんに遺棄事件があったこと、土地の持ち主を探していることを伝えた。「あそこの空き地なら、〇〇通りの A さんやったと思うよ。昔はあそこで、〇〇をやってたんよ。あと、グリーンピース沢山採れたからどうぞ。」いい収穫だ！と思った（情報もお豆さんも）。
　さっそく、大家さんの情報を元に、空き地の持ち主を訪ねてみた。
ピンポーン「近所に住んでいる小池と申します～」
A さん「どうしました？」
私「これこれこういうことがあって、空き地の持ち主さんを探しています。」
A さん「あそこはね、今は県有地になってるよ。土木何とかって課だったかな。」
ぬーーーーん。
振り出しに戻ったわけではないが、また次の場所を探さなければいけない。

もう、ここまできたら、たらい回されるだけまわってみよう。

県庁はどこか調べてみると、車で高速を使って1時間。電車でも1時間片道790円。これはちょっと遠いし無職には高い。さっそくたらい回しの覚悟が揺らぐ。というか、県所有地なら警察が作って連絡してくれないだろうか？という一抹の期待がよぎったので、担当の方へ電話をかけてみた。

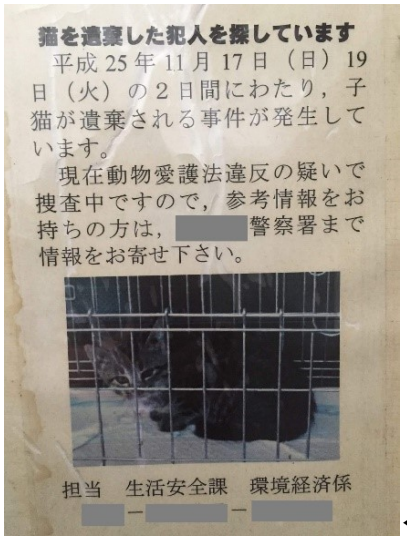
私「情報を求むの掲示物の件で、空き地の所有者が県だということが分かりました。県の所有地なら、警察で作成して掲示していただくか、警察から連絡をしてもらうことはできないでしょうか？」
警察「県の所有地といっても、警察と繋がりがあるわけではないので、こちらからそこにお願いしに行くということはできない。所有の所が掲示したいと警察に行ってくるか、そこの許可を取って警察に来ていただければ可能性はあると思う。」

はい、そうですか。正規ルートでたらい回されるとすれば、まずは、県庁に行って管理部署を特定し、掲示したい旨を伝え、「具体的な掲示物を見ないと許可の判断できないよ」と言われ、市警察に行き「掲示内容次第では許可するといわれたので掲示内容を確認してください」とお願いし、市警察のOKが出たら、また県庁に行き許可をもらって、晴れて遺棄現場に掲示する。というルートになるのだろうと想像する。けっこうな時間と交通費だ。無職ではあるが、猫活動は忙しく暇ではないという問題もある。ここは少し作戦を変更することにした。



県庁に行く前に、市警察に情報求看板の案を先に見てもらおう。土地の所有者がOKを出したら貼れる状態にしたうえで、県庁に行き、県庁には1回行くだけでいいことにしよう。
現在の捜査を担当している地域第2課が入っている市警察署に行ってみることにした。
持ち物は、①別の場所で掲示されていたポスターの写真、②それを参考に作成した今回のポスター案、③できれば一緒にはってもらいたい警察庁と環境省が一緒に作成している動物遺棄虐待は犯罪ですポスター。
①の別の場所で掲示されたポスターは、知り合いのボランティアさんが参考にと送ってくださったものだ。これがものすごく役にたった。前例って強い。そのポスターを掲示してもらうまでとても長い時間と労力を要したそうだ。ボランティアさんに心から感謝である。

①



猫を遺棄した犯人を探しています

平成25年11月17日（日）19日（火）の2日間にわたり，子猫が遺棄される事件が発生しています。

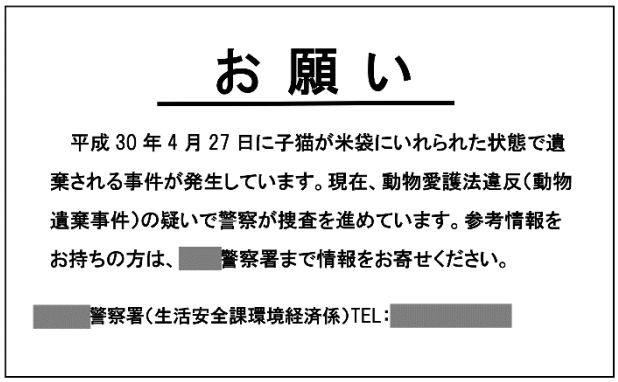
現在動物愛護法違反の疑いで捜査中ですので，参考情報をお持ちの方は，[redacted]警察署まで情報をお寄せ下さい。

担当　生活安全課　環境経済係

[redacted]－[redacted]－[redacted]

←参考資料

②



お 願 い

平成30年4月27日に子猫が米袋にいれられた状態で遺棄される事件が発生しています。現在、動物愛護法違反（動物遺棄事件）の疑いで警察が捜査を進めています。参考情報をお持ちの方は、[redacted]警察署まで情報をお寄せください。

[redacted]警察署（生活安全課環境経済係）TEL：[redacted]

↑提案ポスター

●市警察署へ

資料を持ち、警察署へ。

私「県庁に許可をもらいに行く際に、具体的に掲示したいものが無いと許可の出しようがないと言われてしまいそうなので、先にポスターの内容を確認していただけないでしょうか。もちろん、内容の OK が警察から出たとしても、土地の持ち主の許可降りなければ掲示しませんし、許可が出た場合はお伝えします。」

警察「情報求むポスターの内容を市警察で許可判断をしていいのか分からないので、県警に問合せます。後日また、連絡します。」

私「・・・・。」

つまり、私が作成したポスターと資料たちは、市警察の中で、初動捜査をしている地域第2課から、生活安全課に行き、生活安全課から県警に行き、県警から市警に戻って、私に戻ってくるという長旅に出たそうだ。市警では判断できないと言われたら、今度は県警に行かなくてはいけないのか。遠そうだ…。市で判断できますように。

●3日後

警察「○○市生活安全課の B です。地域第2課から引き継ぎました。先日、相談いただいた遺棄現場に掲示するポスターの件ですが、内容を県警に確認したところ、「米袋」という具体的な記述は捜査の妨げになる可能性があるので、修正させてもらいたいです。それで、警察の名前と連絡先だけが入ったポスターなので、警察で作成させていただいた方がいいんじゃないかと思うんですがこちらで作成していいでしょうか？土地も登記をとってみたら管理者が分かると思うので、こちらで連絡して掲示までさせていただこうかなと思ってい

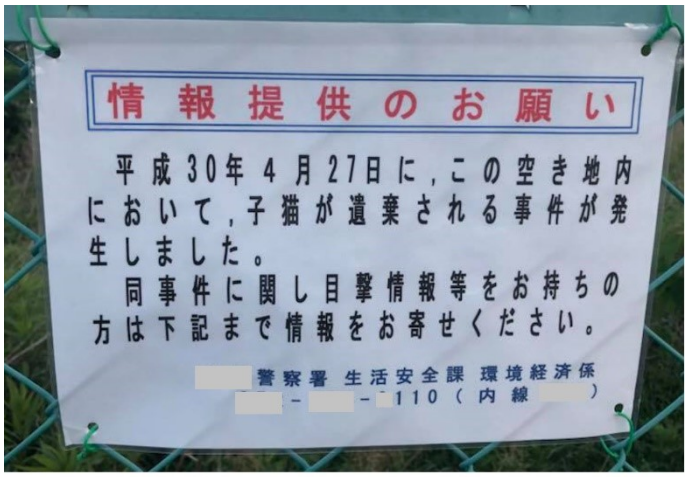
ます。」

私「……。修正も作成も掲示もお任せします！ありがとうございます！！」

一瞬なにを言われているのか理解できなかった。再三警察で作成してほしいという依頼を断り続けてきた警察が、警察で作成した方がいいと思うんですよねと電話口で言っている。もしかしたら、生活安全課の人は初耳だったのかもしれない。情報求むポスターの一件は、たらい回されるだけ回ってみた結果、一周回って警察の上部にあがったことによって、警察が作成してくれることになった。やれやれ。

●4日後

現場に掲示しました！という連絡がきた。掲示されていたものが右の写真だ。事件発生から20日が経過していた。



とても骨の折れる長いやり取りだったが、以降この市内で遺棄事件があったときは、スムーズにポスター設置まで警察が動いてくれるようになったと期待したい。

情報求むポスターが掲示されたことで、通りすがりにポスターを見た人たちが「捨て猫は犯罪なんだ」と知ることにつながる。動物遺棄は残念ながら、特殊な人だけが実行するものとは言いにくい。そのため、地域の人たちに身近な問題として認識してもらうことで、再発防止につながるのではないかと期待する。

次の一手。具体的支援へ

子猫の遺棄があるということは、猫の出産で困っている人がいるはずだ。遺棄現場の近くを歩いてみていると、猫が1匹道に座っていた。あ、猫だと思って近づくと、その奥の庭にまた1匹、横道に1匹、と沢山いる。思い切ってお屋敷にピンポンしてみた。すると、中からおじいちゃんが出てきた。あれこれ話を聞くと、この猫たちは近所の人が飼っている猫で、庭を荒らされる、臭いといった問題で、お屋敷のおじさん含め近所の人たちは迷惑しきっているのだという。以前には、迷惑している近所の人たちで言いに行ったことがあるが、全然話ができない人だという。おじいちゃんに情報提供のお礼を言い、「状況が少しでも良くなるように飼い主さんに話に行ってみます。」と伝えた。

続いて、おじいちゃんに教えてもらったお家に行ってみた。確かに家の前に猫が目視で6匹。2階窓は開けっぱなしで自由に猫が出入りできるようになっている。声をかけて見ると中からおばあちゃんが出てきた。おばあちゃんは、猫が好きで捨て猫や怪我している猫がいるとほっておくことができず保護して飼いはじめたそうだ。昔は、不妊手術をしたが、金銭

面と、猫の頭数の増加で追いつかなくなり、現在はできていない。近所の人は、猫に石を投げたり棒で叩いたりする人もいるという。

猫に不妊手術をほどこして、今いる猫たちの命を全うさせながら、緩やかに猫の頭数を減らしていくことで、猫の生活環境も地域の環境も改善されるということは、お屋敷のおじいちゃんも、猫のおばあちゃんも納得してくれてた。月に１回手術日を決め、助成金を利用しながら１０匹ほどいる猫たちを月数頭ずつ手術日をしていくことになった。病院の送迎は私が担当する。

今回の事件で亡くなった子猫たちの命は戻ってこない。もし、いつか自分が死んだ後の世界で子猫たちに会えるなら、辛い思いをさせてしまったことを謝ってから、あの地域の猫事情があなた達のおかげでこんなに変わったんですと伝えられるようにしておきたい。

猫から目線で、平穏な町の歪みが見えてくる。

ノラ猫に餌をあげている人の近所に住んでいる人からなんとかしてほしいと相談を受けることがよくある。私からは「猫が増えてしまうことは、本人も困っているかもしれないし、現時点で困っていなかったとしても、困っている人が地域にいるということを伝えれば不妊手術に動いてくれるかもしれないので、いちど声をかけてみてもらえませんか？」とお願いすると、「その人との人間関係があるから、直接言うのはちょっと…。私から聞いたことは内緒で、小池さん訪問してみてもらえませんか？」と言われることがよくある。統計は取ったことが無いか、３件中２件はまずそう返ってくる気がする。怒鳴り込みに行ってくださいと依頼しているわけではないのに…。散々近所の人たちと陰口を言い合ってイライラを蓄積しながら、本人には何も不満はないですよと繕う。それは、すでに人間関係として終わっている気がするのは私だけだろうか。そして、時間の経過とともに状況は悪化していき、イライラは限界となり、保健所に匿名で通報し、自分はあくまで被害者のポジションをキープする。そういう人と地域をいっぱい見てきた。

別に地域の人同士、べったり仲良しになる必要はないと思う。でも、何か状況がおかしいな、と思った時に文句よりさきに、「大丈夫ですか、何か手伝いましょうか？」という提案がもっと気軽にできたらいいのになぁと思う。

おわり



小池英梨子
NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク
「人もねこも一緒に支援プロジェクト」　プロジェクト代表
「ねこから目線。」としてフリーでも活動中。
意見・感想・お問い合わせ：e.kosame12@gmail.com

先人の知恵から
20

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

　このシリーズも２０回を数えた。年４回書いているので５年という年月が過ぎたことになる。まだ、「き」の所ということを考えるといつまで続けられるかということになる。まあ、好き勝手に書いているので、ボチボチでよいと思っている。

　今回は、「き」で始まる言葉から次の８つを挙げてみた。

- 居は気を移す
- 漁夫の利
- 器量より気前
- 麒麟児（きりんじ）
- 義を見てせざるは勇無きなり
- 木を見て森を見ず
- 琴瑟相和（きんしつあいわ）す
- 琴瑟調（きんしつととの）わず

＜居は気を移す＞

*　地位や立場、環境などは、その人の性格や考え方を変えるということ。居場所は人の気持ちを変化させるという意から。*

出典　孟子

　度々社宅などでみられることだが、職場での父親の上下関係が、奥さんや子どもの関係性にまで影響し、いじめの要因になったりする。父親は父親、母親は母親、子どもは子どもと分けて考えることが出来ていない。親の言動を見て子どもは行動する。親が他の親を馬鹿にすれば、その子も同じようにその家の子を馬鹿にしたりする。見た目やお金のあるなしで人間の価値が決まるわけではないのに、それを教えられないとしたら親の責任である。

或いは、とても衛生的ではない家で過した子どもが、施設で暮らしたあと、家に戻ると、不衛生な家の方が落ち着くと言ったりするが、これは、小さいころから慣れた環境が一番という見本だろう。

昔担当したケースで、人の物は自分の物という家があって、子どもたちが何か欲しがると「とって来い」という教育をしていた。もちろん違法行為であるが、子どもたちは言われたとおりに自転車や子犬などをとってきた。教育は、良くも悪くも親が第一の見本である。子どもたちを望ましい子に育てたいのであれば、先ずは親自身が自分を振り返るべきであろう。

＜漁夫の利＞

当事者同士が争っているすきに付け込んで、第三者が何の苦労もなく利益を横取りすることのたとえ。

出典　戦国策（せんごくさく）

この諺は、三人兄弟などで時々使う。上の二人がお菓子を取り合って喧嘩をしているすきに、一番下の子が、さっさとお菓子を食べてしまったなどと言うことは度々起こる。

そんな時に親は誰を叱るかというと、喧嘩をしていた方を叱ることが多い。末っ子は小さいからと許されてしまう。最近では親が横取りしてしまうことまである。

喧嘩をしているのは悪いが、横から何の苦労もなくとっていくのはなお良くない。そういう教育も必要ではないか。小さいからとなんでも許されるのは、大きい子にとっては不満にしかならないだろう。

英語では・・・
Two dogs fight for a bone, and the third runs away with it. （二匹の犬が骨をめぐって争っていると、第三の犬がその骨をくわえて逃げる。）

＜器量より気前＞

顔立ちの美しさよりも、気立ての良さの方が大事だということ。

最近の子どもたちは、顔立ちもスタイルも良くなっている。おそらく椅子生活になったことと食べ物の影響が大きいのだろう。小学校では、ブランド物を着てくる子もいて、子どもたちの間で、どこのブランドが良いなどという話も出ている。子どもたち向けのファッション雑誌もあり、子どものモデルがもてはやされている。

フェイスブックやツイッターで自分の写真をあげている子も多い。加工もできるので可愛く写っている。

しかし、性格ブスという言葉がかつてあったが、可愛いから性格も良いというものではない。子どもたちが自分は可愛くないから駄目だと言っているのを聞くたびに、「顔じゃない！性格だ！」と言っているのだが、そんな時にこの諺を伝えている。「器量」という言葉は古いかもしれないが、諺は諺、古い言葉に味わいがあると思っている。

＜麒麟児＞

ずばぬけた才能を持つ、将来有望な青少年のたとえ。麒麟は聖人が世に出る時に現れるという中国古代の想像上の動物で、雄を「麒」、雌を「麟」といい、身体は鹿、尾は牛、ひづめは馬に似ている。「麒麟児」はその子という意。

麒麟児と聞くとお相撲さんを思い浮かべる人も多いのではないか。麒麟児にこういう意味があったと知っている人はどのくらいいるだろう？「ずば抜けた才能を持つ、将来有望な青少年」にであうことは少ないだろうが、無いわけではない。数学オリンピックや物理オリンピック、クイズ王などに出ている若者たちは、すごい才能を持っている。日本では天才児を飛び級させたりということが殆どないが、海外では優秀な子はさっさと大学に行ってしまう。

その子その子にあった教育は必要である。優秀な子は優秀なことして優遇されても良いのではないだろうか？環境は、その子の発達に大きく影響する。それは前述の通り。そうであるなら、優秀な子を伸ばしてあげられる環境を作るべきであろう。

＜義を見てせざるは勇無きなり＞

人として当然行うべき正しいことと知りながら、それを実行しないのは、その人に本当の勇気がないからだということ。孔子のことば。

出典　論語

子どもたちに、どう生きるべきか、何が正しいかについてを示すのは大人の役目である。しかし、どれだけの大人が、子どもたちに見本となるような道を示せるだろうか？

そもそも、大人たちが、正しいことを通そうとしない。個人主義に走り、自分さえよければ他の人はどうでも良いと思う人たちと、ボランティアなど、誰かの役に立つことをして自己存在感や肯定感をあげている人たちと、世の中が二分化しているようで、後世のために、子どもたちのために、世の中をよくしようとか、環境を良くしようとか、年金問題に取り組もうとかと思っている一般人は少ない。どこでも文句は言い合っているが、それを実際に行動化する人はほとんどいないのである。

それでいて、子どもたちに押し付けようとしているとすれば、それは余りにおかしな話であろう。

思っているだけで、何も行動しなければ、変わらない。どんな小さなことでも、大人がそれぞれ少しでも行動化するなら、世の中は大きく変わっていくだろう。そんな行動を見せることが、子どもたちへの良き見本としての大人のあるべき姿ではないか。

＜木を見て森をみず＞

物事の一部分や細部に囚われて、全体を見失うことのたとえ。一本一本の木に注意を奪われて、森全体を見ようとしないことから。

教育においても、やらねばならないこと

が多すぎる関係からか、物事の多くを教えず、見方もある程度限られた教育が多い。しかし、世の中の現象は、必ずしも 1＋1＝2ではない。人間も、小さく分解していけば、分子の塊である。分子の一つだけをとっても、それが人間の一部だとは思われないだろう。組み合わさって、多くが見えて初めて人間と分かるのである。小さい一部を観ることも大切ではあるが、一部にばかり囚われていると、物事の生業、情勢等、その一部と絡まっていく全体を見失う。

英語では・・・
You cannot see the wood for trees.（木々だけを見ているために、森を見ることができない）You cannot see the city for the houses.（家屋ばかり目がいっているために町が見えない）

＜琴瑟相和す＞

夫婦の仲がきわめてむつまじいことのたとえ。また、兄弟や友人の仲の良いことにもいう。琴と瑟は合奏すると音がよく調和することから。
琴は、中国の代表的な弦楽器。箏の琴に似ているが琴柱がない。七弦琴。瑟は、中国に古くからある二十五弦など大型の弦楽器。

出典　詩経（しきょう）

＜琴瑟調わず＞

夫婦や兄弟の仲が悪いことのたとえ。琴と瑟の調子が狂って、音が調和しないという意から。

出典　漢書（かんじょ）

この二つは反対の諺であり、諺にはこのように反対のことを言うものが多々あるので、一緒に取り上げてみた。

「相和す」方は、仲の良いことである。夫婦の仲が良いことは、子どもにとってとても大事なことである。しかし、夫婦は所詮他人同士で、育った環境も異なるのだから、中々仲良く居続けるのは大変で、双方に相当の努力が必要となる。

同様に兄弟や友人との仲も、仲睦まじい状況であることは、互いの努力によるところが大きい。どちらか一方だけが頑張ってみても上手くいかない。

ちょっとしたことで、調和が乱れ、関係性が崩れてしまうことはある。特に夫婦の間では、距離が近いがゆえに、不調和が起こりやすい。そしてそれは、子どもに少なからず影響を与える。子どもの前だけでも何とか仲良くできれば違うのだろうが、狭い家の中ではそうも行かない。

「琴瑟調わず」にならないように気をつけたいものである。

出典説明

孟子・・・七編

中国、戦国時代中期の思想書。孟子の言行を門人が編纂したもので、『大学』『論語』『中庸』とともに四書の一つ。性善説に基づく道徳論を説き、覇道（武力による政治）を否定して王道（仁徳による政治）を提唱している。

戦国策・・・三十三編

中国の雑史。前漢の劉向の編。戦国時代に諸国を遊説した縦横家が諸侯に説いた戦略を、国別に集めて三十三編にまとめた所。いくつかの書にのっているものを校訂・編集したもので、当時の政治・外交・軍事などを知るための貴重な資料。現在伝わるものは、北宋の曾鞏が欠けた部分を補って編纂したものに姚宏が注を加えた三十三巻本と鮑彪の十巻本の二系統がある。

論語・・・二十編

儒教の経典。『大学』『中庸』『孟子』と共に四書の一つ。孔子の言行や門人たちとの問答を記録した書で、孔子の死後に門人たちが編集したものと言われる。孔子は諸国を回って仁の徳による政治を説いたが、本書は孔子の人物や思想を知るうえで極めて重要な資料である。

詩経・・・

中国最古の詩集。五経の一つ。孔子が約三千の古詩の中から選んで成立したと言われるが未詳。紀元前十世紀から前六世紀ごろまでの詩三百十一編（内六編は題名のみ）を収録。風（国風ともいう。民謡）・雅（宮廷の祝宴歌）・頌（祖先を祭る歌）の三部構成。

漢書・・・百二十巻

中国の正史の一つ。『史記』に次いで二番目に成立した正史で、高祖から平帝までの前漢２３１年間の史実を記した歴史書。後漢の班固が父班彪の着手した修史を引き継いで完成し、班固の死後、妹の班昭が表十巻と「天文志」を補った。『史記』が上古から漢代までの通史であるのに対し、『漢書』は前漢一代だけの断代史であり、以降の正史の典型となった。

私の出会った人たち

(5)

関谷啓子

（前回の続き　2018春から抜粋）

3・07
訪問時は、お風呂上がりでゆったりと目を閉じておられました。おやつと夕食はどちらも完食。
前回の訪問時にカットをお願いしていたのですが未だでした。
次週には息子さんが面会に来られるとの事。それまでにはスッキリとしたご様子になっていて欲しいのです・・・と
施設に再度お願いして戻りました。

3・18
お元気でした。
おやつもぱくぱくと完食です。国語の教科書が手に入りましたので持参。
三好達治の詩を読んだら反応がありました。
昔、高校の国語の先生だったとの話を思い出しました。
猫の話にも声を立てて笑ってくださいました。ゆっくりですが、時々昔の確かな記憶と今が結びつく時があるような気がします。不思議な感覚を共有しているような・・・。
M さんに出逢わなければ味わうことの無い感覚です。

4・04
今日も変わりなく過ごしておられました。
おやつも完食ですが、両手で顔を覆われて、食べて頂くのに一苦労でした。
口もほんの僅かしか開かれませんので、タイミングが合わないと進みません。
日によって顔を覆われるという動作は、何かの意思表示の形かと考えましたが解らずじまい。
もしかして、部屋が眩しいと感じておられるのかも・・・。

4・08
今日のおやつはカステラです。美味しそうにゴックンゼリーと交互に召し上がりました。
見ていて気持よくなるような食べっぷり！
こんなに調子のよい日もあるのですよ。思わず見とれてしまいました。

薄ピンクのバラを持っていきましたが少々寂しすぎました。次回はパアーと派手な色にしようと思って帰りました。

4・17
部屋に入った瞬間、広くなったような感じを受けました。よくよく観察したら床を張り替えたのとベッドサイドに置いてあった整理ダンスの向きを変えてあったのでした。
これだけの事でこんなに広く感じるとは！と驚くと同時に、我が家のゴタゴタしたリビングを思い出しました。
この週末にはなんとかしなくてはなりません。
Mさんはお元気です。今日は春らしいおまんじゅうを二種類持って行きました。ご自分では無理ですが、こちらで小さく切って口元まで運ぶと食べる事ができます。こし餡は特にお気に召したようでした。
今日は洗濯を二回しました。ちょっとお身体の調子が悪かったのかもしれません。入浴もかなり時間がかかりました。
心配して待ちましたが、スタッフからの報告は特にありませんでした。

4・28
今日も目は閉じたままでした。いつもは「おやつですよ」との声かけで、目はともかく、口を開かれることが多いのですが
今日は何故か？なかなか口を開かれません。
車いすに座っておられたので、ご自身の手に握らせてみました。こしあんを挟んだ蒸菓子でしたがゆっくりと自分で口に運んで食べる事ができました。持参するおやつは出来るだけご自身で持って食べられるような物を選ぶように
心がけています。今までのベスト3はバウムクーヘン、蒸菓子、チョコ味のクロワッサンです。
部屋に飾られた赤い実を見ていると元気が出ます。

5・15
GWに行けなかったので、久しぶりの訪問でした。
天気が良くて、今日はちょうど葵祭でしたが、行列に参加のアルバイトの学生さん、大変な暑さで可愛そうなほどでした。
行けない間に4月30日の誕生日を迎えられMさん、めでたく95歳になりました。
ベッドの上に、その日の写真が飾ってありましたが、まるで童女みたいな笑顔です。
「Mさん、95歳になったんですね。おめでとう」って言ったら「あら　そうなの。ふーん。」との返事。
思わず笑ってしまいました。時々、こんな風に通じているのかどうか判らないけれどユーモアに溢れた返事をされて愉しいです。穏やかに歳を重ねていかれるのに伴走できるのは嬉しい事です。
持参した山法師の花が綺麗でした。秋になって赤い実がなったら、おやつに持って来ようと思っています。
食べられるって知らないひとがいるのはもったいない事ですから！

うたとかたりの対人援助学

第６回　「浦島太郎」はなぜめでたいか

鵜野　祐介

動物報恩の昔話「浦島太郎」

卒業論文でトルストイ民話の教育学的意味について取り組んで以来、「昔話とは何だろうか」と折に触れて問いかけてきた。最近はこう考えている。「昔話は『かかわりの物語』である。親と子の、子どもと大人の、男と女の、里人と山人や海人との、金持ちと貧乏人との、正直者と欲張りとの、人間と動物や異類との、動物同士の…」（拙著『昔話の人間学』2015 年、231 頁）。

さて、「対人援助（human service）」という立場から「かかわりの物語」としての昔話について考えてみる時、まず思い浮かぶのが、主人公が施した善行に対して、相手が恩返しをするという「報恩」のモチーフである。相手として動物が登場することが多いため、こうした話は「動物報恩譚」と呼ばれる。代表的なものとして「鶴の恩返し（鶴女房）」「狐女房」などがあるが、今回は「浦島太郎」を取り上げてみたい。

教科書の「浦島太郎」

子どもたちにいじめられていた亀を助けてやった浦島太郎は、その恩返しとして亀の背中に乗り、海の中にある竜宮に連れて行ってもらう。竜宮の乙姫はご馳走やさまざまな遊びをして見せて楽しませてくれるが、やがてうちに帰りたくなった太郎がそう告げると、乙姫は土産に玉手箱を手渡す。その際「どんなことがあっても蓋を開けてはなりません」と言うが、故郷に帰ってみると両親は亡くなっており、自宅も村の様子もすっかり変わっていたため、落胆した太郎が玉手箱を開けると、箱の中から白い煙が出て白髪のお爺さんになってしまう。

この話は、1910（明治 43）年発行の国定教科書『尋常小学国語読本』巻三（二年生前期用）に「ウラシマノハナシ」として登場して以来、戦後になっても教科書に掲載されてきた。

また、1911（明治 44）年『尋常小学唱歌（二）』に掲載された唱歌（作詞は乙骨三郎とも言われる）は、学校の教室だけでなく、お手玉唄やまりつき唄として家庭や路地での遊びの中でも歌われてきた。おそらく 50 代以上の多くの方が口ずさめるだろう。「1. 昔々浦島は／助けた亀に連れられて／竜宮城へ来て見れば／絵にもかけない美しさ（後略）」

「浦島太郎」の話は口承の昔話や伝説として語られたり、絵本になって読まれたりもしたが、そのあらすじは、伝説として残る一部地域のものを除けば、国語や唱歌の教科書版とほとんど同じであり、現在知られている話は、これら教科書版によって親しまれてきたと言える。

巌谷小波の「浦島太郎」

教科書版の元となったとされるのが、1896（明治 29）年に巌谷小波が『日本昔噺』シリーズ

の一つとして発表した「浦島太郎」である。主人公の名は「浦島太郎」、丹後国（現在の京都府）水の江の漁師で両親と暮らしている。教科書版との違いは、こちらは丹後地方の伝説とされていること、竜宮（城）が海の中ではなく海上の島にあること、そして最後に「玉手箱」の蓋を開けて白煙が立ち昇り、白髪のお爺さんになった後、唱歌のように「あけて悔しき」とはせず、「めでたしめでたし」と幕引きされていることである。一体何が「めでたし」なのだろうか。亀を助けたことに対する報恩譚の結末としてはどうにも収まりが悪い。その理由を探るべく、浦島説話の歴史を繙いてみたい。

『日本書紀』の浦島説話

現存する最古の浦島説話の古典資料は、『日本書紀』（720）で、雄略天皇二十二年の条に以下のように記述されている。「秋七月に、丹波国の余社郡の管川の人、瑞江浦嶋子、舟に乗りて釣す。遂に大亀を得たり。便に女に化為る。是に、浦嶋子、感りて婦にす。相遂ひて海に入る。蓬莱山に到りて、仙衆を歴り観る。語は、別巻に在り」。

冒頭文が示すように、これは「昔々あるところに」という「昔話」ではなく、丹波国（715 年に分割され「丹後国」となる）余社郡管川に実在したとされる人物・瑞江浦嶋子の「伝説」である。浦嶋子が大亀の姿になっていた女性と結婚して、竜宮城ではなく、蓬莱山（常世の国）に行き、「仙衆」にめぐり合ったと述べられるが、その後については触れていない。ここには、主人公が亀を助け、その恩返しがなされるという「報恩」のモチーフはない。

女性は亀に変身することのできる女神とされ、女神信仰の影響が見られる。また「仙衆」は神仙思想における不老不死の仙人たちを指しており、亀が女性に変身する例が中国の魏晋南北朝の志怪小説『捜神記』や『志怪』等に見られることから、この話には中国の文化、特に神仙思想の影響が見て取れる。

『丹後国風土記』（逸文）の浦島説話

次に、現存する文献資料としては鎌倉中期のものしか残っていないために「逸文」と付される『丹後国風土記』の中に収められている、715 年頃に成立したと推測される浦島説話を見ていこう。こちらも丹後国与謝郡日置里筒川村の伝説で、主人公の「嶼子」は、五色の亀に変身する女性「亀姫」と結婚し、「蓬山」という島で 3 年を過ごす。これは人間界での 300 年に相当していたため、帰還した後、故郷の変りように悲嘆した嶼子は、「決して開けるな」と言われていた玉匣を開けると、亀姫と思われる「芳蘭しき躰」が風雲に乗って蒼天に昇っていく。嶼子は涙ながらにそれを見送る。ただし、白髪の老人になったり死んでしまったりはしない。本話も動物報恩譚ではなく、女神と人間の男との結婚すなわち異類婚姻譚である。

『万葉集』の浦島説話

783 年頃までに大伴家持等により編纂されたとされる現存最古の歌集『万葉集』に、上述した2つの「丹後系」とは異なる浦島説話が載っている。舞台は「住吉」で、摂津（現在の大阪府）の住吉大社付近と考えられる。主人公は「浦島子」で、「海若の神の女」と結ばれて、不老不死の常世の国である「海若の宮」へ案内される。亀は出てこない。ここで3年を過ごした後、帰郷した世界では垣も家も里も見当たらない（具体的な年数は明示されず）。悲嘆した浦島子が「開けるな」と言われていた土産の「玉篋」の蓋を開けると、白雲が常世の国の方に棚引い

て消え、彼の肌は皺だらけになり、髪も真っ白になって死んでしまう。玉篋の中味が彼自身の「年魂（としだま）」であったことを暗示させる。

以上、8 世紀に成立した 3 つの浦島説話の結末は三者三様だが、共通するのは、主人公の男が水界の女神もしくは神霊性を備えた女性との結婚という「異類婚姻」のモチーフを持っている点である。そしてその背景には女神信仰や神仙思想、さらに人間以外の動植物や目に見えない存在にも魂があり心を通わせることができるとする「アニミズム」的世界観が窺える。

「御伽草子」の『浦島太郎』

話の趣きが大きく変化するのは室町時代、「御伽草子」の版である。「御伽草子」とは、広義には室町時代に成立し庶民の間に広まった短編物語を指すが、狭義には江戸時代になってこれらが木版印刷されたものを指し、特に大坂の渋川清右衛門が享保年間（1716-1736）以前に刊行した 23 編が「渋川版御伽草子」と呼ばれる。『浦島太郎』もその中の一つで、原本は室町時代に成立したと考えられている。

主人公は、父母を養う24～5 歳の貧しい漁師「浦島太郎」で、釣り上げた亀を「長寿のめでたい動物だから」と海に放してやると、亀は女に変身して小舟で迎えに来る。ここではじめて「動物報恩」のモチーフが出てくる。ちなみに亀を海に放して生かしてやるという「放生」の行為は仏教思想の影響とされる。二人は舟で 10 日ほど航海して、海上の島である「竜宮」に到着する。

「竜」は神仙思想に類縁性を持つ陰陽五行思想における「四神」の一つ「青竜」として登場するが、仏教においても天人や夜叉、阿修羅などとともに、天竜八部衆の一つとして位置づけられており、インド原住民の間で行われていた蛇神崇拝が、仏教の中に採り入れられたものと考えられている。竜宮には、一度に一年中の四季の美しい眺めを楽しむことができる「四方四季の庭」が存在し、それを見たことが太郎に望郷の念を呼び起こさせるが、この庭もまた仏教的淵源があると指摘されている。

明治期教科書や口承の昔話に見られる、子どもにいじめられている亀を買い取って助けてやるという形ではないが、動物の愛護を推奨している点では同じである。また主人公を貧しい家の親孝行の働き者として設定し、竜宮を去ることを決意した理由も両親のことが心配だからとしている点も合わせて、儒教道徳的な色合いも感じられる。

竜宮での 3 年が人間界での 700 年に相当しており、絶望した太郎は土産の「玉手箱」を開けると、前述の『万葉集』版と同様に、中身は太郎の「年魂」で 700 歳の老人となる。ところがこれで終わらず、太郎は鶴になって空へと飛んでいく。すると竜宮の亀も神として現われ、「夫婦の浦嶋明神」となって「めでたしめでたし」と結ばれるのである。これなら「めでたし」にも納得がいく。主人公は神様になったのだから。

前述した 8 世紀成立の3つの説話が、女神との婚姻と離別を主題とする異類婚姻譚であったのに対し、室町時代に成立した「御伽草子」版では、女神との婚姻が永遠に成就されるという形の「異類婚姻」となり、さらに「動物報恩」のモチーフが加わっている。

ちなみに、鶴と亀がめでたい動物とされるのは神仙思想の影響であるが、この物語の結末が浦嶋明神の成立であるとすれば、これは寺社の成立を語って説経を行う「本地物」と呼ばれる物語と考えられ、「御伽草子」版には、土着の民俗信仰を取り入れながら広まっていった室町期の庶民的な仏教文化も投影している。

異類婚姻から動物報恩へ

そして巌谷小波の「浦島太郎」では、前述したように、浜辺で子どもたちがいじめていた亀を、金で買い取って助けると、翌日、実は竜宮の乙姫に仕える身であった亀を助けたお礼として、乙姫が太郎を竜宮に招く。ここには女神（異類）との婚姻というモチーフは見られず、子ども読者に動物愛護の心を説く「報恩」のモチーフが基調となる。また、亀は「御伽草子」版では乙姫の化身であったが、ここではいわば「乙姫のお抱え運転手」のような存在であり、神仙思想における霊獣としての姿は見られない。

何よりも大きな「御伽草子」版との違いは、最初に述べたように、「玉手箱」の蓋を開けて白煙が立ち昇った後、鶴に変身することも、亀が出現することも、明神として土地の守護神となって祀られることもないまま、白髪のお爺さんになったことを「めでたしめでたし」として幕引きされている点である。

この話の主題が「異類婚姻」であるならば、異類との結婚が主人公に様々な困難をもたらすも、これを克服して幸福を獲得することが「めでたしめでたし」にふさわしい結末だろうし、主題が「動物報恩」であるならば、助けてやった動物の恩返しによって主人公が幸福を獲得することがその結末となるはずだ。小波版はそのどちらでもない。何故か？

本来、浦島説話は神仙思想・女神信仰・アニミズム的世界観などを背景とする、女神との婚姻と離別を主題とする「異類婚姻」の物語であった。ところが室町期の「御伽草子」版では、仏教的世界観や道徳観に基づく「動物報恩」の要素が加わり、さらに江戸時代以降、娯楽的文芸として親しまれる一方で宗教的な要素が薄れていった（今回は触れられなかったが、江戸時代にはいくつもの異なる版が刊行されている）。

明治時代に入り、子ども向けのおとぎ話として再話するにあたって、小波は異類婚姻のモチーフを削除し、動物報恩のみを残した。とはいえ、動物報恩はこの話の前半部だけであり、話の筋が持たないため、「箱の中を見てはいけない」というタブーとその侵犯のモチーフは残したが、子ども向けである以上「めでたし」で結びたい。そこで小波は、「めでたい」中身は問わぬまま、半ば強引にこの言葉を添えて締めくくった。以上のように類推される（＊三浦佑之『浦島太郎の文学史』1989、三舟隆之『浦島太郎の日本史』2009 他を参照）。

不条理の受容と克服のための物語

一方、浦島説話を水難者の魂が水界に安住の地を見出した物語と読み解くこともできる。古来より、日本人は水の災害や事故に不条理にも幾度となく見舞われてきた。そして、犠牲になった人びとの魂が「異界」としての水界で安らかな日々を送っていてほしいとする願望とそれに基づく異界観が、「常若（とこわか）の国」「補陀落（ふだらく）浄土」「ニライカナイ」などと、時代や地域によって名前を変えながら受け継がれてきた。

東日本大震災の後、「行方不明になった家族の死亡届を出せないでいたら何年か経って夢に現れた」、「イタコに死者の霊を降ろす口寄せをしてもらったら『おれは今、海の底にいる。おだやかな気持ちでいるから、もう探さなくていいよ』と言うのを聞いて、ようやく気持ちの区切りがついた」といった話がいくつも報告されている。こうした事実は、「魂の安住の地としての水界」イメージが今日もなお、日本人の精神世界において確かなリアリティを持ち続けていることの証左であろう。

浦島説話は今も生きている。

あぁ、結婚！

―婚活日記―

第6回

黒田長宏

＜2月27日＞

ネットの全国的な婚活の方で初めてお会いした女性との3回目面会で、相手の勧めるサプリの説明会に行ってきた。昼食先で合流し、説明を聴いた後で購入した。それが相手の条件ということで、かなり個別的な変わった話だが、応じることで婚活は続く。何しろ1000人に応募して、会う気になってくれた一人である。こちらとしては崖っぷちどころか、既に落ちてしまっているのではないかという状況である。感謝しなければならない状況である。

＜3月5日＞

ネット婚活のお相手だが、サプリを売りたいがためなのかという疑惑もないとも言えない。その上、明日が4回目の予定だが、集合場所と時間がまだ連絡がない。夕方にメールを入れておいたのだが、どうも信用出来ない面がある。しかし、いなくなってしまう方がさみしいし、気を揉む人だが、東京スカパラダイスオーケストラが峯田和伸と組んだ歌がテレビから流れて来て、面倒くさいのが愛なんだと言っていた。短気は損気どころか、喪失感は大きい。

＜3月6日＞

夜にラインが入った。これも少々疑惑を感じてしまうのだが、婚活相手の母方の親戚が亡くなり、その影響でデート延期にしてとの事。本当かよと思ってしまったが、すぐ後から3月のスケジュールを送ってきたので、会ってくれるつもりはあるのだと思い、こちらの都合を返した。

昨日今日の連休に入る前は出っ放しになる連休かと思っていたが、逆に2日間こもり切りの連休となった。だが、なんとか理解し合い、この婚活チャンスをものにしたいと思っている。

＜3月10日＞

お相手がラインに16日だが夕方になるかもと書いてきて、延期しておいてさらに夕方はないだろう。もっと長い時間会いたい旨を書いて、どうなるかと思ったが、予定を変えて朝から会えると書いてきたので、大人気なくて悪かったというようなことを書いて、それで返事待ち。

疲れる。こちらは強く出られるような立場でないのだが、腹が立ったら伝えておかないと、ためて爆発は良くない。

＜3月12日＞

出来れば会ってくれている人が良いのだが、応募が来ていた。そんな甘い話はないと思いながら、年齢やルックスなど比較してしまいそうな人だったらどうしようと緊張したが、有難い事に、中国出身の37歳の人で再婚の10歳の子供がいる人だった。日本だけではなくて、中国出身で日本で働いている人も、再婚者やシングルマザーがかなり登録されているようである。

世界的な個人主義は家族や夫婦を壊しているのではないか。私は重複して交際するような疲れることはしたくないので応募はストップしている。前回は49歳と51歳の再婚や再々婚の外国の人をお断りしたが、今回は若い人だった。

＜3月16日＞

婚活の4回目の面会は、映画と食事だったが、お相手がおねだりする人なため、大丈夫なのかというのもあるが、だいぶ言いたいことも言ってきた。映画が、『去年の冬、君と別れ』という、サスペンスで重い話だったが、彼女もかなりサスペンスなんじゃないかと思った。いまだにミステリアスでわからない。

＜3月26日＞

5回目の婚活面会は、『ボス・ベイビー』というアメリカでヒットしたらしい映画。お相手が選んできた。

吹き替え版である。春休み中だからか平日なのに、ほぼ満席ですごい熱気だった。主に若いお母さんと子供の組み合わせだった。だがそれに見合う素晴らしい映画に感じた。彼女は遅れてくる癖に「チケットを買っておけ」と開きなおったり、相変わらずミステリアスなサスペンスで、一日で四度位だろうか、ののしり合いになったりした。でも、またサプリ関係で助けてくれといわれ、言い合いのあと、助け

てしまった。
こちらにも限界があるが、他にお相手がいないのだから仕方ない。だがこの人では黒田家が潰れてしまうのではないかという危機感もある。
かまきりの雌に喰われる雄の心境だろうか、ハラハラして生きている実感はある。このお相手の場合、一体私はどうなってしまうのだろうか。まだ破局になっていないようだ。出来れば、黒田家がどうなろうとも、一緒になっていただきたいと思ってしまうのだが。

＜3月28日＞

3日で実家に帰った前妻とだったらどうだっただろうかと思う、「プリマリタルカウンセリング」。5度ほどお会いした段階で婚活相手とやってみようと思った。組織のサイトにメール打診したら、遠藤壽彦先生から返信メールが来て、4月5日に可能だという。
先生の住まいは比較的近いところにあり、婚活相手に電車で茨城県へ来てくれるようラインで、交通費を往復3千円支給するからと書いたら、「5千円なら行きます！」と、！まで付けてきたので、「わ、わ、わかった」と返信した。
遠藤先生の、『結婚・心の準備講座』を婚活相手と受講する予定になった。婚活相手は利益の出る交通費のおかげで、ご一緒してくださる可能性は高いと思う。

＜4月2日＞

昨年11月の亡き祖母の入院あたりから忙しくなってしまっているが、今日は特に何もしない休日。夕方にネット婚活を久しぶりに眺めながら、50歳の私の条件で、出産の可能性の考えられる交際相手を探すのは難しいとつくづく思った。現在の交際相手を大事に考えないと大変だと思う。

＜4月6日＞

昨日、6度目の交際は、（一社）日本結婚カウンセリング協会の遠藤壽彦先生のところに伺い、3時間ほどプリマリタルカウンセリングをしていただいた。前妻が3日で実家に帰ってしまい、ネットでいろいろと調べているうち、そうした動きがあるのを知ったが、茨城県ではまだ初めてのケースとなり、今後普及が望まれるところとの事。この場をお借りして、婚前のカップルがする離婚予防のカウンセリングは大切だと私からも訴えたいと思う。
今回、婚活のお相手もユニークな人ではあるものの、私の計画に付き合ってくださったのはありがたいことだった。だが、つくづく婚活とはお金が出ていくものだと感じる。
しかし、前妻はほとんどデート時代はお金がかからなかったのに、弁護士費用で多大に出費となってしまったから、やはりどうしても婚活は金がかかる。他の男性については知らない。

＜4月8日＞

昨秋の祖母の入院と今年の祖母の死去から、喪主とインフルエンザと交際相手が出来たが、ユニークな人で振り回されているのかというように、突然いそがしくなってしまっている上に、10数年ぶりにやってきた持ち回りの部落の班長。
今日は勤務を終えてから、今年度の各部落の班長らの顔合わせに出席したが、内容が懇親会とのことで、よく知っている人達は話をしているが、私は知らない人ばかりで、居づらいのでわずか30分で、トップに挨拶して帰宅してしまった。どうしてこういそがしいのが集中したのか。ただ、持ち回りで渋々とは言え、地域の役割も対人援助的な行為なんだろうな。
他には、交際相手にプリマリタルカウンセラーの講座を受けてもらうための、お金を支払うというのも、私の一月の給料分くらいの額をあげてしまうなんて、まだ結婚してもないのに、変な気もするが、交際相手のためになると思うし、離婚しない講座を受講すれば、意識してくれるとも思ったし。遠藤先生から私に申し込み用紙がメール経由できたが、交際相手でないとわからないので、交際相手のラインに、遠藤先生にメールしてくれと頼んだ。午前中には24日のデートの候補地をラインしていたばかりで、しつこいかなとも思ったが、急ぎの用事である。

＜4月10日＞

婚活相手から衝撃的な告白を受けた。名前と年齢を詐称していた。デートの約束に二度も1時間も遅れたり、変な人だとは思っていたが、まさかであった。だが情が出てしまい、遠藤先生にもメールしておいたし、婚活の担当の社長にも事実をメールした。団編集長にも事前にこのことをメールしたところである。心理関係者で知り合いには全員に知らせて、コメントを聞きたい心境だった。どうすれば良いのだろう。黒田家先祖代々に実子を作らないことになるとお詫びするしかないのだが、私も若い頃に結婚しなかっ

たのも悪い。だが、私には子供はできると信じ込んでいたので、現実を思わされた感じもしている。これからどうなっていくのか。私の母親にも事実を伝えた。

＜4月13日＞

婚活のお相手から、一旦婚活を辞めるが私とは連絡を続けるがいいか、とラインが来た。婚活の社長からもメールが来て、それらの内容から、彼女が家族経営の婚活会社のスタッフで、サクラであることが判明した。

私はお相手を好きになってしまい、婚活の社長からのメールでようやく気持ちが整理できた。ラインに、サクラとは婚活はできない、とお別れの告白を送った。傷つけず、もう他の人にもするなというような内容で送ったつもりである。ただサプリメントは私の意志で服用を続けるつもりがあり、わずかながらお相手の利益の部分にはなるかも知れない。

交際中、二本の彼女の紹介の映画は、『去年の冬、君と別れ』と『ボス・ベイビー』だったが、どちらも観たのは本当だし、彼女との出会いがなければ観ないでしまった映画かもしれない。

サクラにひっかかったわけではあるものの、意味深な映画の気もした。食事もおごらされて、婚活規約では違反なのか、婚活社長がそうした意味のことを言われたが、初めて食べるような金額のランチにしても、彼女が喜んで食べているのを観ているのは嬉しく、きっと金持ちがホステスにしているような事は、詐欺でもなく、本心かも知れないというところもあった。本名を教えてくれたのは、彼女の家族経営の人の判断だとしても、私を一応見込んでくれたからかも知れない。だがネットで調べると以前の事件が出てきて、彼女の年齢詐称もわかり、ネットで調べなければ、年齢詐称は続いていたはずで、そこらへんもぎりぎりの出来事だった。依然として厳しいが、妊娠出産できる人と会えるのか、1000人応募して会えたのがサクラ一人の状況である。50歳で低収入気味の条件は婚活には非常に不利なのがわかる。ただ、私は彼女のような人への包容力は足りないだろう。だから別れの告白をしてしまった。

もし、彼女の年齢が本当だったら、サクラでもまだ彼女に挑んでいたかも知れない。そういう意味では、先祖代々の遺伝子を途切れさせていいのかという迷いが、彼女の実年齢が45歳と10歳さばを読んでいたことがネットでわかったのが、ぎりぎりの幸いだったのかも知れない。

彼女が勝手に私のカードから引き出そうとしたときに、キャッシング契約してなくて、引き出せず彼女が、「黒田さんには神様がついているのかもね」と語ったことが思い浮かぶ。預金はあげてしまったが、ただ、困っていたので感謝だとは言っていたので信じたい。全てが嘘だったとは思いたくない。書いてきて涙が浮かんでくる。好きになってしまっていた。だけど、別れの告白をした。今日は休みで、東京に早めに入り、婚活会社の社長に連絡して、懲りずに、また新たな婚活相手の相談をする予定である。未練がましいが、1時間も遅刻してくるところなんかは、サクラをしている彼女の罪悪感から潜在意識がしているのかも知れない。分析のしすぎだろうか。違うか。

＜4月13日夜＞

激動の一日だった。結婚相談所の社長に経過を報告しに東京に行った。社長のメールに同意しなければさらに彼女と交際を続けて、結婚までなんとかもっていこうとしていたのだが、じっくり見つめてみると、結婚詐欺の部類であろうし、サクラであり、名前と年齢を詐称していたのである。私が彼女のフォローに熱心になり、ある講座の代金を出してあげるとまで言ったことで、彼女が私に本名を知らせたのだが、その名前からネット検索して、彼女の実年齢が発覚し、社長に報告したのだった。そこから社長が調べてくれて、詐欺的な面があるとわかった。交際相手とは、ラインで朝から昼頃まで通信し合い、こうしたことをしてはいけないこと、不利になることを繰り返し書いた。

社長は残念だが、そういう人は治らないだろうという。私は彼女に好意を抱いていたので複雑だったが、そうした悪い傾向のある人を擁護してしまいたくなるのが、そういう人の魔力なのかも知れない。社長によれば、ほかにも本部に苦情が彼女に関してあるという。問題傾向を起こしてしまう人であるのははっきりしてきたかも知れない。だがなぜ、わざわざいずれ暴露されてしまうような事をしてしまうのか。だが、偽名以外はさすがに本当だと言いながら、実は年齢も違っているのだった。違うでしょうと何度か確認して、本当は10歳さばを読んでいたことを言った。周囲の何人かに彼女の行いを伝えると危ないと言っていた。その通りになってしまった。しかし、詐欺であろうと交際は楽しかった。ラインだって彼女がきっかけで初めてしたし、繰り返しになるが映画もみた。だから複雑である。社長によると本

部から除名だろうという。彼女は連絡はとっていけないのかとラインに書いてきたが、揺らがず、お別れだという事を、不正はせず、くれぐれも身体には気をつけて欲しいとできるかぎり親身に文章で伝えた。
昼の既読で書き込まなくなり、社長から規則だからと言われて、夕方、社長の前でラインのやりとり全文を消去した。彼女は悪いのは悪いが、交際はしてくれた。交際してくれない人は1000人を超えたのだ。複雑だ。サクラの詐欺の人のほうが楽しい時間は与えてくれた。だが、それは認められないことなのだ。社長との話で90歳を超えて介護施設にいるおばあさんが、まさに仲人の鬼で、いまだに、介護施設でどうやるのかは詳しく聞かずじまいだが、仲人をしていて、社長に相談の電話が来るのだという。しかし、彼女については、わざわざばれるとひどいことになることをしてしまうのだから、心理カウンセリングが必要な人にも思える。なんだか愛憎というか、複雑な辛い出会いとなってしまった。
昨秋の亡き祖母の入院から、死去と喪主と、その後のインフルエンザ罹患とその後に、応募したあとすぐに反応があり、10日の2月9日の平昌オリンピック開幕と同時にスタートした今回の婚活だが、2ヵ月ちょいで、サクラとなって詐欺疑惑の人との複雑な終え方をしてしまった。さみしい思いでいる。彼女には治って欲しいものだ。

＜4月14日＞

今日は勤務が浮足立っていた。元妻からの超スピード離婚などでなにかしらアピールしたいと思い、志願してこのマガジンの連載をさせていただけているわけだが、難しいとは薄々思いながらも、楽しい経過にしたいはずが、1000人にようやく1人の交際相手が詐欺師だったとは。こんなに女性に苦しめられる人はどのくらいいるのだろう。昨日は、当日ゆえに、母親に経緯を話す途中で声が詰まり、織田信成とは良い人なんだろうなと思わされるように、泣き声になったほどだったし、躁鬱的な感じになりやすいようだった。これを書いている現在（20時45分頃）も多少残っている感じ。結婚相談所の社長がメールにて、

＜4月15日＞

昨夜は文章作成中に眠気を催し、途中のまま眠ってしまったようだ。あまり全体を長くしすぎると次のマガジンに収まりきれなくなるから、詳細に書きたい大事件だが、それも意識しなければいけない。別に詳細を記録しておけば良いかも知れないが、そこまでの気力もない。だが、リアルタイムに記録しないと気持ちが風化する。だが誰にも見られない状態で終わる文章が多いことを思うと、マガジンに提出できることが貴重である。母や婚活の社長は、「もう忘れて次へ移れ」という。それが普通の考えだろう。普通はどうしようもないし、忘れずにまた連絡してしまうのは危険かも知れない。別れたのに意地もない。惚れてしまって麻痺しているが、婚活の社長からのメールで、昔の仕事の時もなんとか粘っていようと考えながら辞めるときは急激に辞めてしまった自分を思い出すが、別れを切り出してからは速かった。彼女に買わされた健康製品の契約の解除が平日のため、事件の後が土日になってしまい、それだけ残しているが、それも早く明日に電話して終わらせたいという気持ちだ。それでも、買わされたのではなく、買ったし、血液サラサラ効果で良さそうな面もあるし、せめてもの彼女への売り上げかとも思ったが、婚活の社長は婚活中の金品売買は禁止だから辞めるべきだと言っていた。母や社長との話中では突っぱねたが、それも考えを変えた。変えたら私は逃げ足が速い。冷淡なのかも知れない。粘っても逆を決めたらすぐなのだ。これも性格なのだろう。またエゴグラムを受け、彼女がかなり低く、私がかなり高かったのは、従順な子供のような性格の部分だった。

まだ彼女とラインでのやり取りだけだったが、最後の交流はまだ一昨日に終えたばかりで余韻がある。母も婚活社長もさっぱりと忘れて次へ移れという。普通は当然の事だが、私は対人援助学への参考になるかはわからないが、サクラを、結婚詐欺をしてしまうような人と2か月間、6回のデートで婚活していたわけで、そうした人の微妙なしぐさをそばでみたわけだ。だが、記憶はだんだん遠のく。婚活社長も、今は苦しくても時間の経過だけが解決になるよと書いてくれた。だが、苦しさとともに、結婚詐欺まで実行してしまうような人の微妙な部分を垣間見た所も忘れていってしまう。この事件だけで今回の日記は終えてしまっても十分な価値だと私は思うくらいである。締め切りはまだ一か月以上もある。この後の展開まで記録すると膨大になるかもしれない。だが、忘れる前に、思い出の中に、民事事件や刑事事件にまでなるケースもあるだろうし、決して軽いとは言えないだろう嘘を実行してしまう人がしなくなるた

めのなんかのヒントが、交際にあったのではないかという面を、逆に忘れられるために、ここで発散したい気持ちである。

昨日は職場の上司と同僚1人に、「結婚詐欺に遭ってしまいました」と話して笑いも出たが、躁鬱な気持ちが少し軽減した。忘れようと努めて精神分析的には、心の奥の層に閉じ込めてもどこかで出て来るのかも知れない。時間の経過とともに、文章として残すのも、できれば誰かに見てもらうのも、回復の手段なのではないか。

＜4月15日＞

サクラへの恋の文章を作ってしまい、今日は詳しく書く気力がないが、少したったら新たなネット婚活を再開する。

実子にこだわってしまい、難しいながらお相手は38歳以下の希望で妥協せずに、応募する予定。

まだ引きずってはいるが、2ヵ月ぶりに婚活応募の再開をした。6人に送った。1000人でサクラ1人のみという実績だが、結論づけるのは早いと思う。今までの私は考えられなかったことだが、子連れの人まで応募してしまった。とにかく昔菊池桃子が好きだった時の桃子みたいな写真だったからである。

＜4月16日＞

まだ提出まで1か月位ある所で既に多量になっていると思うが、さらに、今回の結婚詐欺遭遇事件を詳細にしたものを4月15日に組み込み、別個のその部分だけ団編集長に送ってしまったが、犯罪心理と対人援助の参考に、実際の体験談だから参考になれば良いなと思うが、さすがに、連載と同時に掲載できる量ではないので、ここではカットした。

今朝もまだ、サクラの将来が心配である。だが、そうした人が45歳まで無事で、まだやっているのか、急にはできないだろうというのも考えたりする。東京新聞のコラムに、60歳の女詐欺師は雰囲気があったみたいなのがあり、いるのかなと思ったが。カウンセリングを見つけて、一緒に治していく度量は私には無かったが、婚活の規則で全く交流なしにするとかの兼ね合いもあり、なにが善悪かというのもある。もともと、詐欺にあったら怒って、ひどい場合は訴訟する人もあろうが、私は加害者を心配するという心理に陥った。

＜4月16日＞

婚活社長が送ってくれたように、がっかり状態は時間が解決するだろう。さらに2ヵ月ぶりに10人に応募して婚活相手募集を再開した。ルックスで本命が1人いるが、今までの私は回避していた、子連れ離婚の人であり、窮地になると抵抗感さえ乗り越えてしまうのかと自分の心理の不思議さを思っている。相当美人に見える人なら子連れ再婚者でも、美人に見えない未婚者よりも良いかも知れないという感情が出て来る。ただ、美人に見えなくても結婚までしてしまったのが元妻であり、美人に見えた時もあったのも感覚の不思議である。美人に見えなかった復讐なのかどうか、ひどい目に元妻には遭ってしまったが。ただ、これもあまり考えられる人がいないかも知れないが、離婚者も、加害して離婚した人と、被害を受けて離婚した人では、再婚相手としても違うだろう、被害者離婚の人は再婚しやすいのではないかという思いも仮説したりする。それは関係性なのか、どっちもどっちなのかはわからない。

＜4月18日＞

勤務休日で早朝からネット婚活。15日に応募した人は10人位だったのに既に残りは2人。本命は残っていて、どうにかならないかと思っているが、応じてくれなければどうしようもなく、2つのネット婚活に29人追加。31人の連絡待ち。以前には考えられなかった、再婚者とシングルマザーを中心に選んだ。初婚だと実の子の可能性を考えて37歳までにすると、50歳の男では13歳も年齢差があり、初婚でなくても難しいのかも知れないが、私の年収の状態もあるし、難しい。再婚子なしでも難しいのだと薄々思う。シングルマザーでも難しいとすると、既に私の条件ではかなり難しい。詐欺師との婚活のトキメキが懐かしい。

＜4月18日＞

茨城県の婚活に行ったが、詐欺師事件の話をしてしまったのもあるが、担当者に該当者はいないか聞いてやる方法をとって、自分で探さないでしまったが、結局、該当者がいないと判断。少し間をあけて次は行こうと思ったが、その前にネット婚活で決めたい気持ち。詐欺師紹介の健康サプリの解約申請書入り封書が来ていたので、書いてポストに提出した。さみしいような変な気持ち。

＜4月18日＞

本命に断られた。この時点で26人に応募中。再開して既に15人に断られた。2つの婚活で重複している人もいるよ

うだからのべというのか、のべ1150人位に断られている。お会いしたのは詐欺師1人。今後どうにもならないのだろうか。部落の仕事もあったり歓送迎会があったりなんだか出来事が集中している。引きこもりたい。

＜4月20日＞

締め切りまでまだ1か月と少しもあり、既にあまり長い文章を追加できない紙面の関係になっていると思うので、そこを考えて提出日付近まで書き加えたいが、私の、これを書き始めた元妻との離婚騒動以前の20代からの結婚適齢期（これが揺らいでしまったのもいまだ独身の原因の一つか）の時にどうして結婚出来ていなかったかというのもまだ書いていない。

元妻と出会う以前は、茨城県の婚活だけで4人会ってもらえたのだから、それだけでなんとか会える人は出るかと思っていたが、50歳になるとかなり無理を感じるようになってしまった。実の子が諦められず、対象を38歳くらいまでにしている無理？もある。ネットだと38歳の出産確率が15%だと言っているところがあった。交際相手の詐欺が発覚していなければ、えらく金のかかる女性だと思いながらも、24日にまた交際予定だったから、ずいぶん間が空いたもので、まだ4日もある。回復の早いほうなのかわからないが、感情の揺れは、随分落ち着いたように思う。茨城県の婚活ではとても足りないと思い、お金はかかったが、全国のネット婚活という参加規模の大きな所中心にまたはじめたが、小学生の女の子のいるシングルマザーでも断られてしまうのがわかった。ルックスが好みの女性だったので会ってもらいたかったのだが。これでは初婚の年齢差の人は来ないなとも思ってしまう。別の民間一社でやっている婚活組織などは、男女とも40歳以上のような熟年カップルの婚活をテーマに打ち出したりしているが、これだと実の子が出来ない。ライフサイクルは人間が生物である限り付きまとう。女優の山口智子のように、夫の唐沢寿明も容認しているからだろうが、子供を産まない人生を選んだなどと堂々と言ってしまう人さえいる。私はこのような多様化された発言が、結婚したい人や子供が欲しい人全体には思考が分散されて不利になると思って危惧しているのだが、私自身がどうしてこんなに年齢がいってしまったのか。元妻との離婚裁判の2年半の時間の経過が惜しまれるが、それはそれで結婚の在り方を訴えた私の自負だと思っている。この日記の前半のように、一人だけ交際相手が見つかれば期待のある明るい文章が続くようになるのだから、たった一人の異性の出現で感情が毎日が変わってしまうのだから、実の子への執着というハンディキャップを捨てられないので、そうした特殊性もあるものの、続けるしかない。年収と年齢なのか、どうしてこんなに相手が受けてくれないのかと思う。

そして新潟県知事が女子大学生との援助交際で辞職というスキャンダルが出た。東京大学医学部からの医師で弁護士で知事というスーパーエリートが、3万円で女子大生と共謀して売買春をしていた。そして私はその人の何パーセントの給料なのか知らないが、手もつながない人に15万か20万かの詐欺被害にあったりしている。そして同い年の50歳である。複雑な思いがした。この辞職した知事と女子大生に憎しみまで感じるが、保守？もセクハラ発言で相変わらず汚いが、リベラル？も、その知事の事を潔いとかわけのわからないことを言っている。いかに社会に貞操観がないかと思い知らされて、ネットでリベラル？な人達に、援助交際した人を擁護するのは変だろうと当たり前のことをアドバイスする始末である。だがわからないだろう。女子大学生は3万円で身体を売るが、結婚は遅れるのかも知れないし、金持ちと結婚する人なのかも知れない。その女子大生にお咎めはないし、1000人応募しても誰も交際してくれない女性達にもお咎めなどない。

＜4月22日＞

紙面と文章量との兼ね合いも感じるが、あせるなとか、いったん突き放すとかいう情報もやってきているのだが、ネット婚活では、競争があるからかとか、そもそも私の設定が、私の立場から難しすぎるのか、将来を見渡せる神のような目があるとしたら、その目は既に不可能を続けているのを見ているのかなとか、1000人に応募して会えたのが詐欺1人だったことへの不安が、本当に結婚出来るのかという不安が、数日強く出てしまい、ぐれ気味で、婚活の社長には罪はないが、詐欺から救ってくれた面もあるのに、疑惑のようなことを感じたり、不信である。それは私が悪いとは思う。不信ならば、ネット婚活に出ている女性たちに向けたほうがまだ正しいか。どうしてあんなにいるのに、会ってもくれないのか。詐欺師との交際の時は、具体的な行動ばかりの記述になれたのに、今は不安な心理ばかりが記

述となる。だが私は知っている。一人の異性が現れたら感情は瞬時のように変化してしまうことを。職場などで告白できないからネット婚活をしているのだが、もし告白出来たらという人も数人いたりする。茂木健一郎さんが一時、『偶有性』なんて言っていたけど、将来がわからない所での挑戦は不安が募る。確率的な面も教師かも知れない。どうして50歳になってしまい、婚活しているのかまで書くと今回に掲載しきれないだろう。

＜4月23日＞

職場の歓送迎会があった。歓迎会3人と送別会1人。ノンアルコールだったが、質問ゲームを提案してしまったら、私に、「「このところのラブはどうですか？」という質問が来てしまい、「婚活詐欺にやられました」と演説した。さらに、看護師さんの T さんは独身かと聞いたら、高校生の息子のいる既婚者らしい。得難い情報を得た2時間だった。鍋や刺身など大変美味だった。婚活相手が詐欺師だとわからなかったら、明日は千葉県の南房総まで行って魚料理を食べるつもりだった。それは未遂に終えたが、美味しいものを食べる運命の時期だったのだろう。送別会のほうの女性は、9年前にオンラインゲームというので知り合ったのだという。想定外な出会い方だ。ある意味ネット婚活もオンラインゲームだろうか。バトルの仕方が精神的だが。

＜4月24日＞

詐欺師だったが婚活相手と最後のデートの約束の日だった。交際中、次の交際日は必ず約束していた。だが、今日は以前の休日の過ごし方に戻ってしまった。連休の前半でもあり、車の6か月点検に行った。その間に茨城県の婚活に電話して確認したが、現在のところ該当者なしとの事。そこから逆方向だが一気に献血に行き、成分献血をした。休日に犬も歩けば棒に当たるような出会いもない。棒は失礼だ。とにかく自暴自棄になっても意味はない。チャンスを信じろ。そして、詐欺師との交際の全ての行程が終えた。初めて会ったのは平昌オリンピック開会の日だった。

＜4月25日＞

連休後半。雨。今日は応募したい人さえ1人もネット婚活に出ていない。どうして慶応とか明治学院とか、年収800万円とか600万円とかいう女性ばかり出てくるのか。しかもルックスもまあまあで。こんな人ばかりでは婚活にならない。不愉快。と書いたあと、新規会員でない人から踏ん張って午前中ほどんどを費やして75人待ちの状態にまでした。詐欺師さんとの交際以来、集中力が無くなり、出掛けたりと勉強してなかったが、午後からやらないといけない。金にはならないが。

＜4月29日＞

かなり時間をかけてネット婚活で応募を増やした。60人前後増やしただろうか。こう書いてからさらに追加し、（検索の仕方もあるんだな）夜の時点で130人応募した人が残っている。既に今日応募して断ってきた人も20人を超えている模様。本当に見つかるのか先が不透明ながら、ほかにどうするか思い浮かばず、とにかくやってみるしかない。

＜5月1日＞

職場では男性の薬剤師さんに歓送迎会の時に何人か独身事務員さんの名前を出したが、誰でしたっけと名前を聞いたり、ネット婚活の社長がロシア人の婚活もしているので、日本人がダメなら、ロシア人の人でも良いと連絡したら、探しておくと返信がきたりして、焦ってしまって、このようなアクションをしてしまった。外国なんて行ったこともないのに、大丈夫なのか。完全に全く忘れてしまったが、学生時代にいちおう、第二外国語がロシア語だったのを思い出した。恥かしい。

＜5月2日＞

また大騒動になってしまった。婚活の社長は親には話さないで進めたほうが良いという意見だったが、私は親には伝えるべきと考えるので、それが元なのだが、婚活社長から、ロシア人が一人会えるというので、女の子のいる再婚者だったが、私は妥協するしかない。日本人の女性は相手にしてくれないと思って応募したのだが、その後で母親に伝えたら狂ったように怒り出して、絶対に外国人との結婚は許さないと、狂いだしたので、こちらも抵抗したが、負けて、結局、婚活会社にキャンセル料を払うことになり、情けないので結婚相談所もやめてやろうと思ったが、最後に婚活社長に電話しているうちに、退会はしないことにした。相当に母親とも婚活社長とも激論になってしまい、徒労だった。母親は72歳だが、感覚に限界があるらしい。私の度量も無く、グローバリズムは無理だった。嫌な気持ちだ。正直、このネット婚活は成婚料が高かったり、女性の立場が高いのが難点かと思い、違う方向を模索しようかとも思ったが、それも面倒で、なあなあで続けることにはした。婚活社長

だって神様ではないのだから良い所ともっとこうであれば良いのにという面はあろう。母親の場合、気に喰わないと自殺するというのだから始末に負えない。鬼母である。母子癒着なのか。

だが、大元は、日本の女性が希望が高すぎるところにもあると思う。ただ、私が実子を諦めず、年齢差の離れた女性にだけ応募しているミスマッチもある。

＜5月2日＞

しばらく腹の虫がおさまらず、今日のトラブルを機に、ネット婚活は退会してしまったほうが良かったのかどうか。退会せずにしてしまったが、多少社長への不信もあったりした。だが、結果論に過ぎないとも思う。別にロシア人でなければどうしても嫌だという理由もない。これまで応じてくれた人は、詐欺師以外にないが、今後はわからない。絶望的というわけでもない気もする。ひどい日々だ。

＜5月3日＞

こんなに苦しい婚活体験からの実感。規範的で封建的であるほど誰もが結婚出来て子供も多く生まれた。女の自由度が増すのど、家庭は崩壊し、少子化となっていった。昔は女が不利だったわけではなく、男も規制の中で慎ましかった面もあったのではないか。多様性に惑わされてライフサイクルを破壊された。（ロシアの件は反動か）

＜5月6日＞

夜中2時半頃までやってしまったが、もともと別の用件からSNS で知り合った社長が、結婚相談所で、その社長に聞いてみようというので始めたそこでの婚活だった。ネット婚活が主だというので驚いたのが最初なのを思い出した。結婚相談所というと、一人をピックアップしてくれて競争なしでお見合いするのかと思っていた。そうした最初のところから忘れていた。結婚相談所の場合、女性が社会的に有利な状態の人がほとんどのようになるのは、入会金や月々の会費、そして成婚料がけっこう本格的な金額で、それだけ本気度が高いのである。私のように、結婚相談所の一つが自身でサクラをするようなケースは、社長が23年やってきて初めてとか言っていたような気もする。個々の結婚相談所が集まったネットワークで、それで企業がやっているネット婚活みたいな仕組みになっているのである。違うか。よくわからないが、それで、ネット婚活を始めた。設定で時間を費やした。4つのネット婚活に入った。結婚相談所の集合よりは出会い系のような危険もあるかも知れないが、4つ入っても、月々にすれば結婚相談所の集合体と同額位で、具体的に言っても大丈夫だろうから書くが、1万円くらいで、入会金も成婚料もない。成婚料の有無の違いは大きい。だがそれは私のように所得の低い人の感想で、お金がある人なら、女性も多額の支払いをして本気度の高い結婚相談所のほうが良いだろう。だが、私のような所得が低い場合は、女性のほうは無料で、男性月々数千円のようなほうに、出会いがあるかも知れない。対人援助学マガジンは3か月ごとなので、今回は様々なドラマがありすぎて、量が多くなってしまっていると思うが、それだけリアルだとは思う。細部がリアルを語るのだと思う。どうしてめげない根性なんだと思う人もあるかも知れないが、もとをただせば、職場などの周辺の人に告白も出来ず、では女性のほうも探しているのがはっきりしている婚活しかないだろうというのが発端である。しかも若い時に無理してでも頑張るべきだったのかも知れないというのもある。子供は若いころから育てたいような気がしていたのに。だが、若い頃にそう思うのも生物的なメカニズムだったのかも知れない。50歳の現在は意識がやや薄らいでいた。だが全盛期の20代、30代でさえ、仕事が不安定だったからか、月日が経過してしまっていた。今日は休みなのでこれを書いたら、4つの新たなネット婚活で応募しまくろうと思う。ただ、一つの婚活で行き詰まったら、別の方法があるのではないかと思う思考の転換は大事である。何事にも。そうした所を根性と呼ぶのかも知れないが、発想の転換というか、違うことを考えてみるところに、分岐点があるのかも知れない。そもそも今回の最初は詐欺に遭う初期からのスタートである。場合によってはまだ詐欺に遭っていたかも知れないのである。事実は小説より奇なりである。

助からなかったら連載ストップであっただろう。そして、リアルとは、想起して書いては無理な面があると思う。事が終えてから書いているわけではない。だから私にも今後どうなるかわからない。想起してから書いたのでは紛失されてしまう何かが、日記形式という、この連載の方法にはあると思っている。そして私の失敗が、できれば今後の成功が、他の人への、対人への援助のなにかしらのヒントになれば良いなと思って書き続けている。

〔PBLの風と土　第5回〕

現在進行形の問題に向き合う学びの視点

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構准教授）

【前回のおさらい】

2017年4月から1年、デンマークのオールボー大学での学外研究にて、全学でPBL（Problem-Based Learning）を展開する教育実践に関心を向けています。第1回では歴史的・文化的背景を、第2回ではPBLの類型を整理し、プロジェクト型の問題解決学習PO-PBL（Project-Oriented Problem-Based Learning）に着目してきました。

連載第3回では心理学系のPBLのカリキュラムを紹介しました。第4回ではPO-PBLでも、さらに知識獲得型（Study-Oriented）と実践重視型（Intervention-Oriented）では、指導・監督の観点が異なる点を示しました。

1. 1年間の学外研究を終えて

2018年3月、立命館大学による学外研究期間の終了に伴い、オールボー大学を後にした。4月からは、デンマークで過ごした日々を懐かしむ暇もない程、通常どおり慌ただしい毎日を送っている。幸いなことに、今回の学外研究にあたっては、2名の教員が私の受入担当となってくれた。一人は筆者と同じく社会心理学を専門とし、ソーシャルワークの分野でのPBLを担当するMogens　Jensen先生、もう一人はロスキレ大学でPBLをテーマに博士論文を執筆し、全学の委員会のメンバーとして大学改革の業務も担っているCasper Feilberg先生だった。

3月13日、現地で受入担当教員らと最後のリサーチミーティングを行った。その際、この1年間、オールボー大学で過ごした出来事をリスト化してレジュメとして持参した。MogensとCasperおよびPBLに関わる出来事は42に及んだ。リサーチミーティングは合計19回で、そのうち3人で行ったのは11回だった。

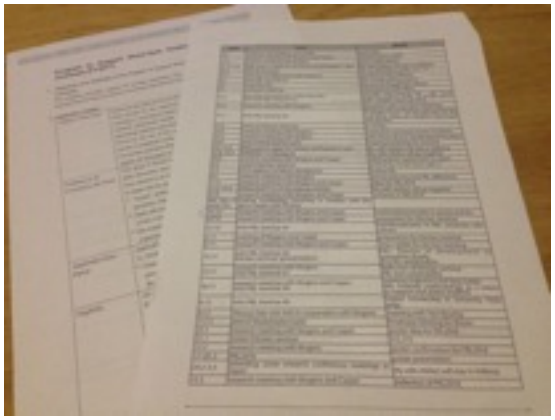


写真1：デンマークでの最後のミーティングの資料

本連載は、1年間の学外研究を通して、筆者が得たPBLに関する知見を紹介する貴重な場となった。特に第4回で紹介した「PBLのはしごモデル」は、実務経験の豊かなMogensが、かつて博士論文で扱ったコミュニケーションのモデルをPBLの指導・監督（いわゆるスーパービジョン）に用いてきたものだった。今回、Mogensが用いてきたモデルを、日本でサービス・ラーニングの教育実践を担ってきた筆者との経験交流を通じて、Casperとも共有する機会が生まれたことで、筆者の比較研究は一気に進展した。結果として、2月にカリフォルニアのサンタクララ大学で開催された世界PBL会議（PBL2018）において、筆者とMogensとCasperの3者共同による発表に至った。

連載5回目となる今回は、改めてオールボー大学のPBLの特徴を整理し、日本の学びの環境づくりに活かすための手がかりを探ることとしたい。その上で、日本ではどのようにPBLが受け止められ、その概念が整理されているのかについてまとめる。そして、第4回でも触れたとおり、オールボー大学以外でのPBLの知見を紹介することで、PBLという教育手法が持つ可能性について検討していく。

2. 立命館大学の公開研究会の内容から

去る5月28日、立命館大学サービスラーニングセンターの主催による「ボランティア・サービスラーニング（VSL）研究会」にて、「問題解決学習における学びの環境のデザインのための視点ーデンマーク・オールボー大学における全

学でのPBLを事例に一」と題し、筆者が話題提供者となり、オールボー大学のPBLの取り組みを紹介する機会を得た。配付資料として、本連載を用いることとし、連載第1回から「学びの環境をデザインする上ではハードに依存しない」こと、連載第2回目から「PBLにはProject basedとProblem Based がある」こと、連載第3回目から「知識、技能、態度の3つの習得のためにPBLが効果的とされる」こと、そして連載第4回目から「場合によっては外部協力者と共にPBLでは教員が指導・監督者として介入する」ことについて紹介した。その上で、連載第4回目で詳述した「PBLのはしごモデルは教育実践の径路を評価・構想・設計するのに有効な概念である」ことについて説明した。平日の夕方という開催時間にもかかわらず、学内からも広く関心を得て、20名を越える参加者とともに、45分あまりの話題提供と45分の意見交換が行われた。

当日の意見交換では多くの質問が寄せられた。そこで今回は、それらの質問に対する筆者の回答を紙面にて採録する。それにより、改めてオールボー大学のPBLの特徴を確認しつつ、それらの特徴を日本の学びの環境に活かすための手がかりも見出すことができるだろう。以下、寄せられた問いと応えを9点に絞って紹介する。

1）オールボー大学の学生の気質について

そもそもデンマークでは、学部と大学院の修士課程までは学費が徴収されないこと、入学試験ではなくポイント制度（高等学校の成績と課外活動からなる）によって入学できる大学が定められていること、さらには職業別の専門学校が充実していること、こうした特徴があります。これらが相まって、高校を卒業して大学に行くことに重きが置かれていません。別の言い方をすれば、年齢を問わず大学で学ぶ機会が保障されているため、18歳人口に対する大学進学率に着目する意味があまりない、と捉えることができます。その上で、オールボー大学の学生の気質を捉えるなら、伝統的なレクチャー形式による大学（コペンハーゲン大学やオーフス大学）とは異なった教育を1974年の開学以来展開していることを理解した上で入学してきていること、また先のポイント制度に基づくならいわゆるエリート教育の大学ではないこと、さらには本部が都心から離れたところにあること、これらを反映した気質だと受け止めています。ただ、社会人の学び直しの目的で入学してくる方々も一定数いるものの、やはり多くは若者です。とはいえ、日本の大学生と比較するなら、成熟した人々が大学に進学してきているという印象を抱きました。

2）PBLにおけるProblem-basedとProject-Basedの違いはどの部分に強く反映されるか？

オールボー大学ではProject-Oriented Problem-Based Learning（プロジェクト志向の問題解決学習）が展開されているため、言わば「いいとこ取り」のようなカリキュラムが追求されています。それに対して、日本ではProblem-Related Project-Based Learning（社会問題に関連づけられた集団的プロジェクト学習）が展開される傾向にあるように思われます。つまり、Problem-basedのプログラムでは、実社会の問題が何かを把握・認識・理解した上で理想的な状態を構想・設計していくプロセスが重視されます。一方で、Project-Basedのプログラムでは、問題が予め設定された上で、適切なプロジェクトマネジメントを通して解決策（いわゆるソリューション）が提示されることが重視されます。したがって、Project-OrientedでProblem-Basedなプログラムでは、小集団による学びのコミュニティづくりを通して一人ひとりが今後必要とされる知識・技能・態度の習得への動機付けが行われます。その一方で、Problem-RelatedでProject-Basedの場合は現在進行形の課題に対する取り組み目標を設定して定められた期間内で達成することが目的とされます。そのため、Problem-basedでは問題解決へのプロセスが、Project-Basedでは課題達成のための解決策が求められるという点で違いが色濃く出ているのではないでしょうか？

3）オールボー大学では全学での展開にあたりどんな制度を置いているか？

学内向けの研究・研修機関として「PBLアカデミー」が設置されています。実際、客員研究員の私も、「PBLアカデミー」による主に准教授向けのセミナーに参加して、PBLの概念や方法論に関する理解を深めました。いわゆる紀要にあたる

学術雑誌も刊行しており、その知見は広く学外にも還元されています。主に学外向けとしてUNESCOのチェアプログラムによる「オールボーセンター」（UCPBL）が設置されています。ここでは世界会議（IRSPBL）の企画の他、学外向けのワークショップも積極的に開催されています。

4）オールボーセンター（UCPBL）は工学教育だけに焦点を当てているのか？

確かにUNESCOによる採択テーマは「工学教育と持続可能性」のため、どうしても工学系寄りとなっています。ただし、チェア・プロフェッサーの一人で、積極的にUCPBLのレポートを執筆しているアネット・コルモス先生も、もともとは心理学が専門ということもあって、アプローチの方法や扱われるテーマとしては、工学分野のみに留まらないところもあります。例えば、UCPBLによる世界会議（IRSPBL）も、2018年は10月に北京で開催されることになっており、そのテーマを見てみても、工学教育に留まらず、幅広い分野が取り扱われています。

5）職員の関わりは？

オールボー大学では日本のように大学で事務職員を多数雇用せず、教員が輪番で教務事務の多くを担っているという印象でした。基本的に私立大学がないということも影響しているように思われます。そのため、雇用される職員はほとんどが具体的な職務が定められて雇用されています。結果として、日本のように大部屋の事務室はなく、職員2名（時に1名）で機能別に分かれた小部屋で執務する、そんな感じです。外形的な資格では左右されず、能力としては一般的な事務処理能力、サポートの内容としては「スタディーボード」と呼ばれる学生の代表者と教員の代表者の双方によって構成される教育内容に関する委員会（立命館で言えば全学協議会の学科単位で行っているようなものです）のもとで動く各種のプログラムの管理運営です。

6）PBLを通して生み出される成果物は現場でどう活かされるのか？

日本での展開においては、プロセスよりも「成果物」に着目される傾向が強いと思われます。別の方の地域連携に関する議論にも通底する観点として、コーディネーターとしての職員がプログラム（あるいはプロジェクト）にまつわる現場とどのように関係の創出・維持・発展（加えて、特に消滅）を担っていくかが大切になってくるのではないでしょうか？

7）PBLを通じて学生たちにはどのような変化がもたらされるか？

第3回の連載でも記したとおり、オールボー大学のアネット・コルモス先生らによる報告書によれば、オールボー大学の学生900人あまりを対象にした調査では、「専門的知識、方法、問題解決」の能力、「プロジェクトの企画立案と自立」の能力、そして「学際性とプロジェクトの進捗管理」の能力が向上することが明らかとされました（Kolmos, A., & Koretke, 2017, p.40）。なお、この報告書のまとめにおいては、特に専門家へのレディネスが高まる（原典はデンマーク語でoplevelsen af parathed：英語に訳せばexperience of readiness）と述べられています。こうした報告に触れる中で、私は、PBLは学生の学びと成長に対して「効果的である」という前提よりも「効果的にする」ためにどうしたらいいか、という観点で、各種の工夫がなされていると捉えています。

8）PBLを通して生み出される成果物は現場でどう活かされるのか？

日本での展開においては、プロセスよりも「成果物」に着目される傾向が強いと思われます。別の方の地域連携に関する議論にも通底する観点として、コーディネーターとしての職員がプログラム（あるいはプロジェクト）にまつわる現場とどのように関係の創出・維持・発展（加えて、特に消滅）を担っていくかが大切になってくるのではないでしょうか？

9）オールボー大学のPBLは立命館大学の教学の充実にどうつなげられるか？

日本では高等教育機関の位置づけ（恐らく、2010年の日本学術会議による「分野別質保障」のレポートの21ページから記されている「教養教育をめぐる問題状況の検証」や、24ページからの「専門教育と教養教育との関係」などが参考になるでしょう）が独特であるため、ヨーロッパの、そして特に特異なオールボー大学の教育システム全体を導入することは難しいでしょう。ただ、少なくとも教養教育として展開するにあたっては、今まさに議論されているカリキュラム改革の議論でも触れられているとおり、科目としてどのよ

うな到達点を設定し、その達成に向けて教員が「何をするのか」と同時に「何をしないのか」を見極めていくことが大きな課題となるでしょう。

3. 問題解決と課題達成との区別

前項で紹介した意見交換において、多くの人々に共通する関心は、ヨーロッパの高等教育システムと異なって、日本では一般教育といった表現により、米国のリベラルアーツ教育を参考にして教養教育と専門教育との接続を前提にしたカリキュラム展開がなされてきた点にある。そのため、オールボー大学のカリキュラムを紹介し、初年次教育から専門家養成を志向したPBLの導入がなされていることを示したとしても、日本との違いが顕在化されるばかりとなってしまう。その一方で、筆者がオールボー大学において、筆者が立命館大学でのサービス・ラーニングの取り組みを紹介して、市民性（シチズンシップ）の涵養のための教育として地域社会と共にプロジェクトを展開していると説明した際には、「それは果たして大学でやるべきことなのか？」という問いを抱く人もいた。そこで改めて日本においてPBLがどのように位置づけられているのか、具体的な事例を取り上げてみることにしよう。

全学の教養教育として2006年度からProject-Based Learningを推進している同志社大学では、「プロジェクト科目の趣旨に賛同し、学生主体のプロジェクト活動を教導し、支援しようとする担当者を、広く企業・団体・行政・個人などから公募し、応募されたテーマを審査・採択する」というテーマ公募制で展開していることが特徴である（山田，2014，p.22）。採択とされた後には、応募書は大学の非常勤講師（同志社では嘱託講師という職名となる）として任用され、専任教員と共に授業運営にあたる。その枠組みについてはPBL推進支援センターの長を長らく務めてきた山田（2014）によって詳述されており、1セメスターのあいだに(1)決める（プロジェクトの選択）、(2)つかむ（ゲストスピーカーの話題提供やフィールドワークを通した問題発見と課題設定）、(3)深める（課題解決に向け具体的な企画・提案の探究）、(4)伝える（成果報告会での発表）、(5)振り返る（発表後のレポート提出、TA・SA協議会・担当者懇談会などの開催）という5つのフェーズで展開される。

学生と学部を横断する教養教育として展開される同志社大学のPBLに対して、キャリア教育という性格を前面に出して展開しているのが京都産業大学の「O/OCF-PBL（On/Off Campus Fusion-Project Based Learning）」である。ホームページには「課題解決活動を通じて実社会で必要となる心構えや能力を身につけるために設定された科目」で「大学での学び（On Campus）と実社会（Off Campus）での学びとを融合（Fusion）させた、実践指向型の課題解決型学習（PBL：Project Based Learning）にて、1年次から3年次まで体系的な能力伸長を図るもの」と説明がなされている。「O/OCF-PBL1」（教員が課題を設定）と「O/OCF-PBL2」と「O/OCF-PBL3」（共に企業や行政機関から課題が提供）は各学年に対応し、いわゆるナンバリングがなされた科目として開講されているため、1を履修した上で2を、2を履修した上で3を、という指定がなされている。それらの知見はナカニシヤ出版より『課題解決型授業への挑戦：プロジェクト・ベースト・ラーニングの実践と評価』としてまとめられているので、参照されたい。

2つの大学に共通しているのは、PBLを「Project-Based Learning」として展開しているということと、課題解決という表現を用いていることである。逆に言えば、同志社大学での教養教育としてのPBLも、京都産業大学の共通教育の一環によるキャリア教育としてのPBLも、Problem-Based Learningとしては展開されていない。このことについて、前掲書で中沢・松尾（2017）が「『PBL』といわれる学習形態で最初に注意が必要な点は、用語の混乱である」と前置きした上で、次のようにProject-Based LearningとProblem-Based Learning を区別している。少し長くなるが、引用してみよう。

> Problem-Based Learningは、医学・看護学・法律実践・経営学・工学などのように、実践の場における問題解決が職業的スキルとして重視される学問領域を中心として取り扱われている。（中略）Problem-Based LearningをProject-Based Learningと比較した場合、Problem-Based

> Learningは「実践の場における問題解決が職業的スキルとして重視される学問領域で取り扱われている」ことが特徴となる。つまり、「専門人材の課題解決能力の育成」を目標としたものが、その中心であるということである。
>
> 一方、Project-Based Learningでは、民間企業等が実際に抱える現在進行形の課題が、少人数のグループ（学習者群）に与えられ、学習者（群）が、関連知識の調査、対話、内省を通じて実際の課題解決に当たる学習形態である。（p.17）

この区別に基づくなら、実社会の問題に対して、学習者が取り扱う課題を教員が提示するものがProblem-Based Learning、実社会から提供されるのがProblem-Based Learningという位置づけられることになる。ただし、課題という言葉を巡って、一考する余地があることを指摘しておきたい。PBLという略語を巡ってProblemかProjectかという議論ができるように、教育実践に課題解決という表現を用いることに問題提起を行ってみたい。そのために、ソーシャル・イノベーションという観点で問題と課題とを区別している西村（2014）による整理を紹介する。

> 「問題」とは「解決が求められる困った状況」のことで、例えば「集落の後継者がいない、足りない」、「子どもたちの遊びの体験が不足している」、「公共交通が不便で、買い物や病院への通院に困っている」というようなもので、これらを「ボヤキ」と呼ぶこととしよう。一方で「課題」のほうは、その解決のために設定するもので「集落の次の担い手をつくろう」、「子どもたちがのびのびと遊べる機会や空間を充実させよう」、「住民の足を確保しよう」というもので、これらは「ヤル気」と呼ぶこととする。こうしたねがいは「解決」ではなく「達成」されるべきものだ。そして、いつまでも「ボヤキ」にとどまっていては社会は変わらない。（p.9）

この点を踏まえるなら、課題解決という活動は、論理的には成立しないということになる。それでも、前掲のPBLの議論や、地域連携、社会連携、またNPOやNGO・ボランティアの領域などで課題解決と呼ばれる理由は、予め課題を設定する側と、そうして提示されたお題に向き合う側が一定の到達点に向けて活動するという役割分担の構図が確かなものになっているのではなかろうか。そこには、活動テーマを提供「する側」（地域社会）と「される側」（大学）の関係が成立し、その関係の入れ子構造として「させる側」（教員）と「させられる側」（学生）という関係が成立してしまう可能性もある。それゆえ、そうした「させる—させられる」という性質が強くならないよう、学生たちには学習と活動に対する主体性が強調されるのだろう。

実際、足立ら（2015）の実践報告・調査報告では「企業からの課題解決」という経験を経るという位置づけのはずが、目的が見失われ、『いかに企業からの課題解決を効果的に行うか』にのみ焦点をあわせ授業が進行している」という課題を指摘しつつ、「『自己成長という目的意識』と『責任感』が主体性の高さを生み、主体性の高さは、出来事を意味のある『深い経験』として吸収させ」、「『深い経験』は今後の人生に応用できる抽象度の高い『深い学び』に繋がっている」と整理している。ここから、筆者の話題提供の際に投げかけられた、PBLの成果物に対する位置づけに関する議論を深める手がかりも見出せそうだ。

4. 学習者の態度の変容をどう支えるか

以上、今回は筆者が話題提供を行った研究会での意見交換の内容を紹介しつつ、改めてPBLにまつわる概念について、日本の大学での文脈に即して議論を展開してきた。研究会では開学以来PO-PBLを展開してきたオールボー大学の客員研究員として、立命館大学のサービス・ラーニングとの比較研究を通して見出した「PBLのはしごモデル」を紹介することにより、学習者の学びのプロセスをどのようにデザインするのかの視点に焦点を当てたが、参加者の関心は学びのシステムに向いたことから、専門科目としてではなく、教養科目として展開している同志社大学と京都産業大学の2つの事例を取り上げた。そこでは「課題解決」という言葉が用いられていることから、課題を設定する地域社会の側と、設定された課題に対する到達点に対して向き合う大学側との関係に焦点を当て、時に学習者が効率性を追求する傾向にあることと、その反動として主体性を喚起する教育者側の関心に着目した。

第4回の連載で述べたとおり、オールボー大学では学部生ではStudy-OrientedなPO-PBLとして知識の獲得に力点が置かれ、大学院修士課程においてはIntervention-OrientedなPO-PBLとして実践の現場の改善を重視した集団的な活動が行われる。その背景にあるのは、専門家となっていくための知的な成熟と経験の醸成をもたらすべく、明確な目的を据えてカリキュラムが構成され、プロジェクトを組む学生たちに適切な指導・監督（スーパーバイズ）がなされるよう、セメスターコーディネーターと呼ばれる役割の教員が、スーパーバイザーとなる教員を選定・認定して質保障をしているという、学びのスタイルの精緻化である。それが、ProblemとProjectの2つの語を織り込んだオールボー大学のPBLにおいて特筆すべき点とも言えよう。

では、PBLという学びのシステムにおける学びのスタイルの特徴をより洗練させていくという実践的な課題に対し、どのような観点から接近すればよいのか。そのためのヒントが、連載第4回の結語で触れたとおり、PANPBL2018で積極的にコメントをいただいたアイルランド・ダブリン大学のTerry Barrett准教授の近著にあると捉えている。例えば、図1に示したモデルには「フロー体験」(Csikszentmihalyi, 1990)や、「ハード・ファン」[1]など、学習心理学の要素を盛り込まれている。そこで次回は、このモデルの解題を中心に、PBLにおける学習者の学びのスタイルに、より深い関心を向けていく。

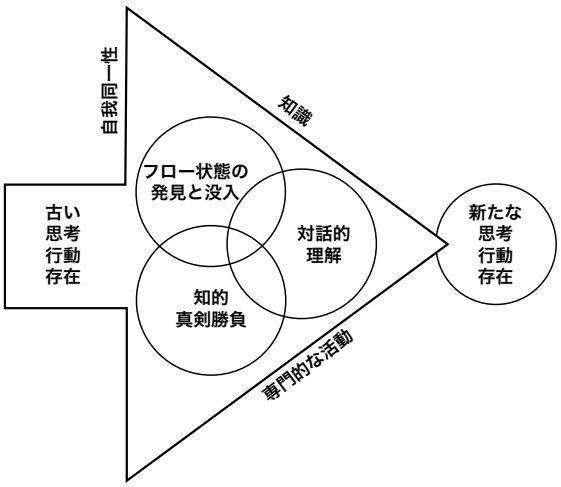


図1：Problem-Based Learningに関する
学生の発話を理解するためのモデル
（Barret, 2017, p.232、訳は筆者による）

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

足立晋平・中尾憲司・山村彩・伊吹勇亮. (2015) PBL型授業において主体性が経験学習に与える影響. 高等教育フォーラム, 5, 159-167.

Barret, T. (2017) A New Model of Problem-based learning: Inspiring Concepts, Practice Strategies and Case Studies from Higher Education. Maynooth: All Ireland Society for Higher Education (AISHE).

Csikszentmihalyi, M. (1990) Flow: The Psychology of Optimal Experience. New York: Harper and Row. 今村浩明(訳), (1995) フロー体験――喜びの現象学. 世界思想社.

Kolmos, A. (1996). Reflections on Project Work and Problem-based Learning. European Journal of Engineering Education, 21(2), 141-148.

京都産業大学. (n.d.) 京都産業大学産学協働教育科目群（PBL系）. Retrieved from http://www.kyoto-su.ac.jp/features/career/s_pbl.html (May 31, 2018.)

中原淳. (2012) シリアス・ファン（Serious Fan）な研修をめざして――「研修参加者の満足度」という指標を考える. Retrieved from http://www.nakahara-lab.net/2012/11/serious_fan.html (May 31, 2018.)

中沢正恵・松尾智晶. (2017) 日本型コーオプ教育におけるPBLの位置づけ. 後藤 文彦(監修)・伊吹 勇亮・木原 麻子(編), 課題解決型授業への挑戦――プロジェクト・ベースド・ラーニングの実践と評価 (第2章, pp. 11-23). ナカニシヤ出版.

西村仁志. (編) (2014) ソーシャル・イノベーションが拓く世界――身近な社会問題解決のためのトピックス30. 法律文化社.

山田和人. (2014) アクティブ・ラーニングとしてのPBL――「同志社大学プロジェクト科目」(テーマ公募制・教養教育科目)の試み. 大学教育と情報, 2014年度(2), 21-27.

【注】

[1] モデルの翻訳にあたり、原典では「Hard Fun」とあった箇所、中原（2012）による訳出案の「知的真剣勝負」を採用した。それは、次の論考に合点がいったためである。「『ハード・ファン（Hard fun）』という言葉は、本来、オキシモロン（形容矛盾）です。なぜなら、「シリアス」や「ハード」という言葉と、「ファン」という言葉は、一見、反対語のようであり、「ひとつの言葉」として結びつかないように感じるからです。しかし、この「形容矛盾」にこそ、研修やワークショップがめざすべきものがあるような気が僕はしています。」

接骨院に心理学を入れてみた〔4〕

寺田接骨院　寺田弘志

イエス・キリストは、手をかざすだけで、歩けなかった者を歩けるようにしたと言います。
そういう奇跡が、神様の起こしたものなのか、そうでないのかは、私にはわかりません。でも、神様の力があってもなくても、そういう奇跡が起こりうることは確かです。



ＪＲ茨木駅近くの接骨院が私の仕事場です。そこで最近、こんなことがありました。
ある患者さんは、福山雅治の熱烈なファンです。膝と肩が痛くて、当院に通われていました。
「膝が痛いのに、コンサートに行けるかな」、「肩が痛いけれど、（タオルを振る曲のときに）タオルが振れるかな」と心配していらっしゃいました。
しかしコンサートを最前列で聴いていたら、痛みが完全に消えてし

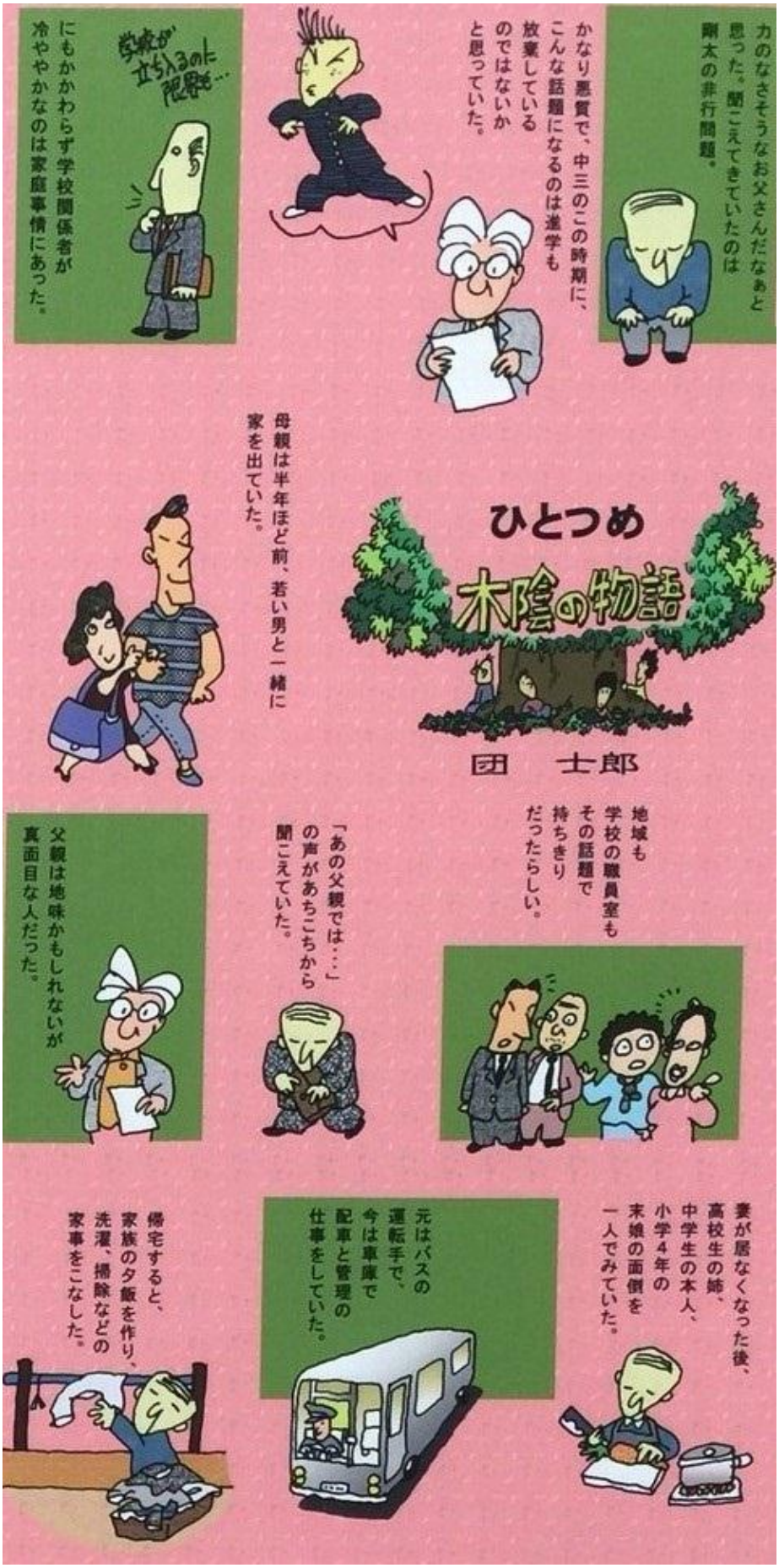
まったそうです。もちろん、タオルを振っても大丈夫でした。
数日たつと痛みがもどってしまいましたが、数カ月後にまたコンサートに行かれた際は、膝の腫れが引くという奇跡が起きました。

「信じるものは救われる」と言いますが、誰かを信じ、とてもありがたい存在と心底思っている人なら、その人が手をかざしたり、ほほ笑んだりしてくれるだけで、恍惚となってもおかしくありません。
恍惚状態では脳内モルヒネと呼ばれるエンドルフィンやドーパミン・オキシトシン・セロトニンなどが、脳内に大量に生成されると言います。
これらの物質には、強力な消炎・鎮痛作用と、多幸感をもたらす作用があり、自然回復力も高まると考えられます。その結果、痛みが消え、歩けなかった人が歩けるようになるのです。
このような現象は、趣味に熱中したり、ペットをかわいがったり、恋愛したり、さまざまな心理的な営みの中でもみられます。

これは余談ですが、「レントゲンでも血液検査でも異常が見つからないから、あなたの痛みは気のせいです。趣味を持ったり、ペットを飼ったりしなさい」と患者さんに言うお医者さんがいらっしゃるようです。
「心理的なことで痛みが軽くなった事例があるから、画像診断や血液検査で異常が見つからない痛みは心理的なものだ」という主張です。
「逆は必ずしも真ならず」で、詭弁（きべん）なのですが、それをお医者さんがテレビ番組で言ったりすると、それを信じる人も少なくないようです。
「家族や知人に『痛いのは気のせいじゃない』、『趣味を持ったり、ペットを飼ったりすると良くなるってテレビでやってたよ』と言われた」という話を、何人かの患者さんから聞いたことがあります。

●最近「神わざ」と思ったこと●
立命館大学茨木キャンパスで１月から２月にかけて「団士郎家族漫画展」が開催されていました。対人援助学に関わられている皆さんならご存知のことと思いますが、団先生は家族療法家でもあり、漫画家でもあります。
その漫画展で「ひとつめ」というタイトルのケースが紹介されていました。（まだお読みでない方のために、団先生の了解を得て、次ページ以降に掲載させていただきました。不鮮明とは思いますが、ぜひ、お目通しください。）

母親が出て行き、父親は一生懸命三人の子どもを育てているけれども、中学３年の長男が悪質な非行



問題を起こしていました。

高校生の姉と、小学４年の妹、父親、そして中３の本人が団先生と家族面接をしました。

面接の前半で行き詰まりを感じた団先生は、後半で、「今、心配なこと、解決したいことと言ったらどんなことでしょう？　各自三つ考えてみてください」と、それぞれに紙と鉛筆をわたします。

妹、姉、本人が、「ひとつめ」の心配なことを答えたところで面接を終了。

その後、長男の非行が治まり、受験勉強を始めたというのです。

もし、団先生が学校の先生のように、説得とか説教で非行をやめさせようとしていたら、長男は余計に非行に走っていたかもしれません。非行に走るような子は、親や先生に言われて、その指示に従うのをいやがります。

妹や姉の心配なことが長男の非行以外のことだったから、長男は心を開いたのかもしれません。



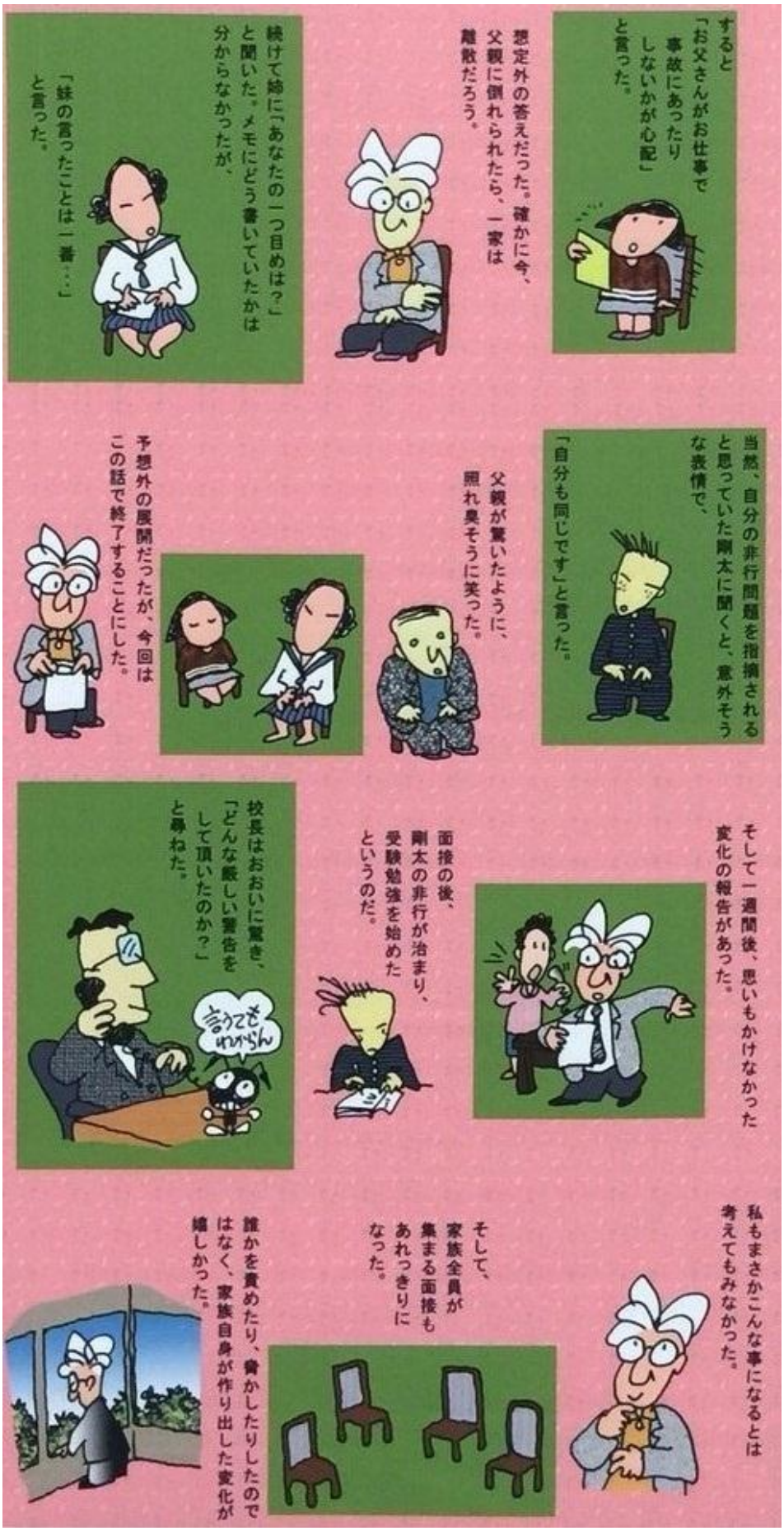
家族療法では「非行の原因は何だと思いますか？」というような、原因追求、犯人探しをする質問はしません。むしろこのケースのように「解決したいことは何ですか？」「どうなりたいですか？」というような解決志向、未来志向の質問をします。

その答えをもとに指示やアドバイスを出すことが多いと思うのですが、団先生は質問をしただけで、何の指示もせずに、家族自身に解決させていらっしゃいます。

私は「これぞ神わざ」と感心しました。

整形外科や理学療法の分野では、原因を探るために痛みを誘発するような検査（痛がらせる検査）がよく用いられます。

当院では、原因を究明する検査以上に、解決方法を見つける検査（どうしたら痛くなくなる



かをうかがう質問）を重点的におこなっています。これは以前家族療法を仕事にしていた影響があると思います。

解決方法がわかると、ちょっと押したりさすったりするだけで痛みが消えてしまうことが少なくありません。

イエス・キリストや福山雅治のように手も触れずに痛みをとることや、団先生のように質問するだけで治すことはできませんが、解決方法を見つける検査を使えば、従来の原因を探る検査よりもずっと早く痛みをとることができるのです。

現代社会を『関係性』という観点から考える

④　「共同体」における「排除」と「包摂」という関係性

～「遠野物語」から考える　（前半）～

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦　恵子

「関係性」をキーワードに現代社会について考察するこの連載ですが，今回と次回は，私が１０代から愛読してきた『遠野物語』(柳田国男）から「共同体」における「排除」と「包摂」という関係性を考えてみたいと思っています。

民俗学という切り口から対人援助を論じることはかなり異色と思われますが，おつきあい頂ければ幸いです。かなりの長文となりますので，今号と次号に合わせての二部構成とさせていただきます。

１『遠野物語』『遠野物語拾遺』初読時の衝撃

私が初めて『遠野物語』『遠野物語拾遺』(注１）に接したのは，中学生時代だったと記憶しています。序文に記された「願わくばこれを語りて平地人を戦慄せしめよ。」という柳田国男の言葉とともに私の心に刻み込まれたものは，時間的にも距離的にも膨大な隔たりのある北東北の一地方で起きる様々な怪異だけではなく，怪異が立ち現れる異界との境界を常に意識しながら暮らす「共同体」の日常や，そこで生活する人々の意識が簡潔な文章の行間から生き生きと立ち上ってくることそのものでした。

大学卒業まで私は大阪の下町で両親と３人で慎ましい生活を送っていました。会社員の父と専業主婦の母，そして一人っ子の私という，典型的な都市部の核家族の生活形態です。当時の大阪府では人権教育に特に力を入れていて，出自その他で人を社会から排除することの愚かしさについては小学校入学時から多くを学ぶ機会に恵まれてはいました。しかし，ある程度の年齢になれば，ぬぐい去れぬ差別と排除が社会に厳然として存在することにつき，否応なく目にし耳にすることもまた現実でした。

そうしたある意味多感な時期に出会った『遠野物語』『遠野物語拾遺』は，交通の要衝として「煙花の地」と称されるその一方で，「飢饉」を称して「ガシ」と呼ぶほどの厳しい自然環境や貧しさの中にあって，「共同体の中で生きる」ことによって辛うじてその命を守られつつ，「共同体」の平穏や規範を乱すもの，「共同体」の存続に利するに値しないと判断されるものを排除することによって，「共同体」全体を外界から守りながらその生活を存続させてきた，厳しくも生々しい暮らしの記録であるように当時の私には感じられました。

例えば，第五十五話の「河童の子殺し」やそれに続く第五十六話の「河童の子捨て」からは，「共同体」の外に在る者との接触，ことに子孫の存続に関わる生殖に関する行為に関する教訓的要素が，「共同体」の外界にあって

忌むべき存在である河童との交わりというエピソードを用いて記されているように，当時の私は解釈していました。更に踏み込めば，かつては人口調整のための手段として半ば公然として行われていたという「間引き」の歴史であるとも読むことができるとも考えていました。

また，第百十一等の「デンデラ野」や「ダンノハラ」は，各地に残る捨老伝説の一つの実例として言及されているものであると考えていました。

これらの一話一話は，高名な民俗学者である柳田国男が「話上手にはあらざれども誠実なる人」たる遠野出身の佐々木喜善の語りを「一字一句をも加減せず感じたるままを書」いたものであるだけに，単なる「昔話」の域に留まらないものだと初読時の私には感じられ，その後柳田邦男や民俗学に関する書籍を手にする契機となりました。しかし一女子中学生にとって，「遠野物語」やこれに関連する書籍は，「共同体」の中で生きる人々の歴史において，「共同体」の理念やその存続に反するものを「共同体」の境界外にある異界へと「排除」していくという，いわば「社会的排除」の文脈の中でしか読み解くことができていませんでした。同年代の友人や教師からは，読書については早熟で多読だと言われることも少なくありませんでしたが，初読時の「読み方」を３０年以上経過した今になって振り返ってみると，少ない人生経験から得た既存の知識や理念の枠組みに，「遠野物語」「遠野物語拾遺」を押し込めようとする，いかにも表層的で未熟な読み方であったかと，今思えば汗顔の至りでもあります。

２「可視化されていない」だけで厳然としてある現実の老いや死，病いや障害，貧困について

私事になりますが，私は自身の就くべき職業はかなり早い段階から国語科教員と思い定めていました。しかし，戦後第３次少年非行のピークと称される時期及びその後の厳しい管理教育の時代が到来した昭和５５年代後期に義務教育を受けたことにより，教育者を目指すことに逡巡が生じ，高校卒業間近に進路を変更し，より幅広い対人援助職を志向して社会福祉学科のある大学で学ぶことになりました。

進学した大学では高齢者福祉から障害者福祉，児童福祉はもちろんのこと，社会学や社会病理学などを幅広く学びましたが，その過程で「あえて可視化されていない」「むしろ日常生活から隔絶され隠蔽されている」だけで厳然としてある現実の老いや死，病いや障害の姿に直面することになりました。

例えば，「認知症のある高齢者でも積極的に受入れている」という評判の病院が，実は高齢者福祉の実務家の間においては「あの病院に入院すれば（ケアの質が低いために，亡くなるまで）〇か月コース」ということが囁かれていることを知りました。行き場のない障害者の方々が暮らす施設での暮らしを目の当たりにし，実習先の児童相談所では「人生山あり谷あり，だからお前も頑張れって先生たちは言うんや。だけど，自分の人生なんて下り坂ばっかり。」という非行少年の嘆きを耳にしました。

一方で当時の社会は，バブル経済の余韻とともに個人主義を追求する傾向がより強まっていたように記憶しています。厚生労働省による国民生活基礎調査の概況において，単独世帯・核家族の増加とともに三世代同居世帯の減少が当時から既に指摘され，「超高齢化社会」の到来がある種の危機感を持って予想されていた時期と重なります。

そうした社会の動きに社会情勢に対応するため，私が大学に入学した平成元年には「ゴールドプラン」（高齢者保健福祉推進１０か年戦略）が政府の方針として打ち出され，市町村における在宅福祉対策の緊急実施，施設の緊急設備が図られるようになりました。これはいわば高齢化社会への対策の切り札ともいえるものでしたが，予想以上に早いスピードで進展する高齢化には対応しきれず，５年後に全面改正を余儀なくされ，今度は在宅介護

の充実に重点を置いた「新ゴールドプラン」（高齢者保健福祉計画　数値目標としてホームヘルパー１７万人の確保，訪問介護ステーション５，０００カ所の設置が掲げられた）が打ち出されるに至りました。昭和６２年から「社会福祉士」「介護福祉士」の国家資格としての認定も開始され，専門的訓練を受けた福祉専門職の養成や専門的施設の整備にも力が入れられることになりました。私が学んだ学科においても社会福祉士の養成課程を有していたため，私もこの養成課程に沿った多くの科目を履修しました。

しかし，対人援助の専門職としての基本的知識や技能を身につけることを目的とした授業の時間数と比較しても，「共同体」「地域社会」の相互援助機能をいかにして高めていくかというコミュニティ・ソーシャルワークを学ぶ機会は決して多いとは言えませんでした。

そうした中，今も生涯の師と仰ぐ高原正興先生（京都府立大学教授から京都橘大学教授。日本社会病理学会会長）による「社会学」「社会病理」に関する授業と出会ったことがきっかけとなり，「共同体」からの排除や，社会的包摂について学び考える機会を得たことが，職業選択を含めた私の人生の大きなターニングポイントとなったといっても過言ではありません。

大学での学びにおいては，高齢者施設や障害者施設に対するニンビズム（Not　In　My Back　Yard）の事例にも多く接しました。その過程で，老いや死，病いや障害，貧困といった様々な事象は，この社会の中に厳然としてあるにも関わらず，巧みに不可視化され，特に意識をせずにいればそれらを自分とは関係がないものとして生活することも可能な社会になっているということに嫌でも気付かざるを得ませんでした。

老いや死，病いや障害，貧困の存在を「共同体」における日常生活から排除し，「専門家による専門的なケア」という名目のもとに，「共同体」の外にある「施設」など押しやって一般市民に可視化しない社会は，それらについて真剣に考える機会を市民から奪い，「共同体」における連携の一層の脆弱化や市民社会の成熟を阻害する結果を招くリスクが大きいと感じたのもこの頃です。

こうした大学時代，私は幾度目かの『遠野物語』『遠野物語拾遺』を通読を終え，そこに描かれる遠野の地は，「共同体」外の「異界」は橋などを「共同体」との境界線としながらも，「共同体」とは実は濃密に接し，一部は両者が溶け合うように共存しているということ，時に怪異という形をとって「共同体」に訪れる様々な事象により，「共同体」から排除したモノが共同体の成員と遭遇する，つまり可視化されているということにようやく気付くに至りました。

これに対し，「共同体」における日常生活から押しやられた現代社会の「専門家の領域」は，「専門家」と称される人々の時に誤った認識や自負（素人～家族など～の介入を排除してしまうことなど）により，ひとたび「外部に対して閉じて」しまえば，「共同体」側からはその内部をうかがい知ることすらできなくなってしまう危険性が常にあると考えます。

大学での学びと気付きに基づいた上で，改めて『遠野物語』『遠野物語拾遺』を読み返してみると，それは単なる「社会的排除の物語」ではなく，老いや死，病いや障害，貧困をも，たとえ混沌とした形であっても「共同体」の中に孕んで営まれてきた歴史そのものであると気付いたのです、

3　老いや死，病いや障害，貧困などを共同体内で可視化してきた遠野

柳田国男の功労については数々の優れた論考が残されかつ今も生産されつつあり，民俗学を専門とする者ではない私があえて論述することには逡巡もあります。

しかし，社会福祉を学ぶ過程で自身の専攻を「社会病理学」とし，卒業後は犯罪・非行を行った人の社会復帰支援を主たる業務とし，「刑事政策のアンカー」「社会への入口支援」とも称される「更生保護」の仕事に従事しつ

つ，認定社会福祉士・認定精神保健福祉士として「司法と福祉」との連携をライフワークとし，実務家として各種ボランティア活動と研究を続けている者として，社会病理学的な視点，特に「関係性」という視点からここに私論を述べることをお許しいただきたいと思います。

『遠野物語』『遠野物語拾遺』などの柳田国男の一連の書籍で語られる「遠野」という「共同体」の特徴は，「老いや死，病や障害，貧困などを可視化し，それを共同体内で包摂していること。一見『異界』として存在するものであっても，それは現実世界と濃密に接していることを明確化していること。」「数々の著作が結果的に人々の生活の場としての『共同体』の役割について多くの示唆を与えていること。」の２点にあると現在の私は考えています。

前者については，実際に「遠野」を訪れて，「デンデラ野」や「ダンノハラ」の地に立ち，そこから周囲を一望すれば容易に理解できます。「デンデラ野」は，日常世界である「共同体」との境界線を示すと思われる「橋」によって「共同体」から一見隔絶されているように思われますが，共同体から完全に切り離された土地ではなく，往還はたやすいように思われます。『パパヤチニカ　Vol.２２　２００８春号　特集　デンデラノ　境界の野を吹く風』（注２）に掲載された多くの土地の古老の方々も，「デンデラ野」は決して姥捨ての土地ではないことを明確に指摘されています。地元の郷土史研究者である鈴木重三氏も，「デンデラ野」について「姥捨ての場か，生かし場か」と称し，「凶作や飢饉という非常事態に，村を守りその老人たちも生きながらえさせるための智恵として生み出された場だったのでは」と指摘しておられます。（注２）

また「ダンノハラ」もまた，集落，あるいは家屋敷の間近に祖先の墓があり，各地で見られた祖霊信仰の１つの形態として考えられます。

また，後者についても，一見煩瑣に思われる共同体のルールや行事，忌み事などの定めが，実は女性や子どもといった「共同体」内の弱者（女性については後に柳田国男は『妹の力』を世に出し，女性特有の力について分析をしていることから，必ずしも弱者とは言えないのですが）を守るシステムとなっていることがその好例といえます。『遠野物語拾遺』の最後半部は様々な行事や風習が細かに描写されていますが（注１），「共同体」の風習がここまで細やかに伝承されてきたのは，「共同体」内部の結束力が強固であったためでしょうし，何よりも，異界と濃密に接し時に人知を越えた怪異にも多々遭遇するがゆえに，ヒトとしての慢心を捨て，祖先を崇め，「人知を越えた現象」に畏敬の念を払って生き延びてきた歴史があったからであると考えます。

そして，これら２点のことが遠野に住まう人々に可能であったのは，現代社会以上により身近な現実であった老いや死，病いや障害，貧困などから目を逸らすのではなく，むしろそうした現実について，個人の自己責任のみに帰することなく「共同体」の営みのなかに包摂し，少しでも「共同体」の成員が生き延びるべく智恵を絞り，数々の伝承として後世に伝える努力を重ねてきたからではないだろうかと考えます。

４　老いや死，病いや障害，貧困などを不可視化する現代社会の弊害

ここでは，これまでの考察をもとに，『遠野物語』が世に出されてから百余年が過ぎた現代社会の在り様について考察してみたいと思います。

遠野物語の時代とは異なり，戦後の高度経済成長期以降，老いや死，病いや障害，貧困などは，その解決を医療・福祉機関などの専門職や専門機関に委ねることにより，地域社会の日常生活から不可視化され，時にそれらが何らかの形で現実の相貌を見せても，「自己責任」というレッテルを貼って「共同体」から排除することによって，一見平穏で豊かな

社会であろうとしてきたのではないかと思われてなりません。

例えば，「三世代同居率」という指標１つをとっても著しく低下しています。「平成２７年　国民生活基礎調査の概況」においても，２１世紀に入ってから（すなわち平成１３年以降），単独世帯は２５０万世帯強，核家族は約３００万世帯増加していることに対し，三世代世帯は１００万世帯以上減少していることが指摘されています。これは，祖父母世代と共に生活し「老い」が何たるものかを，日常的な生活の中で体感する機会を，結果的に子どもたちから奪うことになってはいないでしょうか。

一方で，平成１２年の介護保険制度の導入は，家族のみに介護の負担を求めない「介護の社会化」の時代の到来として大いに期待を集めましたが，制度利用については必ずしも初期の目的を達したとはいえず，本当に必要な人が必要なサービスにつながっているかという点では疑問なしとしません。これは，１６年間の実母の介護，今も続いている義父の介護といった家族介護従事者としての私の経験，「認知症の人と家族の会」の会員としての経験，また学生時代から家族療法を学び続け，後述するような家族支援を実践している私の経験から導き出された実感でもあります。

『介護殺人』『介護殺人の予防～介護者支援の視点から』などの著作により，介護殺人に関する綿密な分析を行い，介護者支援の具体的な方策の必要性を世に問うた湯原（加藤）悦子氏も，「介護保険では法制度上，家族を考慮しないことで社会サービスの利用にインセンティブを与え，社会化を促すという方策がとられたのである。」「『あえて家族介護を評価しない』という戦略によって，家族介護が不可視化されたことの問題は大きいと問題提起している。」と述べておられます。（注３）

平成２７年時改正に導入された「介護保険総合事業」の柱である「地域包括ケアシステム」も，「共同体」における地域相互扶助の力が必須とされていますが，それを構築する地域住民の意識改革やマンパワーの問題などクリアすべき課題は多いと考えられます。

疾病についても，超高齢化社会と医療費の増大という現実の前に，高齢者に対する医療に関しては意見が割れている現状があると私は考えています。こと嚥下困難になった高齢者に対する経管栄養（胃瘻など）については，ある著名人がテレビ番組（注４）出演中に「エイリアン」という語句を用いて批判し，特定非営利活動法人 PDN ドクターズネットワーク等から抗議と意見交換の場を求める意見書が提出されるなど社会的に大きな反響を呼びました。（注５）

更には，平成２８年２月には「高齢者は『適当な時に死ぬ義務』を忘れてしまっていませんか？」という刺激的なタイトルで，これもある著名人が「生きる機会や権利は若者に譲って当然」といった論調で，高度な医療サービスの年齢制限などを週刊誌上で提言したことで，大きな議論を呼んだことも記憶に新しいものです。（注６）

これらについては，社会全体が貧しく，働けなくなった者を家族や「共同体」で養う余力がなく，「ただ家に居て食ってる奴は『くらてぁす』（食うだけで働かないこと）って喋られた。」（『パパヤチニカ　Vol.２２　２００８春号　特集　デンデラノ　境界の野を吹く風』１６頁　菊池富雄氏の言葉）（注２）という時代から根強くある「働かざるもの食うべからず」という感覚が今もって表れていると感じざるを得ません。

振り返って我が身の経験を顧みると，国家公務員として異動を重ねながら平成２６年４月，１０年の在宅介護を含む１６年間の介護の後に実母を看送りました。平成２５年２月には実母は嚥下障害のために中心静脈栄養を施され，それまで入所していた特別養護老人ホームからを大阪の病院に搬送された実母を，中心静脈栄養などの処置を施された状態のまま民間救急のサポートを得て空路で移送し，その後療養型病床を転々としました。配偶者と十分に話し合った末の決断でしたが，東日

本大震災で義父母双方の本家が流出し義父母方も半壊するという被害を受けてから２年も立たない間に，少なくない費用をかけてこうしたターミナルケアの方法を選択したことについては，ある種の後ろめたさのようなものが頭を離れませんでした。義父の介護も同時に行っていたこと，何よりも土地の農家の生まれで苦労を重ねてきた義母から常々「枕もとのにぎりめしを自分で食えなくなったら人間はしまいだ。延命措置など無駄遣いだ。」と聞く機会も少なくなく，実母が死去した後ですらこれらの措置，とりわけ中心静脈栄養の事実を伝えることはできていないという苦い思いがあります。しかし実際には，多くの高齢者が病院で死を迎えている現状があります。

高齢者以外の疾病や障害に関しても，特に精神科病院への平均入院日数・入院患者は他の診療科目に比べて長期かつ多数にわたっています。（注７）そして彼らの地域生活移行については，障害者総合支援法において地域生活移行支援事業などが創設されても，スムーズに地域に溶け込んでいくことには未だ課題が多いと感じています。

また，平成２８年７月に発生した戦後最悪の多量殺傷事件では，隔離的な施設で多数の重度障害者を「収容保護」する問題性が議論されるに至っています。

つまり疾病や障害を持つ方々は，施設や病院などに「収容」され，彼らが「あたりまえの生活を求めて」地域生活への移行を望んでも，様々な地域コンフリクトに直面することも少なくない現状があります。

私自身も業務を通してこうした方々の地域移行の困難性を実感する機会は少なくありません。また，業務外のボランティア活動を続けるなかで，精神障害者のグループホームの建設・移転に際し，地域の方々との話し合いの場で厳しい言葉を浴びた経験も一度ではありません。そのなかで考えさせられたのは，疾病や障害を抱えた方を地域社会のなかに内包し「共に生きる」経験が欠如しているために，彼らの状況を「知らない」ことということと自体が，恐怖感の醸成や社会的排除の意識につながっているのではないかということです。

貧困に関しては，厚生労働省が平成２５年７月１５日にまとめた国民生活基礎調査で，平均的な所得の半分を下回る世帯で暮らす１８歳未満の子供の割合を示す「子供の貧困率」が，平成２３年に１６．３％に至り，過去最悪を更新したことが明らかになりました。「６人に１人の子どもが貧困の中で育つ」状況についても，広く周知されるようになりました。

多くの心ある人が「子ども食堂」など地域で子どもを育む活動を立ち上げるその一方で，子どもの貧困ですら「自己責任」を追及する向きすらあります。生活に困窮し進学費用の支援を訴える子どもの声を特集した番組が放映された直後，その子どもが趣味のグッズを持っていたことなどを理由に，彼らをインターネットで手厳しく非難するといった現象も一例といえるでしょう。（注８）

また，『遠野物語』『遠野物語拾遺』などでも多く見受けられる「子殺し」については，児童虐待による死亡事件数は６４件・７１人（平成２７年度）であり，うち心中以外の事例は４３件４４人です。心中以外の虐待死の場合は６割以上の被害児童が０歳児となっています。児童虐待相談対応件数も，厚生労働省が平成２８年８月に公表した速報値によると，平成２７年度の児童相談所の受付件数は１０万３，２６０件となっています。（注９）。

こうした事態に対して，心ある人々はそれぞれの現場で粉骨砕身している一方で，現代の地域社会全般においては，リアルな「共同体」としての相互扶助機能の脆弱化が進行する反面，自分のライフスタイルや考え方と異なるものに対しては無関心を保つだけでは足りず，強い拒否反応や攻撃をもって対応し，結果的には集団の同質化を志向するという極めてバランスの悪い状態となっていると感じることもあります。

こうした状態のなか，「共同体」からの排除の対象とされやすいのは，「共同体」の運営

や存続にとって特に経済的なリスクとなりやすい存在（高齢者，障害者など）や，共同体のメンバーの不安を煽る可能性の存在（精神障害者，刑務所出所者など）ではないでしょうか。

より具体的に考察を勧めるために，こうした「社会的排除」を象徴する事例・事象を以下に２事例をあげさせていただきます。

（１）「静養ホーム・たまゆら」火災事件

平成２１年３月１９日深夜，群馬県渋川市所在の「静養ホーム・たまゆら」において火災が発生，入居者１６名中１０名が亡くなる惨事となりました。「静養ホーム・たまゆら」は実態としては有料老人ホームですが，渋川市には所定の届け出がなされておらず，スプリンクラーの設置がなされていなかったと報じられています。（注１０）

平成２８年１１月３日，特定非営利活動法人自立支援センターふるさとの会主催（共催：支援付き住宅推進会議　後援：厚生労働省関東甲信越厚生局）による「ふるさとの会・支援付き住宅推進会議共催シンポジウム『地域に支えられ，地域を支える～地域包括ケアシステムの社会資源として～』」が開催されました。このシンポジウムは「静養ホーム・たまゆら」火災を忘れることなく，これからの高齢者の地域生活の在り方を考えるため，毎年開催されているものです。平成２８年度は冒頭で「支援付き住宅再考」と題して高橋紘士高齢者住宅財団理事長より，２つのケアパラダイム，すなわち社会防衛に主眼を置いた「排除・隔離モデル」と，ノーマライゼーションとコミュニティケアに主眼を置いた「包摂モデル」の転換と対立が改めて指摘されました。その後行われたパネルディスカッション「たまゆらの悲劇をくりかえさない～共生社会の実現に向けて」においては，よき隣人どうしが力を出し合い楽しく住み続けられる地域づくりとしての「地域善隣事業」が提言されています。（注１１）

（２）社会的排除が生み出す高齢者犯罪～三浦恵子「高齢者犯罪」『関係性の社会病理』（学文社：平成２７年度）より抜粋（注１２）

『平成２０年版犯罪白書』の特集「高齢犯罪者の実態と処遇」は，「近年，高齢犯罪者の増加が著しい。」という一文で始まっています。その言葉どおり，平成１９年の一般刑法犯検挙人員，一般刑法犯起訴人員，新受刑者数，保護観察新規受理人員(仮釈放者及び保護観察付執行猶予者)のという４つの手続段階の全てにおいて，高齢犯罪者の実数と高齢人口比（高齢者人口１０万人当たりの犯罪高齢者人員の比率）が男女ともに大幅に増加していることが判明しました。（２０年版犯罪白書，２１２頁）

『平成２０年版犯罪白書』では，高齢者犯罪の増加について，「単に人口増で説明がつかない以上，そこには，何らかの社会的な原因，世代的な原因，あるいはそれ以外の説明可能な原因がある」（平成２０年版犯罪白書，２２１頁）と「高齢犯罪者研究の必要性」を指摘し，法務総合研究所が行った２つの調査結果が掲載されています。

第１の調査は，検察庁により把握されている昭和２３年～平成１８年９月３０日までの間に判決が確定した者の裁判資料（電算犯歴）のうち，刑法上の過失犯および危険運転致死傷罪ならびに特別法上の道路交通に係る犯罪の犯歴を除いたデータから，初犯者・再犯者の区別をせず１００万人の犯歴を無作為抽出し，さらにそこから調査時点においてほぼ７０歳以上の高齢対象者を抽出し，犯歴がある者が高齢者（６５歳～７０歳）となるまでの最低５年間の追跡調査です。

第２の調査は，罪種別の高齢犯罪者の実態把握のため，東京地方検察庁において一定期間内に受理され第一審において有罪判決の確定または略式命令がなされた者の調査です（平成２０年版犯罪白書，２７０頁）。６５歳以上の犯歴件数５，９２４件中窃盗が１７．１％と最も多く，傷害・暴行１０．９％，廃棄物処理法５．２％がそれに続きます。

特に『平成２０年版犯罪白書』では「高齢の窃盗犯は窃盗を繰り返す傾向が見られる」（平成２０年版犯罪白書，２６６頁 ）と指摘されています。

ここでは，高齢の窃盗事犯者について，その原因や背景について，下記２つの類型に分け検討を行うこととします。

第１の類型は，地縁・血縁を喪失し，公的扶助などのフォーマルな支援にもつながらず，日々糧を得るため万引きに至り受刑を繰り返す高齢犯罪者である。出稼ぎなどで現場を転々と渡り歩くうち故郷や血縁者と縁遠くなり，高齢で体が動けなくなると路上生活に落ち込む過酷な現実があります。私は路上生活者が多い地域の民間支援機関の会員でもありますが，その地域も現在は活気に満ちた頃の面影はなく，地縁・血縁を失った高齢者など弱い立場の人々の寄せ場となっています。

第２の類型は，所持金，事案によっては預貯金や年金を有しながらも食品などの少額の万引きを繰り返す女子高齢犯罪者の存在があります。若年の女子犯罪者の窃盗反復事案の背景には摂食障害がある場合も往々にありますが，女子高齢犯罪者の窃盗事犯は「今後の生活のため節約しなければ」「子どもに迷惑はかけられない」という不安が背景にあるケースが少なくありません。

一方で高齢犯罪者による殺人事件を分析すると，非高齢者とは明らかに異なる特徴があります。『平成２０年版犯罪白書』では高齢犯罪者及び非高齢犯罪者による殺人事犯各５０件を調査していますが，高齢犯罪者による殺人事犯の被害者は２８件が親族，うち９名の女子高齢犯罪者の被害者は全て親族でした。ちなみに非高齢犯罪者による殺人事件の被害者が親族である事犯は５０件中１３件で，高齢犯罪者の殺人事犯で被害者が親族である確率は，非高齢犯罪者のそれより３０％も高い状況にあります（２０年版犯罪白書，３０１ページ)。

参考文献

「犯罪白書　平成２０年版」（法務総合研究所）：文中に注釈あり
（１）柳田国男『遠野物語』『遠野物語拾遺』（角川文庫）
（２）パパヤチニカ編集委員会『パパヤチニカ　Vol.２２　２００８春号　特集　デンデラノ境界の野を吹く風』（２００８年）
（３）湯原悦子『介護殺人の予防～介護者支援の視点から』（２０１７年）１７６ページ
（４）平成２４年２月６日，BS 朝日の番組
（５）特定非営利活動法人 PDN ドクターズネットワーク HP より。なお PDN とは経腸栄養法のひとつである PEG（経皮内視鏡的胃瘻造設術）及び関連する栄養療法全般についての情報提供を行う NPO 法人である。)。
（６）平成２８年２月１日発売『週刊ポスト』（２月８日号）に掲載された曾野綾子氏の主張。
（７）厚生労働省の調査による平成２０年のデータでは平均入院日数３１３日，入院患者は３３．２万人。ただし３１３日はあくまで平均値であり，入院患者の中には入院期間が１０年を越える者も７．２％存在する。
（８）平成２８年８月１８日 NHK ニュース７（参照 :『貧困クライシス国民総「最底辺」社会』藤田孝典　朝日新聞出版　平成２９年３月）
（９）『NHK テキスト社会福祉セミナー　２０１７年４月～９月号』（６４ページ）

（１０）『NHK テキスト社会福祉セミナー　２００９年８月～１１月号』「特集　貧困高齢者の終の棲家はどこに　群馬・高齢者施設「たまゆら火災」の教訓」（１４～２５ページ）
（１１）平成２８年１１月３日，特定非営利活動法人自立支援センターふるさとの会主催「ふるさとの会・支援付き住宅推進会議共催シンポジウム『地域に支えられ，地域を支える～地域包括ケアシステムの社会資源として～』」
（１２）三浦恵子「高齢者犯罪」『関係性の社会病理』（学文社：平成２７年度）

学校における自殺予防（３）
―教師を目指す学生の思うこと―

山梨大学大学院総合研究部教育学域　川本　静香

1．はじめに

学校でいかに自殺予防対策を導入し、勧めることができるのだろうか。こうした問いから、これまでの２回は、学校の中で自殺予防対策（とりわけ自殺予防教育）を導入する必要性や、受け皿となる学校側（現役教師）の声、学校での導入に際して、どういった形がありえるのかということについて議論を進めてきた。理論的に見いだせる可能性や、導入のための工夫について述べてきたが、こうして原稿を書くたびに、子どもの自殺死亡率が横ばいという現実と、学校で自殺予防対策を推進するという理念と、日々さまざまなことが起こる学校現場の「現場感覚」のそれぞれの間にある、ある種の距離感を埋めることの困難さを痛切に感じるばかりである。

さて、私事で恐縮だが、今春、立命館大学から山梨大学に異動した。異動先の山梨大学では教育学部の所属（正しくは、教育学部附属教育実践総合センター）となり、これから教師を目指す学生や現職の先生と、授業や研修会等で関わるようになった。私の主な担当は、教育相談や学校臨床であり、そうした授業を担当させてもらっている。着任してまだ２ヶ月足らずだが、未来の教師たちを前に何ができるのか、日々模索しているところである。そうした職場環境に変わったことが理由のすべてではないが、学校で自殺予防対策を導入、実施する上で、その前段階にある、いわばプレ教師とも言える教育学部の学生が、若年層の自殺・自死の問題についてどのように捉えているのかを把握する必要があるように思われた。

教育学部の学生の多くは、教師になることを目指して（あるいは検討して）、関連科目の履修や、教育実習に日々励んでいる。そう遠くない未来、どこかの学校現場で、教壇に立つであろう彼らが、子どもの自殺・自死の問題についてどのように考えているのかは、それこそ、学校における自殺予防対策を推進する上で、非常に重要なポイントになると思われる。

そこで、筆者が担当する授業の「メンタルヘルス」に関わる内容の際に、自由記述によるアンケート形式で自殺・自死の問題についてどのような考えを持っているのかを尋ね、検討することとした。

2．教師を目指す大学生の自殺・自死に関する考え

教師を志望している学生に対して、「死にたい」という人に対してどのようなイメ

ージを持つか、そして、「死にたい」という人に対して自分ならどのような対応をするか、という２つの質問について、自由記述での回答を求めた。

まず、「死にたい」という人に対してどのようなイメージがあるか、という問いに対して、一定数みられた意見としては、「どこまで本気かわからない、本心がわからない」というものである。日常の生活の中で、死にたいという言葉は、その意図するところが判然としないまでも、会話の中にある程度の頻度で登場する。そのため、「死にたい」と口にした人がどこまで本気なのかを測りかねるというのである。また、これと似たような意見として、「とりあえず口に出しているだけ」や、「かまってほしいのでは」といった意見が見られた。

その他の意見としては、「問題があるなら、そこ（死）に行くまでになぜ他の方法をとらないのか。」「解決手段として愚か」という考えも見受けられた。一方で、「苦しそう」、「メンタルがやられている」「病院に行ったほうがいい」という意見も見られたが、これらに類する回答は全体の２割弱といったところである。

「死にたい」と言う人に対してあなたならどのように対応するか、という質問については、こちらは多くの学生が「話を聞く」と回答していた。とりわけ、「なぜそのように思ったのか」という理由を尋ねると記載した人が大半であった。一方で、少数であったが、「死ぬことが本人の救いになる場合があるので、何もしない」という回答や、「正直、どうしたらいいのかわからない」、「簡単に生きろというのは違うと思う」という回答も見られた。

以上、簡単に自由記述アンケートの内容について紹介した。詳細な分析等については、また別の機会にと思うが、自殺・自死に追い込まれる人に対して、ある種の偏った見方が存在しているような印象を受けた。つまり、「死にたい」と口に出す人の中には本気でない人が含まれている、という考えである。こうした考えの背景に、どのような要因が存在するのかについては詳細な検討を行う必要があるが、こうした考えが根付いているとすれば、「死にたい」という一言は、ある種の疑いを伴って聞き手に届けられ、決してSOSというようには受け取ってもらえない可能性がある、ということである。

自殺予防対策におけるゲートキーパーの養成においては、「死にたい」という声は、「死にたいほどつらい」ということであり、本人のSOSであるため、驚いたり、過剰な反応をしたりせずに、その気持ちを傾聴することが重要であるとしている（厚生労働省，2013）。こうしたゲートキーパー養成のための資料を見ると、「死にたい」という声に対する疑いのまなざしがあることはあまり想定されていないように思われる。しかしながら、今回学生に実施した実アンケートからは、本心なのかわからない、かまってほしいだけ、口にだしているだけ、といった、いわばパフォーマ

ンスとして言っているだけなのでは？という疑いのまなざしの存在が確認された。これは、自傷行為に対する周囲の認識と似ているように思える。自傷行為に対して松本（2012）は、「繰り返される自傷行為を、「誰かの気を引くために」行われる、いわば人騒がせな演技的・操作的行為と思い込んでいる援助者は意外に多い」と指摘する。自傷行為に付随しているこうした偏向した考えは、もしかすると「死にたい」と口にする人に対しても同様の構造を見出すことができるのではないだろうか。そしてそこには、自傷行為と「死にたい」と口にすること、そしてその先にある自殺・自死が同一線上にあり、自傷行為と「死にたい」と口に出すことは、おおよそ近しい位置関係にあるというイメージが、内在化されている可能性が考えられる。もしそうだとすれば、自傷行為に対して誤った考えを修正し、正しい理解を促進するための研修が行われているように、自殺・自死についても、そういったことを念頭においた研修を実施する必要があるように思われる。ちなみに Hawton, Rodham & Evans（2006 松本・河西 監訳，2008）は、自傷行為を行う多くの人は、「1 人きりの状況で行われ、周囲の誰にも告白されない傾向がある」ことを示し、エビデンスにもとづいて自傷行為の演技的・操作的な意味合いを否定し、むしろ孤独な対処方法であることを強調している。「死にたい」も、決して演技的・操作的なものではなく、それを口にすることで他者に本人の苦しさの一端を伝えているものであることを、自傷行為同様に、エビデンスでもって説明をしていく必要があると考えられる。

また、今回のアンケート回答からは、「死にたい」と言う人がメンタルヘルスの問題を有していると想像した学生は全体からみると決して多くなかった。このことが影響しているのか判断は慎重でありたいが、アンケートの回答の中で、「死にたい」と言う人に対する対応に、病院や地域のメンタルヘルスの相談ができる機関へつなぐといった回答をほとんど見ることができなかった。自殺・自死の問題とメンタルヘルスとの関連、とりわけうつ病との関連にもとづく普及啓発活動は、これまでの自殺予防対策の中で力を入れてきた部分であるが、そうした認識はまだ一般に広く行き届いていないと思われる。もちろん、すべてをメンタルヘルスの問題と関連付けることはできないが、自殺・自死に追い込まれる背景として、メンタルヘルスの問題を適切に伝え、そのための専門家との連携の必要性について、啓発活動を行う必要があるだろう。

３．教師志望の学生に対するアプローチ

本稿では、教師を志望する学生の自殺・自死に対する考え方に焦点を当ててきた。アンケートの回答からは、自殺・自死に対する偏向した認識が存在している可能性が示唆された。アンケートの回答やそれに対する考察はいささか精緻に欠ため、今後より精査が必要であるが、少なくとも、自殺

対策基本法や自殺総合対策大綱にあるような学校での自殺予防対策（とりわけ SOS の出し方教育）を導入、推進することを念頭におくと、現場に出る前の教員志望の大学生に対する自殺予防対策に関する研修等は有効であると考えられる。現在、教員志望の大学生を対象とした、そうした研修に関する実践や研究報告は限られたものとなっている。今後そうした取り組みを行うことで、将来的に教育現場での自殺予防対策の推進に寄与できるはずである。

引用文献

厚生労働省（2013）．ゲートキーパー養成研修用テキスト　（Retrieved from http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000128774.html）（閲覧日：2018 年 5 月 29 日）

松本俊彦（2012）自傷行為の理解と援助 精神神経学雑誌，114，983–989.

Hawton, K., Rodham, K., & Evans, E (2006). By Their Own Young Hand: Deliberate Self-harm and Suicidal Ideas in Adolescents. Jessica Kingsley Publisher, London (松本俊彦・河西千秋（監訳）（2008）自傷と自殺―思春期における予防と介入の手引き　金剛出版)

「対人援助通訳の実践から」

第 4 回

飯田奈美子

１．はじめに

前回は、コミュニティ通訳の対象者である、専門家（保健師）がどのように外国人とコミュニケーションをとり、外国人に対する支援をどのように考えているかをアンケート調査の結果をもとにお伝えしました。今回は、母子保健利用者（外国人）の調査結果をお伝えします。第1回・2回では、コミュニティ通訳の対象者として中国帰国者をご紹介しました。京都市では、中国帰国者など定住している外国人や外国にルーツをもつ人々以外に、留学や研究目的で滞在する外国人も多く住んでいます。今回は、留学生の現状を概観しつつ、京都市国際交流協会（行政通訳相談事業１）が母子保健を利用する外国人等利用者に行ったアンケート調査２をもとに、母子保健サービスをうける人々の状況について、ご紹介していきます。

２．留学生の増加

京都市では、特別永住者や永住者、日本人の配偶者など定住に関する在留資格者は半数以上います。このように京都市では、定住者が多くいる一方、留学の在留資格が構成比率の 2 位にあり、留学や教授などの資格で滞在している外国人が他都市に比べて多いという特徴があります。また、全国の在留資格別の構成比率で上位に入っている技能実習生が京都市では上位に入っていないことと合わせて考えると、京都市の在住外国人には単純労働を行う外国人が他都市に比べて少ないという傾向があるといえます。

京都府内の留学生数は増加傾向にあり、2016 年(8,011 人)は、2006 年の約 2 倍に増えています。留学生が最も多い大学の上位 3 校は京都大学、立命館大学、同志社大学です。また、留学生の出身国別比率をみると、アジアが最も多く(6,785 人)、次に欧州(535 人)、北米(272 人)、アフリカ(153 人)となっています。

留学には私費留学だけでなく、国費留学、政府派遣の留学生もいます。国費留学は日本政府による奨学金などの付与により留学を行うもので、政府派遣は出身国の政

府から留学費用が支払われるものです。京都府における留学生には、2016 年度末で 834 名の国費留学生、167 名の政府派遣留学生が滞在しています。大学別にみると、国費留学生数は京都大学(564 人)が最も多く、次に立命館大学(104 人)、同志社大学(64 人)となっています。

国費留学には学部留学と研究留学があり、研究留学とは、正規生として大学院に在学し研究を行う者、もしくは非正規生として研究機関で研究を行う者とされています。2018 年度の国費留学の募集によると、募集対象者の上限年齢は、1983 年 4 月 2 日以降に出生したものとなっており、一般的な学部生より年齢が高い人を想定しているといえます。国費留学や政府派遣の留学生が多い大学では、大学院レベルの研究を行う研究留学生が比較的多くいると推測され、必然的に平均年齢が学部留学生と比べると高くなっていると推測されます。このことから、留学生の増加により、出産・育児など再生産活動がなされる世代も増えていることがうかがえます。

３．母子保健通訳利用者の増加と多様な国籍

京都市国際交流協会による母子保健（乳幼児健診や新生児訪問など）の通訳派遣は、2009 年にスタートしました。2009 年度の派遣件数は、38 件（英語 30 件、中国語 8 件）だったのですが、2016 年度は 215 件（英語 167 件、中国語 48 件）となっており、約 6 倍になっています。通訳派遣が急増した背景には外国人数の増加、とりわけ、留学生の増加が影響していると考えられます。

通訳派遣の対応する外国人等利用者の国籍は、全部で 66 か国・地域にのぼります。対象国は、アジアが最も多く、2 位に欧米、3 位にアフリカの出身者が多いです。これは、京都府の留学生総数の国別構成比率と合致しています。アフリカ出身者が多い理由としては、国費留学や政府派遣の研究留学として滞在している人が多いことが推測されます。

このような多様な国籍の人は英語通訳を利用している人たちです。そのため英語通訳相談員は、多様な国の人々に対応しなければならないだけでなく、多くは第二言語として英語を使用することから、さまざまな英語レベルの人にも対応しているという現状があります。

４．日本（京都）で出産・育児を選択し、来日する外国人等利用者の増加

アンケートに協力してくれた外国人等利用者３の出身国は、中国語通訳利用者はすべて中華人民共和国で、英語通訳利用者はアジアが最も多く、次に中東そして、ヨーロッパでした。

また、回答者の日本滞在目的は、英語通訳利用者では、「留学・研究」が多く、中国語通訳利用者では「結婚（国際結婚含む)」が最も多いものでした。これらの人々は、日本で出産・子育てをすることを選択しており、出産・子育てをする場所として、積極的に日本（京都）を選択しているといえます。そして、今後も日本での出産・育児が増えていくと考えられます。

英語通訳利用者の多くは、京大や私立大

学などに留学をしている大学院生や研究員だと推測されます。これらの人々は、日本で出産・育児を行う目的で家族を日本留学に同伴させているのです。というのも大学院などの留学生・研究員の多くはすでに自国で仕事や研究を行っており、また、配偶者も同じように仕事や研究を行っている場合が多いのが、通訳派遣時の聞き取りからわかりました。留学生やその家族は、ライフプランの一つとして、日本留学に配偶者も同行し、その間に出産・子育てを行おうと計画しているのです。加えて日本では出産・育児環境は、アジアや中東地域に比べ整っています。高水準の医療機関もたくさんあり、また出産を支援する制度（出産一時金や入院助産制度）も整備されています。特に、国費留学生等は、出産一時金や入院助産制度を利用すると、比較的費用がかからず、高水準の医療機関で安心して出産することができるのです。このような要因から留学生や研究員など日本（京都市）で出産・育児を選択する外国人が増加していると考えられます

他方、定住目的で来日し、出産・子育てを行っている外国人も増えています。中国語通訳利用者は、結婚を目的に来日をしている人が多いです。例えば、京都市には中国帰国者が多く住んでおり、中国帰国者の 3 世・4 世が配偶者を中国から呼び寄せるケースが多くあります。また、ビジネスで日本滞在をしている中国人も増えており、日本での長期間滞在を予定し、家族を呼び寄せている世帯もいます。

５．支援の多様化

日本（京都）で出産・育児を選択し、来日する外国人等利用者が増加していることは、出産・育児の支援も多様化していかなければならないとも言えます。

しかし、支援の基盤となるコミュニケーションについてみてみると、外国人等利用者の日本語の習得状況は在留目的や在留期間などによって大きく異なります。アンケート調査では、日本語レベルについての質問に、英語・中国語通訳利用者とも「簡単な会話だけ」との回答が最も多かったです。

その理由として、英語通訳利用者は、留学・研究目的が最も多いことから、一時的な滞在であること、英語で授業や生活が事足りるため、日本語習得の必要性が低いことがあげられます。

日本語ができないだけでなく、英語もできない人も多くいます。英語通訳利用者の特徴として、多様な出身国がありましたが、すべての言語での通訳支援を行っているわけではないため、英語通訳利用者の配偶者（特に妻）の中には、英語ができない人もいて、そのため、通訳相談員が英語通訳したものを夫が妻に対して母国語に直して伝えるというリレー通訳が行われる場合もあります。このような場合、すべてのコミュニケーションを夫を経由して行わないといけないため（しかも夫は日本語ができない)、妻の意見や思いを直接聞くことができず、適切な支援ができているかわからないこともあります。

しかしながら、英語通訳利用者は、留学や研究目的での来日であることが多いので、日本語ができないことによる情報アクセスが十分に行えないというものなので、主な支援方法としては、情報提供になりま

す。英語通訳利用者の多くは、情報を得ることができるようになると、それを理解し、情報を活用していくことができるという特徴があります。

他方、中国語通訳利用者の支援方法はそれとは異なるものとなります。中国語通訳利用者の多くは、日本で定住していくことが目的になっていることから、日本語習得の必要性は高いものです。しかし、中国語通訳利用者においては、結婚後比較的すぐに出産する場合があり、日本語を習得する前に出産してしまうことにより、日本語を学ぶ時間を持てないケースもあります。

また、中国語通訳利用者の中には、生活上の様々な問題（経済的問題、DV 被害、障害など）を抱えており、日本語だけでなく母語（中国語）の読み書きも支障がある場合もあり、情報提供だけではなく、情報をどのように活用したらいいのかや今後の生活をどのようにしていくかについての深い相談支援や、時には精神的なサポートも必要となる場合もあります。

このように英語通訳利用者と中国語通訳利用者それぞれに特徴が異なり、母子保健支援を行うには、両者にあった支援が求められるのです。そして、このような支援方法の異なりは、行政通訳相談事業を行う上でも、様々な通訳・支援方法を行っていくことが求められ、保健師との連携がもっとも重要となることを表します。

６．相談・情報提供を行う保健師の重要性

出産育児を行う支援において保健師が重要な役割を担っていることが調査結果でわかりました。

「子育ての相談は誰にしますか？」という問いに、英語通訳利用者では「配偶者」が多く、次に「母国の父母」、「日本にいる父母・同国の友人」の順になっています。中国語通訳利用者で最も多いのが「母国の父母」で、2 番目に「保健師」と「日本人の友人・知人」です。この結果から、英語通訳利用者は、夫婦や母国の父母に子育て相談を行っていることがうかがえる一方、中国語通訳利用者は、配偶者にあまり相談を行っていない結果になっています。これは、国際結婚や中国帰国者の場合は、配偶者間で言語（日本語―中国語）が通じないことがあり、複雑な相談などができないことが理由に考えられます。そのため、通訳を用いてコミュニケーションをとることができる保健師が相談相手の 2 位になっていると考えられます。

子育てに関する情報の入手方法では、英語通訳利用者は「インターネット」に次いで「保健師」が 2 位にきており、中国語通訳利用者においては「口コミ」と同一の 1 位に「保健師」になっている。いずれも保健師が上位にきており、保健師からの情報提供が外国人等利用者にとっては、とても重要であるといえます。これは特に制度面についての情報提供が保健師からされることが大きくかかわっています。

出産・子育て支援では、様々なサービスがあり、それを利用するには事務手続きが必要になります。例えば、出産してから、住民登録手続き、国保手続き（社保の場合もある）、子ども医療受給証、などの手続きを行わなければなりません。手続きは日本語で行う必要があり、手続き方法やいつどのように手続きを行わなければならない

かについて、外国人等利用者の中には、日本語がわからず手続きを行なえないでいることがあります。どの手続きも日本で生活していく上では必要なもので、それらについての説明や手続き支援を行う保健師の役割は大きいといえます。

また、出産後に子どもの世話をした人は、英語・中国語通訳利用者ともに「配偶者（妻/夫)」が最も多い回答でしたが、気になる点として「誰もいない」という回答をした人が、英語通訳者で 2 名、中国語通訳者で 3 名いました。中国語通訳者には育児ヘルパー支援制度を利用した人もおり、このような結果は子育てを助けてくれる人的資源の少なさを物語っています。英語・中国語通訳利用者ともに、夫が研究や仕事が忙しいことから、子育てを妻にまかせっきりにしているケースがあり、日本語のあまりできない妻が子育てを一手に引き受けることでさまざまなストレスを抱えてしまい、保健師に相談するケースもあります。

７．家族や友人などには気安く通訳を頼めない

「通訳が必要なとき、誰に通訳してもらうか」という質問では、「行政通訳相談事業の通訳者」に通訳をしてもらうという回答が最も多くあり、その次には「日本語の出来る家族や友人」でした。行政窓口においては、日本語のできる家族や友人をつれてくるようにと要請されることが多いのですが、日本語のできる家族・友人などに通訳してもらうことには問題も多いこともわかりました。

日本語のできる家族や友人などに通訳をしてもらう問題点として、「気安く頼めない」と「専門用語や制度がわからない」が同数で挙げられていました。家族は仕事や研究で忙しくしており、平日に時間をとることが難しく、友人にも気安く頼めないという事情があると考えられます。さらに、専門性の高い内容の通訳は素人では難しいともいえます。というのも、日本語ができることと、専門用語を理解して通訳を行うことは異なり、別の能力が必要になるのです。保健師や行政職員の説明には制度やそれについての専門用語がたくさん使用されており、内容を理解し適切な訳出を行うには、それらを専門的に学び、通訳技術を身に付けた者でしかできません。通訳者が不足している現状では、日本語のできる家族や友人の助けも必要ではあるかもしれませんが、原則としては、専門技術をもつ通訳者が通訳を行う必要があるし、そのことを専門職や行政職員にも理解してもらう必要があるといえます。

８．おわりに

京都市では、定住者の増加だけでなく、大学が多いことから留学や研究目的で来日している外国人が増えていることを紹介しました。留学生の増加は、日本政府による「留学生３０万人計画」によって行われているものです。グローバル化が求められる大学教育においても、多くの留学生が集まることは大学だけでなく、地域社会にとっても良いことだと思います。しかし、政府が留学生増加計画を立てたときに、家族も帯同し日本で出産・育児をする留学生・研究職も増えるとは想像はしていなかったようです。京都市国際交流協会では、京都市の国費留学を受け入れている上位大学関係

者、京都市留学生関連窓口、母子保健関連窓口の方々にお集まりいただき、留学生の出産・育児の問題共有、情報交換の会議を開催しました。しかし、行政、大学関係者とも学部の留学生支援で手一杯で、帯同している家族の支援まで手が回らない、もしくは想定していないというものでした。

出産・育児には、多くの支援が必要です。そのためには、情報アクセスの完備や保健師などの専門職に相談ができる体制作りが必要になります。行政通訳相談事業では、その一部を担っていますが、予算が限られている体制では限度があり、すべてをカバーすることができないです。すべての人が安心して出産・育児が行われるように、環境整備が行われることを願っています。

【注】

1 行政通訳相談事業は、京都市から委託をうけ、京都市国際交流協会が事業運営を行っている。英語・中国語の通訳相談員が電話で通訳・相談を行い、行政からの派遣依頼に対して、通訳派遣を行っている。英語の電話通訳相談は火・木、中国語は水・金に対応している。行政からの派遣は、保健センターの母子保健が最も多く、その他には福祉事務所の生活保護相談、発達相談所の発達検査などにも派遣を行っている。

2 この調査は、行政通訳・相談事業10周年記念調査として、外国人等利用者、保健師、通訳者三者に母子保健支援時のコミュニケーションについてアンケート調査を実施したものである。調査期間は2016年8月～12月

調査結果の詳細は、下記サイトを参照。

http://www.kcif.or.jp/HP/jigyo/sodan/jp/gyosei/houkokusho.html

3 外国籍市民や外国にルーツのある日本人で、日本語にスムーズなコミュニケーションをとることができない人を指す。

マイクロ・アグレッションと私たち

～分断から動き出す交流～　3

朴　希沙（Kisa Paku)

前回は、カトリーヌの事例を用いて、マイクロ・アグレッションの導入を試みました。今回もふりかえりを行い、また 2 回目の導入としてマイクロ・アグレッションに関して行われたある興味深い実験を紹介します。

・はじめに　～前回のふりかえり～

5 月の末、『Microaggressions in Everyday Life：Race, Gender, and Sexual Orientation』の翻訳初稿を仕上げるために、私は毎日パソコンを叩き、うなっていました。さして英語ができるわけでもなく、ただマイクロ・アグレッションを体系的に紹介する本を日本語に翻訳したいという気持ちから始めた企画なので、いつも試行錯誤しながら作業をしています。自分一人では決してできないことですが、実際始めてみると色々な人が協力してくれて、本当に助かっています。この翻訳は、「マイクロ・アグレッション翻訳会」というチームで行っているのですが、そこで大切にしている

ことは、この翻訳会の中でも生じうるマイクロ・アグレッションについて、出来るだけオープンに話し合うことです。メンバーには様々な性別の人がいますし、職業も多様です。そのため、立場の違いから生じる対立やそれに対する緊張をいつも少しはらんでいます。英語が得意じゃなくても、研究者じゃなくても、色んな立場のメンバーがいるとグループの厚みが出て、マイクロ・アグレッションについての考察がより深まります。

さて、前回はこの著作からカトリーヌの事例を紹介し、マイクロ・アグレッションの導入を試みました。この事例においてカトリーヌの面接官は、一方では女性と男性で名前の呼び方を変えたり（男性社員に対しては「○○さん」と苗字を呼ぶのに対し、女性社員には時に「○○ちゃん」と下の名前で呼ぶ）、カトリーヌの就職に対する熱意を「君ならいつでもイイ男を見つけられるのに」と言って笑ったりします。ところが他方では、「私は社員が男性であるか女性であるかなんて、考えたことすらない」「人間は平等に成功する機会を持っている」と発言します。これは旧来の露骨な差別とは異なり、無意識的で曖昧で現代に特徴的なマイクロ・アグレッションの特徴を表しています。マイクロ・アグレッションは、相手に矛盾したメッセージを同時に送ります。そのため、その被害にあった人は出来事をどのように意味づけ、判断し、行動するか迷います。また周囲にも「解釈の問題」「気の持ちよう」等と理解されづらいことも特徴的です。マイクロ・アグレッションには、被害者を孤立させてしまうという特徴もあるのです。例えば、人種差別の撤廃を訴える黒人に対して、白人の友人が「肌の色なんて関係ないじゃないか」「君を黒人として見たことなど一度もないよ」と発言することなども、マイクロ・アグレッションの一例といえます。これについては、皆さんはどのように感じるでしょうか？この例でいえば、たしかに白人は黒人差別を経験することはないでしょう。人種を意識するかしないかは、個人の選択次第かもしれません。しかし黒人にとったら、人種差別はいつどこからやってくるか分からず、それを自分でコントロールすることはほとんどできません。また、かすかな見下しからから露骨な差別まで、日々様々な葛藤や差別を、リアリティを持って体験しているかもしれません。そのため、この発言は人種差別のリアリティや体験を否認し、無価値化するという意味で、マイクロ・インバリデーション（Microinvalidation）と呼ばれています。そしてマイクロ・アグレッションを構成する 3 つの分類（Microassault、Microinsult、Microinvalidation）の中でも、Microinvalidation が最も有害であると言われています。

マイクロ・アグレッションについて体系的な研究を行っている Sue は、もともとカウンセリング及び臨床心理学の研究者です。Sue はカウンセリングを始めとした対人援助の場面においてもマイクロ・アグレッションが生じうることを指摘しています。対人援助は被援助者の利益を第一とし、その成長や問題の解決等のために行われるものですが、そのような場所でも意図せずにマイクロ・アグレッションが生じ、信頼関係が損なわれたり、援助の中断が生じたりする可能性があることが示されています。例

えば、職場でただひとり有色人種であることの孤独感を表明した人に対して「あなたは被害意識が強すぎるかもしれませんよ。私たちは違いではなく、共通点にもっと着目すべきではないでしょうか？」と白人の支援者が発言すること（Color Blindness）等がその例です。日本の対人援助やカウンセリングの現場では、マイクロ・アグレッションはどのように生じているのでしょうか？マイクロ・アグレッションは多くの場合無意識で生じるため、それを完全になくすことは出来ないと思います。むしろ、マイクロ・アグレッションはいつでもどこでも生じうるし、私たちはその可能性をそもそも抱え込んだ存在であることを認めるところから、マイクロ・アグレッションについてのオープンな対話が始まるのかもしれません。日本の対人援助の現場におけるマイクロ・アグレッションの実態とそれをどう取り扱っていくのかは、今後探求したいテーマのひとつです。

・マイクロ・アグレッション：イントロダクション②

前回、マイクロ・アグレッションを生涯にわたって継続的に経験することによって影響が蓄積し、有害な結果が生じることを説明しました。その影響のひとつに、精神的エネルギーを枯渇させるという点があります。Sue(2010)はそのひとつの例として、白人の教師がアジア系アメリカ人の学生に、「君たちは、これが得意だろう」と数学の解き方を皆に示すよう言う場面を取り上げています。ここで、この学生にはおそらく内的な思考プロセスが生じるだろうというのです。それは例えば「これは賞賛なのだろうか？それとも人種的な偏見を強制されているのだろうか？」といったことです。かなりのネルギーが状況を認知的に評価することに費やされるかもしれません。またこういった曖昧さに加えて、アジア系アメリカ人の学生は反応するべきかどうか、反応した結果どのようなことが生じるか評価するためにもエネルギーを費やさなくてはいけません。そして、このような内面の認知的プロセスが刺激されることによって、学生の注目とエネルギーは本来の課題からそらされ、その学習能力や問題解決能力が損なわれてしまうといいます。

今回は、露骨なレイシズムとより曖昧なマイクロ・アグレッションを比較して、それらに対して費やされる認知的エネルギーについて検証したある実験を紹介します。これも、Sue(2010)に掲載されているものです。

－実験①　：　認知的エネルギーについて

この実験で研究協力者たちは、ある会社の採用決定過程を本物だと信じ込まされて目撃します。例えば履歴書・面接官のコメント・推薦文などが比較される場面を見ます。研究者たちは、どの人物が採用されることが最も適切か、全く疑問の余地がないような状況を作り出しました。その人は、採用されることもあれば、されないこともありました。

研究者たちは黒人と白人の研究協力者に示す不採用の理由を、あからさまに人種差別的なものから曖昧なものへ色々と変化させました。またその実験の直後に、研究協

力者たちはストループテストを受けました。これは、例えば「赤」「青」「緑」等の文字と、その文字がかかれている色が異なっており、文字に関わらず色を言うといったもので、認知的・心理的な遂行機能や努力機能を測定することを目的としたものです。

テスト前に不公平な決定を目撃した黒人は、このテストでミスをしました。しかしより重要なことは、露骨なレイシズムを目撃した人より、かすかで曖昧なレイシズム（マイクロ・アグレッション）を目撃した人の方がミスが多かったのです。一方、興味深いことですが、白人の研究協力者の結果は真逆に表れました。白人はかすかなレイシズムよりも、露骨なレイシズムに対してより大きな反応を見せたのです。

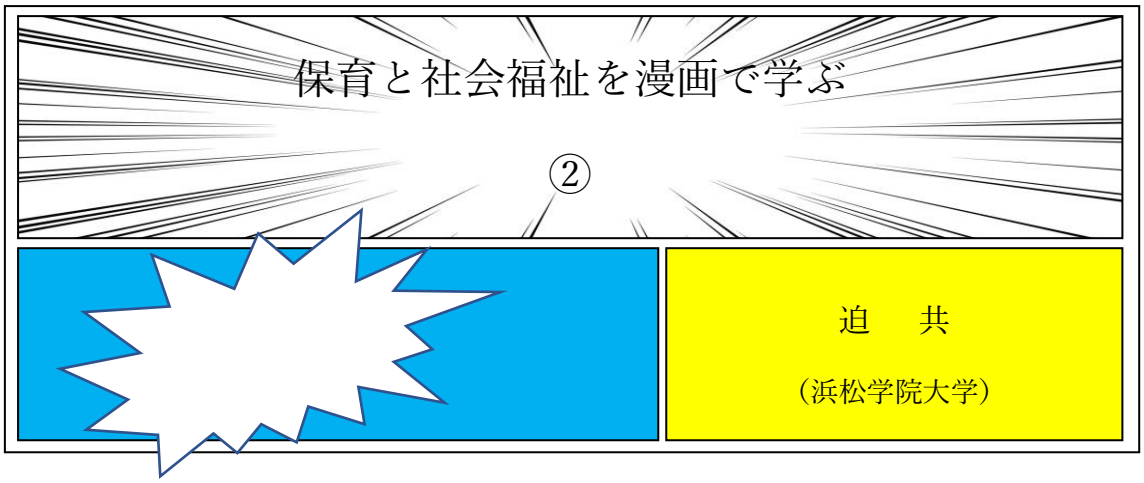
この結果について研究者たちは、黒人は歴史的に露骨なレイシズムを受け続けており、それに対するコーピング戦略を発展させてきたと考えました。例えば、露骨なレイシズムに対しては先のアジア系アメリカ人の学生が行ったような推測は必要ありません。しかし曖昧で、表面上の行動の下に存在する隠されたレイシズムは、心理的エネルギーを枯渇させてしまいます。露骨なレイシズムがいいというわけではもちろんありませんが、それが人を傷つけ、損ない、暴力的であることは多くの人が認めることです。むしろ、このように考えるべきだと思います。社会の中で軽んじられているグループに属する人々は、①露骨で明確な形のレイシズムと、②その影に隠れて見えづらいが有害なマイクロ・アグレッションという 2 重のストレスにさらされており、その両者がともに、もしくは同等に有害であるということです。

以上、今回はマイクロ・アグレッションに関する実験を紹介することを通して、なぜ露骨なレイシズムだけでなくマイクロ・アグレッションについて検討することが必要であるかを述べました。次回以降もマイクロ・アグレッションの具体的な事例を紹介しながら、考察を深めたいと思います。

・・・続く

【参考文献】

Sue, D.W.(2010). Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual Orientation. Hoboken, N.J.: John Wiley & Sons.



松本大洋さんは、映画化された『ピンポン』などで有名な漫画家さんです。しかし彼が幼少期、児童養護施設で過ごしていたということはあまり知られていません。

前回ご紹介した、りさりさんは、施設で過ごす女の子たちの日常を描くのに長けた作家さんですが、松本大洋さんの作品『Sunny』には、施設の男の子たちの日常が描かれています。松本さんの体験がベースになった作品です。

「自分の幼少期を作品に描くことで、周りのひとに迷惑をかけるのではないか」、「描いたときに自分がどういう気持ちになるのだろうか」など様々に考えた松本さんは、20 歳のデビュー当時から、児童養護施設の日常を描く構想を持ちながらも、描くことを先送りにしていたと言います。でも、「40 歳を過ぎていつまでも描けるわけではないと悟り出し、ここでやろうと一大決心をして描き始めた」そうです。歳をとりすぎてしまうと記憶は美化されてしまいます。施設で感じた悲しさや理不尽さ、また喜びなどのリアルな強さが薄れてしまうことを懸念したのかもしれません。

親元で暮らせない子どもたちが暮らす施設「星の子学園」。その片隅に置いてある廃車の日産サニーがこの作品のタイトルです。施設の子どもたちは、動かない車の運転席にエロ本を隠したり、ハンドルを握って脱走を夢見たりします。

星の子学園の子どもたちは、両親を亡くして一人ぼっちになった少女以外、みな親が健在であるにもかかわらず一緒に暮らせないという状況にあります。どの子も、親が迎えに来てくれることを心から待っています。

そしてその気持ちとは裏腹に、「自分は親に捨てられたのかもしれない」と疑う気持ちも強く持ってしまっています。

主人公の春男は施設に預けられたストレスから髪の毛が真っ白になり、学校では「ホワイ

ト」と陰口を叩かれる問題児。ケンカ、万引き、不登校などで荒れ狂いますが、たまに一時帰宅を許してくれる東京の母親の前では、良い子ぶろうと頑張ります。2巻から母親と春男のエピソードを紹介しましょう。

春男はふだん、施設のある四日市の方言を話しますが、母親からは「上方漫才みたい」「それって治るのよね？」と言われてしまいます。

母親の家に入った春男は、時計や本、手鏡など母親の身近にあるものを見て「お前ら、お母さんと一緒におられてええな」とつぶやきます。「オレ放(ほか)されてしもた」…。

夕食に訪れた中華料理屋で、星の子学園の様子をはしゃいで話す春男に、母親は「楽しそうね、学園…」。一瞬黙った春男。だが気持ちを抑えられず、涙ながらに「楽しなんかあるわけないやろ！　地獄にきまったあるやん！」「オレあんな所(とこ)早よ出たいねん！　お母さんと一緒に暮らさせてぇな！」と大きな声を出します。「言葉かって直すやん！　ちゃんとええ子にしとくから、約束するから！」…

母親は新聞を盾に「どなる人とは、お母さんお話しない」とそっぽを向いてしまうのです。

翌日、ひとりで野球場にいった春男は警察官に保護され、母親が迎えに来ます。帰りの電車で、母親は春男に言います。「ひとつお願いしていい？　これからはお母さんって呼ぶのやめて、名前で呼んでほしいの」。春男は「なんで？　お母さんはオレのお母さんやん」。母親は「でもお母さんは春男のお母さんである前に矢野杏子なのよ」と告げます。

春男が、母親が手に繋がろうとすると、「カサカサじゃない」と母親は気づきます。「前にクリームあげたよね」と聞く母親に、春男は「あるよ」とハンドクリームの缶を出します。「お母さん…きょうこさんのにおいするさけ使わんと、こないしてかぐねん」と鼻に近づける春男。

母親は何も言わず、うつむきがちにドラッグストアでハンドクリームを買占め、春男に持たせます。

施設に帰る春男を駅まで送りに来た母親は、電車に乗った春男に言います。「それじゃあ元気でね。ホームの端っこふらふらしたら駄目よ」。春男も気丈に「病気とかなったらアカンで。またオレと会(お)うてなっ。オレずっと待っとるさけな。ぜったい忘れんとってや」と叫びます。

そして電車のなかで、見知らぬおじさんにみかんをねだったかと思えば、同年代の子どもに「何ニヤついとんねん、コラ！」と絡むのです。

春男がなぜ荒れるのか、その理由は行動の一部始終を読めば理解できそうです。しかし春

男の母親は、終始、感情を押し殺したような表情で言葉数が少なく、何を考えているのか、どんな事情があったのかがわかりません。でも、春男のことをまったく気遣っていないわけでもないようなのです。

こうした登場人物の心の奥を覗き込み、行間を読む作業が「Snnny」の魅力です。とても文学的な作品なのです。

松本大洋さんはインタビューで次のように言っています。

「施設で暮らした経験がない人だったらもしかして可哀想に描くかもしれないけど、子供ってのは意外としたたかにやってるもんですよ。」

ただ可哀想なだけではなく、泥臭く子どもらしくいきいきした様子を見せる春男たち。「Sunny」からは、家庭環境に恵まれなかったからこそ、リアルでひりひりするような日常を生きている子どもたちの姿が読み取れます。

※松本大洋さんのインタビュー内容は下記を参考にしました。

「ナタリー　松本大洋が一大決心して描いた「Sunny」の受賞に感謝、第 61 回小学館漫画賞」
https://natalie.mu/comic/news/178593

「ナタリー　Power Push 松本大洋　祝 IKKI10 周年、看板作家 5 年ぶりの帰還」
https://natalie.mu/comic/pp/sunny

※ 本連載へのご意見、ご感想などをお聞かせください。

sako@hgu.ac.jp 迫 共（さことも や）

『余地』 ～相談業務を楽しむ方法 2～

＜ご利用は計画的に＞

杉江　太朗

～「お金」～

とある児童相談所で相談業務に携わっています。今回のテーマは、＜ご利用は計画的に＞とさせて頂きました。皆さま、どのようなことを思い浮かべましたか。とあるテレビCMを思い浮かべた方が多いのではないでしょうか。

ここでは、消費者金融を扱いたいわけでも、読まれている方に消費者金融を勧めたいわけでもありません。私は、金融関係の職場で働いていたことがあります。自分のお金ではありませんでしたが、1億円を持ち上げたことのある児童福祉司は中々いないのではないでしょうか。

ここでは、そのCMで扱われている『お金』、特に相談業務における『お金』について考えてみたいと思います。

～様々な側面を持ち合わせる『お金』～

『お金』といっても様々な側面があります。一言で片づけられるものではありません。

例えば、労働の対価として支払われる賃金も『お金』です。また、児童相談所は行政機関の 1 つであり、つまりは公務員です。公務員といえは、予算。国でも都道府県でも市町村でもそれぞれの規模は違うかも知れませんが、全てそれも『お金』です。また子どもに関することで言うと、保育料から学費、塾代、さらには子どものお小遣いまで全てが『お金』です。

資本主義のこの世界で、『お金』を切り離して生活をすることは不可能です。今回はその中でも大学に関する『お金』、特に社会的養護と呼ばれる環境で生活をしている子どもたちの大学進学資金について考えてみたいと思います。

～強いられる自立～

社会的養護とは、厚生労働省の定義では、「保護者のない児童や、保護者に監護させることが適当でない児童を、公的責任で社会的に養育し、保護するとともに、養育に大きな困難を抱える家庭への支援を行うこと」とされており、特にその中でも、施設や里親、ファミリーホームと言った環境で生活することを示すことが多いと思います。

社会的養護の課題として良く上がるの

が、原則 18 歳までしか利用できないということです。児童とは、児童福祉法上、「満 18 歳に達するまでの者」と定義されています。通常 18 歳といえば、高校３年生で到達する年齢なのですが、その年齢を超えると児童ではなくなるということです。かといって、高校 3 年生の誕生日がきて突然施設を出ていかなければいけないというわけではありません。「措置延長（在所延長）」といって、必要と認められる場合は、その年度末まで（高校を卒業した年度末まで）延長が可能であり、国レベルでも積極的にその制度を使い自立をサポートするようにと言われています。（昨年度より 20 歳まで延長が可能であったのが、22 歳まで延長が可能と変更になりましたが、その話は後述します。）

つまりは、高校を卒業したら施設、里親宅から出ていくということが原則として定められており、言い換えれば、高校を卒業するまでは社会が制度を使って面倒を見るということが定められているのです。

このように施設や里親制度を利用している子どもたちは、社会から高校を卒業した時点で、18 歳で自立が強いられてしまう現実があるのです。

でも考えてみて下さい。高校を卒業してすぐに自立をしなければいけないということについて。みなさんは、18 歳という年齢をどのようにお考えになりますか。18 歳になれば、普通自動車の免許を取ることが可能になります。あと、パチンコなどのギャンブルをすることが可能になります。直近では、選挙法の改正により、有権者として認められるようになりました。様々な形で大人への仲間入りを果たす年齢ともいえます。その一方で、18 歳は未成年であり、親権者の影響を大きく受ける年齢です。親権者は、未成年者の教育、居住、財産、職業などを管理する立場にあると定められています。ここでの 18 歳は、「まだ子どもであるから、大人が管理しなければいけない」ということが前提となっています。

そのような、大人なのか、子どもなのか、状況によって扱われ方が変わる年齢にも関わらず、社会的養護の中では、「自立」が強いられてしまいます。

現実的な進路選択はどのようになっているのでしょうか。一般的な 18 歳と言えば進学か、就職かで悩み、親に相談しながら、親の援助を受けながら進路を決定していくでしょう。少なくとも、家に残るという選択肢もある中で、進路を決定していくことが多いと思います。しかし、里親や施設を利用している子どもたちは、その場に残るという選択肢がほぼ残されておらず、就職をするにしても、進学をするにしても、まずは居住する場所を確保する必要があります。

古いデータになりますが、厚生労働省の平成 24 年度の全高卒者の大学進学率は 53.2%でした。約半数が高校卒業後、

進学を果たしています。一方で、児童養護施設出身の子どもについては、12.3%という数字になっています。また就職率はというと、全高卒者の就職率が 16.9%でしたが、児童養護施設出身の者については 69.8%でした。

この数字の差は、『お金』が大きく影響していると考えられます。

～どうやって自立を目指すのか～

児童養護施設や里親宅で生活している子どもはどうやって自立を目指しているのでしょうか。ここでは、私の今までの経験を踏まえてお話します。

まず自立に関する制度ですが、正直、十分に制度が整っているとは言えません。進学、就職をするにあたって、準備金、支度金なるものが制度として定められていますが、その金額は 30 万円にも満たしません。30 万円と聞いて、これを多いと感じる方もいるかも知れませんが、「30 万円やるから、その後は一人で生きていけよ。よろしく」と聞いたらどのように感じますか。正直、ただの手切れ金にしか思えませんよね。これだけでは、アパートを借りる初期費用も賄えるかどうか怪しいものです。それ以外にも施設のアフターフォローなど定められているのですが、『お金』に関して皆が確実にもらえるのは、これだけなのです。

そのため、施設を利用している子どもについては、「自立するために」という合言葉を振りかざされ、アルバイトをして、貯金をすることを強く推奨されます。大学進学を目指す場合も、学費を賄うためのアルバイト、就職を目指す場合も、住居の初期費用などを貯めるためのアルバイト、言い方については、都合良く言い換えられながら、自己資金を貯めることを余儀なくされます。

当然、『お金』は簡単にはたまりません。高校にも行っている場合が多いので、成績を落とすとアルバイトを減らすように言われてしまいます。でも将来の『お金』は貯まりません。貯金を増やすためにアルバイトを増やします。そうすると勉強をする時間がなくなります。そうすると成績が下がるので・・・。という悪循環も良く目にします。

そのため、自己資金で進学をすることはほぼ不可能とも言えます。そのことが壁になって、前述した就職率が高くなっていると思われます。でもその中でも進学を希望し、進学を決定する子どももいます。

その際、多くの援助者が勧めるのが日本学生支援機構の奨学金ではないでしょうか。ホームページには、『経済的な理由で、修学が困難な優れた学生に学資の貸与を行い、また、経済・社会情勢を踏まえて、学生等が安心して学べるよう「貸与」または「給付」する制度です。』と書かれています。ここで気をつけなければいけないのが、「貸与」についてです。貸

して与える・・・字の通りですが、あくまでも貸しているもの、つまり、借りた人は返さなくてはいけません。借りたものは、返すことは当然のことなのですが、リスクについては、十分に知っておく必要があります。

最近、ニュースで奨学金を返済できない人が増えていると聞いたことがありませんか。例えば、月に 10 万円を借りたとします。10 万円×12 か月＝120 万円。120 万円×4 年＝４８０万円。無利子の奨学金もありますが、有利子の奨学金もあります。つまり、順調に卒業できたとしても、480 万円の『お金』を借りた状態で卒業をすることになります。その『お金』を返していくのに何年かかるでしょうか。

また、例として挙げたのは、10 万円でしたが、実際のところ、月に 10 万円だけで生活をしていくことは難しいと思われます。貯蓄があれば、貯蓄を食いつぶしながら、貯蓄がなければ、アルバイト等をして自分で賄うしかありません。アルバイトするとすれば、日中は大学があるため難しいでしょう。アルバイトを増やすことで学業が疎かになることもあるかも知れません。学業を疎かにしてしまうと、義務教育ではない大学では単位が取れません。もし中退することになってしまったら、入学金、授業料などは基本的には返ってこないので、借りた奨学金は、そのまま借りた『お金』として残ってしまいます。

もし、そこで、親が肩代わりしてくれるなどの援助があれば良いのですが、施設を退園した子どもたちに、そのような親がいることは稀です。どう考えても、貸与型の奨学金は、安心して学べる為の制度だけではないように思えてきます。

このことは極端な例かも知れません。しかし、援助者はそのようなリスクがあることを知っておく必要あり、そのリスクを進学する子どもに伝えなければいけません。そのことが、進学を諦めさせることになったとしても、子どもの将来を考えたときに、借金を数百万円抱えた大卒の社会人を目指させるのか、借金のない 4 年間働いて少しは貯金のある高卒の社会人を目指させるのか、どちらが良いと考えてみて下さい。

～でも大学進学を諦めない～

とは言いながらも、この世の中です、大学進学をして、知識を増やし、選択肢を広げてやりたいと思う気持ちもあります。むしろその気持ちは年々高まっています。かつて、日本学生支援機構を頼らずに進学を目指すと豪語するとある施設の施設長さんがいらっしゃいました。

実際のところ、様々な法人、団体、財団などが、施設、里親出身の児童を対象にした給付型の奨学金制度を拡充しつつあります。その中には、生活費と学費の両面を助成してもらえるものもあります。

当然、皆が利用を出来るものではありませんし、エントリーをしても受給できるかどうかはわかりません。

しかし、私が担当した子どもたちにはその事実を伝え、進学を目指すのであれば、可能な限りエントリーをするように勧めています。普通の高校生はそのようなことを考えることは少ないのかも知れません。施設、里親の子どものみが背負わされていることであり、その責任を子どもに背負わせたいわけではありませんが、大学進学を目指す場合には、その方法が、今は一番現実的だと思っています。

エントリーをする際の申請書を書くときなどは一緒に考えたりすることもあります。読み手がどのように受け取るのかなど一緒に考えます。その際には子ども自身の成育歴にも触れることになります。自身の生い立ちをどこまで相手に伝えて、武器に出来るかなど、かなり慎重に対応する必要があります。またそのことを一緒に扱える関係性も大切です。そうしたプロセスを経て、進学というその子どもの決定を強固なものにしていけるのではないでしょうか。

～ご利用は計画的に～

大学進学を後押しする形で、施設、里親宅での生活について、20 歳まで延長が可能であったものが、22 歳まで延長が可能となりました。国が法整備をして、実施については、各自治体に任されている一面があるようで、各自治体によって進行具合は違うかも知れません。少なくともその制度を利用することで、22 歳、つまり、大学を卒業する年齢までは、生活場所を確保することが出来るようになったのです。とはいっても、同じ施設内に未成年と成人が入り混じることの運営上のリスクも出てくることでしょう。今までは未成年のみを対象としてきたところから、20 歳、21 歳の成人も対象となるのです。法律上は、飲酒、喫煙が可能となりますが、その指導まで施設職員が担わなければいけないのでしょうか。そのあたりのすみ分けがどうなっていくのかは、また今後のお話しです。

施設からの自立を目指す場合、奨学金の利用については、給付型の奨学金をベースにして考えて、足りない部分を賄うという計画性が必要だと思います。当然、給付型の奨学金については、皆がもらえるものではありません。でも、各自治体独自で、利用できる選択肢は増えてきているはずです。

そうした選択肢をいち早くキャッチし、自身の引き出しに入れておく、そして必要なときに引き出しを開けるということを出来るように私はしています。

全国社会福祉協議会と全国児童養護施設協議会が共同で給付型の奨学金制度の一覧を冊子にして作っています。それを手に入れる前は、せっせとホームページを探し当て、そこから各法人に電話をし

て、利用が可能なのか、受給が出来るのか、聞いてまとめていました。

　大きな協議会の力は素晴らしい。個人の力では到底及びませんが、上手に使わせてもらっています。

　『お金』は、テレビでは、「政治とカネ」という風にネガティブに扱われることもありますが、今回のように、進路を検討するにあたっての素材ともなり、進路を実現するためのモチベーションともなり、また進路を決定するための武器ともなります。『お金』を介して物事を捉えなおすことが、可能性を広げるチャンスに繋がります。ご利用は計画的に。いや、ご利用は戦略的に、夢を実現していきましょう。

♪♪♪♪♪♪♪♪

統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～ゆりの日常～

♪♪♪

松岡園子

1993年のカーネーション―12歳―

ゆりにとっての台所は、祖母がおいしい料理を作ってくれる、家の中でいちばん好きな場所だった。色で言うと、カスタードクリーム色だな、とゆりは幼い時から考えていた。台所の漆喰(しっくい)壁もダイヤル式の電話も、その色だ。それに、お菓子の焼ける甘い匂いや家族の笑い声が集まる場所だということが、その色らしさを際立たせていた。

祖父と祖母は、自宅で50名ほどの小中学生に英語教室を開いている母・夏子の代わりにゆりを育て、日曜大工でも料理でも裁縫でも、ゆりに手伝わせた。ゆりが生まれてすぐに父と母は離婚したらしい。物心ついた時から祖父と祖母、夏子との4人家族でいることが当たり前で、ゆりは父がいないことを特に意識したことはなかった。意識する時といえば、友達になんでお父さんいないの？　と聞かれ、「りこんした」と答えた時に、友達の表情が一変し、真剣極まりない様子で、「聞いてごめん……」と言われる時ぐらいだった。それでもゆりは、「別に謝らなくていいよ、悪くないよぉ」と父のいないことを全く気にすることはなかった。

ゆりが小学6年生になった1993年の春休み前に祖母が入院し、夏子との2人暮らしになった。祖父はその1年前に亡くなった。春休みのある日、台所の椅子に腰かけている夏子に、今日はクッキーを焼いておばあちゃんのお見舞いに行こうと言いかけたゆりは、いつもの台所の色とは違う雰囲気を感じ、言葉を引っ込めた。

「死ぬ……」

「……えっ」

「生まれますよぉーにー……」
「お母ちゃん……?」
返事はない。夏子の目の前には、ゆりしかいない。しかし、夏子が話している相手はゆりではない。では夏子は、誰と話しているのか。腕のあたりを急に誰かにつかまれた時のように、ぞくっとした。ゆりにとって目の前にいる自分のことを見えていないように振舞う夏子は、異世界の人のように感じられ、それ以上、話しかけるのがためらわれた。小学校を卒業したばかりの心弾む解放感は一気に崩れ去り、以前と同じ台所なのに、灰色にうす靄(もや)がかかったように暗転した。ゆりは、自分がこの世から消えたのか、夏子が自分には見えない人と話しているのかのどちらかであるが、それが、そのどちらなのかということをしばらく思案していた。

春休みに入った頃、家にいる時だけだった見えない相手との対話が、外でもなされるようになったことで、ゆりは夏子が見えない相手と話しているのだと確信した。ゆりは自分の机の引き出しからそうっと日記帳にしているピンク色のノートを取り出すと、その様子を書き留めた。

つい、この前からなんだけど、お母ちゃんのようすがおかしいの……。なんか、いっつも１人になると、ひとりごと言ってるの……。関係のないことを人のせいにしたり……。なんでだろー。どうやったら治るのかなぁ～?

ゆりにとっては残るひとりの頼みの綱である夏子が一日中、じっとして独り言をつぶやき、仕事もせず家事もできなくなった。毎日のご飯も洗濯された着替えも、なにもない。幸い、祖母がゆりに料理や洗濯の仕方を仕込んでおいてくれたため、毎日のことはギリギリのところでまわっていた。
夏子の様子は怖いと思ったが、直接危害を加えられたりするわけではない。今まで一緒に暮らしてきた、しっかり者の母が、一体どうなってしまったんだろうと、12 歳のゆりにはわからないことだらけだった。
祖母に訊ねてみようと思った時にはもう遅かった。入院中の祖母は、初めは気丈な様子で入院したが、抗がん剤治療を始めて次第に弱っていき、会話ができなくなっていた。その頃から、夏子の姉である亜紀がお見舞いにやって来たり、ゆりの家へ出入りするようになった。ゆりは、夏子のことを亜紀に訊ねてみることにした。
「あの……お母ちゃんが……独り言をいう時があるんやけど」
亜紀は一瞬、口ごもり、
「……あぁ.……病気……やねん」
と言ったが、それ以上そのことに触れず、慌ただしく話を変えた。
「まぁ、夏子のことは気にせんと放っとき。それより、母さんの通帳とか実印、どこに置

いてるか、わかる？」
夏子の様子は明らかにいつもと違うのに、家を訪れる大人は、まるで夏子が透明人間になったかのようにその様子について触れず、相手にしないのはなぜなのか。そう思いながらゆりは、見てはいけない大人の世界を見てしまったように感じた。

暫くして、ゆりの家を売却する話や、祖母の貯金がいくらあったかなどの話が親戚の間で頻繁にされるようになった。春休みも半ばに差し掛かった頃、亜紀と夫の良二は、祖母を神戸から奈良の病院に転院させ、同時に、ゆりと夏子を奈良にある自分達の家へ引き取った。その家には、亜紀、良二と高校生の美奈、弟の直が住んでいた。ゆりは夏子と二人で、家の一室を貸してもらった。
ゆりは絵が上手な、憧れの従姉(いとこ)である美奈と同じ屋根の下でしばらく一緒にいることになったが、昔のように打ち解けて話す気にはなれなかった。急に奈良へ行くことになり、納得のできていなかったゆりは、亜紀や良二に反抗的な態度をとっていた。その手前、美奈にだけ愛想よく振舞うことはゆりの意地が許さなかった。美奈は朝からおしゃれに入念で、台所の湯沸かし器のお湯を使い、朝シャンをしてから、ふんわりと花の香りを漂わせて制服姿で出かけていく。
「美奈ちゃん、やっぱりお洒落やなぁ。綺麗やし」
ゆりにとって、美奈は憧れのお姉さんだ。でも、美奈と同じように朝シャンをしたいなんて、居候している立場でとても言えない。ゆりはこの家の中で小さくなっていなくてはならないことに、窮屈さを感じ始めていた。

奈良の病院へ転院して 1 週間ほど経った 4 月初旬の朝、祖母が亡くなったと電話で告げられた。日に日に弱っていく祖母を見ていて、ゆりは祖母の死を予期したこともあったが、回復への一縷の望みをかけて転院先の奈良に来たのだった。お通夜が始まるまでもその後の葬儀も慌ただしく、別れを悲しんでいる間もないほど、親戚の相手やお茶出しと、息つく間もなく 3 日ほど過ぎた。
人の一生は、あっけなく終わる。家を守っている人間が弱ったりいなくなると、他の人が家にどんどん入りこんできて、その家族がそれまで積み上げてきたものを、めちゃくちゃにしてしまう、とゆりは思った。祖母の葬儀後、そのまま亜紀の家で住むか、元の家に帰るのかと思っていたゆりがその後に告げられたのは、思ってもみなかった場所だった。

「この間うちに遊びに来てた、美奈の友達のふうちゃん、ゆりちゃんも会ったでしょ？　あの子、あおば園で育ったのよ。すごく良いところでね、『あおばで良かったぁ』って言ってたんよ。おばちゃんもそう思うわぁ。今高 2 やけど、看護師目指して頑張っててね。それでゆりちゃんも、あおば園やったらいいかなって、おじちゃんと言ってたんよぉ」
伯母の亜紀が、覚えたセリフを流すようにゆりに告げたが、無理に作り笑いをしている

せ
いか、変に声が上ずっている。
「え……」
ゆりは耳を疑った。何を言われているのかがわからない。それでゆりちゃんも、あおば園やったらってどういう意味…?

どうやら、あおば園というところで美奈ちゃんの友達が育ったため、ゆりもそこで暮らしたらどうか、ということになったらしい。
「そんなん……お母ちゃんはどうするの?」
「夏子はしばらくおばちゃんの家にいるわ。入院が必要かもしれへんし」
入院……? なんで……?
「ほんまにお母ちゃん病気なん? 動いたり話したりできるやんか……神戸に帰る。お母ちゃんと神戸に帰ることはできへんの?」
「夏子と 2 人、あんたらを帰したら……。それは心配で、今はそんなことさせられへんわ。おじちゃんがあおば園に行けるように何回か相談に行って、今日、手続きしてくれてるから、そうしたらそこから中学校へも行けるし、な」
なんで、なんで。
「嫌や。そんなん、お母ちゃんがおるのに……。じゃあ、ここから中学校に通うんは?」
「それもちょっと難しいんよ。直もまだ 3 歳で手がかかるしな。な、明日から」
「そんな……。それやったら、お母ちゃんと一緒に神戸で暮らした方がましや!」
ゆりはそう言いながらくるりと向きを変え、借りている部屋に戻ろうと廊下を目指した。
なにそれ、なんでそんなとこに行かなあかんの……。
追い打ちをかけるように口の達者になってきた直が、戦隊もののお面を被り、おもちゃの剣を手に、ゆりに体当たりしてきた。
「もう、ゆりちゃん、あおばえん、いけー!!」
「……」
いつもなら直の相手をして悪役になってやるゆりだったが、この時ばかりは、そんな気分になれない。
「なんでもかんでも大人で勝手に決めて……。それに、なんで直くんが“あおば園”っていう言葉、知ってるんよ……」
こんなに小さい子にまで……と思うと、情けなくて涙が溢れてきた。ゆりのいないところで、大人同士の会話の中で、勝手に色々なことが決められていく。でもゆりは、何でも大人の言うことに反発ばかりしている自分の考えが常識外れなのかもしれないと、少し弱気になりながら、ふらふらと部屋の引き戸を開けた。そして部屋の奥で三つ折りにして積んであった敷き布団にうつ伏せに倒れこんだ。
「ゆり、どうしたん」

ゆりが布団に倒れこむと、布団の横でじっと正座をしていた夏子が、そっと背中に手を置いた。暫くするとまた、ぼそぼそ誰かと話している声が聞こえてくる。奈良に来てからも、亜紀に言われた手伝いをしながら途中で動きが止まり、独り言をつぶやくことはゆりの目の前で何度もあった。

「このお母ちゃんがなんで入院なんよ。別に、誰かと話してるだけやんか」

最初、夏子の異変に気付いた時には恐怖におののいたゆりであったが、今となってはそれが日常の風景であり、さして問題視するほどのことではなくなってきていた。

布団にうつ伏せになりながら、ゆりは泣き疲れてウトウトと眠ってしまったようで、亜紀と美奈の激しく争う声で目が覚めた。窓の外を見ると日は落ちかけて、手首にはめた腕時計は 6 時をまわったところだった。起き上がった途端、鼻の奥がツンとして、泣きすぎた時のしゃくりあげるのと同じ息づかいが、また思い出したように胸をひくひくさせた。

「あっ、そうやった、あおばの……」

さっきの亜紀とのやり取りが思い出されて、気が重い。奥の部屋では、亜紀と美奈が何かを言い合っている。

「美奈ちゃんがこんなに大きな声で怒るなんて。何かあったのかな」

ゆりは、音がしないようにそうっと部屋の引き戸を左にずらし、その隙間に耳を近づけた。泣いているような美奈と甲高い亜紀の声がする。

「そう言うてもな、明日からゆりちゃんは、ふうちゃんが住んでた、あおば園に行くって決まったんやから。会いたかったらまた会いに行けるし」

「なんで?　ゆりちゃんが、かわいそうやんか！」

美奈ちゃんは、わかってくれている。美奈ちゃんがそう言ってくれているから、おじちゃんとおばちゃんは、あおば園に行くことを考え直してくれるかもしれないという少しの期待がゆりの心の中に灯った。

「やっぱり、おかしいよね……」

子どもはおかしいと思うんだ。でも、やっぱり大人の意見が通るのかな。だけど、美奈ちゃんだけでもわかってくれて味方してくれたのが、救いだとゆりは思った。あまりに平然とあおば園に行くことを言われたため、ゆりは「行きたくないと言う私の方がおかしいのかもしれない」と思いかけていたが、美奈の声を聞いてもう一度、気を取り直した。

子どもだからという理由で、できないと思われることや通らない意見があって、いくら力をこめて伝えても、それ以上に大きな力が、それが正しいことであるかのように大人たちの間で了解済みであることに、ゆりの大人への不信感は膨らんでいった。

その夜、台所では亜紀と良二がふたりで話をしていた。

「ゆりちゃんが、あおばに行くの嫌やって。夏子とここで一緒に暮らされへんのやったら、神戸に帰った方がましやって言って、えらい泣いて」

亜紀が、洗濯物を畳む手を止めて切り出すと、良二はお茶をすすりながら顔をしかめた。
「嫌やって言ってもなぁ……他に何か方法あるんか。あの子のためや。あの子の言うとおりにして、もし何かあったらどうするんや。今日行った児童相談所でも、そんな事言っとったぞ。」
「ゆりちゃんは、まだ夏子の病気のこと知らんし。事情が理解できんのと違うやろか。急に施設に行くなんて」
「親が病気で子育てができんから、施設が家庭の代わりになって子どもを預かるそうや。今のあの状態で、2 人で生活できると思うか?　何か起きて、新聞沙汰にでもなったら、それこそ大変やぞ」
「でも、美奈にもゆりちゃんが可哀想やって言われて……。確かに可哀想かもしれへんとも思うんよ」
「まぁ最初は誰でもそうやろ。せっかく、色んな人が動いてくれてるんや。そのうち慣れてくるんと違うか。ここで甘い顔見せたら、あの子も後ろ髪ひかれて、よう行かんて」
亜紀はそれ以上何も言わず、ふぅと溜息をつきながら、横の部屋で寝ている直の布団を掛
け直した。

明くる朝、ゆりは早めに目が覚めた。隣で寝ている夏子の寝顔をそっと見ていると、こうして隣にいられるのも、今日が最後なのか……と思うと胸が押しつぶされそうになった。今日から全く知らないところへ行って、ずっとそこで寝泊まりして生活する。そんなに簡単にあちこち行って、言われるままになって、と思うといたたまれなくなり、ゆりは気付くと、台所で慌ただしく朝ごはんの支度をしている亜紀と、新聞を読んでいる良二の横に立っていた。昨日同じこと言ったのにも関わらず、ひとつも言い分を聞き入れてもらえなかったためか、声が震えて出にくい。
「やっぱり……私のお母さんは、ちゃんといるから。神戸に帰る」
「……ゆりちゃん、いくら言っても、もう変わらないんよ。今日 3 時にあおば園に行きますって言ってあるから、午前中に持ってきた荷物をまとめてね。おじちゃんが車で送ってくから。それから、これ、あおば園から行く中学校の制服。おばちゃんの友達の子どもさんからお古もらったから、これ着てみて」
「……」
亜紀の差し出した紙袋には、クリーニングの透明袋に包まれた白いセーラー服と紺色のプリーツスカートが入っていた。セーラー服には憧れていたが、こんな形で着ることになるとは思わなかった。ゆりは祖母を亡くしたばかりで、悲しみに暮れているところに母の夏子まで取り上げられて、1 人ぼっちになったような気分になった。

あおば園へ向かう道中、良二の運転する車の窓から満開の桜を眺めながら、ゆりは隣に

座っている夏子の横顔を見ていた。夏子はゆりの視線に気付くと、にこっと微笑むが、心ここに在らずという感じで、時々ぼそぼそと誰かと話している声が聞こえる。

あおば園に着き、事務所で児童相談所の担当者と、あおば園の職員・山田お兄さん、夏子、亜紀、良二が話をしていると、20 代ぐらいのエプロン姿のお姉さんが「迎えにきました。行きましょうか」と言って入ってきた。

「男子と女子の棟が別々で、小学生から中学生までの子どもが 1 つの棟で生活をしているのよ」

ゆりは事務所を出てお姉さんの説明を受けながら、ぱんぱんに荷物を詰め込んだ大きな旅行カバン 2 つを持ち、一番奥の棟へ案内された。その建物に入ると、赤いランドセルを背負った小学 2,3 年生ぐらいの女の子が「お母さーん、ただいまぁ」と言いながら駆け寄ってきた。

「お母さん……?」

「あっそうそう、これからは、私たちエプロンをした人みんなを、“お母さん”って呼んでほしいの。みんなそうしているから」

「へ?」

ゆりは、何を言われているのかがしばらくわからなかった。これからは寮母さんを「お母
さん」と呼んでと言われたのだった。ゆりは、私にとってのお母さんは 1 人しかいない、今
日会ったばかりの人を、いきなり「お母さん」なんて呼べない、お母さんは他にちゃんとい
ると思った。お母さんがいるのに、なぜここにいなくてはいけないのか?　自分がこの場所にいるということに、納得ができない。

「お母さん」と 30 分ほどあおば園の中をまわった後、ゆりは最後に食堂の隣の部屋へ案内された。

「愛、今日から一緒の部屋になる中 1 の吉田ゆりちゃん。色々と教えてあげてね」

「あぁ、うーん……」

ゆりは、荷物を床に下ろすと、愛と呼ばれた同室の子が何か話しかけてきてくれるのかと思ったが、愛はゆりの方をちらりとも見ない。しんとした時間だけが流れる。部屋の奥にあるハンガーフックには、今朝、亜紀にもらったのと同じセーラー服がかけられ、胸のところに「Ⅲ-2」「川上」という学年章と名札がついている。ドアの向こうでは、さっき案内された食堂の方向から「お母さん」が誰かに向かって「ちょっとー、手伝ってぇ」と呼ぶ声が響いてくる。ゆりは勇気を出して、寝転んでマンガを読んでいる愛に話しかけてみた。

「あの……『魔女の宅急便』とか、好きですか?　私、好きで本を持ってきたんですけど」
「あぁ……」
　ゆりは見上げられた視線に、一瞬たじろいだ。鋭いような冷たいような。睨まれているようにも見える。
「私、何か悪いことしたかな……」
　頭から血の気が引いていく。胸の鼓動が手先にまで伝わり、こめかみのあたりが汗ばむ。ゆりは「これ……」と言いながら、『魔女の宅急便』のフイルムコミックスを愛に差し出した。愛は「ふーん」と言いながら、差し出された本を部屋の半分より奥の方にたぐり寄せた。部屋はきっちりと半分こなのかな……。それとも、そんなことは気にしなくても良いのか。ゆりは部屋を真っ二つに分ける見えない線を引いてみて、部屋の真ん中に下ろした自分の荷物を、それよりも手前に引っ張った。何かぎこちなさを感じた。

　その日は同じ棟の 10 人の子どもと「お母さん」2 人で夕食の準備、お風呂などを済ませ、あっという間に夜になったように感じた。今日 1 日の出来事を思い出すと、疲れているはずなのになかなか眠れない。
「なんで、ここに来たんやろう」
　ここには「お母さん」がいて、手作りのご飯も食べられて、お風呂も沸いていて。今の夏子にはできないことが沢山あるんだろう。だけど、完璧な「お母さん」達と食べるご飯よりも、ぼそぼそと独り言をつぶやく夏子と食べるカップラーメンの方が良い。お風呂だって自分で沸かせるし……。
「なんで、ここに来たんやろう」
　ゆりは頭から布団をかぶり、静かに涙を流した。泣きたい時は泣けばいいんだ、スッキリするからと聞いたことがあるが、スッキリするどころか息苦しい。「ぐすん」という音が漏れると、愛に泣いていると気付かれてしまうため、口で息をして唾を飲み込み、静かに涙だけを布団のシーツに押し付けた。

　窓の外から明るさを感じるようになった頃、オルゴールの音楽が棟内に流れてきた。枕元に置いた腕時計を見ると、6 時を指している。ゆりはそのメロディーには聞き覚えがなかったが、オルゴールの音色の余韻が自分の宿命を表しているようで、切なくなってきた。メロディーを耳で追っていて、ふと気付くと布団の中でうずくまり、涙でできたしみが枕に広がっていた。
　愛が布団から起き出して、部屋を出て行った。廊下が騒がしくなってくる。ゆりも身支度をととのえ、朝ごはんの準備を皆で行うために、部屋を出て食堂へ向かった。年下の、小学生の子どもたちが、
「ゆり姉ちゃーん、いっしょに歯磨き行こ」
「ゆり姉ちゃん、お部屋に来てー」

と、駆け寄ってきた。“姉ちゃん”と呼ばれると、それまで一人っ子だったゆりにはたくさんの妹ができたみたいで、くすぐったいような、照れくさいような気分になった。学校へ行く時間が近づき、あおば園の門の前で整列したゆりは、愛と制服を着た男子達のいる列の一番後ろに並んだ。

「お母ちゃんはどうなったんだろう」

中学校までの道のりを、愛と男子達がふざけ合って歩く間、話し相手のいないゆりは夏子のことばかり考えてしまう。

中学校に着くと、まず職員室に向かうようにと聞いていた。4月も後半に差し掛かるところで中学校の入学式はすでに済んでおり、ゆりは中 1 の転入生としてクラスで紹介された。中学校で挨拶を済ませ休み時間になると、クラスの女子 7, 8 人が「何て呼んだらいい?」「部活、何入るの?」「学校を案内してあげる」と言いながら、ゆりの周りに集まってきた。ショートカットで細身の千紗はくりっとした目を輝かせ、立て続けに話しかけてくる。

「ねぇ、今度の日曜日、遊べる?　ゆりちゃんの家に遊びに行ってもいい?」

「うちな……あおば園にいるねん。だから、遊びに来てもらうことはできんかも。でも、私が遊びに行ってもいいかどうか、訊いてみる」

「えー、どこか行くんも訊かなあかんの。おとろしいなぁ」

「おとろしい……?　それなに?　怖いっていうこと?」

「ははっ、めんどくさいっていう意味。あっそうか、これ奈良の方言?　神戸の方言ってあるん?」

「へぇ、そうなんや。神戸は……遊んどぉとか、食べとぉとか、“してる”の意味で“とぉ”って使うかな」

「へぇー、おもしろいな。あっ、沖谷ちゃんが呼ん“どぉ”、とか?」

そう言いながら、千紗が指さした方を見ると、教室の前のドアから担任の沖谷先生が、次
の授業の道具を持って現れた。

給食の時間、千紗に同室の川上さんのことを話すと、

「えーっ、あの川上さんと同じ部屋なん！?　3年生の中でもちょっと怖いほうかなぁ。なんか言われても、気にしやんときぃよー」

中学校に入学したばかりなのに、千紗はどこからそんな情報を集めてくるのかと思う程、学校内の色々なことを知っていて、あれやこれやとゆりに教えてくれた。子どもだけの世界ってなんだか、ほッとするなぁとゆりは思った。

給食が終わり、5 時間目、6 時間目と下校時刻が近づくにつれて、ゆりの体はこわばってくる。あおば園に帰らなければいけない。当たり前のことだけど、クラスの皆は自分の家

に帰る。6 時間目の終わりを知らせるチャイムが鳴った。
「親戚の家も近いのに、私はあおば園に帰るのか……」
　ゆりが見ていた窓の外の青空に、ぼんやりと夏子の笑顔が思い浮かび、鼻の奥がツーンとして、慌てて教科書をカバンに詰めた。
お母ちゃんは、まだ亜紀おばちゃんの家にいるのかな……入院したのかな?
わからないことが多すぎて、胸がざわざわしたまま落ちつかない。

　5 月の第 2 土曜日は母の日。中学校の帰りに通る商店街のあちこちでは、母の日の POP がカラフルに店頭を彩り始めていた。ケーキ屋さんの前のワゴンは、“毎日頑張ってくれているお母さんにごほうびを”という文字で飾られ、焼き菓子の詰め合わせには 1 つひとつカーネーションの造花が添えられている。お母さん……って何よ、と心の中で呟いたゆりの頭の中には、複数のお母さんの顔が思い浮かび、それぞれに対して「毎日頑張ってくれているお母さん」という言葉が当てはまるかどうか確かめてみた。昨年の母の日にゆりは、お小遣いを貯めて買ったカーネーションの鉢植えを夏子に贈った。夏子はそれを大切に、「カーネーションはデリケートなのよ、1 日でも長持ちするように」と言って、本で調べた手入れ法を欠かさず、玄関先に飾ってくれていた。今年の母の日にごほうびをあげたいお母さんは、誰なんだろう。お母さんって、そんなに簡単に取り替えができるもの?
　次の瞬間、アーケードが一旦途切れる信号の手前にある花屋さんから、大きな POP の言葉がゆりの目に飛び込んできた。
“お母さんがいなかったら、わたしもいない”
……そう、やっぱり……お母ちゃんがいなかったら、私も……どこにもいない。
たちまち視界がぼやけ、大粒の涙がポタ、ポタと頬を伝って足元に落ちた。

　ゆりは、歩いてきた方向にくるりと向きを変えて、商店街を早足で歩きだした。商店街を抜けきった所に、大きな神殿がある。ゆりは、その神殿の周りにある廊下を備え付けの雑巾で拭くことにした。あおば園に帰りたくない。でも行く場所がない。
「お母ちゃんと神戸の家に帰りたい……」
　何度も心の中で祈りながら、廊下を拭き続けた。

　ゆりはそれから毎日、中学校の帰りになると、神殿の方へ足を向けた。そして、ただただ廊下を拭いていた。そのうち、毎日、制服姿で膝をついて拭き掃除をしていたため、ひざが　擦りむけて、ヒリヒリ痛むようになった。膝を見つめているゆりの姿を見て、同じように廊下拭きをしていた年配の女性が、びっくりした様子で近づいてきた。
「あらぁー、あんた、真っ赤やないの。これあげるわ。返さなくていいから」
　ゆりが女性の手許を見ると、タオルとゴム紐で手作りしたような、ピンク色の膝当てが目の前に差し出されていた。

「ありがとうございます」
　ゆりは、膝当ての他にも何かをもらった気がした。
「そんなに一生懸命して、何かお願いごとでもあるの?」
「え……はい」
　夏子の顔が思い浮かんだが、どこから話せばよいのかわからなくなり、ゆりはにこっと微笑むだけにした。そして膝当てをつけさせてもらい、また廊下拭きを続けた。ふわふわとした膝の感触、ごつごつした廊下の木目、やわらかな陽の光と春の風、お母ちゃんは、どうしているのかな……。
　あおば園に帰ると、また重苦しい気分になる。
「私の帰る場所は、ここではない。ここにいるのは、どうしても嫌」
　日に日にそうした気持ちがゆりの中で膨らんでいった。

　5 月 3 日。ゴールデンウィーク初日。
「今日は大和高原に行くからねー」
　「お母さん」達が小学生の子どもたちに話すのを聞きながら、ゆりは朝からそわそわして落ち着かない。大和高原に行ってからも、心はどこかよそに行ったままだった。

　あおば園に帰ると、お昼過ぎだった。お昼ご飯の洗い物を皆で済ませると、ゆりは「お母さん」の横へ駆け寄り、まっすぐな目をして切り出した。
「友達と中学校で約束しているから、行ってきたいの。渡したいものがあるって言ってて」
「えっ、でも今日、祝日でしょ。」
「その子、部活で学校に来てるから。もらったらすぐ帰る」
　ゆりは「お母さん」が一瞬、眉間の間に皺をよせたのに気付いたが、できるだけ軽く、そう告げた。
「……じゃあ、もらったらすぐに帰って来て」
「はーい」

　ゆりは、あおば園から歩いて 30 分ほどのところにある駅へ向かった。
「お母ちゃんは、まだ入院していないとしたら、亜紀おばちゃんの家にいるはず。入院していないかどうかは、わからない。でも、亜紀おばちゃんの家に行くと、怒られてあおば園に連れ戻されるだろうな……」
　小走りで駅へ向かう。宝塚に住んでいる祖母の友人・真鍋さんの家なら、何回か行ったことがある。そこに行かせてもらえないかと、ゆりは走りながら考えた。電車賃は、隠し持っていたお金で足りる。

　ゆりは駅に着いた。切符を買おうとして料金表を見上げていると、誰かに肩をトントン

とたたかれた。
振り向くと、うっすらと笑う山田お兄さんが立っていた。
見つかってしまった……。
「どこに行くの?」
「……友達の、……あの」
何とも気まずい沈黙が続いた。やっぱり、怪しまれて後をつけられていた。中学校で待ち合わせだと言って出てきたのに、中学校を素通りして、さらに 15 分ほど歩いた場所にある駅で切符を買おうとしていた理由なんて、とても説明できない。山田お兄さんは、額ににじませた汗をぬぐうと、にこにこしながら、
「電車に乗って、勝手にどこかに行くことはできないよ」
「……」
そんなこと知っている。でも、こうするしか……。山田お兄さんは、駅の横手に停めてある車までゆりを案内した。そして運転席にどんと腰かけると、ゆりがさっきまで走ってきた道を、あおば園へ向けて逆方向に車を走らせた。さっきまで見てきた景色が飛ぶように巻き戻されていくのをゆりは恨めしそうに眺めた。あおば園まで戻ると、事務所の前で 3 人の「お母さん」と事務員さん達が、わあっとゆりのもとへ駆け寄ってきた。「勝手なことをしないように」とくぎを刺され、肩を落としたゆりが部屋に戻ると、「脱走しようとした? ふん」と、愛が冷ややかに出迎えた。

5 月 4 日。ゴールデンウィーク 2 日目。
「よしのがわー」
小学生の子どもたちが朝から嬉しそうに騒ぐのを聞いて、「今日は吉野川なのか」とゆりは思った。昨日のことはまだ懲りていない。でも、昼間はおとなしくしている。吉野川で遊びながらも頭の中でどうすればここから抜け出すことができるのかということを、しきりに考えた。女子棟の横に、共同のお風呂がある棟がある。お風呂は、決められた時間に各自その棟に行くことになっている。1 人になれるとしたら、お風呂に行く時か。

吉野川から帰り、夕食を終えて後片付けも終わった。時計を見ると、夜の 8 時をまわったところだ。
「お風呂に行ってきます」
「お母さん」に告げて、タオルなどお風呂の用意を持って女子棟を出る。ゆりは、言い方がいつもと違って、ぎこちないんじゃないか、ばれるんじゃないかと思って、ひやひやしながら、棟を出て暗い通路を早足で歩いた。前後に誰もいないのを確認して、タイミングを見計らい、そこからサッと横道にそれて、一気に山の坂を駆け下りる。すぐに誰かが追ってくるんじゃないかと、怖くて怖くて、後ろを振り返ることができず、必死で走った。駅まで徒歩 30 分の距離を、歩いている暇などない。できる限りの力を振り絞って、駅まで

走った。

「ゆりがいなくなった」とあおば園の中で騒ぎになるまでは、時間の問題。昨日、一回失敗している。だから絶対につかまりたくない。でも余計に怖い。昨日と同じことになったら……。追いかけて来られる前に、電車に乗ってしまわないといけない。9 時ごろに奈良を出発して、宝塚まで、終電前には着くことができるだろう。駅の明かりが見えてきても、気は抜けない。追っ手が、車で先に駅に向かっているかもしれない。駅に着いて、切符を買い、来ていた電車に飛び乗った。電車が出発するまでは、気が抜けない。追いかけてくるかもしれない。ぽつりぽつりと電車に乗ってくる人が追っ手ではないとわかるまでは、身を縮めて、顔を上げないようにしていた。

しばらくして「早く出発して」と願った電車は出発した。ひとまず、ほっと安堵して力が抜けてへなへなになった。宝塚まで、2 時間ぐらいはかかるだろう。着いたら 11 時をまわるかな。真鍋さん、起きてるかな?　怒られるかな?

夜の電車は昼の雰囲気とは違って、心細い。大人しかいない。大人が怖く感じる。でもゆりの胸には、自分の安心できる場所に向かっているのだという希望の灯がともりはじめていた。

その頃あおば園では、ゆりがいなくなったと大騒ぎになっていた。異変に気が付いたのは、愛だった。

「ゆりのカバンがなくなってる！」

「どういうこと、ゆりなら、さっきお風呂に行くって……」

「調べて！　お風呂にお出かけカバンなんか、持っていかんやん。ゆりは出かける時、いつも赤いカバンを持ってた。それがなくなってる！」

「お母さん」がお風呂を覗くと、ゆりの姿はどこにもなかった。「ゆーり」と呼んでも返事はない。脱衣所の掛け時計は 8 時半をまわったところだ。夜の真っ暗な道を、1 人でどこに行ってしまったというのか。もし何かあったら……。

「大変！」

「お母さん」はそう言い終わらないうちに、大慌てで事務所へ内線連絡を入れた。

ゆりは宝塚駅に着いた。改札の時計の針は、もうすぐで 11 時になるところだ。しんとした真っ暗な道に街灯だけがぽつんぽつんと並ぶ道を、記憶を頼りに真鍋さんの家を目指す。

同じような住宅の立ち並ぶ道を慎重に確認しながら、ここだったと思う家の前に着いた。表札を見ると、「真鍋」と書かれている。型板ガラスでできたドアの奥の方から、ぼんやりと明かりが漏れているように見える。ゆりは、おそるおそる玄関のチャイムを鳴らした。暫く待ったが物音ひとつせず、明かりもぼんやりしたままだ。

「こんな時間に……そうやんね」
心臓がどきんどきんと大きく体を揺らす。大変なことをしてしまったのかもしれない。ここだけを目指してやってきた。もし無理だったら……なんて考えなかった。
震える指でもう一度チャイムを鳴らすと、ドアの向こうでごとんと音がしてインターホンから「……ハイ」と小さく低い真鍋さんの声が返ってきた。
「ゆりです」
「ゆり……。……え?　ゆりちゃんか?」
真鍋さんの声が急に大きくはっきりとした。ドアの向こうで騒がしくばたん、ごとんと音を立て、玄関と庭の明かりがぱあっと灯った。

真鍋さんと娘の瞳さんが温かく迎えてくれたことに、ゆりは心底ほっとした。真鍋さんはゆりから事情をきくとすぐに、あおば園の電話番号を尋ねた。
「……なんせ、１回来たかったようですわ。明日にはそちらへ帰るようにします。どぉーか、帰った時に怒らんようにしてあげてください」
そう言って、ぺこりぺこりと頭を下げている真鍋さんの横で、瞳さんがゆりに温かい紅茶を淹れてくれた。真鍋さんは電話が終わると、晩御飯は? 電車賃は? とゆりに立て続けに訊いた後、
「ゆりちゃんも、こうするしかなかったかもしれへんけどな、たくさんの人に心配をかけてしまったんやから、それは帰ったら謝らなあかんよ。言いたいことがあるんやったら、話し合いをしてもらうことが大事とちゃうか」
そう言いながら、ゆりの寝床をつくってくれた。翌日、約束通りにあおば園へ戻ったゆりは、真鍋さんがお願いしてくれたおかげで叱られることはなかった。ゆりが女子棟に戻ると「お母さん」は、一緒に探してくれていた愛の様子をゆりに伝えた。「愛が、ゆりのカバンがないって教えてくれてね」

ゴールデンウィークは終わった。ゆりは今朝も早くに目が覚めて、6 時ぴったりにオルゴールのメロディーが響くのを布団の中で丸くなり聞いていた。完全に覚えてしまったそのメロディーは学校にいる時も耳の奥でよく流れてくる。
「話し合い……」
朝早く教室に着いたゆりは、窓際の席からぼんやりと空を眺めていた。毎日、午前中は、まぶたが水分を含んで重たいのにも、もう慣れた。
「おはよ。連休どっか行った?」
声のする方を振り向くと、千紗と絵美、隣のクラスの涼子が立っている。
「おはよう。うん……じつは……」
深刻になりすぎないように、少し茶化して連休の出来事を話すと、3 人は「へぇー！」「えー！」と一様に驚いた様子だった。

「なんか大変なんやなぁ、ゆりちゃん。うちらの悩みとは比べもんにならんわ。でも頑張って、お母さんと一緒に暮らせたらいいなぁ」
「うん、ありがと。それでな、ちょっと考えてることがあるんやけど。今日な、帰りにおばちゃんのところに行って、話し合いをしてもらうように頼もうかと思うねん」
「そうやっ、それで思ってること全部言ったら、何か変わるかも！ 頑張れーっ」
千紗が、ぱしぱしとゆりの背中をたたき始めると、絵美と涼子も一緒になってたたき始め、最後には 4 人できゃあきゃあと笑う声が教室に響いた。

ゆりは帰りの挨拶が終わるとすぐに、駅へ向かった。5 駅向こうまでの切符を買う。亜紀の家の場所も、祖母の病院との往復を何度かしているうちに覚えた。あの角をまがると亜紀の家だというところまで来て、ゆりは一旦呼吸を整えるために立ち止まった。おばちゃんとおじちゃんは、ゴールデンウィーク中の騒動で、あおば園と頻繁に連絡を取り合っていたはずだ。はらわたが煮えくり返るほど怒っているに違いない。怖いな……でも行かないと始まらない。なんて言おうか……でもとにかく頼まないと、と考えているうちに心臓がどくどくと音を立て、頭がくらくらしてきた。千紗が「何か変わるかも！」って言ってたな。よしっ、勢いで行くしかない。
ゆりが家の前まで足を進めると、玄関先で掃き掃除をして、ふぅと腰を反らせた亜紀と目が合った。
「……ゆりちゃん！……来たの！」
亜紀の何とも言えない呆れ顔だった。
「お母ちゃんは……?」
とゆりが尋ねている間に、奥の部屋にいる夏子の姿が玄関から見えた。ゆりの視界がたちまちぼやけていき、あぁーっという泣き声とも叫び声ともとれるような声がもれた。夏子はゆりのもとへ近づいてくるが、ゆりは安心したのか嬉しいのか、喉の奥がきゅうっと狭くなって何も言葉が出ない。ゆりは胸の中で、これまで流れを堰き止めていたものがどおっと溢れ出すのを感じた。夏子は、「どう、学校は」と尋ねるが、次の瞬間、「いえいえ」と言いながら右手を顔の前で横に振り、誰かと話している様子だ。「お母ちゃんの調子は変わってないんや……」と思ったが、今日はその話をしに来たのではない。ゆりは、ひくひくとしゃくりあげるのを収めるように深呼吸を 3，4 回してから、ゆっくりと亜紀に切り出した。
「やっぱり、お母ちゃんと離れて暮らすのは嫌や。神戸に帰れるように、もう一度みんなで話し合いをしてほしい」
「ゆりちゃん……この間もみんなに迷惑かけて……今日も制服のままこっちに来て……そんな勝手なことばっかり」
「だって……誰も、聞いてくれへんやんか！」
「おじちゃんがもうすぐ帰ってくるから、上がって待っといて」

亜紀はそう言い残すと、台所に駆け込んでいった。しばらくすると、「本当に申し訳ありません……はい……はい、車で送っていきますので」と、電話で話しているような声が聞こえてきた。

時計が5時をまわったところで、車庫の方から良二の車らしい、ドアの閉まる音がした。亜紀もその音に気付いた様子で、外に駆け出していった。ゆりは、ふぅーっと息を整えた。良二が顔を真っ赤にして玄関から入って来るなり、

「あんたな……この間から……そんな勝手なことばっかりするんやったら、誰も面倒見てくれんようになるで！どうなってもいいんか！」

ゆりは震える両手をしっかりと組み直し、声を振り絞った。

「おじちゃんには……わからへん。他の人も入れて話し合いをしてほしい。そうでないと、またどっかに行くかもしれへん！」

良二の顔がさらにひきつるのがわかったが、ゆりもこれ以上引き下がってたまるかという覚悟の形相で睨み返した。

話し合いの場がもたれたのは、それから 4 日後の放課後だった。中学校の会議室に担任の沖谷先生と一緒に入ってきたゆりは、ロの字に組まれた長机をぐるりと見渡した。夏子、亜紀、良二、あおば園の施設長、あおば園に入所する時について来てくれた児童相談所の担当者が真剣な面持ちで椅子に腰かけている。

「今後、どうしていきましょうか」とあおば園の施設長が切り出した。ゆりは、「お母さんと神戸に帰る」と伝えた。

「お母さんは、どう思われますか?」

児童相談所の担当者が尋ねた。全員の視線と意識が一手に夏子に集中し、次の言葉を待っている。どう思うって……答えは決まっているでしょう。そこに居合わせた大人の誰もが、そう信じて疑わない様子だった。ゆりは、祈るような面持ちで夏子を見つめている。

（ゆりが、嫌がっている……。ゆり本人の意思が一番大事だと思う。）

咄嗟に夏子の口から言葉が出た。

「神戸に……帰ります」

「ちょっと夏子！そんな簡単に子どもの言うことを聞いて…それでいいと思ってるの！」

それまで押し黙っていた亜紀の叫び声が部屋中に響き渡る。ゆりは、神戸に帰ることができるかもしれないと、希望に瞳を輝かせて夏子の顔を覗き込んだが、夏子とは視線が合わなかった。「え……?　ううん」と誰かにささやいている。あおば園の施設長さんも児童相談所の担当者も難しい顔をしてうつむき、長い沈黙が流れる。こんなにきつい言い方をするおばちゃんだっただろうか……とゆりはそれまでの亜紀の言動を振り返っていた。以前の亜紀おばちゃんは、優しくて、時々冗談も言って笑わせてくれるおばちゃんではなかったか。

児童相談所の担当者が困ったような顔つきで、沈黙を破った。
「……もう一度、親戚の方との間でもよく話し合ってみてもらえませんか」
「はい……」
夏子はうつむく。良二は憮然とした様子で、腕を組む。
「うーん……2 人で生活できるとは思えません。あおば園にいれば、何も心配することはないですし。……子どもの言うことだけで簡単に決められるものでもないですから、少し考えさせてください」
「じゃあ、今日はあおば園に……」
あおば園の施設長がそう言い終わらないうちに、ゆりが言葉を重ねた。
「帰らない！」

その話し合いの結果、どこで暮らすのかが決まるまで、あおば園に籍を置いたまま亜紀の家から中学校へ通うことになった。しかし、ゆりは亜紀の家ではなく夏子と一旦、神戸の家に帰ることにした。
ぱんぱんに荷物を詰めたカバン２つを両手に持ち、ゆりは夏子と神戸に帰ってきた。電車の中でも歩いていても夏子はぶつぶつと独りで喋っているが、ゆりには夏子が隣にいるということだけでも十分嬉しく感じられる。駅から家までの道も、一歩一歩が嬉しくて顔がにやけ、重い荷物を抱えているのも忘れてしまうほどだった。ゆるい坂道を上り角を曲がると、茶色い瓦屋根が見えてきた。
ドアの鍵を開け、ドアがバタンと閉まった。しんと静まり返った玄関、廊下、階段。何も変わっていない。はぁーっと溜息がもれた。この家を離れて 1 か月ほどの間に祖母の死など色々とあったのに、その悲しみ、淋しさを癒すことのできる場所がなかった。廊下を祖母が行ったり来たりしていた姿が思い浮かぶ。でも、もう 2 人でやっていくしかない。ゆりは、それまでぴんと張りつめていたものが一気に緩み、とめどなく涙が流れてくるのを感じた。ゆりは夏子に抱きついた。夏子の目からも涙がぽた、ぽたとゆりの額に落ちてくる。
「お母ちゃん……わかるのかな」
ゆりの目の前には、以前のはつらつとした夏子でなく、感情を失ってしまったようにも見える夏子がいる。「でもきっと、大事なことは伝わっている。だって、私と暮らすことを選んでくれたから」

家の中に風を通そうとドアを開け放った時に、ふと庭先を見ると、昨年の母の日にゆりが夏子へ贈った、カーネーションの鉢植えが置いてあった。花の姿はなく、緑色の葉っぱだけがこんもりと生い茂っている。夏子は昨年、ひと回り大きな鉢植えにカーネーションの株を移し替え、気温に注意しながら部屋の中に入れたり、外へ出したりしていたのだ。鉢植えは祖母が入院した頃から、軒下に置きっぱなしになっていた。数日、雨の日もあっ

たためか、土は湿り気を帯びている。
「今年の母の日は、色んなことに追われている内に、気が付いたら終わってたわ。すっかり忘れてた」
そう言ってゆりは、カーネーションの鉢植えを台所まで運び、テーブルの真ん中に置いた。
「花が咲いたら、台所が明るくなるかな……」
台所で夏子が座っている椅子の背もたれに手をかけたゆりは、ハッとして鉢植えに見入った。
「あっ、お母ちゃん、つぼみができてる！」
「あぁ……ほんと」
夏子の表情はしんどさに参っているようで暗く、目元に力がないように見えたが、カーネーションのことに応えてくれたのが嬉しくて、ゆりはふふふん、と鼻歌交じりでつぼみの膨らみを軽くつまんだ。「つぼみはできても、中身のないことがあるのよ」と昨年、夏子が話していたことを思い出したが、このつぼみは見せかけだけでなく、ちゃんと中身も入っている。

台所に色彩を与えるのは、作られた壁の色でも完璧な母親でもない。このお母ちゃんといるから、この台所が一番好きな場所になる。カーネーションだってお母ちゃんだって、再び花を咲かせてみせる。
そう思いながらゆりは、これから先に幾重にも連なる話し合いの山々に思いを馳せながら、夏子とともに生きていく覚悟を決めた。

※この物語は実際の体験と、それを探究する虚構の物語をもとにしています。
実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。

『生体肝移植ドナーをめぐる物語』

一宮　茂子

はじめに

私は看護師として長年にわたり大学病院の高度先進医療に携わってきました。なかでも1990年にはじまったY大学病院の生体部分肝臓移植（以下、生体肝移植）は、広くメディアで取り上げられたことにより世論や医療者、患者や家族・親族の注目をあびました。ですが関心の的になったのは、臓器をもらう患者（レシピエント）であって、臓器をあげる人（ドナー）ではなかったのです。とくに医師たちは「患者」というより、移植前は「ドナーの肝臓」、移植後は「レシピエントの肝臓」という「モノ」に注目しているように見えました。

私はあしかけ20年にわたって移植医療に携わる機会がありました。その間、看護師の立ち位置から見た移植医療の光と影、とくに移植の影となったドナーの負の側面は先行研究も少なく、よくわかりませんでした。そのため私はドナーを体験した人たちに直接教えていただくというスタンスからインタビュー調査を行いました。その結果、ドナーの移植前から移植後15年以上にわたって多くの知見を得たのです。本稿ではドナーのゆれ動く心情やドナーを取り巻く人たちとの関係性について広く社会に公開したいと思います。今回は生体肝移植の概観を説明します。以後、先行研究、研究方法、対象ドナーを紹介したうえで、ドナーの物語を複数回にわたって述べていきます。

1　生体肝移植の概観

生体肝移植とは、他に助けるすべのない末期の肝不全患者にたいして、健康な人から提供された肝臓の一部を移植する治療法です。日本の生体肝移植は1989年に始まり、医学界では広く知られるようになりました。とは言ってもあなたの身の回りに生体肝移植術を受けた方がおられますか？　映画や小説の世界でとりあげられていても、その数は1万にも満たず、実態もわかりにくいと思います。そこで今回は移植の歴史的経緯を述べたうえで、生体肝移植の基本的な医学的特徴を説明し、社会的にはどのように受けとめられているのかを見ていきます。

1-1　日本の生体肝移植の歩み

日本初の人体組織のやり取りを合法的かつ組織的に始めたのは血液事業「献血」でした。1950 年代の献血は金銭が媒介する「売血」が主流でしたが、1960 年代「提供者の健康」および「血液の安全性の担保」という理由から政府によって禁じられるようになり、「献血」という臓器提供様式へと改められ(注1)、献血の概念が人体組織の提供に「無償の善行」という普遍的な意味を与えたのです［倉田 2011］。

1958 年「角膜移植に関する法律」が交付され施行されました。この法律によって死体からの角膜移植は合法的におこなえることになりました［長谷川 2008］。

1967 年世界初の心臓移植が南アフリカでおこなわれました［香西 2005］。翌年の 1968 年におこなわれた日本初の心臓移植（和田心臓移植）は、その移植が妥当なものであったのかをめぐって裁判まで起こり結果的に証拠不十分で不起訴となりました。しかし、この事件が招いた医療不信のために日本ではとくに脳死移植にたいする疑念が強くなり、その後 30 年ほど保留される原因となったのです［香西 2005］。

一方、腎臓移植（以下、腎移植）は生体移植が主流となって数多くおこなわれてきました。生体肝移植は、生体腎移植の歴史的な流れにのって脳死問題を回避できる手段として開始されたのです。このようなアウトラインにそって、以下、日本の生体肝移植の歩みを紹介します。

1-1-1　腎移植

世界初の腎移植は 1954 年に米国の一卵性双生児間でおこなわれ成功しました［香西 2005］。日本の臓器移植は生体腎移植で始まりました［小松ほか 2010: 7］。日本初の腎移植は 1956 年におこなわれましたが、それは一時的な移植でした［小松ほか 2010: 7; 後藤 2011: 301］。永久生着をめざした日本初の本格的な生体腎移植は(注2)、1964 年に妻をドナー、夫をレシピエントとして東京大学でおこなわれたのです［丸山 2009: 85］。

1972 年厚生労働省は透析の普及を目的として「腎不全 5 カ年計画」を開始し人工腎臓（透析装置）の整備に着手しました。その結果、患者数の急増、透析による社会復帰の制約、高額な透析費用による社会保険医療・公費医療の負担が増大しました。そのため厚生労働省は、死体からの腎移植を推奨するようになりました［長谷川 2008; 倉田 2011］。1975 年に「腎臓移植普及会」が発足し、死体腎移植の普及啓蒙活動をおこなっていました［長谷川 2008］。しかし、臨床現場では米国での腎移植の成績を参考に、死体よりも生着率の高い血縁者からの生体腎移植を推奨し年々増加していきました［倉田 2008］。

厚生労働省は死体腎移植を、臨床現場では生体腎移植を推奨するという背景のもとで 1980 年に「角膜及び腎臓の移植に関する法律」が施行されました［大蔵省印刷局編, 1980: 27-28］。この法律によって死体腎移植が合法的に実施できるように移植体制が整備された

（注1） 輸血の歴史（http://www.jrc.or.jp/mr/pdf/輸血の歴史 20150619%EF%BC%88A3 版%EF%BC%89.pdf , 2018.5.23 確認）

（注2） 「生着」とは、移植した臓器が一定期間後に機能していることをさす。

のです［武藤 2003; 倉田 2011］(注3)。しかし厚生労働省の予測とは異なり、死体腎移植よりも生着率が高い生体腎移植が増加していきました。こうした状態が現在でも続き事例数の少ない死体移植は合法化されましたが、臨床で主流としておこなわれている生体移植は移植医と各移植施設の自主規制にゆだねられた状態が続き、今日の生体移植を中心とした移植医療の地盤が築かれました［倉田 2011］。

1995 年アメリカの UNOS（United Network Organ Sharing）を参考にして設立された「日本腎臓移植ネットワーク」は、全国 7 ヶ所のブロックセンターと 1 ヶ所のサブセンターで運営され、移植施設から独立した第三者機関です。これまで死体腎移植を推進する施策において、必要とされていた移植コーディネーターの役割が腎移植を適正かつ円滑に推進するために、公平・公正な臓器の分配システムを運用する実務者となりました［長谷川 2008］。

一方、移植には必須である画期的な免疫抑制剤が 1981 年に開発されました。それがスイス・サンド社のシクロスポリン（Ciclosporin）です。この免疫抑制剤は、腎臓、心臓、肝臓、肺などすべてにわたり、これまでの臓器移植の成績を向上させる原動力となりました［後藤 2011: 561］。さらに 1986 年に報告された藤沢薬品の FK506 タクロリムス（Tacrolimus）は、日本で発見され開発された免疫抑制剤であり前述のシクロスポリンに比べ、その数十分の一の量でほぼ同じ効果があり世界に誇れる免疫抑制剤として広く知られています［落合 2014: 124］。

1-1-2　肝移植

世界初の肝移植は、1963 年米国で Starzl が 3 歳の胆道閉鎖症の男児におこないました。このときのドナーは開心術中に死亡した心停止ドナーでした［川崎・石崎 2006］。世界初の生体肝移植は、1988 年ブラジルで Raia によって 23 歳の母親から 4 歳の胆道閉鎖症の女児におこなわれました［田中ほか 1992］。

日本では 1989 年に「緊急避難的手段」として島根医科大学で 1 例目がおこなわれました［永末 1990］。しかし生体肝移植がすべて緊急避難的におこなわれたわけではありません。Y 病院の臨床現場に携わっていた私は、当時の生体肝移植を始めるにあたって、病院のあらゆる部門を巻き込んだ職員研修が計画的に進められたことを経験しました。Y 病院の移植医たちの専門知や経験知や手術手技はすでに世界トップレベルであり、海外の主な移植施設との共同研究を通して現場見学や研修をおこなっていたのです［田中ほか 1991］。そのため当時の移植医のなかには「生体肝移植は脳死肝移植とは別の特徴をもつ選択肢として重要な位置を占めるものと確信する」と報告されています［田中ほか 1992; 1993］。しかし、これらは脳死移植が閉ざされたなかでの論調でした。

（注3） この法律では、心臓死下では本人の提供の同意がなくても家族の同意があれば角膜と腎臓は摘出できる［高橋 2009］。心臓死下での臓器提供は現在でもこの骨子は変わらず、さらに膵臓も提供をおこなうことが可能である［日本臓器移植ネットワーク，「臓器提供についてご家族の皆様方にご確認いただきたいこと」（http://www.jotnw.or.jp/studying/pdf/setsumei.pdf，2018.5.16 確認）］.

日本の当初の生体肝移植は親から胆道閉鎖症のわが子へ血族 1 親等間の移植が殆どでした。1993 年に信州大学で実施された成人間での生体肝移植を転機に［Hashikura et al 1994］、対象患者が成人にも拡大され、末期の肝不全患者にたいする救命手段として移植対象となる病気が拡大されていったのです。

1-1-3　脳死臓器移植

脳死問題を回避できる生体移植が増加するなかで長年の議論の末に 1997 年「臓器の移植に関する法律」（平成九年七月十六日法律第百四号　以下、臓器移植法）が成立し施行されました[注4]。この臓器移植法は、脳死後に臓器を提供する場合、本人の書面による意思表示と家族の承諾を必要とし、民法上の遺言可能年齢に準じて 15 歳以上の年齢制限という世界でもっとも厳格なルールでした。そのため 2010 年臓器移植法が施行されるまでの 13 年間に脳死後の臓器提供者はわずか 86 名でした［日本臓器移植ネットワーク］。しかしこの臓器移植法は「（脳）死者からの臓器摘出のルールしか定めておらず、生きている提供者の保護の規定はない」のです［櫛島 2001: 14-15］。現在でも同様です。

2009 年 7 月 17 日臓器移植法が改正され（以下、改正臓器移植法と記す）「脳死は人の死」「家族承諾」「年齢制限の撤廃」「親族優先」などの一部が改訂されました（平成二一年七月一七日法律第八三号）［厚生労働省 2010］。2010 年 7 月 17 日改正臓器移植法が全面施行され、本人の意思が不明でも家族の承諾があれば提供可能となりました。これにより 15 歳未満でも脳死後の臓器提供が可能となりました。その結果、臓器移植法改正前までの 13 年間の脳死移植ドナーは 86 例であったのに比べて、改正後から現在に至るまでに 440 例（2018.5.16 現在）と著しく増加し、合計 526 例となりました［日本臓器移植ネットワーク］。とはいえ世界的に脳死ドナーは不足しており代替療法としての再生医療などは、いまだ実験段階です。そのため生体臓器移植は脳死臓器移植の補完として今後も続くと予想され［笠原・江川 2006; 岩波 2009］、その状況は今でも変わりません。

しかし、この改正臓器移植法にも生体臓器移植の法的な規制は盛りこまれていません。あるのは拘束力のない「『臓器の移植に関する法律』の運用に関する指針（ガイドライン）」[注5]と「日本移植学会倫理指針」［日本移植学会 2014a: 38-41］です。さらに移植施設による自主規制と当事者間の合意を根拠として実施されています。

1-1-4　生体肝移植の現況

脳死ドナー不足を背景にその後も生体移植数は増加し続けています。とくに成人にたいする生体肝移植が増加したのは 1998 年 2 月、京都大学で右葉の生体肝移植がおこなわれたころです［菅原 2003; 笠原・江川 2006］。1998 年 4 月からは病気や年齢に制限がつけ加

(注4)　厚生労働省, 1997,「臓器の移植に関する法律」（平成九年七月十六日法律第百四号）（http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H09/H09HO104.html, 2018.5.20 確認）.

(注5)　厚生労働省,「『臓器の移植に関する法律』の運用に関する指針（ガイドライン）」（http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/zouki_ishoku/dl/hourei_01.pdf, 2018.5.18 確認）.

えられてはいるものの生体肝移植に健康保険が適用され［菅原 2003］、2004 年 1 月にはさらにウィルス性肝炎の肝硬変や条件つきで肝細胞癌などの保険適用が拡大され、成人の移植数は飛躍的に増加しました［笠原・江川 2006; 菅原 2008］。

2016 年末までの肝移植総数は 8,825 であり、ドナー別では、死体移植が 378（脳死移植 375、心停止移植 3）、生体移植が 8,447 でした。また、初回移植 8,537、再移植 274、再々移植 14 でした（死体移植がおのおの 304、66、8、生体移植がおのおの 8,233、208、6 でした）。1989 年の開始以降右肩上がりで増加してきた生体肝移植数は、2005 年に 570 のピークとなり、その後は減少に転じて 2007 年以降は 400 台、2012 年以降は 300 台で推移しています。1999 年に開始された脳死肝移植数は 2009 年までは年間 2～13 でしたが、改正法が施行された 2010 年に 30 と著明に増加し、2015 年には初めて年間約 57 と増加しました。累積生存率における脳死移植は、1 年 88.1%、3 年 84.8%、5 年 82.3%、10 年 76.1%、15 年 76.1%であり、生体移植は 1 年 84.7%、3 年 80.6%、5 年 78.2%、10 年 72.8%、15 年 68.5%、20 年 66.0%、25 年 65.2%であり、脳死移植と生体移植の差はみられません［日本肝移植研究会 2017］。

米国の Organ Procurement and Transplantation Network (OPTN)の統計によると、米国で 2016 年の 1 年間に 7,841 の肝移植がおこなわれ、そのうち死体肝移植（脳死ドナー又は心停止ドナーからの肝移植）が 7,496、生体肝移植が 345 でした。2005 年以降の肝移植は 6000 超が一定しておこなわれ、2016 年、2017 年と続けて年間 7,000 を超えました。生体肝移植は 2001 年の 524 をピークに半減しました。以前は年間 250 前後がおこなわれていましたが、2015 年以降は 359, 2016 年は 345 と、300 を超えています。米国はまさに移植大国であり、日本と米国の生体移植と脳死移植の関係は全く反対です［日本移植学会 2017］。その詳細な要因は他稿にゆずり、以下に生体肝移植の医学的特徴について見ていきます。

1-2　生体肝移植の医学的特徴

肝臓の位置は上腹部右側、肋骨の後ろ側にあり人体のなかでもっとも大きな臓器です。成人の肝臓の重さは体重の約 2%で 1,000g から 1,400g です。肝臓は胆汁を分泌して消化を助ける働きのほかに胃や腸から戻ってくる血液中に含まれている栄養の処理、貯蔵、中毒性物質の解毒、分解、排泄、血液性状の調節、身体防衛作用などがあります［京都大学医学部附属病院移植外科・臓器移植医療部 2004: 1-2］。肝臓は極めて多様な機能を営む臓器であることから現在の科学技術を駆使しても人工肝臓を作ることはできません［日本移植学会 2013］。しかし肝臓は以下のような医学的特徴があるために生体移植が可能なのです。

1-2-1　解剖学的特徴と臓器特異性

肝臓は肝臓に入る血管（肝動脈、門脈 (注6)）と肝臓から出ていく血管（肝静脈）と胆管が、

(注6)　門脈とは胃や腸からの栄養に富んだ血液を集める静脈で肝臓に入る血管である。

左右にわかれています。そのため肝臓自体を大きさが異なる二つに分割することができるのです［田中ほか 1992］。生体肝移植とはこの解剖学的特徴を利用して生きた健康体のドナーの肝臓の一部を切り取り、肝不全のレシピエントの肝臓をすべて取り除いて移植する先端医療です。

ドナーが提供する肝臓は、小さい小児の場合は肝臓全体の約 4 分の 1 にあたる左葉の外側区域を、大きい小児に移植する場合は肝臓全体の約 3 分の 1 にあたる左葉を、成人に移植する場合は肝臓全体の約 3 分の 2 にあたる右葉を切除して移植します（図 1 参照）［京都大学医学部附属病院移植外科・臓器移植医療部 2004: 43］。

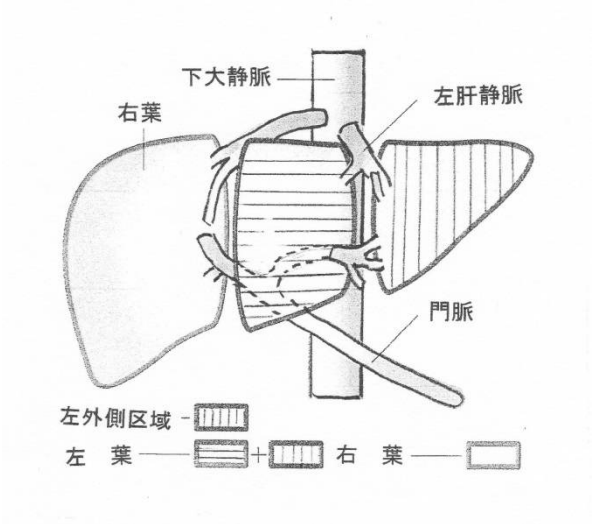


図 1　　ドナーの肝臓切除部位

京都大学医学部附属病院 移植外科・臓器移植医療部，2004，

田中紘一監修『肝臓移植のためのガイドブック』8 頁より引用一部改変

正常な肝臓は一部を切除しても生体の求めに応じて再生し、十分になれば再生が止まるという臓器特異性があります。したがって、その一部をとり出して人に移植すれば生着した肝臓は、数週間から数ヶ月で必要に応じて増殖再生し、その人の成長とともに発育していきます。もちろんドナーの肝臓はほぼ以前の大きさまで再生します［田中ほか 1992］。

1-2-2　肝移植ができる病気／できない病気

肝移植ができる病気は、劇症肝炎 (注7)、先天性肝・胆道疾患、先天性代謝異常症、Budd-Chiari 症候群 (注8)、原発性胆汁性肝硬変 (注9)、原発性硬化性胆管炎 (注10)、肝硬変（肝

(注7)　劇症肝炎とは、急性肝炎のうちとくに肝細胞の破壊が急激に進んで肝機能が維持できず肝不全状態になる病気。

(注8)　Budd-Chiari 症候群とは、肝臓から出て行く肝静脈や心臓に戻る下大静脈がなんらかの原因で閉塞すると、肝臓をめぐる血流全体が障害されて肝臓内に血液が滞り、食道静脈瘤、脾臓の腫れ、腹水などの症状をおこす症候群のこと。

(注9)　原発性胆汁性肝硬変とは、肝細胞でつくられた胆汁を排泄する管が肝臓内で徐々に壊されるために胆汁の流れが悪くなり、最終的には肝硬変へ進行する病気。

(注10)　原発性硬化性胆管炎とは、慢性の炎症で胆管が細くなるために胆汁の流れが悪くなり、肝臓への負担が持続することで最終的に肝硬変から肝不全になる病気。

炎ウィルス性、二次性胆汁性、アルコール性、その他)、肝細胞がん（ただし、がんが 1 個だけで大きさが 5 cm 以下またはがんが 3 個までで大きさが 3 cm 以下、脈管に浸潤しておらず、肝臓以外にがんがないもの)、肝移植のほかに治療法のないすべての病気です［日本移植学会 2017］。

肝移植ができない病気は、胆道系以外の活動性感染症や悪性腫瘍がある場合、転移性肝腫瘍、高度の心肺機能異常、精神医学的に不安定な状態と周囲からの支援がえられない場合、過去 6 ヶ月以内のアルコール依存あるいは薬物依存、非可逆的な脳障害や安定していないエイズ（後天性免疫不全症候群 AIDS）などです［堀内 2012］

1-2-3　利益と危険

1)　医療者側からみた利益と危険

生体肝移植の利益は、緊急手術ではなくて(1)待機手術が可能であること、したがって手術まで時間があるため患者の体調を整えて(2)良好な術前状態で手術ができること、レシピエント手術と並行してドナーの肝臓を摘出するため(3)摘出した肝臓の保存時間が短いこと、(4)ドナーの肝臓の質が保証されることです。一方、危険は、(1)健康なドナーに本来なら必要のない外科的手術をおこなわねばならないこと、(2)ドナー手術によってドナーの健康を害し、命を落とす危険性があることです。

2)　患者側からみた利益と危険

(1)　レシピエント側からみた利益と危険

レシピエントの最大の利益は、移植をしなければ「死」は確実であるが、移植をすれば助かる確率があることです。危険は、移植手術は大手術であるため身体的、心理的負担が非常に大きくなります。そのため術後の回復過程で痛みや倦怠感が強く辛い思いすることです。さらに一般外科と異なっているのは移植した肝臓の拒絶反応を抑えるために免疫抑制療法が原則として生涯必要となります。その免疫抑制剤の効果を最大限に発揮させて副作用を最小限におさえるため、適正な血中濃度が保たれるように退院後も定期的な通院検査が生涯にわたって必要となります。免疫抑制剤の副作用は、高血圧、多毛、糖尿病、腎障害、発がんなどがあります。さらに自己免疫力を抑えるため感染しやすくなります。

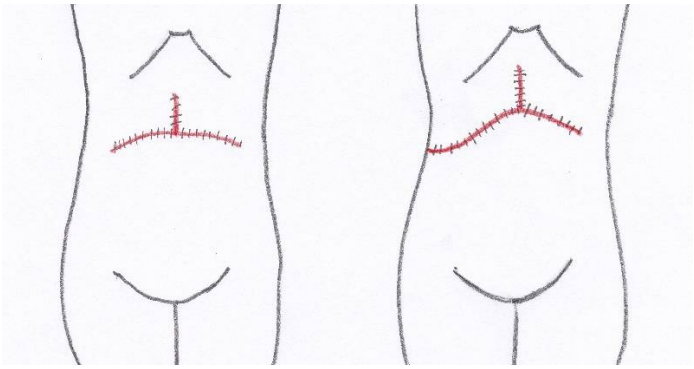
レシピエントは移植をすれば終わり、つまり「治った」のではなくて、移植後からこそ治療の始まりとなります。したがってレシピエントは移植後の自己管理（小児の場合は家族の管理）が重要となります。その他の合併症として、腹腔内出血、つないだ血管の血栓、胆管や腸管の縫合部からの漏れ、腸の癒着による腸閉塞などです（京都大学医学部付属病院移植外科・臓器移植医療部 2004: 28-30)。そして腹部には逆 T 字型の傷跡が残ります（図 2)。

(2)　ドナーから見た利益と危険

ドナーは、本来なら必要がない肝臓の一部摘出術であるため利益は全くありません。強

いて言えば、自ら身体的、心理的、社会的な負担と犠牲を担ってレシピエントの命を助けることができるという心理的な利益があることです。

ドナーの最大の危険はドナー手術による死亡[注11]、重篤な術後合併症による後遺症によってそれまでの生活が維持できなくなること[注12]、その他の合併症として、傷跡のケロイド、胃部の不快感、胃炎、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、腸の癒着による腸閉塞、胆汁漏れ、胆管狭窄、腹膜炎、傷の感染、腹腔内膿瘍、腹水、胸水、うつ状態などです（京都大学医学部付属病院移植外科・臓器移植医療部 2004: 46)。そして腹部に下記のような傷跡が残ることです（図 2)。



ドナー　　レシピエント

図 2　ドナーとレシピエントの傷跡（どちらも 2000 年代前後の成人例の場合）

1-3　ドナーの倫理的条件

健康体であるドナーに本来なら必要がない肝臓の一部を摘出する手術は望ましくありません。しかし代替療法はなく、移植以外に選択肢がないなかで、脳死移植ではなく生体移植を選択せざるをえない場合は、生体ドナーへの倫理的な配慮が不可欠です。生体肝移植がおこなわれた当初は、親から子への血族 1 親等間の移植がほとんどでした。その後、成人の子から親への血族 1 親等間、きょうだい間の親族 2 親等間、おじ、おば、甥、姪の親族 3 親等間および配偶者間へと拡大されていきました。ですが各移植施設によってドナーの親等拡大の規定は異なっていました。以下は生体臓器移植のドナーについて、日本移植

[注11] 成人例にたいする生体肝移植数の増加に伴い、ドナー肝臓の右葉を用いるようになりました。その結果、ドナーの合併症が増加し、胆道関連、感染症関連、ドナーの残肝容積に関連する合併症などにより、ドナーの安全性が揺らいでいます。2002 年にはアメリカで、2003 年には日本でドナーの死亡が報告されました［日本肝移植研究会ドナー安全対策委員会 2004］。海外でおこなわれてきた生体肝移植ドナー手術による死亡例は 30 例程度あるといわれています［熊本大学移植医療センターHP 2012］。

[注12] たとえば群馬大学で生体肝移植ドナーの下半身麻痺の後遺障害事故がありました。2006 年 7 月 28 日付けでホームページに公開されています（http://www.med.gunma-.ac.jp/blogs/hotnews/archives/2006/07/422.shtml, 2018.5.17 確認）。

学会倫理指針の内容を一部抜粋したものです。

「ドナー対象者は親族に限定する。親族とは 6 親等内の血族、配偶者と 3 親等内の姻族である。親族に該当しない場合においては、当該医療機関の倫理委員会において、症例ごとに個別に承認を受けるものとする。その際に留意すべき点としては、有償提供の回避策、任意性の担保などである。さらに、事前に日本移植学会倫理委員会に意見を求めなければならない」となっています。そして、「提供は本人の自発的意思であり、報酬を目的としないこと。提供意思が他者からの強制ではないことを精神科医などの第三者が確認すること。また確認したことを診療録に記録し公的証明書の写しを添付すること」になりました。さらに「ドナーからインフォームド・コンセントをえる場合には、ドナーの危険性、およびレシピエントにおける移植治療による効果と危険性について説明し、書面により移植の同意をえなければならない」と規定されています［日本移植学会 2014］。

1-3-1　生体肝移植の社会的背景

日本には脳死臓器移植の法律はありますが、生体臓器移植の法律はありません。そのため「日本の移植医療では、脳死者の方が生きている人より手厚く保護されているということになりかねない」［櫛島 2001: 15］という論調がある一方で、法律をつくると制約されて消極的な医療となり、ドナーの人権などの倫理問題が解決されるとは限らない［高橋 2008］、と考える医療者もいます。また脳死移植法改正審議において、ある代議士は「脳死からの臓器提供がおこなわれないまま、生体移植について強い規制をするのが本当にいいのかどうかという議論も当然ある」［岩波 2009］、として法律の制定には消極的でした。臓器の移植に関する法律の一部は 2009 年 7 月 17 日に改正されましたが、日本には生体臓器移植の法律がない現状が続いています。

生体肝移植は 2003 年に日本で初めてドナーの死亡が報告され［日本肝移植研究会ドナー安全対策委員会 2004］、生体臓器移植医療の根底を揺るがす事態が生じました。これにより、生体肝移植をめぐるドナーの問題が以前より強く指摘されるようになりました。そして、生体肝移植ドナー体験者の会［2003］の有志が「生体肝移植ドナー調査に関する要望書」を厚生労働省に提出したことを受けて(注13)、日本肝移植研究会が 2004 年に初めて郵送による質問紙調査を実施しました。この結果は別途、後日に紹介いたします。

その後 2006 年生体腎移植をめぐる愛媛県宇和島徳州会病院の臓器売買事件を受けて、厚生労働省は「臓器移植法の運用に関する指針（ガイドライン）」を一部改定し（2007.7.12）、初めて生体臓器移植についての規定を盛り込みました［愛媛新聞 2007.7.13］。指針では「生体からの臓器移植は、健常な提供者に侵襲をおよぼすことから、やむをえない場合に例外として実施されるものである」とされ(注14)、やむをえない場合の例外と位置づけられたの

(注13)　「生体肝移植ドナー調査に関する要望書 2003 年 2 月 4 日」（http://www.lifestudies.org/jp/seitai.htm, 2018.5.20 確認）.

(注14)　厚生労働省、「臓器の移植に関する法律」の運用に関する指針（ガイドライン）（http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/zouki_ishoku/dl/hourei_01.pdf, 2018.5.17 確認）.

です。そのため青野［1999］が懸念していたように、生体臓器移植は家族内の問題とみなされ、社会問題として認知されにくい状況におかれているといえます。

1-3-2　生体肝移植治療の八つの特徴

このような社会的背景のもとでおこなわれる生体肝移植治療には、先行研究と私の臨床経験から、次のような八つの特徴があるといえます［一宮 2010; 2011; 2012］。まず、腎不全患者には透析療法という代替療法[注15]がありますが、(1)肝不全患者には代替療法がないこと。肝不全患者は死に直面していて、(2)移植をしないと死亡すること。生体肝移植には、(3)生体ドナーが必須であること。この医療は、(4)生きた人間の身体の一部が医療資源となること［安藤 2002］。ドナーは身体的、心理的、社会的に大きな負担と犠牲を強いられるため、(5)近親家族以外の他者には（積極的な意思表示がない限り）依頼しにくいこと。さらに、(6)ドナーの負担や犠牲は介護や育児のように金銭や時間で分配できないこと。したがって、(7)ドナーは近親家族の誰かひとりが全面的に担うしかないこと。(8)患者は（一部を除いて）余命告知を受けているため時間的制約があること。以上、これらの八つの生体肝移植治療の特徴をふまえて、ドナー候補者が選定され、決定されることになるのです。

生体肝移植ドナーは、倫理的条件が親族 6 親等まで拡大されようと、あるいは親族以外の他人でも決められた条件を満たせばドナーになれるとしても、実際のドナーの続柄は、小児では両親が 95%、成人では子ども 44%、配偶者 24%、きょうだい 18%、両親 10%であり［日本肝移植研究会 2017］、近親家族のドナーが非常に多いのが現状です。このことは、生体肝移植の八つの特徴である(1)、(2)、(3)、(4)、(8)の理由によって(5)、(6)の特徴が浮き彫りになり、万が一の事態を考えると家族でないと責任が負えないという家族規範に起因して、(7)の近親家族が全面的にドナーを引き受けていると考えられます。このような状況は、生体臓器移植が家族内の問題として閉ざされることにもなり得ます。本対象者のなかにも家族規範に起因した事例がみられました。このような事例は別途、後日に紹介いたします。

2　次回のお知らせ

移植には、移植前から移植後、退院後から終末期のタイム（時間軸）のなかで、多くのアクター（関与者）のかかわりを必要とし、多くのファクター（要因）によって相互作用が生じます。そしてドナー体験者は「これで良かったのか？」と悲喜こもごもの物語が生まれます。次回は先行研究の知見をふまえて分析枠組みを見ていく予定です。

[注15] 透析療法には、血液を体の外部にある「ダイアライザー」と呼ばれる透析器へ導き、浄化された血液を体にもどす「血液透析」と、患者自身の体内の腹膜を透析膜として利用する「腹膜透析」がある。

３　文献

安藤泰至，2002，「臓器提供とはいかなる行為か？――その本当のコスト」『生命倫理』12(1): 161-167.

青野透，1999，「『任意』の臓器提供――再移植をめぐって」『法学セミナー』536: 48.

後藤正治，2011，『後藤正治ノンフィクション集第 2 巻――甦る鼓動 1991・生体肝移植 2002』ブレーンセンター.

長谷川唯，2008，「日本における移植コーディネーターの成立」立命館大学大学院先端総合学術研究科 2007 年度博士予備論文.

Hashikura Y, Makuuchi M, Kawasaki S et al., 1994, “Successfu1 living-related partial liver transplantation to an adult patient,” *The Lancet*, 343(8907): 1233-1234.

堀内彦之，2012，「肝臓移植」『久留米医学会雑誌』75(3-4): 103-109.

一宮茂子，2010，「生体肝移植ドナーの負担と責任をめぐって――親族・家族間におけるドナー決定プロセスのインタヴュー分析から」『Core Ethics』6: 13-23 .

一宮茂子，2011，「生体肝移植をめぐる移植後の家族変容――ドナーインタビューの分析より」『Core Ethics』7: 1-10.

一宮茂子，2012，「生体肝移植ドナーが経験したインフォームド・コンセント――ドナーインタビューの分析より」『Core Ethics』8: 53-62.

岩波祐子，2009，「臓器移植の現状と今後の課題（1）――法改正の背景と国際動向」『立法と調査』298: 36-52.

笠原群生・江川裕人，2006，「肝臓移植」『綜合臨床』55(8): 2045-2052.

川崎誠治･石崎陽一, 2006,「肝移植とは――利点と問題点」『医学のあゆみ』217(3): 239-243.

小松美彦・市野川容孝・田中智彦，2010，『いのちの選択――今、考えたい脳死・臓器移植』岩波ブックレット.

倉田真由美，2011，『医療従事者側から見た生体肝移植のこれまでの評価と今後の課題』2008-2010 年度科学研究費補助金研究成果報告書，滋賀医科大学.

京都大学医学部附属病院移植外科・臓器移植医療部，2004，田中紘一監修『いのちの贈りもの――肝臓移植のためのガイドブック』.

丸山英二，2009，「生体臓器移植におけるドナーの要件――親等制限」城下裕二編『生体移植と法』日本評論社，83-96.

武藤香織，2003，「『家族愛』の名のもとに――生体肝移植と家族」『家族社会学研究』14(2): 128-138.

永末直文，1990，「執刀記――日本初の生体肝移植――今初めて明かされる難手術までの一部始終！」『文藝春秋』68(1): 228-238.

日本移植学会，2014，「日本移植学会倫理指針」日本移植学会（編）『日本移植学会設立 50 周年記念誌』38-41.

日本肝移植研究会ドナー安全対策委員会，2004，「生体肝移植ドナーが肝不全に陥った事例の検証と再発防止への提言」『移植』39(1): 47-55.
日本肝移植研究会，2017，「肝移植症例登録報告」『移植』52(2-3): 134-147.
櫛島次郎，2001，『先端医療のルール――人体利用はどこまで許されるのか』講談社.
落合武徳，2014，「タクロリムス（FK506）――免疫抑制剤の開発　千葉大学第 2 外科が行ったこと」日本移植学会（編）『日本移植学会設立 50 周年記念誌』120-127.
大蔵省印刷局編，1980，『法令全書昭和 54 年 12 月号』大蔵省印刷局.
菅原寧彦，2003，「ドナーに関する倫理的問題――移植医の立場から」『ジュリスト』1252: 127-129.
菅原寧彦，2008，「肝移植患者」『Modern Physician』28(1): 68-71.
高橋公太，2008，「開会の挨拶」高橋公太編『腎移植連絡協議会からの提言　生体臓器移植の法的諸問題――法律は本当に必要なのか』日本医学館: 1-2.
高橋公太，2009，「移植医療における倫理的問題――宇和島問題を考える」『新潟医学会雑誌』123(7): 333-335.
田中紘一・加藤大典・上本伸二ほか，1991，「肝移植」『OPE nursing』6(7): 616-623.
田中紘一・上本伸二・小澤和恵，1992，「生体肝移植」『BIOmedica』7(5): 503-507.

4　オンライン文献

香西豊子，2005，「市民が考える脳死・臓器移植――専門家との対話を通じて」第 1 回会合資料，(http://www.cse.dendai.ac.jp/i/wakamats/braindeath_doc/Report_A/06-4.pdf, 2018.5.22 確認)
厚生労働省，1997，「臓器の移植に関する法律」（平成九年七月十六日法律第百四号），（http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H09/H09HO104.html，2018.5.20 確認）.
厚生労働省，「『臓器の移植に関する法律』の運用に関する指針（ガイドライン）」（http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/zouki_ishoku/dl/hourei_01.pdf，2018.5.20 確認）.
熊本大学移植医療センターHP，2012，（http://www2.kuh.kumamoto-u.ac.jp/transplant/patient/liver_transplant/05_06_04.html，2018.5.24 確認）.
群馬大学医学部附属病院 森下靖雄，2006，「生体部分肝移植肝臓提供者の後遺障害事故について」(http://www.med.gunma-u.ac.jp/blogs/hotnews/archives/2006/07/422.shtml, 2018.5.20 確認).
日本移植学会，2013，「臓器移植ファクトブック 2013」（http://www.asas.or.jp/jst/pdf/factbook/factbook2013.pdf，2018.5.20 確認）.
日本移植学会，2017，「臓器移植ファクトブック 2017」（http://www.asas.or.jp/jst/pdf/factbook/factbook2017.pdf，2018.5.20 確認）.

日本臓器移植ネットワーク，「移植に関するデータ」
（ https://www.jotnw.or.jp/datafile/offer_brain.html，2018.5.20 確認）．
輸血の歴史（http://www.jrc.or.jp/mr/pdf/輸血の歴史 20150619%EF%BC%88A3 版%EF%BC%89.pdf，2018.5.23 確認）．
生体肝移植ドナー体験者の会，2003，「生体肝移植ドナー調査に関する要望書 2003 年 2 月 4 日」（http://www.lifestudies.org/jp/seitai.htm，2018.5.20 確認）．

５　資料　臓器移植の歴史

年	臓器移植の歴史
1954	一卵性双生児間の腎臓移植（米国）
1956	日本初の腎臓移植
1958	「角膜移植に関する法律」施行
1963	世界初の肝臓移植(米国)
1964	日本初の肝臓移植
1967	世界初の心臓移植（南アフリカ）
1968	日本初の心臓移植（和田心臓移植）
1972	腎不全5カ年計画
1975	「腎臓移植普及会」発足
1980	「角膜及び腎臓の移植に関する法律」施行
1981	免疫抑制剤シクロスポリンの開発（スイス）
1986	より強力な免疫抑制剤FK506の開発（日本）
1988	世界初の生体肝移植(ブラジル)
1989	日本初生体肝移植(親から子へ 島根医科大学)
1993	成人間での生体肝移植(信州大学)
1995	「日本腎臓移植ネットワーク」と名称変更
1997	「臓器の移植に関する法律」施行 「日本臓器移植ネットワーク」と名称変更
1998	生体肝移植に健康保険が適応 ただし病気の種類や16歳未満の年齢制限
2003	日本初の生体肝移植ドナー死亡
2004	成人のウィルス性肝硬変やがんなどに健康保険の適応拡大し、成人間の生体肝移植が著しく増加
2010	「改正臓器移植法」施行　　脳死移植数の増加 肝移植後の免疫抑制治療者は身体障害者手帳1級取得 医療費負担の軽減（自治体によって異なる）

「盲ろう者」として自分らしく生きる

～私にとって障害・仕事・支援とは～

中　條　與　子（Nakajoh Yohko）

第 1 回　「KY」は誰のせい？　私の耳と目の障害について

1.　はじめに

私は耳と目に障害がある。障害をもつ私が、何かを伝える機会は本当に限られている。対人援助学マガジン（以下、「マガジン」）のスペースをお借りして、自分自身のこと、自分の障害について書くことになり、たいへん光栄に思う。

マガジンを最初に知ったのは、2013年の4月、伏見桃山にある京都国際社会福祉センター社会福祉士養成課程に入学した頃である。ある土曜日の昼下がり、マガジンの執筆者、編集者でもある千葉晃央先生が、授業で対人援助学マガジンを紹介してくださった。以来、時々のぞいていた。このたび、執筆者の一人に加えていただけることになり、宝物のような機会だと感謝をしている。心をこめて書いていきたい。

テーマは大きく 3 つ考えている。

1. 私の障害について
2. 障害と仕事
3. 支援をうけるものとして

これらのテーマに分けて、私にとって障害・仕事・支援とは何かを、経験に基づいて書いていきたい。

私は聞こえにくくて、見えにくい「盲ろう者」だ。（視覚と聴覚に障害がある人のことを、「視聴覚二重障害」や「盲ろう者」などという言葉で説明される。私は後者の言葉を使う。）

「盲ろう者」であることは、私のとても大きな部分を占めているが、すべてではない。「盲ろう者」だからできないこと、「盲ろう者」だからこそできることがあると同時に、自分だからできること、自分だからできないことがあることを感じている。そして、もちろんひとりの人間として、「やりたいこと」や「やりたくないこと」があり、それらがぐちゃぐちゃになったものと、日々向き合っているのが私の毎日である。つまり、「盲ろう者」として自分らしく生きるということを、模索しながら毎日を生きている。そのような等身大の私を、マガジンを通して、読者のみなさんにぶつけてみたい。

私は、みなさんと何が同じで何が違うのか、そして、障害とは何か、支援とは何かということを、読者のみなさんと一緒に考えることができたら、たいへんありがたいと思う。

2.　私の耳の障害について

まず耳の障害について、伝えたい。感音性難聴という診断を受けたのは、3歳のときだ。聞き取れていないと父親が気づいたことから、早くに難聴だとわかった。そのお蔭で、幼稚園の時から補聴器をつけ始め、またの機会に説明するが「きこえの教室」にも小学校1年生から通うことができた。しかし、耳（聴力）で身体障害者手帳6級（両耳の聴力レベルが70デシベル以上、つまり、40センチメートル以上の距離で発声された会話語を理解し得ないもの）の交付を受けたのは、長い年月が経ったのちの、36歳のときである。

苦手な高音域を補う補聴器だが、幼稚園から小学校低学年くらいまでは「ポケット型」と呼ばれるアナログ式補聴器を、小学校高学年くらいから高校生くらいまで「耳かけ式」と呼ばれるアナログ式補聴器を片耳だけつけていた。1週間目は右耳、2週間目は左耳という具合に、つけかえていた。大学生のときに「耳穴式」と呼ばれるアナログ式補聴器を両耳につけるようになった。

今は耳穴式のデジタル式補聴器を両耳につけている。ワイデックス社のC2 - XPという機種で、大きさは市販の耳栓より少し大きく、色は肌色である。昔と比べれば技術の進歩で格段に性能はよくなり、軽量化もされた。それでも私は、例えば講演会や職場の会議での発言などで誰かが大勢の人に対して喋っていることや、雑談やグループディスカッションなどで、複数の人が話し合ってうまれるひとり一人の言葉は、遠近感なく、同時に重なったように聞こえるため、ほぼすべて聞き取れていない。

一対一の会話であれば、口の動きや顔の表情を見ることで、かなり聞き取ることができるし、何より聞き返すことができる。一対一でも、声が言葉としてクリアに聞き取れているわけではないので、目からの情報で補いながら「聞こう」と強く意識しないと雑音としてしか聞こえない。雑音というのは、意味がわからない外国語の音のようなものである。相手の口の動きが見える距離にいることは、私にとってとても重要なことである。

情報保障の要約筆記、パソコン通訳を受けることができたときには、必ず話が終わったあと、もう一度、自分のペースで通訳ログを読み直す。自分が勘違いしているところが、必ず幾つも見つかるため、普段から多くの勘違いをしているのだと思う。

3.　私の目の障害について

次に、目の障害についてだが、網膜色素変性症と診断を受けたのは、16歳、高校1年生のときである。きっかけは、症状のひとつである夜盲を、はっきり自覚できたことだ。当時通っていたスイミングの友達3人と、冬の夕暮れ、河川敷で自転車競走をした。私は1番になるつもりで、スタートを切った。自転車のライトをつけても、道と川の境目がわからず、数メートル走って自転車から降りた。たまに一人で走りにくる河川敷で知らない場所ではない。しばらくして友達二人が、来ない私に気づいて、笑いながら「どうしたん？」と戻ってきた。「道が見えない」と言いながら、呆然と立ちすくむ私に彼らも驚き、「病院に行ったほうがいい」とすすめられた。少し悩んだのち両親に相談すると、幼稚園の頃からの主治医がいる眼科に行くことになり、後日後、学校を早退した。普段一人で通院していたので珍しいことだが、母がついてきてくれた。診てもらうと網膜色素変性症と診断を受け、「網膜色素変性症は失明するかもしれない」といわれた。当時、裸眼で両眼1.5の視力があり、自分が失明するということをまったくイメージできなかった。

しかし、その後、普通に歩いていて、外では車止め、家の中では洗濯かごなどにぶつかることが多くなった。27歳の時に白杖を持ちはじめた。目（視野狭窄）で身体障害者手帳3級（両眼の視野がそれぞれ10度以内でかつ両眼による視野について視能率による損失率が90パーセント以上のもの）の交付を28歳、身体障害者手帳2級（両眼の視野がそれぞれ10度以内でかつ両眼による視野について視能率による損失率が95パーセント以上のもの ）の交付を30歳の時に受けた。30歳の時から、障害年金（2級）を受給している。38歳の時には、眼科医に「視野の欠損率が100%（残存が1%以下）」と言われた。「100%って？私はまだ見えているのに？」と、この診断には首をかしげた。

私にとって目は、耳に比べるとずっと、不自由さは小さかった。高校の時から暗いところはほとんど見えなくても、明るければ見たいものを見ることができた。白杖を最初に持ち始めたきっかけは、昼間に歩いていても、自転車に乗る人から、睨まれることが多かったからだ。「きっと、呼び鈴に気づかないから睨まれるのだ」と、難聴によるものだと理解した。考えた。自転車に乗る人から、私が補聴器をしていることは気づきにくいが、白杖なら睨まずに避けてくれるのではないか、そういえば、私は網膜色素変性症なので、白杖を持っても良いのではないか、と思った。少し時間がかかったがシンボルケーンと呼ばれる、視覚障害者ということを周囲に知らせる、軽量の折りたたみ式の白杖を持つことができた。

シンボルケーンを持つと、自転車に乗る人から睨まれることはなくなった。それだけでなく、夜道でも杖先から足下の安全を確かめられることから、自ら毎日すすんで持つようになり、数ヵ月後にはシンボルケーンから折りたたみ式の実用的な白杖に変えた。

一方で私は、本屋で立ち読みをしたり、買いやすい値段の文庫本をよく購入して読んだ。小さい文字は問題なく見えた。それに、人とすれ違うときに、その人が私に向かって会釈をしてくれれば会釈を返すことができるし、夜以外はそれほど見えなくて困るという自覚がなかった。どこへも不安なく出歩けると信じていた。

しかしあるとき、こんなことがあった。夜に踏切を渡り切ったつもりが、白杖の先と足裏から線路と石の感触が伝わってきて、線路の中に迷い入ったことを知った。勇気ある見知らぬ方が線路に入って私を救済してくださった。命を助けてもらったのだ。その後、朝に足だけ車に轢かれたり、まだ明るい夕方に階段から落ちて捻挫をしたり、一歩間違えば命に関わると感じるようなことが多くなった。

眼科で残存視野が「1度以下」といわれたが、見たいものを見ることはできている。つまり、見たいものを、その1度以下の見える視野の中に入れれば見える。例えばＭＳ明朝10.5ポイントで表記しているこの文字は、私の視野の中にちょうど一文字入り、一文字ずつ横にずらしながら、その小さな視野に入れて読む。視野狭窄が進行したせいか、近頃は10.5ポイントでは、頭の中に言葉が入りにくく感じる。8ポイントくらいの小さな文字であれば、2文字くらい同時に見えるので、読みやすく頭に入りやすい気もする。しかし、10.5ポイントは、世間一般でも広く使われる大きさなので、なんとかこの大きさで読むことに慣れようとしている。

見たいものはそのようにして意識的に見てきた。本やマンガを読んだり、テレビを見たりできるし、買い物をするときには好きなデザインを自分で選ぶことができる。これは、この狭い1度の視野の外にあるもの、360分の359のもの、すべては見えていないという診断の数字が与えるイメージより、ずっと不自由ではないし、数字は信じられないと思ってきた。しかし、危険を感じるようないくつかの出来事をとおして、ようやく初めて、自分が見えていないという思いに至った。そうは言っても、見える人に

比べて、私はどのぐらいのものが見えていないのだろう。たぶん私は生まれつき見えにくく、見える人になった経験がないため、わからない。

この疾患の特徴は、少しずつ緩やかに進行することだ。30代で視野障害と診断を受けたあと、疾患による見えにくさ、明るい電球の部屋や窓側の席を眩しく感じたり、昼間でも薄暗い場所が見えにくかったり、視野狭窄以外の不自由も感じ続けている。また加齢による見え方の衰えもある気がする。ある目の専門職の方に「見え方の変化に気づけることは、大事なこと」と言われた。進行を自覚することは多分意外と難しいが、私は早くに診断を受けたことで、変化する見え方を自覚できているのだと思う。

この調子だと、視野が緩やかに狭くなり続けて、最後には失明するのだということを、ようやく意識をせざるを得なくなった。私の場合、失明すると難聴もあるため、かなり厳しい現実が待っているのだろうが、「失明した翌日からも変わらずひとりで外出できること」が目標だ。そのため京都の視覚障害者施設で、白杖の握り方、歩く姿勢などの基礎から、夜道や駅のホーム等で、白杖を使って歩行する技術を、歩行訓練士から学んだ。私からリクエストをして、線路に迷い入った踏切での、安全に渡る方法を教わった。また、握る手に、杖先の感覚が振動で伝わりやすいということから、切れ目のある折りたたみ式の白杖から、切れ目のない直杖と呼ばれる白杖に変えた。

4. 盲ろうということ

以上のような耳と目で生活していると、自分でもときどき驚くようなことが起き、そのたびに、自分の障害について自覚させられる。例えばある日、職場で同じ部屋の人が全員、会議のために席を立った時にも、まったく気づかずにしばらく仕事をしてしまったことがある。また、職場でパソコンを打っている途中で、ふと横を見ると真横に、私の隣の島にいるはずの上司の顔があった。私の作業を見てくれていたのだが、私は驚いて大きな声を出してしまった。視野が「欠損率100%」であることに加えて、私には音情報もほとんどないので、ものごとの「気配読む」ことがとても難しいのだろうと思う。「空気を読む」などできるわけがない。

盲ろう者を対象にした情報保障のひとつ「音声通訳」と呼ばれるものを受けた際に、発言者の言葉だけではなく、健常者なら気づく耳や目から入る情報、「状況通訳」も受けた。例えば、部屋の中の、机の配置や歩いている人の動き、誰と誰が部屋にいるか、誰と誰とが一緒に座ってどちらを向いて喋っているかなど、通訳者が見えたもの、聞こえるもの、人びとの話しの内容を含めて、すべて私の耳元で通訳をしてくれた。同じ空間にいても、私が感じている世界と、通訳を受けて知る世界とは、まったく違う事を感じた。普段の私がどれほどたくさんの事を気づいていないのかを、思い知った。

私は、会話のなかで突拍子もないことや、普通の人なら物怖じしたり、恥ずかしく思ったり、遠慮したりして言わないような発言や質問をいつもしているようだ。「KYちゃん」なのである。これを全部「盲ろう」のせいにすると、多くの盲ろう者の方々からお叱りを受けるだろう。障害は私の性格や人生に大きな影響を与えているけれど、それだけではない。私は私であり、たぶん、障害とは関係ない個性もたくさんもっていると思う。その区別がつかないところがやっかいだ。このマガジンで「盲ろう者」にも「盲ろう者」の数だけ意見があるということも、伝えられたらいいなと考えている。

編集後記

編集長（ダン　シロウ）

●9年目、33号を迎えるマガジン。こんなに続くとは思わなかった、なんてことはない。だからといって、五十名余りの執筆者、いよいよ300頁を超える雑誌を年四回、定期刊行できる確信があったわけでもない。これは執筆者の皆さんのおかげだ。

そして又、今号から、新たに三人の強力な執筆者と復活者1名を迎えた。中味で勝負だ！と私が勝手にいつも言っているように、私達の時代の大切なテーマが、次々連載テーマとして取り上げられ、登場していると思う。

私達の社会は何が起きるか分らないし、自分たちに何が出来るかも簡単には分らない。ネガティヴ派、ポジティヴ派、どちらも具体的な未来を知ってはいない。ただ、結果も成果も、思索も含め行動した蓄積の場にしか生まれない。

そういう意味で、口先だけのポジやネガは、大したことではない。近年、口先評論家や140文字批評家を持ち上げる輩が多いのは、自分が怠け者になって汗をかかないからだ。人を肯定しているのではなく、自分をそうしているのだ。私はそんなゴタクを言っていないで、連載発信してご覧なさい！とメッセージし続けてきたつもりだ。

その結果、大きくはないが様々な影響が、執筆者の皆さん自身の人生にも、世の中にも生まれている。この先、何が起きるかなど誰にも予言できるはずがない。ただ、何かが起きる事が多いのはどんな場所かを編集長は知っているつもりだ。

●九年目が始まり、私の身の上も転換期を迎えた。何事も変化する。それがクリエイティヴに動くように、これからもマガジンをマネージメントしていくつもりだ。連載者の一人、竹中尚文さんの本が出版された。本誌に連載されていたものだ。ぜひ、あらためて読んでいただけると嬉しい。

●気をつけてはいるが、早速ミス発見。頁ナンバーだ。発熱中に急いで処理しようとした結果かも。起きないようにとは思うが、起きてしまったものは仕方がない。それで済ませる。気にしすぎると全体のモチベーションに関わってくる。

編集員（チバ　アキオ）

★元少年ジャンプの編集長で、白泉社の社長、鳥嶋和彦氏のインタビューに触れる機会があった。「原稿を仕上げるのがはやい人と遅い人がいます。それは何の違いかというと決断力があるかないか。あきらめることができるか、できないか。

違う言い方をすると時間をかけるとよいものが書けると思う人が遅い人。もっとよくなるんじゃないかと思う。そういう人に言うんです。週刊なので、面白くても一週間、つまらなくても一週間。なので、つまらないものが続かない限りは大丈夫。次の回で挽回すればいいと。全部の試合に勝とうと思ったら間違いで、大きな流れをいれておく。それがプロの漫画家であることだ」と話していたように思う。「逆にいうと、今連載がいい状態であれば後は下がることになる。下がっても、また上げたらいい」とも。★少年ジャンプと対人援助学マガジンは同じではない。それでも連載ということは共通する。ドクター・スランプ、ドラゴンボール、ワン・ピース、ドラゴン・クエストなどのカルチャーを産み出した鳥嶋氏（別名：ドクター・マシリト）の言葉は響く。33 号連載、編集した経験が私に膝を打たせる。★短信に書いたが今回、団遊さんのサポートで、宮城、福島を訪れた。7年後の状態は、住民生活にも、震災遺構にも大きな差を産み出しているように思えてならない。住民の生活は継続する。それを編集したり、あきらめたりすることはできない。編集しきれなかったこと、掲載できなかったこと、毎日の姿を見せる。それがこの対人援助学マガジンの機能であろう。★個々の連載に関する話では氏の話はよくわかる。リアルなドクター・マシリトにうん十年ぶりに出会えて、ドクター・スランプ好きには衝撃的な経験であった。原稿に「ボツ…」という編集者のイメージを作ったのはあの漫画ではないか。そんな単純な仕事ではないことは今ではわかる。育てるという話を情熱的に語る鳥嶋氏は今、出版社を、その社員を、少年たち、元少年たちの文化をまだまだ育てる気である。われわれ、編集部も継続である。

編集員（オオタニ　タカシ）

以前、マガジンの執筆者の方から、過去の掲載分について修正したい旨の希望があり、編集会議でその対応を協議したことがあった。自分の事として思っても、細かな誤字も含めて、直せるものなら直したいと思う気持ちが出てくる部分があるのは、自然のことだと思う。この時の結論では、最新号に修正について説明を加える形をとることとし、過去の掲載分自体の修正は行わないことに決まった。理由は大小色々とあったが、マガジンに書かれていることは、執筆した時点での理解や知識、考えによって書かれたものであり、修正が必要な点や不足がある場合も起こりうるが、そのことは、経過も含めて残す方がよいだろうという判断であった。これは、非常に重要なことだと思う。

私が従事している発達支援の領域でも、ほんの数十年前には、現在ではおよそ妥当性があるとは思えない支援方法が行われている時期があった。そのように書かれている専門書もあるので、当時の認識が今でも確認できると言える。このこと

には 2 つの意義があると思う。一つは、過去の間違いや誤解・失敗を、事実として残しておくこと。そして、もう一つは、現時点で「正しい」とされていることであっても妄信しない、という意識を与えてくれることである。失敗したことは、挽回はできても、その事実自体を取り消すことはできない。だから、私たちにできることは、失敗とどう向き合い、そこか何を紡いでいくかだけである。隠滅、改竄の無様さは自明であるが、見たいものしか見ないというムードも、省みる必要があるかもしれない。本誌の 50 本超の連載は、必ずしも光の当たってきたテーマばかりではなく、都合のよい理想論やべき論だけが示されたものではない。ひたすらに、現実である。この時勢の中、不誠実に勝るのは、やはり地味でも誠実な一歩一歩しかない。マガジンの編集は、さまざまな地域や領域で、その確実な一歩を歩んでおられる方がおられることが感じられる、本当にありがたい機会です。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町４３８

ランブラス二条御幸町４０２　仕事場Ｄ・Ａ・Ｎ

対人援助学マガジン

通巻33号

第9巻　第一号

２０１８年０６月１５日発行

http://humanservices.jp/

第34号は2018年9月15日
発刊の予定です。
原稿締切2018年8月25日！

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもありますが、執筆依頼はしていません。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数（ずっと・・・というのもありです。）を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって書いていただく方には、対人援助学会への入会をお願いします。まだ登場していない分野、様々な立場の方達の対人援助領域からの積極的発信を期待します。

対人援助学会事務局

〒603-5877　京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021　大阪市中央区大手通 2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

このイラストは、マガジン連載執筆者の一人、古川秀明さんが制作したＣＤジャケット用に描いたものだ。

何枚目になるのか、最初から全部私が描いてきた。彼はシンガー・ソング・カウンセラーなる造語で自分を紹介しているが、「音」「楽」を文字通り体現している。

私も漫画家として、マンガに何が出来るだろうかを考えるのが好きだ。マーケット進出の手段に陥りがちな創作物ではなく、描き続けることに意味があるものにする模索を続けてきた。

最近、その意味が少し見えてくる経験をしている。たぶん古川さんも、ＰＴＡの講演会などの第二部ライヴで歌いながら、そんなものを見いだしているのではないかと思う。

（２０１８／０６／１５）